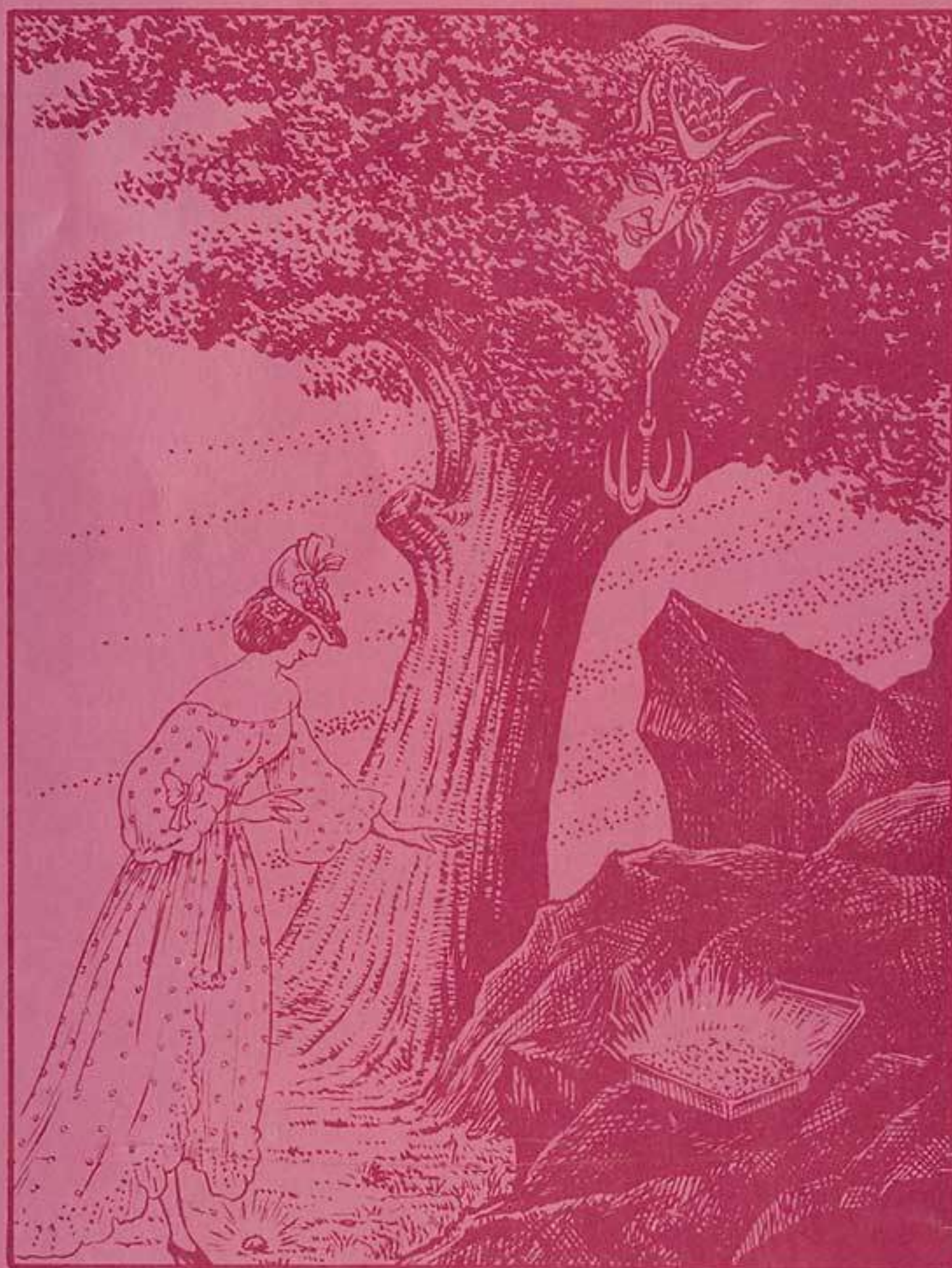


奇譚クラブ

■ 新しい風俗文献誌 ■

12月号



'69
12

成人向
NO!

昭和四十四年十二月二十日印刷 昭和四十四年十二月一日発行 上二月号 第三十三巻 第三十三号 毎月一回一日発行 昭和二十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大正特別保承認証第二〇号

奇譚クラブ 昭和四十四年十二月号

作・六・鬼 団

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

花と蛇

特集号

定価 五〇〇円 略号 『花』

団鬼六作長篇サディズム小説『花と蛇』は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気で満天下のSファンを沸かせた傑作であります。過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加え四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画 口絵

美女羞恥責 花と蛇 画集

- 一、恐ろしい浣腸の末排泄を強要される美女
- 一、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
- 一、清純な美女に初めて縄掛けしていたふる
- 一、剃毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
- 一、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
- 一、俵のように縛られて宙吊りにされた美女
- 一、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
- 一、足吊りで強制浣腸を施される全裸の美女

本文内容見出し

発端 美女を狙う狼たち

第一章 清純な令嬢の屈服

(カメラと令嬢・女奴隷・口惜しき陶酔)

第二章 人身御供の令夫人

(燃ゆる美体・狼の酒宴・人身御供)

第三章 深窓の美少女とズベ公

(赤いしごき・再び奈落へ・奸計)

第四章 小夜子への執拗な調教

(鈴と縄)

第五章 変性色事師の登場

(二人のシスターボーイ・化物の計画・京子の哀泣)

第六章 生れかわるスター京子

(崩潰する京子・夏の民・地獄の宣誓・まんじの舞)

第七章 激しいスターへの訓練

(奈落への道・美女と白痴)

第八章 低脳男と令夫人の結婚

(奴隷の花嫁・二対一)

第九章 愛弟子を調教する静子夫人

(蛇の巣・悲しき決意)

第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊

(美花の踊り・薔薇と百合)

第十一章 悪魔たちの哄笑

(白い関係・調教日記・手鏡)

第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

(甘い調教・挫折)

第十三章 珍芸を開陳する令夫人

(おとし穴・筆と硯)

第十四章 淫靡な時代劇ショー

(三人の風来坊・時代劇ムード・牢獄にて・フランス式)

第十五章 華々しきショーの展開

(ショーの開幕・楽屋の中・桧舞台)

第十六章 野卑な妾二人のいたぶり

(珍芸・姐の上)

第十七章 ズベ公達の邪悪な責め

(美女と野獣・ある日の回想)

第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち

(美女崩潰・別離)

第十九章 悪党の執拗ないたぶり

(鏡の部屋・卑劣な録音)

第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面

(鏡地獄・断髪令嬢・悲しき対面)

第二十一章 勝ち誇る悪党一味

(受難の姉妹)

第二十二章 中国伝来の秘法

(鬼女よりの招待・中国の秘法・羞しい唄)

第二十三章 緊縛された美女の涕泣

(三悪女の狂態)

第二十四章 新しい餌食への触手

(義兄弟)

第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄

(肉の媒介・美津子の号泣・同志討)

第二十六章 恐怖の責め続く

(地獄の接吻・巨大な責具)

第二十七章 結末なき責めの結末

(調教柱・復讐劇・肉の拷問・京子の珍芸)

〔最新版〕 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|----------------|----------------|----------------|
| 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 37 | 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 68 | 67 | 66 | 65 | 64 | 63 | 62 | 61 | 60 | 59 | 58 | 57 | 56 | 55 | 54 | 53 | 52 | 51 | 50 | 49 | 48 | 47 | 46 | 45 | 44 | 43 | 42 | 41 | 40 | 39 | 38 | 100 | 99 | 98 | 97 | 96 | 95 | 94 | 93 | 92 | 91 | 90 | 89 | 88 | 87 | 86 | 85 | 84 | 83 | 82 | 81 | 80 | 79 | 78 | 77 | 76 | 75 | 74 | 73 | 72 | 71 | 70 | 69 |
| 正面強烈亀甲縛(大島 照代) | 美貌は鞭に泣く(関谷富佐子) | 襲う影に慄のく(佐々木真弓) | 弾む裸身に縄目(佐々木真弓) | 柱縛りで鞭打ち(関谷富佐子) | 縛られて困るわ(金原奈加子) | 私を襲わないで(左近麻里子) | 縛られて嬉しい(中河 恵子) | 麗わしの縛女体(中河 恵子) | 蒲団の上に狂う(関谷富佐子) | 豊満女体の縄目(大島 照代) | 二つ折りの裸身(川越美佐子) | 痛打に哭く美貌(関谷富佐子) | 長身の脚を伸す(佐々木真弓) | 若肌は縄に美し(長井葉津子) | 恥らいの女体美(中河 恵子) | 何故私を縛るの(金原奈加子) | 感泣する胸縛り(ローズ秋山) | 猿ぐつわの悦虐(関谷富佐子) | 荷造り縛りの女(中河 恵子) | 足指はくの字に(佐々木真弓) | 麻縄の柔肌責め(金原奈加子) | 美しき亀甲縛り(左近麻里子) | 柱縛りの隙間見(長井葉津子) | 緊縛全裸の極美(左近麻里子) | 海老責めの苦悶(佐々木真弓) | 全裸の縄は輝く(佐々木真弓) | 猿轡と縄に泣く(川越美佐子) | 縄に喘いだ童顔(長井葉津子) | 出脛を晒す縛り(佐々木真弓) | 後手吊りの全裸(長井葉津子) | 首膝縄にあえぐ(長井葉津子) | 大の字で晒す裸(関谷富佐子) | 全裸緊縛の哀愁(佐々木真弓) | 高手小手の全裸(佐々木真弓) | 真迫の縛プレイ(ローズ秋山) | 豊満な裸身縛り(左近麻里子) | 竹棒責めに悩む(大島 照代) | 亀甲縛りで寝る(左近麻里子) | 縄目に喘ぐ表情(中河 恵子) | 開股縛りの正面(中河 恵子) | 猿轡に喘ぐ緊縛(左近麻里子) | 縛りの肌を見て(金原奈加子) | 私は縛りが好き(金原奈加子) | 強烈縛りを味う(金原奈加子) | 麗身を横たえて(左近麻里子) | 二つ折に弾む胸(佐々木真弓) | 柔肌に縄は厳し(長井葉津子) | 柔肌に痛む麻縄(左近麻里子) | 全裸の女体引廻(中河 恵子) | 開股縛りを諦観(左近麻里子) | 突き出した尻(中河 恵子) | あどけなき緊縛(金原奈加子) | 首縄股間縛の女(長井葉津子) | 強烈後手で括る(佐々木真弓) | 恥しい縛り初め(金原奈加子) | 海老縛りで悶ゆ(関谷富佐子) | 罵られる緊縛女(長井葉津子) | 豆絞りの猿轡で(金原奈加子) | もう虐めないで(金原奈加子) | 畳に転す股間縛(金原奈加子) | 女体は縄に映ゆ(左近麻里子) | 全裸の縛を見て(長井葉津子) | 答は柔肌を乱打(関谷富佐子) | 臀部に答は炸裂(関谷富佐子) | この裸身を捧ぐ(佐々木真弓) | 諦観の縛り表情(長井葉津子) | 足吊りで晒す肌(長井葉津子) | 美体は縄に映る(中河 恵子) | 遅ましき臀部晒(左近麻里子) | 両手吊りに喘ぐ(長井葉津子) | 左近麻里子の裸(左近麻里子) | 開股縛りの羞恥(中河 恵子) | 捧げられる女体(中河 恵子) | 鉄砲責めの女体(左近麻里子) | 麗わしの肌を縄(佐々木真弓) | 後手縛りの連続(ローズ秋山) | 開股の股間縛り(大島 照代) | 強烈な縄目の女(川越美佐子) | 逆エビ責め地獄(ローズ秋山) | 豊満な裸身の美(関谷富佐子) | 羞らいの流し目(佐々木真弓) | 肌を喰い込む縄(長井葉津子) | 胴締縛りと猿轡(長井葉津子) | 投げ出された裸(金原奈加子) | 正面の亀甲縛り(左近麻里子) | 開股縛りの女体(左近麻里子) | 後手縛りの全裸(中河 恵子) | 柱に晒す強烈縛(長井葉津子) | 羞恥の脚挙げ姿(佐々木真弓) | 豊かな乳房誇示(佐々木真弓) | 美しい女の縛り(佐々木真弓) | 股間縛りに羞う(長井葉津子) | ホステスの緊縛(佐々木真弓) | 椅子坐開股縛り(中河 恵子) | 無防備な両手吊(関谷富佐子) | 息づまる猿轡(川越美佐子) | 人身御供の乙女(長井葉津子) | 両手吊で晒す肌(金原奈加子) | 爪先立つ強烈縛(ローズ秋山) |

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



定価三五〇円

12月号 ￥ 350

【最新緊縛資料写真一覽】

梁からの両手吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろふ)

床柱に宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろへ)

開股股間縛り正面

大手札二枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(ろほ)

二女連縛責模様組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(ろそ)

二女連縛煩悶場面組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(ろひ)

股間縛り刺青競艶

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろさ)

股間縛り正面妖美表情

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろす)

喰込む股間縛りの縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろせ)

手足宙吊り

大手札三枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(つた)

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(むく)

強烈責、被虐の果

大手札五枚一組 八〇〇円
梨花悠紀子 略号(りお)

乳房いじめ

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(とお)

激痛ノ逆エビ責め

大手札四枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(きえ)

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(きん)

腰元吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
村井知可子 略号(こり)

腰元間諜の拷問

大手札四枚一組 六〇〇円
村井知可子 略号(こく)

椅子エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(おき)

六尺縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(ろは)

弓吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号(つき)

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 二〇〇〇円
愛川 悦子 略号(ねい)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(えひ)

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(みす)

抓ねりと擦ぐり責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号(きし)

バンド責め

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦ひかる 略号(はん)

夫人の表情

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(せや)

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うら)

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うり)

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うる)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(えり)

鼻の穴責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大手 啓子 略号(なく)

鼻なぶり

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ない)

鼻責めの陶醉

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(なは)

完全逆さ吊りフオート

大判三枚一組 一五〇〇円
木村 洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊り女体折檻

大判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さと)

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原、大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面と背面

大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号(つる)

煙草責めの裸身

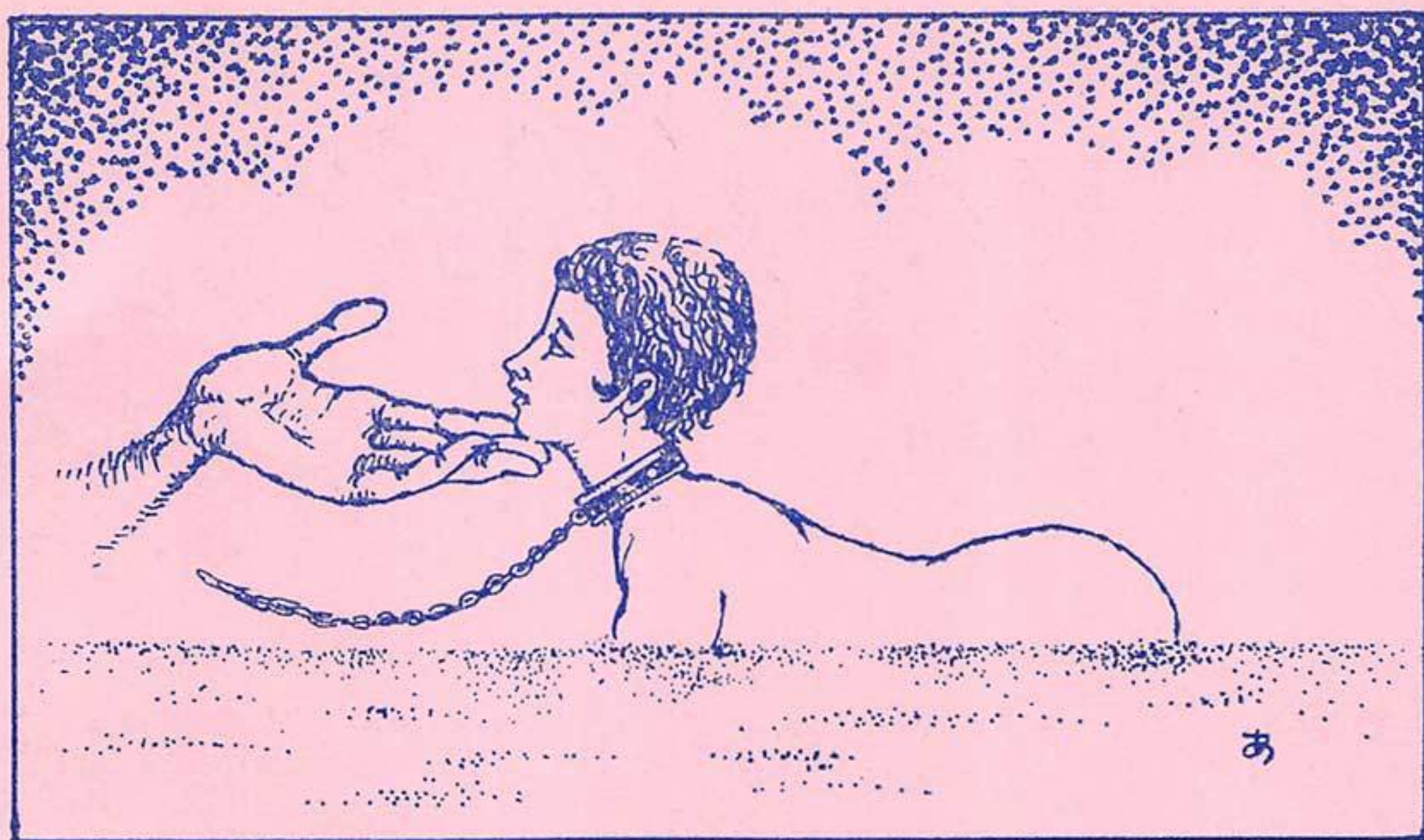
大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

乳房責め五態

大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号(てら)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号(いね)



奇譚クラブ

△第三三卷 第十三号・通刊第二六〇号▽

(昭和四十四年) 十二月号 目次

△本 文▽

駄目な男のひとり言……………浅川 一郎…(10)

夜と霧の群像『魔女誕生』……………花影 叢…(14)

再び“お産”について思う——“提案”……………茂野 礼…(28)

連載小説「大噴火」(15)……………千葉 青鬼…(32)

ゴム愛好告白 私の性癖……………香取 輝雄…(40)

SMカメラ・ハント△長井葉津子の巻▽

『娘十八素肌が疼く』……………辻村 隆…(44)

ゆうもあ・フェチ・ストーリー「特製スープ」……………香川 泳三…(70)

緊縛写真私見 残酷美の映像……………しちかわ…(74)

懸賞入選『悪魔の敗北』愁鬼館△下▽……………高杉 愁郎…(78)

晴雨と責写真……………斎藤 夜居…(92)

連載時代伝奇小説 緋縮緬地獄△最終回▽……………白鳥 大蔵…(98)

奇クサロン.....編集部構成.....

(232)

「奇ク」への提言.....	三条 剛
あのヒトはいずこに.....	予世場良三
緊縛のファンタジー.....	賛縄 武史
サロン楽我記〈第六十六回〉.....	辻村 隆
加賀まりこの折檻.....	牧 高志
映画通信 「縛り映画・演劇」.....	東山 映史
フォト 「わが作品」.....	赤畑 修造
孤独のプレイ「自縛写真」.....	名閨 多史
カメラ・ハントに望む.....	九鬼好太郎
Sコレクション「華麗なる塩水」.....	豪 城二
映画「地獄変」のこと.....	沢潟 しの
編集部だより.....	編集 部
イメージ画 「地獄変?」.....	五屋 和十
告白 禪・ビキニ・プレイ.....	東京・K生
短信往来「ある提案・浅川守氏へ」.....	国川 栄一
イメージ画 「耐苦科専攻」.....	野江 三郎
軽侮に抗議する.....	辻 梶太郎
イメージ画 「S&SM」.....	辻 梶太郎
牡犬のフォトと連想.....	犬 畜 生
プレイフォト 「ゴムマント」.....	梅川 幸子
思うこと.....	座頭 孝司
イメージ画 「棒しばり」.....	葉月由紀夫

告白「愛夫の記」.....	栗原美智子.....(107)
鬼プロ作品シナリオ『鬼 女』.....	団 鬼六.....(110)
評論 危惧におびえて.....	山口 広.....(128)
女丈夫散華 ヌ女本能寺.....	川上 米子.....(132)
体験告白 我が愛禪記.....	森田 忠雄.....(139)
女装の家『責めの部屋』.....	井風呂秋於.....(142)
濡れにぞ ヌマルキ・ド・サドの 濡れし ジュステイヌ.....	芳野 眉美.....(156)
随想 男性ファッションについての一考察.....	松山 壮吉.....(163)
連載小説『花と蛇』〈続篇第五十九回〉.....	団 鬼六.....(168)
ゴム衣裳の被虐 ヌ雨の昼下り.....	菅原 敏夫.....(174)
連載M小説 ピエロ床屋 (最終回).....	鬼山 絢策.....(188)
創作「新・乱れ髪夜話」.....	久我風太郎.....(197)
とんでもない返礼 魔性の乳房.....	藤見 郁.....(206)
SMカメラ・ハント回顧〈39・11〜40・9〉	
『追憶の甘き花びらの群れ』.....	辻村 隆.....(213)
読者通信.....	編集部選.....(252)
(目次カット「育ってきたね」.....)	室井亜砂路.....
(扉カット「さあ散歩だよ」.....)	小川シゲト.....

くくすぐるのであった。

△妊婦緊縛の部▽

大手札三枚一組 五〇〇円

の出来た稀有の妊婦資料。

大手札三枚一組 四〇〇円

はM女性奈加子のマゾ心をこよな

大手札三枚一組 四〇〇円

顔に哀愁の表情がにじみ出る。

大手札三枚一組 四〇〇円

手に縛られた初産婦の全身を見た
方にはこの集をおすすめる。

大手札三枚一組 四〇〇円

ら自分のさがを悔いている。

大手札三枚一組 四〇〇円

り上げた若妻の臨月腹を中心にし

大手札三枚一組 四〇〇円

はぎとってゆくのだ。

大手札三枚一組 四〇〇円

はりきっているのだった。

臨月腹全裸晒人形

二十才の若さに溢れた女性ながら妊娠という異常美を宿している

縛りなしの妊婦ヌードを

躍動する妊婦裸像

.....

る腹部をさらして、若々しい味

婦の姿態をキヤツチしていった。

大手札三枚一組
四〇〇円

見てほしい臨月腹

恥かしげに、
ときには誇らしげ

壬子年全果全身支本

金原奈加子 略号△ささ▽

新鮮な魅力は薄いだろう。

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 44 年 12 月 号

(1969年・12月号<第23巻第13号・通刊第260号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
として編集しておりますが、青少年の保護
育成に関する条例には抵触しないよう、十
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
載した文章は十二分に検討を加え、いやし
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
めの努力はいたしません。



この頃奇クを読んでいて感じることは、まず第一に夫婦プレイの告白記事が、目立って多くなってきたことだな。この半年ほどの間にざっと数えても幸崎健治・山口登・宮前好児・橋本二郎といった方々が、告白記事を寄せていらっしゃるし、奇クもまたまた大きく成長しつつあるといった感じだな。そしてこの、編集者と読者とが一体となって雑誌を作

駄目な男のひとり言

浅川一郎

るという点にこそ、奇クの存在意義があるんだよな。

ここで話は変わるけど、どうして夫婦プレイの告白記事はこんなに好評なんだろうね。それはやっぱり凄く生々しくて真実味があるし、読者に対して強い説得力を持っているからじゃないかな。それだから読者は、この夫婦プレイの告白記事を、現在あるいは将来の自分達のプレイの教科書として使おうとするんじゃないかな。

それにしても、プレイのパートナーのいる人っていうのは幸せだよな。全く羨ましい限りだ。何しろ文章を読んだだけでも、その人の信頼と愛情に満ちた「バラ色の人生」が感

じられるんだから。それに写真の奥様方はどうしても綺麗に見えるし。いや御免なさい。本当に美しい方々なんだと思います。特に九月号の橋本二郎氏の奥様はとて素敵でしたよはい。只、顔がサングラスで隠れてしまっていたのは少々残念でしたけど、プロポーションは最高だし、御主人には非常に協力的だし橋本氏は八重子夫人が可愛くて堪まらないんですよ。よくわかりますよ、文章を読んだだけでも。

これだから自然と人生に対する態度が違ってくるんだよな。何ていうか、人生に対して前向きの姿勢で取組んでるっていうのかな。とにかくそんな感じがするな。まったく、情

性でもって生きているオレなんかとはエライ違いだよな。ああ、オレは駄目な男だよな。

ああそうそう。それから次に感じるのは有田久美子・小杉千恵さんを始めとして、女性の告白記事が増えてきたことだ。そしてこのように女性の投稿が増えてくるということは大変に結構。大歓迎だな。だってオレは野郎なんかより可愛い女の子の方がずうっと好きなんだから。でも、これ当り前だよな。そんなわけですから女性の愛読者の方々、今後もどしどし投稿してくださいよ。オレのためにじゃあなくて、愛する奇クのためにだ。

だけどそれはそれとしても、女性ってのは得だよな。何しろ一回投稿すれば、即座に男性側の返事が五六通。だから本当にプレイを楽しむ気になりさえすれば、プレイのパートナーは金持のロマンスグレーから背の高いハンサムな若者まで、自由に選べるんだから。つい最近も九月号の読書通信に投稿した岡本月子さんが、十月号のカメラハントに登場するなど、とにかくこんな簡単にプレイの相手が見つかるなんて、女性は恵まれてるね。

ところが、それにひきかえ我々男共にとっては、このSMの世界も決して理想郷ではないんだから。第一、我々男にとって、プレイ

のパートナーを得ることは至難のワザなんだよ。それが証拠に読者通信の欄を見て御覧よプレイのパートナーを求める哀しき男共の呼びかけで一杯だろ。だけど、読者通信で女性愛読者に呼びかけている男性は、皆さん根性があるねえ。読者通信で話がまとまって可愛い女の子をハントした、なんて話は余り聞かないのに、それでも諦めずに呼びかけていらっしやるんだから。こうなってくると最早、執念ですかな。

でもそれにしても、女性に呼びかける勇氣を持っていっしやるだけまだ御立派。何しろかくいうこのオレなんかは、将来世の中に出て成功し、地位も名誉も財産も獲得した際SMプレイのパートナーを求めて奇クに投稿したことがバレたらどうしようなんてことを出世する見込なんて全然ないのに、本気で心配してるんだからな。やんなっちゃうよな。あーあ、またまたオレは駄目な男だなあ。

ところで、可愛い女の子をハントするうまい手はないかなあ。あっ、そうだ。こんな手はどうかな。可愛い女の子をハント出来なかった哀れな男どもを沢山集めて、可愛い女の子を縛る代りに、お互いに縛りっこをさせてみたらどうかな。

お腹のたるんだ中年のおじさんだの、お尻にまで黒々とまるで熊みたいに毛の生えたお兄さんだのが多勢集まって来て、お互いに相手を裸にして、縛ろうとして、そのグロテスクな姿にびっくりし、馬鹿馬鹿しくなって、縛りだの責めだのに興味をなくし、きっぱりとSMの世界から足を洗ってしまい、そしてその結果、ライバルが減って可愛い女の子がオレの方にも回ってくる。とまあこういうのはどうかな。

でも、そんなにうまく行くかい。もしも、もしもだよ、相手のエロなどカケラもない様なグロテスクな姿を見て、男同士の縛りっこなんてことが馬鹿馬鹿しくなってしまう反対に今まで以上の熱意と努力を注いで可愛い女の子を探すようになったらどうするんだよ。

あっ、そうか。そうだよな、男ってえのは皆んなスケベエだから、そういう風になる危険性は大いにあるわけだよな。オレ、これだから男ってえのは大嫌いなんだよ。やっぱしなかなかうまく行かないもんだな。だけどそれにしてもオレはどうしてこう碌でもないことばかり考えるんだろ。あーあ、オレはやっぱし駄目な男だよな。

ええい、こうなったらもうヤケだ。ひとつ

度胸を決めてオレも読者通信に投稿でもしてみっかな。

だがちょっと待てよ。もしも読者通信で、オレが秘かに思っている○○さんにプレイの申込をして、それに対して何の反応もなかったらどうしようかな。第一、それじゃあカッコ悪いし、大ショックだし、やっぱりオレ困っちゃうよな。それに「きっと彼女は忙しいんだよ」なんて思ってたのんびり構えていられた程、図太い神経は生憎と持ちあわせていないしな。

やっぱり投稿すんのはやめとこうかな。あーあ、けどどうしてオレはこうも駄目な男なんだろね。我ながら不思議だよ。これじゃあ自分で女の子をハントしてプレイをするなんてことは到底望めそうもないし、仕方ないから奇クのカメラハントでも読んで我慢すっか。まあそのあたりが適当ではないにせよ妥当な線だよな、このオレには。

ところで話はまたまた変わるけど、最近ちょっと変った本が出ているのを見つけたのでそれについて一言。

ついこの間、といっても八月の上旬のことなんだけど、オレが神田の古本屋街をブラブラしているとSM写真集・薇薔の鏡―八人の

プレイメイトたち―(書肆そうび館)という本が目にとまってね。早速それを買込んだわけだよ。それでまず簡単にこの本の内容を紹介すると、まず頁数が全体で一五六頁、そしてこのうち終りの四十頁程がSMについての簡単な解説のようなものになっており、花と蛇でお馴染みの鬼六先生も、「SMよもやま話」を二十頁程書いていらっしやる。次に写真の部分は一一五頁程あり、ポーズ数にして一五〇ポーズ位、うちカラー写真が六ポーズ八人のモデルはいずれも若々しく美人ばかり(但し美人だなあ、美人だなあと思いつながら見る――コレは余計なことかなあ?)

それにグラビヤ印刷は鮮明だし、なかなか結構な写真集だよ。只ちょっと残念なのはこの写真集の縛りが今までに刊行された奇クの緊縛写真集の縛りとは比べものにならない位おとなしいということだ。けどこの写真集が特定のマニヤを意識して作られたものではない以上、これも己む得ないだろうね。つまりこの写真集はSM気が全くない様な人(こんな人本当にいるかな?)でも安心して見られるし、またそれと同時にアクがないので色々なマニヤの人でも結構楽しむことが出来る、とまあ、そんな写真集なんだよ。

それから、ガールフレンドに初めから強烈な緊縛写真を見せるのはどうも、なんていう人がいたら是非ともこの写真集を使ってよ、きっと役に立つと思うよ。まあ一言言うなら、この写真集は鮮明なグラビヤ印刷と鬼六先生の解説とが相俟った恰好の「SM入門の手引書」ということになるかな。ああ、それから値段は一二〇〇円だよ(尤もこのオレは古本屋の新刊本割引で一〇〇〇円で手に入れたんだけどね――コレも余計なこと)。まずは参考までに。

あれ、けどオレはどうして、この写真集の宣伝しちゃったのかな。べつに出版社から一銭でも貰った訳じゃないのにさ。何かいい買物をした時に仲間の奴にもその商品をすすめたくなるという心境かな。それともへんな買物をした時に、自分一人だけ損をするのは頭に来るとばかり、その碌でもない商品をせせと他人にもすすめる例の心境かな。

まあそんなことはどっちでもいいや。だってこの写真集を買うか買わないかは、結局その人が自分で決めることだもん。けどそれにして、この写真集を使って女の子を口説いたらいいだろうなんて言ったのはマズかったよな。もしも、オレの言った通りに女の

子を口説いた奴がフラれちゃったらどうするかな。オレの責任は重大だよな。

それに、そいつはオレのこと怒るだろうな。

もしかすると、フラれた女の子の代りに新しい女の子を紹介しろなんて言ってくるかも知れないな。そんなことになったらオレ非常に困っちゃうな。大ピンチだよ。

第一オレは、他人に紹介できる様な女の子なんて一人も知らないしな。仕方ないからオレ、三遍回ってワンをやって謝っちゃおうかな。そうだ、それがいいよな。そういう時には低姿勢に出て、ひたすら謝るのが一番だよな。

あれっ、でも、三遍回ってワンは、謝る時にやるんじゃないかな。まあいいや、その辺は適当で。

あれっ、だけどちょっと待てよ。オレの言うことなんかを本気で信じる奴が、本当にいるかな。いるわけないよな、そんな奴。だけでもし本当にそんな奴がいたとしたら、そしてたらしいつは、このオレよりももっと駄目な男ということじゃないか。

そうか、チキシヨウ。オレ、謝るのやめたぞ。絶対にやめたぞ。だってオレよりももっと駄目な男に、幾らかマトモなこのオレが謝

るなんて、世の中の秩序に反することになるもんな。

現体制は、そんな事を決して許容しないんだ。そんな事は、ナンセンスだよな。そう、ナンセンスだ。オレよりもっと駄目な男なんて、さっさと女の子に粉砕されちゃってんだ。ザマアミロ！

ああそうだ、「初恋・地獄篇」がオーストラリアで上映禁止処分を受けたと誰かが言ってたっけ。羽仁進の名前も、オーストラリアなんていう未開国？では通用しなかったわけだ。だけど見方によっちゃ、上映禁止も当然だということになるな。何しろこの映画には、ベッドシーン、ヌードスタジオ風景、ホモ、マスターベーション、幼女に対するイタズラ？メトミなどといった、凄いシーンが一杯あるし、第一、オレのきらいなメトミの場面が長過ぎたよな。

あれじゃあ観客はどうしても興味本位に、猟奇的な目でもって映画を見ちゃうよな。これはやっぱり製作者側の責任だよ。人間なら誰もが持っている猟奇的欲望を満足させて観客を呼ぼうとする製作者側の態度、これは絶対に許せないよな。人の心の弱いところ、弱いところと突いて来るのはまるで悪魔の誘惑

みたいなものであって憎むべき所業だよな。おかげで五回も映画館に足を運んじやったじゃないか、このオレは。一体どうしてくれるんだい。

だけど、五回も足を運んだとは、オレも相当好きな方だね。無理ないよね、あのメトミの場面。オッパイをギュウツと握りしめちゃったりしてさ、凄かったもんな。ボイン暴触（暴飲暴食）は体に毒だ、なんていう駄じやれを言ってるどころじゃなかったな。オレはもう目を皿の様にして、ゾクゾクしながら見ちゃったよ。

オレは根がスケベなんだな、やっぱし。こりゃあひとつ深く反省して自己批判する必要があるな。よし、オレは徹底的に自己批判するぞ。

だがちょっと待てよ。たしかオレはこの前も深く反省して、徹底的に自己批判したっけな。でも翌日になったら、残酷ヌードショーなんていうのを見るために埼玉県までノコノコ出かけて行っちゃった。しかも普段より早起きしてだ。あーあ、ホントにオレは駄目な男だねえ。

（終り）

（カット写真・宮前好児氏夫人）



夜

と霧の群像

魔

女

誕

生

花

影

叢

夏季休暇になると出かける田舎の、木立深い河岸に堅固な石造りの古城があった。十六世紀まではれっきとした伯爵家の居城で、ジャーク史上未曾有の同族相食んだ悲惨なたたかいであった四十年戦役の際、伯爵家は亡んだ。

カソリックとルーテルの新教、自由都市と封建君主、騎士たちの疾駆と大虐殺の時代、古城の地下室は暗黒の牢獄であった。

今は案内標を石壁にうたれた通路には電灯がともっている。

ひえびえと夏でも寒気のする曲りくねった通路の奥に、展示場がある。方三十フィートほどの無愛想な石室は拷問室だったという。一四〇〇年代に凡そ二百人の魔女が捕われ、しめ木や木馬、一見して用い方もわからないさまざまな器具を使った拷問にかけられ、命をおとし、あるいは公開の処刑で殺されたという記録が残っている。

魔女Ⅱというのは、現代でいう精神障害者であったようである。女ばかりではなく男の魔女もあったというが、やはり女が大部分だ

ったのであろう。

実際に深夜の森のなかなどで悪魔をむかえ淫らな交歓を行なったなどと白状に及び本人も事実として信じて処刑されたなどと記録にあるが、淫らな交歓は事実としても相手が悪魔であった事は幻想であったのだろう。

と私、アニタ・フルトベングラーの常識は承知していた。

十三才のミコーズンヘルト東大教会付属女子学院高等部へ入学したばかりの私の目は、

地下室の薄暗い照明のもとにうずくまっていた、わずかに黒光りする、高僧の神通力に封じこめられた古代の悪獣のような拷具のひとつひとつの形、様式をはっきり見てはいなかった。ほとんど目をそらして、一瞬恐ろしげにちらりと見やった。実際には恐ろしくはなかったが、何か正視できない力が私のひ弱な脳と運動神経を支配していた。

一瞬に刻みこまれた印象はしかし、時間を超えて強烈に私を両断した。私は萎えて、そこにへたりこみそうになり、目をつむり辛うじて目まいに耐えた。

記憶は余に残っていない。実際に何もはっきり見ていなかったのだから映像として憶えていないのは当り前で、ただいっ時の衝撃の感覚が深くうずもって私の内部にのこった。それが何を意味するのか、私にとってとても重要なものを予感的にさとっていたが、それから長い間、私はあえて詮索しなかった。いわば、あの拷具たちの印象のように私は封じこめて青春へ入っていった。

女学院高等部から、戦後の民主的改革によって女子生徒への門戸をひらいた大学の、新聞学部へ入った私の平凡な「春」を語る必要はないと思う。

月並な片恋。

男のこの幼い野心。

どれをとってみてもつまらない事がらだ。私の容姿は、男のこの関心をひくようにはできていない。かなり幼いころから私はそのことを知っていた。

その点では、はっきりいって私はやはり親を恨んでいる。この恨みは案外と深い。愚かで浅はかな感情だが、事実として消えもせず生き続け、形をかえても成長するものだから何ともしようがない。

子供というものは、その願望からひとつの物語りを作るものだ。私のヒロインは、いつも貧乏な家に生まれ、幼いころからみなし児になり、家もなく、人の手から手へ放浪して生きていく可憐な美少女であった。物語りは空想の度に違い、農家にもらわれて、農民の子供たちにいじめられながら土にまみれた毎日を送ったり、街の場末などの女工になったり色々だったが、みなし児の美少女の放浪生活というパターンはきまっていた。

「マッチ売りの少女」という童話のもつ甘美さを、私はよく知っている。私は一本のマッチの点じた灯のなかに救いを見いだすより、貧しさ、寒さ、救いがたい境遇そのものにか

ぎりない快楽を感じた。

現実の私は、暮しに困るという事がどんな事かさっぱり判らない豊かな物にかこまれ、両親の庇護のもとにある、醜いこ娘だった。自分のからだだが、女のこらしい繊細さに欠けた骨太のがっしりしたもので、顔だちもそれに似あった角ばったところがいやに目だつ。つまり醜いものだとは自覚しはじめたのは幾才のころからかよくおぼえがないが、初等学校の生徒のころはすでに私は私の姿を意識していた。そうしてクラスにたまたま見かける私のイメージに近い少女をうらやむ、というより秘かに憎んでいたようである。

しかし、やはり自覚的にそうしたのではなかったが私は彼女たちには庇護者の恰好となり、男役をつとめ、もっぱら男っぽくさっぱりした性格を表面押したて、ついには習慣化し定着化した。

内面、私の美女少に対する心情は何かはつきりと吹っきれない極めてうじうじとしたものだった。憎んではいたがやはり魅かれてもいて、事があると奉仕的な態度をとってしまうのだ。また、私のイメージを完全に満足させるほど彼女らは美しくもなく決定的にいえば貧しくなかった。これは私の通った学校の

教区によることだった。

こ娘の私がそんなことを知っていた訳はないが、とにかく私の「マツチ売りの少女」は現実には存在しなかった。存在しないものを私がどうしてイメージしえたか、不思議というほかはない。

高等部へ進み、スポーツに打ちこむことをおぼえ、演劇サークルに加わるような事になって、私はほとんど私の性向を忘れた。このまま思いいたり、思いおこす事がなければ、おさない頃の病的な快感に過ぎなかったであろうことに、ことさら意味を見いだす必要もなく終ってしまっただろう。

秋末の学園芸術祭で主演舞台を踏み、通俗的だといわれたが、男役でシラノ・ド・ベルジュラックを演じて好評を得た。鼻のシラノの心情は私にとって少しくすぐったかった。演技を「地」だと受けとられて、いつの間にか定着してしまった性格に、少しうとまじさを感じ、久しぶりに「マツチ売りの少女」を思いだし郷愁に似た想いを、いだいた。

私が、劇のなかでやはり共感をおぼえたのは、イプセンの「ノラ」であった。新しい女はやはり家や過去を捨て、振り切って世界へ出て行かなければならない、などと真剣に考

えこんだ。

家――

家は私にとってイコール父という事であるうか。

フルトベングラー家が、ミューズンヘルト市の紳士録にあらわれるのは一八〇〇年代後半のことで、クルト・フルトベングラーが、その新聞ミューズンヘルター・ツァイチングを創刊したのは一八四八年のことである。初代クルトは徒手空拳からのしあがった成功者として例外的に立志伝たぐいの物を好まなかった。

わずかに伝っていることはホーレンツェ公爵家の荘園の作男が、前代フルトベングラーであったという事。クルト自身は十代前半にミューズンヘルトに出て来て、印刷工場の小僧から文選工の修業時代を経て独立し、自身で活字をひろいながらの小新聞を、地方的だが遂にひとつの出版王国というべきものに築きあげた、という事。長寿を保ったわりに家族運に恵まれず養子をとったことなどが判然としている。

養子のオットーがまた泣かずとばずの逸話的興味のまったくない人物で、まだ健在であった老フルトベングラーの影響力の影に隠れ

てしまっていた。三代エリッヒは即ち私の父である。次男エリッヒには面白い話はない。母校のコルトン大学の教壇に立ち、少壮のリヴェラリスト論客としてもいくらか聞こえた存在だったことがあるが、ふいに理由もあきらかにせずに学界から退くと、書斎にこもってしまい、やがて祖父の後を襲って新聞社主に就いた。自身の論文などの発表は、たえてない。

長男ハンツは家系の唯一の異色児である。しかしこれも活躍は若年の短い間の事で映画創業期の天才演出家として名が残っている。前衛的だった手法、神秘家めかしてはいるが実は古めかしい耽美派、などという表現より現代の最大の女優――T・Hの最初の愛人であり、彼女を世に送った当人であることの名が語り継がれている。

T・H。振幅の大きい、常に男を亡ぼすことで終る恋愛遍歴。初期のデカダンス映画のヒロイン。経歴にちょっと似合わない印象の左翼的な発言。すっかり脂肪をまとった東洋的神秘といわれた瞳の奥に、私はあの「マツチ売りの少女」を見て少しギョツとした事がある。

三十二才で巨匠であったハンツは、大西洋

フルトベングラー家の家系に同性愛的伝統

男のようにいかつい骨組み、特に肩から首
ものにおどろいた臆病な大男のような瞳、頑
丈そのもののおどろ、ちぢれた薄い毛のドング
リ頭。私の熱情は沈んで行くほかはない。沈
潜し、腐敗し、韜晦するのはフルトベングラ
ーの伝統で、悲劇的であると同時に滑稽であ
る。鼻のシラノの演技は、私にやはり似合い

○

現実はいともあっさり私の貧しい想像力を超えてしまって、どこの線で越えてしまったかにもよく判らない。フランスの引いたと伝えられるマジノ線のように、それを強固な要塞と信じていたわけなのだが、幻想の兵団は太陽にあたった霧のように消えてしまった。そうして、あらわれた形勢を私はまだはつきり見ることができないのだ。

登校の途中、片側はリュクサンペール公園の木立で、片側ハンスシェンツ侯爵の邸宅の塀がつづく路がある。石の塀は古びていて路はいつも少し濡れているようにしっとりした、歩くのに快的な路だ。しかし、夜などは少しさびし過ぎて、少女のころは自分の靴音が恐ろしかった。

授業のはじまる前にひらく研究会をグループでもっていて、私は早朝この路をとる。塀が切れると眺望がひらけ、ミューズンヘルトの下町が見え、早朝でも新聞の配達人やパイン工場の、煙をすでに立てている煙突など、人々の息吹きが伝わってくるのだが、それまでは、ほとんど人と出会わない。

黒塗りのセダンの自動車がむこうから走ってきた。みるみる像が大きくなる。気ちがいじみたスピードだ。朝帰りの金持ちの遊び人だろう、と私は運転席の黒いスーツの男を想像した。少し私は用心したのだろう。車のスピードを認めると立止まって、いき過ぎるのを待った。

古い型の、馬車を少し平たく押さえつけたようなセダンは、私の近くまでくるとブレーキをかけて、けたたましいやな音を静かな周囲にヒステリックにひびかせ、歩道のわきにとまった。

想像どおりの黒スーツの、しかしすこし若すぎる男がすばやく降りてきた。用心はしていたが、それは車のやや無暴に感じとれる動き方に反射的にかまえたのであって、それから起こった異常なことは、やはり想像外のことだった。

「お嬢さん」

と彼は私に言葉をかけた。

何か道でも聞くのだろう、と莫然と私は立っていた。

「ヘルトベングラールのお嬢さんですね？」

と彼は問いかけた。

いぶかしかったが、うなずいて見せると同時だった。黒いスーツが旋風になって、私を襲った。

たちまち中心点を失い、さっぱり手応えのないところで私はやたらに手を動かしてもがいた。不思議な事に声がまるで出なかった。何か手で口をおさえられていたようだが、その辺り記憶がない。後で考えてみると、襲われてどういう具合に車の座席に連れこまれたかも、どうもよくわからないのだ、とにかくひどく短い時間内に極めて手際よく運ばれたようだった。

黒スーツの男はこういう事によくなれた、いわば専門家のようで、私はいとも軽々と持ち運ばれるマネキン人形に等しかった。まったく映画か何かのでき事のように、私自身どういう事がおこったのか実感がないうえ、薬品が使われたのであろう、昏迷のなかに落ちこんでいった。

黒いスーツの男だけではなかった。同じようなスタイルの二人組、いや三人組であつたろうか……。

めざめた。

電灯がとまっているので夜だと思った。見たこともない電灯の飾りガラスなので、異和感に気づき、何かに思いあつたが、頭が痛くてその何かを考えることができない。身を起そうとかかるのだが、まるで力が萎えていて自由にならない。気がついて、だからはっきり醒めたという状態ではなかった。

アルコールに完全に酔ったことがあった。大学の建学記念祭の夜だった。演劇グループで街へ出てビヤホールへ入った。

ビヤホールは学生で混んでいた。いつも通りから窓越しにみる常連客らしい職人労働者や小役人、下級の軍人たちは学生に店の中央を占拠され、隅の方の席でおとなしくしている。さすがに女客の姿は少なかった。いつもは、窓際の近くに派手な姿の女たちが客を待ち、通行人の品さだめをしながら煙草をふかしていたりする。学生では、商売にならないのであろうか。

ビールはいつも飲んでいたので何とも感じなかった。ただ、やはり興奮していたためだろう。グラスをあけるピッチが早く、おかわりを何度も頼んだ。

私は隣席にすわったカールの横顔に魅せられていた。カールは、下町に住んでいるなんでも登記所の書記の息子だとか、成績が優秀で秀才が選ばれていることで有名なドーデル財団の基金から奨学金を得ていた。しかしそんな事はどうでもよい。ズボラ型の若者で、みなりなど一向にかまわないため、少し脂くさく不潔な印象だが、その瞳はまぎれもなく澄み、確信的な力に輝いていた。しかし、そんな事もどうでもよい。

左翼思想の研究会の主要メンバーで演劇グループの演出家でもあった。今日舞台にかけたゴリキの検察官の演出法について、彼はすでに一時間ほど熱っぽく喋っていた。私にむかってではなかったが、横にいる私は熱心に話を聞きとるようにしていたのだが、実は話しの中味など何も聞いていなかった。彼の言葉の抑揚がすばらしい音楽で、私はビールと声にすっかり酔っていた。しかし、少しも酔ってなどいない。議論がおさまると、店内のカウンターにうつって、私は強い酒を飲

みながらいい張ったそうである。そうであるというのは、その辺からまったく記憶がないのだ。

リンドー河の岸の通りを裸足になってふらふら歩いた。それからカールと何をもめたのか、突然死んでしまう、と叫んで石崖を飛び降りた。二メートルほど下に石だたみの遊歩道があった。雨期には河水があがるが、いつもはその下を河が流れている。あわてて石段をまわって降りて来たカールは、暗い河のふちにしゃがんでいる私を見いだした。そうして私は尿を河にしているのだった。しおわると、私はカールにいったそうである。

「ふいて」

実は後で恥ずかしくてどうしようもなかったのだが、私はこの時のカールを見返した自分の、奇妙に妖しい笑みを憶えているのだ。そここのところだけ不思議におぼえている。暗闇で、まして見える筈もない自分の顔を私を見たような気さえする。私は少女に戻ったのだろうか？ ひとりの妖婦になったのだろうか？

翌日は完全な宿酔い。アルコールがこれほどひどいものと思わなかった。

その時の頭の痛さに似ている。

またお酒を飲んで、何かでたらめをやったのであろうか。私は少しずつ頭の痛みを縫って考えはじめた。記憶をとりもどしにかかった。

ふいに、まったく突然にいっさいが返ってきた。はっきり眼ざめた。

まず肌の異常な感覚が私をおどろかせた。何もつけていない。小さな布きれいっぺん肌をおおっていない、身ぶるいして私は身をすくめた。

変なベッドの上に横になっていた。鉄製の枠。固いマット。無愛想な灰色の壁にかこまれた部屋で、家具といえるのはそのベッドひとつであった。スチームがとおっているようで、裸でいてもさして寒くはないが、身のおきどころもない。

頭の痛みは少しおさまったようだが、鈍く重くなってやはりつづいている。黒いスーツの男たちと、引きずりこまれた黒塗りのセダンを思いだした。それから時間がどれくらいたっているのか、まったくわからない。とにかく私は彼らの囚人になって、こうしてベッドだけの部屋へ、身ぐるみはがれてほうりこまれたであろう事は想像がついた。しかし想

像はそれでとまってしまう発展しない。それ以上考えようとすると頭痛が邪魔をした。

ベッドの上に起き直って、私はこらえた。

頭痛に、今の状態のすべてに。

そうしていたのは、しかし短い間の事だった。

ドアがふっとあいた。そうだ、ドアがあった。と思ったとたん、人影が部屋にさし、やがて足音とともにひとりの男が入ってきた。それからまたつづいて、ひとり。

私は彼らを見ようとしたが、正視できずうつむいてしまい、からだがちり、寒気におそわれたようにふるえはじめた。入って来たのは黒いスーツの男たちであろうか。はじめに声をかけられた、遊び人にしては若過ぎて精悍に過ぎる印象の顔しか、私はよく見ていない。ドアから現われたのは白いシャツ姿だった。少し老けてみえる。判断がつかない。

思い迷う間もなく、二人の男がふるえている私をはさむように前後に立った。

「これがフルトベングラの娘か」

と前に立った男がいった。中年の少しくずれたにぞった声だった。

「間違いはない」

とうしろの若い声がいった。声におぼえが

あり、しかし振り返って見る事ができないで、気配だけを緊張してうかがった。

「お嬢さん。説明はいらん、あんたには不本意だろうが、やって貰う事がある」

と中年男がいった。乱暴で投げやりなところがあるがそうとうに教養のある男のようだと私は判断した。

うしろで電話のダイヤルを廻す音をきく。受話器などはなかったのだから、若い男が持ちこんだに違いない。

「フルトベングラさんはご在宅ですね。私はお嬢さん、アンタさんの知人ですが、至急アンタさんのお父上に申し上げたいことがあります」

午前中の父はめったに外出しない。夜はおそくまで書斎にこもっているので寝ていることが多いのだ。が、今は果たして午前中であろうか、皆目わからない。窓のない部屋は時間を超えている。

「オットー・フルトベングラさん。お嬢さんは私どもであずかっております。——ええ預って。おわかりにならない」

冷たいいねいな口調は仰揚に欠けていて私をぞっとさせた。それは若者の情緒の質を表現していた。

彼は電話口にでたらしい父に、終始つめた言葉で、彼の意志を過不足なく、と思えるように簡潔に伝えた。

ミューズンヘルター紙が特集記事で軍隊の内幕をあばいていた。地方政界と軍隊の闇取引、予算の流れ、軍隊が生み育てている右翼団、テロリズム。その記事の連載をさし止めるよう忠告する、と彼はいった。

私の腕を、ふいに中年男がねじりあげ、私は声をあげた。

「ああ、お父！」

私は私のうちで通用している田舎の方言式の呼び方で喚いた。

「よろしいですね、明朝の紙面を期待しておきましょう」

電話はそれで切れた。

「お父、か。とんだ股旅ものだ」

と中年男がいった。

フルトベングラも三代、ミューズンヘルトではすでに名流であろうが、軍人などで成功している貴族たちやリンドー河沿いの炭田の持ち主、鉄工業者などで作っている社交界と関りをもたない、初代の偏屈といわれた性格がその後の家を支配していて、私もいわゆる金持ちのお嬢さん風の教育をうけなかった

し、家には田舎風の素朴な生活が固守されていた。三代を継ぐべき長男が、映画などといういかがわしい世界と眉をひそめられる分野にとびこんで、派手にもの狂ったような才華をまき散らしたのも、息のつまるような固く、らしい家に反逆のためでもあらう。でも、私はさして装われた素朴風に圧力を感じなかった。

家を捨てる、とか出るとか個人の独立とかいうのも頭では図式的にわかるが、またロマンチズムとして魅かれもするが、その意義はさして正直のところ実感できないのだ。ノラに感動しても少し上すべりになる。この私の感じは、私と父の關係に負うのだろう。父ぐらい子供にかまいつけない親もまず少ないだろう。私の方も、普通の子供のように肉親にまといつく方法さえ知らない。私の幼い頃母は病死している。なんでも母の素姓がよくないという事で、結婚までスキャンダラスな話題になったそうだが、現実の父ほどスキャンダルなどと無縁な存在はないだろう。いやもしかするとそういう切る事はできない。娘の私は、よく考えると父という男をまるで知らない。

こういう場合、父はどうするだろうか、と

私は書斎のパイプ煙草の鼻をつく匂いをよみがえらせなが一瞬に判断しようと思ったが不可能だった。

大きな堅固な機械のなかにまきこまれたように、私は私の意志もなんの力もない運動のなかにほうりこまれた。

胸を中心に、皮膚をひきちぎられるような痛みが燃えた。手首をうしろにねじられているのを固定されると、まったく自分の自由意志から上体が離れた。ベッドへおさえつけられた。顔がねじれた。さかんに声をあげていたような気がする。物になったからだから感情がはじきとび抜けていった。そうして、私ははじめに例の若者に襲いかかられた。

中年男に写真にとられていた。かなりたって少しまわりのものが見えはじめて、フラッシュの光に目を射られたのだ。

うつぶせに顔と胸はマットに押しつけられて、腰をあげている私に、うしろから男が襲いかかっている映像が、まず前から、そして横、ななめ上方、下から何枚もとらえられた私は動転していて、当然感じていい羞恥感はおぼえなかった。また、そんな余裕を二人の男は与えないほど、奇妙に熟練していた。

後で知ると、一本の縄が私にかかっていた

に過ぎない。しかし、それでどういう具合にされたのか、私の自由はまったく奪われてしまっていた。

私はすでに男の、あの奇妙な動作と、あの私の感じる痛みが、一点からぱっと散るメカニズムをある程度、知っていた。ある程度というのは、極めて初歩的に、という意味である。

その以前、かなり前から私は私のからだの組織の作用を知っていた。そして私は男に過度の期待をもっていた。自分でだけではどうしても物たりない空隙ができる。その空隙を男は圧倒的な力でうめてくれるに違いない。

しかし、私の誘惑した彼は、たしかに私の期待した道順通りを走ってはくれたが、完全なものにしてくれるにはほど遠かった。私の欲した、微妙さのエスカレートとは、むしろ異質のものを彼は与えてくれただけだった。与えてくれたものを私はさっぱり喜ばなかった。はじめの彼は、それだけの事だった。しかし、また少したつと、私は男に対する期待をとりもどした。考えてみると、彼は若すぎるようで、自分の発作におどろいてしまった、やたらにある線上を突っ走ってしまった、と

も思える。

私は、次の狩りを求めた。祖父のころの書生で、青春空気を過ぎてからまた戻り、以来十数年フルトベングラ家執事として廊下と玄関の主のような顔を年中無表情に武装しているクルト。いささか神秘めいた痺せた長身の四十男に私はねらいを定めた。むろん彼は細君持ちで、彼女は女中頭で厨房の主だ。私が幼いころは身のまわりの世話をしてくれいわば母がわりの彼女の夫がいかめしいクルトだった。

彼はそれが性格なのであろう、奥むきの事にはいっさいタッチせず、それを明確に態度にしてい、私にも直接、用むきなど持つてこない。たまの接触にも最小限の言葉としやちほこばった礼を見せるだけで、それが十余年まったく変らない。私も空気のように彼を気にしないで暮して来たのだが、彼を違った目で眺めてみると、その完璧さは興味のもてるものだった。

ちよつと考えると、彼と関りを持つ事はとても難しそうだったが、実はひとつも難しくないことでもあった。つまり一切の条件を無視してしまえば事は簡単だった。私は口実をつけて彼を呼びつけると、卒直にがむしゃら

に彼に抱きついて見た。彼の態度はいっこうに変化のない材木だった。そこで私は少し術を使った。抱きついたまま泣いてみせたのである。それは根くらべだった。ついに彼の方から困惑と動揺をみせて、私にどうしたのかとたずねた。私はこたえずにしばらく彼を困らせたままにしてやった。

私と父、使用人四人の家族に対して家が広すぎて、空部屋が幾つもあった。先代までは田舎出の若者を書生におく習慣があつて使用人の数も多かったし、彼らはミューズンヘルトの知識層となり、フルトベングラ家の地盤を形づくるのに大いに役だったのだが、父の代になって、まったくその習慣がなくなった。父は若者ざらいなのか、またフルトベングラの勢力に関心がまったくないのか、その両方であろうか。とにかく、そのおかげで私たちの逢いびきの場所は豊かであった。女中たちが掃除にくるが、つごうのよい事に時間がきまっている。

そうして私は情夫を得て、もう一年余もたつ。逢いびきの秘密は保たれていて、クルトの几帳面で用心深い性格から、私さえ心がければ容易に二人の仲は露われそうにない。

クルトの愛撫は時間が限られているが、性

急ではなく、確実にある程度まで私の快楽をひきだしてくれるが、この「精神的」ゲームははじめのころほど私を楽しませない。

私の経験は、それだけだった。何程のことはない。生まれて、眼をあけて、キョトキョトするでもなく、退屈そうにアクビをしている大人物風の赤ン坊がいるが、私はそれだろうか。

自失して、蛙のような恰好に四肢をひろげて、私はベッドの上に伸びていた。攻撃をかけているのが若者か、気味の悪い脂性の中男か区別がつかなかった。そうやってしまふまでそんな感覚はまるでなかった。いや感覚というのはやはり日常に密着したもので、個々に入れ物の大きな差があるのだ。その限度を超えた感覚はないに等しい、という事だった。

一本の縄が私の支配者で、彼の命ずるままに私は球のように丸くなって転ったり、変な形の丘を作ったり、すべてを避け得られないスタイルをとらされたり、ベッドを馬にして疾走から振りおとされまいとしがみついたりした。

気がつくとい私は、また独りになっていた。

二人の男が、いつ部屋を出ていったものか、知らない。

相変らず身にまとうものはなかった。固いレザー張りのベッドのマットは冷たく粘っている。私の汗と脂がしみついたのだろう。家具といったらやはりそれしかない。高いところに笠をかぶった電灯がひとつ点っている。影のない四角い部屋。光りを吸いとってしまふ、灰色の壁。監獄の部屋のような。しかしドアはふつうの民家のものらしい木造。真鍮の古くさい形の把手がついている。

あくはずもないが、手にとってたしかめてみる価値はあった。が、縄はとり払われているものの四肢が痺れていて、動かす気にはならない。

少し寒い。熱があるようだ。気がつくとも頭痛の方はおさまっているが、鈍い重みは残っていた。

時間はいったいどのくらいになるのか、考えても見当がつかない。電話をかけた時は、午前中だと思った。それもあてにならない。胃の加減をはかってみようとしたが、たしかに空腹の方に近いのはわかるが、食物を見つけないとする意欲は湧いてこない。裸のままですよいから毛布一枚ぐらいくるまって、も

う少し寝ていたい。

寒い。悪感が高まってくる。腕を動して、私はからだの特に弱そうなところをさすりはじめた。鳥肌が立っている、灯をうつして黄色い肌は、少しきたない。

かげになっっているところを見おろすと、嫌悪感がいやな身ぶるいと共に這いあがってくる。二人の男の前でとらされた、さまざまな形を思いうかべた。黄色い灯をうつして光っている臀、腰。人間のからだの形は、そういうものだと知っているから不思議ではないが先入観をぬいていきなり出会ってみると、きつと奇怪なもの、グロテスクなものだ。絵画が表現した女たちのもの憂いような豊かな曲線は美しいが、実際はシュールレアリズムを好んで表現する、奇型的なあの妙な形に、女は近いのだろう。

屈辱の状況を思いだしても、あまり羞恥感はない。ふてくされてやけになっているわけでもないのに、作用はそれをなぞっている。

泥沼におちこんで、夢中で這い上がろうともがいていた。感情や感覚のつけ入るすきはなかった。と思うが果たしてそれだけのことだったであろうか。弱い皮膚につながるところが、痛いようなむず痒いような感じで、ヒ

リヒリする。熱をもっていて、悪感はそのから伝わってくる。

ドアの把手の動く音がした。たちまち私のからだがかわばった。心臓が高くなった。しばらくガチャガチャやっている金属音がづく。鍵をあけている。やがてドアが少しくしむ音をたててあいた。中年男が入ってきた。私は顔をそむけた。

「食いな」

ベッドの端に、手にもったものを置く気配とともに、男は簡単にひと言いい捨てると、さっさと行ってしまった。ふたたびドアのきしむ音、鍵のかかる音。フェルトのスリッパを男ははいているらしく、足音がないほど低いが、床そのものがわずかにきしんで、男の遠ざかって行くのがわかった。気配はすぐに切れた。シンとした。壁を見ているだけではどんな建物の内なのかわからないが、男の足音を聞くと、大きな家ではなさそうである。壁はモルタルで、柱は木、三方の壁は漆喰だった。全体にしめって、ひんやりしている。スチームが床には伝わらず頭のあたりにゆるい暖気が漂っている。部屋は地下室の感じだった。男の足音も、上の方へのぼっていったようすがした。

男の置いていったものは、盆にならんだ食事だった。ソーセージの油で焼いたもの、パン、カップに入ったミルク。学生食堂で出す愛想のない昼食に似ている。

しばらくそれを見ていた。何気なく手を出して、口が咀嚼しはじめると急に強い飢えがやって来て、夢中でむさぼった。それほど量のものではない。なくなってみると、もの足りなかった。後になってみると味などはわからない。少し未練氣に空になった器を見て口のなかに湧いてくる唾液を飲みこむほかはなかった。

それからまたしばらく無為の時間が過ぎていった。ふと、下腹にツンと突きあげてくる刺戟感がおこった。

少しずつ、刺戟が嘔氣のようにのぼってくる。それに耐えていると、痛みはしだいに強くなり、腸のどこかが石のようにしこり、石がうごめいて私をくるしめにかかってくる。冷汗が腋から、首のまわりから、にじみ、ひたいにも脂汗がういた。

立上り、ドアに近寄り、把手に手をかけて廻そうとした。少しガチャガチャ音たてて把手は動くが、ドアはあかない。四囲の壁に、視線を這わせた。それらしい隙は、やはり見

つからない。ベッドのところへ戻り、今度は出来るだけ動かないようにじっとうずくまるようにして、ただ我慢した。

刺戟がかけあがり、ツーンと極点に達し、耐えている頭脳の止め金を忘れそうに痺れて山を越えた。どうやら痛みはおさまって行くようにすに私は肩の力を抜いた。しかし、まだ安心はできない。痛みのもとである腹部のしこりは解けないで、鈍い感覚を固まらせ、いすわっている。汗が気持ちわるく肌をなめている。

その時、ドアがあいた。首を少し動かして私はドアの方を見た。若者の方の男が部屋に入ってきた。黒いシャツに黒いズボン、靴音がいかつく床を伝い、手にもったものがガシヤガシヤと音たてている。鎖のようなものだった。

「豚メ、餌を食いやがったな」

と若者は口ぎたなく吐き捨てるようにいった。とたんに、私はよく憶えていないはずの彼のからだを想像でよみがえらせた。感じだけは、たしかにおぼえている。

彼のぬるっとした膚の感じは、ムーア人のように、けものに近いように思える。私の知っている男たち、大学の学生や教授たち、う

ちの執事などとははっきり異質なものを彼はもっているようだ。両者がどう違うのか、私にはわからないが違うという事だけは、いやにはっきりと判る。

「どうれ面倒みてやるか」

と顔をそむけた私の背後で若者は鎖を鳴らした。音からするとたしかに鉄製の鎖であった。ことさら音をたてて、私をおびやかす。彼のいう事も言葉として通じるが、それがどんな事を現わしているのかというと、まるで異国の呪文を聞いているようなのだ。

彼は、私のうしろから二の腕を万力のような力でつかむと、両手首に順に錠をかけた。私は身ぶるいした。しかし萎えたように抗う力がない。

そうしてガクガクふるえながら、うつぶせに手を左右に引かれて上半身の自由をうしなった。

私はその時、ふっと少女のころに見た、古城の地下室に盲のけもののようにうずくまった恰好の奇怪な器械を思いだしたのだ。私の意識は十年ほどを経てひと廻りし、それから視線をすばやくそらした瞬間に重なった。

胸の下ベッドが拷具になって、私をしめつけてくる。ベッドの頭と足の両端へ、手を

思いきり広げてくりつけられてしまった。手首が強く引かれているので胸がおさえつけられたようにくるしい。無防備にさらけ出された背から腰、床にひざまずく恰好になった足まで、おののきが走った。

しかし、彼の腕力の強制はそれで終らなかつた。足首に錠がうたれ、床から持ちあげられ、手首のところまで引かれて固定された。右から左と引かれて、私のからだは完全に吊り上った。腰が宙にういた。引き伸ばされた肢が、その腰の位置を強制した。

ベッドに張りついたようになった私のうしろで若者はしばらく手を休め、眺め、おのれの作品を点検した。そのうち手で、私をなでさすり、こびり、突き、押し、伸張度の点検をすすめた。

胸をおされて息ぐるしく、私はわずかに自由になる首をまわし、ベッドの重圧を逃げようともがいた。といって、それ以上にどうなることもできない。

彼の手がしきりに検べることから攻めることに変わって来た。少しの間忘れていたあの腹痛に私は突きあたった。その石のしこりのようなところを彼の攻手がめざしてくる。ぐいぐいと容赦なく迫ってくる。私は妙な声で喚

いて腰と首を振った。彼の攻める力がスイと消えた。それから何か器具のようなものに代った。傷口に刺戟的な薬がしみこむような熱い痛みが、私の内臓まで響く勢いで浸した。私は飛びはねるような勢いでもがいたが、動きはいっこうに私の肢態のありさまに影響せず、それが徒労ということなどもわからなままにもがき続けた。

傷口にしみる水はどんどん浸みこんできて石のつかえに達し、通り抜けて、石そのものが急にふくれあがったように巨大なものになった。私は息をひそめた。暴れて喘ぐと、石がとびだしそうだった。喚くこともできない単に息をひそめているだけでは間にあわなくなっていく。頭のなかは急速に乱れ、ものぐるいし、からだは動かせないその分まで補うかのように暴れたてた。

それまで、通常の意味での、羞恥感はないんど感じられなかったといえば正確ではないが、とにかくすべてをさらけ出して当然おぼえる心のもだえはあまりなかった。痛みや寒さや痺れや飢えなどは肉体的物理的なものであった。

黒セダンの自動車に連れこまれて、気がつくとい私は身のまわりの物という物を全部と

てほうり出されていた。その間の意識の欠落が多分私の感情に作用したのだろう。気が動転したということも違う、何か物事に感じるものが薄くなってしまう、あまりに異常なできごとだが、そんな目にあっているのは自分のようでもあるが、何か嘘のような実感があって、奇妙なサーカスの曲芸じみた姿を強制されても、意識はそれを他人事にしてしまっていた。

そのどこかへ行ってしまったていた自分の感覚が、その時急に戻ってきて、私のからだにぴたり重なった。

そんな事はできない、と私の感覚はもだえながら拒否した。出かかっている苦痛のしこりが、拒否を押し潰そうとして力を入れてくる。そんな事はできない。冷たい脂汗がからだ中から噴きだした。下腹部から腰にかけての皮膚は張りつめ、意識が敏感になったところへ、情知らずの糾問官は次の攻撃を加えてきた。いきなり皮鞭をふるって臀のいただきをたたいてきた。うっと息をたえ入られて、私の辛うじて耐えていたものは思わず踏みだしかけ、たたらをふんだ。ようやく立止った崖の上で、落ちよとばかり次の襲撃がおそってくる。あう、と私は声をもらしかける。

あう！

私は、古城の暗鬱な壁が無表情に吸いこんだであろう、責められ追いつめられた犠牲者の、この世ならぬ悲鳴を聞いた思いに震えあがった。

限界が徐々にやってきた。急激にゆれ動きながら、それは極めておそい速度で、しかし確かな加圧をもって迫って来た。

私は私の肉体の叫声を、うつろな脳の片隅でたしかに聞きとった。

……………

とまらない。私がいかに叱咤しようと、いかに哀願しようと、限界を踏みこした暴走はもうとめようもなくつづく。私は自分のものそのものに打ちのめされて、眼の前が真ッ黒になった。黒いその色にも妙な色が混っていて、逃げようとする私の正面へと意地悪く立ちふさがる。

それからの私は、まったく自分を失って、私をあやつる力のままに、難破船が波浪にもてあそばれるように漂い、波の間におちこんでいった。

水平線には何も見えない。ただ、暗く、限らないエネルギーをまきおこして迫ってくる

暗灰色が一面にあったのみ。

しかし、一度だけあった選ぶ機会を、私はおぼえている。やはりおぼえている。その男が、私に一度、現実を見なければならぬ、時をあたえた。

私の無意識に振る頭が、がっしりと掴まれた頭髮の痛さに止められた。顎が男の掌にすくい上げられ、五本の指先がじわじわと左右から両頬につき立てられてきた。

私の顔は上下左右から圧迫された恰好で、動けなくなった。頬に噛みこんでいる指が、そろりそろりと動いては、指腹が頬をなぞって行く奇妙な感覚を私に与えた。

その指が私の下瞼の辺りに這い上って、強い力で押し下げる。しっかりと閉じていた私の眼が下開きに引き開けられた。

「眼をつむっていちゃあ、見れるわけはなからう？」

私の視野いっぱい星が乱れとんでいて、その向うに何か怪物じみた男の眼や鼻や唇がぼやけたように映っていた。

巨大な感じだった。その一つ一つが別々の生きもののように、私の眼球を威嚇するかの如く迫り、流れた。

クラクラするめまいに似た視線を覆いつく

して、ギラつく唾液を運ぶ舌がうねった。それはもはや、私の観念にはない奇妙極まるものという以外、いいようのない感じだった。そのものが迫っては遠のき、消えた。

再び私の眼は引き開けられた。

「よく見るんだ」

と彼は私の目の極めて近い焦点に、そのものを誇示して、命じた。そのものの形状を形容する言葉を私はもたない。いやもてない。しかし、奇妙にも鮮かなイメージとして、それは今でも私の目前に存在し、私を圧倒し私に命じる。

「見ろ！」

私は見た。

「おれがいやか。憎いか。憎かったら、おまえには歯がある。歯で噛め。噛み殺せ！」

と彼はわめいて私の唇は強引に割られた。

私の唇は張り裂けそうで、喉までつまる思いがして私は涙を流した。気がつくと、私は彼の暗示にかかわらず歯を唇の裏におさめていた。その努力のためにあごが痛くなるのだった。唇めばよい。と私も思った。何も意志をもって喰いつかなくとも、歯を自然に閉じればいいのだ。

一週間、たつ。

私が彼らに監禁されていたのは、一日余、三十時間ほどの事であった。翌朝の朝刊で彼らは目的を達すると私をあっさり釈放した。

彼らにとっても非常に危険な仕事であったので私を長く留めておけなかったのだろう。ただ、写真をとった事を忘れるな、と私に念を押した。つまり警察などへうったえて大事にするな、という事であろう。

私は行きと同じ車で、彼らと逢った場所、リュクサンペール公園わきの路へ連れてこられ、降ろされた。

私は、歩くと痛むので、変なガニ股になりながらそろそろと動き、家まで独りで帰りつき、家の者とも顔をチラと合わせただけで寝室にこもってしまった。

少し熱があるようで、医者と呼ばれて診察をうけた。私は主たるところの診察を拒否した。父も医師もそれを強いて診ることはできず、胸許だけ詳細に診て消毒薬、その他いろいろな薬品を置いて帰った。

実際のところ私は、あの部屋ではひどく消耗して、それゆえに自失状態におちいったと思っていたのだが、帰途の車中ぐらいからそれほど体力的には参っていないことにも気づ

いていた。多分、彼らは睡眠薬を使って私を充分に眠らせたのであろう。ぐあいの悪いのは、彼らがどういうわけかひどく執着して、じめたところの痛みだ。炎症をおこして、ふくれあがっている。力をからだのどこに入れても激しくビンビンひびいて、じっとしていても痛みが去らない。そこを痛めたのは、あの若者だ。私が噛めなかったことに自信を持ったのだろう、彼の次の攻撃はさらに無遠慮を極めたものだった。私の痛みをこらえる限界を彼は簡単に踏みにじった。

ベッドに三日ほど呻吟した。翌日、どうしても行わなければならなかった行為が、一時間ほどの苦業になり、三日めでもまだおかしかったが、どうやら冷汗のにじみでてくる事もなくなつて、私は考えはじめた。

なぜ、私はそんな路をたどりはじめたのであろう。

あの建学記念祭の夜、私がひどく酔ってカールと歩いたリンドー河岸の道から私ははじめた。

帰途の自動車のなかで、往きと違い彼らは私に目隠しをしなかった。事実、私はほとんど目をあけられないくらいにぐったりしてい

て、とても外の街のようすなど観察できそうにも見えなかったはずなので、彼らが用心を忘れたとも考えられる。もともと彼らの行動は、大胆すぎるというより無法を大っぴらにやらかして恥じもしないし、このミューズンヘルトではそれがまかり通ってしまうといった、法治国家らしくない妙なところがある、この国のこの市なのだ。それは私も前から知っていたが、それにしても、おかしいところがある。彼らは、もしかするとうろ覚えの路を逆になぞる、この私の行くえを知りながら目隠しをしなかったのではなからうか？

ああ、どうでもよい。私は、突然に遠くへ捨てられてしまった犬が、もとの主人の家を本能的に嗅ぎあてるように、リンドー河岸通りから橋を渡り、兵営と、それに接したいかがわしい街のある下町の方へ歩いて行く。

そして私は、ついに見いだしたのだった。私の運命を。中年男イリヤ・ゴッチの「魔女の家」を……。

蛇体の若者、ジャン・ジャック・ヘフナーの冷酷ともとれる眸の光りを……。

それから……
それから……

(了)

(カット・日本武士)

再び「お産」について思う



提案

茂野 礼

『女一人で、山の中での出産。トロトロとわ

ずかな焚火のそばで横になっている。陣痛の来る度に、ヒクヒクと顔を引きつらせながら痙攣を見せる。夜半の月は真上に薄雲を従え輝いている。陣痛も次第に激しく、これに耐える表情も厳しさを加えて来る。両腕で後頭部を抱えたり、両太股を抱え込んだり、肩でゼイゼイと喘ぎながら身を悶える。……

ややあって孤々の声を聞く。産まれたばかりの赤子の臍の緒を糸でしぼり、竹べら様の

もので、物憂い動作で切断する。
なお襲う後産の痛みに、草の葉を焚火に焙り、それを腹へ押し当て、押し当てして耐え

ている。

その翌日には、昨夜産み落したばかりの赤子を袋に入れて、背中にかけながらの野良仕事。裸体に近い彼女らの逞しい生活。驚嘆の限りである』

これは、昭和四四年四月二七日、NTVの「すばらしき世界旅行」の中でニューギニア奥地の記録が紹介された時の一場面を点描したものである。私達と異なった風俗習慣を持つ彼女らの生活を驚異の念を持って見た。

現代人には、彼らなりの現実の処世観は持っているであろうが、現在の吾々が持っている感覚から見れば、可成り異った内容のもの

と思われる。

しかし、出産そのものを考えて見れば、それは生理的なもので、何等驚くに当らず、人間の在る処には必ず出産があったわけで、ブラウン管で見た彼女等のあの生活も、我が国の或る地方で、つい最近までは珍らしくはなかった習慣と大差ないと言えるものである。

また、昭和四四年四月二九日、フジテレビの「小川宏ショー」では、合計一万二千人以上の赤ん坊をとり上げた産婆が、一万人目の人とご対面の場面があった。

当日の出場者には、親子共々その産婆に取り上げて貰った人がおり、その特殊な助産法で安産を得た人々から多くの感謝が寄せられていた。

その助産法は独特なもので、その人は静岡の人だそうだが、訥々とした口調で言葉少なに語っていたが、それによると……

産婦は分娩の時に、物に懸命にしがみ付きたがるので、私の体に兵児帯を巻き付け、これに掴まらせ、産婦を足で挟み付けて助産する。これを永い間行なって引張らせていたので、私の腸は十糎程伸びてしまい、これを手術するため入院をした事もある。

昔は産室に産婦と二人だけで入り産ませたものだが、今では、ご主人か、家族の人に限って、傍に付いていて貰う様にしている。こうすることによって、夫婦のあるべき姿を正

さしめると共に、尚一層夫婦仲を強いものとするのに効があり、皆様からも喜ばれている——と。

すでに四十に近い位の人が夫婦で出場していたが、この人も主人が奥さんに付添って分娩させて貰った事に深く感謝していると述べていた。

この助産婦は、近頃の産婦は中途半端な知識を持っている人が多く、それが反ってマイナスになる事が多い。知るならば充分に深く心得る事が必要で、不十分な知識なら無い方が良い結果が得られると、この老練な助産婦は断言していた。更に、分娩は最近病院で行なわれる事が多いが、本当は病院とも良く連絡の取れている助産婦に扱って貰う方が自然でもあり、何かと都合も良いのではないだろうかとも語っていた。私も全く同感の至りである。

この夏、H市のA劇場で大蔵映画の「お産と避妊」を見たが、これにはパートカラーであるが、あの実写部分があり迫力があつた。ただ、あの画面のまわりの可成りの部分が遮蔽されていたが、それをもう少し小さくする手段を講じて欲しかったのと、実写部分の時の生の音声を入り込ませて欲しかった。そうする事により、未経験者への教育的性格が向上するし、また、かりそめにも軽率な考え方から神聖であるべき営みを汚す様な事を無くする

ためには、より有効なものとなったであろうと思われる。

多くの産婦の出産に立会って研究しなければ、女優の演技だけでは到底実際の迫力は出せるものではない。せめて真実の叫びを録音し、これに合わせた演技が望まれ、且つ、要求されるべきで、技術的には今日では実現が容易な事である。

その他、関連のある状景としては、実際には最も臨場感にあふれるべき児頭の排臨、発露、努責と絶叫、将に阿鼻叫喚とも言うべき形相、汗や涙は勿論、鼻汁や唾液も流れなし失禁を続け体は悪感に震え続けている様子。もっとも汗と小水は元は同じく摂取された水分だから左程区別の要も無いのかも知れぬ。助産婦の慰留や母体保護の効果の見せ所場面でもあろう。

これに、歯を喰いしぼり、顔引きつらせて耐える姿を描かなければ真実の描写にもならず、又、教育的な面や指導性から見ても薄いものとなり、全く迫力の無いものとなってしまう。生々しい真実をじっと見詰める事が最も大切な事であり、且つ、この作品の目的はそこにあるのではなかっただろうか。そうではないとすれば、題名に対し羊頭狗肉のそしりはまぬがれないのみならず、吾々の誇り高き性科学が、エロの一言で片付けられてしまう因を、作品自体の中に持つ事となり、厳に戒

めねばならぬ事ではないかと思う。麻酔がかかっている無痛分娩なら別だが、かりそめにも、母となるべき人に対する教訓を含むならば、かくあるべきだと私は信ずる。

当日の観客には相当数の女性がおり、その中に教師らしい人がいたが、手には買ったばかりの性教育図書を持っており、出産場面を二度見ていた。(つまり私はその人を確認しているのだから、私はもっと永くいた事になるが)この人の意図はどこにあったのであるうか、観客にはこの様な人もいるのだから、その様な要望にも応えて行くべきではなからうか。

本誌の昭和四四年八月号に、辻村隆さんによる金原奈加子さんの「童女受胎譜」が掲載され、その見事な腹部に見とれたが、月数から見ると今頃は、声を立てて笑い始めた子供をあやしている頃ではなからうか。

しかし辻村さんの筆によると、童女めいた金原さんにも種々な事情があつた様で、この事情が原因であるにしても、奇ク誌の読者、特に妊婦愛好者の側から見ると、極めて貴重な資料の提供をされた事になり、彼女の腹部は辻村さんの華麗な筆とレンズによって誌上に紹介された。そしてこれに対する読者の反響も誌上を賑わせている。

彼女の当時の状況と妊娠月数から推測して見ると、出産予定時の精神的、家庭的、経済

的準備は些か心細かったのではなからうか。

私は本誌の昨年九月号の「痛くないお産」

についての途中で提案した様に、彼女の様なケースには性科学研究会（仮称）を開催し、この会費で分娩費用の支払や、研究協力費として本人への謝礼をしたり、または、本人からの希望の申出と、会の承諾のあった場合には科学的、合理的な出産の指導や研究の事業を行なう様なものが、大きな意味を持つ事になるのではないだろうか。

この種のものに第三者が口を入れると、それを受取る立場により、両者とも差し障りになる事が多いので、本誌編集局の機関としての動きにより、これが実現される様に前記投稿中で強く要望した次第である。

辻村さんの記事に表現された文章による限りにおいては、彼女の場合、この様な研究会の存在が、彼女の側から見ても望まれたと共に、紹介された記事を読んだ第三者である吾々の立場から見ても切望されたであろう事は想像に難くない。

プレイやフォトに、再度進んで協力した彼女の立場は、声ならざる声を示したものとしてみえ入るべきでなかっただろうか。若し将来、この様なケースがあった場合には、奇ク誌刊行の趣意を別の面で実践する機会を与えられた事にもなるわけで、その趣意が真に理の有るものであるならば、私の提案の実現

を見る様に、特段の御配慮を重ねてお願いする次第である。

最近の統計調査によると、出生率の低下から、昭和六〇年代から人口が減少する事になると言う事であり、これを何か悪い事でもあるのかの様に言う人もいる。しかし私は、個人の尊重、富の分配の点から見れば、日本の場合、人口減少は望ましい事で、一〇分の一位になれば、例えばアメリカに見られる様な大きなスケールの行動が日本においても可能になり得るものと思っている。

これに関連して、出産を勧める様な記事が多く見受けられる様になり、昭和四四年八月五日の読売新聞紙上では、日本女子医大教授大内広子博士が、最近、出産に帝王切開を望む者が多いが、これは心得違いであり、自然遂婉が合理的で、しかも安全であり、分娩時の爽快感は例え様もなく、疲労回復も順調でしかも早い。これに比べて、帝王切開の苦痛は大変なものであり、必要とする場合以外は行なわぬが良いと述べている。

これと同趣旨の内容のものを私は昨年九月号の「痛くないお産について」の中で触れているので参照を希望する。

この様な勧告が通る反面、中には私の知人の様に、予定日は過ぎたが大きく立派な子供になって欲しいと願って大きな腹を抱え続け二週間程遅れたが四疋に近い赤ん坊を見事安

産した人もいたので、こればかりは一概に表現し難い。

海に向こうでもハリウッドの女優キャロン・テートさん（二八才）が妊娠八カ月の身重で殺害され、しかも天井から吊り下げられていたとのニュースには、妊婦に興味を持つ私も些かびっくりした次第である。夫ロマン・ポランスキー監督によれば、彼はロンドンから犯行推定時刻の少し前、電話で彼女と話したとの事であり、出産を二週間後に控え無痛分娩の本を買い、ハリウッドに帰り次第夫婦一緒に母親学級へ通う心算であったと言う。

私は死者を冒瀆したり、彼女の行跡を批判したりする気持は毛頭無いが、しかしその華麗さ、無惨、壮絶さは、蓋し空前絶後のものであったと想像される。

さて、「花と蛇」の中でも、静子夫人には受胎、妊娠、出産を予定したコースが設定されている。私は続編第五七回に至ってこまで筋が進んで来た事を喜ぶと共に、分娩に至る日を更に待つ。作者自身も、淡々としてストーリーを運んで行こうとは思っては居られないと思うが、何か身心共に感動に打ち震える様なものにして戴きたいものと思う。

例えば登場女性の総妊娠などはどうだろうか……。

すなわち、静子夫人は多勢の観客の前で祝

福を受けながらの公認の受胎で一番早く（と言ってもそれより数日早く、シスターボーイの種を宿す）京子、小夜子は奸計による騙され受胎、折原夫人らは反逆に対する懲罰受胎千代夫人は親分の子を身籠り、銀子ら葉桜団のズベ公たちも、風紀の乱れと共に夫々の男たちと秘かに出来ている。受胎月は話の展開による差があり同一ではない。

出産は静子夫人の予定日の十日位前に懲罰妊娠の人工早産から始める。陣痛誘発法を数種併用して、急速に子宮頸管の開大を図る。陣痛に呻き、のた打つのを見て、そのショックから妊娠月数の少ない銀子が流産を起こし誰の子かと詮索され乍ら痛みに腹をよじる。

しかし、その父の名を聞くに及んで、仲間との二重三角関係の綻れと、掟に背いた不義の結果として男が引き出され、冷たくしたかつての女から嫉妬に狂った責めを受ける。調子に乗り過ぎた責めと、せい惨な光景とから自らも急に腹痛を訴え出し、互いにひた隠しにしていた相手方の名を知るに及んで、ズベ公同士の争いが始まる。止めに入った千代夫人は誤って腹部を突かれ、強い痛みを訴えていたが、すぐに陣痛に変わって行く。

男達は目を丸くして唯々おろおろするだけであるが、臨月腹を抱えた静子夫人の適切、機敏な指示により、或は立位、或は膝位や座位、側臥位ありで、日頃責めに使用されてい

る縛り棒やロープに自からしがみ付き、それらがたっぷり吸い込んでいる汗とは、また異った汗を流したり、又、ズラリ枕を並べた床の上で立てた膝を揺するあり、エビの様に丸くなり、足を抱き締めるありで、殷々として呻く女達の介抱をしている。

妊娠月数の少ないズベ公たちは、引き離して押え付けられているが、血の塊りの様なものを流しているし、折原夫人は順調に胎児の下降が続いており、今、再度にわたる浣腸が皆の手で行なわれているが、半狂乱の如くなっているのは旨くゆかない。男達は報復の目をぎらつかせながら取巻いている。

あたりは洗面器やガーゼ、脱脂綿が散乱しクレゾールの匂いと、血や汗の異様な匂いが立ちこめているが、しかし躍動的な若さでも言おうか、筋肉を波打たせ、硬直させる様にして胎児の娩出作用をするので、病人の呻きとは本質的に異なる分娩独特の明るさ、力強さを感じ取る事は出来る。こうしてこそ、産まれた時のあの快感、解放感や幸福感が約束されるのだ。

最後に静子夫人の陣痛が始まる。骨盤狭小と軟産道の伸展が悪く、激痛に努責の形相も凄まじく、若い肉の塊りは湯気を噴かんばかりの脂汗を流し、地響きを発しそうに震えを含んだ悲鳴を上げている小夜子や京子を励ます声も途絶え勝ち。

しかし夫人の経過は良く、胎児の旋回から早くも児頭の発露へと進んで行く……。

と言った様な分娩オンパレードの筋などはどんなものだろうか。

もっとも、この様な場面は読むものより、見るものの方が適切なのかも知れぬが……。今まで作られた、分娩に関したり、又は、それを含んでいる映画も多いが、これと言ったものが無いので、この様なお膳立てから、一挙に各種の出産、分娩を豊富に盛り込んだ映画を作ったならば極めて優れたものになる事と思われる。或は、その中のいくつかは、分娩の進歩を回顧したりして「劇中劇」の形で使う方法も有効に生かされよう。

この様に、かずかずの不足している点のある現状と、それにも増して、此の種のものの必要とされている事からであろうか、例えばTBSテレビ「これが世界だ」で「新生児を救う」と題し、新生児問題並びに受胎後十カ月間と出産に至る経過とを材料に作品が作られ、テレビで、しかもそれがカラーで放送されているのを見ても明らかと言える。内容については見られた人も多いと思うので説明は省略しよう。

現時点は、この様な情勢にある事を充分認識され、それを打開し改める事を希望する人々の意を諒とし、すべからず各方面の早急なしかも強力な活躍を望むものであり、又、その成果に期待して筆を擱く。

人 質

イーラは、人前に顔を出すことを極端におそれていた。デリーで強制された、あの屈辱的な拘留生活が、彼女を極端な警察嫌いとなせてしまったのも、決して無理とはいえないであろう。

彼女は、あのまま下目黒のかくれ家に寝泊りしていた。母に会いたいとは願っていたがもしそんなことが警察に嗅ぎつけられたら大変だと説得されると、本当にそうだと思ひ込んでしまふのだった。同様な理由から、屋敷

の外へ出ることはメッタになかった。なるほど彼女は一見、自由のように見えた。誰も彼女の自由を束縛しなかったのだから。しかしある意味で彼女は自ら囚人人となってしまうのであった。これが又、彼女の「保護者」達のつけ目だった。助けられたという負い目から、彼女は無条件に組織を信用していたけれども、組織のリーダーたちは彼女を利用しようとしているに過ぎなかった。彼等にとっては、イーラは人質だった。イーラの両親が組織にとって不利な言動をしないための保障として活用しようという魂胆だったのである。



第十五回

前号まで「ボーイング七三七ごと、百人に余る美女狩りが成功して、行方不明と世上で騒いでいるうちにミス・アジア以下を收容した原潜ネプチューン号は再び姿を消した。エミー司令が指揮権を回復したことはいうまでもない。青帮の首領蔡樹理は東京にあり、新津謙介は始めて会った有明の依頼で、恋人を殺されて傷心の美女、林美玉をエスコートして東京へ向かいつつあった。東京では麻薬シンジゲートに巻き込まれた混血のイーラが逮捕された父に会うべく必死の努力をつづけていた。

イーラの父だって、決して好んでこのような裏道に入ったわけではなかったのだが、長い人生の間に、一寸した弱みにつけこまれてその弱みを曝かれるのを怖れながら、ついズルズルと抜きさしのならない泥沼に這入り込んでしまったような訳なのである。長年月の間に、ずい分と麻薬組織の内幕を知るようになっていた。それだからこそ、組織は全力をあげて彼の口を封じようとしていた。無理をして莫大な密輸をやったのも、そうした資金作りに他ならない。実際のところ、弁護士をやとうにしても、余程巧妙な報酬を約束しない限り、有力な人を依頼することが出来ないのである。金力、暴力を併せて、考えうるあらゆる手段を講じてイーラの父を救出しようとするのだ。

それだけではまだ不安があるというので、イーラを手に入れて万一のために備えているのだ。実際、イーラの父は根が善人であるだけに、キビシイ追求にあうと、つい何もかも白状してしまうおそれがあった。その気配が察せられると、一味の弁護士がやんわりと、妻子の安全をねがうのなら黙っていた方がよいと、注意するのである。これも長い経験から、麻薬シンジゲートが如何に冷酷無残であ

るか身にしみてわかっているだけに、彼等がその気になれば愛娘のイーラなどは滅茶苦茶に蹂躪されてしまうことは明らかだった。

イーラの父は頑強に知らぬ存ぜぬと突っぱね通していた。組織の巧みな運動が、彼に不利な証拠の多くを隠滅していたから、漸く警察当局もアセリを見せはじめた。公判を維持するに十分なだけの物的証拠が見出せないからである。

新津謙介は丁度、こんな時に帰って来た。彼の情報に望みを繋ぎ、待ちかねていた捜査本部は、係官を羽田まで出迎えに出し、パトカーで本部まで急行させるという異例の処置をとった。

ミステイニングサービスの赤い制服を着た女の子がタラップのところで新津にメッセージを渡して、林美玉を蔡が出迎えていることを知らせた。新津も美玉も共に蔡と面識がなかったからである。二人共、大した荷物でなかったから移関の検査も簡単に終り、ロビーに出たところで女の子が蔡と引き合わせてくれたのである。そうしている間にも、捜査本部の係官が早く早くと、せき立てるので、新津は蔡との挨拶もそこそこにパトカーに乗って

しまった。若し蔡が出迎えていなかったら林美玉まで捜査本部へ連れて行かねばならなかったであろう。

イーラの父は裁判所が拘留延長を認めなかったのも、もう自宅へ帰っていた。そして妻のあまりにもやつれ果てたのを見て心のつづれる思いだった。又、日本人の妻にしても留置生活で疲れきった夫の姿は、涙をさそう以外の何ものでもなかったのである。

そんなときに、新津の訪問があった。新津の心は重かった。恋しいイーラの両親とあれば、何とかして助けてやりたいと思うのだけれど、警察官としては、あきらかに重大な秘密を知っているイーラの父から、社会の敵、麻薬シンジゲートに関して自白させる義務があった。勿論、新津はその義務に忠実であろうと決心していたが、それ以外では出来るだけやさしくありたいとも思っていたのである。

お互いに面識のある立場では、いくらかイーラの両親を安心させる効果があったかも知れない。彼等は泪ながらに自分達を襲った不幸を悲しみうったえるのだった。

新津も心重苦しく、デリーでのイーラとの面会、その後の脱走事件、そして今だに行方

不明であること等を話した。デリーからのパンアメリカン機内での出来事には、わざと触れなかった。

しかし、彼はイーラが東京のどこかに隠れていることだけは確信していたのである。それより、彼の第六感を刺戟したことは、イーラの両親の反応だった。何者かによってイーラの動静は、この両親に伝えられているのではあるまいか。おそらくは新津以上に、この両親達はイーラのことを知っているに違いない、という点である。

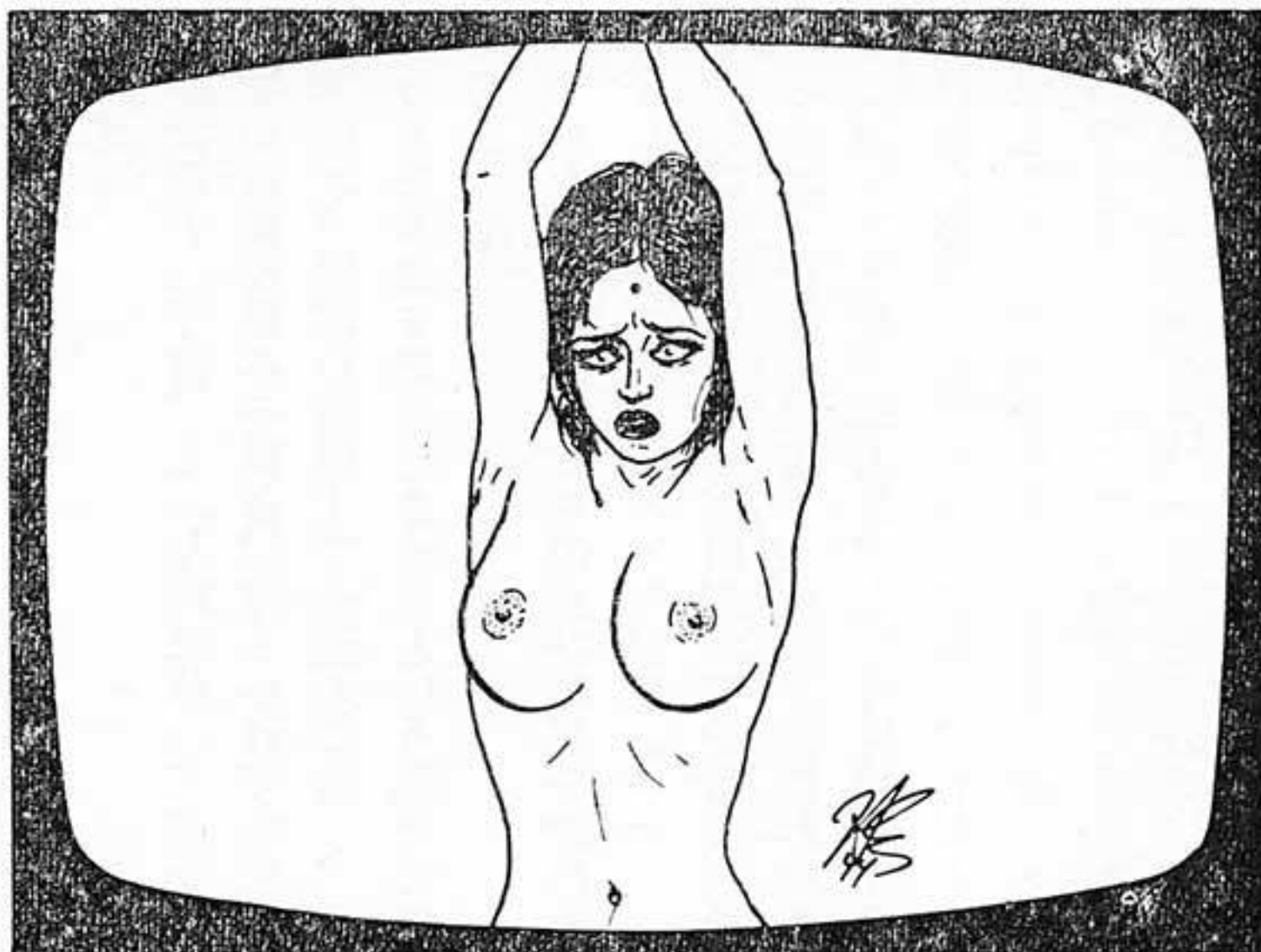
彼は思い切って突込んでみた。

「イーラさんが、これは仮定のことですが、若し東京に隠れていらっしゃるなら、これは極めて危険なことです。あなた方を護っている勢力は何時、如何なることで、あなた方に噛みつくかも知れませんよ」

すると、イーラの父は、ありありと苦澁を面にあらわして答えた。

「その通りです。いま私の最もおそれていることは、イーラがどうなるかわからないということです」

「だからこそ、われわれ警察と共同して一刻も早くイーラさんを救い出すことです。それには、もっとわれわれに協力して下さいさうなく



っちゃ

「しかし、彼等の力はおそろしい。警察力が発揮されたときには、もう手遅れになっている例もあるではありませんか」

イーラのことを両親にとってアキレス腱だったのかも知れない。

何気なく答えながら、彼は何時とはなしに新津に対して、自分のことを打ち明ける気持

になりつつあった。

「誓って、イーラさんは救い出しましょう。あなた方は、イーラさんが東京にいらっしゃるといふことを、ご承知なんですね」

カマをかけられたのも気がつかずに頷頭するのへ、押しつぶされるように、

「どこにおられるのか、心当りはありませんか」

「知りません。それが知りたいのですが、全く判らないのです」

と、苦しそうに頭をかかえる態に嘘はなさそうである。しばらくして

「新津さん、私はあなたを信頼しています。

私の身はどうなっても、妻や子は救ってやりたい。私は、こんな気持で一ぱいです。それで、何とか私の頭の中を整理して知っているだけは申し上げますから、どうか今夜一晩だけ、お待ち願えませんでしょうか」

「結構です。それでは明朝十時頃、又伺います」

新津は深追いをやめて、一旦ひきあげることにした。

丁度、新津達が帰って小一時間ほど経った頃、ある電気会社の文字や色を飾った小さな

四輪車が、この家に乗りつけてきて、一台のカラーテレビを持ち込んだのである。

運転してきた男は、張り込みの刑事達にもわかるような大声で、

「チわあ。ご注文のテレビをお届けに伺いました」

と叫んだ。実は、この男、イーラの父がよく知っているレポ係りの変装である。

声でそれを聞きわけたもののどうしようもなく、イーラの父は、注文もしないテレビを据付けて貰うために、文句なしに男を招き入れざるを得なかった。

二階の寝室にテレビを運び上げた男は、それを調整しながら低い声で言った。

「新津は、きわめて危険な人物だ。組織は、いずれ何等かの方法で彼を消すことにしている。君もそのつもりで、あまり深入りしないように。さっきの新津と君との会話は全部かくしマイクで聞かれている。ボスは君の心交りを心配している。私もそうだ。君との友情を失いたくないからな。そうそう、君に伝えなければならぬことは、こんなことじゃなかった。ボスの命令だ。今夜十二時キツカリに、このテレビをつけてくれ。チャンネルは、ホラここにかくしてあるスイッチを押

すんだ。秘密の回線につながるようになってる筈だから」

それだけいうと、男はサッサと帰って行ってしまった。残された夫婦は、ただ深い吐息をつくばかりである。

ついさっきの新津との会話まで盗聴されていたとは夢にも気づかなかったことである。こうなっては、もはや逃れられないことを観念するほかはない。おそろしい暗黒の魔手はその見えない触角を十重二十重にめぐらしているではないか。

真夜中になって嚴重にカーテンをめぐらした寝室の中で、夫婦はおそろおそろテレビのスイッチを入れた。その瞬間、二人共、電気に触れたようになってしまった。

飛び込んで来た画像は、鮮明なカラーだった。そして、ただ見る一糸まとわぬ裸女。それは、夢にも忘れられぬ愛娘イーラにまぎれもなかったからである。

「助けてえ。オオ、マミー……」

イーラの悲痛な声も、マイクを通じて、伝わってきた。

日本人の母は、気が狂ったようにテレビにしがみついた。

「イーラちゃん。ああ、なんて目に」

思わず絶句した夫婦は、肩を抱き合って慄えるばかりだった。

イーラは両手を高く吊られていた。テレビカメラはその全身をなめるように映し出していた。あるいはアップに、あるいは遠景に。イーラの爪先は、僅かに床に触れているにすぎなかった。したがって、その体重は全部縛られた両手首にかかることになる。あまりの苦痛に油汗を流しているのがよくわかった。

男の声が喋りはじめた。

「いいか。おまえ達は昼間、新津に会ったとき裏切りを考えていたにちがいない。ひと言でも、われわれのことを洩らしたからイーラはこのようになったのだ。自業自得を悔むがよいだろう。ただし、これはホンの警告にすぎない。これから、若しわれわれに不利益をもたらすような言動に出たらイーラは間違はなく、もっともつと酷い目に会うだろう。いいか、イーラを助けたければ完全に、われわれの秘密を守り通さなければならぬ。このことを忘れさせないために、毎晩、十二時から十分間、テレビを通じてイーラに会わせてやろう。もちろん、ハダカのままだな。ハハ……」

その声は、イーラの両親には悪魔の声のようであった。

画面は、もうとくに消え去っていたけれども、二人は呆然として白いブラウン管を眺めていた。

こうしてイーラの両親達は、ふたたび貝のように固く殻の中へ閉じこもってしまった。もはや、新津が何というかと、役に立ちそうなことを聞き出すことは不可能となってしまうのである。

百合子

目白の高台に鬱蒼とした木立に囲まれた大きな邸がある。戦災にも焼け残ったところだけあって、古めかしい家も少なくないのだがそれだけに新開地には見られない落ちついた町並みだった。

戦後、若冠三十五才で代議士に当選した山本万蔵は、その後トントン拍子に地位を高めて、今や押しも押されもせぬ政界の重鎮であった。戦後の政治家は選挙のたびに瘠せ細って行ったというが、現代の政治家は逆に、選挙のたび毎に肥って行くものらしい。山本は目白台に居を構えてから、次第に周辺の家屋

敷を買収して行った。彼の政治力をもってすれば、道路などをツブしてしまうことさえ易々たるものだった。こうして、二千坪に余る一画が悉く彼の所有に帰した。

周囲に高いコンクリート塀をめぐらした邸は、さながら御殿のようであった。南端が傾斜して遠く早稲田から新宿が望める広い庭には、山あり池あり、善美をこらした趣向のたずまいの中に、突き出したように白い洋館があった。山本が家族と起居を共にしているところである。

山本の一人娘、百合子は絶世の美人として有名だった。

まだやっと成人式を済ませたばかりだが、上脊のある肢体は成熟した落ち着きを示していた。和服がよく似合い、むしろ着瘠せして見えた。口さがない政界雀が、トンビが鷹を生んだ等とはやす程、万事にひかえ目なのも好感を持たれていた。山本の娘となれば、婦人雑誌や週刊誌などの口絵に、いくらでもリクエストがかかって来たけれども、一度も承諾したことはなかった。それでいて、父が絶対に必要なとする外交官相手のレセプション等には進んで出席して、美事な英仏語と完璧なマナーで父の面目を立ててやるのだった。山

本にしたところが、掌中の玉のようなものでいやが上にも愛しいつくしんで、世間の荒い波風から彼女を守ってやろうと努めていた。

二階中央のベランダに面した二部屋が百合子のお城だった。一つはルイ王朝風の調度で飾った純白の部屋で、彼女はこれを寝室にしていた。もちろん、バスルームがこれに接続している。もう一つは、思い切ったデザインのモダンなりビングルームで、彼女はここを友人を招いたり、ひとりでピアノを弾いたりする憩いの場所としていた。

綺麗ずきの彼女は、日に二回は入浴する習慣があった。そして、今日も起き抜けに浴室にとび込んで、大理石を貼りつめたお気に入りの浴槽に、のびのびとした肢体を浸しているのだった。

彼女にナルシズムがあったかどうかは別にして、彼女がわれとわが肉体を愛することは決してうぬぼれとは言えなかった。これ程、均斉のとれた裸身は、この世にあるまいと思われる程だった。外界から彼女を守るクリスタルガラスの厚い積み壁は、それでいて燦々たる朝日を惜しみなくとり入れていた。健康で明るい浴室の中に、百合子の肌は、ひとき

わ輝くばかりだった。流れるような、それでいて引きしまった肩から胸の線が美しい乳房の隆起に強められた下から、ほっそりしたウエストが再び見事な腰のラインに連って行く優美な二つの曲線を形ど

って、さながら名曲のリズムを肉身に具現しているかのようであった。そして日本人ばなれのした豊かな太腿が、キッチリとしまったふくらはぎに続いている。

——私の身体を自分のものにする男性は、どんな方だろうか。——

そう思っただけで、何か横しまな想念に駆られたように真赤になるのだった。そのくせ自分の美しさを、正確に評価出来る彼女だった。又、実際そうするだけの客観的な価値に恵まれてもいたといっているであろう。

湯舟から立ち上ると、水玉が滝のように流



れた。キメの細かい、程よく脂肪の乗った肌は水をハジキかえすかのようである。そしてその上脊から後姿は、例のエミー司令、星恵美子にそっくりだった。こうしている間にも百合子にねらいをつけた有明の魔手は刻々に迫りつつあったのである。そんなことを露知らぬ彼女は、ゆっくりとタオルをとりあげた。

「だあれ。お杉さん？」

脱衣所に人影が動いたのを見て、百合子はお手伝いのオバさんの名を呼んだ。

山本の財力をもってしても、お手伝いの不足を解決することは容易ではなかった。しかも彼の広い邸には少なくとも五人の女中と一組の爺や婆やが必要だった。現代では政治好きの書生なんか探すだけでも無駄だったし、又仮りにいたとしても、昔のように下男代りに使うことなど夢にも考えられなくなっていたからである。

そこで中年だが係累がないという、お杉婆さんが住み込みのお手伝いを希望して、選挙区の紹介状を持参して来たとき、山本夫婦は二つ返事で採用することに決めてしまった。ところが、このお杉婆さん、なかなかの喰わせもので、莫大な報酬と引きかえに山本百合子誘拐の手引きをすることになっていたのである。

勿論、有明の組織を気どらせるようなことは何一つ知らされてはいない。お杉婆さんは政界暴力の一つが山本を攻撃する材料にするためだとばかり考えていた。

しかも、お杉婆さんには山本を恨む根拠があった。彼女の死んだ亭主は政治好きで、山本の対立候補に属していた。ある年の選挙で自分の押した候補者が山本に散々叩かれて負け、挙句の果て運動員だった彼は選挙違反で

つかまってしまう、その後、病み込み、死んでしまったのである。病死だったけれど、お杉婆さんは山本の故だと思ひ込んで、山本を逆恨みしていた。それで、手段がどうあろうとも、山本を苦しめることなら道徳的責任を感じない程で、むしろ唯々として有明の片棒をかつぐことになった。とはいっても、必要な最少限しか知らされていなかったことはいうまでもない。お杉婆さんは、この誘拐計画を、政治的背景のある脅迫と考えていた。そして、この脅迫が成功すれば、山本の政治力を押え、逆にこれを利用して司直の追求を逃れ得るものと信じていた。それで、むしろ安んじて悪の戦列に加わったという始末となった。

そんなこととは夢にも知らない百合子は、かえってお杉さんを信じきって、身の廻りの一切を委せきっていた。

脱衣所にあがった百合子を、お杉さんはまぶしいものでも見るように目を細めていた。同性でもあり、しかも信頼する召使いであるお杉婆さんに対して、如何につつましやかな百合子といえども、その華麗な裸身を出し惜しみする理由はなかったからである。ところ

が、後へ回ったお杉さんがしたことは、百合子の脊中をタオルで拭くふりをしながら、いきなり隠し持っていた麻酔布を百合子の顔に押しつけることだった。

老人とは思えない力で抱きしめられて、夢中でもがく百合子の四肢は次第に力を失って行くのだった。そして数秒後には全く意識をなくした彼女は、恥かしい全裸を隠すことも出来ず、長々と脱衣所の絨氈の上に倒れ伏していたのである。

ニヤリと不気味な笑みを浮かべたお杉婆さんは、仰向けになったために、やや扁平に見えるけれど、それだけに尚更、清純さをそそる双の乳房を、しわだらけのあしのうらで踏みつけるのだった。こんなことをされても正体のない百合子は、柔らかいマネキン人形のように全く反応を示さなくなった。それを確かめたお杉婆さんは、そのまま身をひるがえして純白の寝室へ出て行く。厚いカーペットの上に大きなダンボール箱が置いてあった。有名なメーカーのステレオであることが印刷してあった。

お杉婆さんは手早く包装を開いて行く。嚴重な中蓋をとり除くと、固いマホガニーの上板があらわれてきた。ところが、驚くべ

きことに、その上板が徐々に内側から開きはじめたではないか。ステレオの中には人間がしかも全裸の美女がかくれていたのである。お杉婆さんには誰だかわからなかったのだが読者にはこれがエミー司令こと星恵美子であることが一目でわかったに違いない。

さて、全裸の星恵美子は、素早く浴室からこれも素裸のままの百合子を抱きあげてくると、細紐で手足をくくり、ハンケチで猿ぐつわをかました上で、今まで自分が入っていたステレオの中に入れてしまった。そして、お杉婆さんと一緒に元通り荷造りをしてしまうやがて今まで百合子がつけていた下着からネグリジェ、ガウンまで着込んでしまうと、どういうメーカーシップをしたのであろうか、遠目では百合子と寸分ちがわなない身代りが出来上って行ったのである。

有明の一味の変装した電気店の男が呼び込まれて、折角配達して貰ったのだけれど、お嬢様の気に入らないから持ち帰るようという指図を受けて、百合子の入ったダンボール箱は、家人がそれと気づかない間に山本家を出て行ってしまった。

丁度、山本夫婦は揃ってヨーロッパの某国

を訪問中だったので、百合子一人が、この広い屋敷のあるじだった。星の紛したスタンドインの百合子は、お杉婆さんしか近づけなかったもので、その日一日は召使い達に気づかれずに終ってしまった。夕方になると、気分が悪いからというので早々に床に入り、友人の訪問も、ことわってしまう。

さて翌日、ミニスカートの外出着にきかえて、大きなトンボ眼鏡をかけた姿は、見馴れた者でも百合子でないと見破ることが出来ないう程だった。前にも触れたように、変装しなくても星は百合子と体つきがよく似ていたからである。

わざと家人に見えるように歩き廻ってから愛用のフィアットに乗って一人で山本家を出て行く。これが百合子の最後の姿になるなどとは考えもしない召使い達は、丁寧はこの美しい女主人を目送したことだった。

彼女の運転する車は雑司が谷から高速道路に乗って真っ直に羽田に向かった。彼女のスポーツカーは日本でも数少ない種類だったので、料金係はそれをよく覚えていて後に証言した。

星恵美子が化けた山本百合子は、堂々と実名で羽田からホンコン行きのBOAC機に乗

り込んでしまったのである。彼女は山本家の金庫の中に秘蔵されてあった莫大な宝石も、ついでに失敬してきていた。

最近では、海外旅行が盛んになるにつれてパスポートの発行業務も極めて簡略化されてきた。誰かの戸籍抄本を手に入れて（戸籍抄本は他人でも手数料を払えば発行される）年齢性別さえ同じなら自分の写真を貼付して自ら出頭すれば自動的にパスポートを手に入れることが出来る。しかも戸籍抄本の本人は、全くそれを知らないのである。

こんな方法で星は百合子のパスポートを予め手に入れていた。香港は自由港だからビザも不要である。身代り百合子は随所に目撃者を残しながらホンコンに行き、そこで蒸発してしまうことになっていた。

あきらかに誘拐事件が発生していながら、表面では誘拐の事実は何一つ、あからさまにならなかった。急を聞いて帰国した山本夫妻も警察や家人を通じて種々調査した結果、動機不明ではあっても、百合子が自らの意思で突然ホンコンへ渡ったということだけは認めざるを得なかった。あまつさえ、一財産もある程の宝石類を持ち出している。スキヤンダルを恐れる政治家の弱みから、山本はこのこ

とを公表することは出来なかった。それだけに内心では、地団駄を踏みたい程に怒っていた。何としても父母を裏切って無断家出した不心得娘の行方を突きとめたいと思った。それも新聞社などの気づかぬ極秘裡にである。

ひそかに警察庁に連絡がとられた。極秘調査の担当を命ぜられたのは新津謙介だった。事件の概略を聞いただけで新津にはピンとくるものがあつた。今まで彼が調査したり、又身をもって体験してきた数件の事件から、この山本百合子家出事件が、単なる家出ではなく、何か一連の美女失踪事件と関係があるように思われたからであつた。

彼はホンコンへ出発するに先立って山本邸を訪問して、前後の事情を聞こうとした。ところが、かんじんのお杉婆さんは持病の神経痛がひどくなったと言い立てて既にひまをとってしまった。そして遠い九州の故郷に帰ったという。さすがの新津にも、お杉さんがどんな役割りをつとめていたか想像することも出来なかった。こうして、新津は何の得るところもなく、最も人探しのむずかしいホンコンへ出発することになった。

（未完）

記 好 愛 ゴ ム = 白 告 験 体



癖 性 の 私

雄 輝 取 香

私は、だれに打開けることも出来ずに、ひとりで悩み続けて来た性癖を持っています。

しかし奇クを知った今、せめて自分のこのおかしい癖を書いてみれば、少しは気持も楽になるような気がして、一、二の思い出深いことがらを綴ることにしました。

これから書きますことは、まだ奇クを知らぬ、ずっと以前からの、衝動的に行動した私の体験ばかりですが、SとかM、又はFなどという言葉も知らず、まして全国に、自分と同じような性癖のある人達がいることなど考えもしなかっただけに、ひとりで罪悪感に悩みながら、わけのわからぬ魅力にひかれて、つい手を出しては、暗い気持になったものでした。奇クを知ったといっても最近のことですし、私がSだかMだか、あるいはFか、それ以外のなにか別の呼び名の種類に入る人間なのか、知識の乏しい私には知るよしもありませんが、とにかく、無意識に欲しくなったと憶えているのは、小学校へ入った頃だったのです。それがゴムの指サックでした。

私は、父が「大人になったら、何になりたいか」と訊いたのに、「郵便配達」と答えたことを憶えています。家族の者に笑われましたが、私は本気でそう思っていました。

その頃、私が見ていた配達員は、郵便を選り分けるのに指サックを使っていたのです。

滑り止めと、指先の保護のためでしょうが、ゴムで出来たその指サックが、理由もなく私にはとても欲しかったのです。だから、そう答えたのですが、父や母は、大笑いをした後で、きつと「望みの小さいことをいうヤツ」と思ったことでしょう。

ところが、その憧れの指サックを、道路上で拾ったのです。私は、それを発見したときには、カッとなるほど上気したものです。たしか、三年生になっていたと思います。

こわごわ辺りを見廻してから、サッと拾い上げるなり、一目散に駆け出しました。長い間の願望だった指サックが手に入った嬉しさより、こんな貴重なものを拾い取った罪悪感のほうが大きかったようでした。

しかし、もちろん手放す気になるはずはなく、家族の者の眼を恐れながら、便所の中が私の指サックとの戯れの場になりました。

その使い古された指サックは、私のよき友として、あらゆるところに転々として、ゴムの感触をまき散らしてくれました。思いつく限りのもてあそび方をしている内に、知らず知らずに行きついたところは……。きつとこ

想像はつくと思います。まだ性的には何も知らず、まったく無智な子供の頃、自然とそういうことをしていた私。しかも、その時のぞくぞくする気持や、身体中のカッカとするホテリなどは、今でもはつきり思い出せますしそのまま現在でも、事に当っては続いているのです。

それが何よりの楽しみになって何日目か、便所の中の私は「まだ？ お腹でもこわしたのと違う？」という母の声で、とび上るほど驚き、心配そうな母から逃げるように、戯れの途中のままでとび出し、表へ駆け出していたのでした。そしてやみくもに走り廻ってホッと一息つき、そのままにしていた指サックを回収しようとして慌てました。どこかで落ちてしまったらしいのです。もちろん、来た道を探しましたが、とうとう見つけれなかった時の悲しさ。だれにも云えないだけに、そのくやしき、淋しさはひとしおでした。

○

私は三人姉弟の三番目、つまり末っ子で長男です。したがって遊びも、どうしても静かになり、気持までも女性的になっていたらしいのですが、中学二年になった夏休みのことでした。

皆がそれぞれに出掛け、私一人が留守番をする形になったのですが、ほめて貰おうと、掃除を始めたわけです。ハタキを掛けながら少し開いていた押入れの戸を閉めようとしたのですが、何かがつかえている様子でした。開けてみると汚れ物用の籠なのです。姉の物ですが、帰ってからでも洗うつもりだったのでしょうか、下着類が入れてありました。

それを何気なく見ていた私は、その中にアメ色のゴムがのぞいているのを発見して、どきどきしました。無意識に手にとったのが、私の月経帯をつくづく見た最初となったわけです。その頃には、女性の生理について薄々を知ってはいたのですが、いくら姉弟とはいえ、姉達が見せる筈もなく、まして汚れたのを手にするなんてことは、まったく思いもかけなかったことです。

黒メリヤスの裏いっぱいのアメゴム。

私は、カッと顔がホテリました。もう掃除どころのさわぎではなく、ハタキやホーキをおっぼり出して坐りこみました。

ポチポチと無数に付着している汚点を、汚いとも素晴らしいとも感じたわけではなく、ただ私は、そのアメ色をしたゴムに我を忘れてしまったのです。

ヒンヤリとしたゴムの感触を顔一杯に味わい、プーンと鼻をつく匂いを吸いこんだ時の気持は、頭の中では忘れられないのですが、どう表現したらよいのかわかりません。とにかくそれは、指サックなどとはくらべものにならない大きな感激でした。

私は飽くことを知らずに、そのアメゴムをもてあそびました。そして気がついたときには、自分の下着と交替にその月経帯を穿きこんで、ゴロゴロ転げ廻ったり、屈伸運動のようなことをしていたのです。

その最中には、どんな事を考えていたのか少しも憶えていませんが、ただ「女はこんな素晴らしいものが穿けるからいい」とつくづく羨ましく思ったことだけはたしかで、玄関のベルに大慌てするまで、うっとりする気分です、夢心地で過ごしていたのです。

○

そのことがあってからは、黒い月経帯のとが頭から離れなくなり、これは今でも続いています。月経帯そのものか、それについているゴムが対象なのかは、今ははっきりしません。しかし、あのひんやりした、吸いつくようなゴムの感触を思うだけで顔が上気しますから、やはりゴム自体が忘れられないのだ

ろうと思います。だが、それと同時に、ゴム自体の匂いの他に、あの時に吸いこんだ強烈な匂いが、月経帯に執着させる原因だろうとも考えています。

私は現在、会社の寮生活をしていますが、押入れの行李の底深くには、ピンク・サックス、総ゴム製のバンドの幾つかが忍んでいます。ただし、決して不正にしっけいしてきた品物ではありません。皆、顔から火の出そうなのをがまんして、薬局で買った新しいものばかりなのです。

本当の気持は、ま新しいこれらの品より、使い古しの、汚れ放しのものが欲しいのですが、方法がないのでこらえているのです。せめて洗濯してあっても古いものを……と思いがたぶんどおりに通りすがりの家の物干しを羨ましく眺めたことのあるのも事実です。しかし、私の気の小ささでは手出しが出来ず、幸か不幸か、新品で間に合わせているのが現状なのです。

気が小さいばかりに、他人の家の干し場に出ないのは社会的に幸いといえるでしょうが、自分のお金で買うのにも一苦労も二苦労もしなければならぬには弱ります。

薬局をのぞいてみて、客が一人でもいれば

当然、駄目。店員が二人以上いる店は駄目。

一人であっても、男であれば駄目。私はお金を握ってウロウロしなければなりません。女の人が一人で店にいる薬局を探すのです。しかし、男の店員より、女の方が買いやすく思うのはどういう訳でしょう。自分のことながら、私にもわからない気持です。

いま持っているバンドの一つをかう時もそうでした。たしか六、七軒も廻った後で、ようやく女店員一人きりの薬局に行き当たったのです。少し若すぎる娘さんでした。私は中年の女の人のほうが云いやすいのですが、男の店員よりはマシでした。

おそろおそろ店へ入り、小さな声で「あのう……」と云うと、たいていの薬局では、何か買いにくい品物だなと察して、話しやすいように仕向けてくれます。中年の女性ならとくにそうです。そして「……婦人用のバンドを……」と云うと、黙って品物を出してくれるので、その中の気に入ったのを指差すだけでいいのです。私はたいていの品物はそうして買ったものばかりです。ところが、その若い娘さんの時には様子が違いました。

「バンドって、生理バンドですか？」と、わざわざ念を押すのです。私は、洋品店でもな

い限り、バンドといえば通用するはずだと思いますが、まっかになって「そうです」と答えなければならぬ恥ずかしさ。その上、品物も見せずに「どんなのがいいでしょう？」というのですから、若い女は困ります。逃げ出したいのを我慢して買いはしましたが、それ以後、女が一人でも、中年の人でないと駄目、という項目が加わった訳です。

月経帯の呼名にはいろいろあって、メンスバンド、生理帯、生理バンド、月経バンド等々なのですが、私の好きな呼名はやはり「月経帯」です。いちばん古風で田舎くさい感じなのですが……。しかし、買うときだけは、どうしても「月経帯を」とは、いえず、ただ「バンド」といいます。それも間違いで問い返えされないように「婦人」という言葉をつけ加えるようにしています。

○

ゴムの魅力に溺れることは、月経帯を手に入れてからは比較的不自由なしに出来るようになりましたが、例の汚れた月経帯の匂いは嗅ぐことは出来ません。ゴムと戯れることである程度の欲求は満たせますが時には、あの姉の月経帯から受けた感激が思い出されて、狂おしくなることがあったのです。しかし、

これは買う訳にもいかず、無理に自分を押えつけるより方法がなかったのですが、フとした機会からある発見をしてこどおりする気持ちになりました。それは、ある小さな喫茶店での発見でした。トイレです。

何気なく入ったそのトイレが男女共用でプーンと臭う特有の臭いが、私に、ありありと姉の月経帯を思い出させてくれました。

私はその臭いの出所を眼で探しました。隅に置いてあるホローびきの容器です。これだ、と思った時には、もう私の手は容器のフタに掛かっていました。

カーツとのぼせ上っているのを意識しながら、素早く中の物をポケットへ……。手がブルブル震えて、フタをしようとする“カチカチ”と容器がヤケに音を立てます。静かにしろ！音を立てるなッ！と自分の手を心の中で叱りつけるのですが、そうしようと思えば思うほど、震えは激しくなるばかり。

実際はそれほど大きくはないのでしょうか、けれど、狭いコンクリートの箱みたいな中で、異常に神経をとがらせている私には、僅かな響きもバカデッカイ音響に聞こえ、思わず首を縮めてしまい、汗タラタラの奮闘でした。そうそうに店をとり出して寮に帰り、また

すぐ寮のトイレに閉じこもって、苦戦の戦果を上げ、十分に味わいました。ただし、ゴムに附着した汚れという訳にはゆかず、綿とチリ紙の少々だったので、本当の匂いだけだったのが残念でした。

それ以後、女性の出入りする場所のトイレをアタックしようと思い始めましたが、デパートやホテルが一番理想的とわかっていながら、レディ用とメンズ用に完全区別されているところには、持ち前の気の小ささが作用してとても度胸がありません。

それでも、やはりそういう眼で探していると、チャンスはあるもので、比較的人眼を避けての集収も出来ました。私の場合は退社間際のビルのトイレ、最初に発見した喫茶店、病院などでの収獲が主で、理想の月経帯は無理と諦めてはいますが、カット綿、セロポンのようなものや、ストッキング、ハンカチ、着替えた？と思われるパンティなどは手に入れることが出来ました。

私は、これらの収獲物の中では、ポツテリした厚ぼたひ感じのカット綿に魅惑されて、色々とその汚れぐあいから、それを捨てて行った女性を想像することを覚えました。ゴムの感触を得られないと、こういうことに代り

を求める心理が私にあるのかも知れません。そして、それらをマスクのガーゼ代りにし、口や鼻を覆って街を歩き廻ったり、あるときは干切って鼻孔に入れ、いかにも鼻血の手当てをしているように装って歩きます。

外見ではわからないけれど、日によってはそれを“痔バンド”に挟みこんで締めこみ、その上から月経帯を着けて外出することもありますが、やはりドキドキのし通しです。

○

こまかい事を書けば限りなくありますが、どれもこれも大同小異で、だいたい以上の事柄をくり返しながら過ぎて来たのが私の性癖の発作？です。これからも、似たようなことを求めなければ納まらないような予感がしますが、最近しきりに感じられ始めた変化は、それらのことを他人の手によって、それも女性の手によって強制的にさせられたいと思うことです。

しかし、現在のところでは、ゴムのあの特有の臭いと触感、そして、月経帯の生々しい汚れを求める気持の方が強く、女性の強制があっても、この条件が揃わないことには耐えられないような気もするのです。

(おわり)

S Mカメラ・ハント 長井葉津子の巻

娘十八素肌が疼く

辻村 隆



昨年の初春勿々、競友山本章氏が、長井葉津子をルポしたときいた時、又してもしてやられたかと、私は先んじられて舌打ちしたのを憶えている。箕田氏から一応、話はあつ

を逸早く「この女と」の姐上にのせたのである（昭和四十三年五月号「この女と」参照）。

稚ない文学少女？ 長井葉津子は、その前

たのだが、恰度その頃上京して谷ナオミや辰巳典子らとプレイした直後のこととて、さして食指も動かず、いずれ又そのうちにということ電話をきいたのだが、一旦こんなウマイ話をきいたら、とことんまで頑張った狙った獲物は絶対逃がさないと山本章の執心さが、彼女を逸早く「この女と」の姐上にのせたのである（昭和四十三年五月号「この女と」参照）。

月の四月号に「白い肌のアザ」という告白を大胆にも発表していて、私も彼女に対して些かの興味を持ったことは事実であった。今改めてそれを読み返してみると、その内容は単純なもので、透きとおるように白い自分の肌をつねられると、それがキスマークのように肌を赤くそめ、それが次第に黒ずんだアザに変化していった、白い肌についてアザに、異様なまでの執着をもつようになったことや、悪友にアザをみつけれられてからは『着せ替え』と称して、服を脱がされてアザを調べられたり、つけられたりすることの告白であった。同性の着せ替え人形では物足りなくなった彼

女は、秘かに縛られる願望を仄めかして、この短文の告白は終っている。

洋裁学校に通学中だから、恐らく十七、八才ぐらいの、少女めいた無邪気な可愛い娘さんであることは文中からも察せられたが、それが山本一章の「この女と」で、強烈な緊縛をいきなり甘受しているのをフォトでみて、あれッと一驚したものである。

これならイケると、忽ち物欲しくなって、早速にもその後塵を拝すべく、箕田氏に連絡した処、奇妙な事件が、彼のルポしたあとに持上っていたのであった。

今でこそトンと音沙汰のない彼であるが、その頃山本一章とはしばしば会合し、お互いの情報の交換もしていて、長井葉津子をルポした一件も、彼の口からじきじき聞いて、彼のルポが、殆ど在りの儘を、余りにも正直すぎるぐらいに書いているのを、たしなめたくらいであった。だから彼と彼女は当然、気持ちよく出会って、プレイして、別れている筈であった。

それが彼のプレイの十数日後、突然長井葉津子の父親と称する人から、箕田氏に甚だ穏やかならぬ電話がかかってきたのである。モデルになった女性の肉親から電話がかか

るなんて珍事は、以前、梨花悠紀子の母親から箕田氏宛に一度かかったぐらいで、それが父親からの電話となると、これは未だかつて類例のないことである。

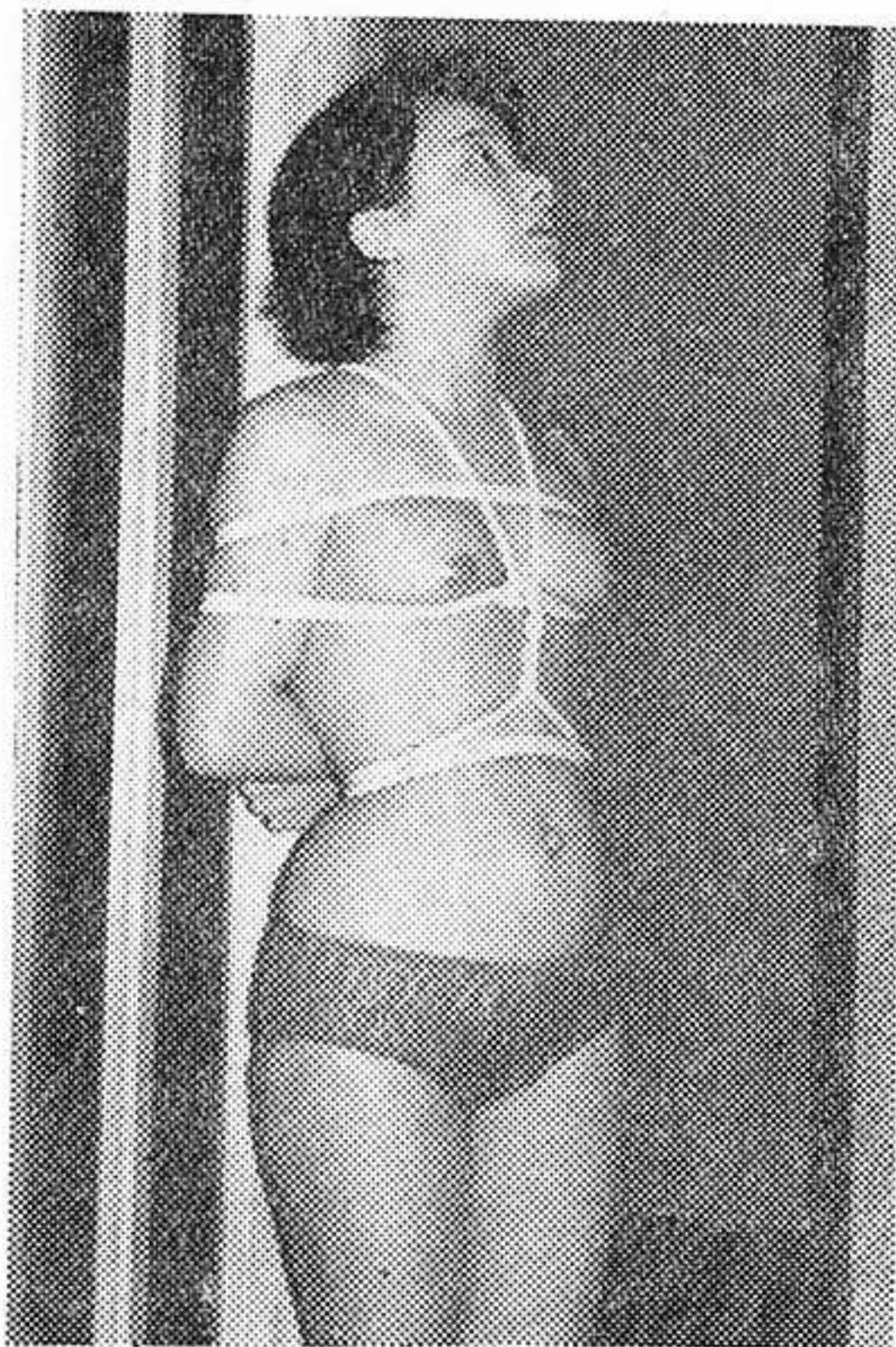
父親氏の言葉によると、娘の葉津子が、山本一章氏に無理矢理、強烈な緊縛をされ、数々の羞かしめを受けた挙句犯され、無茶苦茶にされたという、憤りの詰問であった。

物に動ぜぬ箕田氏も流石に驚いて、紹介した手前もあるから、直ちに山本一章にかくかくしかじか如何なりやと電話する。もっと仰天したのは山本一章自身。緊縛してフォトを撮った事実はあるても、そのようなハレンチ行為は天地神明に誓ってないと、彼自身面喰らってしまつて、一体どうなったのやらと唯々呆然、啞然としてビククリする始末――。

長井葉津子が泣いて父に訴えた言葉が事実か、山本一章の言が真実か、何しろ密室の二人切りでのプレイだけに、どちらを信じてよいやら、箕田氏も腑に落ちぬ俚に、疑問符として数日

経った頃、再び長井父親氏からの電話があつて、今度は深く浅慮を詫びられて、すべては娘の被害妄想による虚言症状であつたから、山本氏によりしくお伝えしてくれと謝つてこられた。

実は私にも、これによく似た苦い経験があつて、今から十数年前、未だ宮仕えの会社勤めをしていた頃、配下の事務員にポチャポチャした可愛らしい娘がいて、或る日、何の気なく冗談に、美人だし、そんないい体をしているのなら、モデルやった方が事務員なんかより、ずっと収入があるよと、昼休みに喋つたら、それをどうとつたのか、件の娘、家へ





帰って父親に、私の話を針小棒大に告げて、毎日毎日、上役の男がいやらしいこと言っ

て色目を使い、果てはヌードモデルかストリッパーになれば、なれとうるさくいつてきかないと話したものだから、娘の父親カンカンに怒って会社に怒鳴りこみ、そんないやらしい人間の下で、可愛い娘を働かすわけにいかん、その男やめさせねば、娘をやめさせると談じ込まれ、挙句の果ては日頃助平人間な私のこと、娘の言葉を部長が信用して、遂々詫状一札書かされたいやな思ひ出があるが、これも虚言症の一種で、娘はその後、社内の若い男性AとBに、毎日いやらしいこといわれてオッパイ撫でられた、オシリ触られたと父親

に喋り、その都度、土建屋の現場監督をしているオヤジが怒鳴り込んで来て、流石に部長もヘンに思って調査したら、AもBも至極マジメな青年で、左様な事実更になしという結果が出て半年目にやっと私の潔白も証明されたことがあった。内潜する願望が、妄想となつてこんな結果を生んだのであろうが、長井葉津子の場合、この娘にも一つ輪をかけた一例である。

一番感情の動き易い年頃で、しかも生まれて初めての緊縛のプレイをしたことが、長井葉津子の脳裡に深々と刻み込まれ、それが偶々生理時期の時、一種の被害妄想となつて、虚言症を生んだのであろうか。会社の事務員も、生理中になると被害妄想を起こしたらしいが、フロイドの分析にも、こうした事例はかなり報告されていたのであった。

しかし、当の山本一章こそとんだ災難で、あの紳士の彼が、そんなことをする筈がないと知りつつも、やはり半信半疑、或いはという気も持ったことは事実であった。それかあ

らぬか、彼はそれ以来すっかり消極的になり遂に奇クから姿を消してしまつたのであるがこの一件は彼にとって余程人間不信のショックであつたらしかった。

そんな奇妙な事件で、私の意気込みも、すっかり尻すぼみに終つてしまい、君子危うきに近寄らずの例えで、彼ほど紳士でない私もし又ハントして、彼女からどんなこといわれるかも知れぬと、敬遠したのが、いつしかそのままになつてしまつていた。

長井葉津子から編集部に電話があり、まるでそんなことは他人事のようにケロッとしてモデルになりたいと要請してきて、二の足を踏んだカメラマンも、怖々撮つて別段何の異常もなく、分譲フォトにもかなり出廻っているが、その後の彼女、緊縛に対して成長したのか、そんな事は一切なかったそうである。

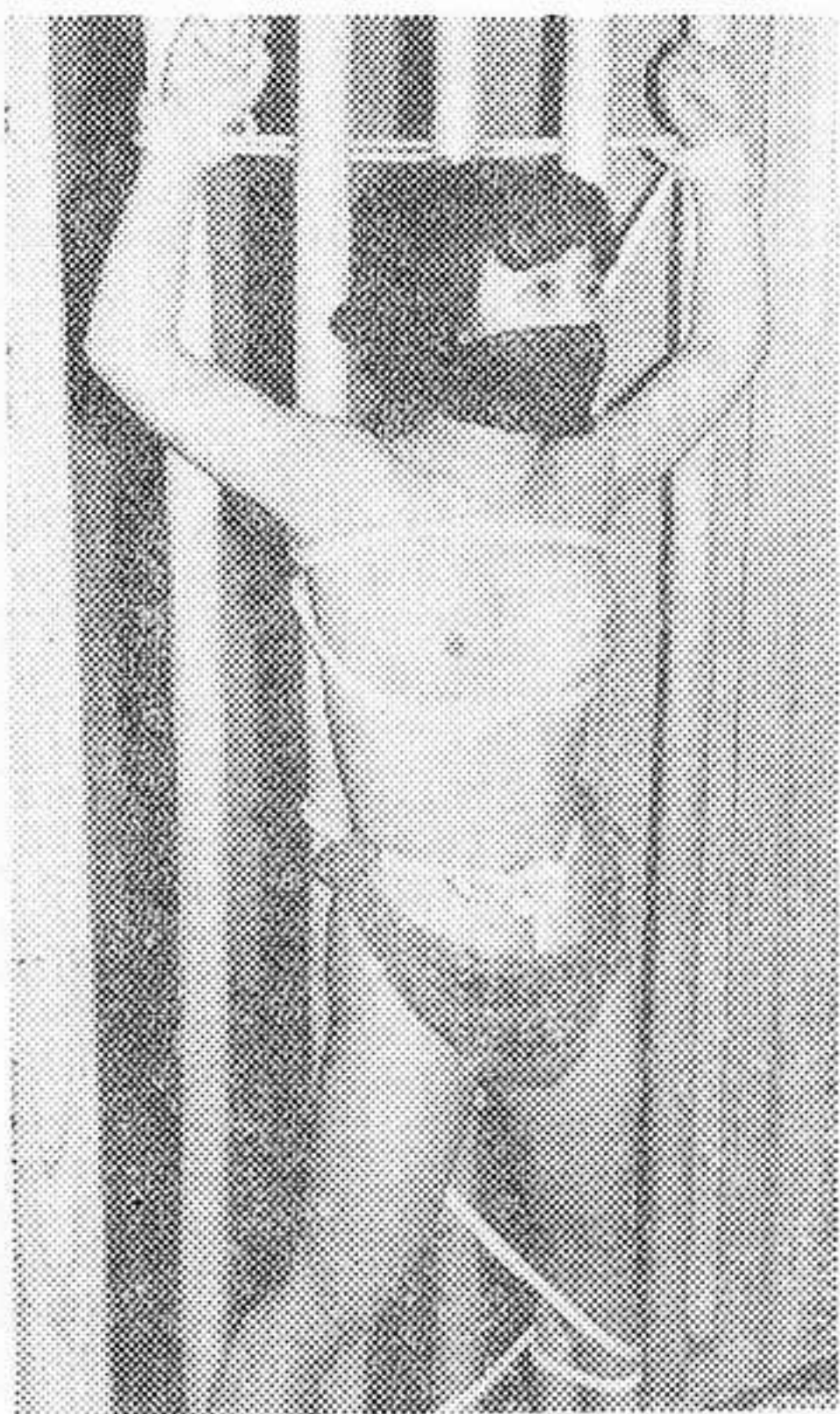
それが機縁で、彼女の緊縛モデルは父親公認となつて、世にも可笑しき父親附添いであるという、緊縛モデル開びやく以来の珍事になつてしまつた。しかし、それが縁で父親はすっかり奇クファンになつたというから、この親娘、どこか変わった異色的存在であつた。

既に彼女のことは意識から外れて一年半。もうすっかり忘れていた今になつて、奇しく

も、長井葉津子とのハント話が持ち上ろうとは、正に神ならぬ身の知る由もない、悪戯好きのキューピットの、なせる仕業に違いなかった。

× × ×

九月の声をきくと、日中の日盛りは、かなり暑くても、朝夕めっきり涼しさをまして、幾分は凌ぎ易くなってくる。夏バテで、ここ数日ゴロゴロしていた私宅へ、いきなり前触れもなく箕田氏が、一人の少女をつれてヒョッコリやって来た。この九月中旬に結婚する長女への結婚祝いも兼ねてであったが、いきなりの御入来に面喰らっていると、



「この子、知ってるやろ。分らないかい？」

とニヤニヤし乍ら、私と娘を七三にみくらべている。じっと娘の顔をみつめていると、何処かで見たような娘だと思いが、咄嗟には名前も思い出せない。フォトでみかけたようにも思うが、何しろ数が多いから、名前をド忘れしてしまうことがよくあって、自分でハントして、自分で名付けておきながら、時にはその女性の名前がどうしても出てこないこともあるくらい頭が硬化しているから、

「さあネ、たしか何処かでみた覚えはあるんだが……」

と頼りない。

「去年あんたがえらい御執心やった、長井葉津子やがな」

「ああ、この子が……」

改めてシゲシゲと娘を見直すと、彼女は恥かしそうにペコリとお辞儀をした。

「実は外でもないんやけどね、この子が八月はじめてろからドライブ連れてってくれていってきかないんだ。私もこの処、忙しいしあんたならどうかと思ってね。それにこの子も、辻村

隆ならよく本で知ってるから、いっぺん顔みたいにいよるし、それで今日一緒につれてきたんやけど、どやあかんやろか」

「そりゃ構わんけど、私の車は箕田はんにくらべて大分おちるけど、それでもいいんやったら……。それで何処へドライブするの？」

「どこでもいいんだって……走ってさえいたら、ご機嫌や。なあ、ハツコさん」

「あたい、どうせ連れていってもらえるんやったら、東名走って伊豆か箱根、ええなあと思てるねんやし。信州かてええけど、四国でもかめへんわ」と、まあ虫のいいこと。

「そんな遠いところばかり言うて、それやったら泊らんことにはゆかれへんで」

箕田氏やあきれ顔でハツコをみると、ケロリとして、

「あたい、お父ちゃんに許可もろたら、どこへ行っても構へんねん。ドライブ連れてってほしいわ」

と、何ともあけすけな娘である。箕田氏も大分この手で手古摺っているらしい。よくいうと天真爛漫、無邪気そのもの。悪くいうなら、少しイカれているんと違うんかいな。

「いくら辻村さんが物好きで親切でも、そら一寸遠過ぎるわ。それに、奥さんにも悪いし

な。まあ、せめて遠出にしても、一泊ぐらいの所やないと無理やで」

私は箕田氏と長井葉津子のやりとりを、苦笑しながら聞いていた。彼女は、まるで箕田氏を人の好いオジサン扱いである。彼等の間に、長井氏という父親の介在しているのが、安心感を伴った親しさをもたらしたのであるうか。

「どや、どないする？」

箕田氏は私にきく。

「そやな、一日ぐらいなら走ってもええが、一泊となると、ちよっと女房がこわい」

「そらそうやろな。何なら私も一緒ということにしようか」

「それしか、テ（手段）がないな」

悪計きまって、ひたいを寄せて行先の相談——。声をひそめて、

「あの子、どの程度までいけるの？」

「割合辛抱強うて、縛りの方は大抵ならO・Kや。セックスの方はあかんで、親つきやからうるさい。私もその方はノータッチ」

「バイブなら？」

「使うたことないけど、バイブで妊娠したなんて騒がれたらコトやで。兎も角、精神年令はまだ子供や。幼稚なもんで、全然、何も知りやらん。そのくせ、縛りや裸になるのは平気という変わった子や。あの子の裸、じっくりとみてみい。ギョツと驚くで」

箕田氏の謎めいた言葉、一体何やろ。これはハツコさん、おトイレへ立った間の、彼女の概念である。

「伊勢から鳥羽へ走って、奥志摩巡りあたりでどうやろ。浜島で泊ってプレイという段取り——」

「ええわあ、あたい、いっぺん志摩の方へ行きたかってん。箕田さんも一緒にいきはった

らええのに」

シンから嬉しそうな顔で、私と彼を等分に見る。

「娘さんの結婚式も近いというのに、無理いうてすまんな」

箕田氏、長井葉津子を紹介するため連れてきてくれて、お膳立てまでした上、恐縮している。すまん——というのは、むしろ私の方であるのに。

彼女は昨年の三月、洋裁学校を終了して、或る洋裁店へ就職したが、甘えん坊のややむら気な性質が、勤めの辛抱ようせずに半年足らずでやめてしまい、現在は家事の手伝いという名目で、何となくブラブラしているらしい。独り娘だけに両親が甘いのであろうか。

それだけに、勤めを持っている女性のように、曜日にこだわる必要のないのが気楽であった。金が目当てのモデルでもなし、ほんの小遣程度やるだけでいいのも、財布の負担を軽くした。

私は三日後の木曜日を選んで、少し早いが朝の八時に出発するようハツコに告げた。
「あたい寝坊やけど、よう起きるやろか」
「来なければ放って帰るよ」
「ちよっとぐらい遅れても待ってて……」



気憊な生活で、朝起きに自信ないらしい。午前八時といえば、勤人は皆出勤する時間だというのに――。

途中あちこちに立寄って、浜島泊りなら、これくらいに出ないと、一日の行程では無理であった。

家内がビールとつまみを持って、応接間に入ってくる。嘘のつけぬ箕田氏、無邪気な長井葉津子が、何か余計なこと喋り出さないかとヒヤヒヤしながら、家内を攔まえて、しきりに一泊旅行の説明に汗だくなのが気の毒であった。

単なるハントのドライブである。女房よ！この程度のウソ許し給え――。

× × ×

約束の八時を過ぎること二十分。眠そうな顔で、やっと待合せの場所に現われた長井葉津子を押込むようにのせて、私のコルトは予定通り西名阪道路へと向かった。市内は出勤時間と重なってかなり混雑したが、有料道路に入るとグンとスピードが出る。天理ゲートの終点から、名阪は国道に変わって、かなり昇りカーブがつづく。

嫁入り前の娘達より遙かに若い彼女と二人きりでは、まるで親娘のような感懷で、もひ

とつピンとこない。年令の断層をしみじみ感じるドライブであった。

長井葉津子は私をいいオジサンぐらいにしか考えていないようであった。私の名を呼ぶのに、彼女は勝手に自分できめてしまった。

「えね、辻村さんって呼んだら、何だか他人行儀やし、オジサンて呼ぶのも可哀想やからいっそ隆（タカシ）さんて呼びましようか」「どうでもいいけど、隆さんはおかしいな」くすぐったい思いで応えると、ケロリとした顔で、

「そやかて、たかっさんて、ええわ。ごっつう若い感じで……あたいのこともハツコって呼んで」

この甘ったれ娘は、私の思惑ものかわ、どんどん勝手に入り込んでくる。沢山の女性をハントしたけれど、隆さんなんて呼ばれるのは始めてで、まるで他人ごとみたいだが、彼女それが気に入ったのなら、それもよからう。

軽くファンデーションで化粧し、唇の紅の赤いのが、ハツコの顔立ちをくっきりさせているが、若さのシンボルのニキビが多い。花なら蕾の思春期である。ドライブだというので、ノースリーブの、派手な大柄のサイケ調

のブラウスに、腿のあたりまでしかない、股引に似た豎縞のバミューダーをはいて、いかにもスポーティな軽装である。提げてきた正方形の、嵩だかいスエーデンバスケットには何が入っているのだろうか。

平日だけに国道の車の往来は少なく、かなりのスピードで飛ばせるのがラクであった。

上野市のドライブインで小憩すると、ここを少し過ぎた中瀬というインターチェンジで名阪国道を出て、津市へ抜ける長野峠越えの道に入る。昔、荒木又右エ門が仇討のため、上野の鍵屋の辻へ向かうとき、この街道を通ってきたという、伊賀越道中双六で名高い。

僅かの地道を残して、殆ど舗道が完成していて、青山高原や榊原温泉へは、これが最短の近道でもあった。ゆきかう車も殆どなく、偶に三重ナンバーのダンプや小型バンが擦れ違う程度であった。

長井葉津子は如何にも愉しげで、バスケットからチョコレートを取り出しては、私にも奨めながら、移り変わるよもの景色をみ渡して、軽いハミングで「フランチーヌの場合」のメロデーなど口吟んでいる。

「オジサーン、やなかった、たかっさん……」馴れてへんので呼びにくいなあ。やっぱしオ

ジサンでええでしょ」

独りできめておいて、又勝手に変えて、天衣無縫のこの娘に、私は正面をみつめながらどうでもいいがと、うなづく。

「オジサンは、女の人くくるのが好きやて、箕田さんいうてたけど本当？」

「ああ好きだよ」

「どうして？」

「どうしてって……それが趣味かもしれないね」

「ヘンなシュミ」

「ハツコも縛られたいんだろ。いつかそんなこと書いていたじゃないか」

「あれは小説——」

「『白い肌のアザ』って、あれが小説かい」

「今もってスゴイの書いてるとこやの。今度会った時、読ましたげましょうか」

「ああ、是非読みたいね」

「今度のは面白いんよ。あたいが女の友達五人に、無理矢理、山の中へ連れ込まれて、松の太木にハダカで吊るされて、いろいろ虐められるの」

「それから……」

「友達が皆帰ってしまったって、あたい独り松の木に吊り下げられた後、おいおい泣いてたら

二人のハイキングの青年が通りかかって、面白がって、もっともっとあたいを虐めるの」

「どんなことをして虐めるんだい？」

「小枝をムチにして、あたいのハダカを引っぱたいたり、ブランコのようにユラユラ揺り動かしたり、それから」

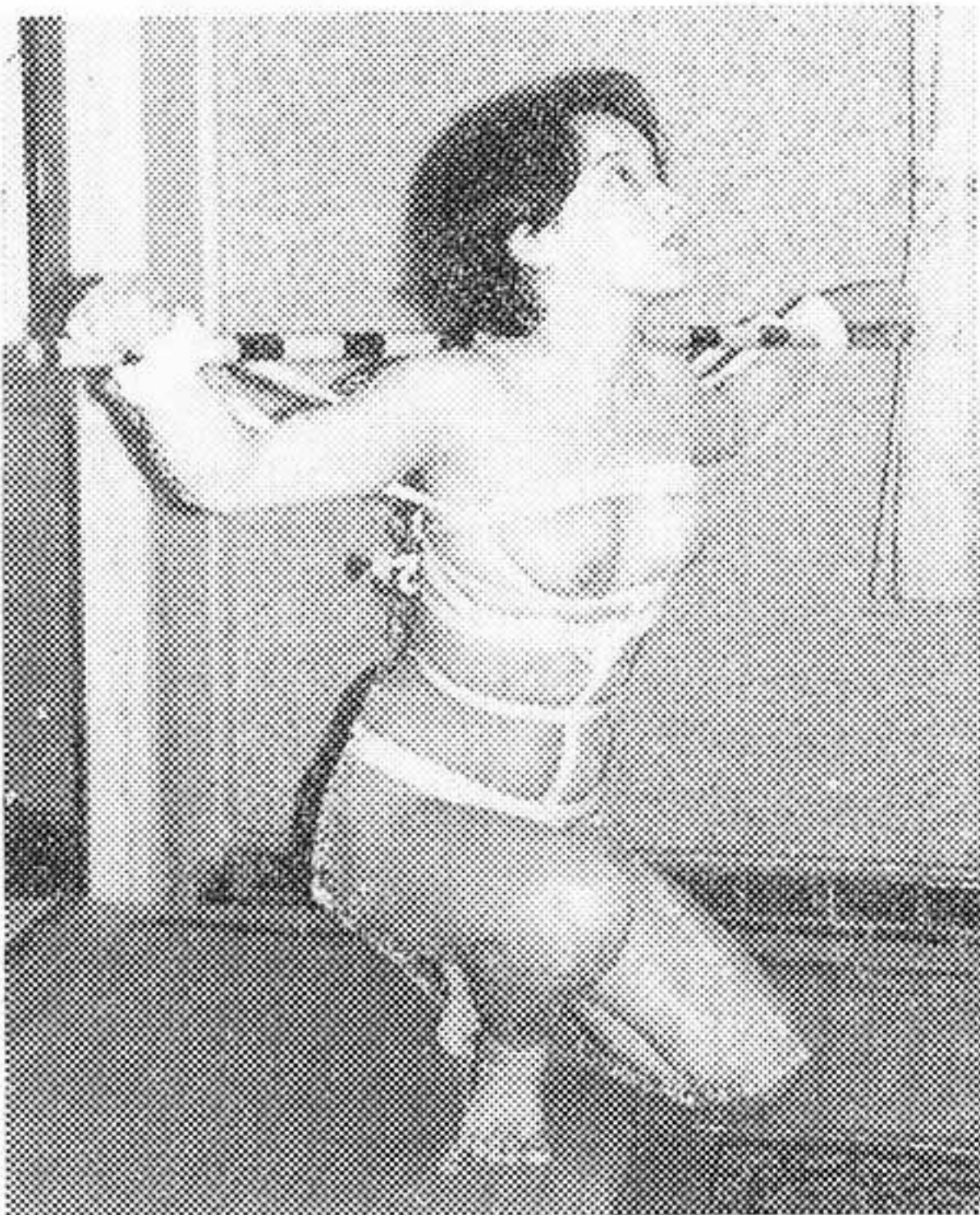
「それから……」

「あたいが二人の青年にゴーカーンされかかってるところへ、あたいの父ちゃんが心配してかけつけてきて、青年をやっつけるの」

「父ちゃんの登場か。ハツコ恥かしくない？父ちゃんにハダカで縛られた姿みられて」

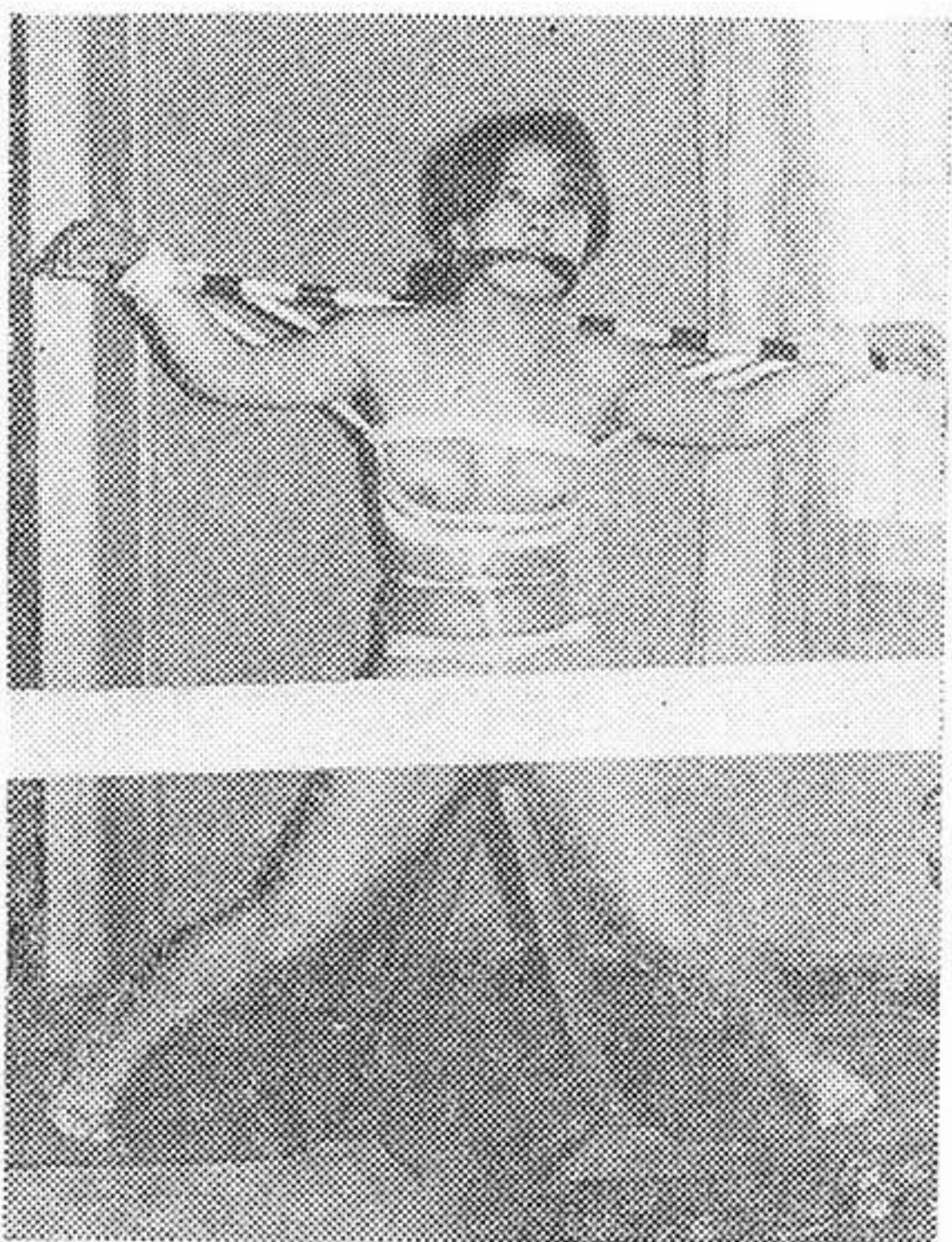
「そうかて、前に編集部の人とシャシンとった時も、父ちゃんが一緒にについていて、あたいをハダカにして父ちゃんが縛ったんよ。父ちゃんにくくられるのが、一番安心やわ。そうと違う？」

そのことは確か箕田氏にもきいていて、私は父が娘を縛る異常愛に驚嘆したが、ハツコ自身それを平気で口にしており、幻想の世界の、他愛ない小説にま



で、肉親の父を登場させる心理は、何とも理解しにくかった。まして、十八才の少女めいたハツコが、ゴーカーンというような、忌避すべき言葉を、案外平気で口にするところに、彼女の家庭の、妖しい乱れを感じるのであった。

ハツコのこの小説にするという言葉の中にも、はっきり被害の願望が現われている。こんなこと許り考えているから、いつしかそれが現実とゴツチャになって、山本一章の時のような妄想を生んだのかも知れない。それだ



けに、うっかり触れて刺激させたら、妄想が妄想を呼んで、どう発展するか分からぬ危険を体いっぱいにはらんでいるかにすら思えるのであった。

車は長野峠の曲折にかかっている。

「あたい、こんな人通りのない山の中で、いきなり車から引きずりおろされて、ハダカで縛られ車で引っ張られたら、どんな気持や思たことあんの。オジサン、そんなことやってみたいと思わない？」

うっとり夢みるような瞳で、こんな空想を喋り出した時、幸か不幸か、車が二台つづ

いて前方より現われたので、ハツコの空想はあえなく現実に戻る言葉になった。

「せやけど……矢ッ張り車が通るから、こんなこと無理かもしれへんわ」

数々の被虐の夢を抱く若い娘と二人、こんな他愛のないお喋りを交し乍ら、山腹の道を走るのは楽しかった。

榊原温泉との分岐点を過ぎると、目に見えて車が多くなり出し、津市はもう間近であった。

津から松阪——そして伊勢へ。

外宮前近くで車をとめ、交通公社で浜島の旅館を予約して再び走る。平日なのですぐさまO・Kで、H荘のクーポン券を買って、内宮へ向かう。プレイしようとする二人が、内宮へ参詣するのもおかしいので、参道手前で、鳥羽スカイラインへ左折、数百米走ってスカイラインと伊勢有料道路が分岐している原始林の快適なハイウェイを一気に走って、終点は磯辺——。

ここに安くて旨い、鰻料理の『川八』がある。最高六百円の

定食で、よく肥えたうなぎ二匹ぐらい使ってフンダンにあるので、とても喰べきれない。

ハツコは半分以上、喰べ残していた。

「うなぎも、ちょびっと（少し）が美味いんやわ。こんなにようけ（沢山）出されると、もう匂いだけで喰べきれへんわ。あのヌメヌメした太いうなぎが、あたいの体の中にニュルニュル這入りこんできたら、どうやるかと考えると、もう胸がむかついて喰べられへんの」

この想像力豊かな文学少女は、いつも夢想的、幻影を描いているのか、しゃべる言葉のはしばしに、被虐願望が生々しく、むき出しに顔をのぞかせていた。

磯辺から浜島まで十八キロ——。英虞湾にそった曲りくねった細い道を、ゆるゆる走っても三十分。予定よりも早く、午後二時半にはH荘に到着してしまった。チェックインの一番乗りかも知れない。

× × ×

宿の浴衣に着換えると、ドライブの汗とほこりを流すべくH荘自慢の大浴場に向かう。脱衣場でハツコと別れて、大浴場に飛び込むと、湯煙りに濛々とかすむ浴場内は私一人。快い湯加減に、陶然として体を伸ばしている

と、煙る湯気の向こうから、かもしかのよう
にスラリとした肢態のハツコが颯爽と、タオ
ルで軀も蔽わず入ってきたが、逸早く私の姿
を認めると、

「イヤーン」と大きな声を出し、

「どうなってんの、ここ……」

「ウン、混浴らしいね」

「ああ、はずかし。でもオジサンと二人きり
だから、まあいいってことよ」

伝法調にいつて、ザブリとしぶきを上げて
湯に飛込んでくる。

単に男女の脱衣場が別々というだけで、浴
場に一步踏み込めば、意外や仕切りすらない
純粹の混浴であった。奥志摩に、こんな愉し
いアナ場があったのを私は始めて知った。

湯舟に長々とねそべって、独りニヤついて
いると、湯をかきわけてハツコが近づく。

「オジサン、なに喜んでるの、嬉しそうな顔
して」

「フフフ、ここへ誰かヒョッコリ入ってくる
かも分からね。その時のハツコのおわてぶりを
想像してね」

「エッチなオジサン」

ハツコは眼を細めて、私の背をポンと軽く
叩く。スベスベして若い脂肪ののり切った柔

肌から、湯がツルツルと滑ってはじけ落ちて
いった。

硝子ごしに見通かす太平洋の波濤が大浴場
の眼下で白く砕けて汐騒をひびかせ、庭に面
した硝子ごしに、淡水プールで戯れる一組の
アベックの姿がのどかであった。

大浴場は硝子張り——。こちらからも判っ
きり見えるが、向こうからも浴場内が一望出
来るわけで、私達に気付いたアベックは、し
きりにこちらへ視線を送り、私達の裸形をチ
ラリとみつめては、しきりにヒソヒソと囁き
合っていた。

「背中流してやろうか」

湯から上ったハツコに声をかけると、体を
かがめて、

「ええわ、外でチョロチョロわたし等をみて
るから恥かしいもん」

といいながら、そのくせ、

「みんな寝鎮まった夜更け、そっと二人ここ
へ来て、あたいをくくって浴場内を引廻した
ら、スゴくハッスルするのと違う？ オジサ
ン」

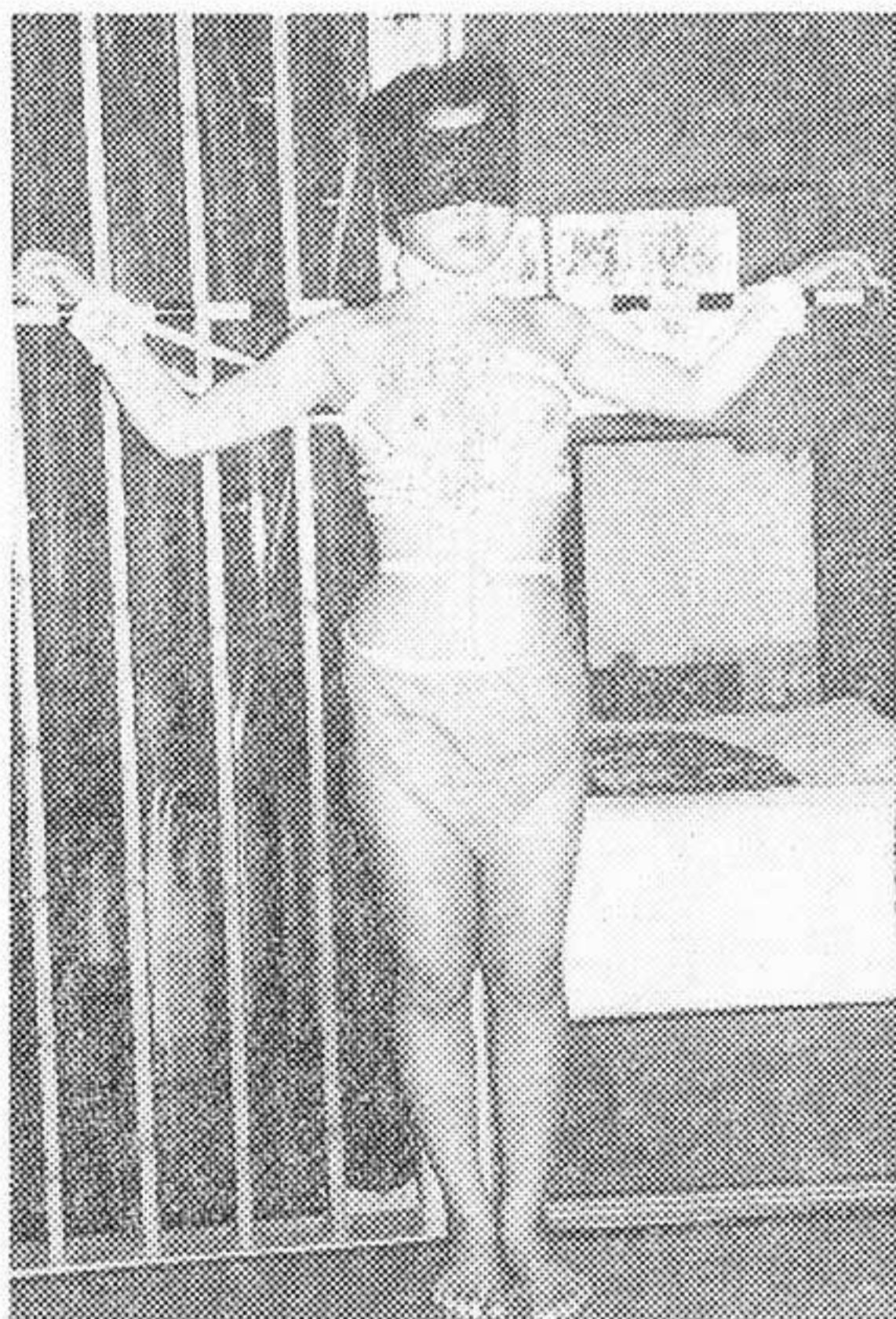
と、又しても空想だけは逞しく働く。ハツ
コは、すつくと立上った。その時、彼女の全
裸のウエストの部分が、私の眼前にあった。

スラリと気持よく伸びた肢態の、その中心に
眼が走った刹那、私は意外な事を発見した。

凹んでいる筈の臍窩に、さながら丸いボタン
を押し拡げて箆めこんだように、臍窩の周囲
が拡大されて、しかも丸いボタンはこころも
ち臍窩より押し出されていた。あたかもヘソ
の凹みに栓をした恰好である。

私の視線に、ハツコは呀々と慌てて、タオ
ルで腹を蔽った。

（出臍——）これは、数多くハントした女性
のうちでも始めてであった。箕田氏も山本一
章も、そのことについては一言も触れなかつ
た。若いオンナの羞恥と、最も痛恨の欠陥に
触れることを敢えてしなかったのに、私は今
これを発表してしまった。カメラ・ハントの
場合、如何ように隠しても現われる、その現
象に、私は最初から一言触れておいた方が、
却って正直であると判断したからである。し
かしハツコに向かって、これから始まるプレ
イの合間にも、その言葉はタブーにしなくて
はならない。その形態は、巷間呼ばれる程の
ものでなく、臍窩の蓋といった感じであった
が凹むべき処が凹まずに、二重円を描いてい
るのは、見ようによっては愛嬌でもあり、又
一風変わった趣きを留めていた。



「別にどうってこともないよ」

「ホント？」

「ああ、本当だとも」

「どうせハダカになっ
てくられたら分かる
んやもん、オジサンに
そういわれて、ホッと
したわ。あたい、オヘ
ソでいつもコンプレッ
クス感じてんのよ」

ハツコは、もう物怯
じしなかった。あてて

いたタオルをとると、これみよがしに、私の
眼前にオヘソを突き出した。

浴場を出て、浜木綿の咲き乱れる庭園の小
道を散策し、淡水プールへと歩いてゆく。

プールを上ったアベックが、私達と入れ違
いに浴場の方へ消えていった。

プールサイドのパイプ椅子に腰を降ろし眼
下を眺めると、赤く照りつける落日のもと、
白く砕けちる波打際を挟んで、堤防をかねた
遊歩道が岬の方へと続いていた。プールサイ
ドの横手から、階段を伝って遊歩道へと降り
られるようになっていた。

「夕食後、散歩しようか。ハツコの体をくく
って、その上から浴衣させて——」

「うん、そんな虐められかたも面白い。くく
ってもええわ」

想像が働くのか、ハツコはうっとりとした
素顔の表情で、遥か彼方の水平線をみつめて
いた。そっと視線を浴場の方へ移すと、今し
も先刻のアベックが、左右より浴場に現われ
合流すると、寄り添うようにして、深々と湯
舟に身を沈めてゆくところであった。

やがてボツボツと泊り客が到着するかも知
れない。しかしこの時限の、昼下りのホテル
のしじまには、私達と、アベックの二組のみ
が、ひっそりと自由の時間を駆歌しているよ
うであった。忙閑の谷間の、断層の真空時間
帯がここにあった。

振り向くと、ハツコがハッとしたように視
線をうつろに変えて頬を染めた。私の背後で
同じように、浴場の二人をみつめていたこと
は紛れもなかった。あらぬ想像が、遅しくハ
ツコの脳裡を支配して、それが大きく拡大し
始めた時だったのかも知れない。広い旅館の
建物全体までが、いやにシーンと息をひそめ
ている。

「戻ろうか——」

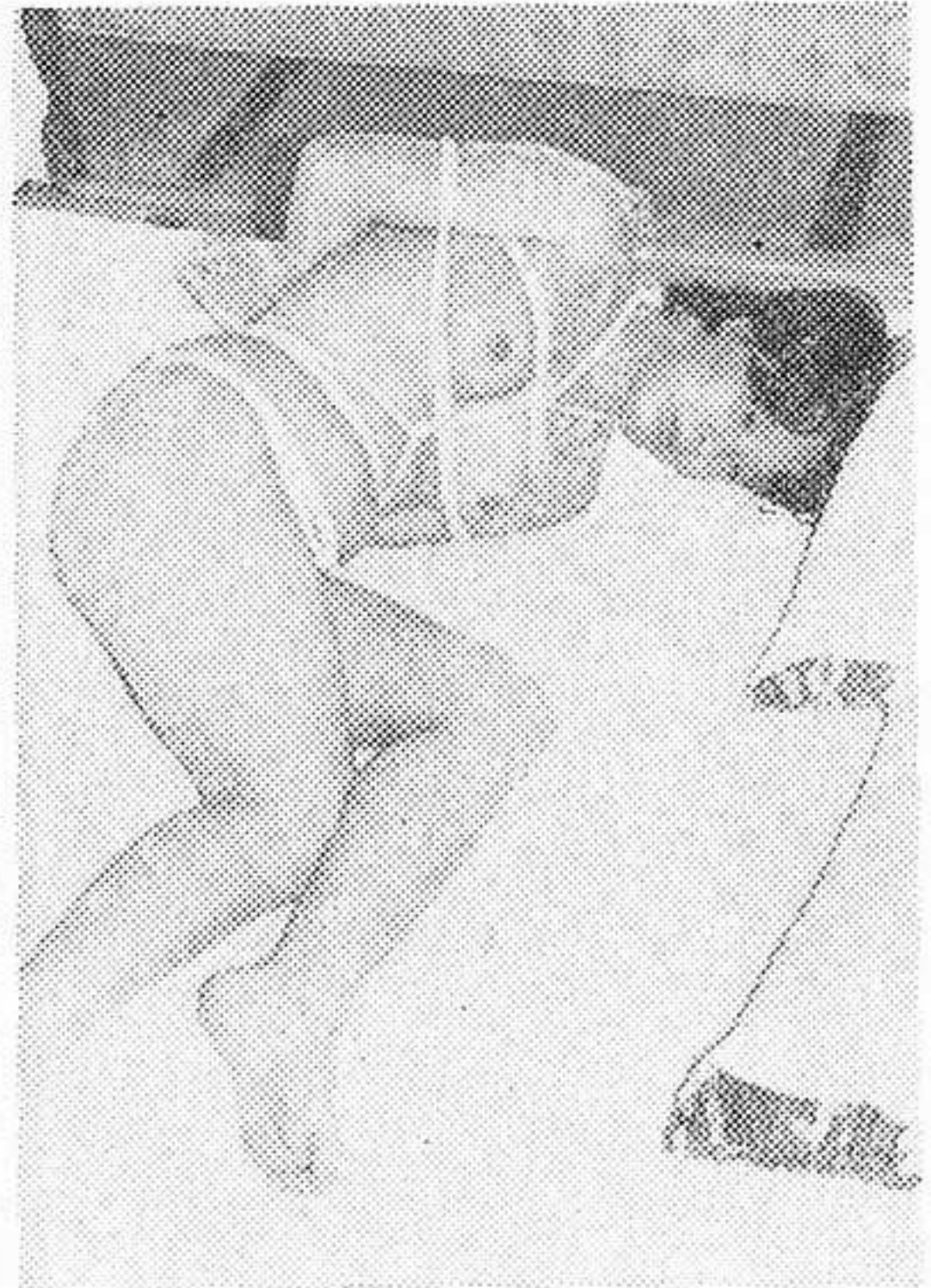
私宅を紡れた際、箕田氏が帰りがけにいっ
た、

「あの子の裸じっくり見てみい、ギョッと驚
くで——」

と言が残した言葉が、はしなくも、その時
ありありと蘇ってきたのであった。

このハツコには何の罪もない、残留品であ
る。産科医の未熟か、或いは出産ときばって
泣き過ぎた結果でもあろうか。しかしハツコ
は早くもそれを悟ってか自ら口を切った。

「オジサン——あたいのオヘソ、へんでしょ
う」



トロボ各二台、長尺リリース、大小のバイブ三本がひしめいて同居している。

例の斑ら縄を握ってハツコに近づく、心なしか体を硬くしていた。手始めは、ごく簡単に一本の縄を使ってシュミーズの上から胸に縄をかけて、ゆるく後手に縛る。なくもがなの、初歩の縛りであったが、ハツコの緊縛に対する反応を確かめたかったまでである。彼女は、横坐

はだった。むしろハツコは緊縛を期待している風でもあった。

部屋の上り口が、装飾の棧棒数本並べて、眼隠し風になっていた。立ち縛りには、まったく好適な構成である。彼女の被虐妄想からくる虚言症がフト不安になったが、懼れていでは何も出来ない。近頃、斑ら縄許り多すぎるので、細目の白いロープを使用することにした。単なる緊縛の羅列に終始して、プレイにまでは進展しないかも知れないが、ままよその時はその時のこと、とりあえず棧棒を使っただけの立ち縛りから始めることにした。薄いスケスケパンティだけに仄かに透けてみえるが、それがかえって挑発的で、チラリと私の官能を撩るのであった。洗い落とした素顔にニキビが点々と散在して、若い娘のシンボルが、むしろあどけなく清々しかった。

棧棒の端の太い柱を背にして、かたちよい隆起を挟んで縄でしめて行く。ピーンと張りつめた乳房がつやつやとぬめつくように光って、乳首がまるで小粒の黒真珠のように光沢を帯びて輝いている。後手に縛った縄を首に廻して、胸許で五、六度ひねり、縄尻を腰につなぐ。否応なく、ハツコの丸いボタンがペコンと飛び出て、私の眼を釘づけにした。

うながして立上ると、私の心は早くもプレイへと疼き始めて昂まって行きつつあった。

× × ×

シュミーズ一枚の白い肌から、湯上りのふくよかな匂いが漂うように拡がる。ドライブのあとのプレイを覚悟してきただけに、ハツコは、さっと浴衣を脱ぎすてて潔よかった。

夕食は六時半と告げてあるから、それまでに二時間は、たっぷりある。緊縛のトレーニングには充分であった。入口に施錠し、窓際のテラスに面した障子を閉める。持ち込んだ黒の革袋の一つには、緊縛用の縄がぎっしりとつまり、もう一つの愛用の鞆にはカメラ・ス

りに膝を投げ出した俤、案外ケロッとしていた。この程度、ハツコにとっては問題外であるらしかった。山本一章や編集部のカメラマンによって、かなり飼育されたハツコは表情も変えず、私のカメラを凝視していた。後手をゆるめると、縄はバラリと落ちる。

「シュミーズを脱いでくれる？」

うなずいて、さっさと肩から外すと、もぎたての桃のような乳房が、じかに覗く。ブラジャーは既に浴場を出た時とっておいたらしかった。スケスケのパンティ一枚になると、このとりたての若鮎のような娘は、颯爽と腕を組んで、全貌を露わにして私の眼前に立ち

シユミーズの上から縄をかけた時、始めてハツコの肌に手が触れ、一瞬さっと羞恥が体に流れたが、今はもう表情も平静にかえっていた。

「痛くない？」

常套的にきいてやると、大きくうなづく。こころもちツンと尖った鼻先がハツコの多様に変化する気性を象徴するかのようである。こうした鼻孔が、最も鼻責めにふさわしかった。その鼻梁に魅せられて、指先でパチリと尖端を弾く。あッ、痛いッ、ハツコは大仰に眉をしかめてみせチラッと私をにらんだ。二本の指で鼻先を摘むと、息を切迫させて激しく首を振る。

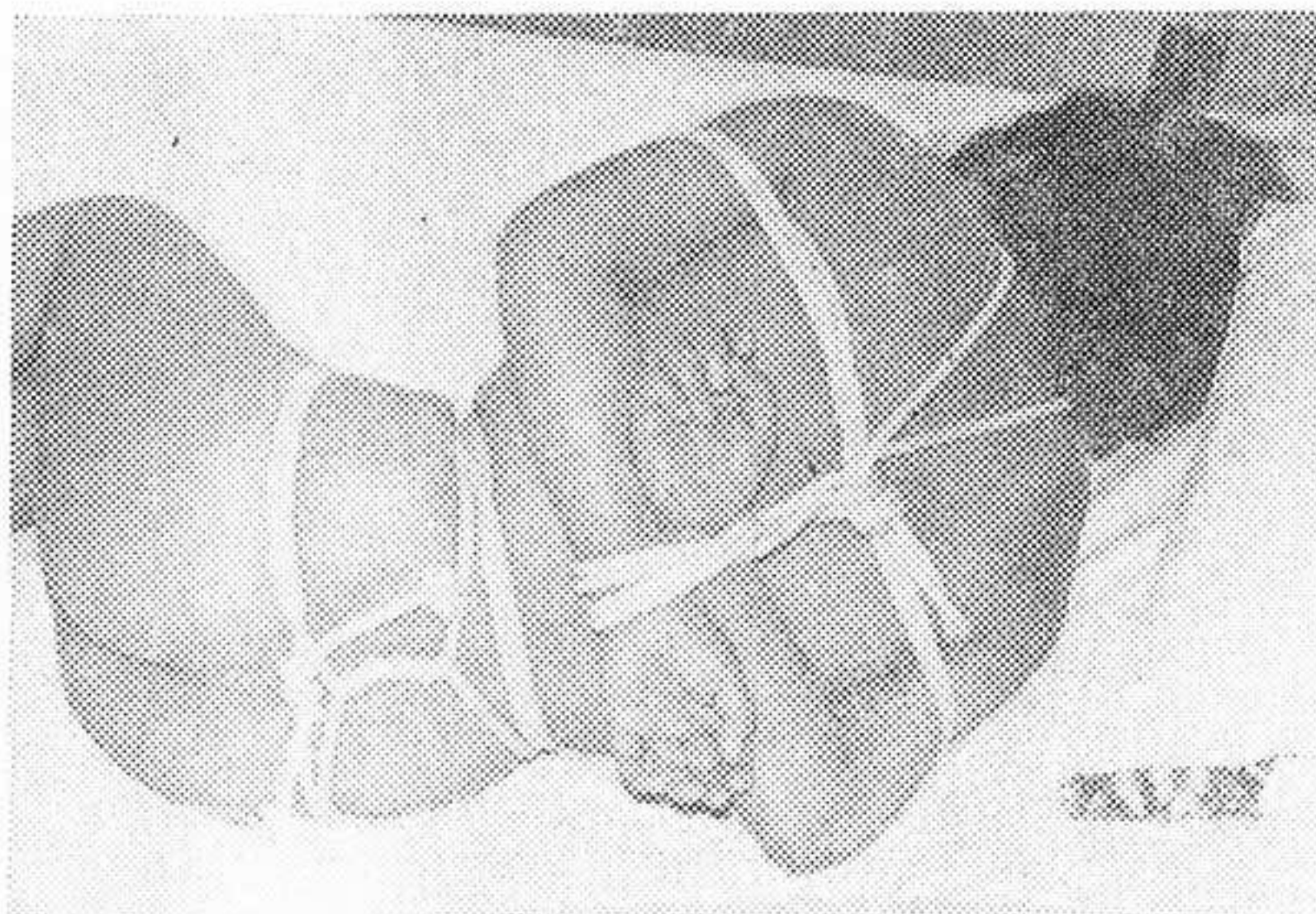
「ウウン、いやや小鼻つまんだら……あんなりそんなとこさわらんといて欲しいわ」

息を弾ませての抗議に、私の鼻責めはそれであえなくも中止した。

黙ってスケスケパンティに手をかけて、さと引きずりおろす。ハツコは腰をピクリと動かししたが、あえて拒否しなかった。パンティは丸めると私の掌の中で小さく塊まった。全裸にストロボを光らせてから、すぐさま次の緊縛にとりかかる。

丸い棧棒三本が、恰度ハツコの体の幅であ

った。両手を高々と掲げさせて棧棒にしっかりと縛りつける。ゆるく縛ると、丸棒だから滑り落ちてくるおそれがあった。両手を縛った縄の余りで、胸から胴へと棧棒ごと縛りつけてゆき、別の縄で可愛いシンボルの丸いボタンを隠蔽して結びめをつくり、ゆるやかに股間を縫うて太腿から膝へと下降してい



た。若い艶やかな肌に縄目は白く、それは美しい一幅の緊縛のポーズであった。

ふと、きざす嗜虐の想念——。足許に丸めて投げ捨ててある赤いパンティをいきなり口中に押しこみ、あッと吐き出そうとするのを押えつけて、その上から深紅の布で大きく猿轡をはめる。仄かなおのれの異臭を、自分で噛みしめて、彼女は微かに眉をしかめたが、渋面はすぐ消えて、あどけない表情が蘇り、それに向かって、勢いづく私のカメラは、しきりに瞬間の光を放った。

車中バスケットよりとり出してかぶったネツカチーフを、咄嗟の細工で、前垂れのように股間に垂れ下げ、ハント用にとカメラに納めたが、近頃の傾向で、そうでもしなければハントのフォトは殆ど白線を入れなければならなかった。

ハツコが猿轡の奥から、くぐもり声で何かいっている。えッ？ と聞き直しても判っきり分らない。苦しいらしいのではなかった。私は分からぬ俚に、ハツコの言葉を黙殺して腿から下を解くと、開股縛りのままで左右の足を大きく開かせて、足首を棧棒に結びとめた。ハツコは又何かいったようだが、よく聞こえない。

開股ポーズに閃光を走らせたあと、カメラをおいてハツコに近づく。清冽な小粒の真珠に、矢も楯もたまらず触れたくなったのだった。乳首に、そっと唇を触れる。一瞬さっと肉体の硬直を感じたが、若い未熟の性感帯はむしろ擦ぐったい感触しか与えなかったのか軽く吸うたびに、ハツコは体をよじらせ、くぐもり声がイヤイヤと叫んでいた。

臍窩の突起は、この緊縛で完全に遮蔽されていた。心をよぎる欠陥への思いやりかも知れなかった。出来ることなら、なるべく隠すようにしてやりたい。そんなしおらしい思いの反面、稀少の珍しさを嗜虐の念で露出させて、羞恥を味あわせてもやりたかった。

漸くにして猿轡を外すと、ポンと赤い塊を吐き出し、大きく息を吸うて、

「ああ苦しかった。オジサン、さっきから何回も言うてたのに聞こえなかったの？」

「何を？」

「お尻が搔ゆいから、搔いてほしいうてたのに……ああ、カユイカユイ、はよほいで」

そうだったのか、大急ぎで縄を解くと、ハツコはお尻をポリポリと激しく搔いた。目をやると、蚊に刺された痕が二カ所、赤くぽつ

りと膨れ上っている。冷房のこの部屋に忍び込んだ一匹の蚊が、彼女の甘い血を、今ぞとばかり吸いとったあとであった。

「ごめんごめん。聞こえなかったんだよ」

私はタバコに火をつけて、ホッと一休みする。全裸の僣寝そべったハツコは、時々思い出したようにお尻を搔いては、バスケットより取り出したクラッカーをポリポリ噛んでいた。まるで幼ないしぐさの、そのひとつひとつに、奇妙な情感がただよっていた。少女趣味の、立川談志師匠なら垂涎もののシーンである。

先日「夜の笑待席」というテレビ番組で彼は、はっきり私の名を出して、刑罰史以来おなじみの東映若手女優相手にからかっていたが、それが談志師匠の飾らぬいいところでもあった。多忙の彼の、忙中閑のひとときに、ハツコとのこうしたあどけなさのまじったプレイをみせてやりたい気持も、フトきざしてくるひとときであった。

夕食の時間までには、まだかなり余裕があった。もう一息、たっぷり時間をかけて緊縛を試みるべく、私はよいしょと声をかけて立上った。

「又、やるの？」

寝そべっていたハツコが、首をもちやげて私を見上げる。

「ウン、もう少し時間があるから、この柱に立縛りしてみようと思うんだけど……」

うなずいて彼女はバスケットヘクラッカーをしまいこむと、口をもぐもぐさせ乍ら、立



ち上って柱に寄り添っていった。

柱と棧棒の隙間へ右腕をさしこませ、柱を背にして、両手は柱のうしろで、かなり強く縛り合わせる。乳房の上下に縄をかけ、さして大きくもない未熟の双丘を盛り上げて、ぎゅうぎゅう締め上げてゆき、新たな縄で胴に凹みをつくって臀部へと喰いこませて行く。腹が圧迫されて膨らみ、丸いボタンがピョッコリと飛び出し、背面がピッタリと柱に密着して、双臀はヒタヒタとはみ出していた。微動すら出来ぬ柱縛りをやり終えて私は満足の吐息を洩らすとカメラをとる。

身じろぎもならずハツコは、神妙に首をう

なだれていた。正面、側面、仰臥位と十枚近

く撮り終えると、私はフト眼隠しを試みてみた。私をみつめる彼女の眸から遁れて、緊縛の全裸を余すところなく、貪婪に、隅々までじっくりと観察したくなったのである。

「どうして眼隠しなんかするんやの？」

「じっと私をみつめている、ハツコの眼が怖いからだよ」

「へんなイタズラしたらあかんよ」

「ああ、しない」

「オッパイ触ったらイヤ。すぐくそばいから……」

「ウン、じゃあ触らないよ」

眼隠しされたハツコとの奇妙な問答がつづく。私は平手で軽く、ハツコのオシリを二度、三度パチパチ叩いてみた。

「痛いかい？」

「ウン、平気。何してんのオジサン？」

「ハツコの若くて綺麗なカラダにみとれているの

さ」

この刹那、私はフト軽い不安にかられた。こうした行為を、ハツコは又ぬけぬけと虚言を混えて、父親に喋り散らさないだろうかと――。

その時、ハツコが呟くようにいった言葉は私の抱いた不安を打ち消すように響いた。

「オジサン、そこにいるの。黙ってないで何かいって――」

「ああ、ハツコの眼の前にいるんだよ」

そっと白い肩に手をおくと

「眼隠しされて、こんなにきつく括られると何だかすごく不安やね。そのくせ、じっとこうして括られて立っていると、こうされているのが、泣き出したくなるほど悲しいように嬉しいの。ジーンと体にこたえて何ともいわれへんええ気持ち――。あたい、いろいろと想像してんの、ひとりで……。それがものすごく嬉しいんやわ」

「何を想像しているの？」

「いろいろと口に言われへんようなこと。そうやわ、あたいがずっと小っちゃい時、父ちゃんが信太の山へわらびとりに連れていってくれて、林の中であたいを木にくくりつけて狐が出てくるぞうって脅かしたんよ。わあわ



あ泣いたけど、父ちゃんがあたいをどうしてくくったのか、何や分かるような気がして来たんよ。きつとあたいが可愛くてたまらなかつたからやわ」

急に饒舌になったハツコの吐息が、いつしか妖しく乱れてきつつあった。暗黒の緊縛の中で、めくるめく甘美な空想が幻想をうみ、それが彼女の被虐妄想を急速にかりたてて、官能を疼かせ始めたのであろうか。ハツコの父親が、幼い彼女を縛ったというのも、真実か虚言かそれは分からない。めまぐるしく飛び交う幻の想念の中に、ハツコはいつも父親を対象として活躍させていた。奇妙なコンプレックスと愛著が、ハツコの心に同棲しているように思えるのであった。しかし、空想の小説にしる、今の告白にしる、いつも彼女の言葉のはしばしに、父親が登場するのも異常といえは異常であった。無限に発展して行く幻想に、白い裸身はいつしか微かに震えを帯びていた。柱の背後の十指が、何ものかを求めるかのように、空を掴んで空しく弯曲しているのであった。

妖しい幻覚を呼び醒ますように、

「といてあげようか——」

と近寄ると、

「ウウン、もう少し放っておいて。いろんな素晴らしいアイディアが、あたいの心に浮かんでくるの」

まるで憑かれたように独り喘ぎ、暗中模索の、眼隠しの狭い世界で、ハツコは尚もあらぬ想像を逞しくしているようであった。

立縛りはもう二十分近くもつづいている。

柱で圧迫された二の腕で血脈は渋滞しはじめたのか、指先は蒼白く変色しつつあった。既に感覚を失って痺れているのではなからうか。私のSの血は、たぎりはじめた。若い娘のあられもない妄想をまるで助長するかのように、五指がしめやかにハツコの体を這いずり廻り出した。息をはずませ、ききとれぬ眩きに似た喜びが唇から洩れて、未熟の女体はこの緊縛によって、あきらかに開眼しつつあった。固い蕾が、大輪の花を開かせ始めていた。

歓喜に濡れた体を私の指が確かめ、やっと縄をとき放した時、ハツコはヘナヘナとその場に崩れ落ちて、まるで失神したかのように身じろぎもしなかった。

ハツコの脳裡を去来するものは何？ それは彼女のみが知っている心の秘密ではなからうか——

× × ×

夕食に出された、あわびの生造りは残酷であった。貝殻を皿にして、切り刻まれたあわびの肉に、レモンをヒタヒタと垂らすと、肉はピクピクと収縮して蠢いた。残酷焼を名物にするこの旅館で、これも当荘自慢の料理かも知れなかった。

思わず過ぎたビール二本で、陶然となつて私の顔は赤く火照る。すすめても、ビールに一寸口をつけただけのハツコは、旺盛な食欲を示して、夕食の食卓を飾る、数多い料理を殆ど平らげてしまった。歴々と覗く手の縄目の跡が、私のSの心を刺激する。

暗に堂々と打寄せる波濤を間近にきいて、食後私達は旅館の下の遊歩道を散策した。浴衣で纏われていても、一枚下は全裸。約束通りその素肌に縄をかけて股縄に続いていた。そろそろ歩み乍らも、ハツコはしばしば立ち止まり、そっと裾をかきわけて手を挿し込むと、縄目をゆるめて歩き易くしていた。堤防のところどころに、波打際に下る階段がついている。道が曲折して、辺りの旅館の灯がすっかり見えなくなった古墳近くで下降すると足許にヒタヒタ打ちよせる波打際で、私はハツコの腰紐をとく、前をはだけて、太平洋に

面して立つと、夜眼にも白く砕け散る浪のしぶきが、彼女の白いふくらはぎをしとどに濡らして引いていった。暗闇は私を大胆にした。

「解いてやろうか、ここで」

「ウン、どっちでもええけど、股がすれて痛いわ。それに……」

前をはだけた俣ハツコはクククと含み笑いする。夕食前の、あの眼隠しの長い長い立縛りが、私達の距離を一気に縮めてしまっていた。年令の差を超えて、彼女はすっかりプレイづいていたのである。

暗い海に面し、足許に気をつけながら、白い浴衣を風になびかせて、裸身から白い縄を抜きとってゆく。このアバンチュールが、年甲斐もなく私を昂揚させたのか、縄を抜き終った時、その余勢をかって、思わずハツコを力強く抱きしめていたのであった。ハツコは抱きしめられた俣じっとしていた。

遙か彼方の岬で、廻転して点滅する灯台の赤い火が、親娘程も年令の離れた私達をロマンチックにしていた。

「ハツコは可愛いね」

頬をよせて、思わず口をついて出た言葉にすぐ彼女の声が撥ね返って、



「あたしもオジサン大好き——、もっともっと虐めてもええんよ。何でも素直にいうこときくから……」

「有難と。でも家へ帰ったら、今夜の出来事を全部、父ちゃんに喋るのじゃないかい？」
恐れていることをきくと、

「ウン、喋らない。あたいの心の中にしま

っておくわ」

「それならいいんだ。でもどうして山本さん（山本一章）とプレイした時、あんな非道いことを言ったの？」

これが、聞きたかったのである。ハツコは一寸押し黙っていたが、案外ケロッとした表情で、私の胸に顔を埋めたまま、

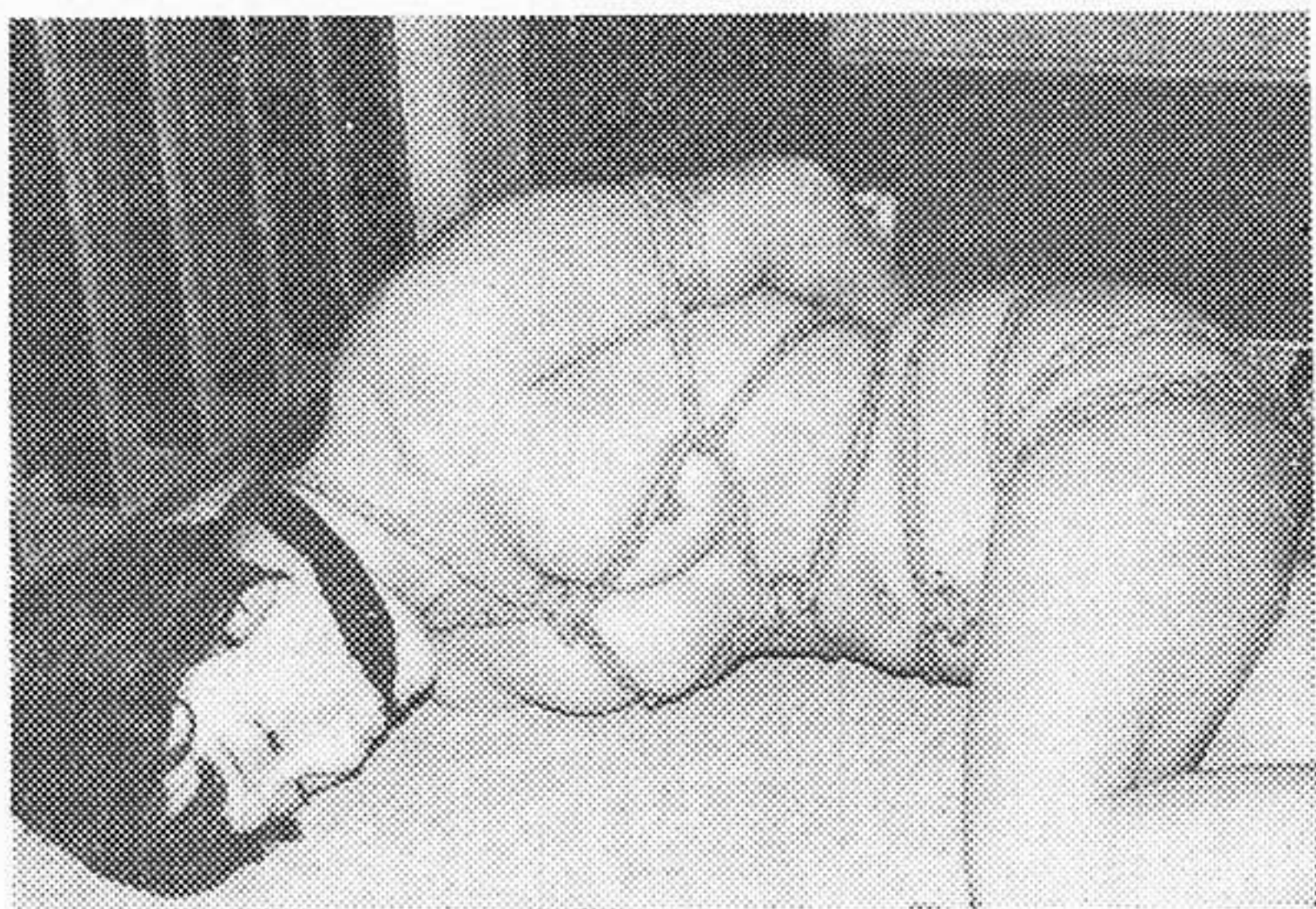
「よその人とプレイしたのは、あの時が生まれて始めてやったの。だから帰った時、父ちゃんがどうだったと、根掘り葉掘りききただすの」

「父ちゃんに、プレイのことを告げて行ったの？」

「そうよ、でないと心配するもん」

「フーン、ハツコとこは変わってるね。それから……」

「始めは本当のことだったのに、もっと何かあっただろう、言え、言えといっまでもひっこくきくもんだから、遂々つくり話してしめたの。せやかて、本当のこと言うてるのに、もっと、もっとと、なんぼでもきくのやもん、作り話せな仕方なかったの。そしたら父ちゃんすぐく怒りはって、箕田さんそこへ掛合いにいつて、えらいことになって、あたいビックリして、父ちゃんに泣いて謝って、



山本さんとのことはこれだけよと判っきりいったの。父ちゃんは又謝りにいったそうやけど、あたいが嘘いうたから、えらいハジかい言うて、母ちゃんが留守になると、三回ぐらい、あたいをくくって虐めはった。それでも父ちゃん、あたいを愛してくれてはるからえらい腹立たへんの。それからハッコと

る時、いつも心配して一緒にいてくれるの」

ハッコの言葉が本当なれば、これがあの事件の真相であった。

娘を異常に愛する父、見知らぬ他人とプレイさせた場合、そのプレイの有様を、危惧と期待で娘から告白させ、その追及が執拗になった時、偶々多感な想像力豊かな少女の幻想と結びついて、思いもかけぬ告白が生まれたのであった。

この親娘の関係は、肉親以上に、何か妖しいSMの想念で縛と結びついているように、私には感じられた。そこには、おぞましい肉親相姦の匂いすら漂ってくる、異妖な雰囲気にも包まれている事を、私の直感力は嗅ぎとっていた。

ハッコの告白の中で、父が愛してくれてるからという意味は、何を示唆しているのだろうか。そこには、溺愛を超えた、なまぐさい性の蠢きを感じるものであった。この怪奇なムードの中で成長したハッコが、いつしか父親を欲ばす手段として、あらぬことを口走り果ては被虐妄想による虚言症に走ったとしても、その原因はあきらかに父親の方にあるのではなからうか――。

なればこそ、行き過ぎた自分の非を悟った父親が、箕田氏に詫びてきたのであろう。

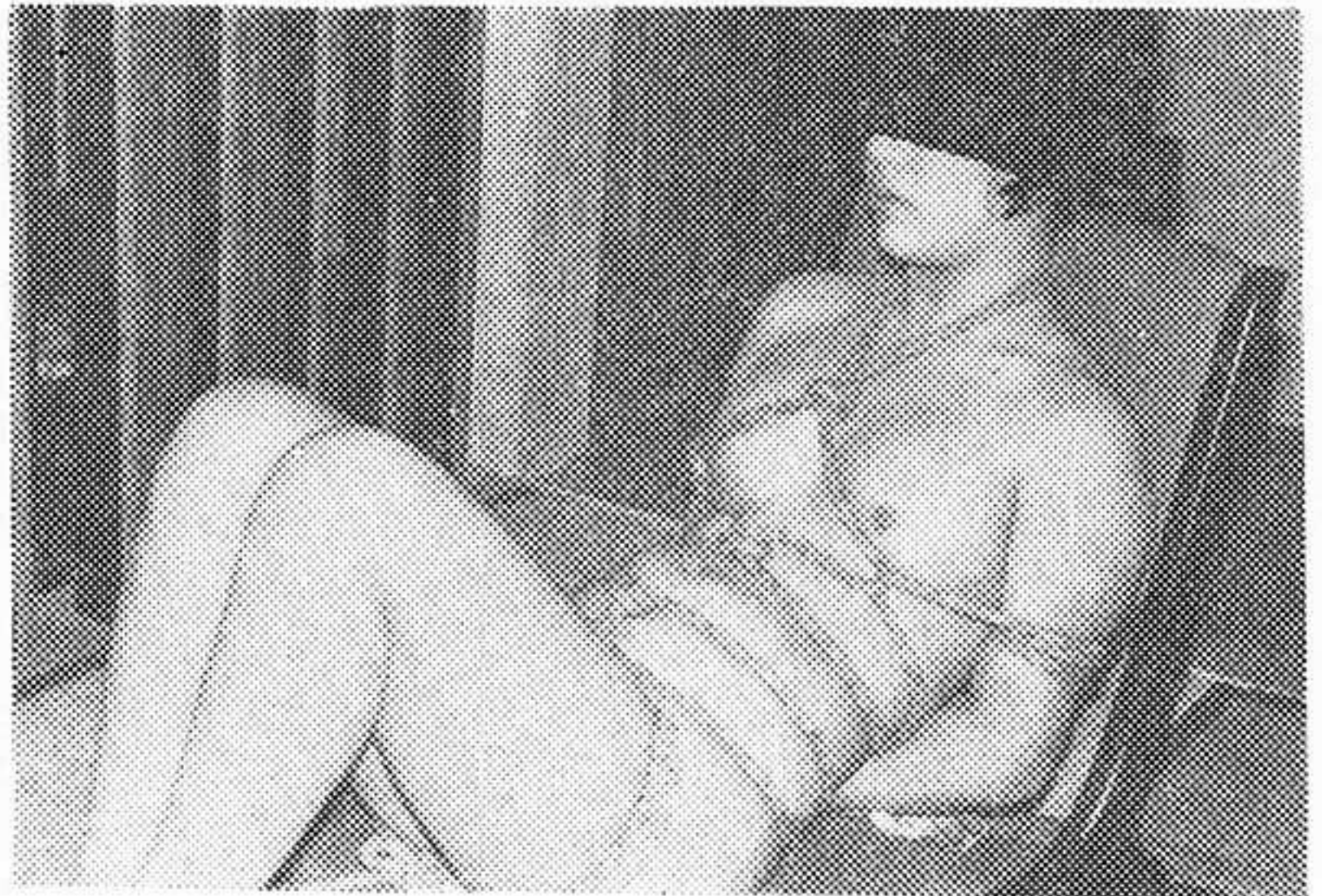
長井葉津子をそうした観点よりみる時、その心理分析の対象として、これ程貴重な存在はなかった。一少女の心の秘密は、まだまだ深いかも知れない。或いはとりようによっては、虚言を以て、私自身を喜ばせていたのかも知れない。しかしその一端を知り得ただけでも、私にとっては又とない収穫であった。「どうせ父ちゃんは、私とのプレイをきくらうね」

「そら訊くと思うわ。せやけど父ちゃん、大分前から辻村ファンやから、心配せんといて――。あたいは、うまい具合にしゃべるから」うまい具合に喋るという言葉の裏に、ハッコの虚言症の匂いをありありと感じた。そのくせ、こうした秘かなプレイの戯れが、赤裸々に父親の耳に入ることは、私としても気恥かしかった。恐らく彼は、私達のこの一泊のプレイに、予想以上の激しい期待を抱いて、ひたすらに彼女の帰りを待ち兼ねているに違いなかった。こうなればもう、八方破れの気持で、すべてはハッコを信じてプレイするより致し方なかった。その気持が却って私を大胆にし嗜虐へとかり立てていったのである。

名も知らぬ夜鳥が、激しく啼いて黒い羽根を舞わせて飛びかっている。庭園ごしに戻って、淡水プールの辺りから浴場を眺めると、周囲の暗さの中に、浴場の内部のみ明るく浮かび上って、団体客らしい数人の男性が、酔ったみ声で声高に喋り乍ら、湯を使っているのが、ありありと硝子越しに眺められた。団体客におそれをなしたのか、女性の姿はななく、チラリ覗きみの興味にかられた私もあきらかに、ハツコを伴って部屋へ引返していった。既に食事のあとは片附けられて、心得たようにダブルのマットレスが奥の間に敷かれてあった。今宵一夜、ハツコとの添寝の床にあらぬ心を疼かせて、私はどっかと枕元へ坐る。チラリと寢床に眼をやったハツコは、案外平然とした面持ちで、私の崩れた膝に体を凭せかけてきた。

× × ×

本格的なプレイがこれから始まろうとしている。初秋の夜長、時間を気にすることもなく、心行く迄耽溺出来るのは愉しいことであった。庭園から上る際、沓脱石の傍らに立ってかけてあった、だんだら模様の釣竿の、根本の太い一本をそっと持ちこんできたが、これを早速使うことにする。用済みになると、も



との位置へ早急に返しておかないと、夜釣りの客でもあった場合、騒がれて怪しまれる懼れがある。

ハツコは浴衣を脱ぎ捨てて、既に全裸になって待っていた。みずみずしい女体が、これからのプレイを期待してうっすらと仄赤く染まっていた。

釣竿をうなじに掛け渡して、左右の手を拡げてそれにのせかける。竿を背負った恰好の両手を、素早く竿に縛りつけて行く。

「オジサン、くくるのきつうても構へんよ。あたい辛抱出来るから」

健気なハツコの言葉にフフと微笑がわく。実に協力的だし、一向に羞恥の色もない。到ってやり易い娘だが、唯彼女の心を去来する被虐の妄想の、とめどなく発展するのを秘かに恐れた。

両手を縛った縄の残りで、胸から腹へと丹念に巻き上げてゆく。時間の制約のないのがつい緊縛を強烈にさせた。別の縄を胸に足して、これは股間縛り――。

うっとり夢みる眼つきになったハツコの素顔は、あどけなく、さながら汚れを知らぬ童女のようなであった。白い縄が眼に爽やかである。

「少しきつかったけど、どこか痛いかい？」
「ウン、いい気持――」

いい気持という言葉の中に、私はハツコの願望が充分にみたされていることを知った。腹を落として膝を立てさせると、喰い込んだ縄が、殆ど陥没している。

「オジサン、あたいもっと虐められたいわ。」

いじめて……」

喘ぐような口吻で、ハツコは感極まったように声をうるませた。

うるむ声は私の足下にある。釣竿を背負ってハツコはタタミに俯伏せになって、身をくねらせていた。臀に片足をかけてグリグリとこね廻すようにしたゆさぶりが、緊縛の縄のしまりとマッチして、ハツコを被虐の悦楽へと、かりたてていった。

今や悦虐を願望する彼女に、私は股間責めを思い立った。どんな反応が出るか、それがみものであった。

急拠の思いつきで、座椅子を二つ山型に背を合わせると、ハツコをその山の頂点に開股

にして坐らせてゆく。徐々に腰を落として、

足を拡げてゆく彼女が、坐椅子の山に密着する。半立ちのポーズで腰を浮かせているのでいきなり左右の足を引っ張って、更にぐっと大きく押し拡げた。拡げれば拡げるほど、軀全体の重量が坐椅子の山にかかり、これは即興の木馬責めの変型になった。

腰に手をかけてゆすると、ハツコは大きく喘ぎ、可憐な呻きを洩らし始めた。呻きを殺すべく深紅の布を唇にかませて背後に回る。釣竿に両手をかけると、力を入れて前後にゆさぶり出した。苦悶の表情のなかから悦虐が浮かび上り、ゆさぶりによって、この若い娘は身悶えていた。快い嗜虐を彷徨する私は、

尚も足払いをかけるようにして、閉じ気味になるハツコの両脚を拡げさせてゆく、重心を失って、背後の私に体をもたせかけて、ハツコの呻きは甘い嚙り泣きに変わっていった。「あーん、もうやめてエ、オジサン」

快虐に悶えてハツコ

は、くぐもり声で叫ぶ、それは拒絶というよりも、不可思議に燃える肉体の反応を、あからさまに私の眼前に曝したくなかったからではなからうか。思いもかけぬ歓喜の攻勢に、ハツコは途迷っていたに違いなかった。

股間責めの快楽を中断させて、釣竿を握って立上らせると、傍らの柱に向かって直立させる。多少の危険をともなったが、柱から軀が倒れぬよう首縄にして柱にとめる。数度、ハツコは、のどをグビグビいわせて首を振ったが、位置がきまったのか静止し、あどけない唇が微かに濡れて、細かい皓齒が心持ち開いた唇から洩れて光っていた。

「オジサン、眼隠ししてエー」

甘えるような口調でいって、ハツコは一寸照れたように微笑んだ。自分から希んだ暗黒の布の下で、再び逞しい被虐妄想の世界に沈潜してゆきたかったのであろうか、いわれる俤に眼隠しを施すと、全裸緊縛のハツコの快楽の変化を、じつくりと観察し始めたのであった。

つややかに光る、二つの小粒の真珠に、性感はないと知りつつも、この甘い果実を目前にみても、何か試みずにはいらなかった。それによって私自身の情熱は、はかされてゆ



くからである。そっと小型のバイブを手にする、かすかな電動音を響かせて、乳首にそっと触れさせる。一瞬ピクンと体が躍って「イヤーン、オジサンやめてえ。こそばいわあ。いやあ」

と激しく身をくねらせる。愉悦に身を委ねて、恍惚の幻想に思いをはせていたのが、この行為によって中断されたのか、ハツコは回らぬ首を精一杯に振って、それを拒否した。

一旦はあわてて離れたものの、私はあきらめきれず、振動するバイブを縄目にそっと差し込んでいった。愕然としたようにハツコの体がゆらぎ、わなわなと柔肌は震えた。しかしそれも、やて被虐の快感に融和していったのか、喘ぐように微かな吐息を洩らし、唇を半ばあけて、胸は次第に激しく起伏しはじめた。

この尽、いつ迄も続けていたかったが、釣竿のことが気になり出すと、その方が気掛りになって、私はそっとバイブをつまみとって音を消し止めた。ハァーッと深い溜息がもれて、ハツコはしきりに腰を振った。快感の残滓が、今もその辺りにただよってでもいるかのように――。

釣竿縛りをといて、マットの方へとハツコ

を導いてゆく。快楽の名残りを惜しむかのように、夢みる瞳で、魂を宙天に飛ばした風情で、彼女はボンヤリと体を真白なシーツの上に横たえた。一休みする間もなく、私の手はハツコの裸身を這い廻って、緊縛を続行していた。首縄にして両腕をしめ上げて後手に縛り、乳房の谷間で縄をよじって腰へ回すと、背後で又よじり、尾骨のあたりで結び止めると、ドサリと投げ出すように倒した。

寢床の傍らの、小さい襖を開くと、近頃流行りの鏡が、鮮かにハツコの裸身をうつし出した。何かを覚悟したように、ハツコは投げ出した両脚を軽く開いて、じっと私の動作を熱いまなざしでみつめていた。その眸の濡れた先に、私は性の目覚めを直感した。一夜明くれば、既定の事実が出来上っていても、今の私の心には、未だSMのプレイの執念の方が強かった。

ハツコを縛って放置した尽、釣竿を握ってそっと廊下に出る。幸いあたりに人の気配もない。足音を殺すようにして、庭園の沓脱石の近くまで辿りついて、釣竿をもとの場所へ戻すと、静まった庭園へと、サンダルを引っ掛けて出ていったのであった。庭のあちこちに竜舌蘭の植込みがあり、夜目にも白く、浜

木綿がここかしこに咲き乱れていた。オゾンを一杯に含んだ汐の香の匂う空気を大きく吸って、浜木綿の白い花ごしに、大浴場の方へ目をやると、旅館の女中らしい女性が二人、打興じて喋り乍ら、石鹸の泡を体中にまぶして洗っているのがのぞけた。どちらも四十年配の年増であるが、だぶついて垂れた乳房の白いふくよかさが、私の覗き見を満足させてくれた。じっと息を殺して、二人のゆあみ女の生態を観察していた私は、その時限では、すっかりハツコのことは忘れていた。体を拭いて女達が浴場から出て行く、と共に、ハツコと我に還った私は、あわてて部屋へと戻っていった。彼女の不安にうるむ眸が、さっと私に突き刺さった。

「どこへ行ってたん？」

「釣竿を返して、一寸庭へ出ていたんだよ」

まさか大浴場を覗いていたともいえない。

ツンとすねた眼付きが天井を向くと、ハツコは縛られた不自由な身を二度三度ゆすった。

「あたい、心細かった。入口に鍵かけてないし、若し誰か入ってきたらどうしようかとおもて――。ほっといたら、いやや……」

甘えて駄々をこねるように身をくねらす。

「よし、よし、いい娘だ」



といいながら、蔽いかぶさるようにして抱きしめると、ハツコは縛られた裸の体をすりよせて、鼻を鳴らした。思わず燃え上る情念のほむら——。その尽崩れてしまいそうな心を辛うじてこらえて、私は、そっとハツコの体をまさぐっていた。一緒に横たわっていると、昼間の運転の疲れが出て、ともすれば臉が重くなってくる。懸命にこらえているものの、冴え返って悦虐に悶え始めたハツコとは反比例して、睡魔は私の全身を虜にしていた。鈍い動きで、ハツコの縄を何とか解いたのを覚えているが、それも半ばで停止し、不覚にも私は、うたかたの夢路をたどっていた。

夕食のビールの呑み過ぎで、フト激しい尿意を覚えて、夢うつつで起き上ろうとして、私は他愛なく転がってしまった。それでひとときの仮寝の夢から、はっきり目覚めた時、両手と両足が、ハツコを縛った白い縄で縛られて繋がっていることを知った。私の顔すれすれに、裸身をかかめて、凝っと私を見守っているハツコの眼にぶつかると、事態がやっとはっきりしてきた。

「ハツコが縛ったんだな」

「ウン、あたいよ。そやかて、あたいを放つたらかして、グウグウ寝てしまふんやもん、シャクにさわって、オジサンをくくってやったの。それで、きっと目がさめたんやわ」

「違うんだ。トイレにゆきたくなったもんだから眼があいたのだから。どのくらい寝てた？」

「一時間半ぐらい寝てはったんよ」

「へえ、そんなに長く——。そのあいだ、ハ

ツコずっと起きてたの？」

「コーンして寝られへんの。オジサンよう何ともないね」

「いや、そうでもないんだが、運転疲れでねむくなったのだろう。御免よ、ハツコ。早くといってくれ。洩れそうだよ」

ほんのうたた寝の、三十分ぐらいの睡眠の感覚なのに、一時間半もハツコを独り放ったらかしにしておいたらしい。ハツコは、のろのろと私の手足の縄をときにかかる。自由になった私は、いきなりハツコに飛び掛かっていった。勿論、計算された私の演技である。「コラッ、よくも縛ったな。さあその罰だ。みせしめのため、曝してやる」

荒々しくいって、ビックリしたようなハツコの腕をとると、枕元の床柱に、両手を挙げさせて縛りつけ、胸縄で床柱に縛りつけた。

縛り終って私はニヤリと笑うと、ハツコの頬に軽く唇を押しつけた。私の真意を知ってハツコの硬ばった表情は忽ちくずれ、むしろそうした行為を待ち望んでいたかのように、軽い微笑みすら浮かべて

「ウーン、オジサンの意地悪……本当に怒りはったんかと思うて、泣きかけたんよ」と甘え声で鼻を鳴らす。

慌しくトイレの扉を開き、長い放尿をすませて戻る頃、ひとときの眠りが、私の体にシヤッキリした活力を回復させていた。床の間の腕時計をのぞくと既に十一時を廻っている。貴重な時間がムザムザと流れていた。

冷蔵庫から、よく冷えたビールをとり出してくると、ハツコの前へどっかと坐り、彼女の赤裸々な姿を肴に、独酌で立て続けにのみ乾すと、私はなめ廻すように彼女の肢態をみつめ乍ら、これからのプレイの構想を練っていた。行儀よく足を揃えて身じろぎもせず、ハツコは私のこの有様を見守っている。

ムラムラときざす嗜虐の情念が、私を衝動的にかり立てていった。よろめいて立上ると高々とかかげた両手を押えつけ、むき出しになっっている生毛すら生えていない腋窩を、いきなり指先でくすぐり始める。

「あっ、オジサン、かんにして、こそばいよう。いゃーん」

体をくねらせて、くすぐり責めから遁れようと、ハツコは必死に腰をねじる。ねじれる腰に手が下っていった、片手がハツコの片脚にかかり、股も裂けよとばかり、ぐいと高く持ち上げていた。重心がくずれて、ハツコは爪先立ちによるめき、ミシリと音を立てて、

両手首の縄が、柱に添ってずり下る。片膝が胸のふくらみに接触するまで持ち上げる。その行為は、男の野獣に似た本能であった。ハツコの処女は既に喪失しているとみた。この若さで、誰にいつ？

それは聞き訊す必要のないプライバシーであったが、一面、私の心を軽くした。いつしか執拗になりつつある私の嗜虐本能は、そのことを責めの恰好の餌にする気になっていた。

こんなシンプルな縛り方では物足りなくなつた私は、もっと強烈な緊縛をこころみて、処女喪失の真相をききただすべく、床柱の裸身から縄を外すと、ハツコの体はゆらりと揺れて、私の懷に倒れかかってきた。やんわりと受け止めて、マットの上に坐らせると、斑らの縄をとり上げていた。私がよくやる、オーソドックスな緊縛が始まっていた。首縄にして、胸で菱形に分け、要所要所でしっかりと結びめをつくり、後手縛りの股縄と、すべて条件をそろえて太腿で終結する。唇をわけ入って猿轡をかませ、この無惨な緊縛の姿を鏡に正対させてみた。

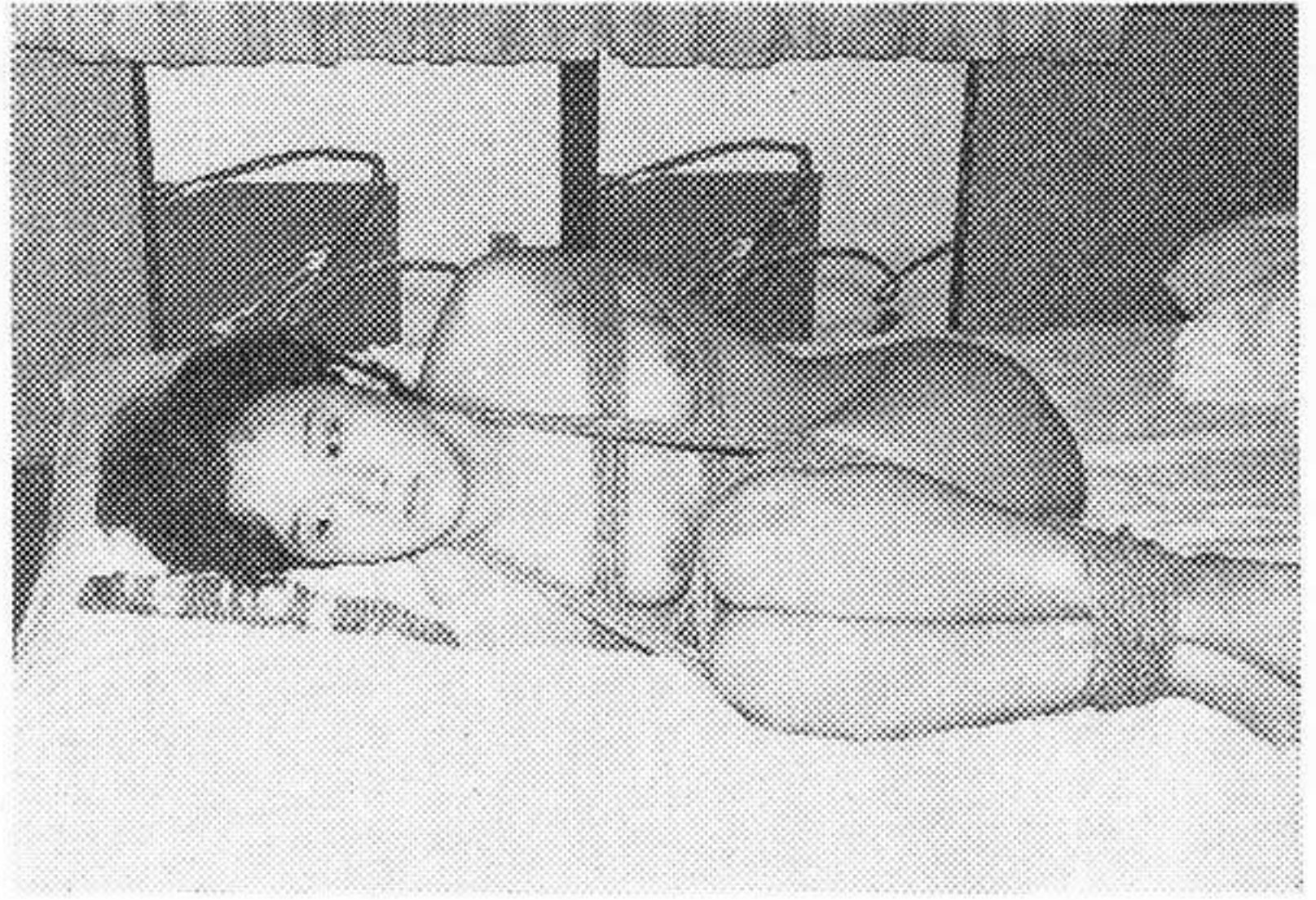
「よく見るがいい。これがハツコのみじめな姿だよ。どうだ、嬉しいだろう」

既に二本目のビールが、いつしか私を軽く酔わせて、かなり露骨な言葉を、吐かせていた。

チラッと瞼を開いて、ハツコは鏡にうつる美しい縛めの姿をみると、しばし自己陶醉に陥って、からみつくようにみつめていた。恍惚の陶醉に似た表情が、俎上の女鯉のまなじりをよぎり、その胸裡に去来するのは、露わな現実の被縛の姿にダブる、果てしない悦虐の想念かも知れなかった。太腿に走る縄は完全に双臀に没し、それは確実にハツコを拘束していた。

横たわるハツコの、真白い雪肌の臀部の盛り上がり、音を立てて嗜虐の血を逆流させていった。平手でパチパチと数度、続けざまに尻をぶつと、その都度、ピクリと下半身がうごめいて、ハツコは黙々と甘受していた。指のあとが薄桃色に、真白い臀部を染め上げてゆく。緊縛の柔肌をよいしょと抱きかかえ、タタミの上へ投げ出すと足蹴にする。反転、逆転して微かな呻きを洩らし、その呻きによって、ハツコ自身、悦虐の境地に近づいてゆくように私には思えた。

いよいよ処女喪失の訊問の時がきた。ハツコの羞恥を除いてやるため、彼女の好む眼隠



「いえないのか」

私は縄を束ねてハツコの肩をピシリと打った。あっと叫んでガクリと首を落としたが、又立て直して、頑強に口を閉じている。金輪際、喋るまいという風に、唇を噛んでいた。「よしッ、言いたくなければいわなくてもいい。もつと責めていわせてみせるからね」その時、私の心は確かに嗜虐に燃えさかっていた。

手荒にハツコの体を抱え上げて、柱までズルズルと引きずってくると、無理矢理、柱に添わせて直立させる。坐位で縛った縄目は、起立によって一入深く喰い込み、立上った瞬間、痛みに耐えかねて、ハツコは思わず悲鳴をあげた。委細かまわず私は、緊縛体の更にその上から、柱毎、縄をかけ廻して、ぐいぐいしめつけ、口を一杯に開かせて、斑縄を深く喰い込ませ柱に縛りつけていった。尚も膝から足首まで犇々と、柱にヒタとしめつけたのであった。ハツコの突き出た腹部から、シンボルの丸いボタンが異常に大きく飛出し、微塵の身動きもならぬ女体の中で胸の鼓動のみが激しく起伏して波打っているのだった。「真のプレイの緊縛とは、こんなものだよ。さあ、いいいたくなければいわなくてもいい。

朝までこうして放っておいてやるから……」

聞こえたのかハツコは、しきりに口をモグモグ動かしている。この立錐の余地もない緊縛に、しばしみとれて、私の嗜虐の高まりはゆきつく処まで行きついた感があった。この行為に対し、帰宅後ハツコが、父にどのようなに喋るかは、その刹那では、もう思考の外にあった。むしろ、どうせ父親に尾鰭をつけて告白するのなら、やれるだけやった方が得だという、八方破れの気持の方に傾いていたのかも知れなかった。

再び、モグモグと、ハツコの唇が動く。何かいいいらしかった。猿轡の縄を首にずり下げて、喋れるようにしてやる。

「オジサン、なんでそんな事ききはるの？」堰をきったような勢いでハツコは叫ぶようにいった。その声は悲痛な、泣き叫ぶような口調であった。ハツコの真剣さに気圧されて私は咄嗟に返事が出来ない。

「それを言うのだけは勘忍して……あたいの口からはいわれへんのよ。その代りオジサンのいうこと何でもきく……何でもする……だから、もうこれ以上きかんといて」

泣いている——確かに。ハツコにとって、それは恐ろしい肉体の秘密であるのか。或る

しをして猿轡を外す。誘導して坐椅子に腰を据えさせ、揃えている両膝をぐいと開く。垂直に下った縄がピッタリと喰い込み、柔らかい肉を責めつけていた。

「ハツコ——隠してもダメだよ。いつ交渉があったのだ」

「……」

想念にぶつかって私はハツとした。刹那、忌わしい連想が胸をよぎった。肉親相姦――。

脳裡に浮かべた想いは、余りにも無惨な想像であった。確固たる証拠は何もない。証拠はなくてもその想念は、私の心に烙印のように灼きついて、心に重くのしかかっていったのである。

虚言症と思われる長井葉津子にとっても、どうしても守らねばならぬ秘密は、断固として守り続けているのであった。恐らくこの娘は、私とのプレイに対しても、父親に或る程度以上（ハントに書いてある以外のこと）は喋るまいと確信をもったのであった。

そっと眼隠しを外してやると、布はしっとりとしめりを帯び、ハツコは赤く眼を腫らして、とめどなく滂沱と溢れ出る涙を流しつづけていた。哀れさが、ぐっと胸にこみあげ、そのあたたかい涙を、私は貴重な宝物のように、舌端をぬめらせて吸いつづけていた。

「悪かったねハツコ、ついプレイに熱を入れ過ぎて泣かせたようだ。もう何も聞かないし言わないよ」

涙の粒をためた瞳に、柔らかいかげがさして、

「ええの、せやけどオジサン悪い人――。あ

たいを虐めて、こんなに泣かせるんやもん」

「父ちゃんにいうか、今のこと？」

「いわないよ、絶対――」

ハツコはキッパリ言って、晴れやかな笑顔に戻った。

「オジサンが気にいったんやったら、あたいを朝までこうして、くくっておいてもいいんだよ。なんぼでも辛抱するさかい……」

いじらしいハツコの言葉に、ぐっと胸をしめつけられたが、長々と縛りつけておく気は更々ない。ハツコの協力的な言葉で、却って逆にあわただしく、私の手は縄をときにかかっていた。

縄目の痛々しさに、行き過ぎを反省していると、ハツコは体中を撫でさすりながら、

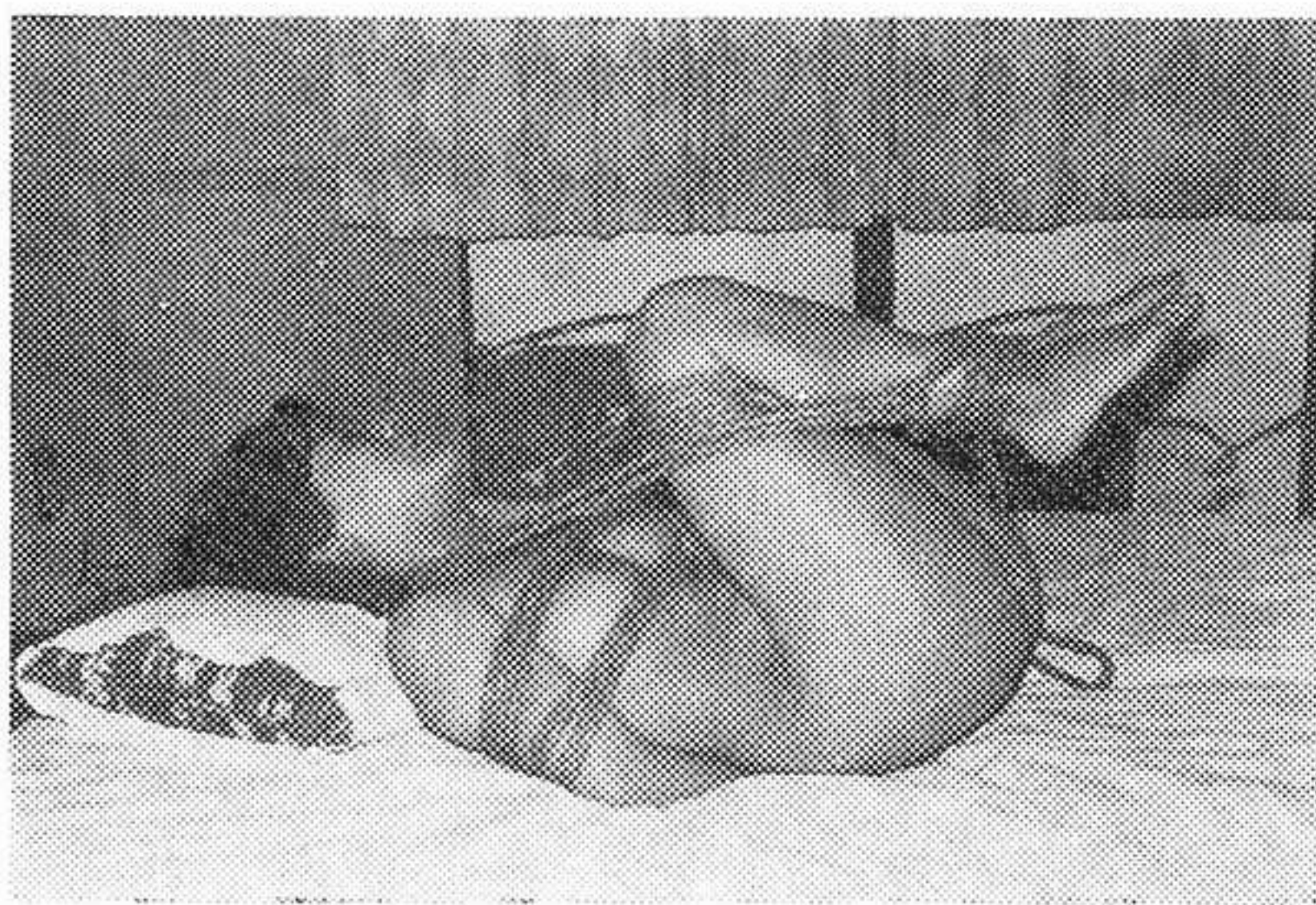
「オジサン、本当に朝までくくってはっていいんよ。あたいたい好きなんやもん、くくられるのが……」

言い終るや、両手で顔を蔽って、私の腕の下をさっとかいくぐると、マットレスに俄破と仰向けに倒れ、あたかも私の次の行動を待っているかのように、ニッと笑った。

確かにハツコは、私を誘発しようとしている。ピチピチした、若さに溢れた女体は、疲れを知らず夜もすがら、唯ひたすらに、プレ

イに耽溺したいというのであろうか。私は肩をすくめて、二度三度、首をひねった。又ぞろ四十肩の凝りが、こんな重大なチャンスにもかかわらず、私の首、肩の筋肉を固く硬直させていった。

恐らくはこれが、最後の縛りになるかも知れない。そんな想念で私は縄を捌いている。



今、マットレスに横たわるハツコの女体は激しく弯曲して、両膝が乳首すれすれに接触していた。曲折した足首と膝の縄は、うなじに廻した縄に連結されて、このポーズを保っていた。

ヴィナスの丘は、むき出しにされて浮き上り、叩き頃合の位置にあった。

後手に縛った俤、もうかなりの時間、そのポーズをつづけさせている。私の戯れる姿がありありと鏡にうつるのが気恥かしくて、鏡の小襖をしめると、何をしようとお氣に召すまま露わな姿に、男の本能は、やはりむき出しの臀部を間近にみて、私をそこへ坐らせていた。

首筋もひきつれて、かなりにだるいだろうに、ハツコは一向に外してくれとも云わず、無理な姿を我慢して続いていた。

縛っておいて、合意の上、自由奔放に若い女を扱う——これは中年の男の、冥利につきるものであった。私の手がハツコの両踵を持ちあげて、顔が素肌に近づく、

やがて私の唇がそれに近づいて行く。それはプレイの有終の美を飾るにふさわしい贈りものであった。

乱れに乱れて、私がやっと眠りについたの

は午前二時——。灯りを消した、ぬばたまの闇の一時半の行為は、私とハツコだけがしている二人の秘密である。父親はこのハントをよみ、そして又ぞろ激しくハツコを詰問するだろう。いってもよし、頑強に抵抗して口を閉じて尚よし。唯、それをあからさまに書くには、余りにも得難い夜であり過ぎたという事実である。

大小のバイブレーターが三個、濡れて私の枕元に転がっていた。

× × ×

短か夜が白んで、波濤の響きのみ、夜っぴて私達の耳柔を打っていた。一寝入りしてめざめると、もう朝の光が、微かに闇にさし込んでいた。

夢床に、ハツコを縛った俤放置しておいた夢をみて、その想念が、いつになく早々と私を目覚めさせていた。

連続する興奮に、眠れなかったのであろうか、私を凝視する眸が、見開いた眼と、いきなり空間で接触した。ハダカの俤のハツコは満ち足りた羞恥の笑顔を、私に投げてよこした。

朝風呂に誘うと、ためらいもなくうなずいて、マットの足許で丸まっている浴衣を手早

く纏うと、私のあとについてくる。

早朝でありすぎるためか、大浴場は未だ寝静まっていた。浴場は、ホンのたった今あいた許りのようであった。

夜明けの鈍い光で、ハツコの白い肌をしみじみとみつめる。ハツコの白い肌に点々と存在する赤いアザ——。

私は、ありありと昨夜のことを思い出す。あのむせび泣くような、哀憐の口調で、肌を吸ってアザをつくってくれと懇願したハツコの、やるせなげな甘い声を——。

“白い肌のアザ”それは彼女が、いみじくも奇くに書き送った、告白の短文に端を発して今ここに数十個所の、濃淡とりどりのアザがプレイの名残りをまざまざとみせつけて、素肌のすみずみまで行き届いて烙印のように赤く肌を染め上げていた。

ハツコを抱きかかえるようにして湯舟に沈むと、湯づらにポツカリと浮上った丸い柔らかい肩の肉に、力をこめて最後の愛咬をこころみていた。

甘い呻きを殺して、ハツコは犇と私にしがみつき、力をこめて離れた肩の肉に、齒型はくつきりと齒列をレリーズのように浮き上らせて、鮮かに烙印されていた。

S.C.R. (性問題相談室) 案内

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関する解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

それが、ハツコに送るプレイの最後のはなむけであった。

……
今日も又、太陽は熱い。

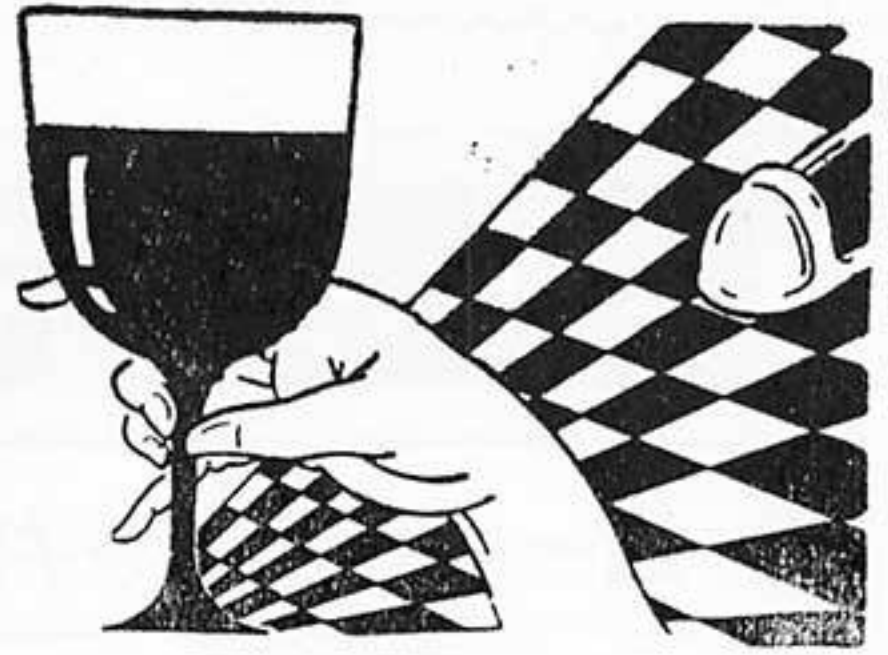
浜島から御座へ、奥志摩フェリーボートでわたり、波切の大王岬の灯台へ昇り、鵜方、磯辺を越えて一路鳥羽のスカイラインへと、私のコルトは快調に走った。

助手席のハツコは、流れ去る窓外の景色にいちいち無邪気な歓声を挙げる。

痴夢か悪夢か——昨夜の、あの激しいプレイをケロリと忘れたかのように、長井葉津子は心から浮々と愉しげに、私の体に背を持たせかけていたが、いつかな静かになり、気がつく、軽い寝息がハツコの半開きの唇から微かに洩れて、さも気持よさそうにスヤスヤと私を父親のように信頼し切って、肩を枕に深い眠りに入ってしまった。

番茶も出花の娘十八、疼く素肌の激しかれとは祈らぬが、この豹変の見事さに、中年男はほとほと感嘆しながら、そのくせ結構楽しい気になって、大阪への道を、一路急いだのであった。

(おわり)



ゆうもあ・フェチ・ストーリー

特製スープ

香川 泳三

やっちゃんは、ある貿易会社の社長邸に住みこみで働くお手伝いサンだ。

映画スターの浅丘ルリ子をおもわせる、ぬれたような瞳の、容姿端麗な美女。としては、はたちとか。

『彼女の仕事は、社長のひとりっ子の五才のワンパク坊やの世話係。ケンちゃんという、その坊やは、天衣無縫のイタズラ小僧。毎日毎日を、手あたりしだいに、広い邸内を駆けめぐって暴れ廻る。両親は殆ど外出がちで、二人きりのことが多く、片時も目がはなせない。』

やっちゃんは、だから、トイレへいくときも、小僧がしんぱいで、オチオチいつてられない。致し方なく、小僧同伴ということにな

る。お供をさせられるケンちゃんは災難だがある意味では幸福者かもしれない。

「おもしろいのよ。カレ、クサイ、クサイ、とハナをつまみながら、でもものぞきこもうと、すんのよ」

イタズラ小僧の面目躍如たりだ。

しかもまっさい中に、ケンちゃんモミジのような手をだしたこともあったという。

「ビックリしたわ。ぬれた手を引っこめようともしないんだなあ」

やっちゃんも、そこでストップもできず、いいかげんやきもきしたらしい。

イタズラをこらしめてやろうと、その手をケンちゃんの口に押しこんだというから、やっちゃんも仲々やる。

立ち入った質問を発してみた。

「大きいほうのときも、連れてくの?」

「仕方ないでしょ。あたし、時間をかけて、ゆっくりやるほうだもの」

だとすると、余計に必要だろう。

やっちゃんは、時々いじわるしてやるという。

「ケンちゃん、オイチイかもよ」

どうも、やっちゃんには、いささか異性を苦しめて喜ぶケがあるようだ。

「食べないと、ブツよ」

やっちゃんは、ケンちゃんの首根っ子をつかまえたそうだ。

そのあと、どうなったか、ただしたが、「ご想像にまかせるわ」

やっちゃんの命令なら、五メートルの、庭のマツの木によじのぼってみせるケンちゃんだもの、おそらく「ボク、いやだ」とは、いわないだろう。

「パパやママに言ったら、これからはいっしょに入れてやらないよ」なんて一発ドヤしておけば、このヒミツをパーにしちまうことのソンカトクかぐらい判断をつけるのではなからうか。

やっちゃんは、いつも身近かにいて、どんなことでも喜んで命令に服従するケンちゃんが、かわいくてたまらないらしい。

○

オニゴツコも、やっちゃんのリードで毎日のようにする。どちらかが、おひめさまになり、イジワルオニが、かくれ場所をさがす。

おひめさまは、ケンちゃんの役ときまっている。広い邸内だから、かくれ場所は、いくらでもあった。ママの衣装の入ってる納戸は絶好のかくれ場所。ケンちゃんは、ドキドキしながらタンスのかげに身をかくす。

つかまることにきまっていた。

「食べちゃうゾオ」

こんどは、やっちゃんが、食べる役だ。ふるえるおひめさまを、おっかないオニは

抱きしめ、キバをむいて噛みつく。やわらかな、おしりの肉は、オニの好物にちがいない。

オニは逆ウマにまたがり、軽く叩いたり、首ねっこを太いモモでせめつけたり。おひめさまはモミクチャにされ、おそろしさに声もでない。しかし、オニのからだはやわらかく乗りかかられてもたいして苦しくない。オニは乗りつぶしてはいけないので、加減して中腰であった。

おかしな格好してたからか、オニさん「スーッ」と中型のヤツを、一発やっちゃった。

おひるに食べた、ポテトフライが気体になって、一挙に殺到したのだから、これはとくべつくさかっただろうと、オニは思った。

ケンちゃん、目をシロクロ。

「毒ガスだぞオ」

やっちゃんは、テレかくしに、そういったが、毒ガスはつづけて二発、三発。

さすがにケンちゃんは、へんなかおしていた。

「おねえちゃん、トイレにいこうよオ」

そんなやっちゃんでも、お風呂のときは、おとなしい。

お風呂は、ママが帰った日だけは、ママとケンちゃんと三人ではいる。はいるというとかっこいいが、じつはママのせなかを流すのが、やっちゃんのアルバイトなのだ。一回五百円の約束がある。

せなかだけではなく、すみからすみまで洗うのだから、これは重労働であった。五百円では安いと思っている。

ケンちゃんは、ママがいるときだけ、暴君だった。

ママのつま先を洗うために、タイルに這ったやっちゃんは、おしりに、なまあたたかいものを感じた。

ひょいとふりかえったら、ケンちゃんがピナツみたいな銃口を向けていた。

こないだの、毒ガスのお返しのもりだろうか、この奇襲にはめんくらう。

「ケンちゃん、いけませんよ。タイルが汚れるワ」

ママが、たしなめた。

タイルも汚れるだろうけど、命 midpoint も汚れるわ。タイルは、だいじだけど、あたしのお尻ならいいというのかしら。

ムツとしたが、ママの眼前でケンちゃんをひっぱたくわけにもゆかない。

ママは、お風呂のとちゅうで、浴室の片すみの便器に向かった。いつもあたまると、出したくなるくせがあるんだ、このママは。

「アララ、カミが足りないわ」

とはいったが、どうってことない顔付きで浴槽へザブリ。

あとであたしが入るのに……。やっちゃん
は横眼でじろり、ママはケロリ。

親も親なら、子も子だわ。ハラが立ってきた。

順序をどう思ってたのか、ママはザブリと湯から立ちあがりざま、チョイチョイと、そこにあった、きいろういタオルで、拭くマネをした。

きいろういタオルはパパ、つまりダンナさま用。でも、やっちゃんは知らん顔してた。

キッチンでは、おいしそうなコンソメスープが、コトコト音をたてて煮えながら、うまそうな香りをたてていた。

これを冷やしたヤツは、ケンちゃんの好物のひとつ。おひるは、このスープとサンドイッチにきめている。

「おねえちゃん、スープ出来た？」

ケンちゃんが、キッチンに入ってきた。

「できたわ、きょうのスープは特製よ」

「トクセイってなあに？」

「どこにも売ってない材料で、おねえちゃんが念入りにつくったの」

やっちゃんは、きげんがよい。

こないだのお風呂の、水鉄砲のカタキをとってやろうというのだ。

材料は、食料品店にもスーパーにも、デパートにも絶対に売っていない、貴重なやっちゃん特製のもの。さぞ、おいしかる。

でも、こしらえても、ご本人は味をためすわけにやいかない。しかたがないから、調味はカンでやった。朝からのを、ガマンしてためといたので分量がすぐできてしまった。とてもケンちゃんひとりで平らげられるもんじゃない。バレたらことがめんどうになる。あのだケチなママが、

「モツタイないわ。そんなにウマにやるほどこしらえたりして。ケイザイを考えなさい」
なんて、おのれの不経済的日常をタナにあげ、大きなクチをトンガラカスにきまっている。

少々、量をへらしとこうか、と流しにソースパンをかたむけたとたん、手がすべり、せっかくのなかみをあらかたこぼした。

でも、原料には事かかないのが、やっちゃんスープの特長。

さっさと、ナベを床におき、原料の追加作製にとりかかった。健康的なサワヤカナ音をたてて、再びナベは八分目。わけはない。

その、ヒミツを要する作業を、ケンちゃんが、食器ダナにかくれてのぞき見していたのを、さすがのやっちゃんねえさまが、気づかなかったのは、一生の不覚だったかもしれない。

ケンちゃんは、問題のスープを三バイもおかわりした。やっちゃんも、ひとくちすすりたくなかったが製造中をおもいだしてやめた。

「おねえちゃん、スープのモトって、おうちで作れるんだね」

「ナニねごといつてるのよオ、舶来よ」

「ヘエ、それじゃおねえちゃんガイジン？」
このごろのガキは、ませてるね。舶来品をつくったヒトは外人ときめる発想法は、的を射てナカセルね。それにしても、やっちゃんは少し読みが浅かった。

「やっちゃん、お客さまだ」

とつぜん、ダンナさまが、二人も客を連れ

て帰ったのは、めずらしいことだった。

「ケンのやつは、スープか。よかろう、とりあえず、おれたちもそれとサンドイッチでいぜ、腹ペコなんだから」

ボードから、ナポレオンブランデーのびんをだして、ダンナはゴキゲン。でも、せっかくのご注文だけど、困ったね。わかったら、コトだよ。

「さあ、セルフサービスとゆくか」

せかせかと、キッチンにとってかえしたダンナは、スープいりのソースパンを持って行っちゃった。

知らぬがホトケとは、これだ。

困ったナア。浅丘ルリ子が、こんどは山本リンダになっちゃった。

ブブー、ブザーが鳴った。サロンで、ダンナがよんでるのだ。やっちゃんはドキッとした。

「あのナ」

ダンナは、トリオスカイラインの、まん中で、よくわらわせるハッちゃんみたいな声をだした。

やっちゃんは逃げ出す構えで次のことばを待った。だが……。

お客さんが、とてもスープが気にいり、す

っかりカラにしちまって、あと、お代りしたいといってるんだから呆れた。

ママにナイショで、チップやるから、大至急たのむというけど、ついさっき原料をカラにしちゃったばかり、当座の間には合いそうもない。

「はよ、つくって、つかあさい」

ダンナは甘えている。ママが居ないと気が楽なのはよくわかる。が……

「あのー、あのー」

あとが出やしない。やっちゃんは弱った。

「すばらしいスープですねえ。つくりかたを教えてくださいませんか」

お客のひとりが、半分オセージみたいのに、手帖をだした。まんざら、お世辞ともおもえない、やっちゃんは、立往生した。

ケンちゃんは、さっきからおとなしく、みやげにもらった絵本を開いてたが、とつぜんこちらをむき、

「ボク知ってる。おねえちゃんが、しゃがんだら、できちゃうんだ」

どなるように、そういい、なぐられない先に逃げていっちゃった。

「エー？」

オセージのうまい客は、手帖をそのままにして棒立ち。狐につままれた時の見本だ。

「そりゃマ、どういことなんでヤンス？」
やっちゃんは、チップをあきらめて逃げだした。

それから十日のちのこと、パパは、ケンちゃんのバクロした不可解な一言がどうにも放っておけず、ついに、ケンちゃんをおだてておねえちゃんの、ヒミツを解明した。

しかし、どうも相手が、浅丘ルリ子のそっくりちゃんじゃよわい。

ダンナはかえってやっちゃんスープにほれこみ、すっかりトリコになってしまった。

いらい、ママのすきをみては、パパも、ケンちゃんも、やっちゃんの特製スープに Netz をあげた。

この家のスープといえば、親しい客の評判になっているが、原料の仕込先はどこなのかは、パパと、ケンちゃんと、製造元のやっちゃんのほかに誰も知っていない。

ただこのスープは、妙に塩からい日と、そうでない日があった。

(おわり)



~~~~~ 緊 縛 写 真 私 見 ~~~~~

## 残 酷 美 の 映 像

し ち か わ し ろ う

### 一、映画における美と醜

「日本拷問刑罰史」以後、拷問、責めをテーマとする作品が数多く作られ、上映されています。これらの映画に現われる残酷場面について「美」という観点から私見を述べてみたいと思います。

その前に、映画という表現技術の特質について考えておきたいと思います。今さら言うまでもなく、映画の長所は、カメラの前の被写体の動きを時間、場所を超越して、何時でも、何処でもスクリーンの上に再現できる点にあります。記録するという点で写真、絵画、文字に勝る映画独得の長所であります。しかしながら芸術の表現として映画を使う場合、そこには多くの困難があり、そこに監督とかカメラ撮影技師、美術専門家といった特

殊な技能や芸術的感覚の優れた人々を必要とする理由が生じてきます。

さて、素人の映画技術論はこのくらいにして、実際の場面から残酷美と醜について感じたことを述べましょう。

「日本拷問刑罰史」は空前の成功をおさめたときですが、その成功の原因は、人間のサディズム、マゾヒズム心理を擲んだ初めての作品であったということが、一番大きな原因でしょう。そして映画の撮影にあたって、名和弓雄氏という拷問刑罰の研究家の指導協力を得て、時代考証の面でもあまりひどい場面も無く、拷問の場面では縛り方そのものにも真実性がある迫力を持っていたことが矢張成功の一つの原因になっていたと思います。また、本来拷問というものは陰惨で醜悪なもので、決して美しいものではあり得ないので

すが、苦痛の悦び、責められる肉体のエロティズムというサディスト、マゾヒストの夢を拷問という歴史的事実の再現という形式の中で創造したというのが、この映画の意味ではないでしょうか。

もともと美しい女性が、肉体の苛責による苦痛、羞恥から発散させるエロティズム——これを欠いたら、この種の映画は交通事故のドキュメンタリー映画と同じく、醜悪で陰惨なものになってしまうでしょう。

例えばギリシタンの娘の木馬責めの場面。スクリーンの中央に、鋭く尖った木馬が写し出される。そしてギリギリと滑車の廻る音のみが観衆の耳に聞こえ、やがてスクリーンの上部から女の足が静かに木馬の上に下りてきて、画面一ぱいに、腰巻一つの半裸の娘が荒縄で後手に縛られて、吊るされている姿が写



し出される。このあと木馬にまたがらされた娘の悲鳴と、責め役人の動きが写し出されませんが、それまでのカメラの動きは、責められる女の姿態を観客に充分見せています。この手法は、押し込み強盗に入った夫婦が捕えられて種々の拷問を受ける場面でも、とらわれています。

吊り責めの場面では、二つの滑車がクロージアップされ、キリキリと縄がたぐられて廻っていく所からはじまり、カメラが縄の先の方へゆっくり移動して、腰巻一つで後手高小手に縛りあげられて吊るされている女と男の姿態を写し出します。手首が肘より高く上がった、本格的なきびしい縛りのままで吊るされている女は、羞恥と苦痛を全身に現わしてゆっくりと回転している——この吊り責めの場面は、他のそれ以後のどの映画にも見られない本格的なものでした。

この映画以後「拷問」「女拷問」といった作品が続きますが、カラーをとり入れながらも「日本拷問刑罰史」には及ばなかったようです。一つには、しっかりとした考証家なり指導者がいなかったことが、その原因だと思います。

続いて、東映の拷問映画の登場となりますが、それがわたしには大きな期待はずれとなりました。徳川時代という浮世絵、草子本、そして物語り等優れた日本文化を生み出した

時代を背景にした残酷物語に、浮世絵のエロティズムを期待していたのですが、醜怪な場面が大部分で、如何にもグロテスクでした。監督の美的感覚を疑わずにはいられないのですが、折角、辻村隆氏というベテランの協力と美しい女優を使いながら、独立プロの作品並み、もしくはそれ以下でしかあり得ないのは残念です。

わたしが見たのは「徳川女刑罰史」「元禄女系図」「徳川いれずみ師」ですが、印象に残っている場面が、殆どないのです。思い出そうとすると、妊婦の腹を裂いて胎児をとり出したり、男の首を抱えて逃げ廻る尼の姿や磔の女や、竹で股裂きにあう場面といった陰惨な醜怪な場面ばかりで、責められる女の美しさ、エロティズムを現わしている場面が殆ど思い出せないのです。

女の縛られた場面でも「徳川いれずみ師」で、外人の女が殆ど全裸で、木馬責めや吊り責めにあっていく場面がありました。拷問に至る過程の設定の粗雑さと、拷問場面の騒々しさ、めまぐるしさ、執拗さは責められる女のエロティズムには遠いもので、出演する女優は大変だろうと同情の気持を禁じ得ません。

ずっと以前に「女・女・女物語」という娯楽映画がありました。女プロレスや、いろいろの女の姿態を写したカラー映画でしたが、

その中でサド、マゾの例として、女を縛って写す男達の話が出ていました。

ゆかたを着た若い女が、座敷の中に突きとばされて入ってきて、部屋の真中に倒れるように坐ります。その後方からロープを片手にぶら下げた男の足が近づいてきます。女の後立った男は乱暴に女の両手を後ろにねじあげロープを巻きつけ、次いで胸の上に一巻き二巻き巻きつけると思いきり締めあげます。瞬間女の腕は後手に高くあがり、胸にまわされたロープがかすかに音をたてて締めまり、女は苦痛の表情を示して、両膝をあわせようとします。美しい女性ではなく、ごく普通の女でしたが、縛られる苦痛と、自由を失う女の羞恥がよく現われていた場面でした。

これも古い映画ですが国定忠治を主人公とする映画で、病気で動けなくなった忠治と、その妻の木暮実千代が捕えられ、引立てられていく場面で、木暮実千代がきっちり菱縄をかけられて、縄じりを取られて歩いていく場面がありました。妖艶な年増女である木暮実千代の緊縛姿態には残酷という感じはまるでなく、コケティッシュなまでのエロティズムが溢れ出ていました。

このような、責められる女の美しさ、エロティズムを、スクリーンに再現する映画がないものか。いくら拷問というテーマであっても、残酷さより、折角美しい女優を使う



のですから、その美しい女優が縄で、拷具で責められて生ずる苦痛と羞恥、エロティズムを、じっくりと見せる映画の出現を期待したいものです。現在のようなエログロのみの作品が氾濫することは、サディズム、マゾヒズムの正しい理解と寛容を失わせるものとなることを心配します。

## 二、写真における残酷美

奇譚クラブという雑誌を、本屋の店頭で初めて見たのは学生時代でした。そして「風俗草紙」とか「風俗科学」などという亜流の雑誌が次々と出現し、他のカストリ雑誌なども責め写真を掲載していました。奇クのグラビアに発表された縛られた女の写真は、初期の頃は全裸の物が圧倒的に多かったようです。それらの写真の必ずしも全部が優れたものとは云えないのですが、その後、今日までの奇クを通して見る時、初期の頃の作品には、緊縛美の追求という点で真剣な努力なり熱意を感じさせられるものがあります。その事は当時の誌面に発表されている辻村氏やモデル嬢の告白などにも充分あらわれています。写真というものは、映画とは異なるむつかしさを持っていることは今更わたくしが云うまでもないことですが、それは人体の絶え間ない変化と動きの中で、その一瞬の状態のみが印画紙の上に表現されるに過ぎない所にあります。

同じ人物を写しても素人とプロの違いがはっきり出るものです。その点では、初期の頃のグラビアなり分譲写真なりは、素人臭さが目立ちます。(失礼)

しかしそれはそれなりに良さもあるので、例えば折り込みグラビアの中に、または表紙裏に、緊縛美の断片として文字通り縛られた女の足首だけとか胸の部分といったものが掲載されていましたが、それがどのような姿態の一部なのかを想像するのは案外楽しいものでした。また川端多奈子嬢をモデルにした全裸の荒縄縛りなど、荒むしろの上に正座してうつむいている姿態には、残酷な情景に置かれた全裸の自由を失った女の羞恥が、よくあらわれています。

また、分譲写真の中で、吊り責めの組写真があります。全裸で後手高手小手に縛られた川端嬢が、一米くらいの高さの机の上に立っています。次の写真では机が足元から少し移動して、川端嬢は身体の平均を失い、吊り縄にもたれかかるような姿態になっています。次は机が、辛うじてつま先がとどく所まで動かされ、川端嬢は完全に吊り縄に身体を支えられて、離れようとする机を離すまいとするかのように斜めになっています。このような状態では、責め手が女体の向きを一寸変えるようにするだけでも足は机から離れてしまい女体は宙に浮いてしまうでしょう。そして四

枚目が完全に吊るされている姿態です。手首は肘より高くあがり、胸と腕、手首だけにによる完全な、本格的な全裸の後ろ向きの吊り責めの姿態です。吊り責めに限って云えば、このような本格的な、というのは、高手小手に縛った状態を、吊りの苦痛を少なくするため腰と連結したりポーズだけでゴマカスようなことをせずに、しかも全裸で写した写真は、残念ながら他に見られません。この写真は今でも分譲写真としての価値は大きいものがあると思います。若し当時のネガが使用可能なら、是非分譲してほしい優れた写真です。どちらかというと美人とは云えないモデル嬢でありながら、拷問の迫真力と女体のエロスが充分あらわされた作品だったと思います。

後に梨花嬢、大塚嬢、絹川嬢その他多くのより優れたモデル嬢が、グラビアに、分譲写真に登場してきますが、そしてそれぞれ吊り責めのフォートがあります。縛り方に今一つ不満なものがあります。

一方風俗草紙は伊藤晴雨流の和風好みの責め写真が多かったようです。モデルも当初から美しい、色気のある女性を使い、ムード的な好写真が掲載されていました。このような写真では、ムードというか状況設定がよくされているということが、欠くことのできない条件ではないでしょうか。もっとも写真の面では優れたものを持ちながら、誌面の内容の



面で奇クとは比較にならない粗雑さから風俗草紙は廃刊になっていきました。

白表紙時代の奇クでは、大塚啓子嬢をモデルとした「縦と横の線」と題する全裸の野外における縛り写真が、縛りのきびしさと女体のエロスを実によく出している優秀な写真です。

復刊してからは、梨花嬢の登場となりますが、このモデルは責められる女の苦痛、哀れさ、エロティズムを表情に、また全身ににじみ出させる得難い女性だと思っています。この女性を江戸時代風にメーキャップして、全裸でまた衣裳をつけさせて「日本拷問刑罰史」の海老責め、吊り責め、駿河責め、木馬責め、石抱きを、拷問蔵の設定で写せば優れた残酷美の写真ができるのではなからうかと思いま

す。また晴雨流の雪責めなどいいでしょう。

ここで、私のいう優れた写真とは、どういうものを指しているかといえますと、一口にいうとムードと動きのある写真です。ムードはともかく、映画と異なって動きのない固定した映像を持つ写真で、動きを持つというのはどういうことなのか——例えば吊り責めの場合、ぐるぐると多くの縄を胸から腹、さらに足腰にまで巻きつけて手首は尻近くにあって吊るされている写真では、全くみの虫がぶらさがっているような固定化した写真にしかならない。多くの縄で圧迫されて筋肉は微動もできない。それは同時に、肉体のエロスも圧殺してしまつて、実に感動も美感もない平板な写真にしかありません。一方、胸部にせいでい四巻きぐらいの縄で、腕にも二巻きか

【伝言板】 ○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます故、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚 フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛願います。○御送金は、現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載していないものは在庫のないものがありますので、旧号に依つてのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。

三巻きぐらいの縄で縛られ、今まさに吊りあげられようとして、片膝立ちで吊るされるところに抵抗している姿態。あるいは台の上に立たされ、その台が男の手で外されようとしていて、身体の平衡を失なおうとしている姿態には、空中に吊るされた時、もはや身体の中の部分も隠す術がないという、不安と羞恥にもだえる女のエロティズムがあります。そしてそこには、その前後の女体の動きが予想されます。また吊るしてしまつた段階でも、壁にはしがが立てかけてあるとか、吊り縄が引張られている様子などを入れることによってムード的にも動きの上でも効果があると思います。

ムード的な美しさ、エロティズムという点からいうと、奇クモデル嬢達は総体的に色気の面で欠けるようです。これは奇クのモデル嬢の長所でもあります。素人であるせいか、専門のモデルのように巧みに色気を羞恥心の現われのように出せないようです。

いろいろと書きましたが、カメラの趣味を持つ者として、写真のむつかしき、特に人体の場合のむつかしさは充分わかるのですが、分譲写真等で、一そう優れたものができるとを願う次第です。

もっといろいろ書きたいことはあるのですが初めての投稿でもあり、長くなりすぎる嫌いもあるのでこの辺で終りたいと思います。

カット写真・東映「徳川女刑罰史」



懸賞創作入選作品

愁鬼館

(下)

# 悪魔の敗北

高杉愁郎

## 夜想曲

純白の衣裳をまとい、綺麗に薄化粧をし、肩を覆っていた黒髪を高く結上げて、大きな寝台に夫を待つ。

あえかな、美しい、期待と不安に心ときめかす新婚の初夜、――

眼に映るかぎりでは、幾度も幾たびも夢にまで見、憧れ、想像した愛の幻と寸分違わぬ春の宵なのだが。

満天を彩る星の群、朧な月。

木立ちをぬける、かすかな夜風――。

涙が落ちて、レースの衣に散った。毎日を涙に暮らして、涸れ果てた筈なのに。

母の笑顔が夜空に泛かぶ。

父の姿が懐しい。

優しい兄、可哀想な弟、ああ、茂行。

また一筋、雫が頬を伝う。

数多い友人、劇団の仲間。

皆、悲しそうに見える。あたしの悲しい運命を、泣いてくれるのだろうか。

両腕で胸を抱きしめてみよう、きつく。久しぶりに自由な手足が、今はかえって恨めし

い。

星が流れた――。

出来ることならば、あの星の落ちてゆく先までも、逃げようものを。

遁げて、遁げて、自由になって――。

悲しい。

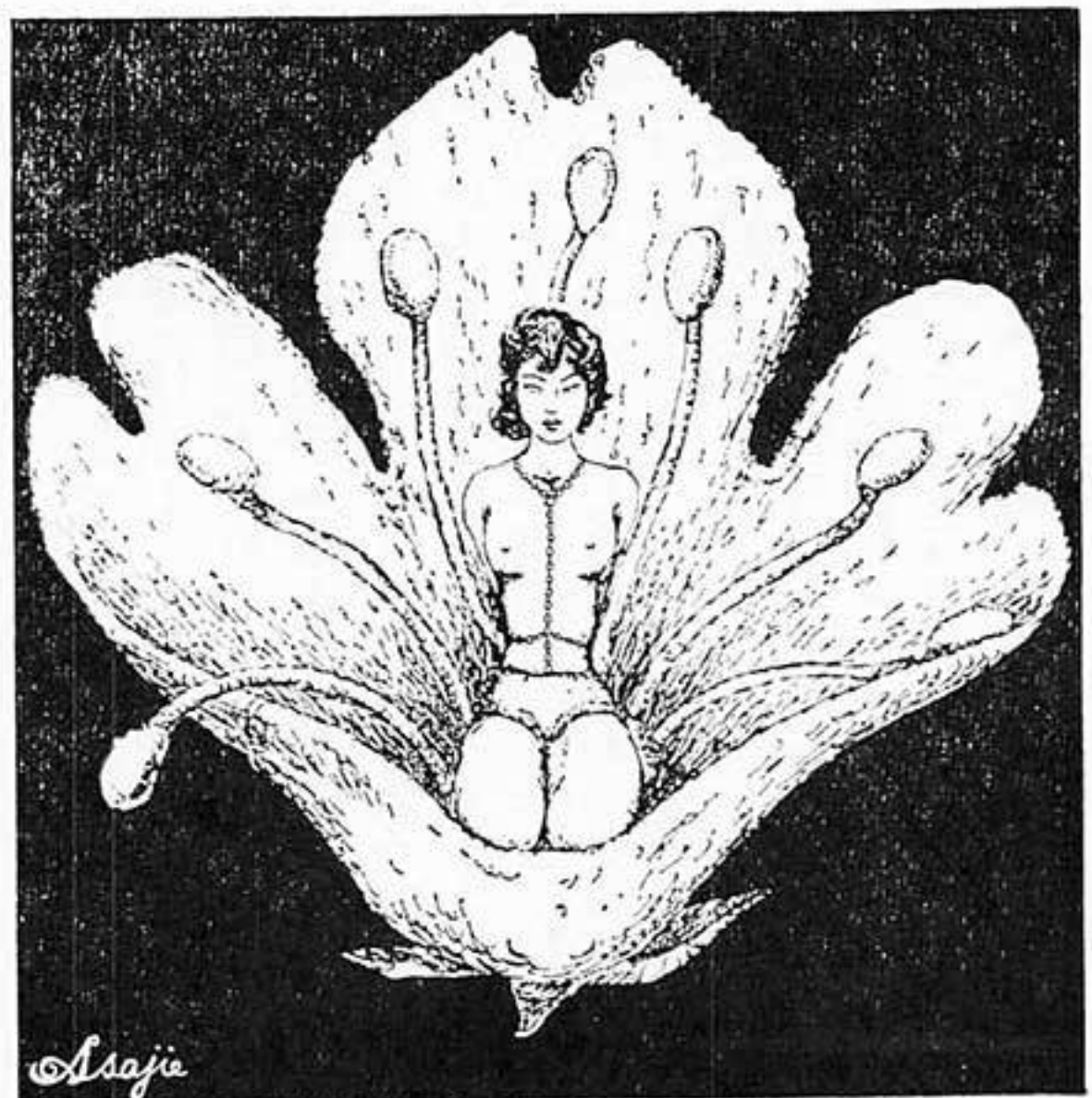
あたし、川崎彩子……二十一才のおんな……

…。

口惜しい、呪わしい……おんな。

結婚！

ああ、苦しいこと……。





噛み殺す嗚咽に、肩が激しく慄えた。

カチャリ！——

ドアが開いた。彩子は振り向き、いっぱいに決意を漲らせた黒い瞳で、杉を見た。

## 嬉遊曲

淡い水色の紫陽花が、降り続く雨に物悲しく項垂れている。小さな薄紅の合ねむ飲の木の花も、淋しく空を見上げている。

愁鬼館は長雨に煙って、儚なげに建っていた。

捕えられてから初めて、彩子は屋敷の外に出ることを命じられた。買物をするために。

目隠しをされて車に乗り、大分走ったと思われる頃、後の席のK坊に眼を覆う布を取られると、そこはもう新宿の大通りである。

三カ月振りに見る東京の街に、彼女は窓に顔を寄せ、食い入るように、雨に濡れた建物や、色とりどりの傘の群を眺めた。

杉は車を都心に向けて行く。

(あの日は晴れていたわ)

杉を横眼で見ながら彩子は憶い起こしていた。運命の枷の中に一步を踏みこんだ日のことを。

今日のK坊は、K子であった。外出の時は常にK子で、公の場では小説家、杉の魅力的な秘書役として、人々に記憶されていた。

襟の高いスーツの上に赤のレイン・コートを着、同色のレイン・シューズを履いた彼女は、青いコートの彩子に比べて、その美貌に少しも遜色なく、かえって女としての酣けた妖しい魅力は一段と立ち優っていた。

彩子は、この艶麗な両性動物が傍に居るだけで身の毛がよだつ。服装倒錯者が陶醉に浸りながら、外見ばかりか心の底までも女に変性する有様に、厭らしさと不気味さを感じていた。

杉には人間らしさが窺われた。少くとも憎悪の対象として見る事が出来るからだ。

車は銀座に出、地下駐車場に止まった。

「さあ、降りなさい」

K子に促されたが、とても外に出る気はない。愁鬼館と関係のない、自由で幸福そうな人達を見るのは、あまりに自分の辛い境涯を覚えさせられて堪えられない。厭だった。

しかし、晴美と遊んでいる——と、杉は云った——弟のことを考えると逆らうことも出来ず、諦めてドアに手をかけた。

車から脚を出すと、レイン・コートの裾が

翻り、太腿が付根まで露わになった。反射的に脚を縮め、動作が停止してしまう。青い雨衣の下に彼女は、何一つ着ることを許されていないのだ。

夫婦なのだから、と杉に腕を組まれ、引きずられるようにデパートの入口まで連れて来られた。

「彩子さん」

後方から、鼻にかかった声でK子が呼びとめ、その細い指に挟んだ紙片をひらひらと彩子に手渡して云った。

「これが、お買物の予定表。忘れずに全部買ってきて頂戴。奥様の役目ですものね。初めてだから、先生、よろしく願います。あたくしはお店の方に行きますから」

綾子の経営する服飾店のことらしい。

「君はその間、ボーイ・ハントかね、女郎蜘蛛さん」

「いやな、先生」

K子は長い髪をひとふり、香水の香りを残して笑いながら去ってゆく。通り過ぎる男がその声と美しさに振り返り、足を止めた。

彩子もまた、違った美しさに溢れていた。

熟れ切らない果物に似て、硬いが清纯の中に高貴とも云える初々しさがあり、若鮎のよ



うに引き緊った肢体、何よりも若々しい身体全体から発散する火花のような反撥の張りが漲っていた。

その彩子は紙片に眼を通して、呆然と立竦んでいた。

綾子のらしい筆跡で、七つばかりの品物が箇条書に並んでおり、最初の『彩子、生理用品』という文字が目射たのであった。

愁鬼、下着。

避妊用品。

浣腸器具——等々。

その下に細々と品名が続いている。

（この品を、全て私に買わせるのだ。知らない人の前で、恥かしさに戦く私を晒し物にして愉しもうと云うのだ。どうしよう……）

紙片が、ぶるぶる顫えた。

雨の平日とは云え、デパートに客は多い。

彩子は杉に強く抱かれ、蒼白な面持で慄えながら立っていた。レイン・コート一枚の裸に男の体温が温かく伝わってくる。

女の生理の悲しみを嗜虐の玩具に用いられ、更に我と我が身を責めさいなむ道具まで幾つも買わねばならないのだ。神経がピリピリと凍りつくような悪感に襲われた。かつて地下室で50 ccのグリセリン溶液を注入され、

悶え苦しんだ姿……杉や綾子の蔑視の前に、泣きながら限界を越えた浅ましい姿……。

（ああ、どうしよう）

「さあ」

杉の声に我にかえった彩子が、怯えと哀願を籠めて見上げると、男の貌に微笑が泛んだ。弄ばれている自分を悟って、縋りつく眼を伏せた。

「買物を始めよう。先ずどの売場へ行けば良いのかね？」

組んだ腕に促され、よろめきながら歩き出した彼女は怯えた瞳で、薬品部の掲示を探し当て、おどおどと近づいて行った。

若い男の客も幾人かいる売場には、生憎彼女と同じ年頃の可愛い女店員しか居ない。近づくと二人を、商品ケースの内側から丁寧に頭を下げて迎えた。店員が中年の婦人なら、これ程の想いはしなかっただろう。

大勢の客の視線が身体中に集まり、彼女の言葉に耳を澄ませているのではないか、と思う。

「あの……」

眼から火が出るような恥かしさ、彩子は絶句した。

「いらっしやいませ」

汗が乳房から下腹を、太腿を伝わって、肌を冷たく流れてゆく。

「何をお求めでしょう」

彩子は、無心に遊ぶ茂行の姿を胸に泛かべながら、ありったけの勇気を掻き集めて注文した。

新しい品を買う毎に、新しい努力と勇気を必要として、へとへとに疲れた彩子は杉と共にデパートを出た。

杉の持つ傘の下で、傍目には仲良く一つに纏れて歩く娘の心は、泣き濡れていた。舗道を濡らす小糠雨のように、静かに——。

（行き交う人に、この苦しみ、判るかしら。泣いているあたしの心の奥が見透せるものかしら。貴方は今、幸福ですか？ 貴女は？ 貴女は？）

K子と落合った喫茶店の二階で、彩子は唯一の賭、希望への計画のチャンスを探っていた。先に来ていたK子は車を取りに行ったので、杉と二人きりで並んで坐っている今が、その時に思えた。

彩子一人、杉の手を遁げるのは簡単なことだった。救けを呼ぶ事も出来た。しかし、残



った弟の事があつては、このまま逃げる気にはなれなかった。

だが、何かの伝言を、救いを求める手紙を残してゆけば、そしてそれが杉の眼に止まらなければ……と彩子は考えた。

一人になれて、紙と書く物があれば。

彼女は洗面所を考えていた。巻紙がある。

コートのポケットに隠した口紅棒を握りしめて、横眼で杉を見た。化粧品を購入した時に、男の無知を頼りにして余計に買い求めたものだ。

この計画を支えにして、云われるままに辛い買物も続けて来たのだ。必ずうまく行く。

杉はこれまでの余韻を楽しみながら、満足の表情で煙草をくゆらせている。

油断がある、今だわ——彩子は感じた。

「先生」

「うむ？」

「あの、私……」

「彩子、先生ではないだろう？」

憶い出した。あの諦めの夜から、あなたと呼ぶよう云われていたのだったが、どうしても云えない言葉だった。より一歩深く、泥沼に足を踏み入れる気がしたので。

杉はそれを強制はしなかった。ずっと先生

と呼んで来たのだった。

今回は違う。これは演技なのだ。自由を賭けた芝居だ。

「あのう……あなた」

「なんだね」

「あたし……お手洗に行かせて欲しい」

彼女はレイン・コートの下で、もじもじと太腿を摺り合せて見せた。不思議なことに、本当にその欲求が湧き起こり、たちまち堪え難いものとなって襲いかかってきた。

「もう我慢できません、いいでしょう？」

「いいとも。だが、もう少し待ちたまえ」

「だって、もう……朝からずっと我慢してるんですもの」

「少しだよ。ほんの少しの間だけ」

「なぜですか？ ね、お願い」

「……………」

「ね、お願い、あなた」

可愛らしく、両手で拝む真似をした。

杉はキュッと眉根を寄せ、唇を噛んだ。苦しそうな顔だ。

「ね、ねえ」

「頼むから、待ってくれ」

「逃げたりなんか、しませんわ。お願い」

「逃げても良いんだ、茂行が居るからね」

「……………」

「出よう！」

突慥貪に云うと、杉は立ち上がった。

不審に思いながら、つのりくる尿意を抑えて彩子も後を追う。

明らかに杉は動揺していた。あと一押しで承諾を与えたにちがいないのだ。

表に出ると、既にK子が車を運転して待っていた。

「あなた、どこへ行くの？ もう我慢できないわ」

「ま、乗りなさい。それからだ」

後に彩子が乗ると、杉もその横に腰をおろす。

車は、すぐ走り出した。

雨は激しくなってきた。

「危険を冒すわけに行かなかったのね、ここでして貰う」

「えっ？」

「ちゃんと用意してあるのさ。ごらん」

杉は鈍く光るものを彼女の膝にのせた。口の広い、取手のついたガラス瓶、彩子は息を呑んだ。

「さあ、もう辛抱しなくてもいいんだよ。好



きなだけ、したまえ」

「……………」

「そうだ。その前に口紅を返して呉れるだろうね」

彩子の眼が大きく開かれた。

（知っていたのだ。知っていて、からかっていたのだわ）

彼女はのろのろと動き、口紅棒を男の手の平に落とした。

「まあ、今日は大目にみよう、仲々いい演技を見せて貰ったからね、先刻は真に迫っていたよ」

「演技なんかじゃ、ありません。本当だったんです」

「じゃ、どうぞ遠慮なく」

「……………」

「さあ！」

彩子は尿瓶を見、こわごわ手に取った。

「コートのボタンは外して、もっと腰を浮かせて。駄目駄目……………」

脂汗を流しながら、云われるままに狭い車内で動いた。羞恥と欲求の苦痛に真っ赧になる。

「そうそう、それでよし」

「……………」

（ああ、またもこんな恥かしい目に合わなくてはならないなんて……………いつになったら、この恐ろしい責め苦から解放されるのだろうか？ 一生、この人の玩弄物として生きて行かなければならないのかしら……………）

「そうか、もう限度か。では、彩子自作自演の、旦那様をだまそうとした劇、最後の幕」  
「うっ……………ああっ！」

「はじまり、はじまり」

雨脚は、ひときわ烈しくフロント・ガラスに飛沫となって散っている。

夏を告げる雷鳴が、遠く聞こえた。

## 協奏曲

「ああ……………」

彩子は溜息をついた。

屈辱と耐忍の毎日に、身も心も疲れ果て、このまま深い忘却の淵の底までのめり込み、空白の中にこの身を委ねてしまいたい。

それよりもいっそ、戦いを諦めて、晴美のように自分から、汚辱の渦に跳びこんで……………誇りも望みも捨て、快楽の道具になりきって

底知れぬ泥沼に、もがけばもがく程深みへ嵌りこむ耽溺の奈落に、この忌わしい女の性を

沈めることが出来たら……………。

女の生命の炎を、女の夢を抛って、ただ官能の命ずるままに、愉悦を追い、醜く蠢きながら、そこに安住の地を見出せるものなら、肉の獣として生きられるなら……………。

ひとときの休息の安逸に、傷ついた心を彷徨<sup>さま</sup>わせ、漠と広がる砂丘にも似た、拠所とてない未来の光景、彩子はそこに悲しく瞬く彼女の星を見ていた。

克己と忍耐の日々、永遠とも思われる絶望の砂漠の片隅に、しかし、か細い微かな希望の陽が射すのを臍<sup>はら</sup>げに感じた。

杉の中にそれがあった。乙女の持つ本能的な感覚が、男の心の翳を捕えたのだ……………彼女を凝視<sup>みつめ</sup>る眼、愛撫する手、その長身の後姿の蔭に云い知れぬ苛立ちと淋しさが窺えて……………時には、羞恥に似たためらいすら泛<sup>は</sup>かぶのだった。

救い、というにはあまりに儚ない弱い光だったが、娘はそれを一生懸命守り、はぐくみ育て上げていた。

杉も疲労を覚えていた。

（年齒<sup>とし</sup>のせいかな。いやいや）

否定しながらも、そんな自分自身に厭気が



さす。

後、数年で四十になる。十年前に小説家として独立した時、既に妻と離婚していた。次の結婚も失敗だった。

虚しい半生……理解され得ない、自分だけの美への探究を、幾人もの女に期待して、十数年の歳月を、いや、少年の頃の記憶に繋つてそれは三十年近く、彼の過去を形成しているのだ。

彼は疲れていた。

(彩子の眼だ)

心の裡を覗き込んで、無意識に隠していたものに触れ、杉は愕然とした。

男の前に女体の神秘と羞恥を晒しながら、無言の反抗を秘めてじっと彼を見詰める長い睫毛の黒曜の瞳。憎悪も嫌悪もなく、悲しみと羞らいに濡れて憧れに輝く瞳……肉体は苦しみ悶え、哀願に声哽していても、その眼は毅然とした心の純な潔さを湛えて……。

思いがけぬ憐憫の視線で胸の奥を衝かれ、傷を発かれた痛みと焦慮すら感じるのだ。

(あの眼！)

常に自己を失わぬ彩子の心は、決して杉の自由にはならない。彼には彩子の魂の片鱗にすら触れ得ないのだ。

杉愁鬼は叫び出したい程の憤りにさいなまれた。

(俺を憎め。怨め！そこに俺の享樂があるのだ)

地下室の実験室のベッドに、彩子は俯伏せに軀を伸ばしていた。

杉は絵筆を手に、全裸のなだらかな肌に絵を画いていた。

両の腕から肩、背中、臀部の双つのふくらみ、大きく割られた腿、膝うらからふくら怪にかけ、幾つもの原色の幻想的なパターンが完成していて、筆は踵から土踏まずへと動いてゆく。

白金の溶けるような痒痒感に、呻きを伴うてうねる肉体の、鮮かな彩<sup>いろどり</sup>は、悪夢の産物にも似て妖しく模様づくって、無限にゆらめいた。

しとどの汗に顔料が溶けて流れる。

女は乳房と、下腹をベッドに擦りつけて堪えていた。

愉悦に眼を細め、最後の一筆を小さな足指に加えると、杉は手首を縛った紐を解き、柔らかな起伏に富むキャンバスを仰むけに直そうとする。

必死に暴れる画布。汗にまみれた、柔軟で強靱な上半身をひきはがし、抑えつけて、左右を逆にして手首をヘッド・ボードに縛りつけた。

汗と荒い息の斗争が続く。

脚の紐を外すと、下肢が猛然と蹴りつけてくる。その左足に手早く紐を巻きつけ、堅く結び目を作った杉は、紐の長い残りをベッドの下を潜らせて、暴れる右足の膝にかけ思い切り引っ張った。

高い悲鳴がつんざいた。

仮借ない男の力は、彩子の脚を水平に近くなるまで裂いてゆく。

ちょうど、シングル幅のベッドを両脚の間に抱えこんだ恰好になって、口惜し気に唇を噛み、清らかな瞳が閉じられた美貌が冷たく冴える。

身動き出来ぬ、無防備の辛い姿態に固定されると、彩子は羞恥に慄える肉体の抵抗をやと諦めた。

釣り上げられた若鮎のように腕<sup>もが</sup>き抜いた女体は、男の渾身の力を必要とした獲物だ。杉は呼吸を調えながら、恍惚としてその美しい四肢に限なく眼を注いでいた。彼の享樂のひとときのものだ。



苛酷な幽囚の間にかえって美しさを増したとも思える健康な肌が小波に揺れ、胸に隆い双つの丘がふるふると灯に映え、羞らいの瘡牽が内ももを顫わせて……。

杉は白い胸を抑えた。手に余るそれは、柔らかく撥ね返すような弾力を以て、許さざる侵触者の無暴を受け流した。

ギクリと硬張らせた全身を拒否の波が走って行く。

（この女は、決して羞恥の気持を失うことはあるまい）

無法者は滑らかな腹部を伝わって、彩子の唇から哀願の声が洩れる。

（いつまでも、この新鮮さを保っているに違いない）

侵略者の尖兵が素早く動き、ツと離れた。

「——！」

女は小さな悲鳴をあげ、眼尻に雫が一粒、浮かんだ。

杉の長い指の間に、彩子の身体の飾り糸が残って……。それは右の乳房の上に、そっと置かれた。

娘は辱かしめを忍んで、彼の行為を見守っていた。

（彩子、俺を見るのを止める、その眼を閉じ

ろ）

射るようなキラキラ輝く視線を遁げて、ベツドの端に腰をおろした杉は、なぜか畏れを感じていた。

（俺を憎んで呉れ！ 彩子、憎い俺を呪うんだ！）

無防禦のこの女体に、思い切り鞭を叩きつけたい欲望がむくむくと湧き起こる。真っ赤な血潮が噴き出すまで、鋭利な刃物で傷つけてしまいたい……。杉は戦慄した。自制が崩れそうになる。

（この女を恐れるなど……そんな馬鹿なことが……！）

彼は絵筆を握りしめた。理由のつかぬ不鮮明な衝動に駆られて、筆を強く肌に押しつける。

彩子は呻いた。

グルグルギリギリ柔肌を筆が動き、ブルーの帯が腹に引かれた。音がする程の力を籠めて杉は筆を廻す。

（その哀しい眸で見るな。憐れみの眼で、俺の汚れた心を刺すのを止める）

痛みと擦ったさに彩子の呻きは烈しくなった。

（もしかすると、お前は俺のことを悲しんで

いるのでは？ 憐れんでいるのでは？……俺は悪魔だ。お前の苦しみから、俺の快樂の泉を引き出そうとしている悪魔なんだぞ。そんな俺を不憫だと思うのか？ 可哀想だと言うのか？ 彩子！）

## 間 奏 曲

杉愁鬼の沈んだ心に、ある陰湿な計画が芽生えた。それは生長し、根を張り、枝を拡げて伸びた。

風も死んだ静かな暑い夜のことだった。

綾子とK子は都内にある愁鬼の表面上の家に掛掛けていた。晴美は既に愁鬼館には居なかった。

愁鬼は晴美に対して非常な嫌悪を抱いていた。連れ込まれて暫くの苦悩の末に、彼女は自分の運命に諦めてしまい、羞恥すら持たぬ女に化してしまったのだ。被虐の中に喜びを求める飼育された動物の牝でしかない。

彼女を欲しがる人のいたのを倖い、数日前に進呈したのだった。

彼は自身をサディストだと考えてはいたがマゾは嫌いだった。嗜虐と被虐のあいだには単に、慣れ合いのゲームのみが存在し、泡立



つような心理と心理の葛藤は決して得られない。誇りと生命を賭けた息詰まる対決にこそ本当の真理が、美しい快樂が見出せるのではあるまいか……。

(彩子は自分を失わない)

愁鬼は確信していた。

(心ず期待に応えてくれるだろう)

彼の信仰にまでなっていた。

しかし、自分にも理解出来ぬ奇妙な矛盾した論理と衝動が彼を支配していた。

その彩子に心を捨ててみたい……。悲しげなあの双眸が誇りも気貴さもかなぐり捨て、快樂を求めてのたうちまわりながら涕泣する様を想像して、彼は目くるめく感動と、淫靡な刺戟に胸が高まってくる……。女の業に泣きながら、踏みにじられ、つきはなされ、欲望に我を忘れて男の膝の下にひれ伏す彩子の姿を見たい、と思う。

そうした彩子の屈服の姿態に対して、果たして彼自身の心理が堪えきれるかどうか、自信はなかったのだが……。

(身体は穢されても、心だけは私のもの。誰のものでもないのだわ——)

結婚の夜、彼の腕の中で顫えながら、小さく呟いた、可憐な乙女の言葉が甦って来て、

愁鬼は拳をかたく握りしめた。

(必ず俺のものにしてみせる。杉愁鬼という悪魔の前に這いつくばらせ、媚を含んだ眼で縫いつく女にしてやる!)

現在<sup>いま</sup>までも漠然と考えたことはあったのだが、実行する決意に燃えたのはこの時が最初だった。その陰惨な思考は、やがて体内に充滿し、どす黒い渦を巻いて彼を痺れるような快感で包んだ。

(明日だ、彩子。お前の肉体を、お前の頑ななまでに純な心を、地獄の業で焼き尽くしてやろう。泣くがいい、呪うがいい!)

愁鬼は勢いよく立ち上がった。

## 幻想曲

「やめて、やめて下さいっ! こ、こんな恐ろしいこと!」

男の手を逃れて、身をよじりながら彩子は叫んだ。

ふくよかな腰を覆う薄布一つ、犇々と後手に縛り上げられて尻餅をついた恰好で、自由な両足で床を這ってゆくのが精一杯——哀れな生餌であった。

男の手が肩に触れ、悲鳴が書斎にひびく。

愁鬼は椅子に寛いで、これから始まる地獄図絵を固唾を吞んで見守っていた。肘掛を強く握った拳が興奮に白く慄える。

(泣くがいい。喚くがいい)

「ああっ、や、やめてっ!」

男が、必死に縮める脚をギョツとつかみ、物凄い力でずるずると引き寄せる。顔が獲物を手にした喜びに歪み、半ば開いた口からは涎が糸を引いた。

男には、恐怖に戦く彩子の悲鳴も表情も、判別出来ない——ただ自分に供えられた生贄の女の肉体に対する醜い、狂った欲望が、その空虚な脳を責めているのだ。

柔らかな肉をがっちり抑えつけて舌舐めずりしながら、猫が鼠をなぶるかの如く、血を分けた姉の身体を撫で廻した。

「茂行っ、茂行っ!」

意志を持たぬ弟、その硬い顫える手は、上下を縄に緊く締められて、むっちり痛い程盛り上がった柔肌を握りしめ、一方の指が純白のパンティにかかった。

乳房の痛みと、血の凍るような恐怖に彩子は暴れた。片脚が弟の腰を跳ねのけ、僅かな隙間から転がるように逃げ出そうとする。

ビリリッ!



最後の砦は小さく千切れ、茂行の手に残った。が、生贄の女体は彼の手を離れ、懸命に部屋の間へと逃れて行く。

彼は御馳走を取り落として怒り狂った。唸り声をあげて追う。再びその手が女を掴まえそうになる。あと少し……。

と、迫る彼がガクリと頸を後方に引かれた皮の首環が嵌められて、長い鎖で壁に止められているのだ。

凄絶な地獄の鬼ごっこが繰り広げられる。

罪人は隅に小さくなっている彩子——壁にぴったり肌を押しつけて、身を屈めて迫り来る鬼の手を避けている。鎖をピンと引っかけて伸ばした鬼の指が、膝頭に届いた。

「茂行っ、やめなさいっ！」

弟は呻いた。首環が咽喉に喰い込んで、顔が充血した。

彩子は少しでも離れようと、不自由な軀をよじって立ち上がった。肩が、臀部が壁に擦れて痛い。喘ぎながら、やっこの思いで立った。弟の眼に全裸を晒す羞かしさも、地獄の恐怖に比べれば堪えねばならないことだ。

「ううう……」

完全に手中から失った生贄に、茂行は唸った。眼が飛び出しそうになる。

狂った頭が考え出した故意か、怒りに駆られた偶然の行動か、男の足が彩子の弱い下腹を烈しく蹴り上げた。

「ぐうっ！」

彩子は思わず身体を二つに折ってよろめいた。男の腕ががっしりと抱きしめる。

彩子は痛みをこらえ、必死に暴れた。

「ひい——っ！」

弟の手が長い髪を掴む。じりじりと彼の勢力範囲に引きずっていった。

（もう駄目だ、地獄に堕ちろ！ 姉弟で地獄の焰に泣くがいい。一度堕ち込んだら、二度と再び這い上がることの出来ない奈落だ。彩子、お前も人間ではなくなる。畜生に生まれ変わるのだ。泣くがいい）

狂っているながらも、茂行は欲望を充たす術<sup>すべ</sup>を体で知っていた……。生きるため残された

獣の本能。愁鬼館での毎日を晴美の肉体で、しっかりと灼き付けられていた。彼にとって姉も晴美も牝ということに変わりないのだ。

姉弟の悲愴な死斗を注視する杉愁鬼の胸のうちに、奇怪な感覚が忍び寄って来た。嫉妬とも自虐ともつかぬそれは、疼痛とともに、感動に慄える体内に吹き卷いた。

「ああっ、助けてえっ！」

「ううう……」

血を吐く叫びと、唸りが激しさを増し、彩子の脚が虚空に躍った。

「か、神さまっ……きゃーっ！」

愁鬼は妄想と幻覚の中にいた。過去の夢の中にいた。忘れようと努力しながらも、いつも意識の下で息づいている幻……今、それを直視していた。

少年だった。古い家と古い家庭だった。

精神病医の父。妾だった母、腹違いの弟。

父親は暴君だった。少年はその恐ろしさに対して嫌悪を、強い力には憧憬を、という混乱した心理で父を見て生長した。

好色な父親の方は、息子に愛情どころか関心さえ持たず、ときおり暴力のとばかりを向ける存在に過ぎなかった。

母はもと女中で、その弱々しい美貌の故に妾にされ、毎日の乱暴な仕打ちを、ただじっと耐え忍ぶだけの女だった。

しかし、少年は母が好きだった。その美しさと悲しみの中に潜む、我が子への愛情に安らぎと慰めを与えられて育てられたのだ。

少年が十三才の時——色欲に狂い、酔っていた父が、少年の眼の前で、母をある精神病



の患者の慰みに供したのだ、実験と称し、酒の肴にする為に……。

決してその光景を忘れ去ることはない——裸にされ、泣きながらうごめく母を、父はじつと凝視<sup>みつめ</sup>ていた。少年も母の姿から眼を離せなかった。きちんと正座して、魅入られていた。厳かな宗教の儀式のように思えた。

美しかった。戦慄するほどの異様な妖しい美しさだった。

しかし、女の生理は母をただの女に変えていった。顔を醜く歪め、喜悦の叫びすら発する肉塊に化していった。

少年は突然、怒りに襲われた。裏切られた口惜しさが殺意にまで変った。

死んじまえ、みんな！——

絶叫して部屋をとび出し、跣足で庭に出た少年は、わんわん泣いた。雪が降っていた。

梅の綻びかける、戦争末期の冬の夜であった——。

「せ、せんせいっ！」

彩子は最後の抵抗に全身の力を振り絞っていた。双の瞳に怖い程の決意と悲愴な叫びを籠めて愁鬼を見上げた。

愁鬼は、熱気の立ち籠る盛夏の室内に立ち

竦んで、雪の舞い散るのを感じた。あの夜の寒さを、ひしひしと身に感じていた。

（この寒さはなんだ。心の底まで凍りつくようなこの寒さは……）

母は気が狂い、敗戦の混乱に死んだ。父も死んだ。数年前、気の弱い弟も後を追った。

（寒い……冷い！）

黒曜石に似た瞳が幽愁を秘めて愁鬼の心を射る。思わずたじろいで羞恥が駆けた。

（奈落の淵に立たされて、俺をじつと見ている。ただ俺を見ている。俺はなぜか、寒さだけをを感じる。ああ……期待した溶けるような享楽の快感は、一体どこにあるのだ？）

愁鬼は、姉の躰にまつわりついて獣の本性を曝け出している茂行の背後に立った。鎖を握って強く引く。

（茂行は病院に戻そう……俺には堪えられそうにない）

彩子は泣いていた。

愁鬼にはそれが感謝の涙のように見え、己

れの弱さを叱りつける舌打ちをし続けた。

## 変 奏 曲

澁んだ重苦しい夏が過ぎ、二百十日の風が

吹き抜けて、爽やかに澄み切った秋の青空に蜻蛉が舞いはじめた。

自室として与えられた二階の小部屋の窓から彩子は空を眺めていた。窓には鉄格子が厳しく、牢舎という小さな箱だったが、彼女は小部屋にいつしか愛着を覚えていた。

袖もないケープを羽織って、彼女は外の明かるい世界に心を奪われていた。

空がこんなにも蒼く、高いなんて——恵まれた日々を送っていた半年前までは、決して気づかなかった蒼さ、広さへの驚きがそこにあった。

愁鬼は小さなベッドに腰を乗せ、その後姿を長い間、黙って見守っていた。

「彩子」

白いケープが翻った。

「僕は君を……解放しようと思う」

「……？」

彼女には理解出来なかった。やがて徐々に

希望が、喜びが現われた。ひたと男を見る。

「本当だ。もとの彩子になるんだ……一つだけ条件があるのだが」

後の言葉は耳に這入らなかった。涙が滲んでくる。近頃は、どんなに辛い恥かしい責苦にも堪えぬいて、愁鬼には見せなかった涙が



珠になって落れた。

彩子は叫んだ。

「有難う、あ、有難うございます！」

「明日の朝、ここを出る。それから彩子の好きな道をゆけば宜い。愁鬼館でのことは忘れて……」

「……」

事故だったのだ。生涯、忘れ得ないだろうが、いつかは薄れてゆくに違いない、あの綺麗に澄み渡った高い空の下で、自由に暮らしているうちに。――

「忘れます。誰にも、なんにも云いません。

この家のことも、先生のこと……」

愁鬼は淋しそうだった。

「お金をいくらか用意した。田舎の土地を整理したのだが、受け取ってくれるね？ それで許して呉れと云う心算じゃない。再出発のたしにして欲しいからだ」

「許すなんて、そんな……」

「判っている。許すと云われても、私の方でお断りだ。こっちで彩子を許すのだ……そうさ、飽きてしまったから捨てるのさ！」

愁鬼は人が変わったように見えた。いつもの冷静さを置き忘れて、苦しみを耐えているようだった。

「私は悪魔だ。彩子にとって杉愁鬼は恐るべき悪魔だ！ 悪魔の所業を憎み続けるがいいさ！」

「いいえ、先生。あたし、憎んでなんかいません」

「憎んでくれ。一生涯、憎み続け、呪い続けて欲しいんだ。怨んでくれ！」

愁鬼は頭を抱えこんで、何事か呟いていたが、やがて気を取りなおし、緊張に顫える貌を彩子に向けた。

「彩子がここを出るについて、一つ条件がある。賭と云っても良いが」

「……？」

「長い間、僕は女性の必死の羞恥を堪える姿の中に美しさを探し求めて来た。そこに真の感動が、愛があると信じて失望を繰り返していた。しかし、これまでのどの女にも見出せなかった。彩子にはそれがある、必ずある。

君は良く耐えて来た。これから耐え抜くだろう、新鮮な羞恥を失わず……。いつかは必ず僕の希みが実現する筈だ。雪に咲く白い小さな梅の花だ。羞恥と屈辱に雄々しく咲き綻びるに違いない。だが、もう草臥れてしまった」

彩子は、じっと愁鬼を見た。男の眼は燃え

ていた。憑かれたように語を継いでゆく。

「僕は決心した。君を手放すのは辛いが止むを得ない、君を自由の世界に還す。だが、その前に、もう一度だけ苛め抜いてみたい。最後のチャンスだ。彩子が自らの生理に負けてその心を僕の前に晒し出すまで。……あるいは僕の心が彩子の抵抗に堪え切れなくなるまで、だ。どちらの場合も君は自由の身だ。僕は誇りを失った女、快楽に溺れた女、そんなものに興味は持てないのだ。肉体はどんなに美しくとも、毅然とした高雅な女の生命の炎がなければ、そいつは牝だ。愁鬼館に在る価値がない。衿持を捨てた彩子は追放される。

僕はそこに希望を賭けてみることにした。君は飽くまで耐え抜くだろう、そして、理知と官能の相剋の火花の一つ一つから、汗と涙の珠の中から僕は、隠された女の美しさと強さを引き出すのだ。それだけが、僕の人生の総てだったから、悔はない……」

男の真摯な熱が、女の決意と搦んだ。

「彩子は既に、女の生理の喜びを識っている筈だ。性の神秘的な奥深さを体験している。隠そうとしても僕には判る。それが彩子の弱点なんだ。……感覚に溺れまいとしている、僕に悟られまいとしている。……きっと彩子に



とっては死ぬよりも辛いことなんだ。だからそこを攻める。彩子が自分を失わずに、耐えて耐えて耐え抜くかどうか」

愁鬼は立ち上がった。

「ついて来たまえ」

## 円舞曲

「負けないわ」

自分を励ますように、彩子は呟いた。

愁鬼の部屋――

あの星の流れる悲しみの夜、身体にも心の裡にも拭い去ることの出来ぬ忌わしい瑕<sup>きず</sup>瑾<sup>ぎん</sup>を受けて、涙に滲む哀愁の心に固く抵抗を誓った部屋――彩子は懐しさで見廻した。

水色に涼しいカーテンの窓に落ち葉舞う秋が広がって、冬仕度には気の早い紅葉が燃え初めている。

書架の占めた壁。一面には数知れぬ能面や仮面が二人を見降ろして、素朴な民芸細工が幾つか。大きな裸婦の額。

壁に埋められたスピーカーから、華麗な弦の音が流れている。彩子も好んで聴いたことの多いバレエ組曲だった。

ストラヴィンスキー 「火の鳥」

白いシーツに覆われた大きな木製の寝台が彼女を待っている。

愁鬼は手に持った二つの金属の器具を彼女の顔に近づけた。

「これを識っているかね？」

「……？」

「バイブレーターという普通の美容マッサージ器なんだがね、K坊と二人でいろいろ改造したのさ。彼氏、電気には強いんだ。見てごらん、よく出来ているから。こいつに悪魔という名を附けたよ。……快楽の悪魔の兄弟という訳だな。……これが太郎、こっちが次郎というんだ。勿論使い方も効果も違う」

彩子は鈍く光る二つの器具を手にとった。棒状の太郎と円盤状の次郎はずっしりとした重みと精巧な機関<sup>からくり</sup>を見せて、華奢な女の手の上で、その金属の部分が反射した。

彼女はその用途と与えられる影響の恐ろしさを理解して、思わず眼をそらした。電気によって微妙に顫動するその兄弟は、女の鋭敏な肉体と精神に快美の感覚を惹き起こすために使われるのだ。

（これが最後なのだ。これを耐えてしまえば明日からは、もとの明かるい世界で暮らしてゆけるのだ……負けないわ）

彩子はケープを足許に落とし、均齊のとれた神々しいまでに輝く肢体を、男の眼に誇るように、すらりと立った。

悲嘆の永い月日の鑿も刻み得ない壁の優美さが愁鬼を撃ち、彼は息を呑んで見守っていた。

彫像がベッドの上に乗る、やがてゆっくりと軀を伸ばして沈むと、愁鬼は期待に胸をときめかせて傍に立った。

彩子の身体も細かく顫え、男の手が優しく肩に触れると、羞恥に燃える全身を縮めて、喘ぎが唇を割る。

エルネスト・アンセルメのタクトに操られて、スイス・ロマンドの奏でる「火の鳥」は緩やかに、静かに流れてゆく。

ジインと振動を伝える音がした。甦った悪魔の息遣い。……彩子は全身を緊張に強張らせて、最後の試練に備えて待った。

「先生、待って下さい！」

「……？」

「縛らないんですか？」

「うむ。縛らない。彩子は逃げないだろう？」

どんなに暴れても、泣いてもかまわない。だけど、彩子は辛抱するだろう？」

「お願いです、先生。縛して下さい。いつも



のように、動けないように縛って。……これじゃあんまり、恥かしい。酷すぎます」

「そうとも、それが僕の目的なんだ」

「せめて足だけでも……先生！」

「駄目だね、残念ながら」

「恥かしい。……恥かしいわ。あっ！」

愁鬼は肩を抑え、生贄を求めて唸り続ける悪魔の次郎を、怯え戦く乳房の麓に軽く押しつけた。ビクッと裸身が慄え、悪感が冷たく背筋に流れた。

バレ―組曲は壮大に旋律を変えながら、謳い上げてゆく。

彩子の心は耐えていた。紅く、青く、白く渦巻き、うねり寄せる悲しみと羞恥の激しい錯綜の中で。……汗と涙の裸形をくねらせ、咽喉の奥のきれぎれな呻きを殺して。……円らな憂愁の瞳でじっと愁鬼を見詰めて……。

「先生！」

「……？」

「先生、あたしは先生が好きでした。聴いて下さい。……ここに来てからは、憎もう憎もうとしました。恥かしい目にあわされ、死、死ぬ程の苦しみの中で憎み抜こうと、つとめて……でも、駄目」

「もういい。判った」

「駄目だった。……そんなあたしが、恐ろしくて、とても嫌らしくて。……心の、最後の砦、だけはと……うっ」

太郎と次郎の動きは、今や協同して、甘美感と化し、全身に広がっていた。彩子は唇を噛んで懸命にこらえた。

「女の誇りだけは、心だけは、……意地でもと……耐えて来たつもりよ……負けない。負けないわ！」

愁鬼の眼の中に、悶えぬく彩子の姿態はなかった。真紅に燃え上がる炎に包まれて踊る美しい鳥の姿を見ていた。五百年に一度、火の中から甦る不死の鳥、フェニックスは、ちらちら舞う火焰に輝いて、踊り狂っていた。瞬きすら出来ず魅入られていた。

過去の総てを、あらゆる希望を燃料に、愁鬼は炎を燃やしてゆく。高く、激しく、轟々と、灼熱の炎を燃やし続ける。

鳥はその羽根を拡げ、炎の尾を曳いて、今にも飛び立たんばかりに羽撃いた。

(とべ！ とぶんだ！)

——彩子は耐えた。

懊悩する心の奥の奥深い城から、彼女の持つ、女の矜持と信念を最後の一雫までひき出して、痺れゆく痛美な夢に溺れかかる身と心

を、しっかりと繋ぎ止めて、耐えた。

羞恥心と快楽との相剋は、波となって彼女におしよせ、四肢が意志を離れて舞う。

「うっ、ううっ！」

いつ噛み切ったか、乾いた唇から紅い糸が白浪を僅かに染めて、呻いた。

拳を口に当てて声を殺す。

——とべ！ 飛ぶんだ！

愁鬼の心の中の叫びも噎れた。耽美の眩惑に、彼ら感覚と理性のすべてを注いで……。精神の限界すれすれの力を、この数瞬に賭けて喘いでいた。金色の鳥は炎に染まって羽撃いた。力のかぎり。

(とべ！ 啼け！)

「うううっ」

彩子は宙を舞った。混濁した宙の霧の中を舞った。眉根を寄せ、身体を弓にそらし、光を失わぬ双の眸は、愁鬼の眼をしっかりと捕えたままで……。

灼熱の炎に映えて、不死の鳥は、力強く大空さして、大地を蹴った。

(飛んだ！)

真紅の尾を曳いて舞いながら、高く誇らしげに啼く。

(これだ！ 俺の夢だ。この美しさ。この豊



かさ。軽さ。……これなのだ。生命の究極の輝きだ。無限に続く悪夢の実現。……この美しさはどうだ。見ろ！ この感動を！ 俺の生命の炎だ。彩子の可憐な火花だ、見ろ！

彩子の潤んだ眸に愁鬼は母を感じた。愛情と哀愁に燦然と光る珠を。母の悲痛な涙を。衝撃と忿怒の夜の凍りつきそうな梅の蕾を。顫える白い花を。……

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

|     |     |            |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊  | 三五〇円(送20円) |
| 三月分 | 3冊  | 一〇五〇円(送共)  |
| 半年分 | 6冊  | 二一〇〇円(送共)  |
| 一年分 | 12冊 | 四二〇〇円(送共)  |

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御寛望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替(大阪四二

七八三番)』のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に△本号にて前金切△の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

(遂に見つけた……そして俺は、それに負けてしまった)

思わず眼を閉じた。張りつめた糸が切れ、暗黒と沈静の中に陥ちこむように、愁鬼は頭を抱えて、ガククリと倒れこんだ。

勝った！——彩子の意識もそれが終焉だった。全身の筋肉が獣の断末魔の悲鳴にも似た腥い叫びを挙げ、奇妙に噎れた拒否の呻きがその後続いた。

(虚しい……)

男は女の胸に顔を伏せていた。

(俺は、俺の傷を嘗めていたのだ。自虐を味わっていたのだ。淋しさを、苦しさを慰めていただけなのだ。なんという虚しいことだ)

勝利の歓びとは裏腹な、冷たい風が女の心を吹いていた。燃え尽すような抵抗の熱気が醒めた後、始めてよみがえった甘美な感動……。噎り泣きながら女は自分の心を知った。「これからどうなるのかしら、あたしたち」

壮麗な「火の鳥」は、二人を擁抱する如く嘲笑する如く、美しく華やかに、終章への厳かな旋律を力強く轟かせていった。(了)



晴

雨

と

責

写

真

斎

藤

夜

居

## 一

日本に始めて写真術が移入された幕末から明治初年にかけて、もう女性の全裸姿や性行為の実写があった。現象の真景を伝える点では△写真▽のリアリズムには、悪魔的な魅力がひそんでいるからだ。晴雨が責場の写真撮影のために燃やした執念の程も、思えば無理からぬ次第であった。

晴雨が初めて責写真を撮る動機についてはその友人のうちに朝倉文夫門下の清水彦太郎という彫刻家があり、この人は美校出身で陶土で芝居狂言の人形を造り、それを「彦太呂人形」と名付けて一時はさかんに売れたもので、その中で明烏の浦里雪責の人形は、晴雨

が彼を明治座へ案内して、中村歌右衛門の浦里、羽左衛門の時次郎の一幕を見せて造らせたものであった。清水彦太郎はその返礼として、一人の若い写真師を紹介してくれた。

この人形をつくる為のモデルは（芝居の役者は尾上梅幸だとも云っているが）晴雨の文章には記述の混線が多い。この時の年代がはっきりしないが、やはり大正末期のことと思われる。晴雨は画に描く以上の、責められる女の微細な表情の変化を探求した訳で、肉眼の記憶を定着させようとしたのである。

この気持はモウ絵画芸術を離れた、云ってしまえば卑俗な魂胆で、肉慾、しかもそれは衰弱した性慾の火を燃え立たせるための手段だったとも云える。

この若い写真師の有賀青年は、雪が降った翌日には必ず晴雨宅の裏庭で「雪責」の写真撮影を頼まれることになっていたが、元来が△責▽の気が無いのだから、しまいにはノイローゼ気味になってしまつて清水彦太郎を通じて「撮影が怖いから、もう御免蒙りたい」と申出があった。現今のように精密なカメラが大衆に普及されていて、写真を誰もが手軽に撮れるという時代ではない。晴雨は折角熟練した人に逃げられてしまうのは、なんと云っても研究上の痛手なので、よく理由を訊いてみると、

「撮影した種板を、暗室に入ってから現像液に漬けると、縛られた女の顔が段々ハッキリ現われて来ます。その恨めしそうな顔が生き



## 晴雨直接指導責写真 (戦前)



ている女の顔じゃなくて、幽霊なんです。とても恐ろしくて気味が悪くて、自分さえ写真を撮らなければ、こんなに縛られたりはしないで済む。こんな苦しい責め苦にあわずにすむ。もしこんなことで女のひとが病気にでもなったら、どんなに恨まれるかも知れない。そう思うと益々おそろしくなって……」

と云う。有賀君の話は尤も千万な申出で、小心で正直な若い写真師は、其後ついにぶつとりと姿を見せなくなってしまった。

専属のカメラマンに遁走されてしまったから、便宜上、近所の写真師に頼んだり、又

くらない」

とご当人は云っている。只、写真撮影をかりて、それに伴う女の皮膚の変化、縄の食い込んだぐあい、雪の中の女の歩き方等、写真以前のなまなましい実地の印象に得る処が多かったであろう。

## 二

敗戦後、昭和二十四、五年頃までの風俗読物雑誌には晴雨の縛り絵の口絵が珍しがられて時々出ていた。また、カストリ雑誌ではあったが『オール不夜城』に晴雨筆の美人画、

はわざと場末の写真屋を相手にして、酒の勢いをかりて、三人で雪中をあるく。それも往来の人眼に触れないように「絶好の位置とポーズ」を捉えようと云うのだから、苦心とは別に、スリルを満喫することもできて、それは

「馬鹿々々しいが又楽しみなもので、前後三十数年、乾板何百ダースを消費したことやら。それでも、その中から厳選すれば気に入った写真は

たしか笠森お仙の図と記憶するが、表紙になっていた。特異な挿絵画家としての位置を認められていたと見るべきである。更に、一種の風変りな随筆家としても活躍していることは、拙著『伝奇伊藤晴雨』の晴雨書誌に就いて見られたい。

その後、晴雨そのものとは直接に関係がなく、責写真が、書店頭のケバケバしい新刊風俗雑誌の口絵に、急に目立って感じられるようになったのは、昭和二十八年頃からだった。特に日本語も読めない進駐軍の兵士たちが喜んで買う、と本屋から聞いたりした。なぜこの頃から緊縛ヌード写真がもてはやされたかという事情は、昭和二十七年秋に警視庁が、あまりの桃色出版の氾濫に業を煮やして大弾圧を業者に加えたことから、まったく皮肉にも鬼っ子のように、意表をついた事態が生まれてしまったのである。

この件について、岩泉増吉が『風俗科学』(二ノ七昭和29・7)に、三つに分けて説明している。

1 エロのモダニズム化で、エロが性交や性器を描写するから、当局の取締りの対象になるのだ。それでは、これを浄化し更にリファインしたものを読者に送れば、と



考えエロ雑誌のモダニズム化を実行した。『笑の泉』や『風流読本』が代表的なもので、執筆家に比較的知名人士をえらんで、エロのセンスを文化的に高めた。

2 エロ実話・ニュース式の読物にして書型を変えて『週刊朝日』や『サンデー毎日』などと同型（B5版）にすること。これには『内外特報』『週刊サンデー』等があり、エロ事件に飢えている読者のためのニュース版であった。（註。この悪風が今日の週刊誌づくりの性格を決定してしまったと見てよい）

3 次が、『奇譚クラブ』を筆頭に『風俗草紙』など一連の『新しい風俗文献誌』を呼称するSM雑誌の誕生、（あるいは変貌）となる。

つまり、この時分から「裸」の「縛り」が目立つようになった。併し純粹の風俗文献派は新しいタイプの雑誌の出現には眼もくれなかった。そして『あまとりあ』も、もうマンネリでつまらなくなった、と云っていた。縛り写真というのはヌードをカモフラージュする手段だと思っていたので、晴雨調の縛りはもう終わったんだな、奇人伊藤晴雨は今ほとんど暮しをしているのだろうか、そうしたこと

が時には脳裏をかすめることはあった。

「責写真」などというのは、余り一般に普及してしまつと、かえって味気ないもので、新しい風俗雑誌の通販のカatalogを頼りに、色々と集めてみたが、正直云つてこれとは思ふ珍写にはぶつからなかった。雑誌の数は多けれど、挿絵家や写真家で晴雨ほどの気魄をもって製作する人は見当らぬようだった。

晴雨直接指導の責写真というのが気になったのは、それから大分経つてからだったが、裸で縛られた写真などというのはどれを見ても同じだと思っていた。只それを製作発表の不自由な時代から実行していた晴雨の先駆者としての業績に敬意を表する気持はあったが価値としての問題は考えても見なかった。だから、伊藤竹酔が「責写真」も晴雨の息のかかっているのと、然らざるものとの区別はモ

### 晴雨直接指導責写真（戦前）

「一見すると現代風だが、下半身の貧弱さが、やはり気になる」



デルの顔で、晴雨のつかったモデルを知っていれば（その女性、写真の女という意味）通販キャビネと晴雨調との区別をつけ易い、と語った意味が判然とするのだが、もう今となつては余程当時晴雨に親近していた責ファンでなければ、ちよつと分類がむづかしいと思う。

その点、戦前の写真だったら、これは殆どが晴雨自身およびその一派に限られているから、古い写真には区別上の心配はない。とこ



ろが、着衣で髪型の型がはっきりしていれば時代の推察がつくけれども、乱れ髪で背景が壁で全裸ということになると、まして複写物に



晴雨直接指導責写真 (戦後)

この写真は某氏所蔵の複写で、晴雨実写という折紙つきのもの。

なってしまうと、新しいものか古いものか判らなくなってしまう。坂本篤が発行した『責の話』附録写真二十三枚のうち、全裸ものでは今見せられても、年代の区別がつかかねるものもある。

戦後から現在に至る印刷物に現われている金のために、すぐに八裸Vになれる女というのは、戦前だったら画家のモデル位のところ、愛妻でも、モデルでも、裸にすること自体すでにサディズムであり、女性自身にとっても軽微なマゾヒズムを感じるのは、旧道徳時代にあつては当然起こるべき感情であつて、女は腰巻一枚でも身にまといていれば、文明が弱者を助けるために与えられたる力に保護されているように感じるが、女が全裸体になつた時の性的感情は人間を原始状態にみちびく。然る上に八縛りV恥ずかしめるといふ行為が伴うのだから、まあ云わば性快感の最高潮が味わえると云つた考えである。そこから千差万別の責の四十八手裏表と云つた技巧が生じ、凄さまじい新らしいテクニックも考案されてきたのであつた。

### 三

「私の趣味として、女の責場は必ず日本髪で

あるという事である。日本髪の内の、特に島田の形を喜ぶものである。断髪時代の女性に日本髪は出来ない相談であるから、地髪を用うる事にして居る。随つて一人の女性を(責場のモデルとして)得れば、一個の地髪を新に注文して製作させる事にして居る。髪製作には、斯界の第一人者として有名な、人形町の田島宇太郎氏を煩わしている。髪製作費は一万数千円を要し結髪料金七八百円以内、これを一回の写真撮影に費すのであるから、一葉の写真と雖徒らに写せない。其上に女の衣裳やら、責道具の製作費等、仔細に計算すれば相当の額に達するのであるが、そうした道程を経て撮影した写真と雖必ずしも全部成功とは云えない。或時はレンズの外に急所が飛び出したり、雪責の場合などハレーションを起したりして、多年の熟練を以てして猶且つ十に一の物を得るに難いのである。抑然らば何が為にかかる無用な仕事に没頭して居るかと反問されると、私は沈黙を守るより他にないのである」(昭和27・5)

晴雨の責写真の特徴は日本髪と乱れ髪の美にあつて、女の髪に異常な執着を示したことは勿論芝居の舞台の責場からの影響である。明烏の雪責、中将姫の雪責、殺し場では皿屋



敷のお菊、紅皿欠皿、小糸佐七の浜町河岸、高尾の吊し斬り、真景累が淵のお久などといずれも責められる女、殺される女の髪のみだれやうねりが、重要な役割を果たす場面で、それらは幾度も幾度も繰り返して、好んでその随筆中に書いている。また、島田髻の研究では鬘屋（かもじや）はだしという所で「女の島田髻は如何にして壊れるかという試験をした事があるが、島田髻は日本髪の中で最も至難なものとされている。根取りをしてから十本以上の飾り元結をかける迄、元結の数は相当に多く、従って髪の毛は元結によって複雑に結ばれている」（「結髪と性慾」昭和28・3）と述べ、普通に交接したくらいでは、或いはそれ以上に秘戯を行ったとしても、乱れ髪になることはまずない。春画における乱れ髪にあつては（絵そらごと）で、誇張であつて、催情を目的としたものである、とまで云っている。女の髪のみだれと性慾との関係については、次のような実例を示している。

明治の名優市川団蔵が赤坂溜池に住っていた頃、晴雨は読売新聞の演芸記者としての訪問の役目を果たしてから、世間では、団蔵は若い妾と一緒に寝るとき、女の髪の毛をバラバラに解いて自分の顔に掛けさせ、髪の毛の香りと髪油の交錯した匂いに刺戟されて、七十を越しながら尚性慾をそそっているとの風評が高かったので、不躰ではあったがその真偽を訊ねると団蔵は真面目に卒直に答えた。妾と同衾する際には、缺で女の髻の根を切り髻入れを取り外し、髻の根の元結を外し、髪の毛を解き、終いには根かもじを取り除いて洗い髪のようにして、その毛を自分の顔に掛けさせる、毎夜のように女の髪を解かせなければ眠れない。これが若い時からの習慣で、髪の毛いとその感触とによって、辛うじて安眠をとることができるのだ、と語ったと云う。まさに女の毛髪フェチズムの典型であろう。これが団蔵のように女運に恵まれている立場だったら幸福だが、然らざるものは性犯罪の一種「髪切り」をおこなうに至る訳だ。

また結髪美術は日本の誇りだという説をも唱え、結髪は最初性慾の対象物として発展し美人風俗画の主題として栄えたことは師宜・歌麿・北斎・栄泉・国貞・豊国そして明治以後、永洗・芳年・清方・深水と続いてきた。春画の主流をなす所の美女の急所は、からだの局部ではなくて、その顔を引き立たせるところの黒髪にあつて、多くはその結髪の形のおもしろさにあると云う。確かに一家言であると同時にアブノーマルな性感を如実に示した論であった。毛髪と荒縄、これが晴雨の責写真の最も強調された見せ場となっていた。背景は「雪」と「墓地」を特に好んでいたようだ。責愛好のマニヤ達に云わすと、極端な趣味にまで突っばしてしまつと、女体の緊縛美にはモウ「顔」はいらない。こういう高度な？鑑賞眼を持つようになってしまつと、縄が、肉にどれだけ深く強く食いこんでいるか、その真実を凝視する。したがってこの世界でも亦ウソは通用しない厳しさがあり、愈々病膏盲に入り、ありきたりの責めや縛りには満足できなくなって、特に甚だしい場合には妊婦あさりやら、妊婦責を好む。晴雨の写真にもその傾向のいちじるしい製作があった。残酷美愛好癖も染み女を責めるにいたつては、極道ここにきわまつたと云うべきであろうか。

#### 四

ふんどしの紐のゆるいの（と云つても、此頃はふんどしを締めている人を、町の浴場でも余り見掛けなくなつたが）と、縛りの縄のゆるいのは、どう考へたつて戴けない。晴雨以後の緊縛写真では、あまりにも女の



ソドックス・スタイル式に戻ってしまった。  
併し、これとても満更に根も葉も無いところから発生したのではなくて、ちゃんと一応は、新しい風俗雑誌の口絵などから発想を得たものらしく、猿ぐつわや竹竿、荒縄、くさりまで使ったりして、辻村氏などが見たら恐らく苦笑のほか無いだろうと思われる珍写が

多かった。——只の、猥写真そのものを目的とするのだったら縄はかえって邪魔になるだけだろう。此処でも、カメラがあまりにもたやすく扱われ過ぎる不満を感じるのである。

それに、最近の縛り写真家たちは、晴雨にくらべると、モデルの女性を手軽に取り替えすぎる。この雑誌で言えば、毎号ちがったモ

▽賞金△

|                                |                                |                                |                                |
|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 入選作品<br>四席<br>1篇<br>五千元<br>20篇 | 入選作品<br>三席<br>1篇<br>一万元<br>10篇 | 入選作品<br>二席<br>1篇<br>三万円<br>10篇 | 入選作品<br>一席<br>1篇<br>五万円<br>10篇 |
|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|

▽内 容△

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並Mは勿論のこと、各種各様のフエティッシュ一般、女性切腹、男性切腹、男女性禪美、女相撲、女斗美、生首狂崇、変装、妊婦嗜好、見世物奇態珍聞、奇習珍奇風俗、風俗文獻紹介、同性愛、アブラブ等をはじめとして、その他古今東西に亘る特異風俗に関する題材を広くとりあげて下さい。

一、広範囲に大いに新分野の開拓による力作を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱っていない分野の傑作をお待ちします。

▽規定△

一、形式は創作、小説、読物などのフィクションも結構ですし、又自らの体験による告白や手記、見聞記、実見談でも結構です。更に論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、如何なる形式でも最もお得意のものをを選び下さい。

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作品中に引用部分があれば、その出処（作者、書名など）を明記願います。以上の枚数は四百字詰原稿用紙換算にて三十枚以上二百枚まで。必ず二百字詰又は四百字詰の原稿用紙をご使用願います。入選作品は順次、締切日は、毎月十五日。一次号の誌上に発表いたします。懸賞応募原稿は、他の一般原稿と区別するため第一頁に「懸賞」とお書き下さい。返信料同封の上、その旨添記して下さい。一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書函第41号、暁出版株式会社、奇ク編集部懸賞原稿募集係宛。必ず郵送（第一種郵便）によつて下さい。直接の訪問は固くお断りいたします。す。採否は誌上発表を以てご承知願います。

しい仕事ではあるまい。毎日リングを新しいものと替えていたら、絵は出来上らないことは自明の理である」と云うのはどうだ。

脇道にそれたまま、ままとりのつかぬこの短章をおわるが、むかし晴雨がもし自由に、やたらに女を裸にして縛ることができたら、やはり幾人も幾人もモデルを替える、という想像も成立しそうだし……。この辺の実際は辻村氏など現代の、実地に責写真の撮影に執念深く食いさがっている人の説を、きくべき所であろう。



## 連載時代伝奇小説

緋

ひ

縮

ぢり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(最終回)

## 白鳥大蔵

## カラス鳴き

深川扇橋の見世物師、ヤレツケの岩松の家の、裏塀の通用口の近くまでやってきて、寺尾半九郎の足が、ぴたりととまった。

付近一帯にもものしい人だかりがして、ただならぬ気配に包まれている。

——そうか、役人が来て調べているのだな。半九郎は気がついた。

この家のなかで、主人の岩松が殺され、自分の定も斬られて死んでいる。残った子分たちとすれば、役人に届けないわけにはいかな

い。

そこで、町奉行所から、同心たちが出張ってきているのだ。

——まずい。まごまごしては、つかまるぞ。

二人を斬ったのは、半九郎である。

短気で向こうみずな半九郎だが、役人が多勢あつまっている中へ、のこのこと姿を現わすほど、無謀ではない。自分にはっきり不利だとわかっている道は、避けて通るだけの分別はある。

——弱ったな。久六のやつ、また、いやな目でおれを見るだろうな。

岩松の家の裏庭へ落としてきたオランダ歌留多の半片を、ひろいに來た半九郎だった。

しかし、これでは手も足もでない。

半九郎はふところ手をして、いま來た道を引き返しはじめた。

久六は、半九郎がオランダ歌留多を盗んだと思いこんでいる。いまの場合、そう思われなくても仕方がないが、しかし、本当に半九郎は庭へ落としてきたのだ。

いくら言いわけをしても、うたぐり深い久六は信じようとしないうだろう。寝たきりで、自分で身を動かすことができないために、いっそう猜疑心が凝り固まっている。



——いっそのこと、久六も斬るか！

と思ったが、久六の息の根を断ってしまつては、約束の残りの金を受け取ることができない。

とにかく、この辺でうろうろしては危険である。

半九郎は、足をいそがせた。身を隠すところといえば、やはり、あの久六のいる屋敷の地下部屋しかない。腹立たしくなつて、だれに向かつてでもなく、半九郎は舌打ちした。

深川扇橋から、石浜神社裏の久六の屋敷まで、半九郎の足なら半刻たらずでもどろることができる。

しかし、その屋敷にも、意外な敵が半九郎を待っていたのだ。

裏庭に立っている巨大な銀杏の下で、寺尾半九郎はその敵と向かいあった。

「しばらくでしたな、寺尾さん」

大津屋彦兵衛は、柔和な笑顔を、半九郎にむけた。

表面はおだやかだが、その瞳の底には激しい憎悪と敵意を秘めている。飼犬に手を噛まれたのだ。いくら豪放な彦兵衛でも、半九郎に対する怒りは強い。

彦兵衛の背後には、黒縄の五郎蔵が陰険な

顔で半九郎をにらみつけていた。

お京のからだを『花鳥』の離れへもう一度縛りつけておいてから、日本橋伊勢町の大津屋へ出むき、彦兵衛をここまで案内してきた五郎蔵だった。

もっとほかに下ッ引きを駆り集めて、それから久六の屋敷へ乗りこもうじゃありませんか、という五郎蔵の提案を、彦兵衛は拒絶したのだった。

この一件は、どうしても自分だけで解決しなければならぬ、と彦兵衛は五郎蔵に言った。

五郎蔵に対しては無論秘密だったが、抜け荷の割り符のことがからんでいる。だれに頼ることもできないのだ。決心して、単身で乗りこんできた大津屋彦兵衛だった。

「裏切つて、すまぬとは思っているが、こっちにも、いろいろと事情があつてな」

半九郎は、悪びれずに彦兵衛の顔を見た。それから、ついでに五郎蔵の顔も見た。

五郎蔵は、びくっとして反射的に一歩さがり、犬のように姿勢を低くした。半九郎とは初対面だが、岡ッ引きのカンで、ひと目見たときに、こいつが岩松を斬り殺した浪人で、久六の用心棒だな、と敵意を燃やしている五

郎蔵だった。

「わたしの女房と娘は、どこにいる？」

彦兵衛はきいた。それがまず、ききたいことだった。

しかし半九郎は、彦兵衛をからかうように傲然と、ちがうことを答えた。

「おれはいま、立花屋久六の用心棒だ。はじめ千両で雇われ、あとでもう千両値上げして都合二千両。そのうちの五百両は、すでにもらつてある。おれは久六を守つて、残りの千五百両をもらわなければならない」

かさねて、彦兵衛はきいた。

「女房と娘は、どこにいる？」

「久六のそばにいる」

「無事か？」

彦兵衛は、思わず一歩踏みだしていった。

「無事だとは気休めにも言えんが、どうやら生きている。だが、その場所を教えるわけにはいかない。おれは久六の用心棒だからな。」

久六の敵ならば、斬らねばならぬ

半九郎は、土蔵を背にして二人の前に立ちふさがった。

土蔵の屋根の上には、いつのまにか数十羽のカラスが集まり、まっ黒になつて鳴きさわいでいる。



五郎蔵が腰から十手を引きぬくと、いかにも岡ッ引きらしく身構えた。

「岩松殺しの下手人寺尾半九郎。御用だ、神妙にしろ！」

半九郎は十手をみて、鼻のさきで笑った。

「そうか、きさまは岡ッ引きか。道理でいやな人相だと思った。ちかごろでは岡ッ引きが抜け荷買いの手先をつとめているのか。ご時勢だな」

「寺尾さん、久六の隠れている場所へ案内してもらいたい」

いいながら彦兵衛の両手が、袖口から懐中へもぐりこんだ。

ははあ、財布でも取りだして、おれの前に小判でもばらまこうというのだな、と半九郎は思った。

「駄目だ。案内するわけにはいかぬ」

半九郎は、首を横にふった。

しかし、彦兵衛がいくら出すか、小判の枚数によっては、また彦兵衛に鞍替えしてもいい、と思いはじめている半九郎だった。

五郎蔵が、十手をふりまわしてわめいた。

「やいやい、てめえがしゃべらなくなたって、おれがちゃんと知ってらい。旦那、まずこいつを御用にしてから、土蔵の中へ踏んどみま

すから、そこで見ていておくんなさい」

彦兵衛がそばで見ているせいか、五郎蔵は威勢がよかった。十手を構えながら、じりっじりっと半九郎の前に進んだ。

「親分、お気をつけなさい。そいつは、居合抜きの人だ」

油断のない目つきで、彦兵衛がいった。

半九郎の全身に、氷のような殺気がみなぎった。

その殺気に気押されて五郎蔵は思わず一歩とびさがった。

腰を低く落としながら半九郎の右手がすつと動いて大刀の柄にかかった。同時に一歩前へ踏みだしてきた。

その瞬間であった。

彦兵衛の懐中から、ふいに短銃の先端が顔をだし、轟然と火をふいた。

屋根の上のガラスが、いっせいに羽音をたてて飛び立った。

半九郎は大刀を抜き放っていた。しかし、柄をにぎっている腕の力は、すでに衰えていた。

胸板から血をふきだしながら、半九郎は地面に倒れた。

「おのれ、大津屋……」

わずかに顔をあげて彦兵衛をにらんだが、半九郎の顔面には、みるみるうちに死の色がひろがってきた。

ふたたび屋根の上にもどってきたカラスの群れが、前よりも騒がしく、吠えるように鳴きはじめた。

## 取り引き

完全に死んだかどうかをたしかめるために五郎蔵は刀をつかんでいる半九郎の手首を、草履の裏で踏みにじった。

半九郎はもう、ぴくりとも動かなかった。

「旦那、おやりなすったね。それにしても、飛び道具を持っているとは、夢にも思いませんでしたよ」

五郎蔵は彦兵衛にふりかえって、蛇のようになうす笑いを浮かべた。

「野良犬を一匹、退治したまでのことです」

短銃の先を懐中におさめながら、彦兵衛は変わらない表情でつぶやいた。

「だれかに見つかるはずいから、この死骸は、その井戸の中へでも投げこんでおきましよう」

相手が完全に死んでしまったとみると、五



郎蔵は急に大胆になって、まだ血の色もなまなましい半九郎の死体をひきずり、井戸の底へ蹴落とした。

「親分、さあ、早く、お静とお雪がいる所へ案内してください」

彦兵衛は、せきたてた。

しかし、五郎蔵は妙に落着き払った、岡ッ引きらしい底意地の悪い表情になって、彦兵衛に向きなおった。

「大津屋さん、その前に、折りいって相談があるんですがね」

「相談？ なんの相談かは知らないが、その前に、女房と娘を助けださない……」

彦兵衛は、あせっていた。

お静とお雪が無事だとは気休めにもいえないが……と、さっき半九郎の言った言葉が、黒いかたまりになって彦兵衛の胸にひっかかっている。

「いや、こいつは是が非でも、いまのうちに決めておかねえと、おたがい、まずいことになるんでね……」

五郎蔵の狡猾な目が、冷酷さを増して光った。岡ッ引きが獲物を狙うときの残忍な目の光りだった。

「なんです、早くおっしゃってください」

「大津屋さんが、必死になって探していなさる、抜け荷の割り符のオランダ歌留多。そいつがどこにあるか、あっしはちゃんと知っているんで……」

五郎蔵は、ずばりと言って、彦兵衛の反応をうかがった。

さすがに豪胆な彦兵衛も、一瞬、顔色を変えた。

まさか五郎蔵が、そこまで知っていると思わなかったのだ。抜け荷の秘密を、最も知られてはならない人物に知られてしまったのである。お静とお雪を救いだすための、これは大きな代償にちがいがなかった。

「日本橋伊勢町の太津屋さんが、裏ではご禁制の抜け荷買いをやっているとは、あっしだって初めのうちは、とても信じられませんでしたよ」

勝ち誇ったように、五郎蔵はいった。そして、もっともらしく声を低め、周囲を警戒しながらいった。

「大津屋さん、岡ッ引きなんてのは、この世の中のダニだ。ゲジゲジだ。お上の御用をきく御用聞きだなんて、いくらきれいなことを言っただって、ゲジゲジでねえ岡ッ引きなんて江戸には一人もいねえ。当人がいうんだから

こんなたしかなことにはねえ。そのダニに感づかれるとは、まずいことになりましたねえ」

五郎蔵は注意ぶかく彦兵衛の反応をみながら、屋根でうるさく鳴いているカラスへ石を投げた。彦兵衛に対して、余裕のあるところを見せたのだ。

「ご相談に、のりましょう。オランダ歌留多を返して頂ければ、そくぎに千両、あなたさまに差しあげましょう」

彦兵衛は、観念した顔でいった。

「おっと、千両だけじゃ、すまされねえぜ。一時金として、まず千両だ。それから抜け荷の取り引きがあるたびに、百両、二百両と、まとまった金が欲しい。お前さんの儲けにくらべたら、雀の涙ほどの金だと思っただがなあ……」

五郎蔵は、カサにかかっていった。

彦兵衛は沈黙した。

「いやだと言うのなら、お上へ訴えるまでのことだ。おれは御用聞きなんだからな。ついでに、ご禁制の短銃で、寺尾半九郎という侍を射ち殺したことも訴えますぜ。浪人とはいえ、侍は侍だ。抜け荷の罪と合わせたら、獄門ハリツケよりも重い罪になる。どうです、大津屋の旦那。この取り引き、なにも考える



ことはねえでしょう」

相手の弱みをつかんだときには、徹底的に責めつけ、しぼりあげる五郎蔵の面目が発揮された。まさしく、ダニであった。

「よろしい。親分の条件は、全部お引き受けいたしました。すべて親分のおっしゃる通りにしますよ」

「本当ですか。嘘じゃねえでしょうねえ」  
用心ぶかい目つきで、五郎蔵はいった。

「大津屋彦兵衛、千両や二千両で嘘はつきません」

彦兵衛は微笑した。笑うだけの余裕を彦兵衛も、とりもどしていた。

「そうかい。それで安心したぜ。これで、これとお前さんとは、同じ秘密を持つ仲間同志だ。これからは仲よくやりましょうぜ」

「それで、オランダ歌留多はどこに?……」  
ときく彦兵衛に、五郎蔵は嘲笑に似た笑いを、にやりとみせた。

「そいつは、もうすこし先へ行ってから、お渡ししましょう。へへへ、大丈夫、あっしがたしかに、預っておりますよ。えへへへ」  
五郎蔵にとって、こんなうれしいことはない。これで一生、遊んで暮らせる身分になったのだ。

五郎蔵は、はずむような足どりで先に立つと、土蔵の金網扉をひらいた。

## 闇の狂笑

立花屋久六は、すでになかば狂っていた。

お静を柱に縛りつけたままでは、その肩や背中や尻がなめられないので、とうとう柱に結びつけた縄を解きはじめようとした。

片腕しかない久六にとって、それは苦勞の多い作業であった。

しかも、残っている左眼の視力がほとんど衰えていた。久六の視界は、いま永久に閉ざされつつあった。

目のみえないままに、久六は手さぐりで柱につないであるお静の縄を解いた。

柱からは解かれたが、お静の両腕を縛った縄は、まだそのままだった。

久六は、お静の背中によじのぼるようにしてすがりつくと、左手を肩にかけて、そのなめらかな衿首を、ぺろぺろとなめはじめた。

「ひひ、ひひひ……お静、お静、ひひひ……おれのお静……」

熱い息を吐きながら、耳たぶをなめ、耳の穴を吸い、耳のうしろのへこんだ部分にまで

黒ずんだ長い舌をのばす久六だった。すでに盲目の獣と化していた。

「腕が痛い……縄を解いて……胸が痛い、縄を、縄を……解いて」

お静は、白い顎を天井にむけ、すすり泣くような声でうめいた。

抵抗する体力は、もう残っていなかった。

ときどき敏感な部分を強く吸われ、ぴくりと全身をふるわせるだけになっていた。あとは久六の舌にまかせているだけだった。

「痛い、お静……痛い、どこが痛い、お静……」

久六は背後から手をのばして、お静の肌のあちこちをまさぐった。

目がみえないので、手でさぐるよりほかに仕方がなかった。しかし久六は自分の失明を知らず、部屋の中が見えないのは、行燈の火が燃えつきたためだと思っていた。

不自由なからだで這いずりまわったために久六の着物ははだけ、帯は解けて、ほとんど半裸になっていた。

傷口の化膿による高熱のために、骨だらけの細いからだに燃えるようにほてっていた。

お静の背中に、その熱いやせた胸板を密着させて、久六は左手で縄を解きはじめた。



「熱い、熱い、背中が熱い……」

お静は、またすすり泣いた。

久六はおびえたように離れた。

「痛い、縄が痛い……早く解いて……」

左右の手首をひとつにして縛りつけた縄はますます固くくいこんでいた。十本の指の血行がとまって、紫色にふくれあがっている。

手首にくいこんだ縄目を解くのは、両眼がひらいていても、容易なことではなかった。

しかし久六は汗びっしょりになりながら、その作業をつづけた。

「待ってろ、お静、もうすぐだ。もうすぐ、縄が解ける……」

久六は、お静の手首の縄目に口を寄せて、歯で解こうとしたが、その歯は、この数日間の高熱と衰弱のために、すべてぬけ落ちていた。

久六は、また左手の指を使いはじめた。爪が裂け、指の皮がむけて血がにじみだした。

あらい息をつきながら、それでも久六は休まなかった。いまは、お静の縄を解くという一念だけに凝り固まっていた。そのほかのことは、なにも頭になかった。すでに狂乱の状態におちいつている久六だった。

そして、お静もまた、久六の狂乱に合わせ

るかのように、狂いはじめていたのである。

この数日間の昼夜の別もない苦痛と恐怖の連続を思えば、狂気に至るのも無理ではなかった。

どんなに強固な意志をもつ人間でも、この異常な監禁と責め苦の前には、発狂せざるを得ないであろう。お静は狂ったのである。

「早く、早く、縄を解いて……あたし、久六さんが好き。だから、だから、早く縄を解いて……痛い、痛い……」

お静は、子供が駄々をこねるような泣き声をあげて尻をゆすった。

「おお、よしよし、痛いか、痛いか、もうすこしの辛抱だ。待ってろよ」

久六の一途な執念は、ついに手首の縄を解きほぐしたのである。

「ほれ、もうすこしだ、もうすこしで解けるぞ」

頭から水を浴びたような汗をかき、骨の浮きでた胸をあえがせていた。のどがぜいぜいと鳴っている。ときどき休んで、熱く燃える頬を、お静のつめたい背中に、ひやすようにして押しつけた。

乳房にくいこんでいた縄が、ようやくゆるみはじめた。

「ああ、ああ……」

お静は、歓喜の声をあげた。左右の腕をゆすって、すこしでも早く縄からぬけだそうともがいた。

久六の視界は、完全に暗黒のなかに閉ざされていった。

目の前にうごめいている女ざかりの白い肌を見ることは、もうできなくなっていた。

お静の存在をたしかめるのは、残された左手の指と唇だけであった。それだけに欲望はかえって凝固して燃えさかった。

久六は、ついにお静の肌から縄を解き放った。同時に、しばらくは力尽きたという感じで、お静の腰のうしろにうずくまった。

「お静、ううう、お静……」

やがて久六は、手にしていた縄を投げすてると、狂おしい吐息とともに、ふたたび猛然とお静にしがみついた。

燃えつきようとする蠟燭がその寸前の一時だけ、光りを増す光景に似ていた。歯のない口でお静のやわらかい隆起を噛み、吸い、なめた。

目はみえなくとも、久六の網膜には、白い美しいお静の肉体が灼きついている。その肉体を追って、左手だけが巨大な虫の触角のよ



うにうごめいた。

「ああ、ああ、あなた、あなた……」

お静もまた、完全に狂った目の色で、久六の骨と皮だけの胸にしがみつき、あらわな反応を示した。

正常な神経を放棄したお静は、久六の要求に応じて、獣に変化していた。白い獣となり果てたお静は、女をむきだしにして久六にせまった。久六は吠えるような声をあげ、そのお静を左腕だけで受けとめた。

「お静、お前はおれのものだ、お前は、おれだけのものだ……」

いまこそ、法悦の境地をさまよう久六だった。この執念だけが、久六の生命を支えていた。

また唇が、お静に吸いついた。飽きること知らなかった。この行為が停止した瞬間こそ、久六の生命の灯が消えてしまうときなのであろう。

「あなた、もっと強く……」

あえぎながらも、お静はさらに力をこめて久六の頭を抱いた。吸盤を持った獣のようにぴったりと吸いついた。

「あなた……あなた……ああ……」

あるいは彦兵衛の面影が、お静の網膜に浮

かびあがっているのかも知れない。

「お静。ひひひ、お静。ひひひ……」

むちりしたやわらかい女の腕に抱きしめられて、久六は見えぬ目を天井にむけ、恍惚と笑った。唇の内側から、悪臭をふくんだよだれが、溢れたようにべとべとと流れはじめた。

「あなた。ひひひ、あなた。ひひひ……」

お静もまた、豊満な乳房をゆすって、狂った笑い声をあげた。縄目の痕こそあれ、美しいまみは、すこしもなくずれていない乳房だった。しかし、その左右の乳房のあいだに汗が粒になってしたたり流れているのは、不思議に獣じみて見えた。

「ひひ、ひひひ……」

お静は笑いながら犬のように畳の上にとこがり、久六に唇を寄せると、ぺろぺろとなめはじめた。

「うう、お静、お静、ううう……」

久六は、吠えるようにうなった。

狂った二匹の獣は、暗い密室のなかで、激しくとこがり、這いまわり、うめき声をあげてもつれ合った。

すでに過去もなく、未来もなかった。オランダ歌留多の争奪も、久六の意識からは消え

去っていた。

あるのは、いま手に触れ、肌を感じているものだけだった。狂った二人の神経には、それすら、実態のない、一片の幻影だったのかも知れない。

彦兵衛が、最愛の妻と娘を救うために、この地下部屋のすぐ上にまで来ていることを、お静は知らなかった。

一切の思考から切り離されたお静は、久六とともに、地獄の底にのたうちまわるだけであつた。

## 野獣の死

地下部屋の板戸をあけた大津屋彦兵衛は、凝然として、その場に棒立ちになった。

彦兵衛の目の前には、久六とお静の陰惨な狂態があつた。

それは、まぎれもなく狂態であつた。そして、それは破滅を数刻後にひかえて最高潮に達していた。

彦兵衛の背後から五郎蔵が顔をだし、部屋の中のありさまを見て、さすがにぎょっとしたように立ちすくんだ。

二人の目に映った久六とお静のからみ合い



は、破廉恥きわまりない、奇怪なものであった。しかもそれは、彦兵衛のしている前で、うめきを発しながらつづけられたのである。

お静の長い黒髪が、鬘の形を残さずにざんばらに解けて、白い背中の上にあらあらしく波打ってくねっているのが、鮮烈な眺めであった。

「お静……」

というさけび声を口のなかで殺したまま、この冷酷な状態の前に、彦兵衛は絶句した。その気配に、お静と久六は顔をあげた。

お静は、うつろな瞳孔を彦兵衛にむけて、寸時首をかしげていたが、やがてケラケラと笑った。

彦兵衛の背筋に、氷の刃で斬られたような戦慄が走った。

お静の笑い声につられたように、久六も齒のない黒い口をあけて、ケラケラと笑った。

ひと目みただけで、お静が発狂し、久六が盲目になっていることを、彦兵衛は知った。

悲惨な、痛ましい光景であった。

汚物にまみれながら、二人の手足はまだ蛇のように執念ぶかくからみあい、なまなましい悪臭を放っていた。

「大津屋さん、こりゃあ、ひでえことになり

ましたねえ……」

五郎蔵が掌で鼻をおさえ、うなるようにいった。

さすがの五郎蔵も、この荒涼とした情景を正視することができずに、顔をそむけた。

うす暗い部屋のなかに、お静の白い裸身だけが、奇妙なほど、ほの白く浮かびあがっている。

お静の顔も、汗と、よだれと、唾と、そのほかの分泌物で、ぐちゃぐちゃに濡れ、汚れていた。

「大津屋さん、あっしは、となりの部屋を調べてまいりましょう」

この部屋に澱んでいる濃い臭氣に耐えかねたように、五郎蔵がいった。そして、片手で鼻をおさえながら、そそくさと部屋から逃げていった。

「お静……」

と、彦兵衛は棒立ちのまま、のどの奥でつぶやいた。かすれた声であった。足を一歩も前へ踏みだすことはできなかった。

彦兵衛の呆然自失は、まだつづいていた。

盲目の久六が、お静の長い黒髪を、齒のないう口のなかへ入れて、ぐちゃぐちゃと噛みはじめた。

その音だけが、うつろにひびいている。ぐちゃ、ぐちゃ、ぐちゃり……。

それは彦兵衛が夜毎に愛撫した、彦兵衛だけの黒髪のはずであった。

「ひどい……あまりにも、ひどい。ひどすぎる……」

彦兵衛は、うめいた。

悪党に誘拐された美貌の女房と娘が、まったくの無傷でいるとは思えなかった。ある程度の覚悟はしていた。

生きていくれさえすればいい、とひたすらに祈っていた。彦兵衛は女房と娘を愛していた。

たしかに生きてはいた。しかし、あまりにも無残な姿であった。

「ヒヒ、ヒヒヒヒ……」

お静が、久六のくぼみから顔をあげ、彦兵衛を見あげて、また笑った。

それから、またもぞもぞと動きだして、久六とお静の足と顔の位置が逆になった。久六が、しゃくりあげるような奇妙な笑い声をあげた。

「キキ、キキキキ……」

あるいは、泣いているのかも知れない。その声に誘われたように、一時死んでいた黒い



髪の毛が、うねりながら波打ちはじめた。

二匹の獣は汗にまみれ、その汗のにおいが沈澱している悪臭をかきまわして、むんむんとたちのぼった。

「お静、お前は……」

それを押しとどめようとして、なにか言おうとしたが、あまりの痛ましさに、彦兵衛はそれ以上の言葉をかけることができない。

やさしく、利口で、なまめかしく、貞淑な心づかいをみせた美しい女房の面影は、そこには一片もなかった。

「ヒヒヒ、ヒヒヒ！」

べったりと唾液でぬれた髪の毛を手で払いのけて、魂を失った不気味な美貌が、けたたましい笑い声をあげた。

彦兵衛は、絶望にうち勝とうとするかのように、凝視をつづけた。

久六の右腕の傷口が破れて、血が流れだしていた。血と汗と唾液にまみれて、二匹の獣は凄惨な闘いをくりかえしていた。

おそらく、二人の息が絶えるまで、この闘いはつづけられるだろう。

「大津屋さん……」

もどってきた五郎蔵が、彦兵衛の背後から声をかけた。

「大津屋さん、となりの部屋で、お嬢さんが死んでますぜ、舌を噛み切って……」

彦兵衛は、その言葉にふり返らなかった。

お雪の最期の姿は、彦兵衛には容易に想像できた。

悲しみや怒りを超越した空白の感情が、彦兵衛を押し包んだ。

「そこで、大津屋さん、さっきのオランダ歌留多についての相談だが……」

五郎蔵がいった。

彦兵衛が、ふりむいた。その手には、さっき半九郎を射った短銃が握られていた。

「おいおい、大津屋、なにをするんだ。大津屋！」

五郎蔵は、両手を大きく横にふると、まっ青になって後退した。

彦兵衛の顔に怒りはなく、木彫りの面のように無表情だった。ただ、短銃の銃口だけを五郎蔵の胸に、ぴたりとむけていた。

「ま、まってくれ、大津屋、歌留多はここにあるんだ。おれが持ってるんだ。すぐに渡しでもいい。おい、大津屋、ばかな真似はやめろ！」

五郎蔵は、あわてふためいて部屋からとびだし、階段をかけのぼろうとした。

彦兵衛は、その背中へ狙いをつけて、引き金をひいた。瞬間、彦兵衛の眉のあいだに、悲しみの色が走った。

弾丸は、背中から胸へつらぬいた。五郎蔵は三步あがった階段から、くずれるように落ちた。

五郎蔵の懷中から、オランダ歌留多の半片がのぞいていた。

彦兵衛は、その歌留多を取りあげようとして身をかがめたが、途中でやめた。

五郎蔵の胸から流れだした血が、歌留多を赤くぬらしはじめた。

彦兵衛はもう一度狂った女房のいる部屋へもどってきた。

お静と久六は、前よりも激しい動きに突入していた。

荒野に吹く風のようにむなしい色が、彦兵衛の顔いっぱいひろがった。

彦兵衛は、二匹の獣のそばまであゆみ寄ると、短銃の銃口をむけた。

ぴたりと密着しているために、哀れな二匹の息をとめるには、一発の弾丸で十分だった。



## 告白

## 愛 夫 の 記



カット・春川ナミオ

栗 原 美 智 子

わたし達夫婦は相思相愛の上で一緒になったのですが、彼の方が熱烈だったので、わたしの方が強い立場にあります。

わたしは学校卒業後、会社勤めを四年しましたが、当時の上司から彼を紹介され、意気投合して結婚しました。彼の真面目な態度が

気に入ったのですが、交際中から、この人なら、私の秘かに抱いている遊び方を受けてくれるだろうと思ったからです。

結婚後、機会をみて奇クを見せると、熱心に読みふけり大変に興味を示しましたので、わたしは早速彼に、わたしの命令にすべて従

うことを誓わせました。

ある程度、惚れた弱味が彼にあったにしても、二人だけの水入らずの愛の巢で、わたしの思いつくままにSMが楽しめることは、たいへん幸福だと思います。そのプレイの主なものは次のようなものです。

## 一、ハイドウハイドウ遊び

私の汚れたパンティを、彼の口に詰めこめるだけ詰めて、その上から使ったばかりのオシメでさるぐつわをし、クタクタになるまで乗り廻します。

新婚の夫婦の遊びです。二人がどういう姿かはご想像がつくでしょう。わたしは、彼の脇腹やおなかを、力一杯蹴りあげたり、お尻をドスンドスンと背中に落としたりしてやりますし、時には、その姿勢のままガラス製の浣腸器を使い、一〇〇ccの効力を、たらいで確認することがあります。ある時、調子にのって、急所蹴りをしたことがありましたが彼はこの時だけは本当に悶絶せんばかりにしかこれだけは勘弁してくれと哀願しました。わたしもさすがにびっくりして、以後は遊びの時には気をつけています。でも、責めの時には有効だと思います。

## 一、オトイレ遊び



ガーゼを彼の口にあてがい、人間トイレにしてあげるといふわけです。惚れたわたしのものです。彼にとっては、さぞ甘露だろうと思います。

毎月一のつく日（一日、十一日、二十一日の三回）は、わたし達の検便日です。排便は健康のバロメーターですから、二人のを較べるだけでよくわかります。調子の狂っている場合のお薬は、彼に限って、私のいい色のもので、コップ半杯から一杯が一番よく効くということにしています。

浣腸はわたし自身も好きなのですが、これは、いつもお腹の中をキレイにしておく、体が軽く、爽快な気分だからです。そこで、月初めと月半ばには定期的に、少しでも変調を覚えると随時、イルリガートルが呼びといることになり、定量一、〇〇〇ccを、彼にもらっています。わたしの場合には必ずお風呂場ですが、彼はわたしに対する浣腸奉仕が済むとすぐに人間トイレに早替りしなければなりません。

#### 一、オシメ遊び

ハイドウ遊びの時にも応用しますが、私の使ったオシメで、彼にサルグツワをしたり、顔面巻きにしたりすることは、気分次第で随

時の遊びになっています。

彼にオシメを着用させた時は、濡れてもわたしの命令以外には替えることを許しませんし、一〇〇ccの浣腸をしてやって、オシメで巻き、大体六時間ぐらひは、替えることなく我慢させるようにしています。

わたしも勿論使いますが、そのオシメを利用する時以外は、体の調子のおかしい時だけで、濡れると冷えるので、すぐ彼に取り替えさせ、始末させることにしています。

#### 一、浣腸遊び

わたし達は、二、〇〇〇ccのイルリガートルと、一〇〇ccのガラス製浣腸器だけしか持っています。プレイするぶんには少しもこまりません。わたしは体調を整えるのが主ですが、彼には、他のお遊びとの併用が多い関係で、しまいこむということにめったにありません。浣腸自体を主にする時は、一、五〇〇ccぐらひを目安にして、出来るだけ我慢さすようにしています。命令に反して早く悲鳴を挙げ始めると、ソロバンで彼のお尻をはげしく叩いてやるのです。少しでも粗相すると、罰として、開け放したトイレの便座にあがって、しゃがんだまま三時間から六時間、じっとしているように命令してやるのですが

彼は、日によっては、その方がいいといひとりで懲罰姿勢をとる時があります。でもしびれがきれて、後が大変です。

わたしは、この罰に代るものとして、ヌカ味噌の中に顔を押し込んで、潜水の耐久時間を計るように、我慢させることを今考えているところです。

わたしのヒップは98で、そんなに大きいとはいえませんが、ボリュームがあるので、罰用に重圧を加えてやることも出来ると思います。一度、責めとしてシゴいてやりましたが、彼は、すぐく悦んでしまったので、懲罰用としては適当ではないようです。同じ重圧によるシゴキでも、これの方はゴホービにしなければと思います。以後はそうしています。

#### ○

わたし達の住いのトイレはドアはありませんがいつもオープンで、無いのと変りありません。酒井米子さまの『解臭剤とトイレ』を読んで、まったく同感したのは当然です。プレイ以外の時には、あの特有の臭いは必要ではなく、追放すべきです。

酒井さまは、このことと一緒に、ヌーディストクラブについて、こまかい心づかいで献策して下さいました。



わたしも酒井さまの記事を読んで勇気づけられ、この文を書いたのです。わたしも奇クを愛読して六年になりますけれど、執筆者、愛読者、編集者に血の通っている想いのする誌面に魅かれるからで、同じSMでも、緊縛とか浣腸とかにかたよってしまうことがないところに、多くの人達の願望がのぞける思いでわたしも彼も、毎月の発売日を楽しみにしています。

アメリカのインディア州のヌーディスト村で

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

|    |       |     |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 五千元 |
| 佳作 | 一篇につき | 三千元 |

### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

史上初のミス・ヌードアメリカ選出大会が、このほど開催されたというニュースがありました。早く日本でも、このような大会が開けるようになって、アメリカ並みにヌーディスト村が出来てほしいものです。

わたしは、部屋の中でだけですが、彼と黒フンや赤フンでよく相撲や、レスリングまがいのことをしますが、これが広々とした野天のヌーディスト村などで出来たら、どれほど素晴らしい気分になれることかと思えます。

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんが、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

わたしと彼が、現在のように気ままにプレイの楽しめるのも、彼の父のおかげで3LDKのマンションに住んでいるし、彼が父の会社勤めをしていることと、まだわたし達が産制しているからでもあります。一生に一度しかない若さですから、出来るときに、大いに人生の楽しさを味わっておきたいと思っています。

でも、すべてのことが愛情によるプレイなのです。わたしは彼をいじめているようでも、彼の健康には充分気を配っているつもりです。健康ばかりではなく、わたしはもちろん、彼の美容についても、おそらく、どこか奥さんにも負けない自信があるほど、注意しています。

いじめられ、クタクタになっても、幸福でしかたがないという彼。

女王然として、勝手なことを命令していじめながら、彼を心から愛しているわたし。愛情の絆で、シッカリと結ばれ合っているわたし達は、与えられた環境を生かし、わたし達だけの花を咲かせています。

ああ可愛い彼、いとしい彼。



鬼プロ作品シナリオ



鬼

女

映画題名『女が鞭を受けるとき』

団 鬼 六

1 山峡の温泉場

スーツケースを手にした和子が、歩いていく。

浴衣姿の温泉客が、和子をからかって通り過ぎる。

客 よ、姐ちゃん。一緒に温泉、入らねえか。

和子、フンとした表情で歩き続ける。

和子、時折、立止まり、片手の新聞を見ながら四囲の旅館を見廻す。

旅館のハッピを着た中山、歩いて来る。

和子、小走りに近寄って、

和子 あの一、一寸、お尋ねしますが――。

中山――。

和子 大杉旅館というのは、どの辺でしょうか。

中山 大杉旅館ってのは、俺の所だが、何か――。

和子 あ、新聞広告で来たんですが。

中山 ああ、女中さんか。

中山、じろじろと和子の容姿を見つめる。

2 大杉旅館・居間

登場人物

|     |     |    |    |     |    |    |     |    |    |     |     |
|-----|-----|----|----|-----|----|----|-----|----|----|-----|-----|
| 美也子 | 春子  | 和子 | 耕二 | 中山  | 岡田 | 義雄 | 千代  | 木村 | 三郎 | 刑事A | 刑事B |
| 香取  | 浜村  | 紅  | 鶴岡 | 山本  | 関  | 青葉 | 大曾根 | 口分 | 松浦 | 市村  | 讓   |
| 久美  | 真知子 | 八郎 | 昌平 | 多加志 | 雄一 | 洋子 | 良信  | 二郎 | 康郎 | 二   |     |

主人の大杉耕二、寝具の中で眼を閉じている。

添寝している妻の美也子、上体を起こし、じっと耕二の寝顔を見つめる。

そっと、耕二に唇を押しつけ、裸の柔軟な腕を耕二の首にからませる。

耕二、うるさそうに美也子の手を払いのける。

耕二 疲れているんだ。そっとしておいてくれないか。

製作 鬼プロダクション  
監督 武田有生  
監配 給ミリオンの映画KK



美也子、屈辱に顔を硬化させる。

耕二、ふと腕時計を見て、

耕二 こりゃいかん。少し、寝すぎたな。

(上体を起こす)

美也子 今日も東京へ行くんですか。

耕二 ああ、銀行の人を招待する事になつてゐるんだ。

耕二、起き上ってシャツを着始める。

美也子、冷酷な表情で耕二を見つめ、ゆっくりと長襦袢を着始める。

### 3 同・居間

食卓を挟み美也子と耕二、食事している。

冷たい、重苦しい雰囲気。

耕二、新聞を見ながら、トーストを噛っている。

美也子、冷ややかな視線を耕二に向ける。

美也子 また、二、三日はお帰りになれないのね。

耕二 ああ、恐らくゴルフにでも行く事になるからな。帰れないよ。

美也子 全く結構な御身分ね。

耕二 (むっとして) なに？

美也子 貴方は、この大杉旅館の養子だって事、お忘れにならない方がいいわ。

耕二 (苦虫を噛んだ表情)

美也子 お父様が亡くなってから貴方、随分と我儘勝手な振舞いが多くなったよ。うですわね。

耕二 美也子！

美也子、何かいおうとして、急に頭を押さえ顔を歪める。

耕二、驚く。

耕二 ど、どうしたんだ、美也子。

美也子 また頭痛がするんです。

耕二 そりゃいかな。近頃、医者にかかっているのか。

美也子 (首を振る) 医者は嫌いです。

耕二、酸っぱい表情。

再び、腕時計を見て、

耕二 あまり無理をしない事だ。今日一日は寝ていた方がいい。——じゃ、俺は出かけるからな。

美也子、冷たい表情に戻り、立上る。

耕二 送らなくていいよ。

### 4 同・玄関

耕二、出て来る。

玄関先を箒で掃いていた使用人の義雄、急いで耕二の靴を揃える。猫背で醜く、顔に傷のある男である。

耕二 千代はどうしたんだ。

義雄 今日で閑をとる事になりましたんでじゃ、この旅館には、もう女中は、一人もいないってわけか。

義雄 番頭さんが新聞広告を出しましたから、今日ぐらいには応募者があると

思います。

耕二、不快な表情で靴をはく。

耕二 女中のいない旅館って俺は聞いた事がないよ。お前達のやってる事は俺には全くわからない。

耕二、憤然として出て行く。

義雄 (頭を下げて) 行ってらっしゃいませ。

### 5 美也子の居間

風鈴が風に揺れ、微かな音をたてている。

美也子、夜具の上に坐り、ぼんやり風鈴を見つめている。冷酷な表情。

ふと、縁先の金魚鉢に眼を向けた美也子、ついと立上る。金魚鉢を持上げ、庭石めがけて金魚を投げ出す。

庭石の上でピチピチはね廻る金魚。

それを凝視していた美也子、ひきつったように顔を歪めて笑い出す。

庭の方から番頭の中山、入って来る。

美也子の行為を見て、啞然とした表情。

中山 あーあ、随分と可愛がっていた台湾金魚だけに若旦那怒りますよ。奥さん。

中山、はね廻る金魚を、金魚鉢へ入れ始める。

中山 何も金魚にまで嫉妬をやく事ないじゃありませんか。

美也子 (冷たい表情) 用は何なの。

中山 へい。女中を志願して来た女がいる





んです。一応、会って見て頂きたいんですが！

美也子 お前に任せるわ。今日は誰とも会いたくないんです。

美也子、ついと奥へ入ってしまう。

## 6 同・旅館・ロビー

和子、ソファに坐っている。

階段から、閑をとって帰郷する女中の千代が荷物をかかえて降りて来る。

和子、千代に会釈する。

千代、四囲を見廻して和子に近づく。

千代 あんた、この女中を志願して来たの。

和子 そうなんです。

千代 悪い事いわないわ。やめた方がいいわよ。

和子――。

千代 この奥さんはね。少し、気がおかしいのよ。

和子 気がおかしいですって？

千代 サジストというのかしら。若い女を虐待するくせがあるわよ。自分の亭主を取られはしないかという被害妄想が起るのね。うっかりすると、あんた殺されちゃうわよ。

和子 ま、まさか。

千代 ほんとよ。第一、この女中は皆んな逃げ出しちまって、最後まで残ったのは私一人だけなんだから。でも私も、もうがまん出来ない。

千代 向こうから中山が来るのに気づいてそれじゃあね。やめるなら、早いうちがいいわよ。

千代、何喰わぬ顔で玄関の方へ向かい、すれ違った中山に、

千代 どうも長い間色々有難うございました。

中山 あの女、何かくだらない事をあんたに

千代、出て行く。

和子に近づいた中山

千代の方を顎で示して、

中山 あんたに

をあんたに

わなかったか。

和子 いいえ。

中山 そうか。それならいいんだが、あいつ、一寸、気がおかしいんだよ。

和子 ええ？

## 7 同・玄関前

掃除している義雄、荷物をかかえて出て行く千代をじっと見つめる。

## 8 裏道

畠の中の細い道を千代、歩いて行く。

義雄の声 おーい。千代ちゃん。

義雄、うしろから追って来る。

義雄 今日でお別れなんだな。駅まで送って行くよ。

千代 あら、いいわよ。人手がなくなったんで大杉旅館も大変じゃない。

義雄 荷物を寄こしな。持ってやるよ。

千代 いいってば。軽いんだから。

義雄 よこしなよ。

義雄、強引に千代から荷物をとり、歩き出す。

## 9 竹藪近くの道

千代を送って歩く義雄。

キョロキョロ周囲の気配をうかがう。

義雄 ね、千代ちゃん。

義雄、荷物を投げ出し千代の手をつかむ。

千代、慄然とする。

義雄 俺は前から、あんたが好きだったん



だ。

千代 な、何するの。離してっ。

義雄 そうつれない事いうなよ。一度だけだ。な、頼む。

千代 誰か、誰か来てえっ。

義雄、千代を強引に竹藪の中へ連れ込んで行く。

千代、必死に抵抗するが、義雄、千代を押し倒し、衣類を剥ぎとる。  
凌辱される千代。

鳥がけたたましく鳴いて、竹藪から飛び立つ。

立上り、ズボンのバンドをしめる義雄。

千代、仰臥したまま、義雄を恨めしげに見つめている。

千代 (吐き出すように) けだもの。この

ままじゃすまさないわよ。

義雄 どうしようってんだ。

千代 警察に訴えてやる。

義雄 勝手にしろ。

千代 こんな方法でなきゃ女が抱けないのかい。卑怯者。

義雄 (むっとするが、押さえて立去ろうとする)

千代 考えりゃ、可哀そうな男さ。お前のような化物をまともに相手してくれる女なんかいないのだからね。

義雄、カッとして、千代につかみかかる。

義雄 くそっ、殺してやる。

義雄、千代の首を締める。

千代、のたうつが、顔より次第に血の気がひく。

ぐったりなった千代に気づいて、義雄、狼狽する。

義雄 おい、しっかりしろ。おい。

義雄、千代を揺さぶるが、すでに絶命している。

畠の方に投げ出してある鍬を見つけた義雄  
急いでそれを取上げると、竹藪の中の土を掘り始める。

汗びっしょりの義雄、血走った眼つきになり、千代を土の中へ埋めようとしているのだ。

#### 10 大杉旅館・女中部屋

和子、夜具の中で眼を開けている。

謡曲のレコードがかすかに聞こえてくる。

和子、眼覚し時計を見る。

午前一時――。

和子、そっと上体を起こす。

#### 11 同・美也子の部屋

謡曲(紅葉狩)に合わせて般若の面をかぶった美也子、端然と坐っている。

静かに立上って舞い始める美也子。

#### 12 同・廊下

和子、足音を忍ばせて歩いている。

#### 13 同・帳場

和子、そっと入って来る。ポケットから鍵を取出し、金庫の鍵穴に差しこむ。

金庫の扉を開き、中より札束を取出す。

ハンドバッグに金をつめ、出ようとする。

途端に和子、慄然とする。鬼女がそこにいる。

般若の面をつけた美也子が、立っていたのだ。

和子、悲鳴を上げ、ハンドバッグを投げ出して逃げる。

#### 14 同・ロビー

和子の逃げる前を中山が立塞ぐ。

うしろを見れば、鬼女が立っている。

和子、へなへなとその場に坐りこんでしまう。

中山、和子の背を足で蹴る。

中山 こいつ、最初からどうも変だと思っ

ていたが、やっぱり!

和子 出、出来心なんです。許して下さい

中山 出来心だと。俺の部屋へ入ってます

鍵を盗み出し、金庫破りをしたのが

出来心ってのかい。笑わせるな。

美也子、ゆっくりと般若の面をとり、相変わらずの冷たい表情で、

美也子 物置に連れておいき。

中山 来いっ

と、和子の襟首をつかむ。

和子 お願い。許してっ。



中山 来るんだ。

### 15 地下の倉庫

和子、中山に背をつかれて土間へ倒れる。

中山、壁にかけてある竹ムチをとる。

和子、青ざめる。

和子 な、何をしようっていうの。

中山 お仕置をしてやるんだよ。覚悟は出来てるだろうな。

中山、竹ムチを振上げて、和子を力一杯ぶつ。

悲鳴を上げて、床に転倒する和子。

冷淡な表情で見つめている美也子。

中山 女中を装って泥棒に入るとは、全く呆れた女だ。くそっ。



再び、竹ムチを振る。

和子、悲鳴を上げ床の上を這って逃げる。

美也子 裸にした方が、もっといい音が出るじゃないの、中山。

中山 へい。

中山、和子につかみかかって、服を剥ぎとる。

素っ裸にされ、その場に猿のように縮かむ和子。

美也子、倉庫の隅にある麻縄を取り、ドサリと和子の足元へ投げ出す。

ぞっとする和子。

美也子 (冷やかに) 縛っておしまい。

中山、麻縄を手にし、和子の両手を強引にうしろへねじ曲げ、キリキリ

縛り始める。

和子、口惜しげに美也子の方を向き、

和子 恐ろしい女ね、あんた

って。さっきの女中さ

んがいったわ。あん

たは気の狂ったサジス

トだって。

美也子、硬化した表情になり

和子の頬をぴしゃりと平手打

ちする。

美也子 (不気味な微笑) 盗み

を働いてくれて、むし

る私はお礼がいたいわ。お前を折檻する理由が出来たんだものね。

和子、美也子にペツと唾を吐く。

美也子、怒りに眉を震わせ、中山を見る。

美也子 この女を吊り上げて頂戴、中山。

中山 へい。

天井の梁にロープがかけられる。

倉庫の扉の間から、義雄がそっと顔をのぞかせる。

義雄 どうしたんですか、番頭さん。

中山 (和子の足首を縛りながら) 義雄、

手伝ってくれ。この旅館へ盗みに入

った、太え女なんだ。

義雄、ねむたげな眼をこすりながら、中山に手を貸し、ロープを引っ張る。

和子の足が次第に上へ吊り上がる。和子の

口から悲鳴がほとばしり出る。

和子 気違いっ。お前達は揃って皆んな気

違いだっ。

中山 ハハハ、もっとわめけ。その方が張

り合いが出るってもんだ。

和子を逆さに吊り上げる。

狂気したように体を揺すっている。

それを見上げる美也子、何ともいえぬ楽し

そうな顔になる。

中山と義雄、それぞれ竹ムチを持って、逆

さ吊りにされた和子をブチ始める。

言葉にならないうめきを上げてのたうつ和



子。

16 東京・六本木界限の夜の俯瞰

17 酒場・黒猫・その表

18 同・酒場の内部

スタンドの客と談笑しているマダムの春子  
ドアが開いて耕二が入って来る。

春子 いらっしゃいませ（微笑で複雑な眼  
差し）

耕二、スタンドに坐る。

春子 ボックスの方へいらっしゃいません  
か。

耕二 うなずいて春子のあとについていく。  
隅のボックスに坐る耕二と春子。

耕二、煙草を口にする。

それに火をつけた春子。

春子 おそかったのね。昨日いらっしゃ  
かと思つたのに。

耕二 うん。東京へ出る口実が仲々見つ  
かなくてな。

春子 奥さんのお体は相変わらずよろしく  
ないんですか。

耕二 （吐き出すように）あいつのは医者  
にかかつて直るっていう病気じゃな  
いからな。

耕二、店内を見廻して、

耕二 仲々面白い改装をしたじゃないか。

春子 貴方が、氣に入るだろうと思いまし  
てね。スペイン風に、してみたので

す。

耕二 大分、繁昌しているようだね。

春子 ええ、おかげ様で。ただ、女の子の  
数が少なくて。新聞に求人広告を出  
してみたのですけど。

耕二 ハハハ、うちなんか旅館なのに女中

は一人もいないっていう状態さ。

春子 あら、どうして。

耕二 どうも女房がいびり出すらしいんだ  
ね。

スタンドに坐っている客の一人（岡田）先  
程からじつと耕二と春子の様子をうかがっ  
ている。バーテンの木村、不快そうに声を  
かける。

木村 ビール抜きましようか、お客さん。

岡田 （ふと我に返って）うん。頼むよ。

愛想のない表情でビールを注ぐ木村。

岡田 な、おい。マダムは時折、あの男と  
逢ってんのか。

木村 他人のプライベートの事に興味を持

たないで下さい。

岡田 （むっとして）何だと。

木村 （メモに鉛筆を走らせて）お会計は  
千八百円になります。

岡田、苦虫を噛んだ顔で財布をとり出す。

19 春子のアパート・部屋

夜具の上で激しく抱擁し合っている耕二と  
春子。

20 春子のアパートの前

岡田の運転する車が来て止まる。

岡田、春子の部屋の窓を見上げる。  
窓に電気がつく。

21 春子の部屋

電気をつけた全裸の春子。仰臥して煙草を  
ふかせている耕二の胸元に顔を埋め、余韻  
を楽しんでいる。

耕二 な、春子。今度という今度は、本当  
に俺は美也子と別れるつもりだ。

春子 出来る事ならそうしてほしいわ。で  
も、病気の奥さんにすぐ別れ話を切  
り出すなんて事は――。

耕二 美也子は病気でなく異常なんだよ。

春子 ええ？

耕二 女のくせに残虐趣味があるんだ。生  
きているものを虐待して倒錯した快  
感を味あうという恐ろしい女なんだ  
よ。

春子 何だか信じられないわ。

耕二 そうさ。普通の人間にゃ信じられな  
い事だよ。

耕二、上体を起こし、煙草を灰皿に押しこ  
む。

耕二 俺は美也子の父親には、たしかに世  
話になった。俺が大学へ行けたのも  
美也子の父親のおかげなんだよ。そ  
ういう事から俺は、大杉旅館の養子



耕二、立上ってシャツを着始める。

耕二 とにかく美也子は今いったような女なんだ。あいつは亭主まで奴隷的に従属させようとしている。これ以上この屈辱に俺は我慢出来ない。

春子

耕二 それに中山という番頭が女王蜂に仕える虫けらみたいに美也子にくっつき気嫌ばかりとっている。まるで美也子の悪癖を助長しているようなものだ。

春子 何だかこわいみたいな話ね。

耕二 そうだよ。俺だって、ぞっとする時がある。

22 春子のアパートの前

春子の部屋の窓を見上げていた岡田、煙草を捨て、車を運転していく。

23 大杉旅館・庭園に面した和室

岡田が茶をすすりながら庭を眺めている。時折、ポンポンと鼓の音が聞こえてくる。襖が開いて、番頭の中山が入ってくる。

岡田 どうも兄貴、お久しぶりで。

中山 そういう口のきき方はよせ。俺はもうお前達と——。

岡田 わかってますよ。やくざ仲間とはすっかり縁を切ったとおっしゃりたいんでしょ。だけど、変れば変わるも

んだね。かつては南原組の大幹部が今じゃ田舎旅館の番頭が板についてちまってる——。

中山 よさないか、岡田。

鼓の音、急調子になる。

岡田 あの鼓をたたいているのは。

中山 奥さんだよ。何か心に不安が起こると、いつもああして鼓を叩くんだ。

24 美也子の居間

美也子、能面のように冷たい表情で鼓を打っている。襖がわずかに開き、義雄、顔を出す。

義雄 あの、奥様。

美也子 (鼓を止めて) 何か用ですか。

義雄 番頭さんが呼んでおられますが。

美也子 そう。——お前、近頃、顔が悪いわね。

義雄 え、そ、そうですか。

美也子 何か悪い事をしたのね。

義雄 (狼狽して) いえ、何も私は——。

美也子 そう。それならいいけど、今朝、警察が来たわ。

義雄 警察が——。

美也子、立上って襖を開け、義雄に背を向けたまま、

美也子 千代の行方を調べているらしいの。

(効果音に鼓の音一つ)

そのまま、美也子、廊下へ出て行く。

義雄、青ざめた表情。

25 庭園に面した和室

卓を挟んで、美也子が中山と岡田に対峙している。

美也子のこめかみのあたりが、怒りに慄える。

春子 耕二には、やっぱり女がいるというのですね。

岡田、美也子の妖気をはらんだ表情に威圧された形で小さくなる。

岡田 へい。

中山 その相手の女ってのは、六本木の黒猫という酒場のマダムだそうで。

岡田 年は二十三、四、かなりの美人ですわ。ここの若旦那とは相当深い関係のようです。酒場からずっとあとをつけたんですが——。

中山 若旦那はその女のアパートへ寝泊りしている。そうなんだろ、岡田。

岡田 へい。ま、とにかく両方とも惚れ切ってるという感じですね。人が見て

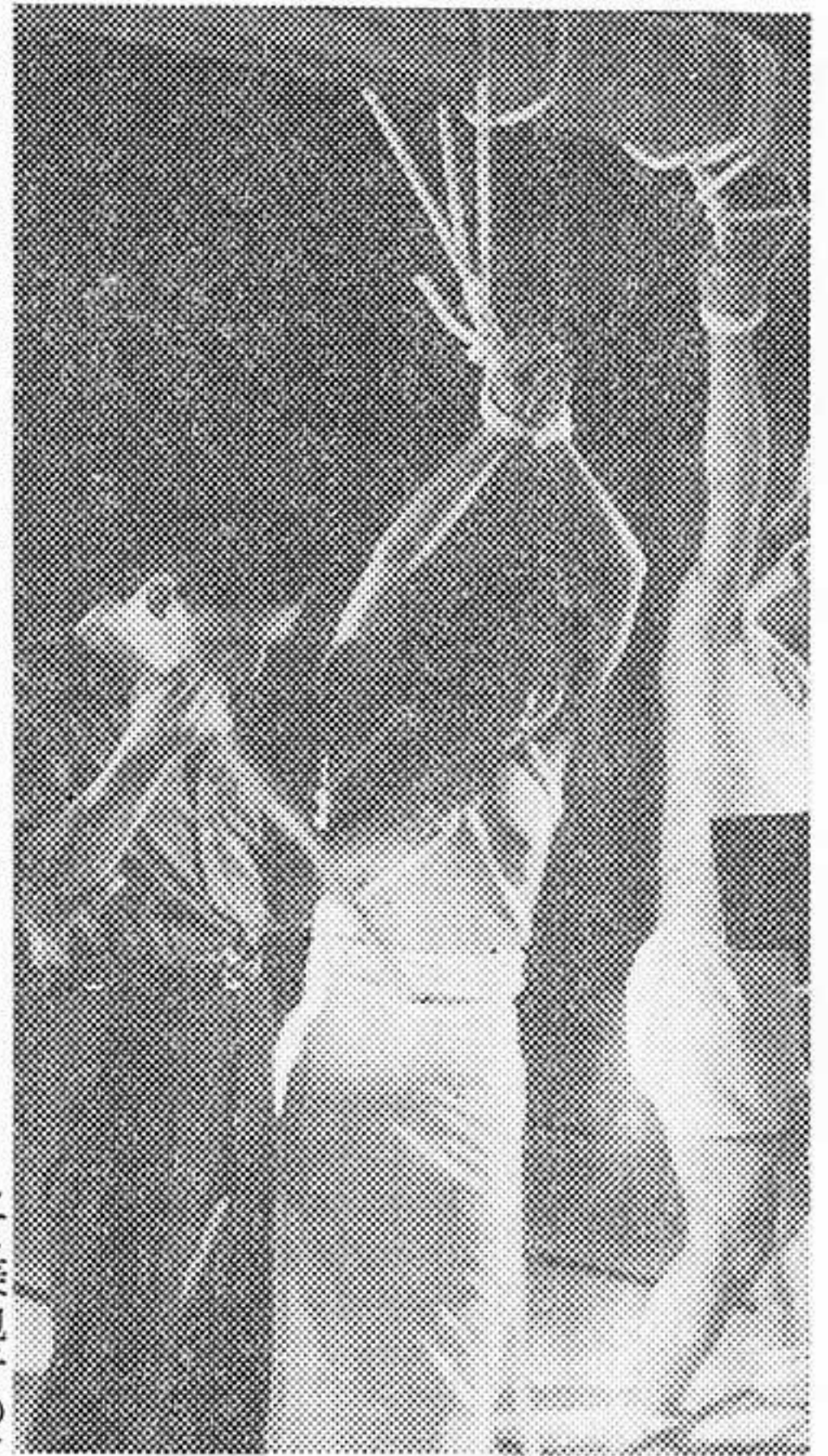
いようがいまいがずっとベタベタくつき放し。見ちゃいられませんよ

全く。

美也子、いらいらと燃えるような眼つきになる。

美也子 耕二が女を作っている。許せない、絶対に許せないわ。





興奮し始めた美也子を見て中山と岡田、顔を見合わす。

岡田 それじゃ、兄貴。いや、番頭さん。俺はこれで――。

中山 色々と御苦労だったな。これは少ないが――。

中山、懐からいくらかの金を出して岡田に渡す。

岡田 すまねえな。また何か俺で出来る事があつたら何時でもいつてくれ。

岡田、立上る。

美也子 お待ちなさい。

岡田 へえ？

美也子 主人の事をくわしく調べてくれたお

礼を私からもするわ。

岡田 へえ。

して美也子の三人。

美也子 この女はね。大胆にもこの旅館へ泥棒に入つた女なのよ。

岡田 ほう。なかなかハクイ面してるし、

体もいいじゃありませんか。

美也子 気に入つたのなら貴方に提供するわ

岡田 ええ？

美也子 あなた達、やくざの世界では、女を

売ったり買ったりする組織があるそうじゃないの。いい値で売って儲ければいいといってるのよ。

岡田 (笑つて) こりゃ恐れ入りました。

岡田、和子の傍へしゃがみ、和子の顎に手をかける。

岡田 たしかに上玉だ。こりゃ一儲け出来るかも知れねえな。

美也子 中山、倉庫へ案内してあげなさい。

## 26 地下倉庫

鉄柱の根本に猿轡をはめられ、

あぐら縛りにされて和子。

扉の開く音に緊張する。

入つて来たのは中山、岡田、そ

美也子、中山に何かささやく。中山、うなずいて岡田の肩をたたく。岡田の耳に口を寄せて、

中山 そうと話が決まったら、この場でこの女をまずものにしな。奥さんが見物したいとおっしゃってるんだ。

岡田 ええ？ 冗談じゃねえよ。人の見ている前でそんな事出来るかい。

中山 (低いが鋭い口調で) 奥さんは、そういう趣味があるんだよ。俺の顔を立ててこの場で女を抱いて欲しいんだ。

岡田 だってよ、兄貴。

中山 うるせえ。俺のいう事が聞けねえつてのか。

岡田 わ、わかったよ。

柱に縛られている和子、恐怖に眼をつり上げる。

岡田、和子の猿轡を外す。

岡田 悪く思うなよ。

柱から和子の縄尻だけを解き、抱きしめようとする。

和子、緊縛された裸身をのたうたせ、床の上を転がって逃げようとする。

それを追いつめる岡田。

見物する美也子と中山、洪笑する。

和子 鬼っ、けだものっ。

岡田 うるせえ。泥棒。





和子の足に岡田の足がからみつく。  
ギラギラする眼で凝視する美也子。

27 海岸線を疾走する岡田の車

28 同・車の中

運転する岡田の隣でぐったりとシートに背を当てている和子、空虚な瞳をしばたかせている。

和子 (無気力に) ね、私を何処へ連れて行く気なの。

岡田 お前は今日から俺の女さ。東京へ行ってから、みっちり稼いでもらうからな。

和子 コールガールにでもするつもりなの岡田 ま、そんな所だな。

29 松並木の近く

岡田の車、止まる。

岡田 一寸、待ってな。

岡田、車から出て来ると松の木に近づき小便を始める。

それを見た和子  
車の鍵を引き抜きドアを開け逃げ出す。  
松の木のかげで小用する岡田、あわてて激しく体を揺すりながら、

岡田 おい、こら、待て、逃げるな。

一目散に逃げて行く和子。  
ようやく追い始めた岡田、ふと気づいて車に飛び乗る。しかし、車の鍵がない。

岡田 (半ベソをかいて) くそっ。

30 大杉旅館・美也子の居間(翌日)

美也子、端然と坐って手紙を読んでいる。  
美也子、憤怒に唇を噛みしめる。

耕二の声で 色々考えた末、やっぱり俺は君

と別れて暮す事に決心した。その方がお互いのためになると思うんだ。

俺は今流行の人間蒸発したと思ってほしい。行方を探すような事はしないでくれ。気持が落着けば弁護士に離婚手続などの相談をしようと思っている。

美也子、青ざめた表情で神経質に手紙を破る。

美也子 そのような勝手な事、誰が許すものか。

か。

美也子、キッと唇を噛んで、壁の上を見つめる。そこには般若の面。

(鼓の音一つ、効果音に)

31 新宿界隈の路地裏

和子、大きな紙包を持って入って来る。

32 三郎の部屋

薄汚れた四畳半。

三郎、机に向かって一心に小説を書いている。

破れ襖が開いて和子、陽気に入ってくる。

和子 御機嫌いかが、三郎ちゃん。

三郎、ちらと和子の顔を見て、素知らぬ顔をして再び原稿を書き始める。

和子、ぴたりと三郎の横に坐りこみ、

和子 何だか御気嫌悪そうね。

和子、紙包みの中から果物やカンヅメを出し畳に並べる。

和子 パチンコで稼いで来たのよ。そら、見て。

三郎 (ペンを動かしながら) 一体、今まで何処へ行ってたんだ。

和子 田舎のおばさんの所へ遊びに行ったのよ。たった一人の身内だもん。たまには逢いたくなるわ。

三郎 (大声で) 嘘をつけっ。

和子 (びっくりする)

三郎 また何か悪い事して来たんだろう。



ちゃんと顔に書いてある。隠しても僕にやすぐわかるんだ。

和子 (そわそわする)

三郎 こんなカンヅメ類だって大方、どこかで万引きしてきたものなんだ。君はまだその癖が直らないのかい。何だ、こんなもの。

三郎、カンヅメをつかんで部屋の隅へ投げつける。

和子 あんまりだわ、三郎ちゃん。

和子、泣き出す。

和子 私、あんたのためにまとまったお金を作ったあげたかったのよ。病院に入らなきゃ駄目だと先生がいったじゃない。

三郎 血を吐いたって何も驚く事ないさ。

人間一度は必ず死ぬんだ。僕は絶対病院なんかに入らないよ。

和子 三郎ちゃん。駄目よ、そんな自棄になっちゃ。

三郎 僕をダシにして泥棒渡世はやめてほしいな。それより、もう二度とこへ来ないでくれ。手くせの悪い女に出入りしてもらいたくないんだよ。

和子 わ、わかったわ。

和子、泣きながら立上る。

ドアを開けて表へ出ようとする。

それを見ていた三郎、衝動的に立上り、う

しろから和子の肩を抱きしめる。

三郎 和ちゃん。

和子 三郎ちゃん(三郎に取りすがって号泣する)

三郎 いい過ぎたよ、ごめんね。

和子 もう二度と悪い事はしないわ。許して、三郎ちゃん。

三郎 どうしたんだよ、このアザ。

三郎、和子の肩にある縄のあとを指でこする。

和子 何でもないのよ。一寸、すりむいただけ。

33 酒場・黒猫の店内

春子 どうも有難うございました。

春子、客を送って戻って来るとバーテンの

木村と一緒に店の後片づけを始める。

春子 ね、木村

さん。

木村 はい。

春子 貴方、大

杉耕二さ

んをどう

思う。

木村 とてもい

い人だと

思います

よ。

春子 私ね大杉

さんと一緒になるかも知れないわ。

木村 (微笑して) やっぱりそうですか。

僕は犬賛成ですね。あの人はマダムをきつと幸せにしてくれますよ。

春子 貴方にそういわれて、私も安心したわ。だけど、これからが私達大変なのよ。色々と貴方も力になってね。

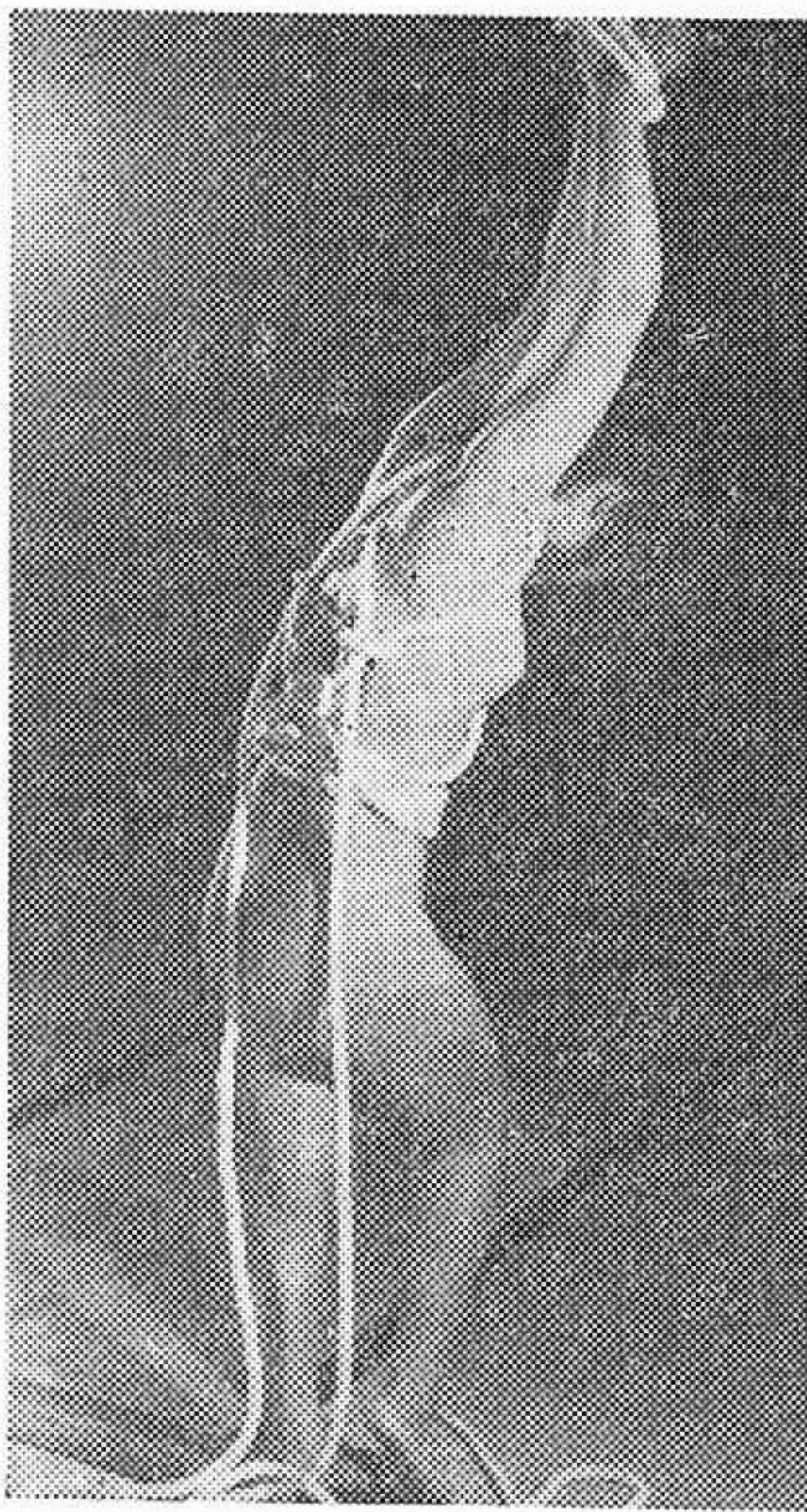
木村 ええ、僕で出来る事なら何でもおっしゃって下さい。

酒場の扉が開いて、和子が入って来る。

木村 いらっしゃいませ。

和子 あの、私、お客じゃないんです。表の求人広告を見て入ったのですけどよかったらここで使って下さいませんか。

春子、ふと木村と顔を見合わせ和子に微笑





を見せる。

春子 貴女のような美人が勤めて下されば大助かりだわ。失礼ですけど、おいくつ。

和子 十九です。

木村 水商売の経験は。

和子 そんなものではありません。でも、これからは真面目に一生懸命、働こうと思ってるのです。

木村 というと今まで真面目じゃなかったってわけ。

三人、声を揃えて笑い出す。

### 34 春子のアパート

夜具の中へ入っている耕二。

ドアが開いて、いい気持ちに酔った春子が入って来る。

春子 只今。

耕二 おかえり。早かったね。

春子 貴方が待ってると思うと気が気じゃないもの。木村さんに任せて早く帰って来たわ。

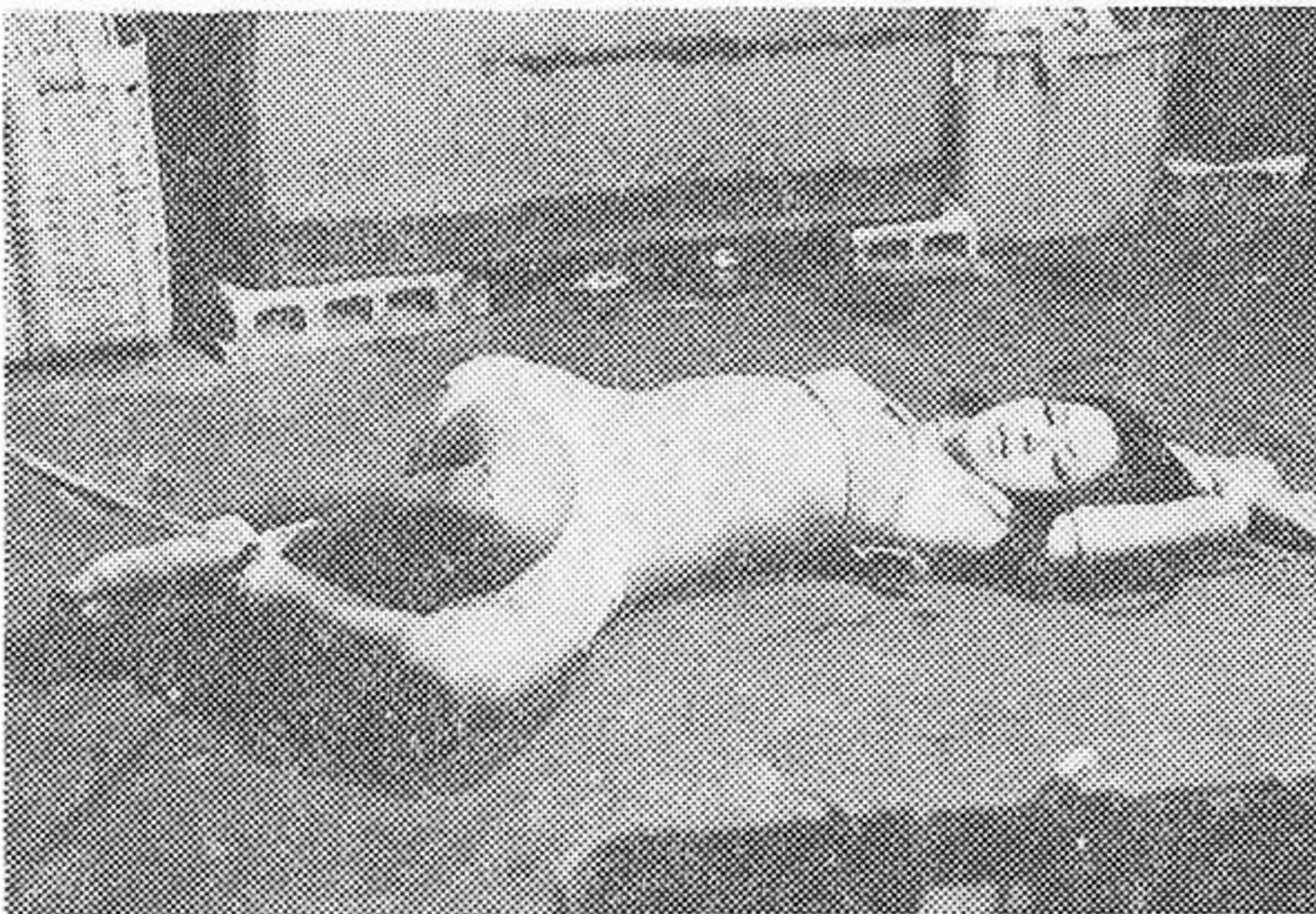
耕二 (上体を起こそうとする)

春子 嫌、そのまま待っていて。

春子、帯を解き、着物を脱ぐ。

長襦袢の伊達巻ももどかしげに解き、全裸になると、覆いかぶさるように耕二の上へ――。

濃厚な愛欲図――。



春子 お願い。もう何処へも行っちゃ嫌。

耕二 ああ、もう何処へも行かないよ。東京で仕事も見つけたし、今日からここへ置いてもらうさ。

春子 嬉しいわ。私、もう絶対、貴方を離さない。

耕二にしがみつく春子。

### 35 大杉旅館・浴場

美也子、温泉に浸っている。思いつめた表情で、じっと一点を見つめている。

湯から上った美也子、流し場に坐る。

浴場のガラス戸が開いて、さらしを巻いた中山が入って来る。

美也子は平然とした表情。

中山 お背中を流します。

美也子、中山に背を流させている。

中山 旅館の方が何時までもこう休業状態では困ります。何か対策を講じたい

と思いますが。

美也子 このままでかまいません。

美也子、冷ややかにそういったまま、うつ

とりと眼を閉じる。

中山の手が美也子の乳房のあたりに触れて

いるのだ。

次第に中山の手は移向して美也子のむち

りした太腿のあたりを撫でさする。

美也子、かすかに上気し始める。が、すぐ

官能の高まりを打ち払うよう、さっと立上

る。

中山、ふと狼狽する。

美也子 (別の方向に眼を向けたまま) 今夜

寝室においでなさい。

中山 は、はい。

美也子、能面のような表情に戻って浴室を

出て行く。



36 (効果音、鼓の音一つ)  
同・美也子の寝室

(夜) 夜具の中で、じっと天井を見上げて  
いる美也子。

壁にかかった般若の面。  
廊下に人影。静かに障子が開いて中山が入  
って来る。

中山、美也子の夜具の傍へ坐る。美也子を  
畏敬して中山の動作は慎重である。

中山 奥様。

美也子 中山。私に官能の高まりを覚えさす  
にはどうすればいいか、わかつてる  
わね。

中山 わかつております。

美也子、さっと上体を起こす。

37 同・廊下A

義雄が歩いていく。

男のうめき声。

義雄、ギョッとして足を止める。

声のする方に歩き出す。

38 同・廊下B

義雄、美也子の寝室をそっとのぞく。

39 義雄がのぞいた美也子の寝室

襟元を乱した長襦袢姿の美也子が阿修羅の  
ような形相になって弓の折れで中山をぶっ  
ている。

中山、パンツ一枚で七転八倒、齒を喰いし  
ばって苦痛をこらえている。

美也子 中山。いいですね、耕二を誘惑した  
春子という憎い女を捕えるのです。

必ず、必ず捕えるのです。

中山 わ、わかりました。

美也子、中山の鼻先に足首を近づける。

美也子 どうしたの。さ、早く。

中山、美也子の足首を両手で押さえて犬の  
ようになめ始める。

美也子、妖気めいた微笑。次に中山の顔を  
足で蹴る。

あっと転倒する中山の顔を足で踏みつける  
美也子。

中山、苦痛に顔を歪める。

美也子、再び、弓の折れで中山を打ちまく  
る。

美也子の顔は倒錯した快感で陶然となつて  
いる。弓の折れを投げ出した美也子、その  
まま夜具の上へ倒れる。上気して汗ばみ、  
口を半開きになっている。

中山、激痛に顔をしかめながら上体を起こ  
し、美也子の体にまといつく。長襦袢を剥  
ぐ。

美也子、吸い寄せられるように中山に抱き  
しめられる。

濃厚で変質的な愛欲図が展開する。

40 同・廊下・B

障子の間から眺めている義雄、その異様で  
すさまじい光景にぐくりと唾を呑みこむ。

41 青い空に白い雲

42 公園のベンチ(東京)

中山、煙草を吸いながら、ぼんやり池の面  
を見つめている。

その隣で、むしゃむしゃパンを噛り、牛乳  
を飲んでいるのは岡田である。

岡田 わかったよ、兄貴。黒猫のマダムを  
誘拐すりゃいいんだろ。

中山 (懐から札束を出して岡田に渡す)  
手間賃だ。今夜、俺と一緒に仕事し  
てほしい。

岡田 ほう。こりゃ凄えや(と札束を数え  
てポケットにしまう)だがよ、兄貴

兄貴はもう大杉旅館の奥さんとは出  
来ているんだらう。

中山 (黙って煙草を吸っている)

岡田 それに若旦那は女が出来て家出しち  
まってるんだ。結構な話じゃないか  
あそこの夫婦が離婚して事になりや、  
兄貴は大杉旅館の旦那におさまる事  
が出来るかも知れねえのだけ。

中山 だから何だってんだ。

岡田 家出した若旦那の事を下手につつか  
ねえ方がいいと思うな。うっちゃら  
かしておいた方が得だぜ。

中山 俺はな、岡田。自分の損得なんて事  
は何も考えちゃいねえんだよ。あの  
奥さんのために、一生懸命に尽す、





それが今の俺の生甲斐みたいなものになってるんだ。

岡田 よっぽど、あの奥さんに惚れてるんだな。

中山 そうさ。惚れ抜いてるよ。あの奥さんにゃ、人間ばなれした美しさってものがある。俺は、そいつにとり憑かれちまったんだ。馬鹿だろうと気狂いだろうと、そんな事は問題じゃない。

岡田 かわってるよ、兄貴は。つまり、こういう事になるんじゃないか。あの

奥さんがサジストとなりや、兄貴はマゾヒスト。だからこそ、ぴったリうまく――。

岡田、中山のけわしい顔を見て、黙ってしまふ。

中山 手前、柄に似ず、随分と学問があるじゃないか。だが、そんな事は、どうだっていい。この仕事をやるのかやらねえのか、はっきりしろ。

岡田 やるよ、やりますよ、兄貴（あわててパンを口へねじこむ）

43 酒場・黒猫の店内

繁盛している。

ホステスになった和子、忙しげにボックスの客へ注文のビールを運んでいる。

酒場のドアが開いて黒眼鏡をかけた中山と岡田が入って来る。

ふと、それに気づいた和子びっくりして洗面所の方へ体を隠す。

中山と岡田、スタンドに坐る。

和子、仲間のホステスにビールの盆を渡し、

和子 私、一寸、用事が出来たの。今夜は早引

きするわ。

和子、裏口の方から逃げるように外へ出て行く。

44 三郎のアパート

三郎、原稿を書いている。

三郎、急に咳きこむ。

和子 只今。

帰って来た和子、激しく咳きこんでいる三郎を見て驚く。

和子 三郎ちゃん。大丈夫、ね、三郎ちゃん。

和子、おろおろして三郎の背をさする。

三郎、喀血する。

和子 あっ、三郎ちゃん。

三郎 大丈夫さ。もう治まったよ。

和子 駄目よ、やっぱり病院に入らなきゃ

三郎 この小説仕上げるまでどこにも行きたくないんだ。

和子 何いってんのよ。病院代は私、何とかするわ。ね、三郎ちゃん。私に任せておいて。

和子、立ち上る。

三郎 どこへ行くんだよ。

和子 お店のママに相談して、お金を借りようと思うの。

三郎 何いってるんだ。勤めたばかりで。

和子 借金を申込むのは別に悪い事じゃないわ。



和子、出て行く。

三 郎 待、待てよ。和ちゃん。

45 酒場・黒猫の店内・閉店近く

ボックスに坐ってビールを飲んでいる中山と岡田。すでに他の客もホステスも引揚げスタンドで春子と木村が伝票の整理などしている。ボックスの方を見て、不快そうな表情で顔を見合わせる春子と木村。春子、ボックスの方へ近づく。

春 子 あの恐れ入りますが、もう閉店なんです。

中山 あんたがこのマダムなんだね。

春 子 はい、そうですが。

中山 大杉旅館の若旦那は元気かい。

春 子 (硬化した表情) あなたは？

中山 俺は大杉旅館の番頭さ。

春 子 (ハッとすると)

岡 田 (立上って) 大杉旅館の奥さんが、

ぜひあんたに逢いたいってんだよ。

すまねえが、俺達と一緒に来てくれ

ねえか。

春 子 (慄えて) あの、別に今夜でなくて

も。

岡 田 どうしても今夜中に向こうの奥様は

逢いたいとおっしゃってるんだ。

春 子 でも、それは困ります。私の方

も都合がありますし。

岡 田 何だと。

スタンドから様子を見ていた木村。飛び出してくる。

木 村 一体、何です。あんた達。

酒場の裏口から和子、そっと、首をのぞかす。

内部の様子を見て驚く。

岡 田 (木村を睨んで) 手前が出る幕じゃ

ねえ。ひっこんでろ。

木 村 マダム、行きましょう。

岡 田 おい、待てよ。

木村、つかみかかる岡田を突き離す。

中山、ゆっくりと立上る。

木村と春子、殺気を感じて後退する。

中山の体が飛鳥のようにねた途端、木村

脇腹を押さえて転倒する。

春 子 あっ、木村さん。

春子、木村を助け起こそうとする。

木村、顔を歪めて苦悶している。

岡 田 (中山に) さすがに兄貴、空手の腕

だけは衰えねえな。

中山 それより早く、この二人を連れて行

こう。

中山、木村を引きずり起こし、木村の手を

肩にかけさせる。

岡 田 さ、マダム、行くんだ。

46 酒場・黒猫の前

車が止まっている。

その中へ押しこめられる春子と木村。

電柱のうしろに隠れて様子をうかがっている和子。

岡田の運転で車は走り出す。

47 車の中

中山 他には誰にも見られなかったようだな。

岡 田 ああ。

中山 そいつは好都合だ。

後のシートでは、硬化した表情の春子が苦しげにうめく木村を介抱している。

48 大杉旅館・地下倉庫

扉が開き、美也子が中山と岡田に案内されて入ってくる。

倉庫の隅には、雁字搦目に縛られた春子と木村が体を寄せ合うようにしている。

傍に義雄が坐り、二人を見張っている。

中山 あれが酒場のマダム春子です。隣にいるのはバーテンの木村、仕事の邪魔をするので一緒に引き立てて来

ました。

美也子 御苦労でした。

美也子、冷酷で残忍なものを眼の底に浮かべて春子を凝視する。

(効果音・鼓の音一つ)

春子、美也子に射すくめられ、顔をそむける。

美也子 私から耕二を奪った憎い女。このまま殺すだけでは飽き足りないわ。



中山は平然としているが、岡田は驚く。

岡田 殺す？ ほんとに殺しちゃうのかい兄貴。

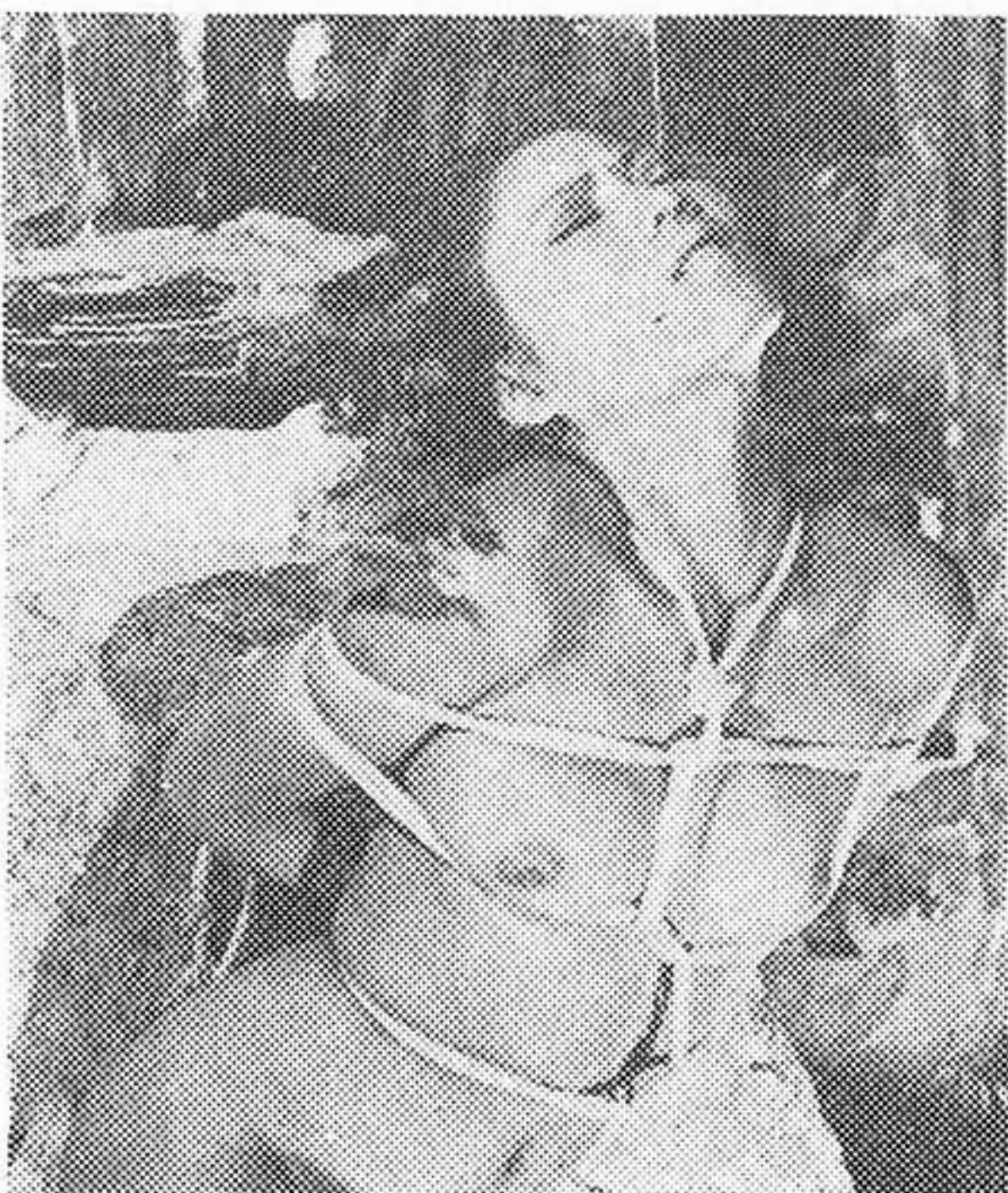
中山 奥さん（美也子の耳に小さくささやく）

美也子 （微笑して）成程、酒場のマダムとバーテンの心中、世間には、よくある事だわ。

春子と木村、慄然とする。

美也子 その前に、煮湯を飲まされた礼を充分、返してあげる。義雄、始めなさい。

義雄、天井の梁にロープをかける。



中山、岡田に眼くばせして、春子の体に手をかけ、美也子の前へ突き出す。

美也子の足許に転倒する春子。

美也子、憎々しげに春子の頭髪をつかんで首を上げさせる。

木村、カッとなり、緊縛された体を起こそうとするが、激痛に顔をしかめて再び腰を落とす。

美也子 うんと吠面をかかせてやる。さ、丸裸におなり。

中山と岡田、春子の体にまといつき、縄を解くと着物を、帯を解き始める。

狂気したように暴れる春子。だが、遂に湯文字一枚残すだけの裸体に剥がされてしまう。

木村、渾身の力で立上り、中山に体当りを喰わせるが、美也子は手にした弓の折れで、木村の額を一撃する。

木村、悲鳴をあげる。額から血が尾をひいて流れる。

春子 木、木村さん！

春子の手は前で縛られ、天井から吊り下がるロープにつながれる。

義雄、力一杯、ロープをひく。

春子、悲鳴を上げながら吊り上っていく。

さも楽しそうに宙吊りになった春子を見上げていた美也子、春子の湯文字の裾に手をかけ、さっと引く。

床に落下する湯文字。春子の号泣。美也子の洪笑。

#### 49 三郎のアパート

和子、机の前に坐り、しきりに手紙を書いている。三郎は夜具の中で寝ている。

和子、書き上げた一通の封書の横に便箋を並べる。便箋には、こう書かれてある。

『三日間、私が戻って来なかったら、この手紙を警察へとどけて下さい』

和子、ふと夜具の中の三郎を見る。スヤスヤ眠っている。

和子、立上り、服を脱ぎ、スリッパ一枚になると三郎の横へ体を入れる。三郎を抱きしめる。三郎、ふと気づいて、

三郎 いけない和ちゃん。僕はこんな体だもし、君に！

和子 いいのよ、いいのよ、三郎ちゃん。

今夜だけはお願い、私をしっかりと抱いて。

三郎、和子に煽られ、力一杯、和子を抱擁する。

#### 50 大杉旅館・美也子の居間（朝）

美也子、喜々とした表情で、鼓を打っている。

部屋の中央には、夜具が敷かれ、二つの枕



が置かれている。

障子の向こうから中山の声。

中山 奥様。

美也子 (鼓を打つのを止める)

中山 二人を連れて参りましたが。

美也子 そう(微笑する)

障子が開いて、中山と岡田が、後手に縛り上げた春子と木村を、らんぼうに引き立てて来る。

春子も木村も腰に手拭一本巻きつかせただけのみじめな姿。

部屋の中央に敷かれてある夜具を見て慄然とする。

中山と岡田に背を押されて夜具の上へ倒れる春子と木村。

美也子 今生のお別れにうんと楽しい思いをさせてあげるわ。ここで夫婦の契りを結ばせてあげる。

春子と木村。ひきつった表情。

岡田 成程。こいつは面白いや。

中山 さ、始めてもらおうか。お前達を心中した事に見せかけなきやならないでな。

木村 くそ。誰がそんな。

春子 お願ひ、一思いに殺して頂戴。

美也子 あら、そうかい、云う事が聞けないっていうの。

美也子、硬化した表情になって立上ると弓

の折れを振り上げる。

木村 鬼だ。貴様は鬼だっ。

壁にかかった般若の面。

(効果音、鼓の音)

美也子、悪鬼の形相となって弓の折れで二人を打ちまくる。

木村、春子の体をかばうようにし、美也子のムチを全身で受ける。

障子が開いて、義雄がおろおろした表情で入って来る。

中山に耳打ちする。

中山、顔色を変える。中山、岡田の肩を突く。

中山 お前から逃げ出した女が、ここへ逆襲に来たぜ。

岡田 ええ？

51 同・別の部屋

和子が美也子、中山、岡田の三人と対峙している。

和子 (ズベ公めいて開き直り) 黙って

ちゃわからないじゃないかよ。黒猫のマダムを誘拐した事は、見なかった事にしてやると云ってるんだよ。

五十万ぐらいなら、安い口止め料じゃないか。

岡田 大した女だぜ。この前は泥棒に入り今度はゆすりにやって来たってんだからな。

和子 云々とくけど、今日私が帰らなかつ

たら、あんた達の悪事をかいた手紙が警察の手に渡るんだよ。信用の出来る人に、ちゃんと手紙を渡してあるのさ。

中山と岡田、顔を見合わす。

和子 五十万、出すのか出さないのか、はっきりおしよ。

美也子、立上ると床の間の手文庫の中から札束を取出す。

中山、たしなめるように、

中山 奥さん。

美也子、冷やかな表情で机の上に札束を置く。

美也子 五十万あるわ。

和子 (ごくりと唾を呑みこむ)

美也子 どうしたの。持っていけばいいじゃない。

和子 (血走った眼で美也子を見る) 助か

ったわ。私には、胸の病気で、どうしても入院させなきやならない人がいるのよ。

和子、素早く五十万円をつかんでハンドバッグに入れる。

和子 恩に着るわ。絶対、この事は人にしやべらない。

和子、あわてて立上る。

美也子、冷酷な表情で、じっと和子を凝視



している。

和子、逃げるように廊下へ出て行く。

岡田 くそ。なめた真似しやがって。

中山 奥さん。あの女をこのまま捨てておくと、まずいんじゃないかと思うのですが。

美也子 あの女が誰に手紙を渡したか、まずそれを白状させてから、始末して下さい。

岡田と中山、顔を見合わせて立上る。

## 52 竹藪近くの細道

和子、急ぎ足で歩いている。

和子、ハッとして立止まる。

前方に猟銃を持った義雄が立塞がっているのだ。

和子、来た道の方へ逃げようとする、うしろには中山と岡田。

和子、竹藪の中へ逃げこむ。男三人、和子を追う。

和子、振り返ったとたん竹の根につまずいて転倒する。

和子につかみかかる男三人。

岡田 くそっ、よく俺達をコケにしようがったな。

中山、和子のハンドバッグから五十万円を取って懐へしまう。

口惜しげな和子の顔。

中山 船へ乗せるんだ。

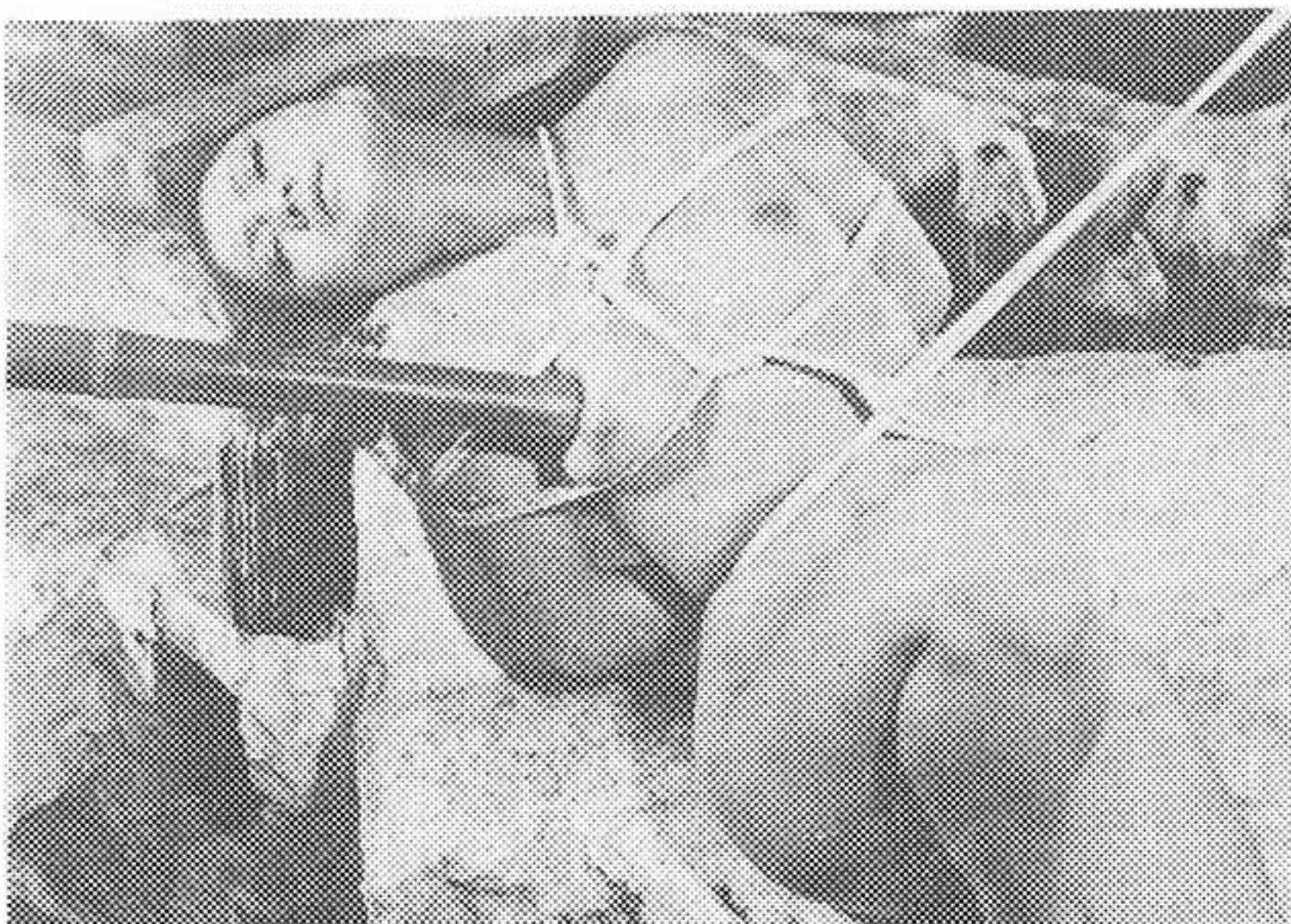
## 53 海上

ポンポン蒸気船が走っている。

## 54 船の中

船の艙に全裸で緊縛された和子、立膝になって小さくすくんでいる。

ニヤニヤしながら見つめている岡田、中山義雄。中山、義雄に眼くばせる。



義雄、ロープを持ってゆっくりと和子に近づく。

中山 このどいつに、その手紙を渡したんだよ。

義雄、和子の首にロープを巻きつけ、岡田と一緒に、和子の肩に手をかけ引き起こす。

岡田 おめえだって、塩っからい水を呑むのは嫌だろ。さ、誰に手紙を渡したんだ。云いな。

和子 知らないよ。

岡田 くそ。強情な阿女だ。

中山 仕方がない、突き落とせ。

岡田と義雄、もがく和子を海の中へ突き落とす。

岡田、和子の首に巻いたロープをたぐると和子、走る船のあとにつき、浮かんだり沈んだりしながら引きずられてくる。

和子の顔、苦痛に歪む。

岡田 (大声で) どうだ。云う気になったら引き上げてやるぜ。

和子、船に引きずられて、苦悶の極。

和子 (祈るように) 三郎ちゃん、三郎ちゃん。

海の中へ再び姿を沈める和子。

岡田 (舌打ちして) こいつ、全く強情な女だぜ。



義雄、ふと奇妙な顔になり、手のロープが何時の間にか解けている。

岡田 ロープが切れたぜ、兄貴。

岡田と中山、不安な表情になって海を眺める。

舵を操作して和子を探し廻る。

中山 仕方がない。引揚げよう。

蒸気船、エンジンの音を立てて陸の方へ引揚げて行く。

ぽっかり海面に浮かんだ和子の死体。

## 55 警察署の前

三郎が、入るか入るまいか、ためらっている。

手に握っている和子の封書を、じっと見つめる。

焦躁した三郎の表情。

三郎、やがて決心した様に警察署に入っていく。

## 56 酒場・黒猫・その店内

昼間のガランとした店内。

ホステス何人かが不安げにスタンドの方を見つめている。

耕二が二人の刑事と話している。

刑事A それでは、マダムとバーテンの姿が消えたのは、三日前だというのですね。

耕二 はあ。

刑事B

(刑事Aに向かって) それだけの事なら別に事件にならんのではないですか。

刑事A

うんー(耕二に) 失礼だが、こういう事は考えられませんか。つまりマダムとバーテンとは前から出来合っていた。

刑事B

単なる駆け落ち事件だよ、これは。

耕二

そ、そんな。

ホステスA 冗談じゃないわよ。うちのマダムは、そんなふしだらなお人じゃないわよ。

ホステスB いくら刑事でも、うちのバーテンにケチをつけるような事、云わないでよ。

刑事二人、酸っぱい顔。

スタンドの電話が鳴る。刑事B受話器をとる。

刑事B

もしもし、ああ俺だ。ええっ、うんよし、わかった。

刑事B電話を切ると、すぐ刑事Aに耳打ちする。刑事A鋭い眼つきになる。

刑事A

(耕二に) マダムとバーテンの居所がわかりましたよ。

耕二

そうですか。ど、どこにいるんですか、二人は。

刑事B

伊豆の大杉旅館だ。

耕二 ええっ(顔面から血がひく)

## 57 絶壁から見下ろした海

岩に当たって砕け散る波。

## 58 岩壁

松の木の枝から吊り下げられている春子と木村。二人とも全裸である。

面白そうに見上げている岡田、中山、義雄の三人。

中山

(冷やかに) いよいよ最後の時が来たな。お前達二人は、ここで心中した事になるんだ。(海の方を指さして) 二人で投身自殺する。わかったな。

松の枝より吊られている春子と木村、ひきつった表情。

岡田

(中山に) ところで奥さんの方はどうしたんだよ、兄貴。

中山

この世の思い出にというわけで二人の前で一さし舞いを演じて下さるそうだ。

岡田 舞いを?

## 59 大杉旅館・美也子の部屋

日射しの明るい日本間に美也子、端然と坐っている。

ゆっくりとした所作で茶を飲む。

美也子の前に般若の面と太刀が安置してあ



る。

(効果音・鼓の音)

美也子、ゆっくりとした手付で般若の面を顔につける。

## 60 海岸の砂丘

数人の刑事、それに耕二が走ってくる。

耕二、岩壁の松の方を見て立ちどまり、慄然とする。

耕二 あ、あそこに。

刑事達、耕二の指さす方を見て驚き、かけ出す。

## 61 岸壁

中山 (腕時計を見て) おそいな。奥さんは。

岡田、岸壁を上って来る刑事を見て仰天する。

岡田 兄貴、刑事だっ。

中山 なんだと？

中山と義雄、ハッとする。

突入して来る刑事達。乱闘。

耕二、松の木の根元に結んであるロープを手早く解き、刑事達と一緒に木村を枝から

降ろす。

中山、岡田、義雄、刑事達に逮捕される。

耕二 春子ッ。

春子 耕二さん。

耕二と春子、ひしっと抱き合う。

春子、号泣する。

耕二、ふと顔を上げて、ぞっとした表情をする。はるか向こうの砂丘より、鬼女が静かにこちらへ向かって歩いて来るのだ。

## 62 砂丘

戸隠山の鬼女に扮した美也子が太刀を左手に持ち、静かに歩いて来る。

啞然として見つめていた刑事達、美也子を逮捕すべく近づく。

鬼女、足を止め、しっかりと抱き合う耕二と春子の方を凝視する。

ぞっとして後退する耕二と春子。

耕二 刑事さん。美也子は気が狂ってるんだ。何をするかかわらん、気をつけ

て下さい。

刑事、警戒態勢をとりながら、じわじわと鬼女に迫っていく。

鬼女、太刀を抜く。

鼓の音。

謡曲「紅葉狩り」が流れる。

謡いに合わせて完全に狂気した美也子は妖怪と化し、太刀を構えながら、耕二と春子に迫って行く。

刑事、四方から飛びかかる。

踊りのような所作で、ぐるぐる太刀を振るう美也子。

激しい鼓の音。

最高潮に達する謡いの合唱。

鬼女、美也子、刑事に追いつめられて岸壁にのぼる。

嫉妬の鬼と化した美也子、遂に逃げ場を失い、さっと身をひるがえし海の中へ投身する。

謡いはここで終曲となる。

美也子の投身した海を虚脱した表情で眺める刑事達。

春子、呆然自失している耕二の胸にとりすがって恐怖に肩を慄わせ、すすり泣く。

——終——

て

九月十日の朝、通学途上に衆人環視の中で起こった「正寿ちゃん誘かい殺人」は全国民の心を寒くさせた。各府県の教育委員会は、全小学校に学童の誘かい防止の指導を指令す

るなど、或は警察当局は誘かい犯罪の防止と捜査方針の再検討をはじめたと伝えられるほどの大きなショックであった。十九才の犯人の取調べが進むにつれ、つき



## 論 評

## 危 惧 に お び え

山 口 広

夕刊、「テレビ時評」に加藤秀俊氏（京大助教授・社会心理学者）が、興味ある評論を書いている。

この評論は、単にテレビだけでなく、本誌にも深い関係があるように思えるので、遠くかすかに鳴りひびく警鐘として、十分に検討する必要があるであろう。

（以下『……』の部分は加藤氏の評論の一部の引用である）

『東京渋谷で起きた、小学校一年生の正寿ちゃん誘拐殺人事件の犯人は、その犯行の動機は、ときかれて、テレビ番組「ザ・ガードマン」を見て思いついた、と答えたそうだ。

テレビ局側では、子どもの誘拐を題材にした事件は「ザ・ガードマン」では扱っていないといっているそうだが、ここ一、二年、「ザ・ガードマン」の主題はかなり凶悪化してきている。あるいは残忍化してきている。そして、それかあらぬか「ザ・ガードマン」は、ドラマ番組として抜群の視聴率を維持しつづけている、という』

本誌「奇ク」を埋めているのは、若い美しい女性を捕え、縛り、責め、羞かしめる読物と、女性にいたがられる男性の記事、そして合意の上で女性を縛り、責めるハントものが

殆ど全部である。

われわれの心の奥底にある異常な（と云うのは現実には実現しえないことを作者と読者が知っている）願望を、活字から空想して、各場面にあらわれる登場人物に自分を置きかえることによって満足させているのである。創作に見られる場面は別としても、SMハントの場合ですら、その願望を持ちながら才能と機会にめぐまれる人は極めて稀である。普通に通にできることなら記事としての価値はないのである。

かりに「奇ク」の小説を創作ではないと信じ、若い美女を捕え羞かしめる事件が起こり犯人が、「奇ク」に動機を得たと述べたらどうなるであろうか。

『十九才の少年は、こうした番組を見た。そしてその内容に素朴に感心し、白昼堂々と正寿ちゃんを誘かいした』

『だから、といって、この少年の犯罪の責任を「ザ・ガードマン」になすりつけよう、というわけではない。少年が、じぶんの犯罪をテレビ番組のせいにするのが、無責任かつ幼稚な考え方であるのとまさしく同じ理由で、第三者がテレビに悪のすべてをシワ寄せするのも、あまりに無責任な論理だ、とわたしは

つぎに判明する事実も、マスコミに大きな話題を提供した。

この犯罪もいわば高度経済成長と社会機構の急激な変化による人間疎外と断絶の極端な断面であると云えよう。

この事件に関して、九月十七日の朝日新聞



思う』

この加藤氏の考え方は妥当である。

だが、創刊以来、世の「有識者」から「悪書」ときめつけられ、毎号の巻頭に「自粛」をうたっている奇クと、大きな資本をバックに、報道の自由と表現の自由という錦の御旗をかかげたテレビ会社とでは、世論の批判もそれぞれの姿勢も、全くかけ離れた基盤の上に立ってみられるであろうことを銘記せねばならない。

もし、奇クの影響で凶悪犯罪が行なわれたとすれば、まず廃刊はまぬがれぬ運命にあるであろう。この可能性はごく少ないながらも否定できないことである。

『しかし、問題はのこる。というのは、この少年にとって、「ザ・ガードマン」の世界はありうべからざる虚構の世界としてでなく、むしろ、実在の世界としてうけとられていたからである。すくなくとも、かれの観念のなかでは、実在と虚構の境界がはっきりしてなかったからである』

じじつ、奇クの小説の中には、SFめいた明らかに空想とわかるものもある。しかし現実感を強めるために、考証をきびしくした小説もある。中には「作られた告白」もあるで

あろう。だから思慮分別の浅い、実行力のある偏執者には実在と虚構の区別がつかない可能性は残る。

『ブラウン管のうえの虚像は、わたしなどのみるところ、ありえないことの連続なのだがそれをありうることであるかのごとくにテレビは仕立てあげる』

テレビの画面はとくにカラーが普及してから、マンガでさえも時として現実であるかのような感じで視聴者を引き込んでしまう。スッチを入れ、チャンネルを選びさえすれば何の努力をしないでもなまなましい画像と、真にせまった音とがわれわれをとらえる。ところが、グラビヤを廃止し、挿画もカットも最少限にとどめている「奇ク」の小説から空想される場面と登場人物は、まず無味乾燥な活字を、一字一字読む努力から生まれ、そしてその場面と人物のイメージすら、読者一人一人によって大きな差がある。特にマスメディアの発達した現在では、自動的に目に見える物が一般化し、大勢を占めてきつつある。(音楽を除けば)ラジオよりもテレビが、読み物よりマンガが、大人の世界ですら占める割合が増している。

『幻想は、その極限において、あらたな実在

となってしまうのだ。この少年は、そうした知覚の歪(ゆが)みの重症患者であったのかもしれない』

幻想を実在と誤認するためには、活字はあまりにもまわりくどい手段であることは、せめても「奇ク」の読者には救いである。思慮の浅い、実行力に富む(若い)人はこのようになまわりくどい方法を無意識に避けてしまうのが一般の傾向である。

『ひとつの事件を、「事実」として認定するためには、わたしたちは、眼前のパイ皮を何枚もはがさなければならぬようなのだ』

と加藤氏は、マスコミの取り上げかたに対して、その作為的な部分を除いて判断すべきことを強調して結んでいる。

この評論のような意見は、前記に想定した「奇ク」に動機を得たと犯人が称する犯罪に對して、果たして出されると想像してよいであろうか。

表現と想像の自由を強調する出版界、言論界ですら、(あえて卑下して云えば)アングラの的な小雑誌が潰れることを、果たして防ごうとするであろうか。

不安が残るのである。

私は約五年前「本誌の存在価値について」



更に書き加えて、「悪書と悪映画」と題して二編の小文を投稿した。

その中で私の主張は、「人間の本能、それは生きること、そして子孫を残すこと、これに尽きる。つまり「食」と「性」である。社会を形成していくためには、（それは生命を守り、子孫の繁栄を約束するためには不可欠のものであるが）個人の欲望を無制限に認めるわけにはいかない。人間は誰でも抑圧された状態におかれ続けてきたし、最近の社会変革でますますそのストレスは増大する一方である。このストレスが心の奥深くかくされ

或はサドに、或はマゾに形を変えてひそんでいる。このサド、マゾを実行できるのは極めて少数の限られた人であり、その人たちもそれに徹してゆけないのが現実で、大部分の人々は、想像する。とくに活字を読んで想像し自分をその想像の中に置いて満足しているのである。だから「奇ク」は、少なくとも大人のストレス解消には、絶対に表面に出ないが一定の役割りを果たしているのである」と云い続けた。五年たった今も、その主張は変わらない。

私に限らず、恐らく多くの「奇ク」読者は

## ☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに對しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

決して、「奇ク」だけを読んでいるのではない。中央公論も、世界も、文芸春秋もそれ以上に読んでいるのである。

だからといってそれは云い訳にしかならぬであろう。「奇ク」の数千か数万の読者のうちに、一人だけ不心得な狂気じみた人間がいて、犯罪に走ってしまったなら……

「ザ・ガードマン」なら存続し、「奇ク」なら潰れるかも知れないのだ。少なくとも砂を噛むような雑誌になってしまうだろう。

極めて小さいと思われるこのような可能性を考えたとき、どうしてそれを防げばよいかと云うことは考えつかない。また大新聞に評論はおろか、投書するだけの勇氣もない。ただ、編集部を匿名で激励するぐらいしかないと思うのだ。

編集部や読者の方達の中でうまい考えがあれば、是非ともそれを公表して頂きたいと願うだけである。

「奇ク」が充実しながら存続し、ひそかなる読者としてストレスを解消したいというのが私の願いである。

(終)





(一)

## — 女 丈 夫 散 華 —

女

本

能

寺

川 上 米 子

「な、なんと……？ お香、そなたは今、何と申したのだ」

つい先刻までは輝くような素肌を惜しみなく誇示していたのだが、枕辺に正座したお香の方は全く別人の如く、あの素晴らしい若鮎のようにピチピチした女体に夜着をまとうて身づくろいし、華奢な指先で乱れ髪を撫でつけていた。

「はい、坊さま。私は明智の間者だと申したのでござりまする」

声は静かだが、目には燃えるような輝きがあった。

「明智、明智とはあの光秀か。その光秀が何で、間者を信長公の許へ……」

「話せば長くなりますが、もうその暇はこ

ざりませぬ。間もなく明智の軍勢がこの本能寺に襲ってまいります」

「な、なんと？ そ、それはまことか。ば、馬鹿な。光秀は、織田の重臣。それも中国征伐に向かったばかり。お香、そなた、まさか戯れごとを……？」

いぶかりながらも、武士のたしなみ、坊丸の右手は枕元の大刀を握み、左手で衣類をとって肩に掛けた。

「お疑いは重々ごもつとも。このような仕儀になりましたこと、申しわけござりませぬ。

ただ、もうすべては手遅れ。今さら、どうする術すべもありませぬ。けれど、ひとつだけ、このお香が、坊さまをお慕い申し上げた心にはうそ偽りはありませぬ。それで、坊さまにだ

天正十年六月二日の朝まだき。夏の夜は短い。京の空は白々と明けかかっていた。

始めて愛する女を抱いた満足感と、狂おしいばかりの一刻のあとの虚脱感との境を夢心地でさまよっていた森坊丸は、ふと耳元でうわ言のようにつぶやいていた女の口から、容易ならぬ言葉を聞いて、はじかれたように身体を起こした。



け、ほんとうのことを申し上げたかったのでござりまする」

死を覚悟しているのか、あまりにも冷静なお香の態度に、一旦惑乱した坊丸の頭も、もとに戻って、思わず坐り直すと、両の手でお香の柔らかな手をとって、じっと真向から、その目を見つめた。

「うむ、仔細ありげな。聞こう。そなたの言いたいこと、全部——」

「うれしうござりまする。実は妾は、丹波八上城の城主で、お仕置になりました波多野三兄弟の一人、秀勝の娘、まことの名は美香と申しまする」

「む……波多野殿の娘、そうであつたか」

「明智殿との和睦の際、人質にとられて、明智の陣にまいていたのでござりまする」

「それは気の毒な……」

「ところが結果は信長様の裏切り。父や叔父達は無惨な最期を遂げました。もとより、われわれ人質も皆殺しにされましたが、何故か妾一人、斎藤内蔵之介様に助け出されたのでござりまする」

「斎藤内蔵之介……。なるほどのう、彼のやりそうなことじゃ」

「内蔵之介様は妾を阿能の局様の侍女として

上らせ、信長様の言動の逐一を報告させたのでござりまする」

「……」

「浅はかな女心。妾は信長様の冷酷な仕打ちをお怨み申しておりましたし、内蔵之介様は命の恩人。妾のやっておりますことは、一途に父の仇討ちとわが心に言い聞かせてまいりましたが、この程、頻々と信長様の宿泊の予定、警固の人数など聞いてまいります。そして昨夜は、信長様が本能寺以外から他出されたり、警固の人数が増すような異変があれば、すぐ知らせよと連絡方法を伝えてまいりました故……」

「明智勢が今朝、おし寄せてまいると申すのだな」

「は、はい。あまりのことに妾の心も千々に乱れましたが、父のことを想えば、信長様をお逃しすることは出来ませぬ。それにもまして、つるののは坊様に対する恋心……。いずれにせよ、亡き命とあれば、せめて今夜一夜でもと、このような……お笑い下さいませ。想いの叶いましたる今、もはや妾は心残りはございませぬ。坊様の手で、如何ようにも御成敗を」

「お香——」

坊丸の手に力がこもって、もう一度、引き寄せると、しっかりと女体を抱きしめた。

「分かった。そなたに罪はない。わしが、そなたの立場にあったとて、そうするほかはなかったであろう。わしに何でいい、そなたを成敗出来ようぞ。しかし、そなたの仇討ちは、これで終わった。これよりあとは、わしの言う通りにしてくれ。ほんとうに、そなたがわしを愛し、わしの妻になってくれるなら……よいか」

「やさしいお言葉。も、もうしわけありません」

よよと泣き伏し、ふるえている、あえかなお香の身体を、さらにかき抱きながら、  
「出来ることなら、そなたを伴ってここを逃げ出したいが、わしも武士、それは出来ぬ。わしは戦う。信長公と、そなたのために。そなたは、わしから離れるな。敵わずば、ともに……。いや、運よく共に生きられればよいが、もし万一の場合、逃げられれば、そなただけでも落ちてくれ」

「いいえ、妾は坊さまから離れませぬ。信長様と明智、どちらが勝っても生きられぬ身です、坊さまなしでは……。坊さまを生かすために妾も戦います」



「いや、それは……」

争っているとき、表に当たって大音声。

「方々、出会えや、夜討ちでござるぞ。旗印はまさしく桔梗、明智光秀の謀叛ぞ。出会えや、逆賊の来襲なるぞ！」

それは兄、森蘭丸の声であつた。と同時に大地をゆるがす人馬の足音。

「夜討ちだ！」

「お出会いめされ！」

俄かに本能寺内にも、かなえのわくような騒ぎの渦がまき起る。

「ムー、もうまいったか」

はじかれたように立ち上る坊丸。

「坊さま——」

と、すがりつくお香。その目を、じっと見据えて、

「お香。死を早やまるでないぞ」

と一言。さっと、なげしの槍に手をのばすと、寝巻姿のまま、サッと外へ飛び出す。

お香は自分も身仕度すべく、おのれの部屋へ帰りかけたが、出会いがしらに一人の女性にぶつかった。その人は年の頃は二十と五、六。やや嶮のある凄い程の美貌と、スラリと高い背丈に、早や、襷、鉢巻甲斐甲斐しく、黒柄の長刀を掻い込んだ戦姿であつた。

（ああ、お局様——）

しまったと心中に思いつつ、この瀬戸際にも乙女の恥じらいから顔を背向けて、すれ違い、そのまま小走りに走り去ろうとする。

「お香、まちや！」

阿能の局の鋭い一声がその背に浴びせられたが、もとより足を止めるはずもないお香はふり返りもせず、廊下を左へ折れた。

（あの姿……間者を働きながら、その上に坊丸と不義密通——おのれ……）

柳眉を上げて見送る局の顔には、般若の面にも似た憎悪の炎が燃え上っていた。

## （二）

人は繚乱と乱れて鉄火散る。暁の本能寺は今や阿修羅の血斗場と化し、阿鼻叫喚のちまたであつた。その中で、森坊丸は兄蘭丸の身を案じながら、弟力丸と共に槍を掉って戦っていた。

その傍には既に凜々しく身仕度したお香が小太刀捌きも鮮かに、二人、三人と、明智勢を斬り倒す勇姿があつた。

「阿能。あそこで健気に戦っているのは、お香ではないか？」

はるかに離れた本堂の広縁で、欄干に片足

をかけつつ、さしつめ、引きつめ、矢継早に逆賊を射まくっていた信長は、フト射る手を控えて、傍らで矢渡しをしていた阿能の局を顧みた。

「おお、まことに、あのようなところで。しかし上様。あの女は明智奴の間者。彼女こそ今日の逆賊を引き入れた張本人でござりまする」

「なんと？」

あまりに意外な言葉に、信長は一旦、引き絞った弓を放たずに、とりおろして振向いた程であつた。

「憎みてもあまりある裏切者。上様、一矢射ておやりなされませ」

「といって、坊丸と一緒に、明智勢と戦っておるように見えるが……」

「坊丸とは……」

言いかけて阿能の局は、また怒りが、こみ上げてきた。

「お香めは、妾手ずから成敗致しまする。上様。矢が尽きましたる故、お槍を」

と槍を捧げて、おのれも長刀を小脇にスツクと立ち上った。

「力丸、お香。わしから離れるな」

二人の身を案じながら力戦を続ける坊丸。



しかし、多勢に無勢。知らず知らず隔てられて、他を顧みる暇もない。お香も小太刀を取っては非凡な腕前だが、こう大勢に囲まれては、疲れも出るし、傷も負う。何時しか黒髪は乱れ、衣類もはだけて凄艶な姿。それでもここを討死の場と決めている彼女は、不退転の気迫で立ち向かうから、さすがの明智の兵士もタジタジの態。その隙に一息入れて

(坊さまは……?)

と眺めまわす。その時である。鎧武者の間を縫って走り来たった女人。言わずと知れた阿能の局で、お香の真向かいに立ちはだかり「ええ、口惜しや。信長公の大望が挫折したのも汝が仕業。覚えはあろう。裏切者は成敗致す。それへ直りや」

と、斜めに構えて長刀をふりかざす。お香も今は弁解も無用と、わびれた態さまもなく、小太刀をとり直して身構える。

「手向かい致しやるか。無礼者！」

風を切って振り下ろされる鋭い刃先。阿能は舞の上手であるとともに、長刀もよく使った。しかしパツと飛び退って交したお香は、切尖を相手の目につけつつ言う。

「裏切者の成敗とは笑止なことを……。貴女様こそ明智勢にここを襲わせた張本人ではご

ざりませぬか」

「な、なんと……」

思いもよらぬ一言に、胸に五寸釘を打ちこまれた如く応えて愕然と身を引く阿能の局。

それを涼しい目で追いつめながら

「何も知らぬと思し召されてか。貴女様は実は元三好家の家臣で、波多野方に頼まれ、信長公暗殺を企てながら果たさずして捕えられ織田方に処刑された後藤六郎太の妹でありましょう。兄の恨みを霽さんための今日の所業この期に及んで尚、おのれの罪を人に着せようとする外面如菩薩、内面如夜叉。妾の方こそ容赦致しませぬ」

「そ、それを知られては……エッ」

凶星を指されて狼狽の極み。無二、無三に斬り込む阿能の局。右に左に蝶の如く、あでやかに身をかわすお香。

いわば同士打ちなのだが、佳人と美少女の一騎打ちに、織田方も明智方も手を引いて目を外らす者もない。

「エイ」「ヤッ」

凄艶な戦いは続く。腕は互角と見えたが、先刻からの激斗の疲労と負傷に動きが鈍っている、お香の小太刀に対して、新手の阿能の局の長刀の方が有利なはずであった。しかし

正体を見破られた動揺は意外に大きく、しかもここを死場所と定め、この勝負にすべてを賭けた、お香の捨身の気魄に圧せられて、局の長刀捌きは次第に乱れ、後へ後へと退る。得たりとお香は、勇躍、間をつめてゆき、遂に敵の手元に踊り込んで

「エッ」

と掬い上げた烈剣が意外にのびて、交したつもりのお香の局の額、鉢巻の下の辺りを薙いだので

「アッ」

タラタラと流れる血が目に入って、思わず右手で傷口をおさえつつ、よろめいた途端、死骸につまずいて転倒するとともに、長刀まで手放してしまい

「あーっ、待ってー」

見苦しい程、地面を這いまわり、獲物を探し求める。

「いざ、お覚悟！」

この毒婦だけは討たねばと、追いつがって第二刀を浴せるべく、小太刀をかざしたお香であったが、さすがに乙女心が、無手の敵を斬るのを、ためらわせた。

「長刀を、お取りなさい」

刀を構えつつそう言ったが、阿能の局は斗



志を失ったか、長刀はとうとうとせず、わなわな顫えながら、わずかに帯にたばさんだ懐剣に手をやる。

その時である。何という運命の転変か、ビューと虚空をうなつて飛んで来た一本の矢がグサリ

深々と、お香のそびらに突き立ったのだ。

「ア—ッ」

思わぬ痛手に、小太刀を振り上げたまま、棒立ちになって立ちすくむ、お香。それは流れ矢ではなく、阿能と腹を合わせる者が、彼女危うしとみて卑怯な飛道具を使ったに相違なかった。

同時に九死に一生を得た阿能の局は、刎ね起きざま、引き抜いた懐剣を斧下りに、お香の下腹目がけて突き込んだのだ。

「きえーっ」

血を吐くような絶叫。柔らかな下腹をプツリと柄元まで刺し貫かれたお香の無念さ。小太刀を捨てて、両手で局の右手を柄ごと握って押し放そうとしたが、逆に踏みこんだその体力に圧せられて、押し倒され、二度三度と揉み合ったが、力つきて遂に馬乗りになられてしまった。

「どうじゃ、裏切者、思い知ったか」

烈しく息をつきながらも、左手で襟がみを引きつけ、右手の懐剣の刃先をピタリとお香の白い咽喉元につきつけた阿能の局は、勝ち誇って苦痛に喘ぐ美少女の顔を冷ややかに見下ろす。

「ええい、姦婦。ひ、卑怯な——」

乱れた黒髪の間から晴眼を見開いてハッタと睨み返すお香。

臘脂色の着物をまとったその細い下半身が白綸子の阿能の局の尻の下で、左右にうねってしばしは抵抗をしたが

「ウン、うーん」

遂に止めを刺されたか、あの若鮎のようにしなやかな女体が、一旦グ—ッと突張って、えびのように反ったが、やがて四肢が萎えてぐったりとなつてしまった。

「ああ心地よや。見掛けによらず手剛い女。手間をとらせおった」

抵抗されたために突き損じて、左の鎖骨の下の辺りを突き刺した刀を引き抜きつつ、局は、やっと落着きを取り戻して吐息をつく。黒髪をなでつけ、懐紙をとり出して額の血止めをする。

そして、なおこと切れず、おのれの膝の下で断末魔のものがきにうごめく、美少女の最後

の跳きを楽しみつつ、左手をゆっくりと伸ばし、白くなめらかなお香の顎にかけて、なぶるように正面に向かせ

「ホ……、お香。まだ命が惜しいかや。信長様にお見せするそなたの生首。坊丸にも見せてつかわそう」

と嘲ける。もはや観念の目を閉じながらもその声が耳に入ったか、愛らしい唇が、むずむずと動いた。おそらくは

「坊丸様、お先へ」

とでも言ったのであろうか。

刹那、柔らかい美少女の右頸部に、局の懐剣の鋭い刃先がグサツと切り入られ、くびれの深い咽喉の奥へ、さし入れるようにして、グイと右へ引き廻す。さすがに、お香の身体がピクンと顫えたが、局は、のしかかるようにして押さえつけ

「エイッ」

と纖手一閃、切尖鋭く右へ刎ね上げる。哀れ、お香の細首はスパリと斬り落とされ、辺り一面は、から紅。

阿能の局はしばらく首のない、お香のむくろにまたがり、右手に血ぬられた懐剣を提げたまま、左手に細面の観音像のように美しいお香の生首を掲げてじっと見入っていたが



「そうだ。これを信長様にお見せして……」  
 といいさして、そそくさと立ち上った。

## (三)

六月二日の朝が、すっかり明け渡った頃、  
 本能寺の乱斗は終局に近づいていた。数の少ない織田方は次々と討死してゆき、反対に明智勢は刻々と数を増してくる。

(敵を本堂に近づけまい)

そう思うから、坊丸も最初は力丸やお香とともに、山門から本堂の奥庭に通ずる木戸の前に立ちふさがって戦っていたのだが、もうそこは防ぎ切れなくて、戦いは奥庭の方へ移っていた。

「力丸、お香。わしから離れるな」

二人に気を配りながら戦っていたのも束の間で、だんだん顧みる余裕がなくなり、遂には二人とも離ればなれになってしまった。気にはかかりながらも、多勢を向こうに廻して背を狙われてはたまらないので、自然、土塀をうしろにして槍をふるっていたが、入れかわり、立ちかわり、かかってくる敵のために創は負うし、疲労が加わって、もう一步もそこから動けない有様であった。

(もう、いかん。お香のこと……)

不意に昨夜お香の女体を抱いた甘い感触が蘇って来て、その陶酔のうちに倒れ伏してしまおうかと思った時である。

「あ、兄上！」

悲痛な力丸の声に我に返った。

「どうした？」

振り向く彼の足もとに血だるまのようになつて、転がり込んできた弟を、敵に槍を擬しながら抱え上げる。

「む、無念だ。お、お香……、お香殿が討たれた……」

「お香がか……」

「そ、それも、兄者。て、敵に討たれたのではない」

「何と？」

「お、阿能の局、あの女だ。今、お香殿の首を提げて、ほ、本堂の方へ、走っていったのを見た」

「おのれ！」

突然、坊丸は身内に熱いものが、たぎるのを覚えた。

「力丸。よく教えてくれた。お香が討たれたのは何処だ」

「あ、あちらの、松の木の方だ」

それを告げたいばかりに、最後の氣力をふ

りしぼって、敵の中を突き抜けてきたのである。あなたを指さすと、そのまま、ガクリと陥った。

「力丸、力丸。しっかりせい」

懸命にゆすぶったが、もはや、無駄と知ると、

「力丸、よく戦った。兄もすぐ、あとから行くぞ」

と耳に口を寄せ、

「ゆるせ」

と一言。すっと立ち上った。

(その前に、お香の仇を討つ。それに亡骸だけでも、もう一目――)

その思いが、死にかけていた彼に活を与えた。

「そこ退け！」

彼の十文字槍が生き者の如く躍って、前にいた三、四人の明智勢の身体から鮮血を噴き出させた。もう土塀も何も必要はなかった。坊丸は阿修羅と狂い、摩利止天と猛って、むらがる明智勢を、突き倒し、刎ねとばし、真っしぐらに、お香の倒れたとおぼしきところへ駆け寄った。

「おう、お香！」

見覚えのある臘脂色の衣類をまとして、仰



向けに倒れている、女人の死骸の前に、のめるように跪ずく。その若い女体は胴から下だけで、無惨や首がなかった。

「お香——」

彼は昨夜の白い肢体を描きつつ、手をさしのべて、襟元から乳房をまさぐってみた。そこにはわずかながら、ぬくもりが残っていたが、それはもう、昨夜のような躍動をすべくもない一個の物体であった。

佳人薄命、無常迅速。夢まぼろしの如き人生の真意を、颯と吹きくる一陣の朝風の中に森坊丸は、ありありと見た。

「お香。無念であつたろう」

ハラハラと落ちる涙を一ぬぐいすると、彼は敵を捨てて、一散に本堂の方に走っていった。と、その時である。それまで何事もないように見えた本堂の中から、ゴーツと黒煙が噴き出して、同時にめらめらと赤い炎が、軒や縁を這い出した。

（ややつ、信長公には御最期——）

近くまできて、坊丸が立ちすくんだ時である。その火に追いつてられるように、本堂の中から転げ出て来た女性があつて

「わが君！ 信長様あつ」

と長刀を杖にすがりながら、狂気のように

本堂の奥に向かつて叫んでいる。その右手になまめかしい女人の生首が提げられているのを見て、坊丸は、つと駆け寄ると、

「阿能の局、よく聞け。よくもお香を手を掛けたな。今度はわしが相手だ。覚悟せい」

「血迷うな、坊丸！」

十文字槍をつきつけられて、あわてて飛び退りながら、

「この女は明智の間者じゃ。それ故、成敗致したのじゃ」

「ええい、そのようなこと知らいでか。お香はわしの妻じゃ。妻の仇として汝を討つ！」

「無態な。そのようなことを口走れば、汝も裏切者。不義者となりまするぞ」

「雑言無用！」

恨みに燃えて突き出す槍先は鋭く、阿能の局は、お香の首を投げ出して長刀を合わせたが、坊丸はなおも突いて突いて突きまくる。

（信長の首をみつけるまでは——）

阿能の局には未だそういう未練があつた。

（小僧、何するものぞ）

と気を励まして立ち向かったが、坊丸の死力に圧せられて受け太刀となり、遂に一槍をうけ損じて、腰の辺りを突き通され、どうと地上に倒れる。

「ああ、待って——」

なおも止どめを刺さんと身構える坊丸に対して、未練がましく、手を上げて制止する。

その時、お香の時と全く同じく、ヒュウと飛んで来た矢がグサリと坊丸の背に立った。

「うっ」

と棒立ちになって、仆れまいと槍を立てて身体を支える。と見て局は、得たりと、長刀をとり直して、身を起こしざま、サツと横に払う。しかし、坊丸の一念。

「卑怯！」

胴をしたたか薙がれながらも、右手を抜き討ちに、ビューと払った太刀が、見事、阿能の局の細頸に当たったので、長い黒髪をつけたままの首が宙に飛んで、胴体は五、六歩、前にのめって、バツタリと俯伏せに倒れた。

同時に坊丸も、どっとその場に打ち倒れたが、最後の氣力をふり絞って、身体を二転、三転させながら、お香の首がころがっているところまで這ってゆくと、

「おう、お香。ここにいたか」

と、ありし面影さながらの新妻の美しい首を抱きしめたまま、絶息した。

その時、すでに本能寺は、信長の覇業とともに焼け落ちていたのである。

（終）





# 体験告白

## 我が愛禪記

森 田 忠 雄

昔、双見山という相撲取りがいた。確か私が五つか六つの頃の、双葉山全盛時代だったかと思う。

正月の花相撲で、私は始めて力士というものをみた。そのとき、この双見山が五人抜きとかいう勝抜き相撲に出て、最後まで勝抜いた。彼は、あざやかな紫色のまわしを締めていた。私はこのとき、砂かむりといって土俵の一番近くの、丁度、力士が仕切りをするとお尻が剥き出しになるのが見える位置に、母と七つ年上の姉とで見っていた。双見山は、どのお相撲さんよりも、きつくまわしを締めていた。たてみつが、お尻の間に、きつく入り込んでいた。私には始めてみる強烈な印象だった。だから仕切りをしたときなど、たてみつは、ますます細くなつて尻の中に喰い込んでいくようにみえた。みているととても苦し

そうで、またちょっと気持ちよさそうだった。このお相撲さんは、一人勝ち抜くごとに、たてみつのところに指を入れて、くい込んだお尻の間からスーッと浮き出す仕草を何回もした。私にはわからないが、何か胸がドキドキするような感じだったのを今でも思い出す。相撲のまわしを通じて私はフンドシというもののへの興味を持つようになった。それでも人の前で「フンドシ」というのが、はずかしい気がした。

或る晩、姉と二人で風呂に入っているとき何を思ったか姉が、丁度、洗濯場にあった帯みたいなものをもってきて「フンドシしてみない？」といって、いきなり私の股から腰にぐるぐると、その布をまき出した。締め方すら全然、判らないのだが、それらしく仕立て上げて、姉は私の小さなフンドシ姿を前から

後ろから、まじまじと眺めていた。おそらく姉も、フンドシというものに興味をもっていたのだろう。

小学校へ入ってから、水泳の時間にフンドシを正式にするようになった。でも、まだ六尺フンドシなどは出来ずに、よくその頃、「水フンドシ」と呼んでいた小さな布きれみたいなのをした。締めるというよりは、はくといった感じであった。五、六年になると六尺を締める上級生が多かったが、私も早く六尺を締めてみたいと思った。

四年生のときに、相撲部というのが誕生した。入部したのは六年生が多かったが、私もいち早く入部した。そして、まわしというのを始めて渡された。

相撲そのものも好きだったが、私には、まわしが締められるということが嬉しかったわ



けである。それは、やはり幼いときに見た、あの力士の、きつく締め、まわし姿に憧れを持っていたからだと思う。まわしは、二人一組になって締めるのだが、なれないうちはこれがなかなかむづかしかった。そのうち、上級生が、まわしの下に六尺フンドシを締め、締めるのを見た。なぜ、そのようにするのか聞くと、まわしが締めやすいのだという。そこで私も姉に頼んで、秘かに六尺を作ってもらい、ここで始めてフンドシを締めるようになった。

この頃、姉はもう女学校の上級であったがよく面倒をみてくれた。まわしなど、よく洗ってくれたり、アイロンをかけたり、また色々と色違いのフンドシを作ってくれた。「フンドシは毎日、新しいのを締めなさい」と言って、必ず新しいのを箆笥の中に入れておいてくれた。

或る日、「相撲のとき、どうやってフンドシを締めるのか、見せてよ」と姉に言われて姉の眼前で六尺フンドシから締め始めた。まわしは一人では締められないので、姉が手を貸してくれた。

まわしをする前に「フンドシは、もっときつく締めなければ駄目よ」と言って姉が自ら締め直してくれた。今までの締め方が全くゆるかったのが良く分かったが、姉の締め方は又、強烈だった。細くするところは、ねじり

上げて縄のようにするし、前を上から折り返すときも、思いきりグツと下げて股下を通して後ろの結び目もキリキリと交差させるようにした。私は思わず痛さに悲鳴を上げたが、姉はそんなことにかまわず、その上に、まわしを締めてしまった。

それから「四股を踏んでごらんさい」とか「仕切りをしてごらんさい」とか、色々な恰好をさせられたが、そのたびに下に締めているフンドシがキリキリと体の中へ入って行く感じがして、言いしれない快感が身体中を走った。腰が落ちつくような気がするし、また臍下に重みが加わったように、非常に勇気づくような感じであった。姉が、どうしてこんな事を知っているのか分からなかったが後日聞いてみると、私のフンドシを作ってくれているうちに一、二度、自分で締めて見たのだそうだ。

それから私は、すっかりフンドシのとりこになった。相撲のある日には、朝からフンドシだけは締めて行くようになり、そのうち四六時中、締めていなければ気がすまないようになった。始めのうち痛かった部分も、なれて来て、布のきつく当る部分は、何か皮膚が厚くなったような感じがするようになった。唯、一日中、締めていると排尿のときには、色々と苦勞をした。

六年のときには、水泳の選手になった。夏

はフンドシ一本で真黒になった。前袋のところには、白い横線が三本、入った。当時の江田島の海兵での階級のようなものである。相撲をやったお蔭で、下半身が発達していた。尻も肉づきが良かったのかもしれない。同級の女の子たちが、よく私のフンドシ姿に集まってきた。たてみつが、きつく尻の間に没して、腰のくびれで支えているような、きりつとしたV型のフンドシの締め方が、今流でいえば、「かっこいい」感じだったのかもしれない。

中高校も、こんな調子で押し通した。ただフンドシを習慣にしていると包茎になるということを耳にしてから、それについては特に気をつけた。お蔭でその心配はなく現在に至っている。

学生々活の最後に旅をした。へくら島の海女の縄フンドシの姿も、極めて強烈な印象として脳裏に焼きついていて、あの、たてみつの切りこみの深さ。更に海中から船に引き上げられるときの、尻の豊かさとフンドシの緊張感、一種の異様な雰囲気をも出し出すものの、明るい太陽の下、かざり気のない健康美がある。

姉はフンドシの良き理解者であったが、結婚後は妻がこれにとってかわった。初めは妻も、いささか戸まどつたらしい。でも男兄弟の多い家庭だったし、恐らく兄達のそれを見



る機会も多かったに違いない。

新婚旅行で私のフンドシ姿を始めて見たとき、妻はハッとしたような顔で、恥かしげに盗み見ていたが私は、わざと誇示するようにあざやかな紫色のフンドシ姿を妻の前にさらけ出した。

妻は、前袋から股下を抜けて股間に喰い入らんとする個処を手でふれるのが非常に好きで、私のフンドシが、たまたま、ゆるくなっていたりすると「もっと、きつく締めて」と嘆願する。妻は今では自身、フンドシの愛好者で、自分でするよりも私が締めてやるのをじっと委せている。男と違って、女のフンドシは更に巾をせまくできるので、キリキリ締め上げると、初め悲鳴を上げるが、だんだん布がなじんできて、ギューと締まるとボーッとしたような目で息をはずませている。立てひざをさせ尻を持ち上げると、たてみつは美事にくい込んで、三分の二ぐらいは没して見えなくなっている。その姿のまま写真をとってやったり、あるいは自分自身で後姿を鏡にうつして見たりする。

今の私のフンドシは全部、妻の手製だが、どこで探してくるのか、色々の色物、たとえば緑とか水色とかのを混じえて、十色ちかくのフンドシを作ってくれた。布地も繊維の柔らかい木綿の半巾で、これが身体に一番ピッタリして、よい感じがする。私は、たてみつ

の部分、いつもよじって縄のようにするので、布の痛み方も早いようなので、妻は常に新しいのを用意している。

ただ私は月曜から金曜までは、簡単な形のフンドシで過ごす。これは横みつの部分に、たてみつ一枚のもので、腰で横みつの部分を結んだら、あとは、たてみつは前から股間を通して後ろで一気に締めて固く結ぶだけのものである。これは、勤めに行っている関係で日中排尿等のわずらわしさがあるために己むを得ないわけだ。

土曜と日曜が待望の六尺を締める日で、土曜の朝は、何か心の緊張感をおぼえ、じっと妻が見入る中で、丹念に締め上げる。もともととユルフンがきらいだから、フンドシの寸法はきっかり六尺とし、余分を作らない。こうすれば、いや応でも、きつく締めることになりまた後姿も、世間一般では六尺フンドシを締めるとT字型か精々Y字型だが、私の場合V字型に近くなる。妻も、これを「V締め」と称して一番好きだといっている。

この六尺も、私の場合、若干変型にしてある。というのは勤務中の排尿と、日常締めていると前袋部分がむれるため、前袋の一枚目部分は、丸く穴をあけてある。大切なものは、折り返して二枚目に当る布でのみ押える型にしてあるのだ。こうするとむれを防げるし、排尿のときに便利である。脱糞は私の場

合、一日一回、それも早朝であるからフンドシを一日中、締めるには支障ない。その場合も、アルコール漬けの脱脂綿でよくぬぐい取り、フンドシをよごさないよう気をつける。今までフンドシのことを書かれた方でも、ここまではされておられないのではないかと思う。

勤務中にフンドシを締めていることは本当に良いと思う。とにかく気分が、いつもひき緊って、だらけた気持はなくなってしまう。私の場合「緊輝一番」という概念が、日中、男として一番、大事な時間に、ずっと続いているわけで、心身ともに緊張感が充実している。

夜は、思いきり開放的に、妻と二人、お互いにフンドシ姿となって楽しむことにしている。隣近所の手前、そう大きな音は立てられないので、マットレスの上で相撲の真似事をしてみたり、お互いに降参するまで、きつく締め合ったり、また色々な型で写真を取り合ったりする。このときほど妻が魅力的で可愛いと思うときはない。

最近では復古調で、フンドシが秘かにブームを呼んでいるかの如くであるが、私のようにすでに三十年以上も愛好しているものには、今更の感がないでもない。しかし、もっと素直にフンドシの良さを採り上げ、愛好すべきではないかと私は思う次第である。

(使用カットの筆者、連絡を乞う)





# 責めの部屋

井 風 呂 秋 於

## 睡のなか

……鈍い。  
にぶ

何も彼もが、重くて鈍い。

めくるめく悦楽と、全身を貫かれるような  
凄まじい痛苦を超えた直後に、こんな嫌アな  
感じが襲ってこようとは思ひもしなかった。

ただ、呼吸だけが未だ苦しかった。

もうすこし身をずらすなり、僅かでもいい  
姿勢の向きを変えるなりすれば、こんな窮屈  
な呼吸はしていなくても済むのかも知れな  
かったが、全然、私に動こうとする意志が湧い

てこないのだから仕方がない……。

こうして、どれくらいの時間を過ごしてし  
まっただろうか。

粘りついたような臉を、眉を二、三度上下  
させて漸くひらいたとき、そのふるえる睫毛  
のむこうで、彼の大きな体がゆっくりと寝返  
りを打っていた。

口に含まれていたただけのような煙草のけむ  
りが、輪になって天井へ吹きあげられていく  
のがボンヤリと見えた。

「あなた……」

と、私は呼んだ。

声を出したことで咽喉に熱砂を流しこまれ

たような痛みが走った。それに、抑揚のない

しゃがれ果てたこの声に自分ながら驚いてし  
まう。——彼は、呼び掛けたのに此方を見向

こうともしなかった。眼の前に煙草を立て指  
先でくるくる廻していた。何かを考えている

ような横顔だけど、案外、放心の状態であっ  
たかも知れない。

「あなた、ほどこいて……」

と、私は言った。

上半身を起こそうとして少し身動きした途  
端、腋のあたりに、摘み取られるような痛み  
があった。思わず、ウツとうめく。

「ねえ、早くほどこいて！ ……もう我慢が



出来ないのよ、腕が抜けてしまいそうに痛くて……」

齒を噛みしめながら、腰を捻ると、足の先がやっと床についた。

首を曲げて、今更のように、この自分の哀れな姿を確かめて見る。すぐには立ち上がれないのも当然、私の腕はうしろにまわり、手首は背中高く縛り合わされていた。

もし指を動かすことさえ出来れば肩先や襟足など、容易に触れるほどに吊り上げられていたのだった。皮膚を皮膚とも感じさせない痺れが、それをさせないだけだった。

胸は四巻きもして締めつけられていた。

それをくぐった腋縄が一寸の隙もないほどに腕を固定させて締まる。うっかり身動きすると、そこに目も眩むような痛みが加わる。

——このような被縛で、しかもその上、彼から散々の責めを受けては、たまろう筈はなかった。

初めて経験する、怖ろしく混沌とした意識のうちに、やがて正体もなくなりソファの上にくずれ落ちてしまったのだったが、そのあとで、一体彼がどのような責めを加えてきたのやら、ほとんど記憶がない有様だった。やがて自分にもどったとき、のめりこんで

いくような、鈍重な感じを覚えた。

もちろん、痛苦を超越して『楽』になれる程の修業？ もしていない。何とか彼と<sup>なん</sup>か得る事が出来たのは、『痛苦を依然として伴った』湿潤な欲びであり、けっして夢見るような『安楽』ではなかった。

そしていま、またも、新たに責め立てられるようなこの『縄のくるしさ』に、今度こそ本当、その限界の迫ったことをイヤというほど思い知らされる私だった……。

「こちらへ、来なさい」

と彼が言った。

優しい声音だった。こちらを向いたその切れ長の目が、やわらかく光っていた。

もっとも、私を責める時の彼は、真底から人間が変わってしまったような、悪鬼の凄まじさとなる。こんな優しさのひとかけらとて見せるものではなかった。

だから、言い換えれば、今は、彼は紳士に戻っているということになる。私はもう『演技』の必要はない、ということにもなる。

彼がむっくり起きあがるのを見定めてからソファから立ちあがり、縄れようとする足を踏みこえながら、私はベッドに近づいて行った。

「……く、くるしいわ」

ベッドの端に腰を降ろしながら彼を見あげて言った。烈しい痛みのうちにも、甘ったれた思いのあることが自分でもわかった。

「もう、ひと責め——してやろうかとも思っていたのだが」

と、身を屈めながら彼が言った。

「いや、嫌よ！」

「ふふふ……恐がらなくてもいいよ。思ったけれど、それは、きみに話があるから止めることにしたから」

「お話？ ……あ、それより早くこれをほどこいてちょうだい！」

私は身体で嫌々をしながら、彼に背中をむけた。それもそうだったなアと呟いて、彼はウエストのうしろの縄止めの部分へ手を掛けてきた。

縛るときにはあれほど素早く、正確な腕を発揮するというのに、解くときの、こちらがキリキリと齒を鳴らしてしまいそうなもどかしさは彼のいつもの、最大の欠点であった。案の定、解かれていく縄のスピードは、のろくさを極めていた。

私は、はじめて、泣き顔をつくった。

「……自分のフォトを、誰にでもあげたいと



いうきみの趣味から発展した話なんだがね……これが」

さきに手首をほどこいてくれればいいのに、まだ胴を締めた縄のあたりでうろろうろしている。おまけに、口下手の彼が考え考え喋りはじめた。

「ホレ、此の前、一度きみに話したことがあるだろう？ K・M……という男」

「K・M？」

「そうだよ、ぼくの根っからの悪友で……きみのフォトを欲しがると言ったら、きみは満更でもなさそうに五、六枚、彼にやってくれて、ぼくに渡したじゃないか」

「……」

「あ、これはひと言、多かったかな……。それで、つまりその、彼はね、きみのそのフォトを毎日毎夜ながめているうちに……もう似ているってモンじゃない、女房……いや女房だった女そのものの顔に見えてね」

腋の縄が、そろそろと抜かれていた。針で突き立てられるような痛みがあった。

「似ているって、私が？……」

「ああ、これはきみに話す必要はないとその時は思ったから黙っていたけど、いや、彼の女房……だった女、このぼくが見たって確か

によく似ていたんだ、きみに。こうふっくらしていて、可愛らしくて……ウン、きみと全くおなじの、美人だったな！」

「くるしいわね、あなた」

まだ右の脇縄は抜かれてなかった。空唾をのみこみながら、その時の痛みを覚悟して待っていた。

「ところで、最近の彼だがね。隙ひまさえあれば

きみのフォトをながめ、ながめると必ず思い浮かべてしまうのは、その女の現在の事。そして次から次と想像しているうちに、もうどうにもならなくなり、精神的にも、二進も三進ちもいなくなるのが常なんだと、こう言うんだ」

「あ……痛いッ」

「そこで、是非、一度でもいいからきみと逢わせてくれないか——と頼み込まれてね。まぼくだってそりゃア、こんな話はうんざりなんだけど」

「おねがい……そんなに、縄の間に指をこじ入れないで……」

「考えてみると奴も可哀そうな男でね、そんなことをいい出す気持も、ぼくにはよくわかるんだ」

「……」

「そこでぼくもあわせての頼みなんだが、どうだろ？ 一度、彼に逢ってやってくれないかな」

「逢って、どうしろと言うの」

「ま、そこは積る話もあることだし」

「あたしには、ないわ」

「彼の願いのひとつぐらいは、聞き入れてやって……」

「どんな願い？」

「……」

今度は彼のほうが黙ってしまった。漸く、手首の縄を解かれ始めていた。

「意味がよくわからないんだけど……そのMさんって方、奥さんだった女ひとのこと、現在いまでも愛してらっしゃるんでしょう？」

「憎い。憎くって夜も睡れない、というんだけどな」

「愛しているのね」

「……らしいよ」

「では、その女にそっくりだというあたしに逢って、どうする気？」

「……」

「その女の替りに、あたしを愛するの？」

「いや、それは」

「なら、あたしは駄目よ」



「そ、そうだろうな……」

「それとも、憎くって夜も睡れないくらいだから、あたしをその女に見立てて思いつきで撲つ？ あたしを苛める？」

「さあ、それなんだよ」

「どれなのよ」

べつにふざけているわけでもなかった。

それどころか一層張り詰めた気持になっていた。私は彼の瞳の奥をのぞきこみながら言った。私は彼の瞳の奥をのぞきこみながら言った。

「そのMさんと逢い、ただお話を聞かされるだけなら、あたしは適当な女じゃないってことなのよ。第一、面倒臭くって、嫌……」

「……」

「なにも仰有らずに、あっさりと、その憎い奥さんの替りに、あたしを責めてやろうというのなら……」

「いいのか？」

「うん、と言えばあなたはどうなの？」

「……」

「ほんとに、それでもいい？」

「きみは、どうなんだ！」

一瞬燃えあがったような色を、その彼の瞳のなかにハッキリと見て、私は思わず俯向いてしまった。

胸が、次第に熱くなってきた。

まだ感覚のもどってこない両掌を顔にあてて、仰向くと、そっと指のあいだから彼の表情をうかがった。

△このひとは、自分のほうから言い出しておきながら、あたしのたったひとりで、嫉妬をおぼえた！……▽

## 『女』は着換える

思えば、彼も卑怯だった。

私が一番訊してみたい点には何も答えてくれない。そのくせ、サアどうすると私の返事を強いる。

もっとも、お友達の執心の望みに応えるため何とか私の承諾を取りたいと思っている反面、私がそれを聞き入れそうになると、わけもなく感情に波が立ってしまう。そんな内部の相剋は隠し切れている風ではなかった。

だから私にしてみれば、彼からそんな様子が隠されるなり消え失せるなり、してしまわないかぎり、いくら返事をしたくても出来ることではなかった。

「うふふ……」

私は、彼に凭れ掛かり、その咽喉もとに顔をうずめた。

をうずめた。

「……あなたは先刻、あたしの趣味がどうのこうのと仰有ったわね」

「え……う、うん」

「でも最初、その人にあたしのこと喋ったり写真見せちゃったり、したのはあなたなんですよ？」

「ま、友達といえるヤツの中でも彼奴は、特別だからな」

「あなたとご趣味が一緒なのね」

「まあね」

「お縛り……のほうも？」

小声になっていた。睫毛が触れて首がこそばゆいのだろう、彼は喉仏をゴクゴク動かした。

「……だったら、ほんとにはあたしが、あなたに文句のひとつも言うべきなのね」

「じゃ、怒るか？」

私は、のろのろと立ちあがった。

そして他愛もなく？ むずかしい表情となっている彼の、その房々として豊かな、銀いろの髪に顔を近づけ、そっと軽い口づけをした。

「結局は……あなたのためにも、一度その人に逢えばいいのね？」



「そ、それは、きみ」

「じゃ違うの? ……もっと言えば、あたしが、その人の思いの通りになって、その人の奥さんだった人に対する憎しみが、ちょっとでも晴れてくれればいい、といたいのではない?」

「……」

「もちろん言い詰めれば、こんな単純な理屈では済まない事でしようけど」

「だと言ったら承知してくれるかい?」

「でも、待って。……あたし、こんなのだもの、ともかく着換えをさせて。もうちょっと考えて、それからお返事します。いいでしょう?」

唇をゆるく吸って、やはりのろのろした動きで、鏡台の前へ行った。

鏡をひらくと、左の一枚に、またベッドへひっくり返っている彼の姿が映っていた。

彼は、両手で顔を撫で撫で、此方を見た。

鏡を媒介として、その隅っこでちいさく私たちは視線を合わせた。

私は視線を外らさなかった。手さぐりで髪ブラシを取り、す梳きはじめた。

考えている事は違うだろう。でも、彼も同じように目を放さなかった。

——彼への返事は、もう決まっていた。いや、彼さえそれでよかったら、その人に逢ってみる心算つもりだった。

けっして彼にこれと言えた不満があったのではない、だけど、彼以外の人にも偶には責められたいという意識下の意識が、このときを利用して働き始めたのだろう。浮気? その言葉の持つ意味に当て嵌まるかどうか、判らない。しかし、彼と私を結びつけたのが、『縄』であつたなら、その縄の味を他からも賞味させて貰いたい——という消し難い気持ちから言つてこれはハッキリ、『浮気どころ』となるのではなからうか。問題は、この私の浮気どころに対して今後、彼の責めぶりがどのように変化するだろうか、という事であつた。

——K・Mという人の、その奥さんと私が似ていたとかどうとかの話は、折角の彼の話であつたけれど頭から信じてしまったわけではない。

悪いけど、なんだか話がうまく出来過ぎたような感じ。なんだか、この時も彼独特の術が使われているような感じが、それはそれでもよかった。

もしその人の真底が、『ただお前を苛めて

みたいのだ。縛りあげ、思いっきり責めてやりたいのだ』ということであれば、私にとつてはもうこれに優るものもない……悦びの極致であつた。

無論いまからその人にこのような望みを被せてしまうのはあさはかであり、勝手過ぎる事だろう。ひよっとしたら、こちらがそんな望みで燃えて掛かっても相手の、『ちょっと、ゲテ物というヤツを拝見したくてね』

そんな心底を見せつけられて「一切、何の悦びも伴わぬ」悲惨の奈落に陥れられてしまふかも知れない。

現に、いま私と一緒にいる彼にしたって、私がいくら精一杯のお化粧をし、その気持ちになり切つて尽してみせても、どうしてもこれが「女」だとは思ひ込めないという、そんな節がその様子から窺われるのだった。

女のまがいもの、彼にとって私はこんなものであつたかも知れない。もちろんこのまがいものという怪体に強い好奇心が生じたからこそ——また、他人には喋れないそのサド性をぶっつけてやるには恰好のしろものだと思つたからこそ——こうして私と一緒にいる時間を作ってくれるのだろう、と解釈する。正



直言って今後に、この彼以上の人があらわれる事を、私は信じてない。現在のこの彼の存在こそが、私にしてそれは他に欲張って求める事も許されないほどの、最上の幸福時点だとも思えるのだった。

だからK・Mという人に、私が『その氣』を抱いたとしても、それは決して、その人に彼以上のものを求めようとする気持からではなかった。この点、文字通り『浮氣』の『発起』に過ぎないかも知れない。

私は、ともかくその人に逢おうと考えていた。ともかく逢って、それから先のことは、その時に決めようと考えていた。

「あなた……」

パフで叩いたあとの顔を、水で湿したガゼでそっと押さえながら、私は呼び掛けた。

「もし、あたしがあなたのために、その人に逢わなければならぬのなら……これは、まるで女衞に売りとばされる女房どの、といったところね？」

意外だった。

ばかやろう！ の怒声ぐらいは飛んでくるだろうと思っていたのに、逆に、彼は眼を反らし苦しげな表情をしてみせたのだった。

私は、もし彼が怒れば、自分を見透されて

怒ったのだと判断したがっていた。

そして勝手な事には、いまそんな表情をされればされるで、またべつの不安感が湧いてきた。

「あらッ。あたし、ひどいことを言ってしまったわ。取り消します、あなた。ごめんなさいね」

ひねくれ過ぎた自分の考えに今ごろになってやっと気づき、顔に血がのぼるのを覚えながら私は、そわそわと立ちあがった。

すぐに、カーテンの陰へ隠れると、服を着換えて、今までのすっかり忘れた形になっていた「おトイレ」へと、小走りになって部屋を出た。

## 承 諾

いざともなると、やはり色々と考えることがあった。

その末、私だけの判断で、一度尾崎さんに相談してみることにした。

尾崎さんは、

「その人に此処まで来て戴きなさい」と、言った。

「日を決めて、お見合するんですよ。ね、あ

んたもそんな形をとるほうが都合よくいいんじゃない？ あたしもサ、あたしなりに、その人が果たしてあなたに合うものかどうかじっくりと見て差しあげる。……とにかくあんたったら、口は立派だけどまだオネンネですからね、全部、安心して見ちゃアおれないもの」

尾崎さんの、まったくツボを心得た？ お教で結局甘えさせていただく事になった。彼へ連絡して、私の都合で、二日後にその人に来て貰うことになった。

その日、午前九時半。

その人は彼に伴われてやって来た。

ただいま御到着の知らせを受けて、私は尾崎さんの言いつけ通り三十分経ってから、しずしず？ と、そんな状態のつもりで部屋を出たのだった。

そのとき着ていた私の服は、純白のレースのドレスだった。

白は肥<sup>ふと</sup>って見える、というけれども、やはり清純さにおいては第一等だと思う。

尾崎さんから、お見合だホレお見合だと聞かされているうちにいつのまにやらその気にもなって、これは絶対白のドレスでいかなきゃと思ひ込んでしまっていたのだから……私



も大分調子が出ていた。

廊下を曲ったとたん、昨夜からこの家に泊めてもらっていたらしい千賀子さんに出逢った。彼女は齒ブラシを啞え、ピンクのネグリジェを着ていた。

「お早よ。まあこんなに早くから、一体どうしたの？」

と言った。

「いえ、ちょっとね」

「——あ、そう」

日本語とは、ほんとに都合のいいものだった。彼女は行ってしまった。

三十分間、その人を尾崎さんが『検定』している。その部屋の前まで来て、

「あのう、百合です」

と言うと、

「ああ百合ちゃん？ さあ、はやく入って……」

……お待ち兼ねですよ」

と尾崎さん。

声の調子が、なんとなく私に安堵といったものを与えてくれる。

中に入って、眼も上げずに丁寧に一礼する一呼吸におまけをつけて、ゆっくりと顔をあげると、きちんと背広を着て正座した大柄な男性が私と同じように顔をあげたところだっ

た。

渋い服の色がよく似合った中年のひとつ。太い眉毛の下、つぶらな感じの目が、私から或る「恐怖」を取り除いてくれた。

「百合でございます。どうぞよろしく」

「私、K・Mです。——こちらこそよろしくおねがいます！」

彼のお友達というから何となく同年輩の方を想像していたのに、若かった。十ぐらいは違っているのではないかと思った。その声も印象から想像するものとは違い、ひどく若々しく張りがあった。

私は長火鉢の前で葉巻をふかしている尾崎さんと、そのMさんの向こうで胡座をかき顔を撫でている彼に微笑と目礼を送り、さっきから尾崎さんが気さくに薦めてくれている座についた。

するとそれを待ち構えていたかのように、「いやア、勝手ばかり申しまして……この彼にも散々愚痴られ叱られたのですが……どうかお許しください！ いや、まったく、貴女は私の思っていた通りのお人だ！」

元気なのはいいけど、突然といった感じなので驚かされてしまった。見ると顔が真っ紅になっている。円い目が、光りの所為かキラ

キラしていた。そして、

「——私、自己紹介します！ 当年とりまして四十と一歳。K市内に在住しますアパート——」

「ま、まってください」

私はあわてて尾崎さんを見、『私の彼』を見た。この家では、相互間、住所その他の事について詳細に知る必要がなかった。尾崎さんだけが、知っていればいい事だった。一方的に、そんな詳細な挨拶をされては、この私が困ってしまう。………

もじもじしていると、Mさんは私たちをきよろきよろ窺って、アそうか、といった表情をした。

「……で、まあ、よろしく頼みます！」

尾崎さんが眼を押さえてわらった。

ふと私のほうを見て、左の手首を摩った。

いい人ですよ——という、私たちだけに通ずるサインだった。それにしても尾崎さん、ひよっとしたらMさんに、百合が来たら変に話を持って回るより単刀直入、アッサリといきなさいよと、それぐらいの事は忠告しておいてくれたのかも知れなかった。サバサバした男性が好きという私の性分をよく呑みこんでいて呉れるのだから——。



その証拠には、Mさんったらまた突然に、  
「こうして、貴女を目のあたりにしてしまっ  
ては私、もうどうにもならんですなあ。貴女  
ここはひとつ是が非でも、この私に苛めさせ  
てやってくださいませんか、ね、ウンと言ってや  
ってくださいよ、たのみます！」

言わずともこんな申し込み方をされたのは  
初めてだった。——話を外らせるけど、『私  
の彼』だって、その時はもちやもちゃした態  
度で煮え切らなかった。私がそろそろ退屈を  
覚えてきた頃になって、やっと申し込んで呉  
れた。

私は嬉しかった。なんだか胸がすっきりし  
てくる。Mさんに感謝したい。もしこれが尾  
崎さんが与えた知恵だったらその、尾崎さん  
にも。——実は私にとっては面倒臭い、あの  
女房だった『女の話』から切り出されるんじ  
やないか？ とヒヤヒヤしていたのだった。  
「でもあたし、酷いことをされるのは嫌なの  
ですよ」

これが承諾の意味をも含めた言葉であるこ  
とにも気づかず、こたえていた。

「え、……いや、それはもう、よく心得てい  
ます、はい」

「ベテラン、ね」

「は？ なんです？」

「いえ……」

「で、私。貴女のことは色々と、この……彼  
からうかがっているのですが」

「まあ、色々と、ですって？」

「いや、つまりその、それほどでもないんで  
すが、……そこで、この私の足りぬところは  
まアこんなガムシヤラの熱意に免じて我慢し  
ていただきたい、こんなつもりであります。  
よろしくたのみますよ、ね？」

「がむしやら？ まあこわいわ」

「いやア、それはその、恐くはないです。ち  
よっぴり謙遜して言ったつもりであって実は  
私それほどでも……オイ、なんとか助けてく  
れよッ」

Mさんは彼をふりかえって頭を搔いた。

彼は「バーカ」と言いたそうな目をした。

Mさんが最初にわらった。つられて、みん  
ながわらい、座がなごやかになった。ただ、  
同じように笑いながらも、彼の、どこかしら  
に慥然としたものがあるのを私は見て取って  
いた。

——数分後。話は決まっていた。

明日の夜、この家の離れ座敷でMさんと私  
が『逢う』という提案について、私が並べ立

てた条件をMさんがすべてのみこんでくれた  
からだった。

条件つきのプレーなんて、水臭過ぎて話に  
もならないやと思われるかも知れないけど、  
こんな場合、実際問題として私にそれが必要  
なのだった。その容認を、どうしても前もっ  
て得ておかなくては気が済まないのだった。

私の条件とは、

『カメラを使用の場合、そのDPはこちらで  
処理させていただく』

『其処（部屋）のクーラーを、プレーの始ま  
る二時間ほど前から、強冷、最低7の目盛り  
に電動しておくこと』

『縄、鞭、鎖、枷、その他の責め道具につい  
ては、一応どれを使用して頂いても結構。だ  
けど、それを絶対、顔面にだけは使用なさ  
らないこと』

『その時どのようななさっていても、女であ  
る、というものだけは“壊さない”で』

『最後まで私を女だとして取り扱う』

『プレーは、女が一步部屋に入ったその瞬間  
から、開始されるように……』

これに対してMさんからも条件が、ひとつ  
あった。それは、

『理由あって、以前から取り揃えてある三着



の洋服。当夜は、このうちの一着を、是非着て貰いたい。本日中にこの家に届けておく故に——」

この体に合う寸法なら喜んで、と私はこの条件を聞き入れた。

私は、お手数を掛けた詫びと礼を言つて、帰るMさんを見送つて玄関へ出た。

私が支度部屋へ戻ると、Mさんと一緒に帰ろうとしなかった彼が尾いて来た。

「Mさんって……随分と背の高い方ね」

「ぼくよりは、立派な体をしているさ」

「あら、そんな意味で、言ったのじゃなくつてよ」

ちなみに、私の身長は一メートルと五六センチ。小柄だけど、Mさんとの差は、たしか十五、六センチ。でも彼が言うとおりで背が高いだけじゃない、肩幅もひろくて……。

「きみ、……ぼくの奴隷になってくれるのは何日？」

「明後日！」

「ほんとう？」

「決まってるじゃないの」

「じゃ、何も、もう言わないけど……」

「？」

「よし、それじゃ、ありったけの縄やら何や

ら用意して、手ぐすね引いて待っていてやるからな！」

「いいわ」

「覚悟しろよ」

「はい……今から……しておきますわ」

しばらく静寂があった。いや、私たちがそれをつくつたのだった。

間もなく、彼は帰って行った。

ひとりになると、早速私はドレスを脱ぎはじめた。やがて、下着も脱ぎ捨てると、小さな三面鏡の前に坐り、化粧を落とし始めた。これからの数十時間、男性に戻つて、紳士としての責務を果たさなければならなかったから——。

すでに、私はもう「百合」ではなかった。

一時間後、私は背広姿で、その家を辞していた。

## 変貌

午後六時ともなると——

一見スキもない立派な服装をした男性たちがこの家に集まる。

社会的地位もあり豊かな生活にあることを誰れもがその、おだやかな微笑から思わせる

紳士たちであった。

彼らは、尾崎さんに「訪問」の挨拶を済ませると、それぞれ、定められてある部屋へと消えて行く。

或る部屋には五、六人もが詰めこまれる事態となることがある。

彼らが、それぞれの手馴れた技術でもって『美女』に変身してしまうには、ものの一時間余もあれば充分だった。

医師、技師、社長、商店主、大学生、計理士、大農業者……それらの人々がこの短時間において、妖艶な、清純な、高貴な、華やかな美女にと変身して、やがて広間に、尾崎さんの部屋にと集い、妍を競いはじめる。

「まあ、お綺麗なこと！」

「いえ貴女こそ美しい。羨ましいわ」などと、口々に賞め交わす。

女装することによって陶醉感をおぼえる、こんな自分と、少しも変わらない感覚を持った人々と同座出来、こうして言葉を交わし、美を誇り得ることに、その陶醉をますます深めひろげていく。——そしてこれは、この私とて別に違<sup>たが</sup>う事でもなかった。

その夜。

美女・たちはその輝くばかりのあでやかな姿



を披露しあいながら、広間で、賑やか極まるパーティを催していた。

その騒々しさを、此处で遮蔽するかのよう——。

離れ座敷へと通ずる渡り廊下の中ほどに細い鎖が張ってあって、これに垂れ紙が一枚。

『討議中に付き、部外者は絶対立ち入り禁止です』

と、これは殺風景な、しかし優しくなれた文字。尾崎さんのジョーク好みが活かされた文句だった。この家における会則の一部、『相互、信義を重んじて……』

が日頃から徹底されてもいるんだからこの垂れ紙、むしろ不要とも思われる。だけどこれは、会員を疑って掛かるというのではない——尾崎さん一流の冗談と「派手好み」がまたもそのとき頭を拾げて、その行き掛かり上で出来ちゃったというわけ。

——私は、鏡に映るわが美女？　ぶりをながめながら、その支度部屋で小一時間ほどを過ごした。

肩先にまで触れる長い髪。

スタンドカラー、深紅のワンピース。

髪は、この服に合わせたつもりで被ったヘア・ドレスだし、服は、Mさんの希望通り、

わざわざ持参してくれたものだった。

十代の娘が着て喜ぶようなこの服を、私に着てくれというMさんの真意はわからない。

以前から持っていたと言ったけど……新品だった。でも、そんな事はどうでもよい。私のスタイルが『平常』とすっかり変わり、まるで別人を見ているような、その鏡の中の女に私はただならぬ興奮さえ覚えていた。

漸く、外の世界が暮れまごう頃になって私は部屋を出た。七時五分前だった。

離れ座敷まで、遠回りして行くために左へ折れた。さいわいに、誰にも会わない。

鎖を張った処まで来て、その垂れ紙の大層な文句にまた笑みを浮かべてしまいがら、くぐる。

部屋の前まで来て立ちどまると、そっと目を閉じた。

呼吸を、ゆっくりと整える。

——一步、この部屋に入った瞬間から、Mさんと私の討議ならぬ『斗戯』が始まる。

きっと彼は、手ぐすね引いて待っているに違いなかった。

プレーが、どのような形で進行していくのか、いつもの事ながら私は予測することも出来ない。私は、受け身だったからだ。

それ故に、いやそれだからこそ私の昂揚の度合が強いとも言えよう。胸が早鐘をうち、なんだか足もとがガクガクするようなもの、いつもの通りだった。だから、せめても思っ、目を閉じた。

やがて、

「……百合です。入ってよろしゅうございませう？」

と、声を掛けてから部屋へ入った。

Mさんは、座敷机にむかってグラスを傾けていた。机の上に半分減った冷用酒の壺が置かれてあった。

ゆっくりとグラスを傾けたのち、不意に荒々しく叩きつけるように置いて同時に此方へ向き直った。

「ううッ……あや子、来たか！」

その形相からして、すでに昨日のMさんではないみたいだった。声も、まるで別人だ。

——あや子？　綾子？

あたしはたったいま、百合です、と言ったのに……と思わず眉をしかめる私に、

「おいッ、なんて顔をする！」

と片膝を立て、

「亭主の顔が、そんなにいやらしく見えるのかッ！」



真っ赤になり、太い眉を吊りあげるのだった。つぶらな筈だった目さえも、細く切れてその赤味に染まって燃えてるようだった。

予期出来なかったこんなMさんの態度に、まあ手の混んだプレー開始の「演技」だことと最初は呆れた。が、すぐに、その演技の異様なリアルさに、わけのわからぬ恐怖が襲ってきた。

「さあ、此処へ来い、あや子」

とMさんは近くを指差し、

「今日まで……いや今の今までお前が何処でなにをしていたのか、そいつをこれから糺してやる！」

「そ、そんな……言えせんわ」

「……お前の、その男のこともジックリと聞いてやる。さあ、早く此処へ来い」

「あたし、言えないったら！」

「畜生！ やい！ お前は亭主に言えないで済むと思っているのかッ」

「なによ、あんたはもう、あたしの旦那さまじゃないわ」

私も、何となく「演技」に入っていた。

しかし、Mさんの様子は気味わるく、単なるお芝居でないみたいところがある。これが無性に恐かった。すんなりと演技に入っ

いけないのは、この故だった。

「逃げるのか」

「逃げる？ なぜあたしが逃げなくちゃいけないの！」

やりとりしながら、たしかに、身体がふるえてきた。私は生唾をのみこんだ。

ツンツルテンの浴衣すがたを飛びあがらせてMさんが襲い掛かったのはこの時だった。

「あッ、なにをするのよ！」

手首を掴まれて曳きずられると、自然に悲しい声があがった。

「さあ、その男とお前は、今日までどんな事をしてきた。一部始終、隠さずに話してみろ！」

机の前にひきすえられると、掴まれた手を背に捻じあげられた。その容赦のなさ過ぎる痛みに、思わず憎悪をこめた目でMさんをふり仰ぐと……なんと、Mさんのその吊りあがった目にキラリと光るものがあつた。

それを見て、私はこの恐怖を飛び超える勇氣が湧いた。もう演技を捨てない。完全に、その演技のなかに入っていこうと思った。

「許して……全部を話してしまうから許してちょうだい……」

「いや、許す許さないは、話を聞いたあとで

決めることだ。さあ、言ってみろ！」

もう二進も三進もいかなかった。

この頼りない脳味噌をフル回転で使わなくては……腕が折れてしまう。

「あたし、貴方と別れて……」

「わかれた？ 体裁を言うなッ。お前はドブねずみのようにこそそこそと、俺の前から消えんだ！」

「そ、そうだったわ……あッ痛い！」

「さあ言え、それからどうした」

「ある街で……」

「街？ どこだ、それは」

「な、長崎よ……痛いッ……その長崎であたし死んでしまおうとしたのよ、そしたら」

「……」

「そしたら、貴方に助けられて……」

「俺にだど？」

「もちろん貴方じゃなかったわ、貴方そっくりの人。そして病院でその人の手厚い看護を受けているあいだ……あたしは、貴方が許してくれて、まるで、恋人どうしだった時のように愛してくれる、そんな夢ばかりを見ていたわ……」

「うう、む……」

話しているうちにこの人の気持も緩んでく



るのでは、と思ってただけど、なんの、次第に私の腕をねじる手にちからがこもってきている。

自分で、一体なにを喋ってんだか、わからなくなってくる。

「でも、その人は……そっくりだったとは言え、やっぱり……貴方ではなかった」

「すると、この男とはなんでもな……」

「いいえ。だって、生命をたすけて貰ったところで、今更もう貴方の処へは帰れないじゃないの！」

「う？」

「それに、その親切だった人が貴方の生まれかわりのように思えてきて……」

「これがいけなかった。言いかたを間違えた——しまったと思った時にはもう遅かった。」

「なんだと、生まれかわりだとオ！」

凄腕と膝のちからで、私は俯伏せに押さえこまれていた。

「俺が……俺がなぜ、生まれ変わらなくてはいけないんだ！ 畜生ッ、畜生ッ」

声がふるえていた。悲しく、怒っていた。

私は、そんなMさんにもう嘘を感じなくなっていた。こちらの胸までが、痛んでいた。

「お前、これからその男の許へ帰るのか」

「ええ、帰らなくては……」

「いや、駄目だ。この俺と、ずっと一緒にいるんだ！」

「そんなこと……いけないわ」

私は足掻いて、逃れようとした。

「いいや、行かせるもんか！ こ、こうしてやる！」

両手が、背中に曲げられた。重なった手首に、縄が巻きつき……そして締まった。

「嫌ッ、ゆるして！」

「ああ、許す、許すとも。だからこうしてお前を、傍に置いとくんだ！」

上半身を引張りあげられて、それこそがむしろ嫌いな縄が掛けられてきた。

## 裂けた恍惚

私をうしろ手に縛りあげてしまうと、なにを思ったのかMさんは、机の上から酒壺とグラスをはらい落とし、それへ、新しい縄数本を取って来て解きさばきながら、掛け渡すのだった。

すふあッ、と人間ばなれしたような鼻息が——転がされ自由を奪われている私を、尚そのうえに縮みあがらせた。

「どうだ、決心がついたか？」

傍へ来て、身をかがめながら言った。

「ねえ、ゆるして……」

「今日までの事は許してやる。そのかわりこれから的一生、この俺の奴隷として言いつけをまもるか？」

「おねがい！ あたしを帰して」

「返事するんだッ」

Mさんのごつい手が私の手首のところを握んだ。グッと引っ張られて、上半身が浮きあがった。同時に胸の縄がいやというほど喰いこんできた。それを堪えようとするため思わず顔をのけぞらしてしまう。

「う、ううッ……」

「さあ、どうだ、返事をしろ！」

「い、嫌よッ。こ、こんな酷いこと平気でする、あんたなんか……」

「む、言ったな」

「あ、あんたなんて、陰険で、残酷で……女の気持が少しも……わ、わからないのよ。そんな人って、きらいよ！」

息苦しいから膝をつかって何とか起き上がってしまおうとする。すると、そうはさせじと私を吊ったまま二、三步あるく。そのたびに私の身体はまた伸び切ってしまう。いつの



まにやら位置が変わって机の縁に顔を打ちつけそうなところまで来ていた。

「よし。よくも言ってくれた。それでは、その文句に間違いがなかったところを、これからタップリと味あわせてやる！」

眼の端で毛むじらの足が踏ん張ったかと思うと、私の身体はそれまで以上に浮きあがった。すごい腕力。

「ああ、あッ……」

その悲鳴の終らぬうちに、私は俯伏せのまま机の上に乗せられた。

乗せられるといっても机の型が細くて小さい。伸び切った身体では咽喉もとから太股のあたりまでしかない。それから先は宙に浮いている形だった。机の縁がやわらかい太股に喰い入ってきて責めたてる。すぐに辛抱出来なくなった。

が、足を畳に支えようとすれば、自然、机に跨るような恰好になり、下肢をひろげなければならぬ。恥辱をきわめる姿態となったのは決まっている。

「ふん、ピンクのパンティか……」

先に掛け渡しておいた縄で、私の身体を巻き、机ごとくくりつけながらMさんはピシヤピシヤと叩いた。

「お前がこんなのを穿いてればその男が涎をたらしてよろこぶというんだな！」

声のなかにすごい憎悪がこもっている。と聞いたのは私の間違いだったろうか。

そして、顔をねじ向ける私に、

「な、なんだこんなもの。ずたずたにしてやるさ！」

言ったかと思うと、なんと、これ見よがしにしたのは小鉄だった。悲鳴をあげてみせる前に私を一瞬、面くらわせたのは、そんなMさんの『用意周到』ぶりの事であった。

可笑しい話だけど、鉄の感触が散々縦横に走ってしまうまで私は頭を混んがらかせてボンヤリしていた。冷気が直接に触れてきて、やっと現在の状態がわかったとき、たすけてえ！ と、唯心こもった真実の悲鳴をあげたのだった。

と、それが合図になったように、

ばしッ！

音と同時に息も止まるような痛みが走り、折角、畳に支えていた足を両方そろえて撥ねあがらせてしまった。

白い星が飛び交っている目でそのほうを見ると、縄をつかんだ手が、尚もふりおろされるところだった。

皮膚を裂くような痛み、私の顔へ何やら炎熱の固まりみたいなのが、噴きあげてきた。そして、そのあとも、縄の鞭は悪魔のリズムに乗って私を打ちつづけた。

——だが、しかし。

被虐の喜びは、このような苦しみが全身に限なく行き届いて、そして麻痺していく寸前になってはじめて芽生えてくる。

熾烈な痛苦が加撃によって醸成されていき其処に始めて陰湿な、青白くひよろひよろした喜びの芽が生えるのだった……。この時点では、すでに痛苦は痛苦ともならない……。

全身に微動が起り、それは時折り烈しいけいれんと変わる。髪を、乱れたうえに乱れさせ、私はぐらぐらと頭をふる。

「あや子ッ！」

とつぜん顔をすくいあげられる。

薄っすらとあけた目に、Mさんの顔がいったいに映っていた。

「か、かんにんしてくれよ、なあ！」

私の頬に、頬がこすりついてきた。

「恍惚」が一瞬、途切れた。

「俺は、いまでも、お前を、愛しているんだよォ！」

途切れたまま、何かしら、冷え始めた。



「いまごろ……そんなこと、言っても知らないわ……」と、かすれた声で言った。

「あや子、お前は——俺を、責めるのか」

「な、なにをいうの、責めているのは貴方じゃないの」

「ちがう。ちがうんだよ！」

声がかくぐもっていた。泣き声みたいだ。

「こんな事をしていても、実際は、お前が俺を責めるんだよ！」

「……」

「お、俺は苦しくって、もう我慢出来ないんだよう！」

「……」

「な、助けてくれ。助けてくれよッ」

「意気地なしッ」

私は、髪をおどらせて、さげんでいた。

迂濶にも「演技」中にある自分を忘れかけていた。いや、自分の悦びを得るためには果

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に氏名を書かれずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメージ画も）毎に、住所氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用縦書きと共にお願い致します。

たしてしまわなければならぬ筈の「演技」が、離れて行こうとしているのに気がつかなかった。

「なによ、いままですぐに大層なことばかり並べていたくせに……」

「うう？」

「それでも、男なの！」

奇妙な図だった。うしろ手に縛られた上、机に俯伏せにされ鞭打たれた女が昂然と口走り、いままですぐに暴虐に猛りに猛っていた男が、その傍で悄然として、言うに事欠いて助けてくれなんて言ってる。

私の心の中に、ふと何かをみつめようとする目がひらいた。

——私は、この人とはやがて相寄るものと信じてこの部屋へ入った。しかし、入って立ったその位置はこの人に通じる道ではなかったのだ。それは時間の経過につれ近づきはしたが、けれど、所詮、触れ合うことが出来ない道であった。折角手を差しのべてすがりつこうとしたのにこの人は、いま私の横を、『あや子』というまぼろしを追って、擦れちがって行こうとしている……。

「そんな男だから……」

私は胸に固まってきたものをついに吐き出

そうとした。すると、

「な、なんだとッ！」

意外にも、突然Mさんの態度が変わった。がらりと変わって——それは思わずさけぶといった声だった。

「畜生ッ、俺がこんなに言っても、お前はわがろうとしなののか。お前こそ、男のところがわからない片端女だ！」

Mさんのその『眩惑』のなかで、その感情が一体どのように膨れ、もしくは変化していったのか私にはわからない。ただ——怒りが、みるみるこみあがっていくのがわかった。

「ようし、それならそれで、そのように取り扱ってやるさ！」

Mさんはまた狂ったように私を打ち据え、次には、恐くって身動きひとつ出来ない私をいいことに、鉄を使って服を裂きはじめた。

「さあ、これでお前と俺のあいだでたったひとつのものだった、新婚時代の夢を綺麗に消してやる……」

やがて。

熾烈な、私のすべてを貫いてしまうような痛撃が襲ってきた……。

（カット写真は筆者）



濡れにぞ濡れし



# マルキ・ド・サドの ジュスティヌ

美眉野芳

九月二十五日のフジテレビ、テレビナイトショーに鬼六先生の顔がみえたので驚いた。サングラスではなく、素顔のまま、鬼の会長という肩書きであった。

SMの話で、その道のオーソリティーの鬼六先生がひっぱりだされたわけであろう。

バックに、日本ヘラルド配給の「マルキ・ド・サドのジュスティヌ」がうつしだされたが、先日、誌友N氏の紹介で、試写を見させていただいた。

少人数の試写で、「ジュスティヌ」の対談をなさる、杉浦幸雄、岡部冬彦両画伯の顔もみられた。

テレビにうつされたシーンは、ジュスティヌ（ロミナ・パワー、タイロン・パワーと

リンダ・クリスチャンの娘である）が、妻殺しのブレザック伯爵（ホルスト・フランク）から、妻殺しの罪をきせられて、庭の木に縛りつけられ、乳房の間に殺人者の烙印（M）を焼ゴテでつけられるところである。

焼ゴテの烙印をおす若い男は、ブレザック伯爵のホモの相手で、とにかくホモらしい顔をしているので笑わせる。

ついでに書くと、殺されるブレザック公夫人が「鉄道員」「芽ばえ」のシルバ・マシナで、乗馬服の彼女はともサディスティックに見えるし、全裸の湯あみのシーンは、豊満な肉体が、とてもすばらしい。

もう一つのテレビのバックシーンは、映画では終り近くになるが、修道院でジュスティ

ヌが死を宣告されたところで、この修道院の教主アントンになるのが、「シェーン」のジャック・パランスで、この場面が一番ぴりっとしまるのも無理はない。

首枷やら、鎖で吊るされたり、針を刺されたり、鞭で打たれたり、快樂の哲学を実践する修道院の場面がクライマックスになる。

私は無神論者だし、あちらの神に対する観念がよくわからないのだが、こうでもしなければあちらの映倫が許可しないのか、ジュスティヌが生贄にされる瞬間、雷鳴轟き、風雨は荒れ狂い、たちまち修道院は崩れ去ってジュスティヌは天に救われるのである。

勸善懲惡がつまらないという方は、この場面では終り近くになるが、修道院でジュスティ



の餌食にされている女を誘うのだが、逃げないで、教主アントンの「快楽の極致は耐え忍ぶことである」という哲学を守って修道院に残る女が、Mを象徴していることがまんじっていたかどうかということでしょう。

この映画は、最後にジュスティヌが、恋人の画家レイモン（ハラルド・ライプニッツ）と結ばれる、ハッピーエンド映画です。

「ジュスティヌ。あるいは、美德の不幸」は、私は渋谷龍彦の訳でしか読んだことがないので、くわしいことは知らないが、誌友N氏の話だと、かなり原作に忠実な映画のことであった。

私としては、むしろ「ジュリエット物語、あるいは悪徳の巢」のほうを映画化してくれたほうが面白いと思っているのだが、「ジュスティヌ」のなかでも姉ジュリエット（マリア・ローム）のシーンは最高であった。

娼家で若い男の客を寝とられた腹いせに、レズの相手の女と共謀して、客と寝とった娼婦を殺す場面である。全裸になったジュリエットがかつては好きだった男を抱き、睦み合っている最中、レズの女が男の背中にナイフを突き通すのである。

もう一つ、二人して悪事を働き金をもうけ

たジュリエットは、この仲間のレズの相手を湖の水遊びの最中に、顔を水につけて殺してしまうのである。このシーンは見えてしまったので、少しカットされたそうである。

マリア・ロームも、シルバ・コシナにおとらない豊富な肉体の持ち主で、着物を脱ぎ捨て、一糸まとわぬ水遊びの殺人は、嘆息がでるほど美しかった。

映画の進行中、獄中のサド（クラウス・キンスキー）がたびたびでてきて、荘厳な音楽と共に、偉大な哲学小説を書く、苦悩にみちた顔を観客に見せることになっている。監督（ジェス・フランコ）がせいぜい気取ったところでしょう。

なんといっても、「ジュスティヌ」は、清純なロミナ・パワーのヌードをふんだんに見られるから、二時間という時間がすごく短く感じてしまう。

娼家で姉とわかれ、性悪な神父に騙されて無一文になったジュスティヌが、安宿（主人がエイキム・タミロフです）で、裸の上にダブダブの上衣一枚で、可愛いお尻をチラチラさせながら掃除をするシーンは、ほのかなお色気があって楽しい。

また、脱獄したジュスティヌが、森の中で

画家レイモンに助けられ、モデルになるうち恋し合い、全裸のモデルになるのも美しい。と書いてくると、あまりサディスティックな責めの話がでてこないが、この責めを期待して映画を観るとつまりませんよ。

レイモンの森の館が、まるで童話にでてくる小人のきのこのお城のように、この映画を流れているのは、ロマンチックなメルヘンの世界なのである。

「マルキ・ド・サドのジュスティヌ」は、ロマンチックなエロティシズムをたっぷり盛りこんだ娯楽大作です。

SMの映画を製作する場合、二通りあると思うのですよ。

ホモであれ、レズであり、サディズムであれ、殺人であれ、それをいかに美しく、明かしく、場合によってはコミックになってもいい、観客に不快な思いをいだかせないように夢のような、ロマンチックに、えがくことが一つ。

もう一つは、ホモやレズは気持の悪い印象をあたえるように、花をつくらない隠花植物のように、サディズムは、徹底的に残酷で淫虐で、ことに主演女優を半殺しにするほど責めつけて、逆吊り、水責め、海老責めと、



めのアラカルトの連続だけという、ショックで観客が眉をひそめかねない、かなり強烈にえがくものである。

どちらが面白いかは、各個人の好みだからどちらでもかまわない。残酷だ、グロだといわれるのは、後者のほうである。

そして、SMを知らない観客達が、えてして、異常性愛と呼ばれているSMに対して、変態という侮辱の代名詞のような言葉を吐くのは、まったく困ったものである。

誤解が誤解を生み、SMイコール変態という公式は、いつまでもついて廻るのである。

いかにSMの世界を美しくえがくか、勧善懲悪映画にしくなくても、立派な映画になると思う。

「ジュスティヌ」の宣伝プロジューサーの御好意で、杉浦、岡部両画伯の対談を、N氏と共に拝聴させて頂いた。(漫画サンデーの対談ですから、お読みになった方も多いでしょう)

私の守備範囲では、SM映画がエスカレーターしてくれば、つまるところスカトロロジーの世界、サドの「ソドムの百二十日」にはふんだんにでてきますね、そこまで映画化出来るかどうかというお話があったことである。

ワイセツより、ハイセツブツのほうが、映倫や税関はきびしいそうだから、スカトロロジーの世界はまだまだ道がけわしい。

アングラ作家の中には、女性のアヌスばかりに8ミリをまわして、アヌスが発想の根源だと、わかったようなわからないような御人がいるそうだけど、幼児時代、排尿排便による尿道性感、肛門性感を感じるのが、性欲のはじめなのだから、少しもおかしうはないのだが。

岡部画伯は、ヨーロッパ旅行のさい、サドの生家に立ち寄っていらっしやったとのことでした。

鬼六先生と前田武彦のSMの話は、奥歯に物が挟まったような、と前武さんがいったように、要領のえないものになってしまったのは、テレビというワクのせいで、こればかりは仕方のないことだろう。

鬼の会にしても説明不十分で、誤解されたりつまらないものである。

鬼六先生のあとで、「愛奴」の栗田勇がでて、マルキ・ド・サドの時代背景、フランス大革命の話をし、前武さんが、昭和元禄という今日の時代背景で、SとかMとかがエスカ

レートしてきたような話をしていたが、あまり関係がないのではないかと、チョッピリ思ったのである。

歴史の流れがあり、その時代に人間はさかれないものなのだろうし、社会という制約の中でしか、生きられない人間のことですから、あらゆる影響を受け易いし、環境に順応するのは本能で、どうしても時代に左右されてしまう。

アルクイユの乞食女鞭打事件やマルセイユのボンボン事件のスキヤンダルで、ヴァンセンヌとバスチーユに十二年間幽閉されたサドにとっては、たまたまフランス大革命が起ったと、天邪鬼に考えても面白いと思うのである。

サドの作品は獄中の空想の産物で、サディズムのみならず、肉体のすべてをSEXに結びつけてしまったわけでしょう。サディズムだけがやけに印象づけられ、サドといえばサディズムということになってしまったが、サディズムが人間の本质だからそうなったしまったのでしょう、きっと。

昭和元禄という、何もすることがなくなっただけの時代だから、SM小説や映画が登場しやすくなったでしょうが、昭和元禄



でなくても、サディズムやマゾヒズムといった、いわゆる異常性欲といったものは存在するもので、時代に関係なく人間の本能の一つとして、歴然と存在することだけは、間違いないように思うのである。

栗田勇も話をしてしたが、サディズムという言葉の使い方に混乱があり、Sadism というと、極度の加虐症、精神病的な残酷や淫虐の代名詞、殺人という風に考えてしまうのが自然である。

こんな眼で、S小説を書く鬼六先生を、テレビに出演していた女性方が見たとしたら、これは全く滑稽な話といわねばならない。

柔和で上品な鬼六先生のどこに、淫惨な殺人者の面影があるだろうか。思ったヤツのほうか、精神病院行きである。

鬼六先生も、テレビでSMという言葉を使っていたが、サディズムやマゾヒズムの頭文字をとってSMというのは、と解説しないといけない人が多いのも事実である。

このSMという言葉の乱用が、サディズムにしろ、マゾヒズムにしろ、言葉の使い方の混乱をまねいた原因なのだろうが、本誌にしろ、映画にしろ、遊びとしてSMという言葉を使っているだけなのである。

クラフト・エビングが、サドからサディズムと命名し、オーストリアのザッヘル・マゾッホが、女性に奴隷のように仕え、肉体的にも精神的にも傷つけられることをよろこびとした事実から、マゾヒズムと命名したのは有名である。

その命名を、快楽の一方法として、ちゃっかり頭文字のSMなり、サドマゾと気軽に呼んで使ったのが、そもそも、異常性欲、変態という言葉をもっと、混乱させてしまう原因になったのだと思う。

SMという言葉、Sadism, masochism, という言葉を使う時に、遊びと(快楽と)精神的な考え方と、はっきり区別して使うのが当然なのである。

ナイトショーは、白石教授の、精神病患者とホモの二つの写真を十数枚見せて、SMテストをしていたが、あれは、異常心理学や、精神医学の分野で、鬼六先生のSMの話とはまったく立場が違い、はっきり区別されなければならぬものであろう。(あのテストでSMのパーセンテージが判断されるとは思わない。心理学とはいえ、馬鹿げている)

たまたま、精神医学の本を読んでいたところ、簡単に、「異常性欲」の解説があったの

で書いてみる。

「これは、以前は精神病質の一種として論ぜられたが、今日では、正常者にも時々見られる一つの異常とされる。

これは、量的に性欲亢進と、性欲減退(冷感症、陰萎)があり、

質的な性欲倒錯には、対象の異常(同性愛、同性愛、自体愛)と、行為の異常(自慰、露出症、口腔性交、鶏姦、サディズム、マゾヒズム)があり

正常者にも少なからず見られる」

正常者にも時々見られる一つの異常、という風になんか苦しい表現の方法をとっているのが愉快である。

「フロイトによると、性欲は自己愛から同性愛を経て異性愛に達するという。異常性欲者は、この発達段階の途中で停止していると解される」

この定義は性心理学においても初歩の定義である。それ以上は残念ながらでない。

白石教授もテレビでこの話に触れ、ディレクターが時間がないといっているのに、ヴェデキントの「春のめざめ」の話をしていた。

ヴェンドラ(十四歳の少女)私ね、メルヒオル、まだ一度もぶたれたことがないのよ。



(中略)

メルヒオル キミが、お願いするというんなら……。

ヴェンドラ お願いしてよ、……お願いしてよ。

メルヒオル もうお願い出来ないようにしてやろうか。(ヴェンドラを打つ)

ヴェンドラ あら、なんともないわ。

メルヒオル そりゃそうだろう。着物の上からだもの。

ヴェンドラ それじゃ、足をぶって頂戴。

メルヒオル ヴェンドラ(前より強く打つ)

ヴェンドラ まるでなぜたようだわ。なぜたようだわ。

——という有名な箇所である。

解説の続き。

「いずれにしても、理想的な性的結合である異性との人格的並びに肉体的融合が障害されるとき、すなはち、この愛情に欲求不満があるときは、身体的に障害のある時に劣らず、いろいろな性欲異常が現われる可能性がある」これは一つの理由であって、すべての理由にはならない。

男性器と女性器の結合を常態性欲と呼び、これを理想的性的結合と呼ぶわけである。

そして、すべての異常性欲を、精神分析医は、性交の代償行為と断定している。

エリスは、*Sexual Symbolism* 性愛の象徴形式と呼んでいる。

誰も、SEXのひとつの方法とはいっていない。

性交だけがSEXであり、常態であり、あとは性交の代償行為としての異常性欲と断定しているのである。

この考え方から、一步も進歩していない。

性交だけがSEXではない。サディズムにしろ、マゾヒズムにしろ、ホモでも、レズでもいい、それぞれが独立したSEXであると何故断定出来ないのか。

私は精神医学者でもないし、心理学者でもないから、こんな乱暴なことをいえるのかもしれない。

異常性愛をあつかった専門書は、実例の羅列で終わることが多い。解説はしてあっても事実の解答にはなっていないのである。

人間のSEXは、むずかしい。

「愛奴」のイラストは宇野亜喜良である。テレビにうつされたが、薄気味悪いといった感覚の古いのがいた。

栗田勇は、宇野亜喜良のイラストで、「愛奴」が、よりファンタジックに、美しくやわらげられるようなことをいつていたように思う。

残酷なものでも残酷に見えないのである。

「マルキ・ド・サドのジュスティヌ」を観杉浦、岡部両画伯の対談を拝聴してから、N氏と新橋のバーで宣伝プロジューサーにござそうになり、S的なムードのママがいるからとN氏に新宿のバーを紹介された。

宇野亜喜良のイラストからぬけてたような美しい人である。シースールルックの黒のパンタロンで、黒いブラジャーがすけて見え、ウイスキーをあまり飲まないうちに酔ってしまった。

(二度目のときは、白いレースルで、白いパンタロンに、白いブラジャーがすけて見えた。カウンターに坐っているだけで、M的ムードにさそわれる)

「ママ、女装してみたいんだけど」

「いいわよ、Nちゃんなら似合うわ。いつがいい」

なんて、N氏はゴキゲンである。ママが穿いているパンティがほしいんだろう、ネ。

トイレに、さまざまな恰好で排泄中のあち



らの絵がはってあった。壺をまたいだのやら片足をあげて壺をあてがったのやら、白い陶器に坐ったのやら、なかなか面白い。

「ママ、壺になりましたか」

とは、いかなかった。

いかなかったかわりに、N氏と別れて帰宅しようと思ったが、アパートの近くまで来てUターンした。近所がトルコの宝庫だからネオンがまばゆくていけない。

久し振りであった。「ジュスティヌ」のせいである。

「いらっしやい」

と出迎えてくれた彼女を見たとき、

「おお、ブレザック伯爵夫人」

と叫んだね。

シルバ・コシナによく似ていたのである。

顔ではない。肉体がである。

個室に入り、やけにドアのガラス窓が大きいのが気に入らなかったが、さっさと服を脱いだ。

裸になり、タイルに四つ這いになった。酔っていると、考えてもいないことがしばしば起こるのである。

「伯爵夫人、乗馬のお時間です」

シルバ・コシナの乗馬服がちらついた。

「鞭で馬の尻など打って下さい」

「何いつているのよ。早くはいりなさいよ」

浴槽の湯かげんをみていた彼女は、ぱちんと背中を平手打ちした。

「ああ、打つなら、馬の尻を打って下さい」

「けとばしてやろうか」

「願ってもないことです」

「面白いひとね」

彼女のサンダルが尻を軽くけとばした。

「ほら、早くはいれ」

酔うと口がよくまわる。気分がいいから尚更であった。

「ナトリウム、カリウム、尿酸、リン酸、ア

ンモニア、尿素、クレアチニン」

「なあに、それ」

浴槽の前にかがみ、お湯を肩からかけたりしている彼女がきいた。

「なんだかわかる」

「試験でもあるの、明日」

「違うよ。尿の成分だよ」

「なあに」

「オシッコの成分」

「いやだ」

「ねえ、飲ませたことある」

「何を」

「オシッコをさ」

「きたならしい」

「きたなくなんてないです」

「洗ってあげるから早く出なさい」

彼女に背中を流してもらいながらも、口の回転は止まらない。

「尿はどこで出来るか知っている」

「じん臓でしょう」

「そうです。でもね、じん臓は尿の成分を生成する器官ではなく、血液中に含まれる老廃物や水分をこしとる一種のろ過装置なんですねえ」

「そうなの」

「老廃物を含んだじん動脈液は、糸球体の毛細血管になると、タンパク質や脂肪などの、分子の大きなものを除いて、ほとんどの成分が、老廃物とともにボーマンのうしろ過されて移る」

前にまわった彼女が、膝の間にかがみこんだ。くすぐったい。

「このろ過液は、ボーマンのうしろ細尿管に移り、曲りくねった細尿管を流れるが、その間に、まず水分が毛細血管に再吸収され、ブドウ糖、アミノ酸、ホルモン、ビタミンなどの有用な物質も再吸収される。また、無機塩



類も血中の濃度によって、選択的にここで吸収される」

一生懸命暗記したのだから、どうしても棒読みになる。彼女の指が変なところに石けんをぬりたくって、馬鹿丁寧に洗うものだからせつかくの暗記も途切れがちである。

「おわかりですか」

「それから」

彼女は聞いているのかいないのかよくわからない。妙に丁寧に洗っている。

「このようにして、ですねえ、ええと、始めは、しだいに水分と有用成分とを再吸収されて、濃い尿となり、尿素や尿酸など、吸収されない成分を濃縮してじん・うに集まり、ぼう・こうに排出される」

「頭を洗うから前に出さない」

「はい」

突き出したとたん、頭からお湯をぶっかけられる。かなり乱暴である。

「ですからね、結論をいいますと……」

「少しだまっていられっしやい。石けんが口に入るわよ」

「はい」

ごしごし髪をかきまわされて、上体が前後

にゆらいだ。

「しっかりしなさい。洗いづらいわよ」

「ごめんなさい」

ようやくタオルが頭にかかった。

「結論ですが……」

「いいわよ、もう」

全身にお湯をかけながら彼女はいった。

「尿はじん臓で、本来無菌の血をこしてつくるわけですから、それはまるで蒸留水のようにきれいなものなんです」

「はじめて聞いたわ」

「だからね……」

「だから、どうかしたの」

「だから、できればあなたの蒸留水が欲しいんだけど。ちようどのども乾いたことだし」

「コーラ、持って来てあげようか」

「違うんだよ。あなたでなくてはつまらない」

「でないもの」

「でたら、くれるの」

「そんなことしたことないわ」

「ビールをおごるよ」

「コーラしか売ってないわ」

「スナックで買ってくればいい」

「もったいないわ」

「じゃあ、ビール代をだそう」

「負けたわ」

と彼女が笑った。

「そんなに飲みたいものかしら」

「飲みたい、飲みたい」

浴槽のふちに腕をかけて、立ち上った彼女を見上げた。

「この頃、とてもうるさいのよ」

「よく営業停止になっているものね」

ブラジャーを取ろうか取るまいか、しばらく考えていたが、

「ホンの少しパンティを下げるだけで、いいでしょう」

「それでできるものなら、かまいませんよ」  
立ったまま、ごくわずか腰を落とし、ショ

ートパンツとパンティを下げた。

亀の子のように首をのばす。

「首までお湯につかりなさい」

「――」

驟雨が浴槽の湯に波を立てた。

ブレザック伯爵夫人が、ジュリエットが、そして、ジュスティヌが、眼をつぶった頭の中に浮かんでは消えた。

驟雨は、なかなかやまなかった。



# 男性ファッション

## についての一考察



松山壮吉

女性の男性化、女性の女性化は戦後のモードを一貫する底流であり、今後も相当の期間ますますその方向に進むというのが、ファッションの世界の常識となっている。

女性の服飾を男性のそれと区別する幾つかのポイントがある。ここ数年間の流行の歴史は一面から見れば、そのポイントを抵抗の少ないものから一つずつ男性の服飾の中に取り入れ、風俗化して来た歴史である。

鮮やかな色や柄の使用にしても、男性用ペンダントにしても、登場当時は、ずいぶん健全な市民を驚かしたものだ。現在では若い人の風俗としてすっかり定着し、漸次中年層にも影響を及ぼしている。丸山明宏はじめ一部の若い人達の突出した大胆な行動が開いた道

が急速に鋪装され人出の多い往来となっているのである。

近い例では、男性用コルセットの登場がある。発売当時は「女性化もここにきわまれり」と甚だ冷笑的な注目を受けたが、そういう批評には関係なく、若者から中年層に迄歓迎されて需要が伸びている。発売当時のものはごくソフトで物足りないものだったが、この夏新宿の小田急百貨店で購入した「男性用ガードル、ハードタイプ」は、当節の著しくソフト化した女性用コルセットより、むしろ強い位の緊縮力を持っている。売場にあるのは大部分ハードタイプだったから、一般利用者の好みもそのように進んで来たのだろう。前が開くようになっていてそのまま小用が足せる

のが男性用らしい所以である。男性のモードと女性のモードを隔てる壁を一つはっきり通過した例である。

今年の夏新しく登場したものにシースルーのロングソックスがある。色は黒または黒系の濃色で絹靴下の感じを持っている。小田急で購入したのは、ロングといっても臍の半ば位迄だが、三越のものは上端を二重に折って膝下迄、いっばいに伸ばして膝上迄の長さがある。履く時にくるくると巻上げていく方法も、皮膚にしっとり吸いついて来る感じも女性用ナイロンストッキングと共通のものがある。

在来マニアが、ひそかに女性用下着を身につけて楽しむ場合、その基礎は、つるつるのナイロンカラーパンティ、きつめのコルセット、コルセットから吊るすストッキングであり、ナイロンストッキングの上から紳士用ソックスを履き、ズボンをはいて人目を避けたものである。

現在ではピッタリした感覚を求めて女性用パンティを愛用するのは、お洒落な若い人の常識のようになったし、コルセットもストッキングも男性用のものを着用出来る。ピンクやシースルーのシャツも普通のものになり、少し大胆な若い人はフリルつきのブラウスやパンタロンを楽しむ事も出来る。マニアの世



界の感覚は急速に一般風俗の中に消化されつつある。

サド、マゾ、フェチの感覚、特にマゾとフェチの感覚は本質的に現代のかつ都会的な特性を持つもので、現代文化を象徴する一面を持ち、常に時流の一、二歩先を行き、それ故に、俗衆から白眼視される宿命を持つものだが、そんな事にはへこたれず積極的に風俗をリードしていく自信を堅持してよいようだ。

男性と女性の壁が薄くなり、文字通りモノセックス、ユニセックスの風俗となる事は、女装の喜びを少なからず減殺するものだが、フェチとして白眼視された感覚が「健全な」常識の世界を次第に開いていく事にはそれだけの喜びも存在する。

ユニセックス化、特に男性の女性化の方向においてこれからどのように進んで行くか、ここに若干の予測を立てると共に、積極的にその方向に進めて行くための若干のアイデアをあげてみたい。

### パンティ

三谷啓恵氏の発表したフリルパンティは急速な一般化には少し難がありそうだ。現在の女性用パンティをそのままユニセックスのものという観念を持つ方が早道である。その方法としては、女性用パンティのうち飾りなし

のシンプルな無地のものを選び、男性用下着売場の中にさりげなく並べておくのがよい。

腰の辺りに刺繍でも *man* という字をいれておけば「ほら、この通り男性用なんだ」という事で、無理解な家族に対しても公然と弁明着用出来るわけである。色は各色出してみてもどれに人気があるか試してみたらよい。パンティに限らず、特殊な店におくのではなく普通のデパートの売場あたりにさりげなく置くことが普及の要論であろう。いずれはパンティにおいて女性用男性用の区別はなくなると思うのだが、その傾向を先取りする事で大いにシェアを伸ばすメーカーと、旧式の男性用下着に拘って倒産するメーカーとが出て来るのが自然である。

### コルセット

女性用にはハイウエストとロングガードルがある。ハイウエストは腹部全体のでっぱりをカバーするので、お洒落な中年向きとして男性向きにも必要。ロングガードルはスラックスの際に脚の線をきれいにするためというので普及しているが、男性は常時スラックスなのだから、ロングガードルの必要性はより大きい。短いものとロングと並べておけば、気の弱い男性は、つい遠慮して短いものを買う事もあるから、短いものは製造を中止し

て男性用ガードルとは、すべてロングである位に徹底してよい。価格が高くなるだけメーカーとしては利益である。ハイウエストとロングガードルを結合したものは、女性のオーリンワンに相当するお洒落用である。ブラジャーは必要ないのでオーリンワンが成立しないのだが、全身を細身にすっきりさせるための下着として、胸のふくらみなしの男性用オーリンワンを試作してみれば、お洒落な若い人には案外利用されるかも知れない。何れの型にもストッキング吊りは必要である。

### ロングソックス

女性用同様太腿までの長さのフルファッション・シームレスとし、ガードルから吊る。現在の膝下迄というのは「ずり落ちないために少し伸ばしました」という、遠慮した形である。女性用が生活水準の向上とともにハイフサイズが姿を消し、ロングからさらにパンティ、ストッキング迄いったように、何れはそこまでいく筈のものである。ショートパンツは夏だけではなく暖房の徹底と共に冬期にも屋内で使用されるようになるし、ベッドルームにおける美観も考えねばならない。むくつけき毛氈も黒のシースルーのロングソックスを通すと優雅な翳りを持ってくるし、太腿



迄カバーすれば一段と肉感的になる。堀口大  
学が好んで歌った黒の絹靴下をつけたヌード  
の美は男性の場合にも適用出来る。ヘラクレ  
ス型の男性ヌードより女性ヌードの美と同一  
基準に立った男性ヌードの方が、女受けの良  
い事は、いう迄もない。ストッキングの色は  
当分黒、または黒系の濃色、ただし次の段階  
では脱毛剤との組合せで、皮膚色や白の普及  
に乗出すのが筋である。既にハイティーンの  
中には毛髭に心を砕く傾向もあり、普及は案  
外、早いと思う。

## ブラウス

シャツブラウスは既にユニセックス化して  
いる。首の後のホックも若干のフリルも既に  
若い人向きになっている。今後の大きな目標  
の一つは、前ボタンのおとなしいシャツブラ  
ウスがサライーマンのホワイトシャツの領域  
に入ることと、後開きで前面や袖口にフリル  
やレースや刺繍で飾りをつけた本格的ブラウ  
スが、男性のリゾートウェアとして常識化す  
ることである。そのためにはやはり奇抜な形  
よりも、ごくおとなしい、昔の小学校の女先  
生のような「清楚な」感じをねらって行く方  
がよいだろう。後ボタンよりも、後の上半を  
ファスナーとしてかぶる形の方が、普及し易  
いと思う。

## コート、カーディガン、ジャケット類

この分野には本質的な形式差はないので、  
女性用売場の中から適当なものを、女性用L  
寸の記号を男性用M寸につけかえて、ヤング  
マンコーナーに移動し、逆に男性用の一部を  
女性用売場に移動すればよい。選択宜しきを  
得ればそれぞれ売上げ増になる筈である。

ピーコック革命のキャンペーンが行なわれ  
ていた頃、新しいレーンコートを求めに二、  
三のデパートを訪れたが、花森安治の所謂ド  
ブネズミ色の紳士用と、花が咲いたような婦  
人用との旧態依然たる対照が眼についた。若  
い人のシャツとして真紅もピンクも普及して  
いるのだから、婦人用売場の花束の中から、  
ごく明るい派手なものを抜き出して紳士用売  
場に持込んでも、それなりの調和は出現する  
のである。

秋のレザーファッションにしても、はじめ  
からユニセックスとしてデザインされたもの  
より、女性用として作られたものの方が、良  
いものが多かったようだ。今の処、ユニセッ  
クス商品というのは多少実験的色彩があつて  
しつかりした商品になっていないためかと思  
われる。

## スカート、ワンピース類

ズボンとスカートは、長年男性、女性の象  
徴であったが、女権の伸長に伴い、女性がズ  
ボンの分野に進出する形でユニセックス化が  
進んでいる。デザイナーは何か女性的特質  
を出そうという目的で、巾広のパンタロンや  
細身のスラックスを工夫するのだが、實際に  
はお洒落着のパンタロンは持たなくても、日  
常着のシンプルなスラックスを持っている女  
性が多い。女性用は横ときまっていたファス  
ナーも男性同様前面に移動したし、結局女性  
も男性と同型のズボンをはきこなす事になり  
そうだ。

これに反して男性のスカート利用は遅々と  
して進まない。ズボンの特徴は機能性、スカ  
ートの特徴は夏の涼しさと開放性、つまりリ  
ラックス性という事になるうか。是迄の利用  
度の相違は、主として男女とも男性を優越せ  
る性と認めていたため、女性は優越せる性の  
しるしであるズボンに憧れ、男性はスカート  
に恥辱を感じた所に原因があるう。従って対  
等意識が感覚的にも定着して来た現代におい  
ては、スカートの持つリラックス性が認識さ  
れてスカートもユニセックスのものとなって  
いく筈である。(※往年の本誌に夜光島など  
女にもズボンをはかせよという趣旨の名作が  
連載された頃がなつかしく思われる)

大衆から半歩先を歩む者は大衆をリード出



来るし、企業家なら巨利を博する事も出来よう。しかし大衆から一步二歩進んだ者は石もて打たれるのであり、企業家なら倒産の憂目をも見るであろう。時代感覚の先端を行くと自負する私達フェチズムの徒としても、大衆社会に生計を立てている以上、どの程度迄オープンな行動が可能か常に慎重に測定せざるを得ないのだ。

今迄に一見ショートパンツ風のキュロットが商品化されているが、まだ半歩以上の距離があったと見えて、あまり成功していない。湯上りに腰に巻く男性用巻きスカート(千円)受験生の冬の夜の保温用としてのロングの巻きスカート(千五百円)は順調に伸びているが、これはまだ本当のスカートの感覚ではないので、きわめて些かな、橋頭堡といわねばならぬ。ここはストリートに攻撃するよりも比較的抵抗の少ないワンピースによる感覚の慣れを通るべきであろう。

大胆な若い人は別として一般市民としては社会的慣習に多分に制約されるのだが、最も非公開のものとしてのパジャマには、腹部を圧迫しないリラックス性が重視されて、ワンピース式が非常に伸びている。腹の出た中年紳士に美容体操が普及してきたので、美容体操用全身タイツ(二千八百円、丸首シャツと運動用タイツを組み合わせたようなもの)も売

れている。若者はすっかりした体の線を作ると下着として使うわけである。

今年は寝室着から一步前進して、ニットやナイロンの派手なワンピース式ホームウェアが普及しかかっている。アメリカのデザインで原色の無地のスリムなライン、いわば男性用ネグリジェといった感じのもの(二千五百円)に人気があるという。この上にガウンを羽織れば、家庭内で一寸した訪客に応待してもおかしくない。ガウンは色も柄もずいぶん派手なものもあるし、ファミリーセットと名付けて、夫、妻、子供同柄のものもある。生地は厚手のキルティングがすたれて薄手のウールが中心となった。少し値が張るが、シルックや絹もある。これがこの次にはリゾートウェアとして戸外に出て行くのは自然の道理だし、デザインも多様化して、生地のみならずデザインも女性の日常者とペアのワンピースが、実用化されるのも当然予想される事である。

来年は男性用のガウン、ホームウェア、ナイトウェアがもっと明るく、もっと多様化するとはどの業者でも考えている。私が企業家なら、そのような大勢に沿った品物で、事業としての安定性を確保した上で、海浜用だけではないある程度の日常性を持った、戸外用のワンピースウェアに進出してみるだろう。

もう「先駆者の利益」を収め得る射程距離内に入ったと思うのだ。

このようにしてペアのワンピースがオープン化して来るのと併行して、徐々にホームウェアとしてスカートが登場することになる。それをはじめは冬の夜ガウンの下につけるペアのロングスカート位の遠慮深い形で登場して来るだろう。

スカートがユニセックス化すれば、在来のスカートの持つ「女性そのもの」といった魅力は減殺されるが、多年女性美の表現のために洗練され尽したあらゆるデザイン、あらゆるデテールが、男性にも公然と楽しめるのだから、ずいぶん楽しいことではないか。変化の早い今の時代である。比較的短い期間に、その大きな変化が進行していくのだから、常に大衆より半歩進んで、社会の許容性ぎりぎりの所で、安全に冒険感覚を楽しむ事も出来るし、時には人目を忍んで二三歩進んだ二重生活を楽しむ事も出来る。感覚的には幸福な時代に生まれあわせたといわねばなるまい。

ファッションが、完全にユニセックス化すれば、これでは面白くないと変化を求めて、動・反動の法則で、すぐく男っぽい、質実剛健、剛毅朴訥、勇猛果敢な気風と服装との時代に向かう事が考えられる。だがそれはずっと先のこと。ユニセックス化の途中での逆行



は表面上のさざ波にすぎないと考えていい。もっとも、革命が成功して老若男女皆工人服、工人帽の時代になれば、また話は別である。

### ツーピース

女性用品の側では、ツーピースの上衣の仕立を男性の背広上衣の仕立に近づける傾向があるが、男性の背広仕立を女性のツーピースの上衣に一致させる方が筋だろう。経済生長は機能性よりも優美さを重視させるゆとりを与えるからである。

### アクセサリー

アクセサリーは若い人の世界ではとうにユニセックス化している。今度男性用ヘアーバンドが商品化されたし、残っているのはイヤリング位であろう。しかし一応ユニセックス化しているとはいえ、男性における普及度はまだ低いので、男性用においては女性用を目標とする。女性用においてはより感覚的・官能的で、一寸目先の変わったものを開発していくのが、これからの方法である。

### 化粧品

男性用化粧品は、高度成長中の大産業であり、卒業前の男子高校生に対する美容講習会でもリップクリーム辺まで指導しているが、

本格的化粧としては、口紅、マニキュア、ペデキュアの普及を指標としたい。

昔「葉隠れ」の山本常朝は、「武士は常に紅粉を所持し、気分悪しく、顔色すぐれぬ時はひそかに紅を注せ、青ざめた顔で大事に当っては臆病者と思われろ」と説いている。今、男性用口紅を愛用する某君は「徹夜マージャンで疲れた朝、悪い顔色でお客に接するのは営業マンとして不心得である」といっている。某君が「葉隠れ武士」の精神を持っているとは思わないが、社会の偏見に対して化粧を正当化する理論は基本的に妥当である。第一次大戦前のヨーロッパ社交界で、マニキュア、ペデキュアが紳士の嗜みとして認められていたのも参考になる事である。日本でも平家の公達の話もある。平和な時代の男性の化粧が、女性と同様な線迄行くのは自然の理であり、また大部分の化粧品店の店員が、男性客の相談に対して、夏ならローション、冬なら乳液一種類をつきつけてすませているのは、営業側の甚しい教育不足である。社員教育、小売店教育を徹底すれば、男性用化粧品の売上げが女性用を凌駕する時期は目前にある。

ファッションを動かす力は何時の時代にもセックスアップルであり、セックスアップ

ールの中には、サディズム、マゾヒズム、フェチズムの感覚が含まれている。ホブルスカートの時代はその感覚が、もっぱら男性S、女性Mの角度で、ファッションをリードした時代である。そして現在もまた、SM下の感覚が、風俗を強くアクセントづけている時代とみられる。女装フェチズムのみではない。多年マゾヒストの夢であったロングブーツの流行には、男性M、女性Sのチェーンアクセサリーの流行には女性Mの、それぞれ潜在感覚の働きが看取される。

大衆が無意識裡に支配されている力を、明確に意識的に把握している者が、大衆をリードするのは自明の理である。本誌は地味な存在ではあるが、世上流行の映画、演劇、小説に多くのヒントを与え、実質的な指導力を示している。ファッションの世界にしても然り素肌に革を着るファッションは、ドモンジョのレーサースタイルを契機に、あつという間にひそやかな活字の中から公認されたお洒落にまで発展したのである。風俗の追いつき方が早いので、常にもう一步先を示す灯台としての風俗誌の役目もたいへんである。同好諸氏の優れたアイデアが絶えず本誌に結集されて、意欲的なデザイナーも企業家も、本誌を購読せねば立ち遅れることを自覚させたいものである。







静子夫人は、その翳った美しい瞳の中にしっとり濡れ光ったものを浮かべながら、春太郎を見下ろすのだ。

限界に到達し、そうした状態になる事了解を求める静子夫人の羞かしげな顔を春太郎は魂を揺さぶられるような気分で見上げる。

「いいわよ、奥様。さ、遠慮なさらず」

「——うん、嫌々、そんなにはっきりごらんにならないで」

静子夫人は、甘くすねるように身悶えして見せるものの、その一方、雪を溶かしたように白い、優美な太腿を押し開いて、むしろ、誇示しようとさえしているのだ。

そうした夫人の大胆さに、春太郎は舌を巻き、また、つくづく楽しくなるのである。

夫人の体内に眠っていたマゾの血が遂に奥底から湧出し、被虐の悦びにも一つのアクセントが生じ始めた事を、春太郎は嬉しく思うのだ。

「——ね、春太郎さん。何か、淫らな事をおっしゃって。ねえっ」

静子夫人は、火柱のように全身を燃え立たせ、頂上寸前を徘徊し始めると、その快楽を少しでも持続させようと願うのか、キリキリ歯ぎしりして、踏みこたえようとするのだっ

た。

「随分と賑やかね」

襖が開いて、千代が葉子と和子を連れ、再び顔をのぞかせた。

「珍しい事もあるものね。今日は奥様がごくハッスルして下さるのよ」

夏次郎が千代の方を見て笑って見せる。

「へへえ」

千代は愉快そうに静子夫人の方へ眼を向ける。

豊満な乳房の上下へ数本の麻縄を巻きつかせ、心持、肢を左右に割って立つ静子夫人は官能の高ぶりに優美な肩を波打たせて薄く眼を閉ざしているのだ。

「楽しまなきゃ損だという事がわかったようね。そういう心掛けになるのを私達は待っていたのよ」

千代はそう云って、「それなら、こっちも大いに奥様を楽しませてあげましょうよ」と笑い、夏次郎に鬼源の所へ行って、アメリカ製の貴具を借り受けてくるように命じたのだった。

「珠江夫人に使う事になってるんだけど、その前に一寸奥様に実験させて頂くわ。感想を聞かせて欲しいのよ」

千代はそう云って、クスクス含み笑いするのだった。

脂汗を浮かべて、キラキラ輝く夫人の緊縛された優美の裸身から春太郎の貴具が静かに取られる。夫人は、神秘へのベールを開き、露わに一切を露出させていたが、それに対する羞恥も動揺もさして示さなかった。

千代は、眼に淫靡な笑みを浮かべ、ハンカチで口元を押さえながら、そっと夫人の背後に回って行く。そして、たくましいばかりに盛り上った夫人の双臀に手をかけ、ぐいと揺さぶった千代は、

「まあ、嫌な感じ」

と、可愛らしく秘められた個所がふつくと開花しているのを見て、頓狂な声をあげるのだった。

静子夫人は、濡れ光った瞳を薄く開いて、小さく唇を動かせる。

「——よく御覧になって、千代さん。何かおっしゃりたい事があったら、おっしゃって頂戴」

静子夫人は、繊細な美しい頬をそよがせながら艶っぽい口調だが、ふと挑戦するような語気を含めて云うのだった。

「——品物が隠せるか隠せないか、お試しに



なったら如何がなの。千代さん」

「そうね。一寸、試させて頂こうかしら」

千代は、静子夫人の挑戦に応じるように冷ややかな口調で云うと、葉子に隣の部屋から宝石箱を持って来させる。

千代は、箱を開け、まず数百万はすると思われるような大きなダイヤモンドを取り出した。

「この宝石の一つ一つには奥様の想い出がある筈だわ。ね、このダイヤモンドには、どういう想い出があるの。おっしゃってよ、奥様」

千代は、ダイヤモンドを夫人の高貴な鼻先へ近づけ、楽しそうに云うのだ。

静子夫人は、その比類のない美しい顔をそっと上げ、暗いもの哀しげな色を湛えた瞳をダイヤモンドに注ぎかけていたが、やがてゆっくりとその眼を閉じながら

「そのダイヤモンドは、遠山が結婚式の夜、私にプレゼントしてくれたものですわ」

「まあ、そうなの。じゃ、とりわけ、想い出があるってわけね」

千代は意地悪げな微笑を口元に浮かべながら、そのダイヤモンドを春太郎に手渡すのだ。

「じゃ、奥様にとっては想い出の一番深いこのダイヤモンドから始めて頂こうかしら」

いいわよ、と春太郎は、夫人の背後に回って腰をかがめ、量感のある見事な双臀を割り始めた。

その一瞬、夫人は、美しい象牙色の頬をぱっと火のように上気させ、顔を横へねじ曲げるようにしながら、ブルブル全身を慄わせるのだった。

「駄目よ奥様。そんなに身体を固くしちゃ、仕事やり難いじゃないの」

春太郎は、わなわな震える夫人のたくましい双臀を片手で抱きながら――。

「もう少しよ、奥様。駄目、駄目、そんなに羞ずかしがっちゃ」

世にも悲しげな横顔を見せ、遂に慄える頬に大粒の涙をぽたぽた流し始めた静子夫人であったが、調教され尽したそれは、柔らかい刺戟を加えられる事によって忽ち濡れた真綿のような甘美な吸引力を発揮し始めたのである。

「ホホホ、まあ、奥様ったら、すばらしい投術を体得されたのね。高価なダイヤモンドを見事に身体へ隠しちまったわ」

千代は、葉子や和枝の顔を見ながら吹き出すのだった。

「さて、次は、このエメラルドよ」

これには、どんな想い出があるの、と千代は、再び、静子夫人の柔媚な頬を指で突くのだ。

「――そ、それは、私がパリに留学していた頃――」

セーヌ河に近い宝石商で買い求めたものである事をたどたどしく夫人が口にすると、千代は満足げにうなずいて、それを春太郎の手で夫人の体内に隠匿させようとするのだ。

「ああ、もう、これ以上は無理よ」

三個から四個目に至ると、夫人は激痛を訴えて、激しく双臀をくねらせた。

「あと、一個じゃないの。がんばらなきゃ駄目よ、奥様」

千代は、ガラガラした眼を夫人の臀部に注ぎながら鋭い語気で云った。

むずかるような腰部の動きが、段々と荒々しく狂おしい動きとなり、甘い繊細なすすり泣きの声が獣じみたうめきに変わったが、その頃には五つめの宝石が完全に夫人の体内に隠蔽されてしまっていた。

「まあ」

千代は感極まった声を出した。

「とうとうこのむつかしい技術まで覚えてくれたのね。よく辛抱してくれたわ、奥様」



千代は、ホクホクした面持で、見事に五個の宝石を隠した夫人の量感のある優美な双脣を凝視するのだった。

静子夫人は、顔を横へねじるように伏せてしばらくの間、小さく嗚咽にむせんでいたが涙を幾筋も浮かべた美しい顔を静かに上へあげると

「静子の体は、とうとうこんな事まで出来るようになってしまったのね」

と哀しげな声を出し、再び、さも羞かしげに顔を伏せ、シクシクとすすり上げるのだ。

夫人の体から、春太郎は丁寧に宝石を一つ一つ取り出し始める。それは、かなりの根気を要する仕事であった。

ようやく最後のダイヤをピンセットなど使って剔出した春太郎は、どんなもんです、と云わんばかりの得意げな表情で千代の顔を見る。

「お約束通り、この奥様に中国の秘法を教えこみましたわよ、千代夫人」

と、春太郎は報酬の宝石を催促しているのだ。

「じゃ、こっちも約束通り、エメラルドを呈するわ。御苦労だったわね」

五十万以上はするわよ、と千代は、勿体つ

けながらエメラルドを春太郎に渡し、つづいて和枝や葉子にも、翡翠やオパールなどを分配するのだ。

「まあ、私達にまで、こんな高価なものを戴いていいの」

和枝と葉子は、宝石を手にとると眼を輝かせて云った。

「ホホホ、元はといえば、その宝石はみんなこの奥様の持物じゃない。お礼を云うならこの奥様におっしゃってよ」

千代は子供のようにはしゃぎ廻っている。

静子夫人の肉体が、数個の宝石を隠蔽する事が出来るまで変貌し、いよいよ特殊能力を発揮する秘密クラブの女に改良されてしまった事が、嬉しくて仕様がななのだ。

「ここまで努力をつんだ奥様にも何か御褒美を上げなきゃ」

千代がそう云った時、竹籬の密室へ出かけていた夏次郎がアメリカ製の貴具を手にして戻って来る。

千代はニヤリとして、

「何よりもいいものがあるわ。ね、奥様」

千代は夏次郎の手からそれを面白そうに受取って、夫人の気品のある鼻先へ近寄せる。

「これは、鬼源さんの話によると、とても面

白いものだそうじゃないの。ねえ、夏次郎さん、一寸説明してみてもよ」

夏次郎が貴具の柄のボタンを外して、ここへぬるま湯なんかを注ぎこむのだと説明すると、千代も、キャツキャツと笑いこけるのだった。

静子夫人は、千代達のそんな騒ぎをまるで無視したような涙に潤んだ空虚な瞳を、ぼんやり前方へ向けている。

「鬼源さんも云ってましたわ。これをこの奥様に使ってみて、どんな具合か、その感想をはっきり奥様の口から聞き出してくれて」

夏次郎がそう云うと、千代は何度もうなずきながら、夫人の乳白色のふくよかな肩をそれで突くのだった。

「それじゃ奥様、ここにいるシスターボーイさん達とセックスに入る前、私達女三人がこのお道具の性能を試させて頂きますわ。いいですね」

立ったままより、寝かせた方が仕事はやりいいわよ、と葉子も調子づいて云うので、夫人を立位にして吊るしている鎖を春太郎と夏次郎は解き始めた。

縄尻から鎖が外れると夫人は、すっと気が抜けたようにその場に立膝して身をすくませ



たが、すぐに春太郎と夏次郎は手に唾して、ゆるんだ夫人の縄目をひきしぼり、がっちりと後手縛りにする。

「さ、奥様、こちらへ」

千代が指さした所は、昨夜までシスターボーイ二人の手で骨も肉もバラバラになるばかりの調教をほどこされた場所で、千代達は枕をその時と同じくマットの中央に配置し、天井から垂れ下がる二つの鎖をたぐり寄せているのだったが、それを眼にした夫人は、動揺や狼狽は示さなかった。

じっとそれ見つめる夫人の美しい二つの瞳は、ふと情欲に濡れ輝くかのように、ねっとりと潤みさえ持っているのだ。

以前は、同性の者、とりわけ、千代の眼の前でなぶり抜かれる事に非常な恐怖と屈辱を感じた静子夫人であったが、今は、そんな事にもさして抵抗を感じなくなり、いや、そうした屈辱感がつのればつの程、被虐性の倒錯した快感というものを、一層感じるのである。もっといじめられたい、もっと傷つけられたいというマゾヒスティックな願望は徹底的な加虐行為を加えようとする千代達に対する一種の反撥につながるものだ。

静子夫人は、夏次郎と春太郎にスベスベし

たミルク色の背を押されてマットの上へ足を乗せると、強制されるまでもなく、枕の上へ腰を当て、そのまま静かに体を仰臥させて行く。

そんな夫人を見た千代は真底から嬉しそうに微笑を作り、すぐに夫人の優美な肢をからめ取って、その足首を鎖につながうとしたが「——うん、嫌、もっと、もっと開かせて頂戴」

夫人は、甘く鼻を鳴らすようにし、身を振って見せるのだ。

千代は、そんな夫人をしみじみ頼もしく思いつながら、鎖を再びジャラジャラたぐって夫人の肢を一層割っていく。

「随分と心掛けがよくなったわね。その御褒美に、これから女三人で、すばらしい同時責めにかけてあげるわ。ひょっとすると、これが私達の奥様に対する最後のサービスかも知れないものね」

数日後には、身を持ちくずしたアルコール中毒の元産婦人科医が来て、静子夫人に人工受精をほどこす事になっていると千代は告げるのだった。

「赤ちゃんがお腹に出来たとすると、少しは体に気をつけなきゃならないし、こうした遊

びが出来るのも今のうちだと思うのよ」

千代はそう云うと、大きく割って直角に吊り上った夫人のミルク色のむっちりした太腿から下肢に至るまでを、惚れ惚れするような眼つきで眺めて

「ほんとに奥様の肢って綺麗ね、赤ちゃんを生ませるのは、一寸可哀そうな気もするわ」

静子夫人は、優美な光沢を持つ繊細な頬をそよがせながら、濡れた瞳でぼんやり天井を見上げていたのだ。

腰部と上へ跳ね上った太腿のつけ根あたりの悩ましいばかりに柔らかな翳りを凝視している千代に気づいた静子夫人は、唇を慄わせるように開いた。

「——ね、千代さん。もう何もおっしゃらず私をいじめて。お願い」

誰の種とも知れぬ子供が自分の体内に宿るなど、想像するだけで身が凍りつく程の恐怖をおぼえる。その恐怖を忘れるため、夫人は徹底した責めを求めるのだった。

「フッフ、わかったわ。じゃ、しばらくあんた達、奥様のお相手をしてあげて——」

千代に云われて、春太郎と夏次郎が夫人の左右から添寝するように体を横たえる。

千代と和枝、葉子の三人は、何か子供が悪



戯でもするような仕草で、ミルクの入った鍋を電熱器の上へ置くのだった。

「ね、ミルクなんか沸かしてどうすんの」

と和枝に聞かれて千代は金齒を見せて笑いながら「わかんないの。アメリカ製の中へ注ぎこむのよ。奥様に、よりよい刺戟を与えるためにね」

一方、静子夫人は、左右に添寝する二人の男の手で麻縄を上下へ数本からませた豊満な乳房を柔らかく愛撫されている。

「さっきは中途半端にしちまってごめんね。今度は、目的地まで完全にたどり着かせてあげるわ」

ミルク色にねっとりかすんだような頸筋か

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりませんの故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

ら肩、そして豊かな二つの隆起の頂でかすかにおののいている薄紅い蕾に熱い接吻を注ぎこむ春太郎と夏次郎は、次に夫人の雪のように滑らかな腹部から、大胆に割って、すらりと上に伸びた優美でしなやかな下肢よりむっちりした太腿に至るまで、微妙な刺戟を加えつつ接吻の雨を降らしまくるのだった。

夫人の身内の官能は再び急速な勢いで燃え上り始める。

激しい昂りに夫人は、ゆさゆさと黒髪を揺さぶって甘い身悶えをくり返し、溶けて流れ出そうな潤んだ眼を薄く開きながら

「途中で止めるような事はなさらないでね、お願い」

と、うめくように云い、春太郎の手がそれを……始めると、一きわ激しい涕泣を口から洩らしつつ、

「うんと淫らな事をなさって。お願い、静子に死ぬ程、羞しい思いをさせて下さいまし」

と静子夫人は、枕の上の双臀をゆさゆさもどかしげに揺さぶりながら口に出して云うのであった。

夏次郎は、むっくり上体を起こして夫人の顔へ近づくと、片手で夫人の頸を抱えながらマットの下から数枚の写真を取り出して、夫

人の眼に見せつける。

「外国の写真よ。どう、奥様、面白いでしょう」

それは、一人の白人の女を黒人二人が犯している奇妙な代物だった。

「このあと、始める奥様と私達二人のセックスは、こんな風にしてみようかと思うの。いいでしょ」

情感に潤んだ瞳で、その写真に見入る夫人の横顔は、ぽーと桜色に上気し、思ひなしか艶っぽくなったようだ。

「千代夫人にほめられるような、うんと濃厚なポーズを取り合ひましょうよ、奥様」

その返事の代りに夫人は、近づいて来た夏次郎の口へ激しい勢いでびったり唇を押しつけむさぼるように夏次郎の舌を吸い出したのである。

そんな静子夫人の狂態を面白そうに横眼で眺めながら、たっぷりと道具にミルクを注ぎこんだ千代は、

「さて、支度は出来たわ、奥様」と、春太郎と交代して腰をすえつけた。

—(未完)—



## ゴム衣裳の被虐

## 雨の昼下り



菅原敏夫

## ○黄色いゴムマント

折から接近中の台風の影響を受け、横殴りの激しい風雨に打たれながら、なぜか京子は恥じらうように堅く身を閉じ校門の陰に佇んでいるが、校門から出て来る学童に気付き弾かれたように走り寄るのだった。そして、テ

ラテラと異様に光り輝く黄色いゴムマントをはためかせ、学童を誘導して横断歩道を行き来している京子。

真深にフードを被り、サングラスをかけ、爪先を覆い隠し引きずるほど裾の長い、異様な京子のゴムマントスタイルに、初めのうちは驚きと好奇の目で見守る学童達であったが

やがて京子を、女と甘く見たのか『黄金マント』だの、なんだのと囁きたて、困らせるのだが、そんなワンパク共に、にっこり微笑みかける京子だった。

それでもワンパク共は攻撃の手を緩めず、ぐると京子を取巻き、手にしたカサの柄でゴムマントの裾をめくり上げるのだった。

……やがて校門を後に、ラッシュの国道を自転車に跨り、帰途につく京子。その脇を、頭から泥しぶきを浴せかけ疾走する大型トラックの風圧でゴムマントがまくれあがり、転倒しそうになりながら川沿いの脇道に逸れようと必死にペダルを踏むのだった。

全ての責任から解放された安心感の為か、横殴りの強風に煽られた瞬間、ヌカルミにハンドルを取られ、アッと云う間に自転車諸共土手を転がり、その勢いで頭からドブ川の中に滑り落ちる京子。

一瞬にして目の前にドブ泥が迫り、気が付いた時には、したたかに泥水を飲まされていた。幸いドブ川は浅く、泥の中をもがきながら腰迄ガッポリつかった泥をかき分け、川岸に這いあがるのだった。

肩で大きく息をする度に、ベットリと異臭を放つドブ泥のへばり付いたドロマントが波



うち、そのかたわらには、無残にもハンドルがねじ曲り、車輪のつぶれた自転車が転がっていた。

京子は、この醜態を誰かに見られてはいないかと、羞恥の余り恐怖に打ち震え、ふらふらと起きあがるのだが、ドブ泥の中にサングラスを落としたことに気付き、あわててドブ泥の中に取り返すのだった。

腰迄ガッポリとつかり、身体を折り曲げ、ドブ泥の中を手探りで探し廻る京子。頭のてっぺんから全身ドブ泥にまみれ、その顔は悲痛な表情に暮れていた。

やがて、探し疲れた京子は、あきらめ切れない表情でドブ泥の中から這いあがり、ガツクリと肩を落とし、その場に坐り込むのだった。自転車がこわれたことや、ドブ泥にはまり込んだことよりも、サングラスを失くしたこの方が近視の京子にとっては、はるかに重要であり、相当なダメージにうちのめされたのだった。

“こんな恰好、見られたら大変だワァ。なんとかしなけりゃァ”

と、つぶやきながら重ったるい足取りで、ふらふら起きあがる京子。

先程迄の色あざやかなゴムマントとは対照

的にドス黒いドブ泥がベッタリとへばり付いたゴムマントを引きずり、此の場を逃れんと四つん這いになり、土手を這い上るのだが、赤土の斜面は充分に雨水を含み、滑りやすく無情にも重ったるいゴムマントの裾に足を取られ、もうひと息の所迄、登ってはズルズルと滑り落ちる京子。それでも幾度となく登坂を試みるのだが、とうとうあきらめドブ泥の中を上流に向かって歩きだすのだった。

激しく、風雨の吹き荒れる田圃のアゼ道をゴムマントをはためかせ、前かがみになり歩き続ける京子。激しく、ゴムマントを打つ大粒の雨に、所々泥がはげ落ち、黄色いゴム地がのぞき、まるで水玉模様の服を着たサーカスのピエロのように滑稽な姿であった。

“たしか……たしか此の辺だと思ったんだけどなァ”

何回も頭を振り視界を遮っているゴムフリードをズリ上げ、悲痛な表情であたりをうかがうのだが、見渡す限り田圃の情景がボンヤリかすんで見えるだけでメクラ同然の京子にとって探し求める遊水池を発見することは、ワラの中に落とした針を見付ることと同じくらい困難なことだった。

それでもあきらめず田圃のアゼ道に突立ち

背伸びするのだが、その瞬間ズルズルと足元が滑りバランスを失った京子は、泥しぶきをはね上げ泥田の中に転倒するのだった。

……散々泥田の中を這いズリ廻ったあげく京子はやっと遊水池を探し当てるのだった。少なくとも京子の視界のとどく範囲内には人影は見当たらず、水面をたたく雨の音と風に煽られた芦のささやきしか耳にはいらなかった。それでも京子は、あたりをはばかりように用心深く池の様子を観察し、やっと安心したのか、ガサガサと背丈ほどもある芦をかき分け、池に足を踏み入れるのだった。

腰まで水中に没した京子はゴムマントの裾をまくりあげ、首の部分を締めつけてあるゴムベルトをゆるめ、スッポリと脱ぎ捨て、その下に着ているなんとも奇異なデザインの総ゴムレインコートのベルトに手をかけるのだった。それは、ベルトを境に上半身がダブル下半身がシングルボタンで止めてある純白の部厚い総ゴム製で胸にフタの付いた大きなポケットが付き、ゴムフードが二重になっていた。一枚は襟の内側から直接付いていて、もう一枚は襟そのものがフードになり、真ん中から左右に振り分けるようにボタンで止めてあり、二枚共マスクの部分は、目だけを残し



て顔全体を覆い隠すほど深々している。そして、胴を締めあげているゴムベルトは、ゴムマスクとも、ゴムグツワともつかない変わった形で、腹部に当たる部分が菱型にカットされていた。

京子は両手を後に回し、ベルトのバックルをはずすのだった。同時にダブついていたゴムコートがズルンとズリ落ち、か細い胸部を締めつけるのだった。

ガバゴボと地下水の湧き出る池の中に首迄漬かり全身をなげまわし、手足を動かして水中バレーを満喫する京子。そして、更に水中深く坐り込み、顔や髪の毛に附着した泥を洗い落とし、やがて、ポツカリと水面に顔を出し、ザバザバと水をかき分け岸边に這いあがる京子を他人が見たら、水から這いあがって来た河童とでも思うような異様なムードであった。それもそのはずで見ると部に厚く、ボテボテしたうす緑色の総ゴム製防水服に身を包んでいた。上下セパレートになっている防水服の上衣は首と胴の部分が異常に細くピッチリとくびれて首と胴からの水の侵入を防ぐ役目を果たしていた。その上ゴムベルトで締め付けてあり、手袋の部分は二本指に分かれ、裾は股間に深く切込まれ、その先端はべ

ルトになって股の下で裾の前後を止めてあった。又、その下に着用している下衣は、これも胴が異常に細く、ピッチリとウエストを締めあげ、その長さは上衣の下に隠れているが胸迄あり、肩から二本のゴムベルトで穿き口を吊つてある。そして、爪先はタビのように二本指に分かれていた。

京子はこの異様な防水服姿を人目に晒したくない心理から、早くゴム衣装の下に隠そうと、岸边に放り出してあるゴムコートを着用するのだが、ゴワゴワした部厚い二本指のゴム手袋の為、指先が自由に動かず気ばかり焦り、うまくボタンが引掛からない為、焦燥に駆られ身悶えるのだった。

“どうしようかなァ……でも、やだなァこんな恰好。恥かしくてエー”

京子は今後のことを考え、口の中でブツブツ一人言を呟きながら、国道に向かって引き返して行くのだった。

益々吹き荒れる風雨に打たれ、ゴム衣装をはためかせて……。

## ○晒しもの

次々と疾走して行く車がハネ上げる泥しぶきを、避けようともせず頭から浴び、停留所

に立ち尽す京子。その特異なゴムマントスタイルが面白いのか、通り過ぎる車の同乗者が窓越しに冷笑を浴びせかけるのだった。

散々、待ち侘びたバスに逃げるように駆け込む京子。

その、あまりにも異様な格好で飛び込んできた京子に驚いたバスガールは、一瞬たじろぐのだが、わずかにゴムフードからのぞいている顔から同性とわかり、今度は小馬鹿にしたような態度で頭のとっ辺から足の爪先までジロリと一瞥するのだった。そんなバスガールの態度を意識した京子は羞恥の余り、車内の後方に逃げるのだった。

座席が空いているにもかかわらず乗客の視線を恐れ、後向きに立ちつくす京子は羞恥心にうちのめされ、キップを切りに来たバスガールにさえも気付かないほどであった。

赤信号でバスが停止する度にゴムマントをはためかせ、ヨタヨタとよろめく京子としては空席の隅にでも坐りたいのだが、そうすると乗客の視線をまともに浴びることになり、京子にはとてもそのような勇氣はなく、またあったとしても、泥水のしたたり落ちるゴムマントで坐ることは許されない車内のムードであった。せめて吊皮にでも手をかけられ



ばと思うのだが、そうするにはゴムマントの裾を胸迄まくり上げ、ゴム手袋をはめた不自然な手を出さなければならず、そうした場合当然ゴムマントの下に着用しているゴムコートやグロテスクなゴム長まで乗客の目にさらすことになり、とてもそのような羞恥には耐えられない京子は、否応なしに腰みのならぬゴムマントをはためかせ、フラダンスを踊り続けるのだった。

そんな京子の近くに坐っている数人の女子高校生は、京子の強烈なゴムマントスタイルに圧倒され、初めのうちは雑談にまぎらわし見て見ぬふりを装っていたのだが、余りにも不様な恰好でフラダンスを踊る京子が、面白いのか、チラリチラリとのぞき見るようにして、なぶるが如くクスクスと忍び笑いをもらすのだった。

「恥かしいッ！ やっぱバスなんかに乗るんじゃなかったなあッ」

京子は、自分に対する彼女達の冷笑や侮蔑に満ちた視線を痛いほど感じ、今更ながらバスに乗ったことを後悔するのだった。

蒸し暑い車内の空気と羞恥心に煽られ、深々とゴムフードをかぶった額から流れ出る油汗をゴムマントの上にボタボタ落としながら

必死に身体のバランスをとり、精神的苦痛に耐えている京子。突然、停留所に急停車したはずみでリズムを失い、バランスをくずした京子はドドッと二三歩後ずさりするのだが、勢い余ってゴムマントの裾を踏みつけ、床の上にドサッと尻もちをつくのだった。

したたか臀部を堅い床に打ちつけ、不様な恰好で仰向けにひっくり返っている京子を見て女子高校生達はキャツキャツと嬌声をあげ笑い転げ、更にバスガールの冷笑が追い打ちするのだった。

「キャァー。モーレッツッ！」

「本当ッ、カッコイイ」

それでも少しは可哀想と思ったのか、彼女達は寄ってきて助け起こそうと、手をさしのべるのだった。

「オバサン、大丈夫ッ？」

「アラッあなた、悪いワァー。オバサンだってエー、オネエサンじゃない」

「マアッ。強烈なゴム長ネッ」

「見てヨッ、ゴム合羽なんか着ちゃってサ」

彼女達は不様な恰好で仰向けにぶっ倒れている京子の顔と、めくれあがったゴムマントの下にのぞいているゴム衣装を見較べ、なおも辱かしめるのだった。

そんな彼女達の手を振りはらうようにあわてて起きあがり、羞恥に悶える京子。したたかに床に打ちつけられた肉体的苦痛より、年下の彼女達に言葉や嘲笑でなぶられ痛めつけられた精神的苦痛の方が遥かに大きかった。

そんな京子の心理状態を読みとったバスガールは、意地悪く乗客を京子の立ちすくむ後方へと詰め込むのだった。

バスが発進、停止する度に、同じことを繰り返し、満座の中で晒しものになっている京子。バスを降りてしまえば、これ以上、恥辱的な苦痛に悶えることもなく、全ての羞恥から解放されるのだが、なぜか京子は終点に着く迄、此の羞恥に満ちた苦痛に耐えている様子だった。

「終点ですヨッ、お客さん！」

バスガールは、最後の一人になる迄車内に残っていた京子を促すのだった。

終点迄、屈辱的な羞恥に耐え抜いた京子にとってこの事務的な彼女の一声が死刑の宣告にも似た思いがした。

「あのオ、すみません。お金ないんです……落しちゃってエ……」

ゴムコートのポケットに入れておいた筈の財布がなくなっている事情を、必死に説明す



る京子。

「まあッ！ あきれたァー。散々人に迷惑かけといて、今更何ヨ。それじゃアただ乗りじゃないッ」

バスガールはここぞとばかりに、いじめ抜くのだった。

散々、罵倒され詰問を受けている京子は、じっとこの屈辱に耐え忍び、平身低頭、平謝りに謝る他なかった。それでもバスガールは意地悪く、追求の手をゆるめなかった。

「そんな調子のいいこと云ってるけど、本当なのオッ！ 最初からそのつもりだったんじゃない？ 正直に云わないんだったら、警察に突き出すワヨ」

「アッ！ それだけは許して下さい。本当です、たしかにここに入れといたのですが……」

警察と聞いただけで震えあがり、恐怖に駆られた京子は恥も外聞もなく、あわててゴムマントの裾をまくり上げ、どうかこの異様な恰好を見て下さいと云わんばかりに、ゴム衣装を彼女の前にさらけ出すのだった。

「ウワー!! すごいッ」

バスガールは、わざと大きなゼスチャーで驚き、あきれた表情で特異なゴムコートに目を見張るのだが、そのポツテリとふくらんだ

胸ポケットに、いきなりあらあらしく手を突込むのだった。

「おかしいワネエ、此処に入れておいたのなら落とした時に気が付く筈じゃない？ 他のところに入れてるんじゃないのォー。例えばこの下なんかサッ」

バスガールは、ガックリ項垂れ、羞恥に身悶えている京子の態度に一層加虐心を煽られたのか、ゴムコートのボタンに手をかけるのだった。

「許してエー……。お願いッ、これ以上いじめないでエー……」

必死に哀願する京子の瞳には、屈辱的なくやし涙があふれていた。

## ○ズベ公

散々、バスガールにいじめ抜かれ、身心共に疲れ果てた我身をムチつ打ように重い足を引きずり、あてもなく商店街をさまよい歩く京子。

結局、無賃乗車の件は住所氏名を聞かれたうえ、始末書を一筆とられ、運賃を後日支払う約束で放免されたのだった。

夕闇せまる商店街はほとんどの店がシャッターを閉ざし、人通りもまばらでゴーストタ

ウンのような静けさだった。たまに帰宅を急ぐ通勤人が通りすがるぐらいで、次第に風雨の激しさを増す嵐の中をあてもなく、さまよい歩いているのは京子一人ぐらいだった。

そんな京子は無意識のうちに、いかがわしい飲屋横丁に足を踏み入れていた。

突然、横殴りの強風に煽られ、ゴムマントがはためき、バランスを失った京子は二三歩横飛びによるめき、その拍子にゴムマントの裾を踏み付け、ドツとばかりに一軒のバーに頭から転げ込むのだった。

ドアーガラスにしたたか頭をブチ当てた京子は、粉々に割れたガラスの破片を浴び、失神状態でぶっ倒れていた。この異様な風態をした訪問者に驚き、いっせいに注視するホステスだった。

陰気な青白い照明を浴び、宝石をちりばめたようなゴムマントがキラキラとあやしく光り輝いていた。

初めのうちは彼女達にも何事がおきたのか事情がわからず、あっ気にとられポカンと注視していたが、やがてブツ倒れている京子がかつぎあげ、奥のボックス席に坐らせるのだった。

焼けつくような喉の痛みと頬に熱いものを



感じ、何処か遠くで自分の名前を呼んでいる声が聞こえ、次第に意識を回復する京子。

「キョーコオネエサマ……」

誰一人、客のいないボックス席で京子呼び起こすホステス達。

だが、京子には混濁した意識の中で自分の頬を平手打ちしている彼女達のオーバーラップした顔が見えるだけだった。

「此処は何処？……あなた達は誰？……私、どうしたのかしら？」

強風に煽られ、よろけたことは覚えているのだが、それ以後のことは全く記憶がなく、どうして彼女達に荒っぽい介抱を受けているのか納得がいかなかった。

「私ヨッ。政子ヨ、わからないッ？……まだ思い出せないようネ」

政子はテーブルのワイングラスに並々とブランドーを注ぎ、嫌がる京子に無理矢理、飲ませるのだった。

「ウェー、グエ……いやッ、もうやめてエー」

「駄目ヨ。全部飲まなきゃア」

喉を刺すような強烈なブランドーにのけぞり、口元からあふれ、タラタラとゴムマントの上に落としながら首を左右に振り、哀願す

る京子であるが、ズベ公達の執拗な攻撃を逃がれる術もなかった。

「どうオ、思い出した？ 京子お姉様ア」

「まだ思い出せないようネエ、それともしらばっくれてるのかしらッ」

ズベ公達は、なにがなんでも思い出させようと、寄ってたかって責めたてるのだった。

やがて、京子は混濁した頭の中で自分が置かれている状況を確認し、羞恥の余り昔の不良仲間である彼女達の顔を正視出来ず、ガツクリと肩を落とし、不運なめぐり合わせを嘆くのだった。

「やっと思いついてくれたようネ。キョーコオネエサマ！」

「とぼけたって駄目ヨ。此処で会ったが百年目、せいぜい覚悟してもらおうヨ」

と、ズベ公達は冷笑を浮かべ睨みつけるのだった。

三年前、彼女達に対してとった行為を思い浮かべ、恐怖の余り戦慄し、逃げるようにフラフラと立ちあがる京子だが、無情にも後からゴムフードをつかまれ、引き倒されるのだった。

「まだいいじゃない。久し振りに逢ったんだからゆっくりしていきなさいヨ。どうせこの

嵐じゃあ開店休業だし、それに積もる話もあることだし……」

「そうよ昔の仲間が揃ったんだから、盛大にパーティーでもしましょうヨ。ネエいいでしょッ、お姉様ッ」

ズベ公達は、うむを言わず京子を取り囲むように坐り込み、祝杯をあげるのだった。

「この子達、お姉様初めてネッ。紹介しとくワア」

ズベ公達の姉御格である政子は、ジュンとミチの二人を京子に紹介するのだった。

「今、何してるのオー？ 変テコリンなカップなんか着てサ」

「——」

「暑いでしょう？ お脱ぎなさいヨッ」

「脱ぐの手伝ってあげましょうか？」

と、ズベ公達はゴムマントに手をかけるのだった。

「いいえ、いいの、このままで……」

京子は、自分だけに科せられた秘密を、彼女達の前にさらすことを恐れ、ゴムマントを内側からしっかり押えて、堅く身を閉ざすのだった。

「お姉さまさえよければ脱がなくてもいいわヨ。そのかわり、一杯つき合ってエ」



意外にあっさり諦めた政子は、意味有り気に冷笑を浮かべ、京子の前にジョッキを突き出すのだった。

「ごめんなさい、欲しくないの」

「それっということなのオ。アタイとあんなの仲じゃない、そのアタイの盃を受けられないなんて頭に来たワッ」

簡単に拒絶されたことに怒りを覚えた政子は、手にしたジョッキのビールを京子の顔面めがけ、一気に振りかけるのだった。

「……ひどい、ひどいワァー」

ゴムマントの上にしたたり落ちるビールで全身アワだらけになり、屈辱に悶える京子。

政子によって、その口火が切られズベ公達は、我も我もと寄ってたかってビンごと京子の口元に押し付けるのだった。

「まあッ！ もったいないワァー。こんなにこぼしちゃってェ」

「ソオソオその調子ヨッ。いい飲みっぷりだことッ」

「……ウーッ、苦しいワァー。もう勘忍してエッ……」

「まだまだッ、序の口ヨ。これから勝負じゃないッ」

ゴムフードの上から髪の毛を後ろに引き絞

り、顔を上に向け、鼻をつまみ、大きく開けられた口の中にビールビンを押し込むズベ公達。息苦しさで咽びながらなんとかして、この苛酷なビール責めから逃がれようとする京子だが、ゴムマントを着用しているが故に、手を出し抵抗することも出来ず、またそうすることによって彼女達の前に特異なゴム衣装をさらすことを恐れ、無抵抗にならざるを得ず、彼女達のなすがままにまかせ、ビールを飲み干すしかなかった。

「……お願いッ。もう許してエー」

「許してエだってサ。ねえ、どうするウ？」

皆んなア

「それじゃあ、三年前のことは忘れろって言うのオ。冗談じゃないワヨ、アタイ達をさんざんだまして逃げ出したりしておいて、よくもそんな口きけるワネエ」

「本当ッ。いい度胸してるワァー」

「京子は三年ほど以前、彼女達三人から十万円借金して、そのまま踏み倒しズベ公稼業から足を洗った経緯を想い浮かべるのだった」

「きつと返すワァ、だから今日はもうこのくらいで勘忍してエー。お願いッ……」

京子は三人の顔色をうかがうのだが、彼女達の表情から、とても許されるムードではな

いと判断し、ゴムマントをひるがえし逃げるように踊り場に出るのだった。

「チョットオお待ちヨ、逃げる気イー。アンタもいいタマねエー」

「アタイ達から逃げようッたって、そうは問屋がおろさないワヨ」

三人のズベ公と、借金とは無関係な二人も加わり、ゴム衣装をはためかせ逃げまどう京子を取り囲み、殴る蹴るのタライ廻しにして痛めつけるのだった。

「なんとか言ったらどうなのヨオ」

ゴムマントの上から胸ぐらをひっ掴み、こづき廻す知子。

「そのきれいな顔に、ガンと一発喰らわせてやろうかッ。アタイのパンチ強烈ヨオ」

ビールの空きビンで臀部をバチバチひっぱたく政子。

「やめてエーお願いッ。……これ以上どうしろって云うのオ政子さん。教えてエー」

その京子の表情は、先程迄の屈辱的な羞恥から恐怖に歪み青ざめていた。

「仲間の掟どおり、リンチにかけてやるワ。そうされたって文句ないでしょォー？ どう

せアンタが裏切ったんだから自業自得ヨ」

「そうヨ。此処で会ったが百年目エー、そろ



そろ年貢を納めてもいいんじゃないッ。せいぜい覚悟するのネ」

「まずは、その変テコリンなゴム合羽脱いでもらおうかッ」

ズベ公達は、寄ってたかってゴムマントを引剥がそうと手をかけるのだった。

「いやァーッ、許してェー。お願いッ。それだけはッ……」

京子は、ゴムマントを脱がされまいと内側からしっかり押え、身をよじり必死に哀願するのだが、多勢に無勢の五対一では抵抗する術もなく、アッと云う間にゴムマントの裾がまくり上げられるのだった。

「何ァにいいー？ これ！ 強烈なもの着てるじゃないッ」

「本当ッ。凄いゴム合羽ネェ」

「ハッハハハ……カッコいいじゃないァーい。」

ちよっと後を向いてヨッ」

「ついでに両手を挙げてェー」

「フッフッフ……いいザマだこと。今度はそのまま前を向いてェー」

ズベ公達は、次々と脱がされていく特異な

ゴム衣装に目を見張り、勝手な注文をつけ、なぶりものにするのだった。

「オ、オネガイ。……カンニンシテェー」

涙声で哀願する京子の願いも、リンチに狂ったズベ公達の耳には入らず、酒に酔った勢いも手伝い徹底的に痛めつけ、辱かしめることに陶酔し、その眼差しはサディスティックに燃え、ギラギラ輝いていた。

なおもズベ公達は、羞恥に悶える京子から次々と、屈辱にまみれたゴム衣装を引剥し、その度に色々なポーズを強制し、恥辱に満ちた秘密を暴露するのだった。

「踊り場のスポットライトを浴び、ファッションショウのモデルの如く踊り舞う哀れな京子」

## ○ゴム衣無惨

身ぐるみ剥がされ、恥辱に打ちのめされた京子は放心状態でうずくまっていた。そんな京子の足元に散乱しているゴム衣装を手に取り、もてあそんでいるズベ公達。

「まァッ！ 此のマント重いと思ったらゴム

が二重に張ってあるワァー」

「チョットオ、誰か此のゴム長穿いてみないッ？ 強烈ヨォー！」

「やだァー、お魚屋さんみたいじゃない。だけどこんなもの穿いて、どういうつもりなのかしらネッ！ まさか、水の中に潜って魚取

りする訳じゃあないでしヨォー」

「ドジョウすくいでもするんじゃないの。きつとそうヨ、そうに決まってるワァー。フッフッフ……アラエッサッサー」

「ネェーエお姉さまァ、説明してヨォー。こんなもの着ちゃってサァー」

黒い総ゴム製の下着を京子の目前に広げ、チラつかせる政子。

その特異な下着は、海水着の型をしたワンピースで、パンティの部分はブルーマのように入むほど絞ってあり。腹部はコルセットタイプで、締め付けるゴムベルトが数本付き。胸部は袋型をした異常に大きなブラジャーで、裏地には、しなやかな羽二重ゴムが張ってあった。

特異なゴム下着を見せつけられ、羞恥に悶えているそんな京子を、ズベ公達は寄ってたかって、髪の毛をつかみ引きずり立たせ、乳房を抱いている両手を後手にネジ上げ、無防備の状態ですらけだしている裸身に、ゴム下着を当てがうのだった。

「さァッ！ どうなのォー？ まさか趣味で着てる訳じゃないんでしヨッ」

政子は、悲痛に歪んだ京子の表情に益々加



虐心を煽られ、京子に隠されたゴム衣装の秘密を自白させようと、その裸身をゴムベルトでムチ打つのだった。「ピシッ、パシッ」

「ウーッ……ひどいッ、ひどいワッ」

後手にネジ上げられた無抵抗の裸身を、蛇の如くのた打つゴムベルトに思わず悲鳴をあげ、無意識のうちに告白する京子だった。

「京子がゴムに魅せられた動機は十年も過去のことだった。その当時非行少女だった京子が二年間の保護観察処分に服し、更正施設に入れられ、施設内の缶詰工場で女工として苛酷な強制労働に従事したときだった。特異なゴム作業服を身につけ、毎日朝から晩までぶっ通しで休みなく酷使され、少しでも怠けようものなら、ひどい懲罰を受けた。そんな状況の中で、もっとも反抗的だった京子は全ての規則を破り、その度に体罰として、ゴム作業服の上から拘束され、仲間達の前で女看守に鞭で打たれ、みせしめに工場内の梁から宙吊りにされた。そんな特異な体罰を体験したその時からゴムの中に被虐感を発見し、ゴムの虜<sup>とりこ</sup>になった京子だった。

「お願いッ、早く着せてエー……そのうえ、打つなど蹴るなど、あなた達の気のすむようにしてエー……お願いッ」

全てを告白した現在、これ以上自分自身から失うものもなくなり、半ばすてばちな態度でゴム衣装の着用を哀願する京子。

そんな京子は無意識のうちに被虐のムードに陶醉し、マゾヒズムの血が煮えたぎるのを覚え、ひたすらリンチを望むのだった。

「その上から、これ着るんでしヨッ」

茶色い総ゴム製のワンピースタイプのゴム服を広げ、身構える秀子。

京子は自分から進んで、その特異なゴム服に身体を滑り込ませるのだった。

そして、次々と恥辱にまみれたゴム衣装がズベ公達の冷笑と共に着用されていく……。

### ○地下室のブルース

地下室に通じる階段をふらつく足取りで降りて行く京子だが、突然、後から政子に小突かれた勢いでゴムマントの裾を踏みつけ、前のめりに倒れ、一気に急な階段を滑り落ちるのだった。

床にたたきつけられる迄の数秒間を、京子は必死に身体を起こし、止めようと試みるのだが、無情にもゴムマントが邪魔で両手の自由がきかず、なす術もなく、次々と目の前に迫る階段の角に胸部を打ちつけ、不様な格好

で滑り落ちるのだった。

「モーレッツ！」

「カーッコイッ!!」

そんな不様な京子を嘲笑う三人のズベ公。

「ウーームッ……」

堅いコンクリートの床に顔面からたたきつけられた京子は、エビのように身体を折り曲げ悶絶するのだった。

「ヘエン、だらしないわネエ、いい恰好してサッ。これじゃあ気合抜けだワァー、徹夜で痛めつけてやろうと思ったのに」

「こんなもんじゃあすまないワヨ。これからタップリ可愛がってやるんだから、せいぜい覚悟するのネッ」

三人のズベ公は京子の髪の毛をゴムフードの上からひっ掴み、荒々しく引きずり起こして、苦悶の表情に歪んだ顔に平手打ちを喰わせ、臀部を蹴り飛ばすのだった。

ズベ公達の更衣室がわりに使われている地下室は、陰惨な空気が漂い、じっとりと寒気を感じさせ、うす暗い裸電球の下に、壊れかけたテーブルや椅子が、ホコリをかぶり雑然と放りだしてあった。そんな椅子の一つに坐らされている京子を取囲み、腕組みしている三人だった。



「遅いわネエ、彼女達ッ……」

と、政子はいらだった表情で階上を見上げるのだった。

丁度そのとき、ガラガラとシャッターの開く音がして、やがて、階段を駆け降りて来るジュンとミチだった。

「ハイッ、これッ」

ジュンとミチは、抱えていた物の包装紙を破り、ドサツと重々しい音をたて京子の前に放り出すのだった。

「ずいぶん遅かったじゃないッ」

「それが大変なのヨー。この土砂降りでしょう！ お店は閉まっちゃうし苦労したのヨーこれだけそろえるのッ」

ジュンとミチは、京子の足元に散乱しているロープや皮ベルトを手に取りながら、三人に説明するのだった。

やがて、ゴムマントを引剥がされた京子は椅子から引きずり起こされるのだが、全身酔いの廻った勢いでフラフラと二三歩、後によろめきドサツと尻モチをつくのだった。

そんな京子に、情容赦なくロープをかけるズベ公達。両腕を広げ、その手首を二本のロープで別々に縛り、その縄尻を長さ二メートルほどの鉄パイプの両端に縛りつける、鉄パ

イプの真中から取った一本のロープを滑車に通し、その滑車を、シャンドリアが吊るしてあったと思われる天井の鉄製フックに引掛け縄尻を引絞るのだった。

ビール責めにあい、足腰たたなくなった京子の身体は、否応なくゴム衣装をきしませ、ズルズルと吊り上げられて行く。両手首に集中する激痛に悶え、必死に両足を踏んばり自分の方で立ちあがろうと試みるのだが、それも空しい抵抗ですぐにガックリと膝を折り、ダラリと半吊りになるのだった。

「ウウームッ……痛ッ、痛いワァ……ほ、解いてエ……お願いッ」

と、京子は絶叫するのだった。

そんな京子の絶叫に、政子は何を思ったか階段を駆けあがって行くのだった。

やがて、戻って来た政子は、泣き叫ぶ京子の口に便所掃除に使っている炊事用のゴム手袋を押し込もうとするのだが、うす汚れ、異臭をはなつゴム手袋に顔をそ向け、必死に抵抗するのだった。

「やめてエッ。お願いッ、それだけはやめてエー」

激しく首を左右に振り、抵抗する京子だが五人がかりではたまらず、アツと云う間にゴ

ムフードがはずされ、髪の毛を後方に取られて上を向いた口の中に、ゴム手袋が押し込まれ、更にその上、ゴムコートから抜き取ったベルトを二重に廻し、バックルを唇の上に当てがい締めつけられるのだった。

「グエッ……ウウームッ」

京子は息苦しさの余り、汚物に染まったゴム手袋を噛み締め、生唾を飲むのだった。

「どーオッ？ オ・シ・ャ・ブ・リ・の味ッ。いいでしょッ。たっぷりしみ込ませてきたんだから」

と、政子は二枚のゴムフードをかぶせながら冷笑を浮かべ、京子の顔をのぞき込むのだった。

「でも、ちょっと苦しそうネッ。空気穴でも開けてあげようかッ」

と、政子はアイス・スティックで、鼻を覆っているゴムベルトに小さな二つの穴を開けるのだった。

「どォ？ 調子は。楽になったでしょう？」

鼻を刺す悪臭にまみれ、恥辱に歪んだ京子の顔を、ズベ公達はかわるがわるのぞき込み平手でひっぱたくのだった。

そして、荷物でも梱包するかのようになり、手馴れた手付きでロープをかけ、全身余す所なくガンジガラメに縛りあげるズベ公達。



やがて、全ての自由を拘束され、惨めな恰好でダラリと半吊りにされた京子を、それぞれの穫物をふりかざし、めった打ちに打ち据えるズベ公達だった。

「それエッ、もう一つ」

「ビシャッ」

「これでも喰らエーッ」

「バシッ」

網目模様もあざやかに縛りあげられたゴム衣の上を背中にゴムヒモの束が乱れ飛び、臀部と下腹に二本の部厚い皮ベルトが喰り、太モモにゴムホースがムチ打ち、乳房に皮ロープが喰い込んで、鈍い音を響かせている。

情け容赦なく乱れ飛ぶムチ打ちの反動で、京子の身体は弓なりに大きくのけぞり、その度に手首に喰い込むロープの激痛に身悶えして、その苦痛に耐えている姿は哀れで痛々しかった。

京子にとっては、強烈なムチを多少なりとも柔らげているゴム衣装がせめてものなぐさめ、肉体的にはほとんど苦痛は感じられず逆に特異なゴム衣装を着用し、リンチされている自分に対して屈辱的な羞恥を味あわされている精神的苦痛の方がはるかに強かった。しかし、その羞恥心も、全身を包む縄目とビ

ールの酔いで、身心共に感覚が麻痺し、此の異様なリンチが永久に続くことを願ひ、被虐的ムードに陶醉する京子だった。

「いつかはこうなることを望んでいたんだワア……私もバカな女ネエ」

京子は、混濁した意識の中でそう思った途端、全身から力が抜けていくのを感じるのだった。

ズベ公達は失神状態の京子を、ローラーの付いた事務用の回転椅子に縛り付け、頭から勢いよくバケツの水を、二杯三杯とぶっかけるのだった。

やがて、正気付いた京子の顔面を、皮製のサンダルで滅多打ちにひっぱたく政子。

皮サンダルの強烈なビンタに打ちのめされている京子は、椅子ごと室の中をグルグルと廻っている。頭から水をかぶったゴム衣装が妖しい光沢を放し、水しぶきをあげていた。

「やっと気が付いたようネッ。京子オネエサマッ」

と、政子は皮サンダルを投げ出し、無惨にはれあがった京子の顔を、面白そうにのぞき込むのだった。

「一息いれようか？ まだまだ先は長いんだからッ」

「そうね。一服しましょうヨ」

「あーア、喉が乾いちやったッ。誰か上に行つて冷めたいもの持って来てヨ」

ズベ公達は、うまそうにタバコを喫いながら、その煙を京子の顔面に吸きつけるのだった。

京子は物憂氣に首を左右に振り、タバコの煙から逃がれようと顔をそむけるのだが、そんな京子の仕草が面白いのか、政子は二本のタバコをゴムグツワに開けられた鼻孔に押し込むのだった。

「どーオ。おいしい？」

と、政子は二本のタバコを、交互に入れたり、出したりして楽しんでいる。

京子にとっては唯一の吸気孔にタバコを押し込まれ、息苦しさの余り、身悶えしてもがくのだが、もがけばもがくほどタバコを吸い込む結果になり、ゴムフードの中にこもった煙に咽び、のたうち廻るのだった。

さんざん燻<sup>いぶ</sup>し責めにされた京子は、ガックリと首を落とし、肩で大きく息をはずませていた。そんな京子からゴムグツワをはずすズベ公達だった。

「飲まない？ オネエサマッ。飲まなきや損ヨ。どうせお姉さまのツケなんだからッ」



「そうヨ。じゃんじゃん飲んで、じゃんじゃん稼いで貰わなくちゃアネッ」

「そうヨッ。アタイ達、お姉さまの身体を、一ムチ十円で買ってあげてるんだもんネ」  
「フッフッフ……これが本当のたたき売りッてエやつネ」

「それじゃあ大変ネッ。一晚かかっても払いきれないんじゃないッ」

ズベ公達は裏切りの代償として、京子の身体を一打十円で買ひしめたのだった。

「さアッ、喉が乾いたでしヨッ。一杯いきましようヨ、京子お姉さまア」

と、政子はビールのビンを京子の口に押し当てるのだった。

「やめてエッ。もう勘忍してエー、政子さんオネガイ……」

京子は先刻から猛烈な尿意に身悶えして、堪えていた。そんな京子の態度に、ズベ公達は含み笑いを浮かべながらビール責めにして楽しんでいる。

「……おトイレ……トイレに行かせてエー」と、限界に達した京子は、蚊の泣くような声で哀願するのだった。

「なあに？ 聞こえないワヨ。皆んなに聞こえるように、もっと大きな声でハッキリ云

いなさいヨ」

と、政子は意地悪く、わざと聞こえない振りをするのだった。

「……………」

「トイレに行きたいんだってサー」

「そんな必要ないんじゃないイ。その中にタレ流しちゃえばいいのにサッ」

「その為にはいてるんでしょッ、ゴム長ッ。さっさとやっちゃえばいいのヨ。そうしたらサッパリするのに」

「バカネッ。どうせわかりっこないんだからみんなが知らないうちに、サッサとやっちゃえばよかったのにサッ」

ズベ公達は羞恥に身悶えしている京子を、寄ってたかって辱かしめるのだった。

京子は身体を強張らせ、猛烈にさし迫る尿意を堪えるのだが、とうとうその限界を越えガックリと肩を落とし、羞かしそうにうなだれるのだった。

その瞬間、ゴム下衣を打つ異様な音と共に見る間に、縄目の喰い込んだゴム下衣が、ポッテリとはち切れんばかりにふくらむのだった。

「とうとう、やったらしいワヨッ」

「モーレッツッ！」

「見てヨッ、此の顔ッ、シビレルー」

ズベ公達は、解放感に打ちひしがれている京子を口々に辱かしめ、更に、ポッテリとふくらんだゴム下衣に、皮サングルの雨を降らせるのだった。

……そして、この羞恥に満ちた排出シヨウは延々と続けられるのだった。

「大分溜ったワネー。少し掻い出してあげないこと？」

「それもそうネッ。こんなにみずぶくれしてダブダブしてるワ」

「でもオ、彼女の為にはどっちがいいかわらないワヨッ。そうでしょうッ？」

ズベ公達は、顔を見合わせ、冷笑を浮かべながらポッテリと水脹した京子のゴム下衣をビールビンでこづくのだった。

さんざん辱かしめを受け、いじめ抜かれた京子には、彼女達の意図がわからずうなだれていたが、ズベ公達はそんな京子を椅子から解き放し、ゴムフードをつかみズルズルと室の中央まで引きずって行き、滑車から垂れているロープを足首に縛り付けるのだった。

嬌声をあげ、勢いよく縄尻を引き絞るズベ公達。

膝が、腹が、胸が、床を離れて徐々に天井



に向かって引き上げられて行き、完全に逆さ吊りにされた京子の身体は、ロープのきしむ音と共に揺れ動いている。

その恰好は魚河岸のセリにかけられるマグロのようだった。

## 附稿 『マイコレクション』 菅原敏夫

特異なゴム衣装を着用し、重労働に喘いでいる若い女性を見ることは「ゴムマニア菅原敏夫」にとって羨望的であり、そんな女性の姿を見る度に、何か悪いものを見たような身の引き締まる思いで矢も盾もたまらなくなり、自分自身もゴム衣装を着用し、羞恥に悶えてみたいと感じるのだが、ゴムマニアのマニアたる所以か。ゴム衣装の着用を強制され、正当化された場合でもゴムその物に抵抗を感じるものであり、ましてや、自分からの意志で着用し、他人の前にその特異な姿をさらすことは非常に勇氣のいることで、なかなか出来ることではなく、せいぜい人気のない郊外や室内で着用し、自己の潜在意識に対して憂さを晴らすのが関の山である。

そこで、憂さ晴らしも兼ね、先日入手したカタログの中から特選し購入した、水産用ゴム製品を紹介してみたい。

全身ガンジガラメに縛られ、逆さ吊りに身悶えしている京子。その縄目模様もあざやかなみずぶくれたゴム下衣を情容赦なく打ち据えるズベ公達。

ムチ打つ圧力で、その内容液は縄目を潜り

### (1) 特胴付長（黒色・ベルト付）

胸迄有る「オバケ」ゴム長で、前後の穿き口をベルトで肩から吊るし、胴にはベルト通しが付き、更に脇の下には胸を締めあげる為のベルトが付いている。カタログによればサイズは足の大きさにより、二十二センチから二十八センチ迄有る。

△着用アイデア▽一番小さい二十二サイズと特大二十八サイズを揃え、二重に着用。より拘束感が増した。下に着用するゴム長の底を足袋のようにカットし、なめらかに加工した。

### (2) 三本指ゴム手袋（茶色・ゴムヒモ付）

指先が三本に分かれて、サイズは指先から穿き口迄の長さが四十五センチから七十センチ迄あり、左右の手袋を両肩から吊るし、脱げ落ちないようにしている。

△着用アイデア▽このゴム手袋の下に同製品の五本指ゴム手袋をはめると、指先が曲

抜け、出口を求めジワジワと流れ落ち、それを追うかのように臀部から胸部へと、ムチ打ちも移動するのだった。

……やがて、防水服からあふれ出たそれは首筋を伝わり、顔面にしたり落ち、髪の毛を洗い、ゴムフードの先端いっぱい溜るのだった。

「それエ。もう一丁ッ」

「ブチーン」

「グブグブッ、グエーッ……いやアッ、やめてエーッ」

「コレでもカーッッ」

「バシャッ」

「ひー。ひどいッ、ひどいワァ。どうしてエー？ どうしてなのォー」

京子は弓なりに反り返り、悲鳴ともつかない叫び声で哀願するのだが、その度にゴボゴボと飲み込み、身悶えして咽び、その勢いで吐気を催すのだった。

「どうしてだってえ？ わかってるじゃないのさあ」

床に敷き広げられたゴムマントの上に、ゴムフードからあふれた液体がしずくとなり、流れ落ちていた。

そんな京子に満足したのか、ゆっくりと口



がらない程、両手の自由が拘束された。

(3)長合羽(黒色・フード・ベルト付)

普通のゴム合羽に比較し、ゴム地も厚くフードもマスクの部分ボタン二つで止めてあり、フード自体大きく出来ている。サイズは特大から3号迄あり、特大を例にとってみますと背丈が一メートル二十五センチもあり、全体にゆったりとガバガバしている。袖口は茶色の生ゴム製で手首に喰い込むほどピッタリ絞ってあり、胴には部厚く巾広いゴムベルトが付いている。

(4)海上ジャンパー(黒色・フード付)

長合羽と同じタイプであるが、丈は短かめ、裾にゴムヒモを通して絞ってある。サイズは特大から3号迄あり、袖口が二重になって、下は茶色の生ゴム製で絞ってある。同製品に大漁ジャンパーがある。

(5)胸付ズボン(黒色・ゴムヒモベルト付)

胸当ズボンで肩から前後を吊るし、胴にはベルト通しが付き、更にゴムヒモで締めあげるハトメ穴の開いたベルトが両サイドに付いている。サイズは特大から3号迄あり、特大などは裾口の中が三十センチ、股下の長さは八十センチもあり、胴回りはゆったりとガバガバして、普通のズボンに比較し、ゴム地も厚く出来ている。同製品に

大漁胸付ズボンがある。

(6)胸付前掛(黒・ゴムヒモ付)

胸当タイプで、臀部を覆う部分は二重合わせになり、ハトメ穴が四つ開いている。サイズは特大から3号迄。特大の寸法は縦横一メートル二十五センチ。同製品に炊事用胸付前掛(白色)がある。

(7)胴丸前掛H型(黒色・ゴムヒモ付)

巻きスカートタイプで腰をグルリと包みサイドに合わせめが重なる。サイズは一種類で長さは六十センチのミニサイズ。△着用アイデア・女性の場合Vウエストにベルト通しを付け、ゴムベルトで締めあげサイドの合わせめにボタンを付け、巻きスカートにして、雨降りの外出時にオーバースカートとして着用する。なお、ゴム地にスプレーラッカーを吹き付けると一層光沢を増す。

以上、列記したゴム衣装は、弘進ゴムKの、水産用ゴム製品である。

最後に小生の着用感としては、これ等のゴム衣装をサイズの小さいものから何着も重ね着すれば拘束衣にもなり、肉体的には相当きびしい緊縛、ムチ打ち、吊し、etc等に耐えられ、その点、防禦服として役立つ、その反面、精神的には責衣にも、うってつけだと思う。

ープを緩めるズベ公達。ゴムマントの上をのた打ち廻る京子。

「今日のところは、このくらいで勘弁してあげるワッ。そのかわり、せいぜい一人で楽しむのネエー」

と、政子は捨てゼリフを残し、ズベ公達を促すのだった。

……やがて、一人残された京子は、混濁した意識の中で、今後の自分に科せられた運命と対決していかなければならないことを自覚するのだが、そんな先のことより、自業自得とは云え、絶望のどん底に喘いでいる現在の自分自身が情けなかった。しかし、その反面、被虐の喜びにむせび、陶醉している心境の変化に気づくのもあった。

『きっと、こうなる運命だったんだワ』

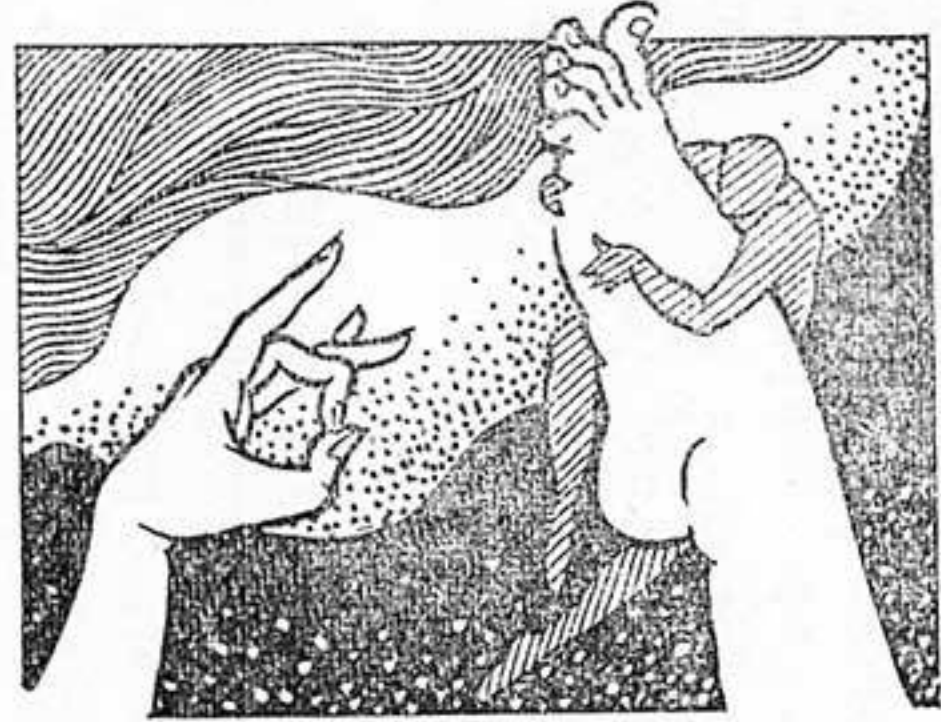
京子は、うすれてゆく意識の中で、幻想的な願望を夢想するのだった。

……台風一過。強烈な初夏の太陽が照りつける商店街……頭からスッポリとゴムマントに身を包み、衆人環視の中でズベ公達に引き廻され、辱かしめられているもう一人の自分の姿を……

△完結▽



## 連載 M 小説



## 新婚旅行？

「あいつ、遂に観念したらしいわよ」

栄子と善夫は、次の週の定休日に那須温泉に来ていた。

前に清太郎が泊っていた部屋を指定して、そこへ泊った。

あのと、清太郎がすぐデラックスに見えた栄子は、自分達もあの気分を味わおうと思つてのことだった。

「こういうところへ来るのも、あまり年より

ピ

エ

口

床

屋

最終回

鬼<sup>き</sup>山<sup>やま</sup>絢<sup>けん</sup>策<sup>さく</sup>

になつちまっちゃ面白くないだろうね。やっぱ若い時に、好きなひとと二人で来るのが最高ね」

栄子は新婚旅行気分ではしゃいでいた。善夫の方は、この部屋で清太郎に散々叱られたことを想い出すと、あまりいい気持はしなかった。栄子はそれを察して、彼の喜ぶようなことを言ったのだ。

「こないだ不承々々だけれど、出て行かなきゃならなくなつたなあって言ったわ」

政吉は今日の休みに、東京の清太郎に会いに行っていた。

「清太郎さんどこへ行ったのも、どこかの店で働き口を頼みに行ったのよ」

「そうかい」

善夫は存外、気のない返事をした。

「清太郎さんのことだから、悪いようにはしないでしょうよ」

清太郎の名前が出ると、また善夫は不機嫌になった。

「でもね、あいつにも多少、骨があるわね。」

あの七十万、要らないって言うのよ。いままで苦労かけたから妾にくれるって……」

「フン、そんな気前のいいことを言つたって



イザ出て行く時にゃ持ってたさ」

「そうかしら」

「当り前だよ。あの年でこれから七十万貯めるなあ容易じゃねえ。俺が十三年間、働いたって、やっと六十万しか貯まらねえんだぜ」  
その六十万は、清太郎が預かっている善夫の定期預金のことだった。

——前号までのあらすじ——

若い時は女道楽にあけくれた斧田政吉だったが48才で15才年下の栄子と結婚し栃木県大田原市に理髪店を出した。資金は政吉が70万、栄子が50万、政吉の兄貴分の清太郎から50万借金したが、これは5年の間に返した。

店が忙しくなったので清太郎の店から富岡善夫を三カ月間という期限つきで手伝いによこしてもらった。元バーの女給だった栄子は38才だがグラマーの美人、5才年下の善夫を誘惑し最初善夫は避けていたが「結婚するなら」と関係する。女房の浮気を我慢してきた政吉だったが栄子は政吉と別れて、善夫と結婚し、政吉には70万円返して出て行けと言う。店は栄子の名義で登記されているために、政吉は5年の苦労も水泡に帰し、善夫のために最愛の女房ばかりか、全財産まで根こそぎ奪われることになった。  
「ピエロ床屋」の政吉の行く道は……

政吉が清太郎の所へ行つたついでに、持ってくるように栄子が言つてある。もちろん善夫から栄子に言わせたのだ。「あんたが行かなくて清太郎さん渡すかねえ」と栄子は心配したが「渡すも渡さねえもねえ。もともと俺の金じゃねえか」政吉がそれを持って逃げる気づかいは全然ない。政吉に渡す分の七十万は、まだ簞笥の中に眠っているのだから。

## まさ夢

那須高原をドライブして、夕食も外ですませて八時頃に家に帰ると、政吉はもう帰っていて、飯を食う支度をしているところであった。善太の顔を見ると

「これ調べて受け取ってくれ」

とパンチで穴を開けられた銀行の通帳と、六十三万二千いくらの現金を差し出した。

「あら、清太郎さん、よくくれたわね」

栄子は冷蔵庫からビールを出してきた。

善夫は札を勘定し終ると

「御苦労。こりゃ駄賃だ」

千円札を二枚政吉の方へ投げてよこした。

「こんなもの要らねえよ」

「何を！」

善夫の顔が陰しくなった。

「こんなものとは何だ。俺の金だから受け取れねえって言うのか」

コップのビールを、いきなり政吉の顔にぶつけた。

この頃の政吉は、反抗的な行動に出ることを一切しなくなっていた。

栄子ならまだしも、善夫から屈辱を受けることは身を切られるように辛かったのだが、いまでは、それも馴れた。

ビールをぶっかけられた時、政吉はふと、同じことをされた夢を見たのを想い出した。

「あの夢は、まさ夢だった！」

夢の中の憎らしい善夫の顔と、いまの善夫の表情がそっくりだった。

この端正とも言える顔が、こうも憎々しい悪相に変わるものかと思う位、別人のような顔になるのだ。

「あの夢はあれから、どうなったっけ？」

政吉は夢の続きが全部、事実となつて的中するような気がした。

「たしか、棒きれを持って、俺を追っかけてきたんだっけ。」

俺は一生懸命逃げた。……あの時の善夫の顔は、単に俺を責めるだけの目的で追っかけ



て来たのではないようだった。憎悪を一ぱいに現わしていた”

最愛の女房と、苦勞して築きあげた家まで俺の財産を根こそぎ奪い取ろうとしている善夫に、政吉が憎悪して追っかけることはあつても、善夫がそうすることはあり得ない筈である。

だが政吉はあの夢が当るような気がした。「そんなつまらないことに意地張るなら、くれてやらなくたっていいよ。もったいない、妾がもらっとくよ」

栄子が横から、さらってしまった。「善っちゃうんの金が気に食わないんなら受け取らなくてもいいが、このお金は受け取っときな」

栄子は簞笥の引き出しを鍵で開けて、例の七十万円の札束を取り出すと、ポンと投げ出した。

「これは要らねえと言つたろ。世話になつたお前への、せめてもの贈り物だ」

「フン、きれいな口をきくね、ほんとに要らないのかい」

「お前にやるよ」

「ほんとだね。よし、もらっとく。もうあとでくれと言ってもやらないよ」

栄子は札束を、また簞笥へ戻した。

「これも一緒に入れといてくれ」

善夫は、もうすっかり亭主気取りで、自分の札束を栄子に渡した。

栄子と善夫は差し向かいでビールを飲み出した。

「どうしたい。お前の面倒は、清太郎旦那が見てくれるんだろう。身の振り方はついたかい？」

「ウン——まあ……」

「チェッ、此奴の返事はいつも煮えきらないんだから。どう決まったんだよッ」

「別に清太郎に頼まなくたって、自分のことぐらい自分でするよ」

「フン、これでもあんたのこと心配するから聞いてやってるんだよ」

「ウン、そりゃ分かつてる。俺にも一ぱいくれねえか」

「人並みなこと言うないッ。ちょっと情けをかけてやりや、すぐつけ上がりやがって。お前はいつも妾達の飲み残しを飲んでるじゃないか。妾達が飲んで、あまったら飲ましてやる。それまでお預けだよ」

「アッハハ、可哀想にな」

善夫はうまさうにビールを飲んで見せた。

「いいかい、金を受け取らないからって、お前を家へ置いとくことはできないんだよ。いつ出て行くのさ」

「近いうちに出るよ」

「そんなあいまいな返事じゃだめだよ。明日かい。それとも今夜、いまでもいいんだよ。この家にいると、お前を人間扱いしてやらないからね。金を受け取らないからって容赦はしないよ。それでもいいか」

「そうまでしなくたって出て行くよ」

政吉は缶詰をあけて飯を食おうとした。

「でも犬よりましだね。てめえで食うものをつくって食うからね。そうだ、お前ビールが飲みたいって言ったね。生憎、今夜は飲み残しがないんだよ。ホラ、この通り」

三本のビールは栄子と善夫で、からにしてしまっていた。

「だがお可哀想だから、お前にも飲ましてやろう。妾のビールを飲ましてやる」

政吉は台所からビールとコップを持ってきかけた。

「そんなもの要らないよ。誰がそんなもの持って来いと言つた。そこに、ふちの欠けたどんぶりがあるだろう。それ持つといで」

栄子は善夫を見てニッと笑った。



「いいや、妾が行くよ。善っちゃんの前じゃ恥かしいからね」

よいしょと尻を持ちあげて台所に立って行った。政吉は栄子は何をするのか察しかねて台所に立ちつくしていた。

## どんぶりビール

「そこへ、どんぶりをお置き！」

栄子の足もとへ、解せぬままにどんぶりを置くと、栄子は裾を捲り、善夫の方へ背を向けてしゃがんだ。

「あらダメだ。こぼれちゃう。そのバケツ早く！」

眼の前にさらけ出されたものを、びっくりして見つめていた政吉は、傍のバケツを急いでどんぶりと取り替えた。

水音もたかく残りをバケツにした栄子は

「おい、拭きな！」

政吉は拭くものを探した。

「バカ、ハンカチを持ってるだろ」

ポケットからハンカチを出した。

「ほんとに気のきかない野郎だよ。ホラホウラッ！この間抜け野郎ッ！ホラッ！」

政吉は仰向けにのけぞり、顔をしかめ、眼

をつぶってこらえた。

「早くお拭き！馬鹿！」

笑いながらビールを持って座敷へ戻ってきた。善夫にドシンと肩をぶつけて坐ると、ウインクした。善夫は持ってきたビールの栓を抜いて栄子に酌をした。

「そのどんぶりを持っというで。持ってくるんだよ！」

政吉は二人に見えないように後を向いて、ハンカチでベタベタに濡れた顔を拭いた。

「早く持ってくるんだよッ、何してやがんだい！」

ビールで上気した栄子は気が荒くなっていった。ビールの栓抜きを政吉にぶつけた。

肩に当たって、ガラガラと台所の板の間に転がった。

政吉はしかたなく、片手でどんぶりをつかんで、こぼさぬように及び腰で座敷へ持って入った。その恰好がおかしいと、栄子と善夫は笑った。

笑いこぼれた栄子の顔がキツと締り、立て膝すると着物の裾が乱れて、赤い蹴出しから豊かな太腿の肉づきをむっちりと覗かせた。

「それをお飲み！妾のビールだよ、サ、飲みな！」

さすがの政吉も、こればかりは飲めない。

「どうしたんだい。飲むんだよ。飲まないと承知しないよッ」

何と言われても政吉は、手に持ったどんぶりの、白く泡立った黄色い液体を見つめたまま、進退きわまった様子だった。

「アハハ、そりゃひでえよ、あんなもの人間の飲むもんじゃねえやな」

善夫は、うまそうにビールを飲んでいいる。「でもさ、妾が飲めと言ったら、あんたならどうする？」

「俺か、俺は飲むよ。喜んで飲むさ。おめえの身体から出たものなら汚なかねえ」

「ホラ、善っちゃんの方がよっぽど実があるよ。飲めったら、飲まないのかい」

栄子は立って政吉の傍へ来ると、裾を捲って片脚をあげ政吉の頭へ乗せて踏みつけた。

どんぶりを持つ政吉の右手が揺れて、膝のズボンを濡らした。

「サア飲め。飲まないと頭からあったかいのをひっかけてやるぞ」

頭を踏まれて足が動いたたびに、どんぶりの中からこぼれてワイシャツまで濡らした。

「よし、それじゃそれを茶碗の中へあけな」政吉は、どんぶりの中のを飯をもった



茶碗へ半分ほどあけた。

「よし、それじゃこの飯を食いな。犬ならこ  
うやって目の前でかけてやっても喜んで鼻を  
ならして食べるよ。食わしてやる。サア食い  
な！」

「俺、何だか腹が一ぱいになっちゃったよ」

ようやく政吉は目の前の赤い布に包まれた  
遅しい、しろい肉の柱を見ることができた。

「アハハ、人間くさい畜生だね。よしよし、  
じゃあ、おなか为空いたら食べるがいい。そ  
のどんぶりの中のものも必ず飲むんだよ。こ  
れからは、そのどんぶりで飯を食い、お茶を  
飲むんだよ。他の茶碗やコップを使っちゃい  
けないよ。それをお前の専用にしてやる。そ  
の飯を食うまでは新しい御飯は食べさせてや  
らないからね。どんぶりの妾のビールも必ず  
飲むんだ。明日の朝、飲んでもいい。ただし  
妾の見ている前で飲むんだ。蔭で捨てたりし  
たら半殺しにしてやる。そしてその十倍も飲  
ませてやる。いいか」

蹴倒されて政吉は、ひっくり返った。

「まあ早いうちに飲んだ方がいいよ。あとに  
なると、匂いが強すぎて飲みにくくなるから  
ね。フフフ」

二人は抱き合って、かなり酔った栄子をか

ばうようにして二階へ上って行った。

## 負け犬

政吉は、じっと考えこんでいた。

“もう我慢がならない、家を出よう！”

外はどうやら雨が降ってきたらしい。腹は  
減っているのだが、もう飯を食う気もしくな  
った。

雨が強くなり、トタンのひさしに大きな音  
を立てた。

“そうだ、洗たく物が……”

政吉は二階へ上って行った。

おとといから敷きっ放しにされた蒲団の上  
には栄子と善夫がいて、足音に顔をあげた。

「何だい、また覗きに來やがったのか」

「違うよ。洗たく物をとりこむんだ」

政吉は見ないようにして二階の物干しから  
洗たく物を座敷へ放りこんだ。

かなりの量だった。部屋の片隅にパンティ  
やシャツや敷布などが山と積まれた。これも  
おととい政吉が洗たくして、干したまんまに  
なっていたのだ。

ふたりの前ではたたむこともできず、政吉  
はそのままにして階下へ下りようとする

「待ちな——」

栄子が声をかけた。

政吉の足はとまったが、振りかえることは  
できなかった。

無言のまま、下を向いて次の声を待った。

栄子はひと声で政吉を金縛りにしておいて

「ムムムウ……」

と焦れたような声を出した。

五分も経ったのだろうか。政吉は棒立ちの  
まま二人の荒い鼻息をきいていた。

政吉は歩き出した。

「お待ちしたら、お前いま妾達が何をしてい  
ると思ってるんだい」

栄子は半身を起こした。

「こんなところへ洗たく物なんか取りにく  
るばかがあるかい」

「だって濡れちゃうもの」

「濡れたら又洗たくすりゃいいじゃないか。  
やっぱ覗きに來やがったんだろう。ここへ  
おいで！」

政吉は、ふたりの方を見ずに立っていた。

“ああ、もう家を出よう。今夜でもいい、今  
すぐでもいい！”

栄子がやってきて政吉の肩をつかんで、ク  
ルリと前向きにすると



パン、パン パン

と続け打ちにビンタをくれ、肩に両手をかけて引き倒した。

栄子に対しては全然抵抗する力を失っていたから、善夫のすぐ傍まで転がって行った。

善夫は、うす笑いを浮かべて政吉の顔を見下ろした。

「いけずうずうしい爺いだ。ホラ、畜生にも情けをかけてやる」

57キロの肉塊が政吉を組み敷いた。

「お前は何でも掃除役だよ。朝の掃除、店の掃除、何でもきれいにするのがお前の役目だよ。洗たく物、そして夜は夜の掃除があるんだよ。ホラ、きれいにしな」

のしかかってくる栄子に

「わかったわかった。栄子、俺はもう出て行く、出て行くよ」

「フフフ、いますぐ出て行くか」

「いますぐ出て行く！」

「この雨ん中をかい」

「出て行くと言ったら出て行く！」

「フフフ、じゃあ出てお行き。だがその前に

七十万円くれたお礼にいいものをやるよ」

顔の上にのしかかり、太股で動かぬように顔をはさんだ。

「要らねえ、何も要らねえ。俺は出て行く」

「うるせえ、おとなしくしていやがれッ！」

栄子は政吉の頭を両手で動かぬようにおさえつけた。

「いいか、この家にいると毎晩こうだぞ」

政吉は、わめくにもわめけず、うめき声をあげた。

「わかったか、わかったか」

政吉は頭の中がカーッと燃えて、クラクラした。

「どうだい、ほんとに出て行くか」

肉の締め木が少し弛んだ。

「出て行く。もう何でもいいから俺を放してくれ」

「よし、それじゃ今夜がお前とお別れの晩だね。フフフ、惚れた女の味をよく覚えておくがいい」

栄子は、それからいつまでも政吉を放さなかった。苛酷な凌辱が、栄子が満足するまで続けられた。

「アハハ、この顔。サア出て行け！」

ようやく許されて、政吉は大きく息を吸いこんだ。やわらかく、あたたかい肉塊が、こゝも執拗で惨酷であることを、まざまざと味あわされた。

よろよろと、這うように階下へ降りた政吉は、洋服を着た。荷物といっても当座の下着の着替えぐらいのものである。

裏口から黙って出て行こうとしたが、そうもならず、階段を中途まで上って

「それじゃ栄子、たっしやでな」

政吉は涙を一ぱいたためて栄子を見た。

栄子は善夫に頬をつけるようにして何か話していたが、階段から首だけ出した政吉を見ると

「とっとと出て行きやがれッ」

最後の嘲罵を背に受けて、風呂敷包み一つ持った「負け犬」は、降りしきる雨の町に放り出され、いずくかへ姿を消した。

善夫と栄子は、遂に完全に勝った。

## 破 局

天下晴れて二人きりになって、栄子のはりきった。これから商売に身を入れようと、朝は早く起きて、店の掃除、御飯の支度と、か

いがいしく動いた。善夫もまた元のようによく働いたが、一日二日と経つうちに、お客は目に見えて減って行った。殊に古い馴染みの客が、齒が抜ける



ようにポツポツと来なくなった。

「何だか暇だわね」

昼日中に二人共、手が空いて煙草をすうことが多くなった。栄子は店の中を見廻して「こうして見ると、政吉の好みだけに何となく古くさいわね。思いきって、お店の造作を変えてみようかしらね」

「ウン……」

善夫は気のない返事をした。

二カ月ほど経って、秋風が身にしむ頃のある日、一通の手紙が二人を動揺させた。

それは新那須野相互銀行からの、内容証明配達証明のハトロンの封筒だった。

「なあに、これ、一体」

善夫が明けて見て、顔色が変わった。

それは相互銀行から、この店と土地を担保に二百三十万円借金し、利息が三カ月滞ったための催告状であった。

借り主は斧田栄子、代理人斧田政吉となっていた。「再三の催告にも拘わらず、何等御返事がないため、七日以内に延滞利息、手数料共十一万三千八百五十五円をお納め願いたく、これ以上延引する場合は、差押え執行もやむをえず……」

と、きびしい文言であった。

「こりゃ一体、何のことだ」

「知らないわよ。寝耳に水だわ。妾、お金なんか借りた覚えのないもの」

「畜生ッ、やりやがったなッ！」

一瞬、善夫の顔は悪鬼のようになった。

これが、あの上品で微笑を絶やさないノールな善夫の顔かと思うほど、醜惡に歪み、兇暴な目つきで栄子を睨んだ。

「お前、判こを盗まれたなッ！」

栄子は、すっとんで筆筒の鍵をあけて調べた。

「ちゃんとあるわよ」

「馬鹿ッ、知らない間に持ち出されたんだ」

「まあ！ あいつ、そんな大それたことしやがったのかねえ」

愚かにも氣力を失い、しおれた政吉の姿を想い浮かべて、栄子には信じられないことだった。

「どうしたらいいだろうねえ」

善夫は齒を剥き出し、噛みつくように栄子にくっつかかった。

「ほんとに馬鹿だな、お前は！」

いまこそ、善夫の本性が剥き出された顔であった。

善夫の頭の中は、忙しく廻転した。その中でも約三カ月前のあの日のことが浮かんだ。

それは月曜で店の休みの日だった。釣りに行くと言って善夫は登記所へ行って店の登記簿を調べたのだった。

「あの時は家の名義が政吉か栄子かを調べに行ったのだが、あの時は、たしかに『無疵』だった。その後、権利書も栄子が持っていることを確かめて俺は肚を決めたのだったが、あれからすぐやったに違いない。」

「こんな陥し穴にひっかかるとは……」

「俺、ちょっと調べてくるぜ」

白衣を脱ぎ捨て、ネクタイをつけると、とび出して行った。

栄子も仕事を手につかず、早めに店を閉めて風呂に行き、酒の肴をいろいろ買ってきて善夫と一緒に飲もうと思って待っていたが、いつまで経っても善夫は帰って来なかった。

しびれをきらして手酌でチビチビやっている、十一時頃になってグデングデンに酔っぱらって帰ってきた。

「おいこらっ、栄子ッ。馬鹿やろう」

とどなり、暴れて手がつけられない。折角整えた酒の膳も足で蹴ってひっくり返して、二階へ上ると寝てしまった。



酒はこぼれ、座敷中に散らばった食物や、皿小鉢のかけらなどを片づけながら、こんな時、政吉がいたら便利だったと思った。

裸になって善夫の蒲団の中へ入りこみ、抱きついて気を引いてみたが、善夫ははねつけて向こうを向いてしまった。

翌日は店を休んだ。善夫は二日酔いで起きないし、栄子も仕事をする気がしなかった。そこへ又、内容証明の郵便が配達された。

栃木双信商事という金貸しの会社からで、昨日と同じように斧田栄子、代理人斧田政吉の名義で、店を担保に「二番」として、百六十万円、この三カ月の延滞利息十三万八千四百円を支払えと言ってきた。

「まあ！ 両方で三百九十万だわ。どうだろうねえ、あの悪党！」

郵便を善夫に見せたが、既に昨日、調べて知っているらしく、見ようとしなかった。

昼すぎになって善夫はプイと、どこかへ行ってしまった。

栄子もムシャクシャして、映画でも見に行こうと思っていると、表戸を叩く音がする。

開けて見たとき、栄子は「アッ」と危く声を出すところだった、キチンと背広を纏っているが、善夫に瓜二つの男が立っていたからだ。男は一礼して名刺を出した。

栃木双信商事株式会社顧問

弁護士 笹岡達四郎

「斧田政吉さんは、おいでですか」

「ハ、政吉はおりませんが」

「ああ奥さんですね。私どもの社の通知をこちらになりましたか」

## 天星社刊

### △限定版グラビア写真集▽

### 在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のわずかなを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

「ええ、あれ、妾の全然知らないことなんですよ。妾の知らない間に政吉が勝手にお金を借りて持ってっちゃったんです」

「何か新しい御事業をはじめるとか言っているらねましたが……」

「嘘です、嘘です！ 妾だまされたんです」

「それは困りましたな。奥さんは、もちろん御承知のこととおっていましたが。私どもの社の者も何度かお宅へ伺ったはずですが、それで政吉さんは、いつお帰りですか」

「政吉とは別れました」

「ハハア、御離婚なさったんですか。それは困りましたなあ。で政吉さんはいまどこに」

「知りません、そんなこと。とにかく、これは政吉が勝手に借りたんで、妾は知りませんからね」

「ハハア、そんなことおっしゃられても通りませんよ。ちゃんと奥さんがお借りになっているのですし、奥さんの委任状も印鑑証明も揃っているのですから、何ならお目にかかけましょうか」

鞆から何枚もの書類を出した。栄子は何か善夫に責められているような錯覚さえおこかそうになった。上品で丁寧で、ものやわらかな口調まで似ているのだ。それでいて冷やや



かにネチネチと責めてくるのである。

「とにかく御利息を払っていただかないと困るのです。銀行の方でもそうでしょうが、いずれ差押えから競売ということになると大変ですから……」

栄子が激昂すれば慰め、同情しながら、いつの間にかやわらかい口調の中に冷厳な法律用語で法のきびしさを示してくるのは、悪徳医師が医学的な特例をひいて、気弱な患者を迷わせるのに似ていた。

結局、笹岡弁護士に脅かされて栄子は十三万八千円の利息を払わされた。

夜になって、また酔っぱらって帰ってきた善夫に話をすると、

「バカな、お前って女は。そんなもん、払う奴があるかよ。いいか、この先、両方の利息を合わせると八万円も毎月、払ってかなきゃならねえんだぜ。毎月、八万も取られてやっ行けるかよ」

「ほんとにあの悪党奴。どこにいやがるんやろう。だから少し家に置いときゃよかったんだよ。あんたが出せ、出せって言うから、あんなことまでして追い出したんだけど」

「政吉の野郎なんか、こんな智恵はまわら

ねえ。後ろで清太郎が糸をひいてるんだよ」

「それにしても銀行や会社の人は何度も調査に来たし、催促状だって何回も出したと言ってたよ。皆、あんな畜生が一人で隠してやがったんだよ。あんな間抜け面しやがって、ヌケヌケと妾達をだましてたんだよ。畜生、今度会ったら、八つ裂きにしてやるから」

「フン、見つけたって野郎は金なんか持ちちやいねえよ。奴を痛めつけたって借金が棒引きになるわけじゃねえ」

「お金は清太郎の奴が握ってるのかね」

「まあ、そんなとこだろう」

善夫は険しい目を据えてじっと一点を見つめながら、何事か考えていた。

## いつの日か

それから四、五日して突然、善夫は姿をくらました。栄子の指輪や着物がゴツソリと持って行かれていた。

半狂乱になった栄子も、間もなくどこかへ行ってしまった。空家になった店は、風呂屋の徳五郎が管理していた。

その頃、政吉は大塚の家でゴロゴロしていた。気が向けば店の仕事も手伝ったが、めっきり元気がなくなって一ペンに十も年をとっ

たように老けこんでいた。

大田原からは、徳五郎から委しく栄子達の動静や、事件のてん末を知らせてきていた。

栄子が家をとび出してから十日経った。

清太郎と政吉は一ぱいやりながら、

「もうそろそろ、お栄さんが来てもいい頃だが、いままで待って来ねえところを見ると、だいぶ頭に來てるな。政さん、お栄さんは見込みがねえぜ。ない縁と思って諦めな」  
「ウン……」

政吉は淋しそうに、うなずいた。

大田原の店は、いつの間にか政吉が帰ってきて、東京から十八、九の若い男と二人で店を開けた。もちろん相互銀行からも笠岡弁護士も二度と現われなかった。

客もボツボツ来るようになった。

店の看板は、まだ「バーバーエイコ」と、そのままになっていた。

政吉は、

「栄子がもし帰ってきたら、はねつけてやろうか。それとも許して家に入れてやろうか」  
男世帯の殺風景な夕飯の膳に向かって、栄子の面影を浮かべながら毎日、栄子の帰るのを待っていた。





作

創

# 新・乱れ髪夜話

久我風太郎

(一)

美鈴は野村を部屋に待たせて、銚子の代りをとり立った。廊下に出ると、赤いマットが敷きつめてある。彼女は、ながい裾が邪魔になった。

薄暗い階段を降りて、岩風呂の前を美鈴は歩きながら野村浩司のことを考えていた。お互いに好意を感じている。客と芸妓といった隔てはない。今がチャンスであるかも知れない。美鈴は長い廊下をいくつも曲折しながらその時のことを想像して胸をはずませる。

「あら、おねえさん、今晚わ」

雛妓らしいのが挨拶をして通りぬける。

美鈴はすっかりスリッパが大いに邪魔であった。綺麗に磨きがかけられているようでも廊下はきたない。襦をとって歩かなければお座敷着の裾がすっかり黒ずんでしまう。が、さりとて、裾からは嫌いだ。赤い長襦袢をそっくりだして歩くのは、どうも性に合わない。変な潔癖感があるのが、この世界にいながらおかしくらいだと自分でも思う。そのときである。どこにひそんでいたのか二つの黒い影が突然に現われたかと思うと、美鈴の前後をはさみうちにした。

彼女はふいの驚きに悲鳴をあげる。いや、

あげたつもりであつたが声にならなかった。離れ座敷と本館を繋ぐ渡り廊下、ホテルの中で一番さびしい場所である。

とっさに彼女は、手拭らしいもので猿轡を噛まされた。懸命にもがいたが後手に縛りあげられ、若い芸妓の軀が軽々と宙に浮いた。

(二)

田丸建設の下請をして土木建築業者のなかでも特に羽振りをきかせている宮原謙蔵は、桔梗の間でさっきから二人の若い芸妓に侍<sup>かし</sup>ずかれて大いにど気嫌の程であつた。

「ねえー」



右側でしなだれかかっている姉芸妓の寿々が鼻声で甘える。

「ねえ、はやく決めてちょうだいな」

「きめる？」

と男は、うれしそうに装ってみせる。

「あたしにするか。それとも千ちゃんにするか、どちらか、はっきりしておいて欲しいのよ」

「なるほど、なるほど」

といったが、胸の中ではバカな女共だと嗤っている。だれがお前たちのようなあばずれ女と寝るものか。美鈴がこないのならいざ知らず、ふざけるのもいいかげんにしろ。

「そうよ、そうよ」

千鳥も負けてはいない。彼女はお座敷着のながい裾を乱して、しなだれかかる。どうやら濃厚な色香にまよわせる作戦で、姉芸妓の寿々に、はっきりと挑戦するかまえのようである。

寿々も意地がある。平素はかわいい妹芸妓でも、この場合はライバルだ。お互いに芸と軀を駆使して、上カモを攫うより仕方がないのだ。

「まあ待て。お前たちのように、そうヤイヤイやられたんじゃ落着けない。まあ、どちら

にしても悪いようにはしないから、ゆっくりとやろうじゃないか」

彼は美鈴が連れられてくることを、彼女等には知らせていない。寿々たちにとって美鈴は商売仇である。東西温泉旅館専属の寿々、千鳥と大成温泉ホテル専属の美鈴とは、社長芸妓はいうに及ばず、勝手元の小女から出入りの商人までが敵愾心を抱いている始末である。従って、東西側の芸妓をこのホテルに呼ぶのも、客の好みとはいえ、憚るところである。

宮原はそれをよく知っている。寿々たちのところへ、大成の看板芸妓美鈴が現われたらどういうことになるか、近來これほど興味津々とした出来事はないだろうと考えている。顔を合わせれば恐らく只では済むまい。打々発止と火花を散らすことであろう。だが、美鈴はキャリヤで寿々たちの敵ではない。手もなくやられるだろう。彼にとってそこがまたなんともいぬ微妙なところなのだ。

美鈴は大成ホテルのピカ一芸妓、若くて美しさは抜群。この温泉界隈で評判の芸妓である。この俺が美鈴に想いをかけて、殆ど日参のように足を運んでみても、あいつは振り通していやがる。それならそれで……。

彼は自分がとった非常手段が、うまく効を顕わすことを願った。

### (三)

「社長」

襖の外で男の声がした。あたりを憚る声である。

「待っていたぞ。はやくこっちへ」

襖が静かに開かれ、銀座四郎が敷居のところに片膝をついて挨拶した。

「例のものを連れてまいりました」

といいながら相棒に指図して、縛ったままの美鈴を前に突き出した。さっきから色っぽい仕草で宮原にしがみついていた二人の芸妓が、同時に「ひえー」と驚きの声をあげた。

「静かにするんだっ」

宮原は親分の貫禄を示すように胸を張っていった。

二人が去ると宮原は、さっきから色を失っている寿々たちに笑いかけた。

「いいか、こいつはいわずと知れた美鈴だ。こここの大成ホテルのピカ一芸妓だ。お前たちも同じ商売なら、こんな小娘に負けて口惜しかねえのか。美鈴が自由を失っている今がチャンスというものよ。存分になぶってもいい



ぜ。おい、寿々に千鳥。そんなに頼えていねえで、ひとつ思いつき責めてみちゃあどうだ」

彼は二人の芸妓をそそのかす。こいつらにだって、同じ稼業の評判を気にしているのに相違いない。喧嘩の一つや二つあったとしても不思議ではない。

「そうですねえ。どうする千鳥ちゃん」

寿々は氣をとりなおしたように男に酌をしながらいった。千鳥は美鈴と同じくらいの年である。むろん、この道に足を踏み入れたのは千鳥の方がずっと早い。が、稼ぎも人氣もさっぱりだ。宮原の言葉に、むらむらと得体的の知れない憤りみたいなものがわいてきた。「寿々ねえさんはどうするつもり？あたしはミーさんのお言葉に従うつもりよ。こんなチャンス、またとないんじゃない？」

千鳥は貪婪な眼を細めて、哀れな美鈴のなまめいた姿態を眺めた。

美鈴は後手に縛られて、念入りの猿轡まで噛まされている。紫地のハデなお座敷着の裾を大きく乱したまま、前につんのめった状態で動こうとしなかった。ただ、ときに撫肩が大きく息づくだけである。

「いいわ。徹底的にいじめましょう。すこし

ばかり人氣が出たからって、大きな顔をされたんじゃ、あたしたちの立場がないわ。ミーさんさえよろしければ、責めて責めて、責めぬいてみせますわ」

寿々はにわかに元氣づいて言った。

「おいおい。あまりはりきるな。これでも俺にとつては大事な生人形だ。傷をつけたりしちゃあいかなぞ。そこところは手ごろをくわえろよ」

「わかっていますわ。つまり気分が満喫できればいいんですよ、ミーさん流に。ねえ？」

千鳥がニヤリとして言った。

「おい美鈴。おまえには、あたしたち、いつも煮湯を吞まされていたんだよ。おまえのために稼ぎがさがったんだ。二度とお座敷に出られないようにしてやるから覚悟を申し」

寿々は美鈴のそばににじり寄って悪態をついた。千鳥も立ちあがった。ながいおひきず

りの裾をさばくと、ずかずかと美鈴のそばに寄ってきて、白い花びらのような衿あしをじっと見おろした。そして、二人は嫉妬の形相を現して、寿々は美鈴の高島田を、千鳥は衿くびを共に力を込めてぐっとつかんだ。

「うっ、うっ、ううう」

美鈴は恐怖のうめきを洩らした。

#### (四)

梅の間に一人残された若い医師、野村浩司は、辛棒強く待っていたが、余りにも遅い。彼はとうとうしびれをきらせて帳場に電話をかけた。

「先生と美鈴との仲は、よく存じあげております。あの妓が先生を残したままにするなんてことはまずあり得ません。さっそく、調べさせますので、その間、よろしかったら別の妓を差し向けますが」

「いや、きょうはこのまま帰る。美鈴のことは自宅の方へ電話してくれ」

「自宅へ……でございますか？」

「いいんだ、美鈴のことは公認だ」

野村は裏切られたようなさえない面持ちで帰って行った。

#### ○

支配人から相談を受けた、ホテルの社長秘書内藤日出三は、泊り客名簿を繰ってみて、

「宮原」の名前にひきつけられた。

夜の底が深い溪流にかけられた渡り廊下の中央に立って、あれこれと思索していた。ホテル中の者が、その美鈴に対する執心ぶりを知っている宮原謙蔵がきている以上、桔梗の



間がなんとなくひっかかる。だが、むやみと踏み込むわけにもいかない。

ちょうどそのときである。女の笑い声がきこえ、だんだんこちらに向かって近づいてくる気配がした。彼の直感が働く。

笑い声は、やはり芸妓たちであった。

「ミーさんったら、今時分—」

「嫉くな嫉くな、二人そろってふられてみりや、あきらめもつくわいなあ」

「それにしても、ミーさんったら、相変わらずの変態ぶりね」

「盛りをすぎて金のある男と云うものは、あんな趣味が多いものよ」

二人はまた笑った。が、廊下の中央に男がいることに気がつく、急にだまりこくってしまった。

内藤は背後で衣ずれの音がしたとき、妓たちの方にくると向きなおった。

「なんなの、あんた！」

年配らしい芸妓のほうが、警戒しながらとがめる。

「姐さんたちにちよいとうかがいますが、もしや東西旅館の寿々さんと千鳥さんじゃございませんか」

彼は小腰をかがめておだやかに云った。

「そうよ。それがどうしたっていうの」

寿々は強気になった。

「あんた、この人ね」

千鳥の方は、ふるえている。寿々のうしろにぴったりと軀を寄せて男を見守った。

「ごらんのように、こののハッピを着ておりますんで、間違いございません」

「そのあんたが、あたしたちに何か用でもあるの」

「お手間はとらせません。しばらくお時間を頂きたいと思います—」

「なに云ってるのよ。あたしたちは、これからも一軒まわるところがあるのよ。またこの次にしてもらいましょ」

「ちよっとおききするだけでございます」

「だったら、ここでお云いな」

「へえ、それが……。まことに勝手なお願いですが、この廊下の渡りきったところの角に部屋がございます。そこまでおいでを……」

内藤は支配人の清水がよく使う手振りで腰をかがめながら云った。

「ちよいと、おふざけでないよ。お前さんはこの使用人だろう。はばかりながらあたしたちは東西旅館の抱えのものさ。なにかいいがかりでもつけて、二度とここへ足を運ばせ

ない魂胆だろう」

「とんでもございません」

「いや、きつとそうだよ。この社長か女将にでもいいつけられて、いやがらせをする気だろう。東西の方にだって、この芸妓衆の顔をときどきみかけることだってあるのさ。こんなことはお互いさまだよ」

「そんなことじゃございません。私はお察しのうちにこの使用人ですから、芸妓衆がどんなことをしようが口だしできるもんじゃございません。いかがでございます。このハッピを脱いだら、私も只の男、只の客としてほんの一時間、つきあっていただくわけにはまいりませんか。もちろん花代として、これも表向きのものでなく二本ずつにさせて頂きたいと思いますが—」

「あんた、一体、あたしたちに何をききたいんだねえ。変なことをきかれても困るわ」

怪に傷持つ二人だが、さりとて四万とは惜しい話。寿々の言葉が急にやわらかくなるのも無理のないこと。

「ご承知くださいますか、それはありがとうございます」

内藤は深々と頭を下げた。

「どこなの？ へんなお座敷はいやですよ」



「大成ホテルにへんなお座敷などあろう筈が  
ございません。東西旅館さんと何もかも同じ  
でございます。どうぞこちらへ」

内藤は先にたって歩きだした。あとについ  
てくる二人の芸妓をたしかめながら、内心で  
ぺろりと舌を出した。

## (五)

「な、なにをするのさっ。だましたわねっ」

さして広くもない座敷の襖に鍵をおろされ  
るのを見て女達は危険を感じ、寿々が声をは  
りあげてわめいた。

「お前はだれなのっ。帰して、帰してよっ」

千鳥が必死になって内藤にしがみついた。

「うるせえー」

男はすっかり豹変していた。さっきまでの  
あのやさしい低姿勢は消えて、ドスのきいた  
凄みのある声がかえってきた。

裾の乱れるのもかまわぬ二人の芸妓にぶら  
さがられるような恰好になった内藤は、千鳥  
をまず、もぎとるように突き放して、寿々の  
衿をわしずかみにすると、あいている右の掌  
で化粧やけの顔を思いつきりぶちのめした。

「ひいーっ」

ふたたびとりすがる千鳥を他愛もなく突き

放すと、内藤は大きくよろめく彼女を足で蹴  
りあげた。千鳥の裾前が大きく割れて、真赤  
な長襦袢はおろか白い脛にからまった燃える  
ような腰巻までがそっくりさらけでる。が、  
彼女は起き直る気力もなく畳にうつ伏してし  
まった。

次に悲鳴をあげたのは寿々である。男にく  
るりとうしろむきにされると帯をつかまれて  
と解かれる。

「いや、いやっ」

彼女は帯の引かれるのにつれ、くるくるま  
わり重心を失って、これまた他愛もなくどし  
んと音をたてて転がる。

「おねがい、それだけはゆるしてー」

内藤はぐったりしている芸妓たちを長襦袢  
一枚にむくと、腰ひもでめいめいを後手に縛  
りあげた。そしていやがる二人をずるずると  
引きずって、床の間の柱にくくりつけてしま  
った。

「いい眺めだぜ」

彼は、さすがに荒い息をしながら云った。

「もっといい眺めにしてやろう」

寿々の長襦袢の胸もとをぐっとはだけた。

「うっうっ、ひいーっ」

「ねえさんを許してあげてー」

千鳥がかすれた声で云う。

「お前もこうしてもらいたいのか」

「いや、いや」

「そうか、いやか、それじゃよそう。その代  
り、長襦袢の裾をこうしてやろう」

やにわに長襦袢の裾に手をかけてくるりと  
まくってしまう。横倒しになった千鳥が「あ  
れーっ」と悲鳴をあげた。

「お、おねがい。あたしたち、どうしてこん  
なひどい目にあわなきゃならないのか教えて  
ちょうだいっ」

寿々が観念したように云った。

「教えてもらいたいのは、こっちだ」

「あたしたち、なにも知りません。今晚、ご  
存じの宮原さんに呼ばれてお邪魔しただけで  
すからー」

寿々が云うのに千鳥が続いた。

「そうよ。宮原さんに呼ばれて、あたしたち  
稼ぎにきただけよ」

「お前たちをわざわざ呼んでおきながら、泊  
るつもりの宮原謙蔵が、だまって帰す手はね  
えだろう。おかしいね」

「それは、あたしたちが始めからの約束で泊  
らないだけです。ミーさんには、あとでここ  
の誰かさんを呼ぶつもりなんですよ」



「とぼけるなっ」

内藤は、いきなり千鳥の頬を張った。ぴしっと、こころよい響きがかえってくる。濃い目に化粧した顔が痛さに歪む。

「ゆるしてー」

「だ、だれかたすけてっ」

「うるせえっ」

寿々が、がっくりと頭をさげる。

「はやく云えっ。でないと容赦なくぶっとばすぞ。紫色の顔になるぜ。それがいやなら素直に吐くんだ。お前らがいくら隠しだてをしだって、こっちはちゃんと目星をつけているんだ」

内藤は、二人の前にどっかりとあぐらをかいた。彼のぶこつな膝頭が、千鳥の燃えるような腰巻の膝にぴったりとついている。

「あなたが、ききたいと云うのは、美鈴ちゃんのことでしょう」

寿々が重い口を開いた。

「なんだ、わかっているじゃねえか」

「美鈴ちゃんが、とつぜん消えてしまったので、探しているわけね」

千鳥は、男の膝が押すようにしてくるのでびくびくしていた。

「そうだ、二人ともよく知っているな。おや

その見当はつけているようなものの、相手はなんといっても客のこと。うっかり踏み込むわけにもいかなえ。そこでお前たちにはっきりしたことをききたかったんだ」

「美鈴ちゃんは、たしかに桔梗の間にいるわよ。それもあたしたちのように縛られて」

寿々が云った。

「帰されたあたしたちが、美鈴ちゃんに、やきもちをやくのは当り前でしょう。ミーさんにだって、うらめしい気持でいっぱいよ。あたしたちが呼ばれたのは、美鈴ちゃんがくるまでの繋ぎですものね。彼女が現われればこのとおりのお払い箱になっちゃうー」

年増芸妓は興奮ぎみでブチまける。

「多分、そうだと思っていたよ。しかし、よく話してくれた。どうも手の早いのが俺の性分だな。すまなかった。お前たちはこのまま帰してやる」

「ほんと？」

千鳥が笑顔を向ける。

「だが、もうひとつ合点のいかなえことがあるんだがー」

「わかっていますわよ。美鈴ちゃんが何故、桔梗の間に行ったのかと云うことでしょ」

「そうよ」

「それは、ミーさんところの若い衆にかどわかされて、担ぎ込まれたのよ」

「やっぱりそうか」

彼は二人のひもを解いてやった。

「痛い目にあわせてわるかったな。これは吐いてくれた礼だ。二本と云うわけにはいかねえが、一本ずつとっておいてくれ」

「あら、いいんですよ。それよりも、あたしはちよっぴりいい気分だったわ。強くてたくましい男にひくくられて自由を失い、その人の意のままになるー」

千鳥が急に陶醉したように云った。寿々も金をみせられると、ご気嫌になった。

「それにしても、少々痛すぎたわ。顔がほてっている感じよ」

乱れたままの寿々が、部屋の隅にある鏡台に向かうと頬を撫でながら云った。

内藤日出三は、そんな二人を部屋に残したまま、桔梗の間に急いだ。美鈴は宮原のために手込めにされてしまったろうか。あの美しいピカ一芸妓の美鈴が、いやらしい男のために、骨の髄までしゃぶられてしまったのだらうか。彼はそう思うと、ふだんはそれほどまでに感じなかった桔梗の間がひどく遠いもののように感じられた。



## (六)

美鈴は寢室に引きずり込まれていた。どんなにもがいても両手を後手に縛られ、どんなに救いを求めようとしても猿轡を噛まされては、相手の思うままになるよりしかたがなかった。が、それでも彼女は、だれかたすけてくださいと云う、言葉にならない願いのどにまでだしていた。

美鈴はお座敷着の盛装のままであった。裾や胸もとだけが乱れている。燃えるような長襦袢が、見下ろしている宮原謙蔵の眼を熱っぽくさせていた。

「どうだ、美鈴―」

彼はいかにも満足そうであった。これで美鈴は俺のものになる。今晚はゆっくりと時間をかけて馴れてやる。このなまめかしい妓の衣裳を一枚一枚じっくりと脱がせながらよろこびを一人じめにするのだ。ととのった顔。姿態の美しさ。この界限はおろか、どこの誰にも負けない、人気絶頂の若い芸妓美鈴を、一晩中、泣かせることができるのだ。

そう思うと、宮原はぞくぞくするほどうれしかった。

美鈴は、まだ抵抗するだろう。残りの力を

ふりしぼって、もがきつづけるだろう。裾を胸を、髪を、もっともっと乱してもがくだろう。暴れるがいい、俺のこの腕の中でな。

宮原は一步美鈴に近づいた。すると彼女は不自由な身で退く。男と妓との間隔は縮まらない。三方が厚い壁にふさがれて、正面の、男が立ちだかっている背後の襖には、すでに錠がおろされている。どんなにさからっても縛られた身では逃げ出せまい。さからえばさからうほど、この男をよろこばすことになるだけだ。

美鈴はじっと男をみつめていた。これまでも宮原に対しては、充分に注意してきたつもりである。自分に懸想していることはなんとなくわかっていて、それだけにいつどんなかたちであられるか平素から一抹の不安があった。

今宵、この男が来ていることは全く知らなかった。野村浩司が呼んでくれた嬉しさに浸っていた頃、一方ではこの男が、虎視眈々と自分を狙っていたのだ。

美鈴は、担がれてこの座敷に運ばれたとき東西旅館の寿々たちがいることに、まず度胆をぬかれた。めったに顔を合わせない敵方の芸妓が二人もきている。それも自分が嫌って

いた男の気嫌をとっていようとは、夢にも気がつかなかった。

そればかりではない。自分は宮原の命令で二人の芸妓にさんざんいじめられたあげくの果てがこの始末なのだ。寿々には大事な高島田をわしづかみにされて座敷中を引きずりまわされた。裾が大きく割れて、緋色の蹴出しが丸出しになったことだろう。もちろんあばれた。相手が相手であるため、口惜しさと羞しさは輪をかけて大きかった。懸命になってもがいた。その拍子に猿轡がゆるんだので、ありったけの声をだしてたすけを求めた。

「畜生っ、なにをほざくんだよ」

寿々がわめく。まるでヒステリックになって美鈴の頬をぶつ。そのたびに、うしろへのけぞる。

「ゆ、ゆるして―」

「ねえさん。手ぬるい、手ぬるい。こんどはあたしにバトンをゆずってちょうだい」

千鳥のやり方は、もっと残酷であった。寿々がしたように衿くびをつかむと、ところかまわず引きずりまわして、美鈴が、もろくもぐったりとなったのをみとけると、馬乗りになって力の限り、顔を、胸を打ちすえた。

「あ、あれ―」



「畜生っ、畜生っ、畜生っ」

「ひ、ひ、ひいっ」

「それ、太ももが丸だした。あはははー」  
まるで正気のさたではなかった。

「おねえさん、ゆるしてください。おねがい

宮原さん、おねがいです」

美鈴は力のない声で哀願する。

「うるさいわね、まったく」

千鳥は落ちている手拭いを拾うと、ふたたび、きっちり猿轡をしてしまった。

「うっうっうっ」

美鈴のうめきをよそに、二人の芸妓は意気揚々として、いたぶり続けた。

「うふふ、ご苦労ご苦労」

宮原は二人を犒<sup>ねぎ</sup>らった。

「もっといじめましようか。ねえ、美鈴の裸踊りなんかいかがです」

寿々は調子づいて云う。

「うふふ、もういい。それは俺がやる」

「あら、ミーさんったらヌケヌケと……」

「ほんと。嫉けるわねえ」

「美鈴がうらやましいわ」

寿々が、自分の乱れた裾を直そうともしないで深い溜息をついてみせた。

それから暫くたって、宮原からなにがしの

金をもらうと、彼女たちは出て行った。

美鈴は、二人つきりになると、ますます不安になった。独酌でやりながら、いやらしい眼が絶えず自分を見据えている。できることなら乱れたところを少しでも直したかった。縛られたまま、こんな男の餌食にされてはたまらない。どんなことをしてもこの場をのがれなければー。

が、そんな気持とはうらはらに、宮原謙蔵はよろよろと立ちあがると、舌なめずりをしながら美鈴に近づいた。

「どうだ、美鈴。観念したか。それとも最後の最後まであきらめずに、こんどはこの俺と相撲でもとってみるか。その裾をもっともつと乱してな。こ、このようにもつと——」

「あれーっ」と悲鳴をあげたつもりでも、猿轡に邪魔をされて声にならない。それをいいことに、男の手は彼女の裾をじわじわと捲りあげてくる。

「燃えるようだな。たまらない。うふふ」

彼は真赤な下着をみて嬉しそうに笑った。

「これから、たつぷりと可愛がってやる。

よろこべ、うんとよろこべ」

そう云うと、あばれる妓を軽々と横抱きにして、次の間の寝室に運んだのはもちろんの

ことである。

○

男はまたも一歩近づく。そして身をよじらせて退がる美鈴。

「そんなに、俺がきらいなのかっ」

こんどは二三歩近づく。妓は男に押された恰好で、どうしてもあとずさりをしてしまうのだ。彼女の背後には、ふかぶかとした真紅の夜具布団が敷かれてある。美鈴は泣き出したい気持であった。虫ずが起きるくらいに嫌いな男のために、手込めにされるのかと思うと、生きている心地がしなかった。

「どうれ、いつまでもじらしては目の毒だ。そろそろ本格的に骨の髄までしゃぶらせてもらおうか」

宮原は、いきなり美鈴に襲いかかった。

後手の縛り目も強く、唇も閉ざされた小雀は、いよいよ風前の灯である。美鈴は、それでもなんとかのがれようとする。

「うふふふ」

こたえられないように、跪く美鈴の軀に手をかけると、宮原はひとまず縄を解いた。衣裳を脱がすのに都合がわるいからだ。

妓は力いっぱいにあばれた。今になっては羞かしいという気持はなかった。一瞬ではあ



ったが、両手が自由になったのをさいわいに猿轡をはずそうとした。が、悲しいかな男の強い力には抗すべくもなく、衣裳ははがされ長襦袢までむかれてしまった。

「美鈴、美鈴っ」

狂ったような男の暴力にひしがれた可憐な若肌は、真赤な腰巻一枚にされて、ふたたび後手にぎっちり縛りあげられてしまった。

「うっ、ううう」

「美鈴、美鈴、美鈴っ」

いきなり接吻の雨だ。

『野村さんー』

彼女は、心の中で恋しい男の名を呼んだ。

もうだめだと思った。どんなに力の限りにもがいてみてもどうなるものでもなかった。あばればあばれるほどに男をよろこばす。そして野獣にしてしまうのだ。もう、このままじっとしていたほうがいいかも知れない。彼女はふと、こんなにして男に自由にされる妓は、自分だけではないだろうと思った。さっき自分をいじめた二人の芸妓だって、はじめはこのようにされたのかも知れない。この男のいやらしい悪趣味の犠牲者は、自分だけではないだろう。きっとそうなのだ。みんな、みんなこのようにされて、男の毒牙にかかっ

ているのだ。ただ、はずかしいので自分の口からは云いだせないでいるだけなのだ。自分のように、男に対する一途な憎しみもあるだろう。あるいはこのような変態的な行為に、一種の恍惚感みたいな気分<sup>さか</sup>にひたっていく、女の性<sup>さが</sup>み<sup>た</sup>いなものもあるだろう。

『野村さんー』

美鈴は悲しく呼びかけながら気を失った。

## (七)

どのくらいの時間がたったのだろう。美鈴はふわりと宙に浮いているような感覚に、はっとして瞳を開いた。

「おい、美鈴君っ、しっかりしな」

彼女は自分を抱きあげている男が、内藤日出三であることをたしかめるのに、かなりの時間を要した。頭がひどく混乱していた。

宮原に。——そうだった！ ハッとして彼女は自分の姿をみた。長襦袢の上に着物が重ねてあった。男らしいぶこつなかけかただが裸でなかった。

美鈴は内藤に救われたことを知ると、涙がとめどもなくあふれてきた。悲しみの涙であった。どうせたすけてくれるのなら、なぜもっと早く——。

「宮原さんは？」

と口に出してみても、顔を赧らめた。

「もう、心配しなくてもいいよ。あいつは俺がかたづけた。そこでよく眠ってる」

美鈴は壁の方をみた。なるほどながながと仰向けになってのびている。

「おろしてくださいー」

「いや、これは失礼」

美鈴は静かにおろされた。

「向こうの部屋に、これが落ちていたよ。野村さんにもらったんだね」

内藤は白い歯をみせながら、大きな花簪<sup>かんざし</sup>を差出した。

「いや、さしてやろう。髪が少し乱れているが、やっぱり、美鈴君はきれいだね」

彼はなにもかも気づいている。自分をたすけにくれたときの光景をみて、凡て<sup>すべて</sup>を知ったのに違いない。でなかったら、こんなにもやさしい筈はない。平素から気の短い彼を知っている美鈴にとっては珍しく、それだけにうれしくもあった。

美鈴はふと（あの人でも女を縛るかしら）と思った。そして今、彼がさしてくれた花の簪に手をふれてみて、にっこりとした。

(終)





1

「声をたてるな！ 声をだすと、いのちはねえぞ！」

五郎は、きのう買ったばかりの拳銃を、女の乳房に突きつけた。ブロンズ仕上げのずっしりしたポリウレムのやつで、六千五百円も取られた。とてもオモチャとは思えない貫禄のあるしろものだった。

アケミハ、ひくツとのどをつまらせた。全身の筋肉が硬直する。無理もない。すでに午前二時をまわっているだろう。この深夜、拳銃を握っての家屋内無断侵入である。ひとめで強盗と知れる。おまけに、九十五センチの

とんでもない返礼

## 魔性の乳房

藤 見 郁

自慢の乳房に、拳銃のさきを遠慮なく、ぐいぐいとねじこんでくる。

「おめえは、女中だな」

拳銃のさきを、やわらかく盛りあがった乳房の頂点につよく沈ませて、こねくりまわすように、なおもぐりぐりやりながら、五郎は部屋のなかを油断なく見まわした。

六畳の和室で、壁際にベッドがあり、そのまくらもとには三面鏡が置いてある。女はそのベッドに寝ている。女中の寝室にしては、気のきいた小部屋だった。

木造二階建てアパートの、屋根裏か物置きのようにみすばらしい殺風景な自分の三畳の部屋を思いだして、五郎は腹が立った。

おまけに、女の胸もとからは、香水のにおいがただよってくるのだ。五郎の部屋は、すぐとなりに汲み取り式の共同便所があるので一日じゅう臭い。

若い強盗に、じろじろと胸のあたりをみつめられて、アケミは本能的にネグリジェの襟もとをかき合わせた。その動作のせいか、また香水のにおいが、五郎の鼻さきにふんわりとたちのぼった。

「静かにしろ。声をたてるんじゃないぞ。だまって手をうしろにまわすんだ」

もう一度、拳銃のさきで大きくえぐるように女の乳房をねじりながら、五郎は凄んだ。「痛いわ」



アケミは身をよじった。アケミにとって、乳房は二番目に敏感なところなのだ。とくに乳首のさきをぐりぐりやられるのはたまらない。

五郎は左手でポケットから縄をとりだし、もう一度、

「おとなしく両手を背中にまわすんだ」と、凄んだ。

「あたしを縛るの？」

アケミは、五郎の顔をみあげてきいた。

「あたりまえだ。暴れられたら困るからな」

五郎は、拳銃をベッドの上におくと、いきなりアケミの右手首をつかんで背中にねじりあげた。

「あッ、痛いッ」

アケミは、低い声で悲鳴をあげた。

「声をだすなと言ってるのが、わからねえのか！」

五郎は、アケミの細い手首を背中にまわして縛りはじめた。

「痛いわ。そんなに強く縛らないでよ」

「静かにしねえと首をしめるぞ！」

五郎はあわてた。両手の自由が次第になくなっていくのに、女中の表情にも態度にも、それほど恐怖の色がみえないのだ。

くそッ、と思い、力をこめて、念入りに縛りあげる。とくにポリウームのある乳房の下に、ぎりぎり縄をくいこませた。女はこをつよく縛ると、だれでも抵抗力を失うものだ、と、五郎は信じている。

縛りながら、五郎の手はその弾力にみちた若々しい隆起を楽しんだ。

——たまらねえや！

この女中の、どこかもぷりぷりと張りきった肉体の若さと、目の大きい愛くるしい容貌に、改めて五郎は気づいた。

「ねえちゃん、おめえ、すげえ美人じゃねえかよう」

尻に手をまわして、ゆっくりとなでまわしながら、五郎はいった。これはお世辞ではなく、感嘆だった。アケミは腰をねじるようにして、かすかにもがいた。

「おれ、お前が好きになりそうだぜ」

逃げるアケミの尻に、五郎の手がなお這いずりまわった。

アケミはあえぎ、ネグリジェの胸がひらいた。縄目のあいだから、白い、まぶしいよう乳房が、むっくりとのぞいた。

この娘は、夜ねるとき、スリッパもブラジャーもはずして、肌の上に直接ネグリジェを

着る習慣らしかった。

五郎の目が、むきだしになったその豊満な乳房に吸いついた。頂点についている赤いつぼみが、とくに魅力的だった。五郎ののどがぐくりと鳴って、思わずその隆起へ手がのびた。

しかし、きわどいところで、五郎は自省した。おれはこの家へ、なんのために忍びこんだのか。それを忘れちゃいけない。

「この家の主人の寝室はどこだ。二階か？」

五郎は、乳房から目を離していった。この娘のからだを頂くのは、あとのお楽しみだ。かんじんの仕事を、さきにすませなけりゃあ落ちついて気分をだすこともできねえ。

「主人は、今夜いないの。あしたの夜まで出張なの」

アケミは顔をしかめながらいった。背中に縛りあげられた手首が痛い。縄がじわじわとくいこんでくる。

「それじゃ、今夜、この家にいるのは、お前ひとりだな」

「あら、あんた、よく知ってるわね」

「ちゃんと、ガンをつけて忍びこんだんだ。おれも商売だからな。主人は銀座に事務所をもつ商事会社の女社長。男まさりの三十歳で



まだ独身。年増ざかりの色っぽい女だ」

「そのとおりだわ。さすがにあんた、プロの泥捧ね」

アケミにほめられて、五郎は鼻のあたりをうごめかした。

「女社長が出張で留守とは好都合だ。ごつてりと頂いていこう。現金はどこにしまっているんだ？」

五郎は、せいっぱいの凄い目つきをしていった。ともすれば、女中のむっちり白い乳房に負けそうなのだ。上下に縄がくいこんでいるせいか、その魅力的な隆起は、いっそう息づくようになまなましく盛りあがって、その持ち主がなにか言うたびに、ゆらゆらと揺れるのだ。乳房に青い細い筋が浮いてみえるのは、すきとおるような白さのためであった。

五郎は、また負けそうになった。

ベッドの上に足を投げだし、からだをくねらせたポーズでうしろ手に縛られている風情が、ぞっとするほどなまめかしい。

ネグリジェの裾がまくれあがって、片方の足が太腿の上までさらけでている。

もしかしたら、この娘は、パンティもはいていないぞ、と思ったとき、五郎の頭のうし

ろのところが、ハンマーでなぐられたようにしびれた。が、かろうじて立ちなおり、職業意識をふるいおこして、五郎はいった。

「現金はどこだ、早く教えろ」

「あんた、悪いときにきたわよ」

「なんだと？」

「いま、この家には現金なんて千円もないわよ。ちょうど、あちこちへの商売関係の支払いを、全部すませたところなの」

「うそつけ！」

五郎は、どなった。その声の大きさに、あわてて自分で口をおさえた。

「うそじゃないわよ。そのかわり、あさってには、大口の入金があるわ。そうね、千五百万ばかり、現金で」

アケミは、猫のようにキラキラと目を光らせていった。

「ふうん？」

五郎は、キツネにつままれたような顔になって、この若くて魅力的な女中をみつめた。なぜそんなことを言いだしたのか、五郎には、さっぱり見当がつかない。

「あたしね、この家の主人を、憎んでいるのよ、とても」

五郎の表情をみて、弁解するようにアケミ

はいった。

「憎んでいる？ どうして？」

「あたし、あの女社長を殺して、それからお金をみんな盗んで、この家から逃げたそうと考えていたところなの」

「なんだって？」

五郎は、あきれた。たいへんな女中がいたものである。

「この女社長はね、とても気味が悪いの。なんていうのかしら、ひどいアブノーマルなのよ。ねえ、強盗さん、そんなオモチャの拳銃なんかしまつて、きいてちょうだいよ、あたしの話」

アケミは、うしろ手に縛られたまま、しゃあしゃあと語りだした。

——独身の女社長は、夜になると、この若いかわいらしい女中のアケミを、奇妙な方法で愛撫するのだ。

アケミを裸にして、ベッドに縛りつける。手も足もおそろしい力で縛りあげ、それから自分も裸になって、ほそい金属製のムチで、アケミの尻をたたくのだ。

「かわいい、かわいい、あたしのアケミ。あたしはお前をはなさない。なんてかわいらしいおしりなんだろう。逃げたりなんかしたら



あたしはお前を殺すよ！」

女社長は、そんなおそろしい愛撫の言葉を吐きちらしながら、アケミの形よく盛りあがっている白い尻を、ピシッ、ピシッと打ちつけるのだ。

たたきながら興奮してきて、アケミのからだじゅうを、なめたり、吸ったり、噛んだりしはじめる。しまいには妙な道具を持ちだしてきて、縛りつけてあるアケミを猛烈に責めたてる。その執拗な行為に、アケミは耐えきれずに悲鳴をあげ、のたうちまわる。避けようとしても縛られている悲しさに、逃げることもできないのだ。

「ねえ、ひどいことをするでしょう？ それがほとんど毎晩なのよ。あたしだって、いままでに同性愛の経験ぐらいあるけど、縛られたり叩かれたりするのとは初めてで、こわくてたまらないの」

アケミは、五郎にむかって、すがるような目つきをした。

「なるほど、へんな女社長だな」

五郎は首をひねった。話が具体的であり、なまなましくて真実性がある。

ふたりの女が裸になって、夜ごとにくりひるげる妖しい場面を想像すると、胸が熱くな

って、また頭がクラクラしてくる。

「あんた、よく見ると、すごいハンサムね」  
ふいにアケミはさげび、むっちりにとびだしている乳房を、ぐいと五郎の胸にすり寄せてきた。

「あんた、あさっての晩、改めて忍んでおいでよ。そうしてね、こういうふうにするの」  
アケミは縛られたまま、背をのばすようにして、五郎の耳にささやいた。それは、大胆にして、おそろべき計画だった。

「成功したら、あんたに千五百万、そっくりあげるわ。あたしは、あのしつっこい白豚から逃げだせる。お礼に、あたしはあんたの女になってあげてもいいわよ。あたし、あんたみたいな実行力のある男、大好き！」

乳房を五郎の胸にぐいぐい押しつけながらアケミはいった。

「ようし、やるよ、やるともさ！」

五郎の声は、うわずっていた。ふるえる腕で、弾力のあるアケミのからだを抱きしめ、片手でまた尻をなでまわした。

「ねえ、縄を解いてよ。あたし、縛られたままなんて、いやよ」

アケミの声が、熱っぽくうるんで五郎に訴えた。

## 2

その夜がきた。あれから二日目。千五百万円の現金がある夜である。

ふたたび、五郎は女社長の家へ忍びこむ。裏口の扉の錠があいている。おとといの晩は、この錠を破るのに一時間近くかかった。今夜は内側からはずれている。

——へへへ、アケミのやつ、本気だな。錠があいていることで、アケミの本心がわかった。

五郎はうれしくなった。おとといの晩抱いたアケミの体臭が、五郎の鼻さきに、プンとよみがえった。ことに白いやわらかい乳房から発散するにおいが、たまらなかった。

ありゃ、人間の女の乳房じゃねえ。あんなにも魅力的な、味のいい乳房は、きっと人間以外の魔性のものにちがいない。魔性の乳房だ。

五郎は、そのときの舌の感触を思いだしたように、ぺろりと唇をなめた。

舌だけでなく、唇や、頬や、胸や、手や、そのほかのすべてのところをアケミの盛りあがった乳房に押しつけて愛撫したのだ。いくら愛撫しても飽きることはない、すばらしい



味だった。

そうだ、ありゃ、たしかに魔性の乳房だ。

五郎は、胸のなかでつぶやきながら、廊下をまがって、アケミの部屋に身をすべりこませた。

「待ってたわよ」

アケミの声がした。本当に待ちかねたような声だった。電気スタンドの淡いあかりに浮かんでいる白い顔。背筋が寒くなりそうな微笑を、アケミはその唇の端にただよわせていた。

「さあ、縛ってよ、早く」

アケミは、せっかちに自分から両手を背中にまわした。

よし、とうなずき、五郎はポケットから縄をだして縛りはじめた。

もう自分のものだと思うと、つい手かげんしてしまう。

「だめよ、もっときつく縛らなけりゃ。ゆるいと芝居だということが、すぐにばれちゃうわ」

アケミが激しい声をだして叱った。

それもそうだ、と五郎は思った。なめらかな肌に、容赦なく縄をくいこませた。

ネグリジェの襟がまた大きく乱れて、乳房

のにおいの混った体臭が、むんむんとたちのぼってきて、五郎はうっとりした。

自分では気がつかないうちに、手のほうがのびて、その乳房をゆっくりとまさぐった。

「なにしてるのよ、だめじゃないの、もっと強く！」

からだを前に倒して五郎の手をふり払いながら、アケミはまた叱った。

「わかったよ」

五郎は勢いよく縄を引いた。ひとつにくくりつけられた手首が、背中から首すじのほうへ吊りあがって、思わずアケミはうめいた。

ふたつの乳房が大きくふるえて、五郎はアケミの背後からおおいかぶさるようにして、またそこに手をのばした。ぎゅうツとにぎりしめた。

「そんなことをしてないで、こんどは足を縛るのよ。それから、さるぐつわもよ」

アケミが、じれったそうにさいそくした。

五郎は惜しそうに手を放し、うなずいた。

両足首をそろえてぎゅちりくくりつけ、言われたとおり、さるぐつわも噛ませる。

アケミは沈黙した。しかし、さるぐつわの上の両眼が、さあ、早く行くのよ、と命令している。

——さあ、これからが大仕事だぞ。

五郎は緊張した。二階には女社長がねむっている。五郎は、その女社長の首をしめにくのだ。殺しに行くのだ。アケミのために。アケミと自分のために——。

しのび足で階段をのぼった。アケミが教えた通りの間取りだった。廊下の左側の女社長の寝室へしのびこむ。

ぐっすり、ねむっているらしい。アケミがこっそり眠り薬をのませておいたはずだ。寝息もきこえない。

五郎は、女社長ののどに手をかけようとした。しかし、だめだった。

マラリヤ患者のように、両手がふるえだした。からだじゅうがふるえる。両膝がガクガクする。

人殺しは、はじめてなのだ。

——しっかりしろ、五郎！

自分で自分をはげました。だが、だめだ。手は、ますますふるえだす。腰までがふるつきだす。つめたい汗が背筋に流れだす。

——しかたがない。こうなったら、金だけ盗んで、ずらかろう。

五郎は、ついにあきらめた。この殺人をあきらめるということは、アケミをあきらめる



ことでもある。

金はベッドの下、革のケースのなかだ。調べると、たしかに現金で千五百万ある。

これもみんなアケミが下調べしていた通りだ。これだけの現金を、金庫なんかへ入れておくとかえって狙われる、という女社長の考で、わざとベッドの下へ無難作につっこんで置いてある、とアケミが教えたのだ。

階段をおり、アケミの部屋の前を、五郎はだまって通りすぎようとした。このまま、ずらからうとしたのだ。

自分をみつめるアケミの軽蔑の目が、五郎はおそろしかった。

足音を殺して通りすぎようとしたが、その

## 女性写真モデル募集

### 分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。  
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

足がいうことをきかなかった。

あの魅惑の乳房に触れずに、このままどうして帰れるものか。

五郎は決心して、またアケミの部屋に入った。

「うまくやった？」

と、アケミの目がきいた。さるぐつわのために、声はでない。

「ああ、やった」

力なく、五郎はこたえた。それから五郎はがつがつとアケミの足の縄を解いた。足だけを自由にしてから、五郎は無我夢中でアケミにとりすがった。豊満な香気を放つ左右の乳房に唇を寄せ、むさぼった。アケミは、さる

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。  
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部△

ぐつわの奥でうめいた。

さるぐつわがすこしゆるんだとき、アケミは、

「あんた、ほんとにやったの？」

と、五郎の耳にささやいた。

五郎は額に汗をうかべながら、夢中で「うん、うん」とうなずいた。

すべてが終ると、五郎はアケミの両足をまたそろえて縛り、革のケースをつかんで逃走した。

3

ひとりになったアケミは、猛烈な勢いで動きだした。

両手両足を縛られたイモムシのような格好で、ごろごろころがって廊下へ出た。

なおもからだを回転させながら、勝手口から庭へおり、ついに外の道路までころがり出た。

たいへんな努力だった。この苦闘にネグリジェは裂け、肌はすり傷だらけになり、泥と血で凄惨な姿になった。迫真力百パーセントである。

「たすけてーッ、人殺しーッ、たすけてッ」  
すさまじい声で、アケミは絶叫した。



近所の人々がとび起きてきた。一一〇番へ急報する。

夜があけきらぬ前、五郎は逮捕されてしまった。

こんなに早くつかまるなんてことは、五郎の計算になかった。うまく逃げられるはずだった。アケミは縛られたまままで気絶を続け、事件は朝十時ごろまで発見されないはずだった。

ただちに取り調べが開始された。

「ちがうッ、おれは殺しやしねえよ。金を盗んだだけだよ。千五百万とただけだよ！」  
五郎は、はじめ茫然とし、やがてわめきだした。

「お前が殺さなけりゃ、だれが殺すんだ。階段の足跡も、女主人のベッドのまわりの足跡も、みんなお前のものばかりだぞ」

係官は冷笑した。

「おれは殺さないよ。ほんとだよ、信じてくれよう」

殺すつもりだったけど、とても殺せなかったんだ。

「いくらお前が弁解しても、女社長はたしに首をしめられて死んでいるんだ。みなおぼえがあるだろう。この紐でお前がやったんだ」

うす赤い色をした皮紐が、五郎の目の前につきつけられた。

「それに、お前は千五百万盗んだと言ってるが、あの夜、あの家には現金が三千万円あったんだ。あとの千五百万はどうした。どこに隠したんだ？」

係官の追究は、きびしかった。

「じょうだんじゃねえ。おれはほんとに、あの女中から教わった千五百万しか盗まなかったよう」

泣きわめきながら、五郎は、ハッとした。もしかしたら……あの女社長を殺したのは女中のアケミではないだろうか。

おれが二階へあがる前に、女社長はすでに首をしめられて死んでいたのではないだろうか。あの女中が、女社長を殺したのだ！

それにちがいない。おれに罪を着せるための、アケミの罠だったんだ。あとの千五百万と、いうのも、あの女が盗んだんだ。

みんな、あの女が計画をたて、おれはそれにまんまと、はまりこんだだけなんだ。くそッ、道理ではじめから調子がいいと思

った。

「わかった！ 犯人はあの女中だ、アケミのやつだ。アケミに会わせてくれ！」

五郎はさげんだ。なさけなくて、涙がでてきた。

「おれじゃない、おれは殺さない！」  
さげびながら、とても信じちゃくれないだろう、と思った。

アケミと顔を合わせても、あいつはしらばつくれるにきまっている。

アケミが「なんにも知りません、あたしはこの強盗に手足を縛られて犯されたんです、あたしも被害者です」と言えば、それまでのだ。

絶望的だ。めちゃくちゃだ。とんでもない女だ。

「おれは殺さないよう」

泣きながら、五郎の脳裡に、アケミのあの香気を放つ豊満な乳房の姿がよぎった。

おれは、あの乳房に魅入られて、こんな罠のなかにとじこめられてしまったんだ。

ああ、ちくしょう、あの乳房め！

やっぱりあれは魔性の乳房だ。

「たすけてくれよう、おれがやったんじゃないよう！」

五郎は、巨大な乳房の幻影を思いうかべながら、いつまでもわめきつづけた。



## — S M カメラ・ハント回顧 —

## 追憶の甘き花びらの群れ

— (第 一 回) —

昭和三十九年十一月号より昭和四十年九月号まで

辻 村 隆

いつぞや「楽我記」欄で、過去五カ年間に亘ってハントして来た人々の回想記を、折あらば書き綴ってみたいと洩らした処、同好者の方の要望もかなりあったし、編集部からもいつ書くのだと督促され、遂々重い筆をとって、その氣になってみた。同じフオトの蒸し返しも曲がないので、ハントのフオトは全部未掲載か、削除されていたものを使用するつもりである。一人一人の過去、現在、将来を断片的に綴るとしても何しろ数多いハント女性のことだから、その後、絶えて消息のない人、結婚した人、幸せを掴んだ人、逆境に喘ぐ人、浮名流して消え

た人など、正に人生の縮図のようでもある。五年前、かりに二十才としても、現在は二十五才になっている勘定だから、随分と息の長いSMカメラ・ハントに、我乍ら改めて感心したり、あきれてみたりで、その一人一人を想起する時、さながら走馬灯のようにめまぐるしく、脳裡を去来する白い柔肌の数々であった。フランス映画の、嘗ての名作「舞踏会の手帖」のように、今、その一人一人と逢うということは、到底不可能に近いことであるが、あらかじめ数カ月前から、出来るだけ彼女達を知るように努め、折をみては電話してみたり、暇をみては手紙を書き送ったりしてはいるが、その半分足らずは空しい努力であった。箕田氏にも極力協力していただき、同好の知人等を通じて、集めるだけは集めてみた。物足らぬ個所も多々あるうとは思うが、諸賢——、わが五カ年の愚行の集積を、笑うよすがにでもしていただければ、以て瞑すべきか。

五年間分、一挙に書き下ろしてくれるならば、別冊で発行するが、との箕田氏の好意であるが、到底その氣力なく、ほぼ一年間ぐらいつつに分けて、逐次回想して行きたいと思っている。



昭和三十九年十一月号

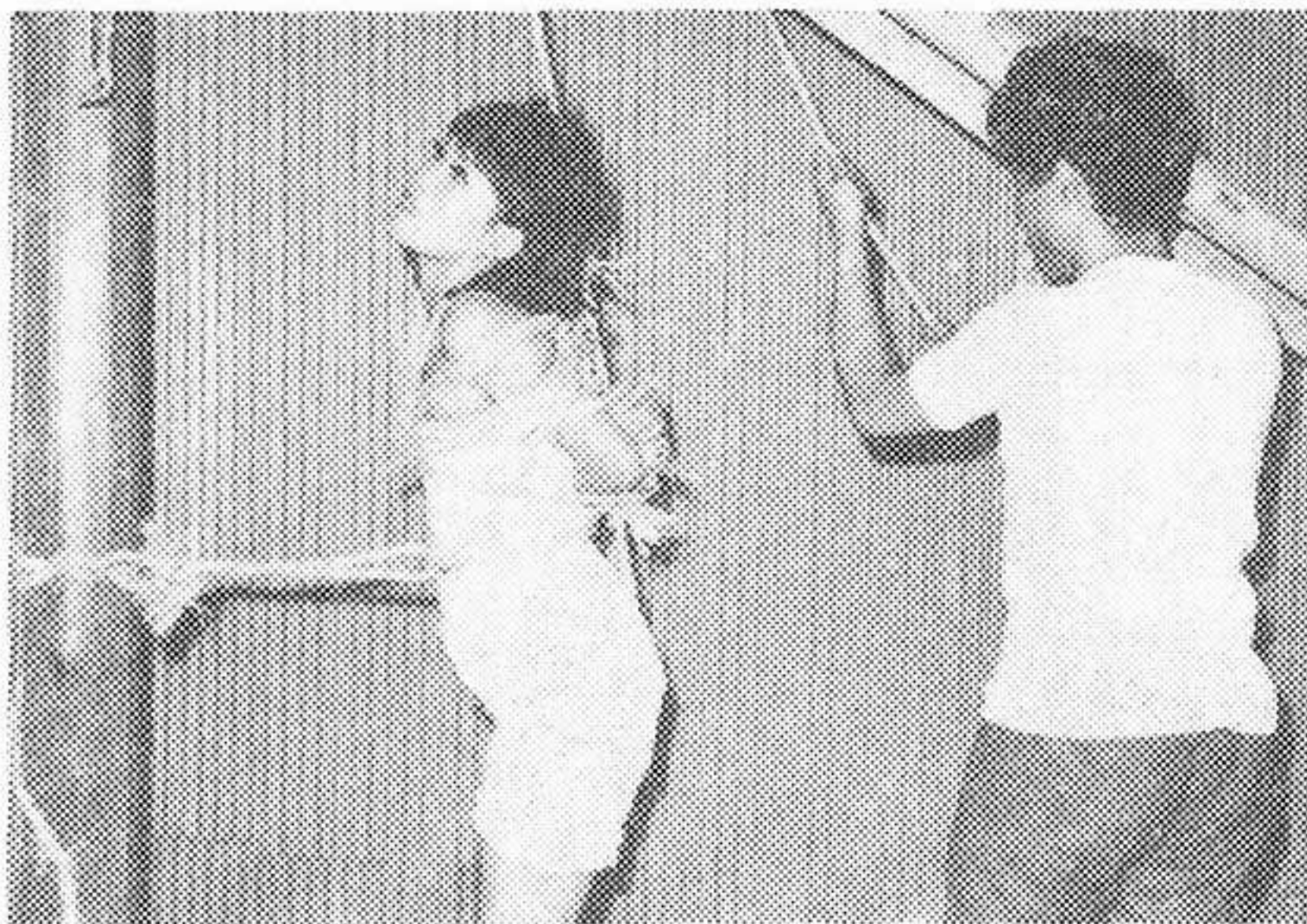
## 『マゾ願望の人気者青木順子を縛る』

青木順子の巻

私をして、SMカメラハントなる方式で、

こうしたルポを書かせる動機をつくった貴重なる女性である。カメラ・ハントというタイトルは、かなり熟慮して考えついた新造語であった。寡聞ではあるが、私の書く以前に、同種の題名はついで記憶がないので、私なりに奇抜なタイトルだわいと、それにSMを冠して、独り悦にいていたのであるが、昨今では、テレビに週刊誌に、カメラ・ハントなる語がしきりに使われ、今はもう新鮮味も薄れてきた。私の模倣ではなく、同じ考えからそうタイトルをつけたのだと善意に解釈しているが、或いは人間考えつくことはよく似たものであるのかも知れない。

単なるストリップやヌードショウが、そろそろ大衆から飽かれ始めた三十九年の春頃、突如として、各地のヌード劇場に彗星の如く現われ、痴呆のように手足をくねらせて、唯ぬいでゆく裸の女達の中に交って、強烈きわまるリアルな演技で、呀っという間に、SM同好者の話題をさらったのが、青木順子と向



一也のSMコンビである。

噂は噂を呼んで、私も後学のためと一見す

る。二人の斬新な息をのむ演技に魅せられた

私は見終ったあと、もう矢も楯も堪まらず惹きつけられるように楽屋に二人を訪問した。

幸い向一也が奇クのファンであって、私の名前を覚えていてくれた嬉しさから、忽ち十年の知己のように歓談、赤裸々なウラバナシに打興じ、それが縁となって、三度許り私宅を訪問してきては泊っていった。ハント用のフオートを撮ったのは最初の夜のことと、その夜はハナシに華が咲き、酒が快く廻って私も向一也も酔い潰れてしまった。

あとの二夜は、いずれも向一也の謂う「四帖半のプレイ」に終始してしまつて、彼は人氣商売を慮んばかってか、この赤裸々の極致の、青木順子の全裸緊縛は撮らせなかった。

カメラで撮らないという約束で、向一也は彼女に凡ゆるハレンチを加え、正視出来ないほどのさまざまな緊縛の痴態を演じさせたのである。これをカメラにしたら、どれ程素晴らしいだろうかと、私は内心うずうずする思いで、この乱痴氣のパーティに、みずからも加わって、青木順子に二人で入れ替り立ち替り嗜虐の限りをつくしたのであった。この二夜と三夜の、激しくも又なまめいた強烈なSプレイの想い出は、永久に私の脳裡から消え去



らないことであろう。

最後の夜、私達は欲きわまって、絶叫し、ひいひい苦虐の悲鳴をあげる順子に、彼女のはいていたパンティを口中に押し込み、縄でその上からぐるぐる巻きに猿轡をして、全裸の青木順子を太い青竹に猪吊りにし、二人でかごのように肩へかつぎ上げ、ギューギューきしむ肩の重味を快感に変じさせて、深夜の大裏の庭園を、青竹撓わせて逍遙し、果てはブロック垣の飾りの空間と、鉄製脚立の間に宙吊りに掛け渡して、酒の酔いと快虐に眼の昏んだ私達二人は、ビールの香の微かにただようハルンを長々と、青木順子の顔といわず鼻、口といわず、弧円を描いて、全身に浴び

せかけた時は、Sのプレイもここに極まれりと、胸は昂奮と刺激に、はり裂けんばかりに浪うち、官能の黒い渦が、奔流のように湧上がってくるのであった。

その頃が青木順子の人気の絶頂であった。全国津々浦々を廻って、暫くは会う機会もなかったが、半年ぐらい経った頃、大阪の吉野劇場に出演している二人のポスターが眼にとまり、つい懐かしさの余り二人を訪問し、尽きぬ懐旧談に華を咲かせたのであった。盆の十日間許り休むというので、その間に是非遊びにくるよう奨め、二人とも快諾したのに、その数日後、青木順子から町重な断りの速達便が届き、夢よう一度という私の願望は空しく破れて、落胆久しく天を仰いだのであった。彼女の手紙の大略は、

「辻村さんは一カ月のうち、アブで過ごすプレイの日は、恐らく数日で、あとの大半の日はノーマルな生活をしているが、私（青木順子）は、毎日が激しい

プレイの連続で、心身ともにすり減らして、偶の盆休みの数日だけなりと、ノーマルに過ごしたい」という文面であった。それも無理からぬことと、彼女のその理智性の溢れた達筆の文章に敬服しつつ、諦めざるを得なかったのであった。しかしその後、彼女のひよわな、あのかぼそい体では、到底連日の激しいプレイに体の持つ筈もなく、遂に病を得て帰郷し、向一也とのコンビの舞台は事実上終止符がうたれたのである。向一也の複雑な家庭の事情を押し切り、万難を排して一緒に家庭をもったそうであるが、平和な二人の家庭も長くは続かず、SMへの新しい野望を捨てきれぬ向一也は、名古屋で「新しい波」という劇団の創成に東奔西走し始め、彼女とは心ならずも離ればなれの日が続いた。私も数度、彼の消息をかねて「楽我記」にそのことをのせて協力したが、資金繰りや、M女性の人材難で遂に華々しい実現をみずに、いつしか消息は途絶えた。その後とんと彼からの連絡もないが、人伝に聞くと、カジバシ座へも出演したき意向で訪れたそうであるが、肌色の違う芸風で、観念的に折合わなかったらしい様子であった。リアルに徹し、バイタリティの溢れた彼のこと、今ひとたびどこかの地か





ら、SM劇の孤々の声をあげられんことを、ひたすらに切望している。残酷劇の先駆者として、この尽消えるのは余りにも惜しい存在である。青木順子がもう一度元気になってカムバックする日を待ち焦れているのは、あながち私一人でないと確信している。

蛇足ながら、団鬼六氏の『続・花と蛇』の

昭和三十九年十二月号

## 『めぐり合った謎の女』

山原清子の巻

彼女に始めて出会って、その全裸をみた時

私は思わず度胆を抜かれたのであった。噂にはきき、映画や演劇でお目にかかる刺青女性は数多くあるが、餅肌いっぱいに彫られたホンモノの全身刺青は、恥かし乍ら生まれて始めてのことであった。

この刺青を彫った年が、彼女の十八才の時だそうで、ある刺青愛好家の犠牲になり、東京の彫由の手で丹念に彫り上げられたというのが玉取り海女の見事な極彩刺青である。惜しいことに、最後の腰の部分が僅か筋彫りの俚で彩色は未完になっており、今少しの辛酸をなめたら完成していたのにと、惜しまれてならなかったが、長歳月に亘る激痛の苦しさ

連載が始まったのもこの月からである。『カメラハント』と『続・花と蛇』という衣替えして、同時に符牒を合わせたように足並を揃えたことも、思えば奇しき、えにしであるかも知れない。(掲載フオト二葉は、同月号ハントの時の、未発表のものです)

に、遂に耐えかねたのであろう。

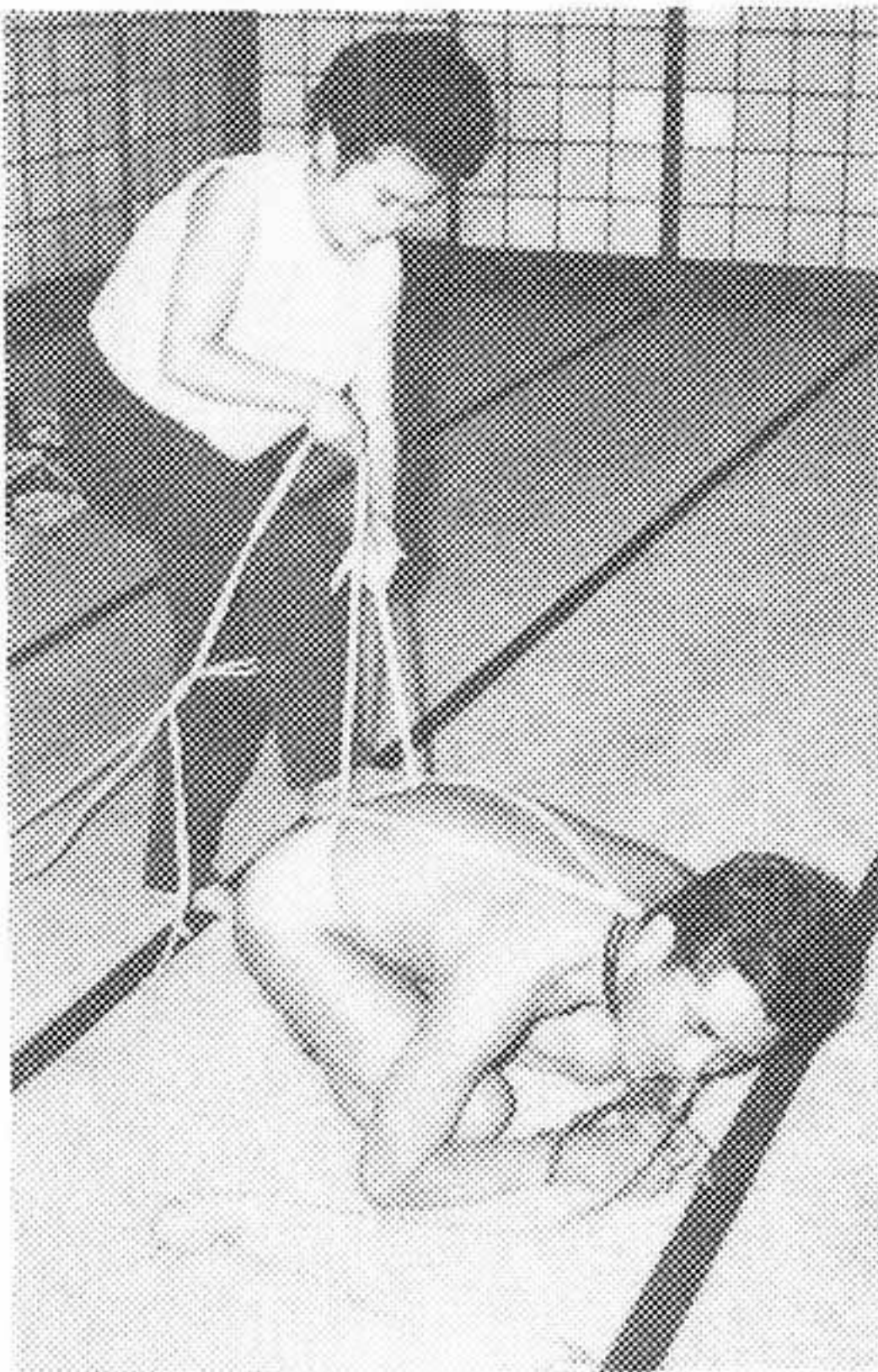
しかし、恐らく日本国中を探してまわって

も、若い美人でこれ程の立派な刺青女性は、そう数多くはないと断言してもいいのではなからうか。

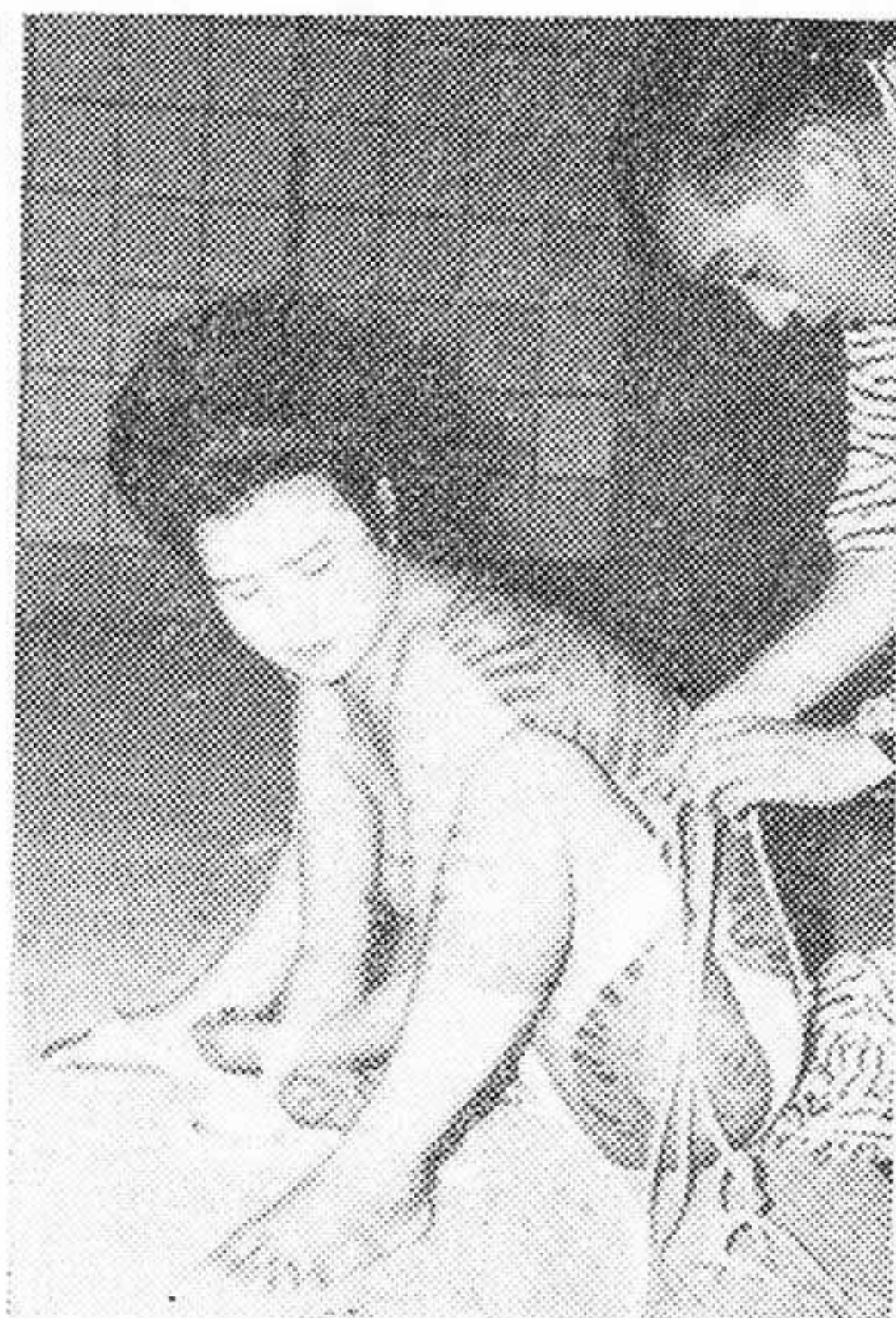
彼女の積極的な協力もあって、それからというものの、毎月毎月の奇クのグラビアを、彼女の刺青の艶姿が賑わしたことは、既に衆知のことである。私は残念ながら、最初ハントの折にしか撮っていない。ひとつはこの稀小の存在に、編集部がすっかり熱をあげて、離さなかったこともあるが、奔放無恣のSとMの両極端な性格をもつ彼女のプレイ振りに、少々怖気がさしたのも事実である。反面社交性に富み、人生の機微をわきまえた発言と、誰にも好かれる人柄

が同好者の人気を集め、二回に亘って彼女を囲んでの座談会が開催され、私もハントした手前、狩り出されて、その司会役を勤めてきた。

第一回の参集は、流石に同好の人々も遠慮して手を出さず、刺青鑑賞とプレイ談義で時が経ち、最後に私が緊縛の役を買







って出て、衆人の前で、緊縛実演をやらしたが、勿論プレイだから手心を加えているので、適当に見せ場をつくり、彼女も心得て苦悶の演技など立派に演じたが、衆人の中の或る一人が、極度のA感覚の持主で、縛られてさまざまに苦悶の演技をつづけている山原清子の背後にそっと回り、あっと思う間もなくいきなりアヌスに攻撃をかけたので、思わず彼女本音の悲鳴をあげ、もう少し続ける筈のプレイが、この不意の闖入者の出現で雰囲気壊されて中止してしまった。A感覚の持主は、その後も彼女の住所をきき出して、夜更けに突然おとずれたりして、大分彼女を困ら

せたそうであるが、毅然たる態度で撃退したのは見事であった。

第二回は、山原清子自身すっかり乗気になり、演技ではなく生のプレイをやるうとい出し、急拠、超A級のM男性、鼻障子穿孔の美枷輪生の登場となる。彼女は通りすがりの旅館の仲居が、仰天しているのも一向意に介せず、廊下で美枷輪生を揮一丁にして

四ッ這いに縛ってはわせ、鎖を鼻に貫通させて、鼻鎖の先を握って、意気揚々と座敷に現われる。一同呀々と驚く満座をニッコリと見渡し、やるわやるわ、凄まじく鼻鎖で彼を引きずり廻して踏み

だりけったりの大乱痴気に鼻血が点々とタタミを鮮かに染めて、今にも美枷輪生の鼻障子は千切れそうである。この凄絶さに、衆人反ってすぐハッスルし、ついで山原清子が緊縛をうけ

る時は、この時とばかり、入れ替り立ち替りわれもわれもと登場し、容赦手加減せず、腕自慢の緊縛の秘技を競ったので、さしにもタフな彼女も遂々音をあげて伸びてしまった。度々制止した箕田氏や私の声も、意馬心猿の彼等の耳には入らず、この幕切れは、思いもかけぬカラストロフで、幕が閉じられたのである。

半月以上、全身の縄跡がとれなかった彼女は、このマニアの昂奮ぶりに、流石におそれをなしたのか、多数の希望者の願望にもかかわらず、遂に第三回の座談プレイは、中止のやむなきに至ったのである。

偶々、奇クの読者の中で、彼女のこの刺青





に魅せられたU氏が、山原清子のすべての条件を丸呑みにして、我々がアイドルを独占してしまった。余りの熱心さと献身的な態度にほだされたのである。結婚当初、彼女は気候放題に振舞い、相当激しく浪費したそうであるが、ぞっこん惚れ込んだU氏は、全財産を擲打つても、この女性を手離したくなかった。ので彼女の言う俚に好きな様にさせていた。

それだけに、山原清子も随分U氏のプレイの対象になって、数々の責めを受け、瀕死の状態になるまで協力したらしい。U氏はそのために責め部屋を特別に設けたというから、そのプレイの凄まじさが想像される。SMのプレイを通じて、山原清子に真の愛情が芽萌え始め、それが母性本能を呼びさましてU氏の愛の結晶を望むようになった。しかし、過去の強烈さわまるSMのプレイが禍いしてか、将又、どちらかに欠陥があるのか一向に子宝に恵まれず、現在はU氏の諒解を得て、E市でスナックバーを経営してマダムに納り、よくよくの時でない限りあの絢爛たる極彩刺青を見せることはないということである。

時折、以前のプレイの味を忘れかねてか、箕田氏にも電話がかかってくる様になり、往時の、あの座談会での主人公であった頃を懐

かしんでいるそうである。私も今一度、彼女のSM両面の強烈なフオートを撮りまくり、あわよくばプレイの秘技をつくして、再度奇ク誌上に登場させてみたいと、心ひそかに願っ

昭和四十年一月号

## 『鼻 責 め の 記』

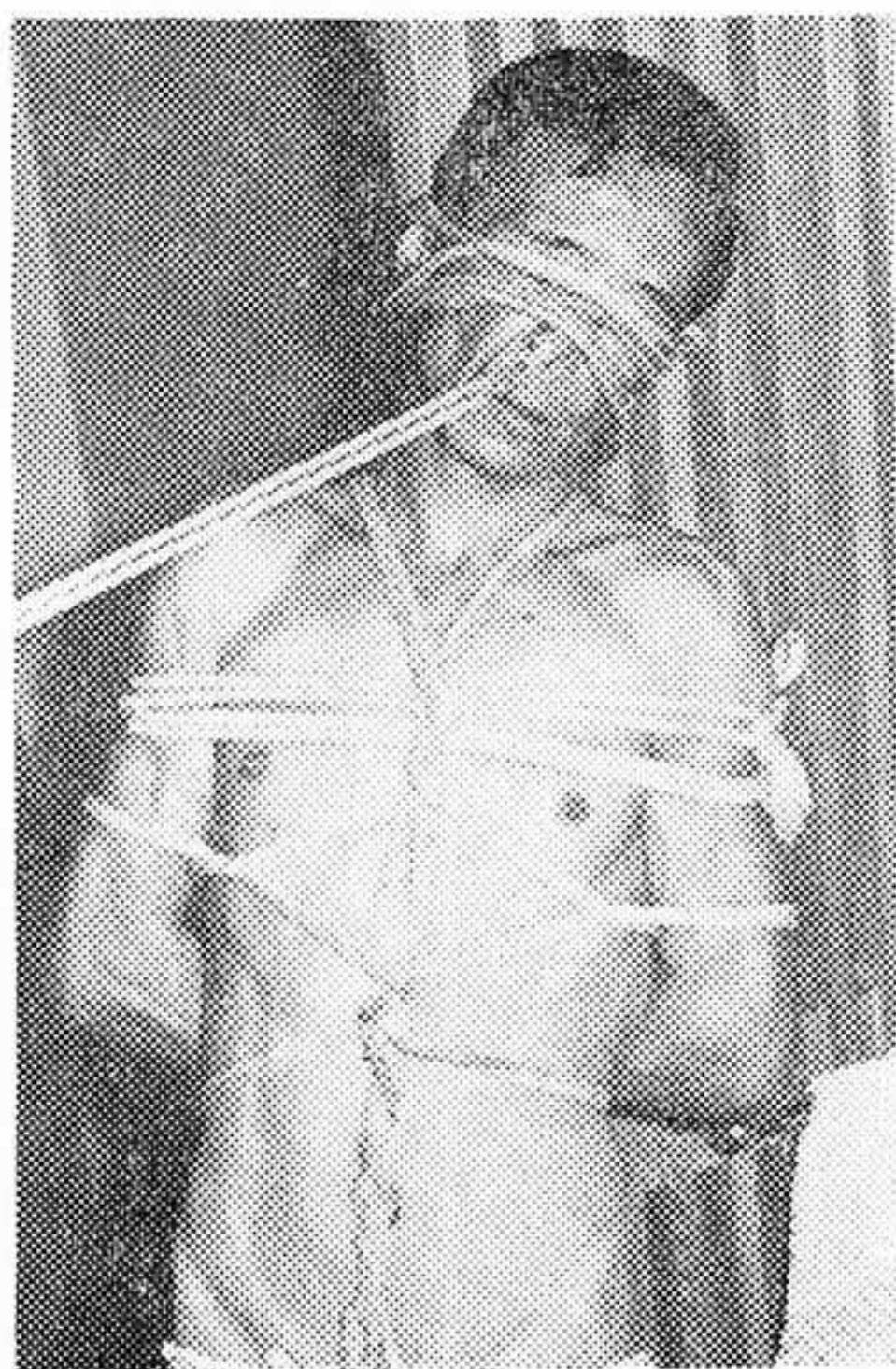
M七〇生 こと 奥 田 康 雄 の 巻

美加輪生と相前後して登場した男性モデルであるが、モデルというより、読者通信で被虐の願望激しく、然らば一度会ってみようということになり、彼と二人大阪アベノの旅館にしけ込んだが、旅館の女中が変な眼で私達二人をみたのを思い出す。

彼も切望し、私も又、相手が男性というので、手始めの緊縛から相当強烈に縛り上げた処、いきなり顔面蒼白になり、失神したのには胆をつぶしてしまった。激しく頬を叩いて正気づかせたが、強度の昂奮が、彼をそんな状態に追いやったのである。最初から失神されて、私の緊縛意欲はすっかり喪失し、それから数時間は、彼の好む方法

ているが、果たしていつ実現することであろうか——。(フオート三葉は、第二回座談会の折のスナックSM両面よりと、見事なる刺青の背面である)

を撮り、要請で動いたに過ぎなかった。しかし次々と「万国ビッキリショウ」式な場面が展開して、注射針で舌を貫通させたり、穿孔した鼻障子が千切れはすまいかと思われるくらいに、重い鉛をぶら下げたり、白い鎖でごいたりした挙句、果ては男性の象徴を針で





貫通するに到っては、これはもうプレイというより、いささかグロ味を帯びて閉口した。両股を手術糸で縫合しようとするから、もうこれ以上勘弁してくれと頼む始末。

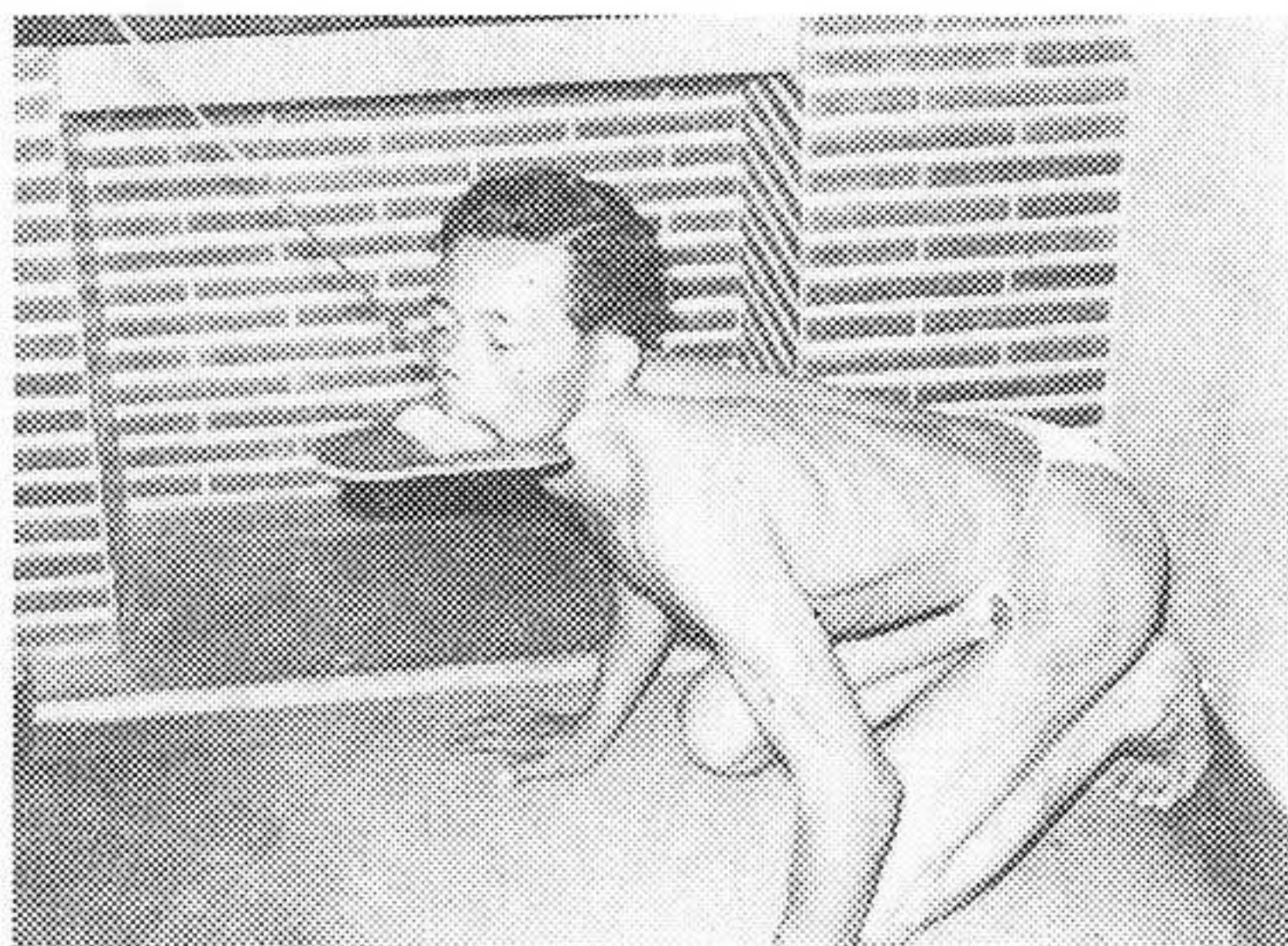
普通の神経なら、激痛で到底不可能な行為が、Mの権化の彼にとっては快感に通ずるらしかった。

奴隷扱いにする程歓喜して、洋式便器の中へ強烈に縛って顔を突込ませ、その上から馬乗りになったり、汚れたスリッパを啜えさせて四ッ這いにして首輪をつけて引きずり廻したが、これはすべて彼の希望であって、それによって昂奮し息を弾ませているのは彼一人で、私は一向に感じない。彼の願望は、そうした行為を女性にして貰うのが、最高の希いであるそうであるが、極端なM男性の性向の一端を、私はその日さまざまなとみせつけられたのである。

気の毒なほど虐め抜いて、その日は終わったが、それが縁でしばしば手紙がくるようになる。しかしその文面が独りよがりで、薄いペラペラの紙に横書してあるから、誠に読み辛く半ばは判読であった。

一時サロン欄で、乳頭を穿孔するピアッシングと称するものが話題になったが、彼はそれ

を読んでから早速実行に移して、両の乳頭の穿孔に没頭し始めた。手紙のくるたびに穴は拡がり殖えてゆく。以前、私の書いた奇譚三十九夜物語の題名の「穴に憑かれた男」を地でいったようなものである。度々の手紙に、三度に一度は便りするものの、つい面倒になり、直接奇クの読者欄へ出したらどうかと書き送った処、それをどうとったのか、その後



いともあっさり豹変して、ピタリと手紙を寄越さなくなった。最近奇クにも余り便りがこないそうであるが、難解？ 文のため没にされるので、書くことも詮なきことと悟って唯一人コツコツと穴あけに専念しているのであらうか。

その彼から数日前、ヒョッコリと長女の結婚祝いを送ってこられ、思いがけぬお祝いに途惑ってしまった。あわてて礼状を書いたが「楽我記」で知って、律気な彼のことだからそれに夢を托したのであろうか。穿孔した乳頭に一輪ざしの花を生け、鼻鎖でつながれてまる一日、奉仕の奴隷生活をしたというのが、彼の念願だそうである。相手はハント女性の子。

鼻障子穿孔は、美柳輪生、M七〇生、増田喜代司、佐々木耳環生等の各氏と相知るようになったが、性格はそれぞれ違っても、一樣に共通する被虐願望の強烈さには、何かついてゆけない気持である。数多いカメラ・ハント中、男性のみを書いたのは、僅かこの一篇のみであった。（フォト二葉は、失神した最初の緊縛と、スリッパを啜えて這った時の未発表分である）



昭和四十年二月号

## 『おしめカバーとレインコート』

## 竹野 ひろ子 の 巻

彼女はこのハントで、奇クには三度目の登場である。正確にいうと、昭和三十六年十二月号に、読者通信の女性を縛るという副題で「ひろ子緊縛記」に初登場し、引続き翌三十七年一月号で「続・ひろ子緊縛記、おしめカ

バーガール」として紹介しているのである。かつてゴムへの狂執で、一時期エポックを築いた古川裕子さんの、流麗な文章に陶醉し、自からもヌメヌメしたゴムやおしめカバーに凄い愛着を覚え、それがいつしか被虐に発展していったのである。

私と二人きりのプレイが二度、そして編集部帯同の撮影が一度あってから、彼女は姿を消し、竹野ひろ子とは一年半のブランクが続いた。その間、彼女は読者通信で知り合った同好の某氏の、熱烈な求愛に負けて同棲し、二度に亘って中絶している。かなり強烈なプレイが連日連夜つづいたのも半年近くで、やがて某氏はそのプレイの熱がさめてくると、いつしか竹野ひろ子に冷たくなって、断絶していった。苦い同棲の経験を味わったものの彼女はプレイの願望もだし難く、告白めいた手記をサロンに発表すると共に、実に久し振りに私に連絡してきた。あのヌメついたゴムの感触、べっとりと纏りつく汗と体臭にむれた執着など、そのヨサは私にはもう一つピン



とこない。しかし狂執に憑かれた竹野ひろ子は、おしめカバーを装着して、ぐしょ濡れを秘かに愉しみ乍ら市内を彷徨するのである。プレイの相手を求めて、彼女は性懲りもなく告白で再び愛好者に呼びかけ、すぐさま反応があって、富田林のF氏と、数カ月後又して



も同棲しているのである。

私のカメラ・ハントは、この某氏とF氏の間隙を縫って撮られたのであった。

当時五十一才のF氏は中小企業の社長で、秘書という名目で彼女を迎えるが、いわずと知れたプレイの対象である。奥さんを亡くしているものの、息子達の手前やはり籍は入れず、彼女は軽佻的存在であった。

彼女と同棲した直後、F氏から二度ばかりお便りをいただいたが、多忙なのかその後は年賀状程度のおつき合いになっている。

先日、この稿のことで便りをしたら、すぐ折返し返事が届いて、思い掛けないことが書かれてあった。その大略は、

（当時の連日の激しいプレイも、今は一カ月に数度ぐらいで、細々とつづいてはいるが、厄介なことは、おしめカバーで洩らすことになれてしまったのが、いつしか夜尿症を誘発し、しばしば夜の床で洩らすようになった。遂にはそのため、おしめカバーを常用することになって、これは或いは彼女にとっては本望かも知れぬが、プレイ膏肓こうもうに入っこて誠に困っている。春冬はまだいいが、夏ともなると下半身爛れてむれて困り、今はその臭気鼻につき、嫌悪をもよおし、プレイの気持もため

に減少し、如何すればいいものかと思案にくれている）とのことであった。

過ぎたるは及ばざるが如し——こうなるとプレイもほどほどでないと困るという実例で竹野ひろ子も、もう三十才を越していると思うが、女ざかりのしばしばの夜尿は、F氏にとっても悩みのタネに違いない。可怪しくも笑えない結末で、手紙の内容の中から、F氏

とひろ子との仲も、もうそう長くはないことを、私は敏感に嗅ぎとったのである。

この月号をもって、華やかな存在だった巻頭グラビヤは、自肅の線に沿って終止符をうった。それだけに、私のカメラ・ハントが、唯一の掲載フォトに、なり始めるのである。（掲載フォトは、昭和三十六年頃の若かりしひろ子の、初期の未発表緊縛である）

昭和四十年三月号

## 『映画“日本拷問刑罰史”とS子』

S子（サトウケイ子）の巻

恰度、当時小森白監督の『日本拷問刑罰史』

が大反響を呼んでいた頃で、S子は彼女の強

つての頼みで氏名を伏せてしまったが、今にして思えば、何も氏名を伏せなくてもペンネームにしてもよかったのにと、その当時を懐古して、自分の正直さが可笑しいくらい、幾分の純真さを残していた様である。このハントで登場する京都のT氏というのが、何を隠そうあとあとしばしば登場する、徳永昭三であった。

彼女のイニシャルがK・S、





本名はサトウ・ケイコといっても、もう今更関係のないことであるが……。

ケイコとのプレイは、徳永氏の隠宅でやった。それだけに、かなりの小道具が揃っていて、その点、変化を求めることも出来て誠に都合よかった。

徳永氏と二人がかりでやったので、緊縛の方も相当に強烈であったが、被虐願望を内潜していたのか、ケイコは予想以上に忍耐づよく、そのどれにもよく耐えてくれた。その日のプレイは、さながら「拷問刑罰史」の再現のような、責めを主体とした刑罰ごのみのプレイに終始して、フオトもかなり撮りまくった。その夜はクリスマス・イブであったが、プレイの宴果で、私とケイコは木屋町のうなぎ屋で盃を交し、酔いが私を大胆にさせたのか、プレイの異様な雰囲気ケイコを燃えさせたのか、その俣清水坂のアベックホテルへしけ込んでしまった。

山口県防府市より単身上阪して、広告代理業のセールスをしていたケイコは、アパートでの独り暮らしだけに、私が口説いたというより、むしろケイコの方よりそれとなく誘い掛けてきたような空気であった。彼女は一度結婚に失敗して、そんなこともチラリと仄め



かしたが、被虐の想念がプレイによってかき立てられたのか、その夜も積極的に私以上に燃え、縛られることを願望し、そうした姿の俣、私の胸の中でエクスタシーに陥っていたのである。

その後も、徳永昭三に内緒で二度許りデートを重ね、逢えばホテルに直行し、まるで前戯の様に緊縛のフオトを撮るが、所詮は発表

出来そうなのは一枚もなく、緊縛とは名ばかりの、そのものズバリの露出のクローズアップ許りで、それがケイコを刺激する好材料になっていた。SMのプレイに名を藉りて、ケイコの願望は、虐められながらのセックスに走りたがっていた。憂々として内没していたものが、私という人間を知って、急に爆発したようで、その激しさは止どまるところを知らない。体力の限界のある私にとって、後半はさながらケイコへの奉仕のような恰好で、私はいつも持ち扱い兼ねる。

カメラ・ハントに勃然たる興味を抱き始めていたその頃の私は、こうした一人の女性の深情にとらわれることなく、次々と新しい女性を求めて走り廻っていたから、いつしかケイコとも御無沙汰勝ちになり始め出した。

余情を押えかねて、恨みを半ばこめた綿々たるラブレッターが舞い込み、折悪しく家内がそれを受取ったので、見せねばならぬ羽目になり、いくら寛大なる女房といえども所詮は女、おきまりのような一悶着があつて、私の心は判っきりとサトウ・ケイコより遠ざかっていった。単なるプレイとして割り切れぬところに悲しい女のさがあつたが、それは女の心に火をつけた私のエゴイズムであつたか



も知れない。ケイコを探求してゆけば、トントンMの極致までも、女を奴隷のように扱えたかもしれない。しかし、その代償として、ケイコの深情を避けることは出来ないと思っただのである。

ケイコは私と並行して、徳永氏とも数度交渉をもったらしいが、執拗な愛情過多に、流石の彼も悩まされたらしく、婉曲に遠のいていった。一度結婚した三十女性の、哀れな業であろうか。私自身も、彼女に対しては後味の悪い、申訳のない気持を抱いている、というのは外でもない。チロチロと小さくくすぶっていた炎を、パッと華やかにかき立てたのはこの私なのだから――。

一昨年の正月、ヒョッコリと彼女の年賀状が混っていて、住所は、和歌山県白浜温泉街のS苑内になっていた。夢よう一度、という女のはかない願いが、その一葉の年賀状から、ひしひしと汲みとれて、流れ流れて白浜のホテルの仲居女中を勤めるようになったサトウケイコの流転に、何かそぞろにあわれを催してならないのである。(フオトは始めて撮った時の、未発表のもので、当時は強烈ということでカットされたものである)

昭和四十年四月号

## 『耳責めに微笑む娘』

刑部典子の巻

神戸の中華料理店に勤めていた刑部典子とプレイは、耳朶穿孔ということもあって、非常に新鮮であった。耳朶穿孔も近頃では左程珍しい現象でもなく、歌手の伊東ゆかり等も判っきり宣言して、よくお目にかかるが、ハントに夢中だった当時として、耳に穴を穿った女性は私にとっても始めてであった。

正月勿々のこの日、幸か不幸か、同じ神戸に住む志村善子とハントの日がかち合って、私としても一日に二人のハントではかなり大

多忙であった。時間帯を分けて、先に志村善子の方をハントすると、数十分後彼女に初対面したのであるがさすがに疲れて、ゆっくりと時間をかけてハントする心の余裕がなく、ついお座りのものになってしまった。刑部典子は非常に協力的で、かなり被虐の願望もあり、有望だったので、編

集部への紹介を約して、その日は耳責めを中心にしたもので大半を費やして別れたのであった。

期待通り彼女は、それから編集部の塚本氏と数度会って、分譲フオトにも顔を出すようになった。

彼女との約束で、私ももう一度、今度はゆっくりと時間をかけて、刑部典子のすべてを撮りまくるつもりであったのに、神戸へ出掛けてから数日後、徳永昭三の紹介で美木乃々

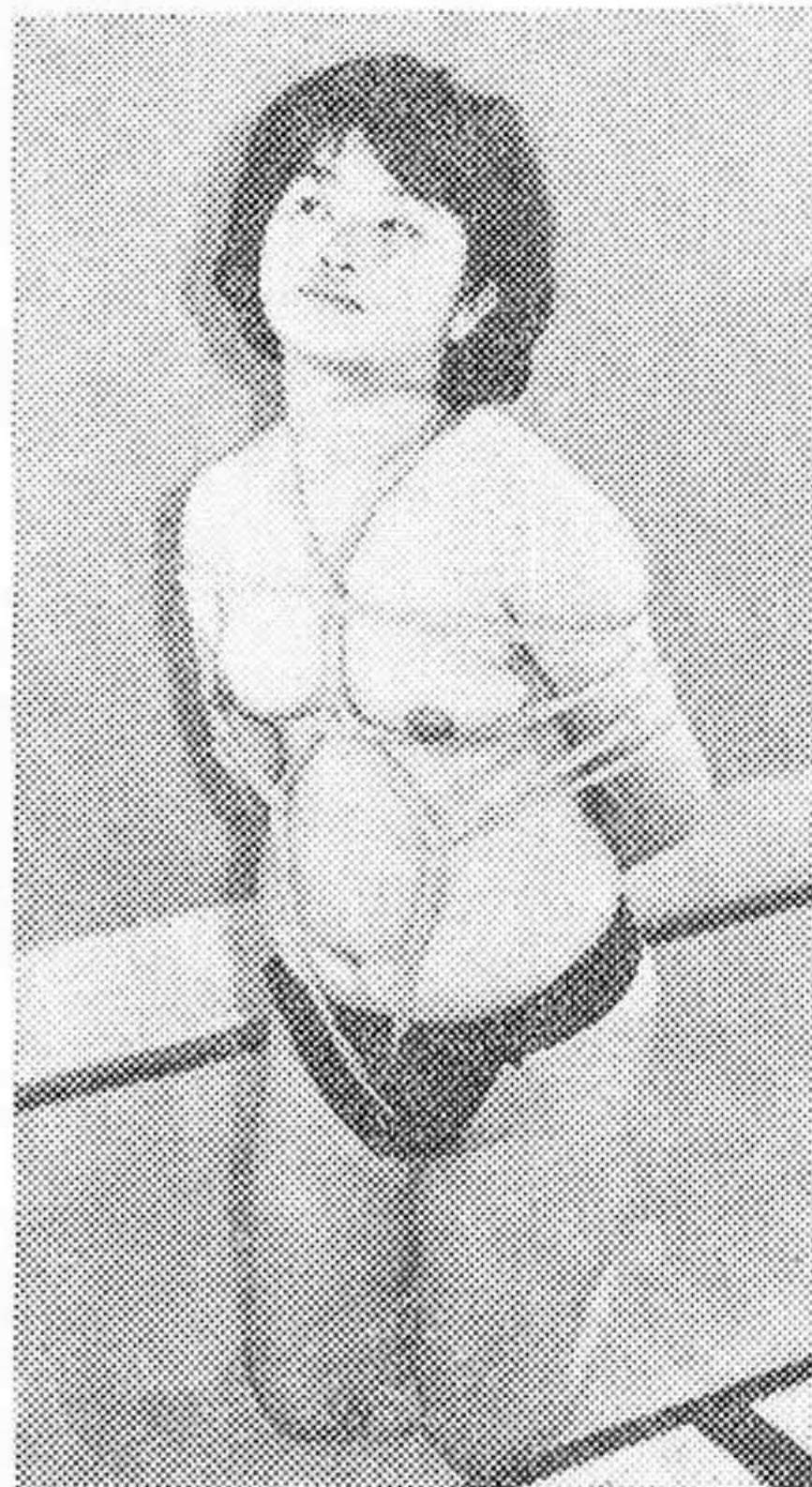




子をハントして、その二度目の時、思いも掛けず、プレイ最中に突然発熱し、それが今尚続く糖尿病の前触れとなったのであった。日頃健康体であっただけに相当のショックで、その時は、もうこうした女性遍歴をやめようと固く決意したのであったが、箕田氏からいろいろとなだめられたり、すかさねたりして私の気分も徐々に落着いてくると、余り無理をしない程度で又ぞろ続け始めたのである。それが原因で、再会を約した彼女とのプレイは、その頃すっかりやる気をなくしてしまった。今以って考えると残念でならないが、発病当時、筆さえも断つ決心をしていたのだから、刑部典子のことなど、全然念頭になかったのが事実である。

順序からいえば、志村善子を先に発表せねばならぬのに、刑部典子になったのは、ネガのDPEの加減で、引続き美木乃々子を発表してしまったから、何となく志村善子は二カ月も後廻しになってしまった。

彼女は四月の末、神戸の中華料理店をやめて、大阪



ミナミの喫茶店のレジスターに移っている。彼女から二、三度手紙がとどき、それを要約して私は彼女の告白という恰好で、奇クサロに『耳輪と私』と題して発表した。例の佐々木耳環生など、不自由な耳の聞こえぬ身で神戸の中華料理店を片端から訊ね廻り、終日彷徨したとあとでできたが、そうした事態を考慮に入れて、ハント女性に万一迷惑がかかってはと慮んばかりで、神戸は神戸でも、勤めの場所を変えておいたが、真剣に一軒一軒聞きに廻った佐々木耳環生の執心振りは、考えるだけでも異様であった。

紹介するといっていた同僚二人にも未練はあったが、その一人の二才の女性の秘部に、変った刺青があるときいていたのに、その俚になってしまったのは、今考えても惜しまれてならない。

刑部典子に執着していた和歌山のA氏が、箕田氏に散々粘り抜いて、遂に彼女の勤める喫茶店をきき出し、和歌山から大阪まで遠しとせせ、三日にあげず押しかけて、遂に耳責めならぬハルン頂戴に及んだのはお見事というより外はない。その経過報告を、箕田氏に、いかにも愉しげにしたそうであるが、M性の筈の彼女に、そうしたSの反面もチョッピリあったのかと、私には意外であった。

A氏は知る人ぞ知る、典型的なM紳士である。芳野眉美さんの「濡れにぞ濡れし」にもよく登場する。神酒奉戴主義者のA氏が、どのように刑部典子を口説き落とされたのか、その点は精しくは知らないが、A氏にかかるかどうかの女性も一様に女王にまつり上げられるから、彼女も女王様といわれて、幾分はいい気持ちになったのであろう。

A氏の風の便りによると、刑部典子はその喫茶店で恋人が出来て早々と結婚に突入し、今はもう二児の母親だそうであるが、愉しく



平凡にくらしている彼女の耳の穿孔にはもう恐らく二度とお目にかかる機会もあるまい。

(掲載フォトは、典子の耳責めを伴わない緊縛プレイ二葉)

昭和四十年五月号

## 『拷問にのたうつ女体』

美木乃々子の巻

美木乃々子ハントの日こそ、私にとっては忘れることの出来ない、忌わしい糖尿発病の前触れの日となったのであった。何もその日突然、発病したというわけでもなく、その下地はもうかなり以前からあったにしろ、ハントのプレイ最中に熱を出して、もうどうにも我慢ならず、モデル女性を眼前にして倒れて

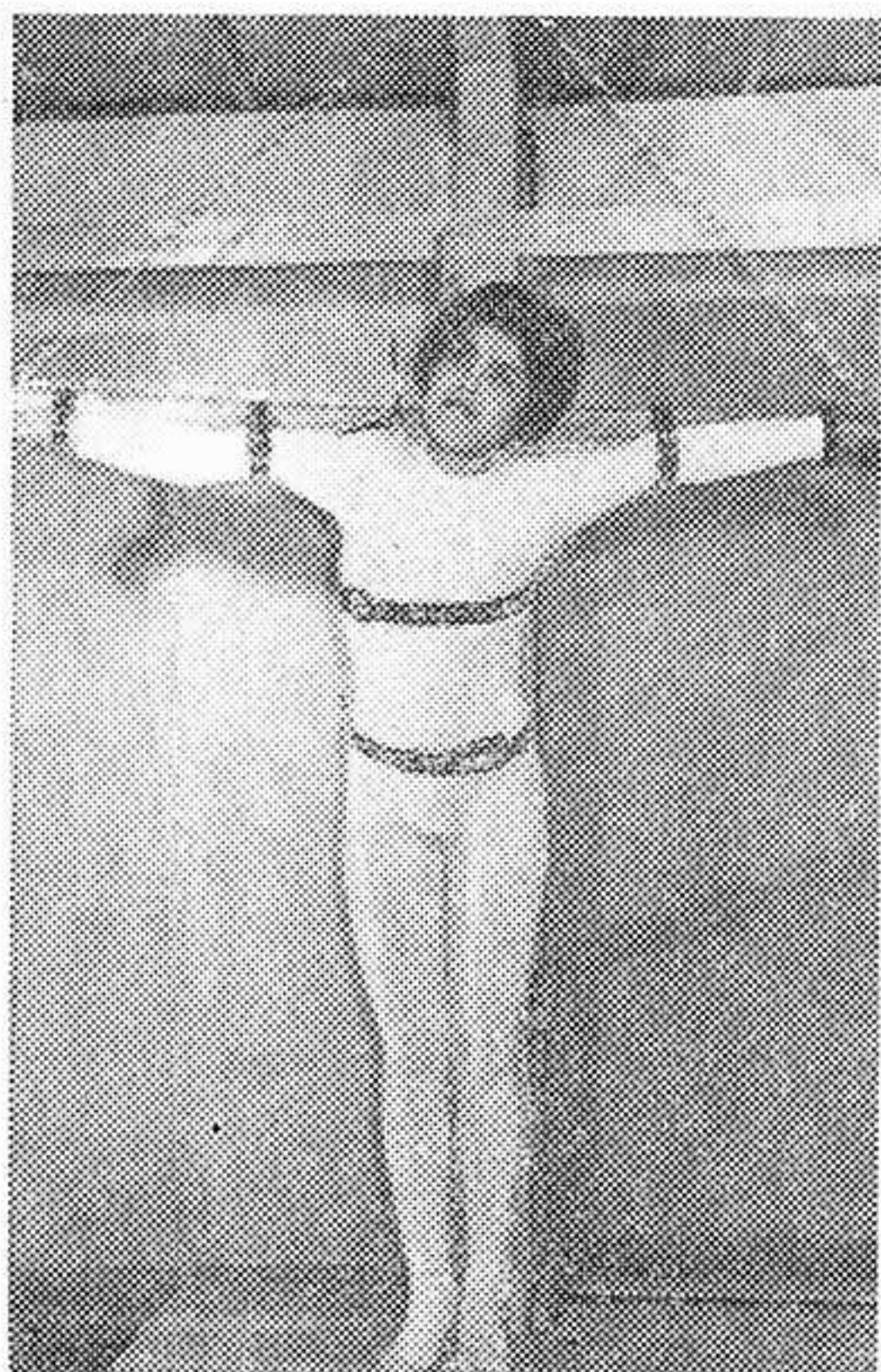
しまったのは、勿論私にとって始めてのことであった。

「拷問にのたうつ女体」は、例の映画「日本拷問刑罰史」に刺激されて、しからば奇クの方はフォトでゆこうと張切り、モデルは徳永昭三紹介の美木乃々子、場所は京都洛北の、刑具マニアのT・S氏の家ときまった。箕田氏、塚本氏、徳永氏、T・S氏と私。モデル一人に男性五人という豪華メンバーで、第一回の撮影は、準備にかなり手間どって、目的の半分も果たさないうちに時間となっていました。何しろ、T・S氏の奥座敷全部を牢屋に改造して厚い格子を打ちつけ、牢屋内には足の踏み場所もないくらい

に拷問具が目白押しにひしめいている上、中間は大きい幕布をタタミ一杯に敷いて、その上に白洲に見立てて砂利を撒いたのだから大変——。第一回は日本の拷問刑罰のみに終始したが、五日後再び同メンバーで集まった時は西洋拷問刑罰式のもの撮る予定であった。美木乃々子は、私達の意図をよく諒承し多少は芝居めいた心も持ち合わせていたので協力を惜しまなかった。眼の大きいグラマー女性である。

この第二回目の時に、私は発熱したのである。往く時は結構元気で、箕田氏の車に同乗し、途中昼食にレストランへ立寄った時も、いつになくライスカレーとビフテキを平らげるといふ健啖ぶりだった。この日頃に似げない大食自体がそもそも曲者だったが、そんなことは神ならぬ身の知る由もない。意気軒昂大張りきりで始め出したのに、プレイの時間の経過と共に息苦しくなり、精神モウロウとして、ひたいに手をやるとすぐく熱い。もう欲得もなく耐えかねて、座敷のうしろの方で人々の邪魔にならぬよう、刑罰責めの展開の模様を、かすむ瞳でぼんやりとみつめていたのであった。

箕田氏は、私のこの異状に逸早く気付くと

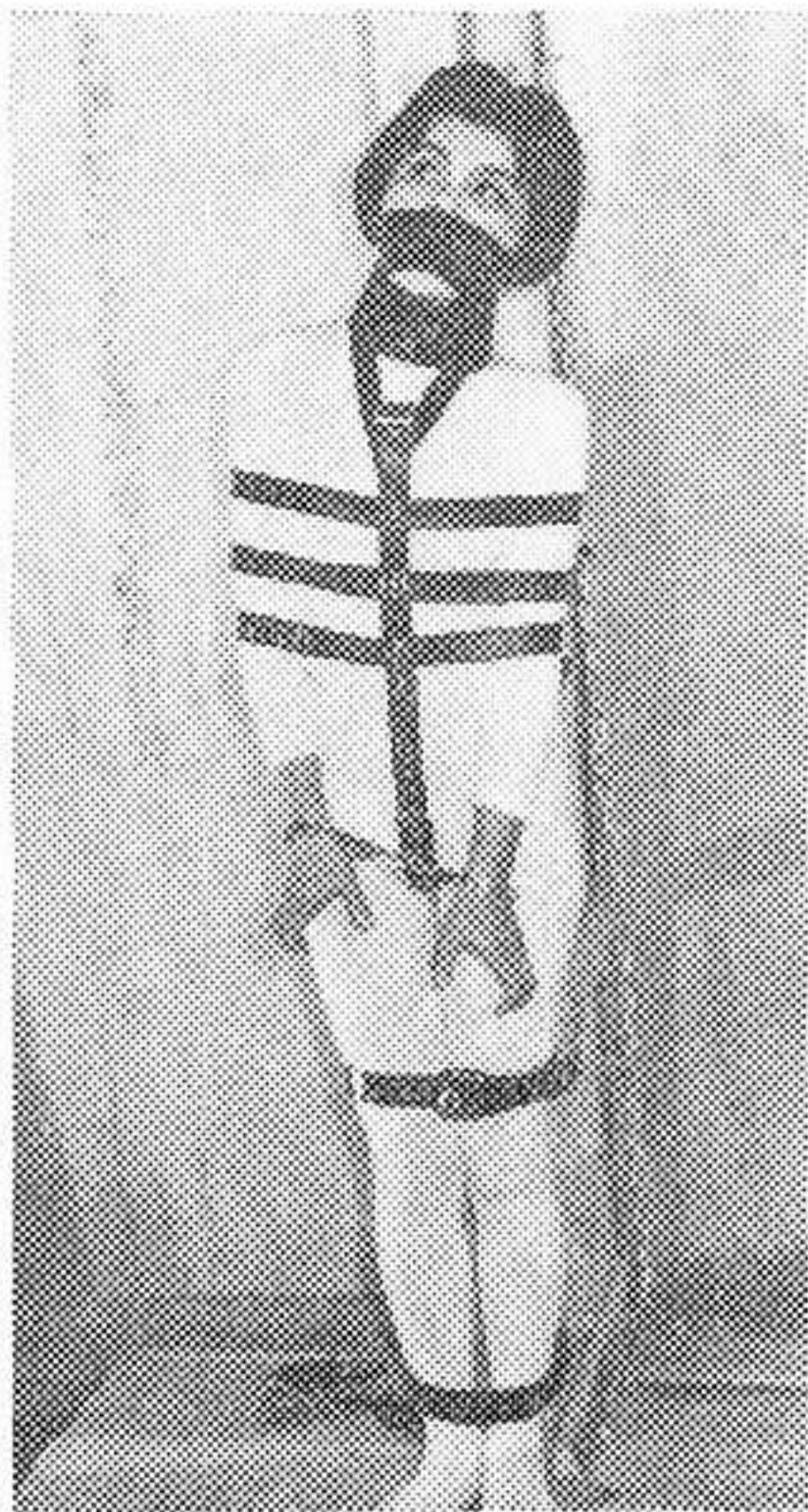




折角のプレイを勿々に切上げ、車へ抱きかかえるようにして運び入れてくれると一路私宅まで送り届けてくれたのである。

四十度近い発熱が二日間つづいて、ケロリと解熱した時、すぐく体重が減っており、それから、こうした突発的な発熱に、しばしば襲われたのであった。熱を出す毎に目方はどんどん減ってゆくと共に、のどが渇き、排尿が甘酸っぱく匂うようになり、尿の溜りが乾くと、白い滓が、豆腐かすのように附着していた。私は判っきり糖尿病に罹ったのを知った。

箕田氏から数日後誘いがかかり、T・S氏が座敷の刑罰セットを壊さぬ間に、山原清子で同様の刑罰集を撮るが、行かないかと誘われた時も、もう私は何の躊躇もなく辞退してしまった。私の本心はプレイどころではなかったのである。徳永昭三に告げてやったら、彼大喜びで箕田氏に同行し大張切りだったとあとで聞かされ、あの刺青の彼女をもう一度撮る絶好のチャンスだったのにと悔んだが、



その時点では、正直いってその気持も起こらなかったものであった。

「拷問にのたうつ女体」の巻末に（発病のため、恢復するまでカメラ・ハントを当分中止し、療養に専念します。再起の節は又、何卒よろしく御支援下さい）と、判っきり明記しておいたのに、箕田氏に強引に押しきられ、

昭和四十年六月号

## 『しなやかな女獣』

志村善子の巻

撮りだめの過去のハントなら、書くぐらいは大丈夫だろうと頼み込まれ、美木乃々子のこの巻だけでも、随分シンドイ思いで書いたのにと考えたが、ぼつぼつ時間をかけて、翌月号に、神戸で刑部典子と同時にハントした志村善子を書いているのである。

私の療養の宣言も、こうして到って当てにならず、療養に専念するどころか、すっかり糖尿病に馴れてしまい、今以って不摂生をつづけ乍ら、毎月せつせとカメラ・ハントを続けているのだから、意志の弱い標本みたいな男で、全くいい気なものである。

美木乃々子のことについては、執れ続篇を書いているので、その項に譲るとして、この巻では、その時発表出来なかった西洋拷問刑罰の、革具責めのフォト二葉を發表させていただくに止める。

志村善子、刑部典子の二人の女性を神戸で撮ったあと、数日ならずして美木乃々子を京都で二回に亘って撮った時、前述通り発病し折角ハントしたのだから、せめてこの美木乃

々子の分だけでも發表しないと、『日本拷問刑罰史』の向こうを張った甲斐もないと、無理を押して書き、それでもう当分筆を断つつもりだったのに、箕田氏の要請で、遂々三カ



月も前に撮った、志村善子のハントをのせる仕儀になってしまった。

カメラハントでは、志村善子とは神戸市長田区の東尻池で、刑部典子とは三ノ宮界限で出会ったことになっているが、事實は、志村とは須磨で、刑部とは西灘で会っているのである。勤め先や自宅も彼女達のために変えているから、佐々木耳環生がいくら足を棒にして探し廻っても分からぬ筈である。この程度のフィクションは、彼女達の身の保全の為に、何も在りの俚書く必要は更にないのではなからうか。本当のことを書き過ぎて、彼女達に迷惑がかかっては、恨まれるのは外でもないこの私だからである。



志村善子は、新建材を扱う材木屋の娘さんで、その頃花嫁修業中。こんな深窓の未婚女性が奇クを愛読していたという事實は、正に驚異であった。

全裸になった時、志村善子の腹部が幾分たるんでいたの、何気なく、中絶したのかいと不躰にきいた処、みるみる顔を染めて強く否定し、果ては涙すら泛かべたが、これは私の不用意な、女心を傷つける一言であった。ハントには、当時の風潮で書けなかったが、事實は、志村善子はその時、「そんなこと仰有るのなら、私の体をよく見て下さい」

と強く言い切った。体とは言わずと知れたことである。見てくれといわれて、ハイそうですかと覗けもしないが、緊縛プレイの時、それとなく近々と直視し、彼女にその痕跡のないことをこの目で判っきり確かめたのである。汚れない美しさが瞭らかにそれを証明していた。バージンであるとも断言しにくい。それは折々、建材倉庫で自縛して、被虐の悦虐に秘かに耽り、襲いくる願望を独りで果た

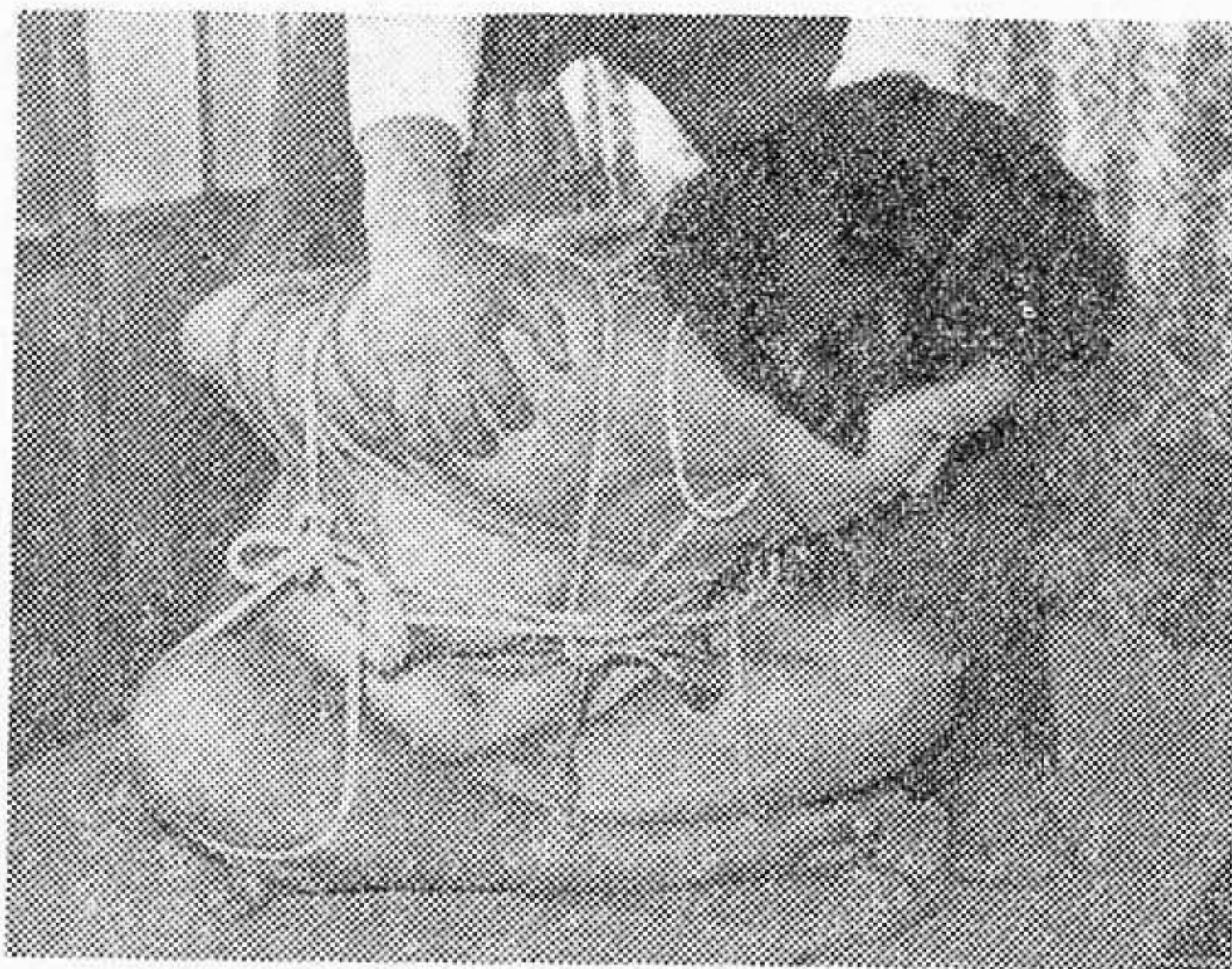
して楽しんだあとの、ものであったかも知れない。

腹部のたるみやふくらみを、一途に中絶や妊娠痕と早計するのは、誤りであることを、私は志村善子によって教えられた。ホルモンのバランスによって、時には生娘であっても腹部にたるみのある女性が往々にしてあることは、一度肥満した女性が、痩せるために努力して、美容体操などうまくゆかなかった場合、時にはたるみが残って、こうした現象が起ることを、その後何かの雑誌で読んで知ったのである。彼女がかなりの肥満タイプであって、痩せようと懸命に努力したあとが、はしなくも全裸になった時、いささかの腹部のたるみとなって、その名残りを留めていたのであろう。彼女の言葉をその俚受けとったとしても、乳首の黒ずみが、やはり私の心の奥に何か疑義を挟んで引っ掛かっていた。

数カ月後の夏の終りに近い頃、所用で神戸に出向いた時、彼女が存在を卒然と思ひ出しメモを繰って電話した処、誠にいい工合に在宅していて、会いたいと言うと、タクシーで三ノ宮まで飛んできた。

本職の方で出向いたので、カメラや縄の持ち合わせは勿論ない。唯逢って、食事でもし





ながら、彼女の近況でもきいて別れるつもりが、折からの夕食時で、ジョッキのビール二杯許り平らげるうち、何とはなく情念きざして、フト誘ってみる気になった。彼女はしばらくためらっていたが、やがて思い切ったようにうなずくと私について来た。

最寄りのホテルへ没して、備付の浴衣の腰紐二本で、しばらくは縛っていたが、柔らか

い餅肌を抱くと、裸身の力を抜いて、微かに悦楽の吐息が洩れている。

しかし私は遂に果たせなかった。意馬心猿の欲情する心とは逆に、焦れば焦るほどダメになっていった。自己嫌悪に陥った実にみじめな気持で何とか彼女には奉仕だけはし得たが、糖尿の顕著な症状が、ここぞという時にチャンと私の肉体を左右していたのである。

熱い頬を私の裸の胸に埋め乍ら、

「来月の十五日の大安に結婚するんです。いけないとしりつつ、つい辻村さんの誘惑に負けて来てしまいました。これでよかったようにも思いますわ。神様がそうさせたのね」私の糖尿を知ってか知らないでか、志村善子

昭和四十年七月号

# 『鼻責版・夫婦善哉』

増田喜代司、みゆきの巻

三月下旬、未だ体調のはっきりしない頃、私は編集部経由で、増田喜代司から、かなり部厚い一通の封書を受取った。

M七〇生の鼻責めのハントに刺激されたらしく、彼等夫婦の出身地から書き起こして、鼻障子を貫通させた方法、鼻責めプレイの種々相などを綿密に細大洩らさず書きしるして

は私の耳許でこう囁いて、ちっぽけな私の乳首を白い前歯でチクリと噛んだ。

八カ月許り会わない間に、彼女は一廻りほっそりとなっていた。腹部のふくらみは心なしかしまっている様に感じられ、ふっくらとした下ぶくれの容貌にも、女らしいあでやかな磨きがかかっていた。

それが私と志村善子との最後であった。私も電話しないが、彼女からも、絶えてその後は一葉の葉書すら舞い込まない。(フオート二枚は、始めて撮った時の未発表のものです。強烈な海老責めに耐えた柔らかい肢態と、真珠のネックレスが印象的です)

ある。出来れば、自分等夫婦をカメラ・ハントの材料に使ってほしいという、熱心なる告白文であった。

その年は、春の声をきいても肌寒い日の続く、謂わば冷春異変とでもいおうか、四月の暦をめくっても、オーバーが欲しいくらいの気候であった。



四月の第一日曜日に、彼の指定した大阪梅田の喫茶店で始めて出会ったが、これがその後の、増田夫妻との、度々のプレイの結びつきとなった。若妻のみゆきさんはこれといってとり立てての特徴もないが、色白な可愛いお嬢さんタイプで、到底結婚したとも見えぬ初々しさであった。この日を契機として、私は彼等の要請で、度々プレイする機会に恵まれたのであった。

増田喜代司は夫婦プレイの際、勿論みゆきさんを強烈に緊縛するが、所詮緊縛は余技であって本命は鼻責めにあった。どのような緊縛プレイの場合でも、必ず鼻責めが伴うので

ある。それは徹底した彼の行事でもあった。鼻責めも単にプレイの一環としてしかやらない私にとって、彼のこの執拗なまでの偏執は時には過剰となって、私の感興を損なうことすらしばしばであった。鼻責めのその強烈さに時には辟易し、折に触れて啞然として傍観しているのである。鼻責用の雑多な小道具が匏一杯に

の中には医科用の鼻孔拡張器や鼻鏡のたぐいまで集めているのであった。

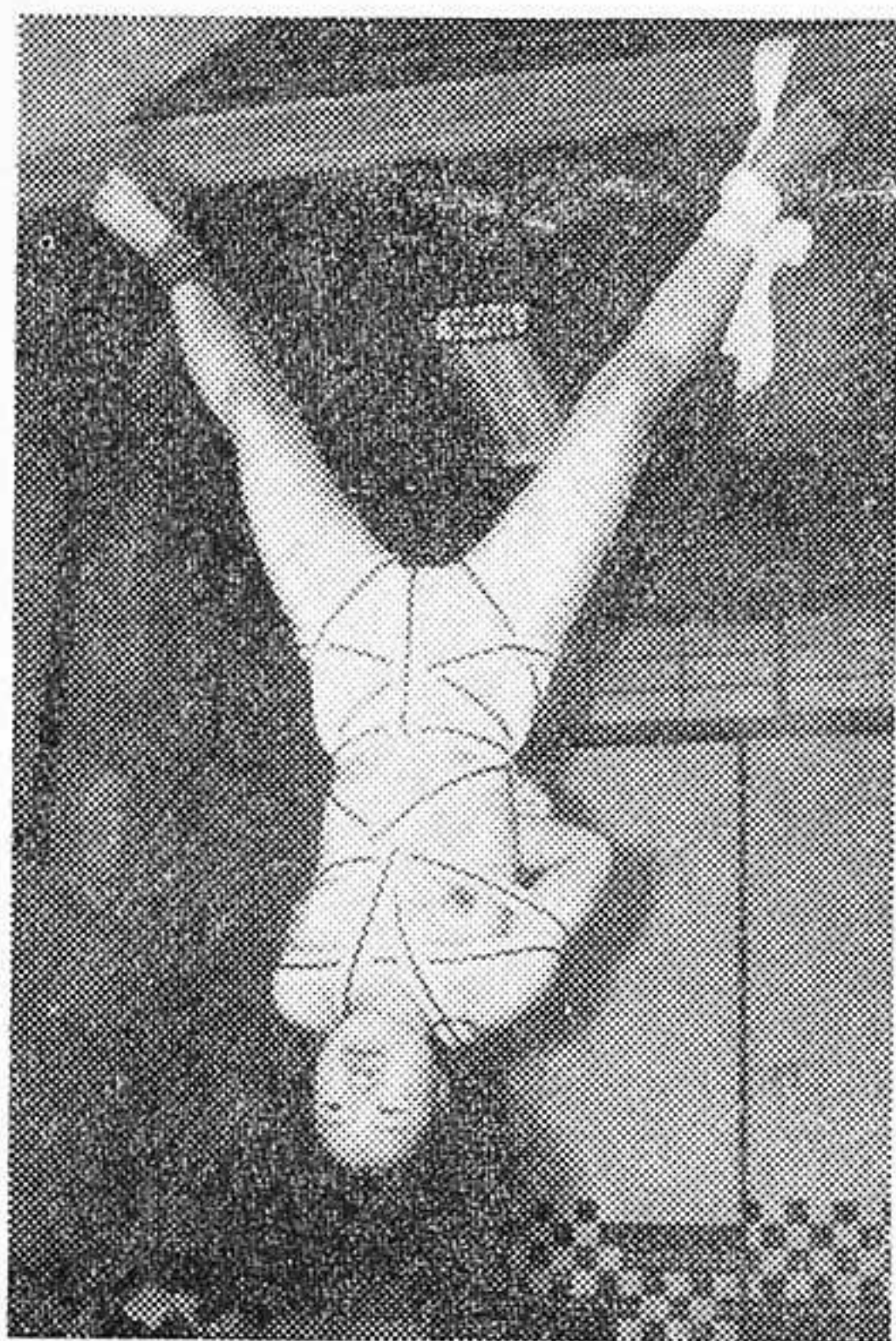
雅な妻みゆきの鼻孔が、度重なる鼻責めによって、いつも孔内が赤く爛れていた。プレイが始まると、雁字搦目に椅子に縛りつけられ、身じろぎすら出来ぬ彼女の鼻孔が、無理矢理押し拡げられ、痛々しく歪み、極限にまで拡大されて、そ

の激痛にポロポロ大粒の涙をこぼしつつ、みゆき夫人は忍耐づくよく我慢しつつづけていたのである。

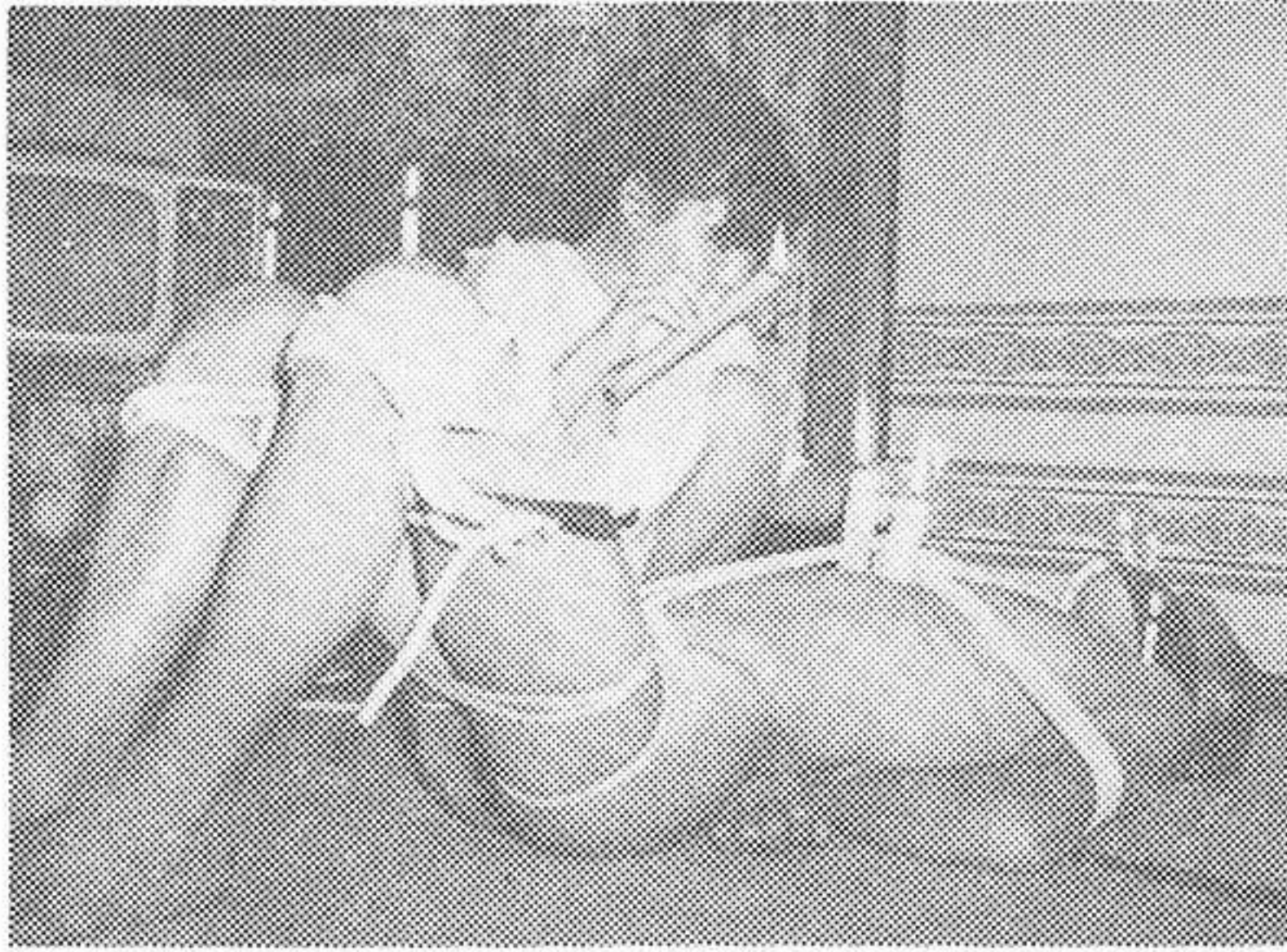
夫は遂に妻の鼻障子を穿孔したが、彼の勤務中に、妻は穿孔用の異物を抜いて、鼻障子の微孔は肉で埋まるという一事もあった。

増田喜代司はやがて夫婦だけのプレイで飽き足らず、M七〇生との鼻責めの競演を願うようになり出した。度重なる願望に根気負けした私は、M七〇生を彼等夫婦に紹介する。

私は傍観者——。対峙した鼻障子穿孔同志の二人は、互いに孔の大きさを競い合い、果ては、みゆき夫人が縛り役に廻って二人の男







を容赦せず犇々と縛り上げる。夫の飼育によって、みゆき夫人がS性をも備えていることは、プレイするものにとっては正に最高の女性であった。夫の鼻障子に銚を貫通させて金鎚で柱に打ちつける。M七〇生を緊縛して十数本の蠟燭で、強烈な臘責めを始める。みゆき夫人はいきいきとして、さも愉しげにそう

したS行為を平然とや  
つてのけるのである。

夫とM七〇生の被虐の  
願望は、すべてみゆき  
夫人によって果たされ  
丁々発止の激しい被虐  
合戦はいつ果てるとも  
知れず続けられる。

私はその被虐にのた  
うつ男共の姿を、又嗜  
虐に喜々と動き廻るみ  
ゆき夫人の縄捌きなど  
を、堪能するまで観覧

しては、カメラのストロボを光らせていた。

増田喜代司こそは完全なるSMのプレーヤーであった。SとMの性情を等分に持っている、Mに耽溺する場合は、徹底的にみゆき夫人の緊縛を受けて、想像を絶する鼻責めを受け、Sに変化した時は、みゆき夫人を極限まで縛って、タツプリと時間をかけて、可愛い鼻をいたぶりつづけるのであった。Sの場合もMの時も、増田喜代司は等しく陶醉の表情をまざまざと浮かべて、私がそこに存在している、もう惑溺の世界に没入して、只管に悦虐に咽びつづけるのであった。M七〇生が



被虐一辺倒の性格にくらべ、SMを等分に使  
いわけける増田喜代司は、世にも珍しい存在で  
あった。

増田夫妻の、そうした赤裸々な、真のSM  
プレイと呼ぶにふさわしいフオトは、私の撮  
った分と、彼や彼女、又セルフタイマーで撮  
ったものも含めて、実に千枚近く手許にあり  
発表したものの許りでも、その膨大な物量は  
到底、誌上に発表出来そうもない。

やがてみゆき夫人が妊娠したと知った時、  
千載一遇のチャンスとばかり、私は増田喜代  
司に、この可愛い女性の、日増しにふくれゆ



く造化の妙を、順を追って撮ってくれるよう懇望した。快く引受けた彼は、忠実にそれを実行し、マジックインキで妊娠×カ月、×月×日撮影と、且念に腹部に記入する熱心さであった。

最高に小山のように膨らんで、度々の妊娠プレイの影響もなく、見事双生児の誕生——しかし、増田喜代司の鼻への執着は、可愛い双生児の女の赤ちゃん二人の誕生によっていつしか薄れて、子供への愛着へと推行してゆき、プレイの日は目に見えて減っていった。未発表の妊娠フォトは、増田みゆきの続篇でいずれ掲載の予定であるが、これは彼等夫妻にとっての一転機でもあった。(掲載フォト四葉のうち、逆吊り、海老吊りは、当初私が旅館で縛ったもの。別の二葉はM七〇生に臘燭責め、鼻責めする、みゆき夫人)

### 昭和四十年八月号

カメラ・ハント休載(サロン楽我記のみ)

### 昭和四十年九月号

カメラ・ハント休載(サロン楽我記のみ)

五月から七月始めにかけて、私はかなり食

事療法と摂生に専念し、努めて軽い運動を行なったりしている。そこには妻の、切なる願いも秘められていたことを附記せねばならない。

当然ハント運動も暫くは中止し、同好の仲間達も私の病状を知って、無理な誘いもかけてこず、ハント女性も一向に紹介してくれぬようになった。かてて加えて、箕田氏も私の体を案じてくれて、カメラ・ハントの続稿を請求しなくなっていた。

何となく責任から解放されたような三カ月間であった。

糖尿病は、謂わば近視眼と同様なものであって、食事を摂生し、体に合わせてとておれば、さして常人と変わりなく、これは近視眼の人が眼に合った眼鏡をかけた場合、何ら常人と変わらないのと同様であって、無理な疲労や不摂生、それに暴飲暴食が一番の大敵であった。八十キロ近くあった私の体重は、七十三キロに減量し、その体重の俾ずと落着き始めると共に、反って動きが軽くなり、節減された食事にも徐々に馴れてゆき、いつしか暑い夏も終る頃から、活力は次第に回復しつつあった。脾臓のインシュリンの活動が停止しているのだから、一生治らない病いで

あるが、世に謂う無病短命、一病長命という諺どおり、この私の一病が、私をして確かに日頃の不摂生、不養生から自戒させてくれたのである。しかし反面、そのせいであらぬか近視眼が急速に老眼化してゆき、白髪が眼にみえて殖え始め、齒列に隙間が多くなっていた。ハメマラ——古人はそんな俗言で更年期をいうが、確かに私は今、病を得て更年期症状へと、逸早く突入していったことは事実である。

今に到る、延々五カ年に亘るカメラ・ハント連載中、休載したのはこの八、九月号の療養期間中だけであった。

そうした体調の衰えはあっても、私のカメラ・ハントは、暑い夏を越えた頃からいつしか再び軌道に乗り始め、発病という人生の突発事故もあったが、やがて若々しい一群の、青い新芽のような娘達をハントする、爛熟期を迎えようとしていたのである。

—○—

(この回顧は、過去のカメラ・ハント女性のデータ収集の難関もあって、連載は出来ませんが、纏り次第、年次号を追って間歇的に発表してゆきますので御諒承下さい)





## 『奇ク』への提言

三条

剛

本誌愛読者の一人として忌憚らない意見を述べさせて貰いたい。

小生、奇ク愛読以来十余年。盛沢山のバックナンバーも引越しの度に積荷洩れが出来る始末。それでもこれまで何とかこれとは思もの手ばなさに持ってきたのが百冊余り。時につれ折にふれ白表紙時代のものから順々に整理してみ、つくづく現在のあり方に失望を禁じ得ないのである。

一体この数年間というものの本文の内容にどれ程の進歩変革があったろうか。何も無い。実に何も無いのだ。ただ失い消えてゆくものばかり、

SMの神髄と言われ、多くの読者が△花と蛇▽一本に魅せられて

いるとのことだが、小生から見れば今やマンネリもマンネリ超マンネリとしか言いようのない描写の羅列で、最近では辟易の感を拭い切れない。

毎月のハプニングを期待するのは辻村隆氏の『カメラ・ハント』一本のみではないか。その辻村氏も十一月号にも見られたように、近頃では肉体的衰えも著しく誠に痛々しい限りだが、今や小生にとって奇ク購読の唯一のオブジェとなっていて辻村氏には何としても頑張ってもらいたい。更にはS M本格派の創作を期待するのは、あまりにもむごいことだろうか。

本誌と同種同傾向の類誌もずいぶんあった時代から今やS M誌界

ナンバーワンの実力を持つ本誌に本格的S M小説を期待するのに何の不思議があるのか。この際編集部におかれては旧来の作家を揺り動かしてみたら如何なものだろうか。告白文の古川裕子氏、水田真紀子氏等にその後のレポートをお願いしてみたら。又、四馬孝、滝れい子、遠藤春一氏等の画家には挿絵などといわず、口絵再開のきっかけをつかむ附録ケースとして本誌に数枚挿入してはいかがなものだろうか。

現在の週刊誌、雑誌のたぐいでヌードグラビアの一枚もない構成というものは絶無といってよい程なのだから、奇クもここいらで重い腰を上げてしかるべき時期がきたと思うのだが……。

更に望蜀の念を書き加えるならばアート紙によるグラビア再現を望むところなのだが、そこまで性急なのは危険とするなら『奇クサロン』の内に読者誌上緊縛写真発表会なるコーナーを設け、そこで手札版なみのものを五、六枚発表し、塚本氏、辻村氏、編集部などが講評を担当すれば面白いと考えるが如何なものだろうか。

又編集部独自の企画として、例えば定例撮影会、モデルと語る座

談会、S Mに関するインタビュー等を取り上げて貰えば至極楽しいと思う。以前は結構こうした編集部企画も誌上を賑わしていたのだが、最近は一向に見ないのは淋しい。

更に「今月の新製品」といったコーナーでS Mに関する用具器具の紹介、外国雑誌の新刊紹介等もあってよいと思う。

尚余談になるが、先日九月二十四日のテレビ△ナイトショー▽にて団鬼六氏が『サドの世界』について語っていたが、あの番組の性格が大変陽性なので、神秘的なS M界を語るにはあまりにも場違いな感じで、折角団氏や談志が説明しても説明不足をどう補うことも出来ない有様であった。しかし小生はあの説明不足の部分、即ちS Mの神髄のような気がして、それだけはゲラゲラ笑いながら語ってほしくなかったのだ、あれはあれで良かったと思う。

それにしてもテレビで見る団氏は、肉付きもよく円満な顔立ちで△花と蛇▽執筆者とは思えない真面目さを感じた。同氏の三十九年度来のあの絶妙な筆力の再現を大いに期待して、この拙いペンをおくことにする。



## あのヒトはいずこ

予世場良三

あのヒトはいま、どうしているだろう。微笑んでいるだろうか？ 白い綺麗な歯並を覗かせて、あの時のように……。

あのヒトのことだ。きっとまだあの初々しい羞らいは失せてはいまい。あのみずみずしい柔肌の張りとともに……。

あのヒトのことだ。いかに恋しくとも、自らねだることはあるまい。男はわかるだろうか？ それに細引であることが……。

あのヒトのことだ。慕い寄る男は絶えるまい。きっと出逢えたことだろう、あの美しい肌に程よく縄をかけ得る男と……。

あのヒトのことだ。ふくよかな肢体を羞らいに包み通すだろう。男は察し得るだろうか、それが彼女の歓喜の兆しであることを……。

あのヒトのことだ。喜悦をくびれた艶肌に漂わせ、くつわの奥で哭くだろう。男は逆に縛られるに違いない、恋情という縄に……。

ああ、あのヒトは今どこに？ エゴの非を悔めど、最早、夢か。

## 緊縛のファンタジー

賛 縄 武 史

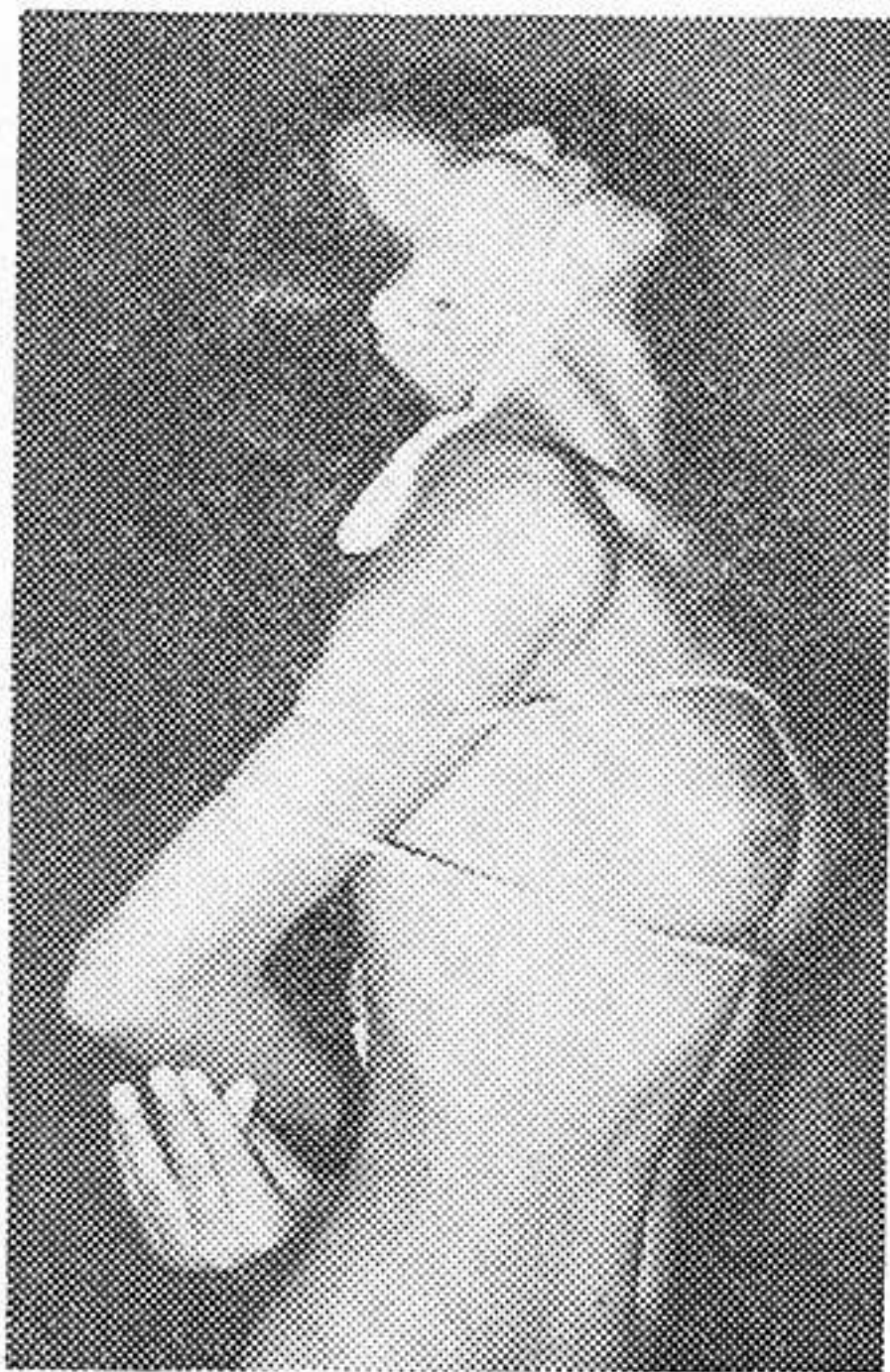


写真とは難しいものです。これまで自分で撮影から現像焼付までやって来ていえることは、シャッターチャンスはどう生かすかということです。特にSMフォートにはこの生かし方が、その写真の価値を決めてしまい、例えばムチ打ちの瞬間的な表情などは絶対です。しかし、辻村氏も塚本氏も再々ふれておられることですが、プレイの継続中はプレイが主になりフォートが後手々々にまわり、いつも生きた表情を逃がし、何でもない表情をさも大切そうに引き伸ばしている訳です。そんなことから最近では進行形のフォートに見切りをつけ、表情のあまり出ない

背後からのポーズやプレイ中のムードなものを狙い出した訳です。そうすると、面白いことに気付きました。

女の身体

とは真正面より、背後からか、または横面から狙った方が肩の丸みや、くびれた腰の曲線が如実に描写され、これに緊縛がかかると思



儼な美を意識させられます。以来三枚に一枚はバックから狙いをつけるようにしました。また、SMフォートは本格的縛りの縄が嚴重にかかったものが多いようですがこれもあまり嚴重過ぎると、荷作りのでムードが出ません。緊縛されている中に美がなければ意味を持たないので、私は軽い縄がけでファンタジックな夢を追う事にしています。これはあくまでも個人的な嗜好の問題になるようです。

同封致しました写真は、最近自宅で撮影したもので、モデルは妻の和子です。緊縛写真としては見るべきものではありませんが、プラトニックのSM同好の志には分かって頂けると思います。





(第六十六回)

辻村 隆

九月二十四日関西テレビ、ナイトショーで、鬼の会々長団鬼六氏と、立川談志師匠のSM談義を見て、やられたと思った。これと同じ企画が、数日前読売テレビの11PMから持ち込まれていて、十一月四日頃に、テレビ放送の予定だったからである。仮題「サド侯爵もビックリ」で、片や前田武彦氏芳村真理さんの司会、こなた藤本義一氏と市川猿之助の妹さんの司会での同企画。それが関西テレビの方が一歩先んじた恰好である。こちらは残酷ショウの秋山夫妻とMのベテランA氏を混えて、大いにSM談義するつもりであったが鬼六さんにお株をとられた次第。何れもマルキ・ド・サドの「ジュステイヌ」(傍題美德の不幸)の抜萃だけを写し、こうした映画が、堂々と封切られることについて、その是非などをテーマ

にしてゆく段取りである。二番煎じの感なきにしも非ずだが、そこはそれ関西と関東の主観の相違でまた変わったものが出来るかも知れない。鬼六さんもいよいよテレビに登場し、談志師匠もSMへの関心をはっきりと示して、同好者のみに分かる談義に終始したが、いつになくマエタケさん、日頃の腕を揮るえず浮き上った感じであった。

その問題のマルキ・ド・サドの「ジュステイヌ」の試写を、九月の月末に大阪の毎日ホールで鑑賞する。関西での一般封切は十一月初旬だそうであるが、イレブン関係のみ、試写の光栄に浴した。連絡しておいた秋山夫妻も遙々九州より、少し遅れて到着。物語は「悪徳の栄え」の主人公ジュリエットの妹、ジュステイ

ヌの美德による不幸を描いて、約二時間足らず。執筆するサドの牢獄での妖しい幻想が狂言廻しとなつて話が進められてゆく。全篇かなりサジスチックなシーンがあるが、この程度なら正直いって東映の「責め地獄」の方が凄かった。しかし「責め地獄」には皆無の芸術的な香りが漂っていて、言い換えれば、それだけに綺麗ごとには終始している。惹句は「倒錯(レズ、ホモ)異常性愛(サド、マゾ)の絢爛たる「悪の花園」にさまよう、美德の処女ジュステイヌ」とあるが、レズもホモも至ってあっさりとしていて描き足りないしサド、マゾの点も今一息といった感がある。そのくせ、見終ったあとに、仄々ただよう妖美な香り高い印象は、可憐な主人公ジュステイヌのみずみずしい魅力に幻惑されたからであろうか。

は清純そのもので、しかもその清純な彼女が全裸をみせ、ゆたかな乳房を惜しげなく曝し、種々のサジスチックな行為をうけるのだから、ついその魅力に引きずりこまれてしまうのである。私にはこのロミナ・パワーと、極悪非道の絞首刑を待つ死刑女囚のマーセデス・マッケンフリッジの、肥満タイプの毒々しい演技が強く印象に残った。SMの愛好者は一見していても損にならない映画だということとは出来る。西独コロナ、イタリアのアイカ両社の合作で、一九六八年度作品である。なおジュステイヌの物語と併行して「悪徳の栄え」の主人公ジュリエットの悪徳ぶりも、かなりどぎつく描かれているが、所詮傍系である。

11PMに出演予定の秋山夫妻がひょっこり私宅を訪れてきた。この処、しばらく噂をきかないと思つたらそれも道理、彼が去年の十二月頃、神戸のミュージックに出演中の時、ホテルへの帰途で、凍りついた路面で足を滑らせて転倒し、起き上ろうとした処、靴がねが滑って再度倒れ、激しく肘を打って、骨が砕け、かなりの重傷を負ったとのことであった。己むな



く公演を中止し、急拠九州の自宅へ帰郷して療養に努めていたというところで、腕も完全に癒り、再起第一回は、なつかしの大阪ダイコーム्यूジックで、十月一日より十日間公演することになったと、嬉しそうに話していた。

その夜は夫妻で一泊されたが、生憎と嫁ぐ長女の嫁入道具で座敷が一杯に塞がり、狭い四帖半の片隅で窮屈に過ごしていただくより仕方なかったが、呑むほどに酔うほどに、秋山美智夫のS性が復活し、思いがけぬ緊縛プレイのひとつときとなつて、あわただしくカメラを構え、二本ばかり撮らせてもらった。このフォト、いずれカメラ・ハント回顧の、彼の巻で発表するが、闘志満々の彼、秋山夫人の協力は、みためにも快く、楽しい一夜となった。

× × ×  
奇ク十月号の『妖鰻記』には、どうやら私をモデルにしたらしい人物が登場してくる。勿論フィクションだから、幾ら私らしい人物が登場しても、一向差支えないわけだ、かつて戯作のうまかった夜野探郎氏あたりも、しきりに私を姐上にのせていたのも、今はなつかしい過去の想い出である。

同好者の要望もさることながら私が「カメラ・ハント回顧」を書く気になったのも、一つはこうしたノスタルジャにかられて、ふと自分の歩んで来た道を、この眼で今一度確かめたくなり、それが機会となつて、あの人、この人に便りなり、電話なり出来る口実を作ったのではなからうかと思う。何とか一年間分ぐらい纏めたが、あの当時、糖尿の発病がショックで、筆を絶とうと真剣に考えたのも、今は懐しい想い出で、それが今もこうして咄々と、愚にもつかぬ駄文、迷文を書いてある処をみると、病いコウモウに入った私自身、おかしくもあり、時にはフツと無情を感じたりもするのである。長女を無事嫁がせ、来年は二女の結婚と、はやばやおじいちゃんになる日も近いというのに、そこに何かどうのようなものすら感じる昨今である。箕田氏始め、同好者の方々から、長女の結婚のお祝いをいただき、いただいた長女自身、面喰らって、お礼のしようもないおかしさに、改めて同好の方々との私的なつながりをしみじみ感じるのであった。長女の結婚祝を契機に、M七〇生や、増田喜代司さん等とも再び交遊の始まったことも、懐かしく嬉しい一事である。

× × ×  
SMのプレイには愛情が伴い、拷問、責折檻には憎悪が介在している。思いきり強く緊縛しておき乍ら、縄を解くと、縄痕の体を撫でさすってやる心理、それがプレイというものではなからうか。SMのプレイとは、サドもマゾも、プレイというルールの上に立って行なうから愉しいのであって、美肌に血を流し、悦虐や快楽を伴わぬ苦痛のみにのたうちまわらせたり、それはもうプレイとはいえないのではなからうか。縛る人間と縛られる人間、虐める男と虐められる女、そうしてその逆も又真で、こうした人間関係が、暗黙の諒解の上でSMの行為を行なうこそ、そこに悦楽と快虐への探求が生まれてくるのだと思うのである。「責め地獄」が、も一つ同好者の共感を呼ばなかったのは、そうしたこと遠因があるのではなからうか。

かつて「変態」の頭文字として呼ばれた「H」が、今では若い娘も平気で口にする「H」とは、かなり様相が変わっている。ノーマルな人間でも、少しエロがかかった話をすると「エッチね」ときめつけられる御時勢である。変態でも助平でもない、も一つ軽い意味の「猥らごと」程度に、ごく一般化して使われているようである。その「H」と同様SMという言葉もその語源は勿論、サド、マゾから来ているが、真性のものではなく多分にプレイを前提とした要素を含む言葉に変貌しておりはしないだろうか。サジストとよばれるより「大分Sやね」といわれた方が、遥かに感じよくうけとれるから妙である。S・Mという言葉が普遍すればするほど、段々とサド、マゾから遠ざかり、果てはアルサロなどで、キュツと腕をつねったホステスに対しても「ほう君はすごいSやな」てなぐあいに使われる時代がくるかも知れない。

奇クに発祥したS・Mという言葉が、今や全国に蔓延し、拡大していつ、私の若い頃には、Sが「彼女」という意味や、或いはレスビアンに対して称えたのが、これからは「いじめること」の代名詞にもなりかねない気配である。ヒット曲「恋の奴隷」が、S・Mの願望を現わした何よりの証左ではなからうか。



## —茶の間の指定席—

## 加賀まりこの折檻

牧 高 志



去る九月十八日(木)午後十時から東京地方で放映された、NE Tテレビの角田喜久雄原作、連続TVドラマ「どくろ銭」で、お銀役の加賀まりこが後手に縛られ、石抱き責めに遭うというシーンがあった。

原作者の角田喜久雄氏は御承知の通り、野村胡堂や山手樹一郎などと同様、小説の筋をいわゆる波乱万丈的に盛上げる一つの手段として、必ずといってよいくらい、女の縛りを巧みに盛込ませる作家の一人である。

私は、このドラマに出演中の加賀まりこが、芸能界において現在

どの位にランクされているスターであるのかつまびらかに知らないのであるが、がむしゃらに主役の三四郎に扮する高橋英樹に恋慕する、おきゃんな女として、ぐでぐでんに酔っぱらい、大辻伺郎などの三下野郎に精一杯の、歯切のよいタンカを切るあたりのあの独特のフェースは、オーバーながら大いに賞讃したい。

このあばずれ女が、幸か不幸か役人の手に捕った。そして冷たく薄暗い牢内仕置場に曳き出され、下り藤の大柄模様のきもの姿のまま細縄でがっちりした後手に縛られて、石抱き責めにされるとい

われら待望のシーンが展開したのである。

時間にして僅か二、三分の短いシーンだったが、放映時刻が午後十時半過ぎともなればいかな子供のうろつく茶の間でも、も早や成人向き時間帯となり、気を楽にして、喰いつくように観られたのは嬉しい。ただ、こうしたシーンが今後も安易に観られるようになる、奇クなどの愛読者は恐らく夜ひるとなくお忙しくなるばかりでなく、いろいろとご注文が出ることだろう。

例えば今回の石抱き責めも、女に泥を吐かせるため三枚目の石を抱かせると、苦痛にゆがんだ加賀まりこの顔のクローズアップは放映されたが、肝心のうめき声のほうはどうも省略されていたように思う。このあたりが、折角こまで来ておりながら問題とならぬこともない。つまりブラウン管での映倫? が存外効いていたともいえよう。

ナレーター芥川隆行による予告篇を見ると、お銀はさらに天井から吊り下げられ、鞭で責め折檻されるシーンが紹介されたので、次週のこの時間も、指定席ならぬわが家の茶の間には、えもいわれぬ

妖気が漂うことだろう。

短い通信欄では意がつくせないが、私が今回本誌に寄稿したのは単なる縛られシーンの紹介だけではなく、例によっての我田引水的なものかも知れないが、多分に伏兵線的なものがいいかったからである。

例えば、大きさに制約されたTV画面のせい、われわれが望むところの、縄目のある女の上半身は兎角敬遠され、小さく全身が映ったかと思うと、すぐ顔のクローズアップに移りたがるプロデューサーの何と多いことよ。

緊縛された筈の女が何かのはずみで背後を見せ、手で縄を握っているのは、いわずもがなの興冷めだが、リハーサルを入れても短い時間を、何故リアルにお演りにならないのか。

敵は本能寺、視聴者を無視した色気もしゃれ気もない男同志の会話をながながとやり、あげくの果てがコマーションでは本当に迷惑至極、この上ありませんよ……といった類いである。

帰するところ、まだまだTVドラマは改良される余地がありますよということを、結びの言葉として置きたい。



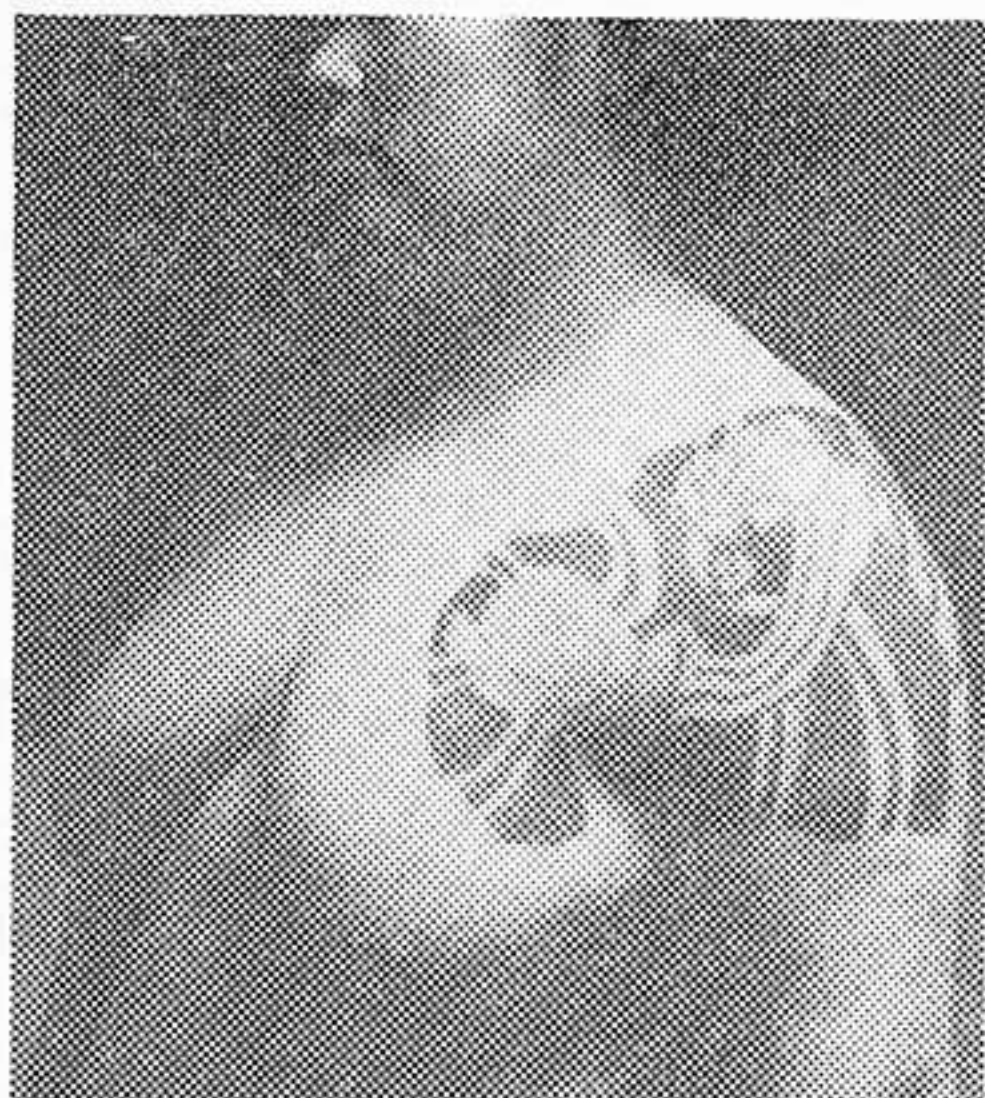
## 映画通信

## 縛り映画・演劇

東山映史

東映の石井輝男監督の「猟奇女犯罪史」では、最後の明治篇、高橋お伝がただける。前作の「徳川いれずみ師」で緊縛の拷問シーン中に失踪して話題をまいた由美てる子がお伝役。

毒婦の悪名で今の世にもその名が伝わる高橋お伝は、まことに不幸な女だった。十六才の年に亭主浪之助と無理矢理に添わされたが



## 「わが作品」

赤畑 修造

ごぶさたしました。11月号の「サロン楽我記」で、久方ぶりに憧れのヒト、水野夫人の面影を拝見してカングキ。肥妻にマジックインクで彫った？ 作品を見て下さい。

と降る中で、首がとんでころがるのは、石井監督好みであろう。

若山富三郎主演「賞金稼ぎ」では、「肉体の門」で吊るし責めで売り出した野川由美子が、徳川の女スパイで活躍する。薩摩藩へ潜入するがバレて捕えられる。縛られて引き廻され、後手縛りで吊るし責め、火責めにあう。着物の裾がチリチリ燃え、苦痛の汗が顔に噴き出て苦悶するさまは、なかなかよかった。

日活の歌手扇ひろ子が「昇り竜柔肌仁義」で、長襦袢一枚の吊るし責めにあうが、仲々迫力がある演技だった。

独立プロになると、相変わらず辰巳典子、二条朱美らが縛られ責められている。

「痴女の戯れ」では、辰巳典子が秘密クラブのコール・ガールで死んだ妹の高校生の秘密をさぐるためにホテルへ行き、捕えられ拷問される。後手で足も縛られ、そして水責めにあう。責めの方法も色々工夫をこらしている。

「女肉の狂い責め」では二条朱美が縛られ責められる。ファスト・シーンから手足を一緒に縛られ、地下室の天井に吊られ、責められる。カメラ・アングルもこり、見

ごたえがあった。

「野郎と情婦」では、コール・ガールがそれぞれ立縛りにされる。床で伸ばし責めなど、体位の違った責めがあった。その中では、やはりベテラン清水世津の責めがよかった。

「処女暴露」では、林美樹、二条朱美、白川和子の三人の女子学生の生態を描いたものだが、白川和子がアルバイトで拷問ショーを行なうのが異色。三人の女が組で行なわれるショーで白川和子が棒縛りにあいベルトで責められる。ボスは「強く縛れ」という。「痛い痛い」といいながら、白川和子は縛られる。

演劇では、十三の木川劇場で、忍妙子の地獄絵ショ―第四話「処刑」が出色である。元禄時代の女囚の処刑を示す。忍妙子のお定が主人殺しで捕縛され、情夫の名前をいえと拷問される。白衣で本縛り、菱縄縛りをされ、そしてムチ打たれる。最後は吊るし責めにあい、斬られる。苦悶しながら手足をふるわしての体当り演技は立派である。

もう一人、新人女優三木純子が逆さ吊るし責め、水責めにあうのが、将来を楽しませた。



——孤独のプレイ願望者——

自 縛 写 真

名 閨 多 史

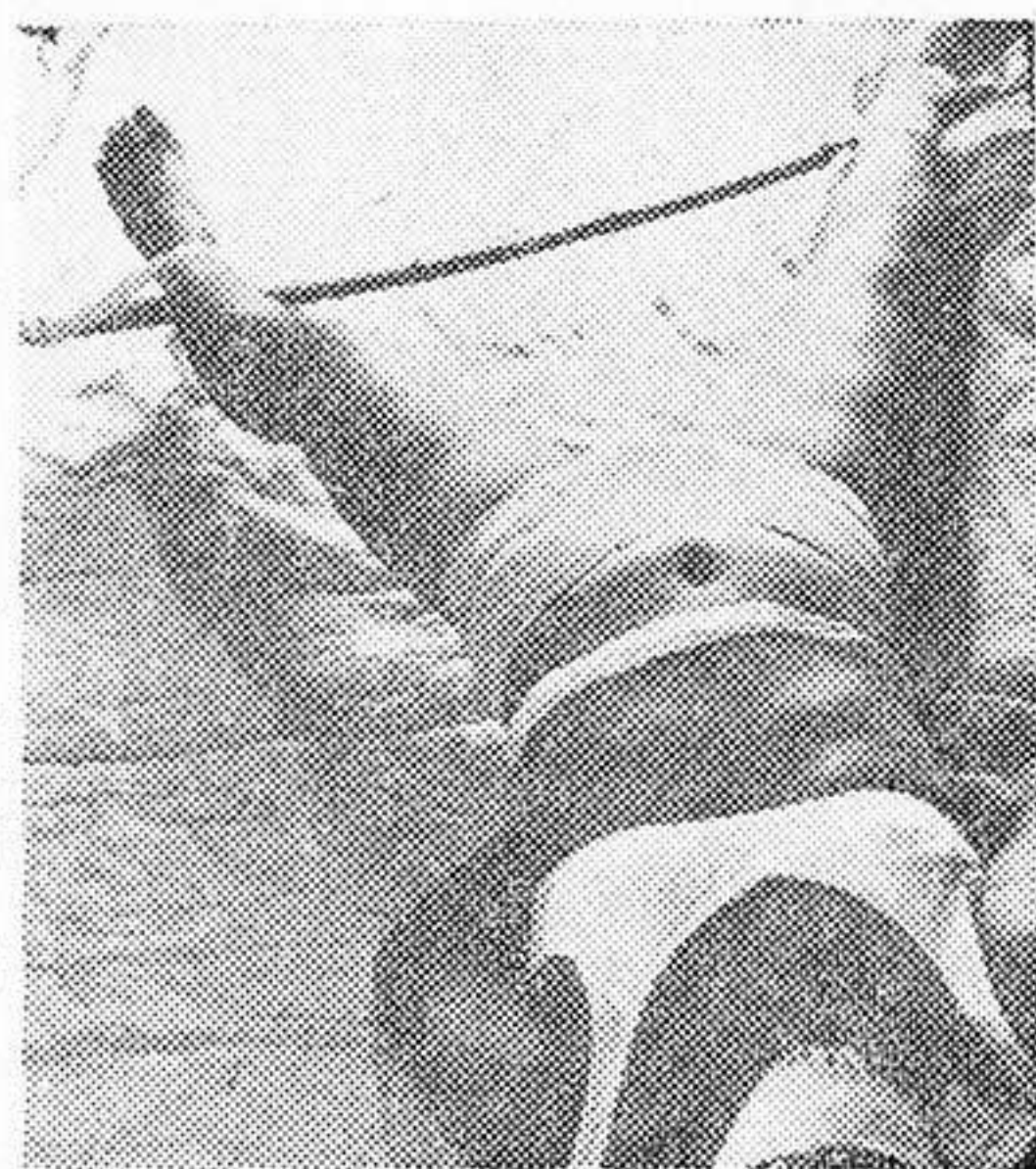
奇クの魅力にとりつかれて10年ほどになる男性です。

多くの方々が指摘されているように、私も、最近の奇クにおけるグラビヤの廃止やサシ

絵の極端な減少には、悲憤を感じているのですが、その一面、奇クサロンの充実ぶりはめざましいものがあると思います。

特に、読者の写真投稿には、告白記事にみられない臨場感が得られて、私の一番の楽しみとなっています。

読者の大半はSの男性だろうと思われま



が、善良な市民として生活している者が、実際に女性を捕えて縛り上げ、まして素裸にむいて責めるなどということが、そう簡単に実現出来るものではなく、プレイとして理解のある相手に恵まれている人も、極めて少数だろうと思います。

そこで、こんな夢を捨てきれない者が、女装、自縛という道に活路を求めるのは自然のなりゆきといえるのではないのでしょうか。その上、自縛のわが姿を客観的に見る為に写真を思いつくのも当然のことでしょう。

十月号に投稿されていた柴利美氏は、ヌードは不可能だと書いていられますが、私は以前からヌー

ドでやっております。ただ、自分では工失してやっているつもりでも、出来上がったフォトを見ると、アングル等どうしても満足出来るのは少ないものです。

見せる為のものではなく、自分だけが楽しめばいいのですが、やはり誰か、同好の人と一緒にやればとも思います。さらに、やはり自縛はイミテーションで、本来は女性の方とプレイしてみたいのが本音です。

私の最近撮影した自縛写真を同封しますが、柴利美氏の提案された「D・P・E引受者の登録制」には大賛成です。読者で、写真を撮っても現像に困る人は多いと思います。私も多少の協力なら出来るつもりで



すが、編集部で、ぜひ一考して下さい。自縛であろうがプレイ相手の緊縛姿であろが、普通の店には頼み難いでしょうから……。





## カメラ・ハントに望む

九 鬼 好 太 郎

毎月、膨大な量の若い女の裸が現象され、印刷されて世間に出まわっている。

しかし、その大部分が単純な女の裸そのものにすぎず、私はこの無味乾燥な写真のモデルを見るにつけ、その美しさを惜しみ続けてきた。ところが、幸いにして、数カ月前に初めて奇クを手にし、奇クが女の裸の中に、未だ発見されずに埋没されている女の美しさを見出そうと、試みていることを知り、小踊りせんばかりに喜んだ。

女の裸の美しさは、未だ完全に知り尽されたとは云えない。無理解な俗人共に対決しつつも、耽美を隠した女体と取り組む奇クは、貴重な存在であると私は考える。

緊縛自体には、むしろ、グロテスクを感じ、生理的嫌悪をすら憶える私ではあるが、その緊縛をベースとして、或る状況判断を推察できる得るスチュウエイションに女体が置かれた時、それが経済的背景を、よしんば感じせしめる人工的ポーズであっても、私はその若い女の金縛りになった被虐を垣

間見、耽美を感じる。女は従順にポーズをとって撮られる瞬間を待ち構える。ハンターが獲物を全一的に支配したと思われる瞬間に、非情なレンズは開き、女の羞恥は一瞬に固着される。絶対に誌上ではトリミングされるに違いないがモデルが美しいポーズをとるためには、例え、それが動態の一瞬であるにしても、ハンターの目に、モデルは総てを晒さなければならぬ状態になるのは当然である。

写真とは「すばやく奪うことである」と誰かが云っていたが、ハンターがその屈辱と羞恥の瞬間にシャッターをひびかさない筈がなく、カメラの前に立った女は、既に祭壇に供えられた生贄である。

更に、私はもう一步、誰が見ても強いられたに違いないと考えられる姿態をハンターに望みたい。被写体が厭がるに違いない姿態をとらせ、それを通して、媚と悦虐を、にじみ出させてほしいのである。たまに他誌で見かけるポーズだが、しっかりと女が自らの手で前を隠している構図などは、羞恥

と感觸的美観を感じる。最近、奇談マガジンという週刊誌に、見事な鎖と皮革のフンドシで股間を締めあげたのや、白いパンティを膝小僧までずらせ、お尻を剥き出しにしたフォトが載っていて、縛りを混ぜれば、どんなに良いフォトが出来あがることかと思った。

要するに私はパンティより匂うフェティシズムや美女の手にある紙屑より追う幻のシンボリズム、果てはフロイド的解釈等を、カメラ・ハントに記入して、奇クらしく、より一層、フォトの耽美化を願うと共に、より真剣にハントの拡大を望みたい。

Sコレク  
ション

「華麗なる塩水」

豪  
城  
二



## 映画「地獄変」のこと

沢潟 しの

去年の秋頃から、まるっきりペンを持つ気にならない周期に当たってしまった、すっかりご無沙汰してしまいました。

十月号の「乳房吸引器」も、実際には去年の中頃に出来ていたのですが、ただあれだけの原稿がどうしても書けず、延び延びになっ

ていたのです。十九や二十の娘ではあるまいし今少し安定した精神生活を送らなければ、と思っ

てはおりますが、基本周期の数十倍くらい、つまり数年くらいの周期で気分

にムラが起くるのは、いい古された宿業のせいでしょうか。

そんなわけで、今年は映画もほとんど見ずじまいに過ごしてしまいましたが、夏頃から、芥川龍之介の「地獄変」が映画化されるとい

う話が、新聞などでちょいちょい眼につくようになると、例のシーンのことが気になり出し、公開初日に万障繰り合わせて見にまいりました。

映画は、東宝が久しぶりに海外公演にも堪える大作として巨費を投じ、動員可能な最高のスタッフを揃えたというだけあって、大型画面は、金に糸目をつけないセツトや衣裳を見事に再現してくれています。

さて、種々な出来事の後、絵師良秀は一世一代の地獄の絵を描くことになり、自宅にこもって制作にかかりますが、なかなか構図がまとまらず、弟子の若者をモデルにして、蛇を使った吊責めを試みます。

吊りには鉄鎖を使い、効果音としてさかんに聞かせますが、画面に見える滑車

は木の車なのに、聞こえてくるのが金属音なので、どうも気分が生まれません。もっとも、木の滑車では音は出ないでしょうから、他に仕方もないでしょうけれど……。

縛り方は、胸を二巻きして後手に結えただけのものですが、わりあいよく締めてあり、床に転がされたまま蛇をかけられるところでは、腕の擦りあとが赤く見えておりました。

しかし、このような仮りの実験では良秀は満足出来ず（私も同感です）に、大殿の前に参上して、御所車を実際に焼いて見せてほしいという申出をすることになります。

## 編集部だより

○今月号では二篇の連載物が完結した。白鳥大蔵の『緋縮面地獄』と鬼山絢策の『ピエロ床屋』である。いずれも長期に亘ってSMファンを魅了し本誌の誌価を高からしめたのであるが、以上二篇の完結に依り愈々次号新年号からは新鮮なSM連載力作として左記の二篇の掲載を開始する。藤見郁『地獄ホテル』と鬼山絢策『M派交友録』のS派とM派の二篇である。

○藤見郁氏鬼山絢策氏は共に本誌の昭和二十九年三十年代に活躍したSM作家であるが、藤見氏は本格的なS作品の力作で満天下のSMニアをうならせると意気込んでおられるし、鬼山氏は二十一年間にわたるM派の人々との交友を通じて得たMニアの人知れぬ苦心談や珍談をまとめてM派宝典の完成を目ざしておられるので、きっと楽しい読物になることと思う。

○去る九月二十四日のテレビ八ナイトショーVでは「サドの世界」と題して団鬼六氏が登場した。花と蛇の作者としての団氏がSM問題





イメージ画「地獄変？」五屋和十

チャンとそれらしく見えます。なにしろ江戸時代の中頃でも、一台新造するのに一万両以上かったといえますから、大変なものでしたでしょう。

さて、車焼の当夜、御簾を降ろして据えられた車の周囲には柴木が積まれ、松明を持った兵士が守っております。やがて大殿の命令によってその御簾が引きちぎられると、中に、鉄鎖で縛り上げられた、十二単衣姿の良香の姿があるのです。

良秀の娘、良香役の内藤洋子は古風な顔立で、演技もまずまずと

いったところですが、縛り方は、前摺に二巻ずつ掛け、さらに胸を十回程巻締め、背中から左右上方に吊られて正座しています。したがって画面には見えませんが、立ち上れないように胸を巻締めた鎖を床に結えつけられているものと思われまます。

実の娘のこの姿を見せられた良秀と、堀川の大殿との烈しい応酬の後、号令一下、柴木に火が点けられます。

映画で火を放つ場面というと、とにかくガソリンを使いすぎてアツケなく燃えるのが多いのですが

今回ののは大分慎重で、適度に燃え拡がってゆき、炎にあふられた女が、身をのけぞらせて絶叫するところも自然です。

その次に車が映った時には、もう車の中まで火になっており、人形がちらりと見えます。その後、良秀と大殿の演技よろしく、焼けてゆく車をじっと見せます。

焼かれる女はもちろん人形ですけれども、衣裳と鎖縛りは本物です。坊主になってから着物が燃えてゆき、やがて素肌に鎖をまとった姿に変ると、だんだんに身体が焦げてゆく有様をすっかり見せるのですから、火焙りシーンとしては、おそらく前代未聞といってよいのではないのでしょうか。

火焙りを見せた映画は今までにも何度かありましたが、たちまち焼け落ちてしまい、いつもまことに興醒めな思いをくり返してまいりました。

戦争中、生きながら身を焼かれてゆく文字通りの焦熱地獄の有様を見た方も多いと思いますが、今回、初めて本当の火焙りを画面に再現して見せられ、積年のうっぶさんが一度に消散した思いがいたしました。

管から親しく皆様に語りかけたのであるから愉快である。引続いて十一月四日頃には11PMのTVで辻村隆氏が登場されることになっているので、ご覧になった読者の方々の感想をお寄せ頂ければ幸いです。秋山夫妻や本誌読者のA氏も顔を出されるそうなので面白い話題も豊富に出ることだろう。

○SM映画を主眼に発足した鬼プロの第一回作品として今月にシナリオを発表した『鬼女』が完成した。映画の題名は八女が鞭で罵る時Vで十一月上旬に封切の由。本誌のシナリオを参考にして鑑賞願えれば幸いである。

○結婚、出産というお目出度の連続でこのところ二年ばかり御無沙汰だった中河恵子さんから便りがあって写真を撮影する機会をもった。告白文も寄せてくれるというので楽しみに待ってしよう。

○告白文を書いてくると何度も言っていた長井葉津子さんは、とうとう逆に辻村先生にハントされて誌上に載せられる始末となった。最近では外人も混えたモデル志願者が次々と現われているので文章に自信のある女性はその麗筆で誌上を飾ってほしいものだと思う。我々はその勇気を待っている。



告白・・・

褌・ビキニ・プレイ

東京・K 生

私共夫婦は、褌や変形ビキニ、ゴムビキニの愛好者で、その上にSMプレイを行なうことを互いに認め合っている者です。

独身時代からの愛好者である私は、結婚する時に、ビキニや縛りとも、もうこれでお別れかと思わずいぶん迷いました。

結婚後も妻に隠れて、隙をみつけてはひそかに独りプレイはしていましたが、三年ぐらい経ってから、思いきってビキニを穿いたまま床に入りました。

当然、妻に発見されることを予期してのこのことは、結果として私に幸いとなり、了解を得るどころか、以来、夫婦揃って愛用するばかりでなく、褌やビキニを作ったり、Gパンをフィットするようにな改造したりするようになるキツカケとなったわけです。

私はもちろんですが、妻もピツタリする下着が好きだったに違いないのです。そして、次第に縛り



プレイが附加されてきたのが、現状の幸運をもたらしてくれた原因だと思えます。流腸はまだ未経験ですが、この方面にも入りそうです。

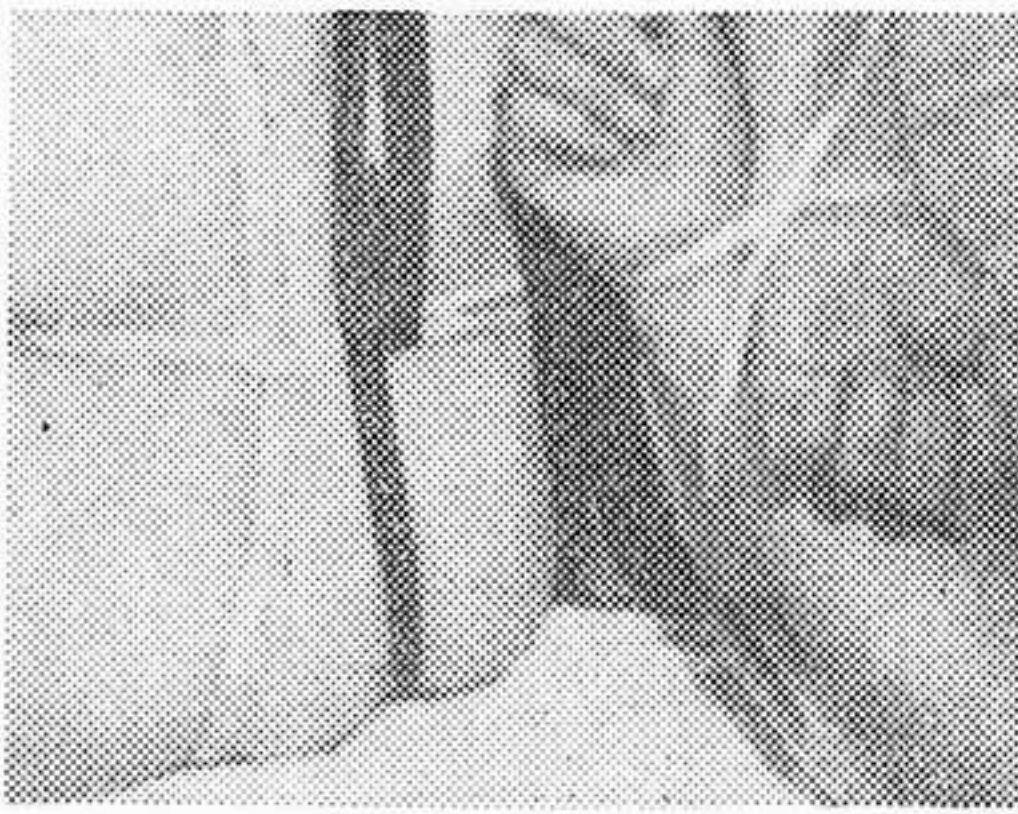
ただ、八月号で宮前氏もいっておられるように、私もプレイはやりますが、傷をつけたたり血を流したりといったようなことは絶対にいやです。

どこまでが正常か、などくらぬことは申し上げる気はありませんが、少なくともプレイである以上は、日常生活に支障をきたすような責めは好みません。ただ、私達は夫婦生活の一部として、軽

い気持で行なうだけです。

勿論、ご理解のあるご夫婦の方達との交際が出来たら……などと考えることもあります。小説に出てくるようなひどい責めなど受けたらどうしようかと考えると、たちまち怖気づいてその気持も消えてしまうのです。

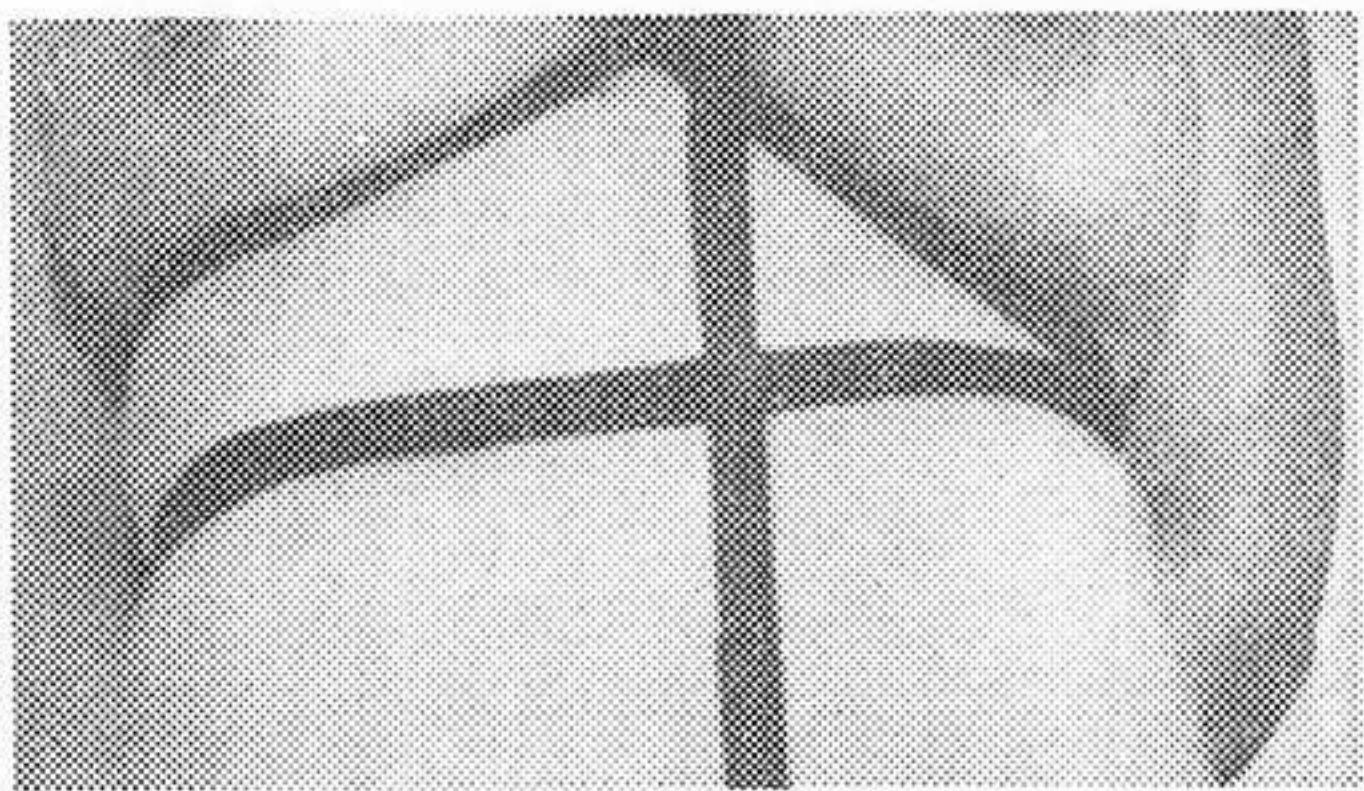
私は水泳褌のようなものが好きで小さな三角のものを常用していますが、妻は、最近デパートなどでも売っている小さなビキニパンティを常用しています。ただ、私の命令によってはゴムひもだけで過ごすことがあります。本当かどうか、そのゴムの締め具合が



たまらないなどと、私をよろこばせます。

添付の写真の中で、誌上に発表出来るものがあればよろしく。もしよかったら分譲品に加えて下さっても結構です。

これを機会に、今後も写真等を発表させて戴きたく思いますが、皆様のご意見を伺いたいものと思えます。又、体にぴったりするビキニのことなども、改めてご紹介したいと思えます。





# 短信往来

## 『ある提案』

国 川 栄 一

浅田 守氏へ

十一月号の浅田守氏の美しいプレイメイトの写真を拝見し、ある

提案を論ず。

かく申す私も八月号にて呼びかけた通り、二十一才のOLを飼育中の者にて、浣腸責めの醍醐味に耽る程のSMファン。貴殿のプレイメイトと、私のプレイメイトと一緒に並べて調教することを提案したい。

貴殿がプレイメイトの写真を発表した心理の裏には、おのが女を他の男達の目の前に晒し、羞かしめたいというサドと、その反対

に、自分の所有する大切な女体が他の人の眼に鑑賞されるという、被虐のマゾが快感となって脈打っているかと推察する。

それなればこそ、私との合流あってしかるべきで、貴殿が二人だけでプレイに専念している限り、真のSMの耽美さを、プレイメイトの体に見出すことは絶対に不可能である。全裸の二人の女を後手立位開脚に緊縛し、向い合せて配置するか、もしくは、もっともつと、加虐的に縛りあげて、お互に嫌やでも応でも視界に入るように向い合せて、同性の肉体を観察することによって、各々自分が被虐の女であることを意識せしめ、目を閉じることを許さずに、観察する側をして有無をいわせず、そのおぞましい状況認識のきびしさを味あわせる。

私達の課題は、日常のひとり澄ました美しさの奥に隠された、女性の妖美な深淵を覗き、ひきずり出し剥き出さなければならぬ。

お互に他人のプレイメイトのために私達は探美者としての非情な労を取らなければならぬ。両手を後手に緊縛され、丸い膝小僧を胸にいだくように、太腿の上から背中や腰のあたりに、ぐるぐる巻き

に縄で縛りあげられ、拒否する能力を完全に剝奪された上、頭をお互に反対側に仰臥せしめた女共の自然の変化の現われを待たなければならぬ。

二個の肉体がお互に羞じらいつつ、その聖なる領域を充実と恍惚に震わす時、彼女等の意志を超越して、彼女等の肉体は独走し、羞恥に悶えるだろう。

若い女の肉体は美しいに違いないが、私達の目的は、これを媒介としてSMの歓喜を求めるのが主題である。従って、女共が自由であつたり、笑っていたのでは話にならぬ。

私達の命令にある程度忠実であり、又、ある程度、強いられた状態でないと役に立たない。

女共が羞かしがれば羞かしがる程、その成果は大きい。そのために、SMを目的とする限り男女共に、私は複数であらねばならぬと考へ一対一のプレイをSMの邪道と断定する。

私は浅田氏貴殿が、せっかくのプレイメイトの美しい体の中に、完全なSMを発見できないでいると断言し、私との交歓を、ここにあえて提案する。



イメージ画「耐苦科専攻」 野江三郎

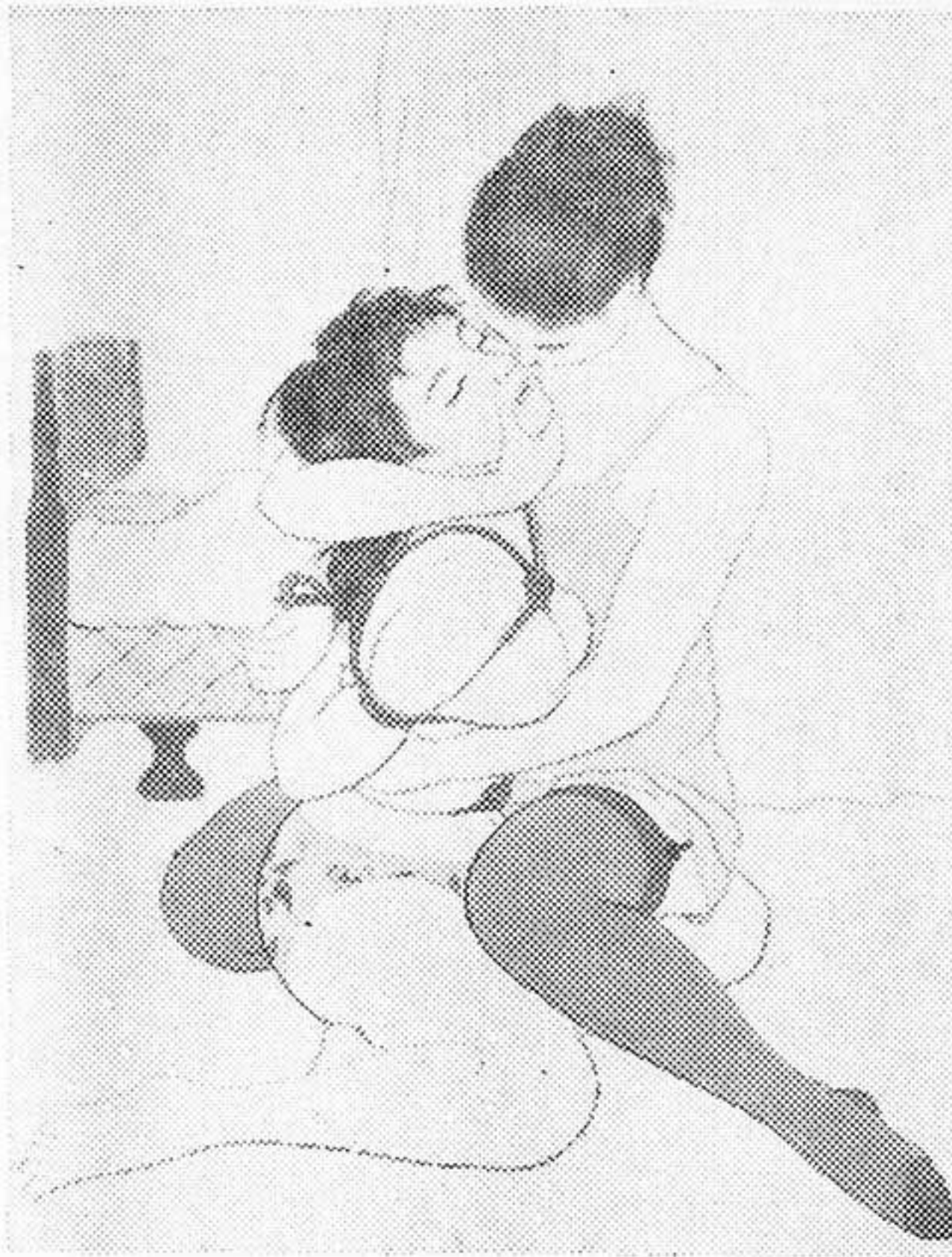


# 軽侮に抗議する

辻 梶太郎

「盗作」なんという嫌な言葉でしょう。プロ、アマを問わず、多少なりとも創作に関心のある人ならば「お前の作品は誰々のものに似ている」といわれただけでも不愉快になることは、まず間違いありません。

「そのため、これから私が報告しようとする書籍が、もし盗作でなかったならば、作者には大変申し訳ないのですけれども、偶然にしてはあまりにも酷似していたので、皆様に判断をお願いしたいと思うのです。また、私より先に、このことに気付かれた方々には、あらかじめお許しを願っておきます。」



イメージ画「S & S M」 辻 梶太郎

さて、問題の本は、豪華カラー版と銘打った、浪速書房版、真実日本残酷文学選書中の一冊で、野村啓子さんといわれる方の手記とされている「被虐を求めて」であります。

私は、この書を読み進むうち、ふと、これはケッセルの名作とされている「昼顔」ではないか、との疑いが起こり、読了する頃には「絶対に盗作である」との確信を抱くに至りました。

ずばりと申し上げますと「昼顔」のヒロインであるセヴリヌを、鞭打たれることの好きな女性にしたのが野村啓子さんだといえましょう。その他の登場人物は、ほとんどが双生児のように似かよっているばかりか、物語の骨格は、両書共、全く同一といっても過言ではないようです。

「被虐を求めて」の監修者である清水正二郎氏の序文によれば、この手記は、約十カ月にわたり某主婦団体の連合誌に連載され、多くの主婦たちから、攻撃やら激励が集まったそうですが、それだけの多数の女性の中で唯の一人も「昼顔」を読んだ者がなかったとは、どうしても信じられません。更に驚くべきことは、監修者、ならび

に浪速書房の方々が、「昼顔」との相似に気付かなかったというところです。或いは、それと知りながら、「S M小説の読者などは、どうせ低級だから昼顔など読んではいまい」と考えたとしたならば、我等S M読者として、その認識不足を改めさせるためにも、当然抗議しなければなりません。

私がこの「残酷選書」を購入したのは、自分の描く下手な「縛り絵」の参考としてであって、その目的からすれば、内容が盗作であろうとなかろうと、別にかまわぬわけだったので、先に述べたような、読者に対する軽侮が感じられたので、悪筆をかえりみず、敢てペンを取った次第です。

終りに、この問題に興味を持たれる方のために申添えますと、残酷選書が五八〇円、角川文庫「昼顔」一一〇円となっております。また昼顔は岩波文庫にもあったように記憶します。

なお、書店の親爺の渋い顔を覚悟ならば、立読みも大いに結構だろうと思われまふ。

私としましては、立読みこそ、このような書に対して取るべき態度ではなからうかと、考えております。



# 牡犬のフोटと連想

犬 畜 生

土曜の夜になると、私の貧しい借家は、おぞましい牡犬の館と化します。

全裸に首輪、くさり褌、足錠をはめた私は、一匹の牡犬、それも最低の変態ドレイ犬に墮落し、四つ這いになり食物を求めて、くんと鼻を鳴らしながら家中を嗅ぎ廻り、台所の隅で小さくなるの

です。

浅間しい私自身の姿を、ごらんいただきたいと思えます。

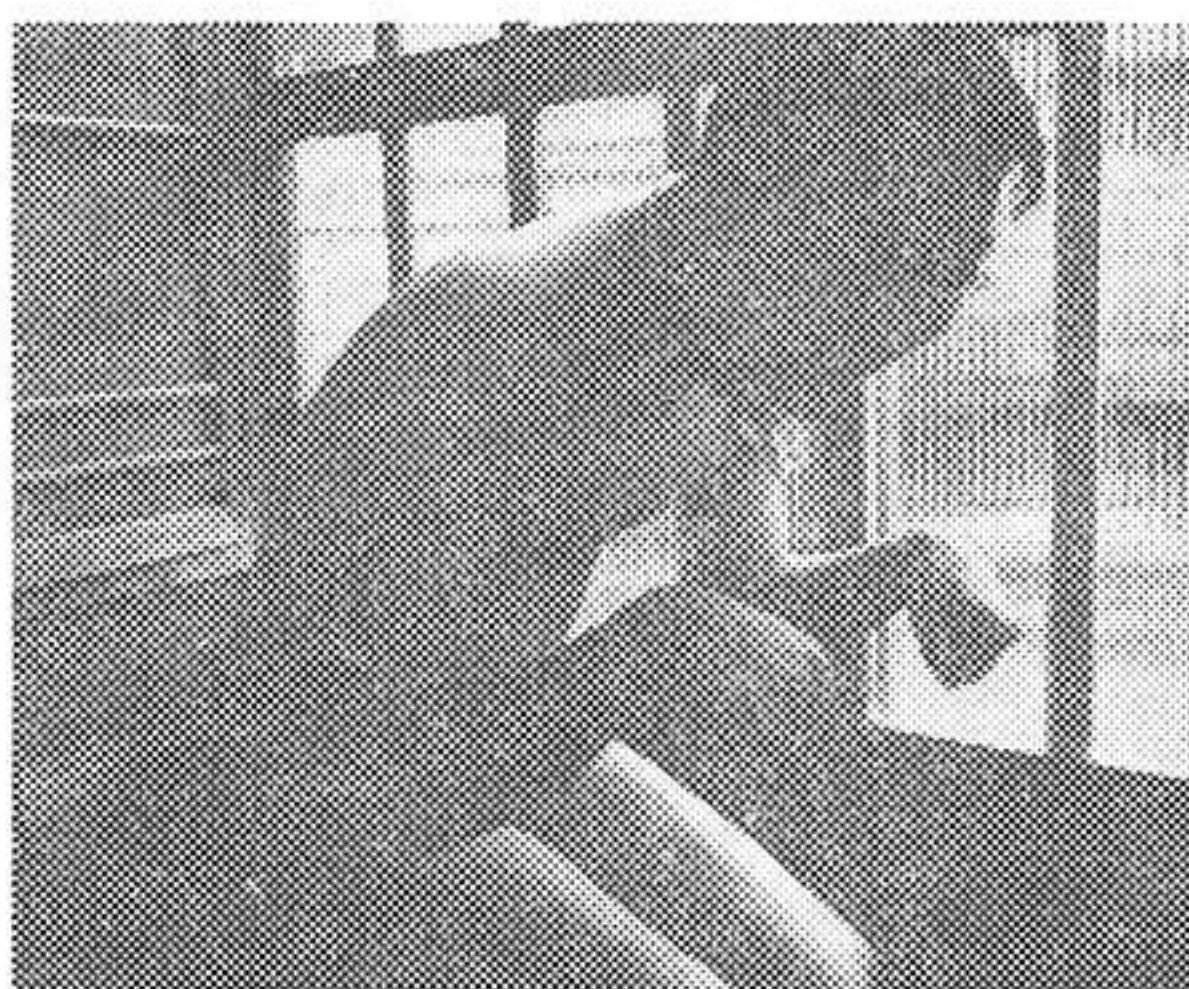
こんな時、飼主の美しい女ご主人が帰って来たらどういうでしょう。きっと、ものもいわずに、いきなり首輪の鎖を思いきりひっぱって引き倒し、びしびし鞭で打ち据えることでしょう。

「なぜおとなしく待ってられないのッ」

ご主人様は、死なない程度に残飯をやっているのに……と、腹を立てて、ヒステリックに叩いたり、蹴り上げたりするに違いありません。

「おまえみたいなの、あさましい犬はこうしてやるッ」といって、手錠、足錠の牡犬を更に鎖でグルグル巻にして、スリッパの底で、ところどころ踏みつけることでしょう。

食物の代りに、そのスリッパやつっかけ下駄を口にネジ込んで、私をゲエゲエ



いわすかも知れません。

「ホントにしようのない変態犬だよ、おまえは」

ぶざまに縛られてひっくり返っている私は、投げつけられる嘲笑の言葉が、半ば悲しく半ば嬉しく冷たい板の感覚と、鎖の痛さとともに体の隅々まで浸み透る思いにうっとりするに違いありません。「嬉しいがってる場合じゃないだろう！」

じれったがった女主人は、手当たり次第に物を投げつけるかも知れません。

ヤカンが飛んできます。

グワンと大きな音を立てて頭に当り、中の湯がましがザブリと顔にかかることでしょう。もし沸かしたての熱湯だったら大変です。それでなくても犬面なのに、やけどでひきつっては、いよいよ化け犬になってしまふことでしょう。

「少しは犬の分際をわきまえて、わたしのいう事を守る気持になったかい？」

女主人は、私をさんざん折檻した後できつとそういうでしょう。私は下駄を啜えたままコックリコックリします。

女主人は縛ってある鎖を解いてはくれるでしょうが、首輪はそのまま部屋中を廻ってくるように命じるかも知れません。

「四つ這いのままだよ、おまえは最低の変態犬なんだから」

そういって、きつと這い出す私の尻を、さも汚ならしように、そして面白そうに蹴りつけたり、叩いたりして、よたよたするのを嘲笑するのではないでしょうか。

やがて玄関のタタキに坐らされた私は、チンチンをして食物をねだることでしょう。





梅川幸子

ゴムマント

プレイフォト



写真は私のゴムマント姿です。ゴムマニアの方々の告白や記事に何故、ゴムマントが余り出てこないのでしょうか。私は不思議でございます。スタイルといい、着心地といい、私には最高と思えますのに……。

私のトレードマークだと思っている男物の黒いゴムマントの下には、素肌に婦人用ゴム引レインコート、男物総ゴム合羽（いずれも特大）を重ね着して、手にはゴム手袋、顔にはゴムマスク、足にはハイレイン、（婦人用のスマートなゴム長靴で膝までとどき、かかとも高いもの）を履いた私が包まれています。このゴムマントは、着丈



が一・二五メートルという特大サイズで、ひきずるように長いものです。ビンを拾い上げるためにひざまずくのも注意しないと転びそうです。それから露天の古着屋さんで昔懐かしい女児用のゴムマントを見付けて、夢かと驚き早速に買

がー・二五メートルという特大サイズで、ひきずるように長いものです。ビンを拾い上げるためにひざまずくのも注意しないと転びそうです。それから露天の古着屋さんで昔懐かしい女児用のゴムマントを見付けて、夢かと驚き早速に買



いました。

このゴムマントは、戦後の30年ごろ作られたものらしく、ゴム引とはいっても、表がピンク色の生地、裏に同色のゴムが張ってあるもので、いわば婦人用ゴム引レイン



## 思　　う　　こ　　と

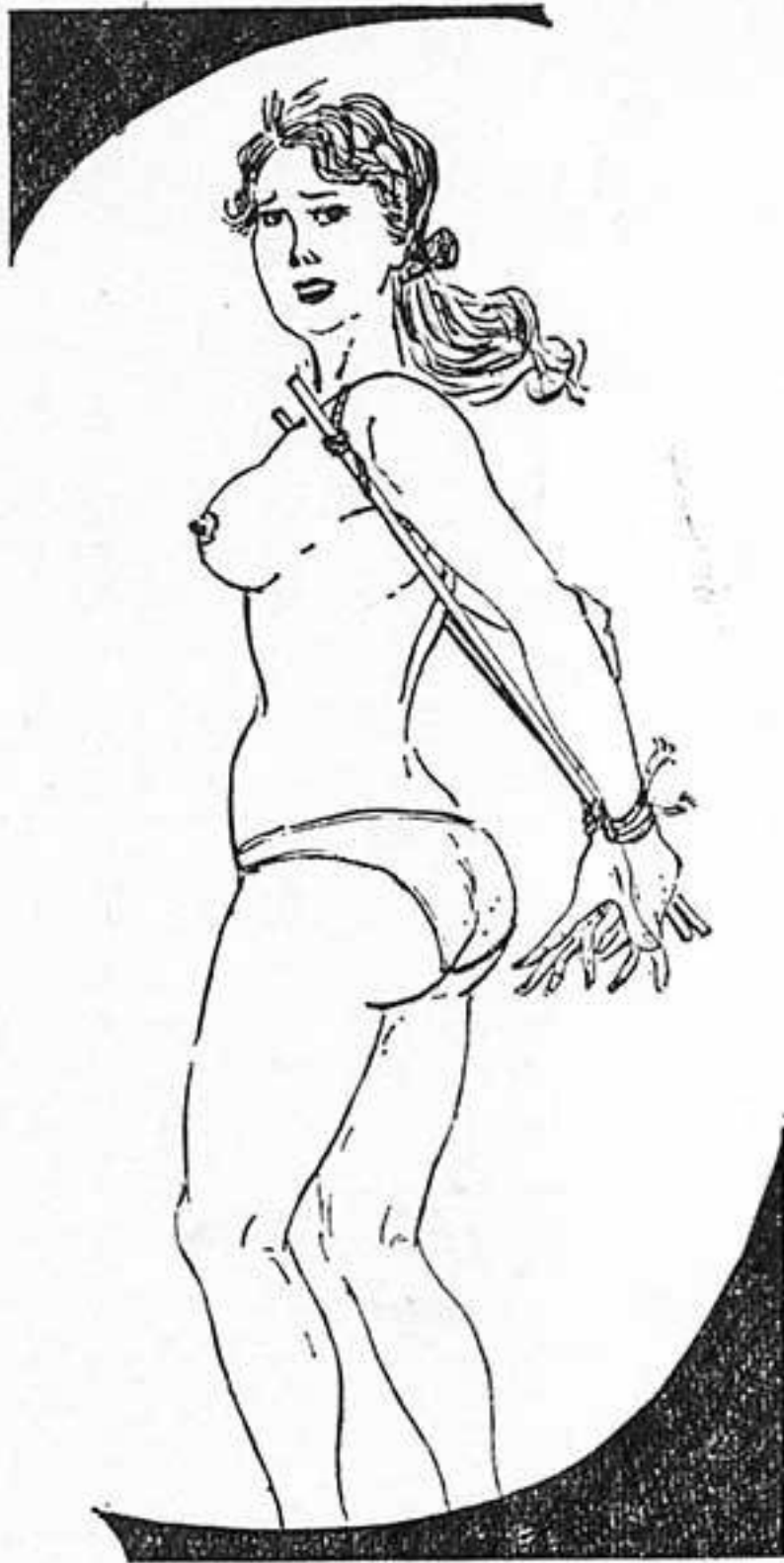
座　頭　孝　司

数ある執筆者の内容を、次々と拝読している内に、私は自分自身の考え方に対して一沫の不安を感じずにはおれない。S・M・F等々と或る程度分類出来る考え方を

もっており方々ばかりのようである。確かに、小杉千恵さんには少なからず共鳴するところがあ

り、何か救われる気持もあるが、完全なMとして東区の女王様のよう

なS女性に仕える気は全然ないし、そのくせS的立場で相手を縛りあげて鞭打ちしようなどは、どうしても思えない、肉体的苦し



イメージ画

「棒しばり」

葉月由紀夫

来るひさしが付いているもので、一時は小学校の女の子がよく着ていたものですが、ご存知でしょうか。

写真は、それを早速男物のゴムマントの上から羽織ったところですよ。なにしろ学童用ですから、着丈は80センチしかなく、肩まわりも小さいのに、男物のゴムマントの上から着ているのですからよけいに窮屈で、ピンク色に輝く女児

私自身の羞恥心を相手に感受してもらいたいのだ、お互いが強く結ばれた愛の力で……。

結婚とか、SEXを度外視した中で、人間と人間の第三の愛が、(この場合、親子兄弟のそれは含まない)あってしかるべきではな

かろうか。男と女と云えばすぐSEXに結びつけようとする現在、もっとフランクなものがあっても私はいいのだと思う。

用ゴムマントの裾から、黒い男物が長く裾を引いているところは、ぶかっこうでこっけいに見え、着るのはいいのですが、姿はあまり

でも、このゴムマントにくるま

っている私の、幸福感に包まれてプレイに耽溺出来るひとときは、マニアの方ならわかっていただけ

る陶醉境なのです。

亦千恵さんになら、東区の女王さんのいわれるような責めも甘受出来るだろう。

あまり千恵さんの事ばかり書く

と、ラブレターと間違えられそうである。そうなつては困るので、これはこの辺でおく。

革命的言葉で表現すれば、私は日和見主義者かも知れない。だがそこに何とも表現の出来ない私の真実のモヤモヤがある。

ー＋(ー)ー〇になるのに、

どうして、現実はそのならないのか、自分で自分の文才のなさがつくづくなきけな

私の本意を、いつか上手に表現し、活字にしてくれる同志が現われることを期待して、筆をストップさせます。



## 〔秘蔵版特選 S M 資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よひ V

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よせ V

女賊笞打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よゆ V

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よめ V

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よす V

入墨女賊全裸四這い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よも V

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よき V

女賊全裸大の字磔処刑

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よさ V

女囚拷問木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もと V

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もへ V

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もに V

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もち V

美人女囚笞打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もほ V

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もぬ V

美貌女囚土壇で胴斬り

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もり V

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もは V

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
東浦ひかる 略号△なの V

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円  
東浦ひかる 略号△なむ V

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 一二〇〇円  
大塚・東浦・木村 略号△きあ V

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚・東浦 略号△きす V

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大塚・東浦 略号△きせ V

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚・東浦 略号△きそ V

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚・東浦 略号△きて V

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚・東浦 略号△きと V

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円  
大塚・東浦 略号△きな V

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めあ V

足舐めをたのしむマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めく V

足舐めを強要されたマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めゆ V

足舐め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めや V

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めえ V

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円  
一宮百合子 略号△あひ V

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
一宮百合子 略号△あは V

素足を縛られる快感

大手札三枚一組 四〇〇円  
一宮百合子 略号△あふ V

生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△むこ V

股間縛り恍惚境場面

大手札三枚一組 四〇〇円  
一宮百合子 略号△るね V

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円  
一宮百合子 略号△るえ V

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円  
一宮百合子 略号△るそ V

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△はね V

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一二〇〇円  
山原清子外一名 略号△はた V

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円  
山原 清子 略号△てら V

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 一五〇〇円  
山原 清子 略号△いね V

刺青裸女を踏みにじる

大手札八枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△いつ V

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△いこ V

可憐島田髻全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△いみ V

黒フンドシ高小手縛り

大手札八枚一組 一二〇〇円  
山原 清子 略号△ひろ V

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△ほか V

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△ほき V



# 「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

## Z組 百態

大手札型印画紙(9×13 輝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円

十組十枚 一〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号  
天星社宛お申込み下さい。

☆

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)  
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)  
3 八の字の開股縛(左近麻里子)  
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)  
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)  
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)  
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)  
8 白肌輝く股間責(山原 清子)  
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)  
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)  
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)  
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)  
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)  
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)  
16 縛りの全裸を見て(金原奈加子)  
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)  
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)  
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)  
20 後手縛りを見せる(川越美佐子)  
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)  
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)  
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)  
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)  
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)  
26 湯責めにあう女(山原 清子)  
27 変型高手小手縛(川越美佐子)  
28 洋子をいじめて(木村 洋子)  
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)  
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)  
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)  
32 涙涙責めの熱演(ローズ秋山)  
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)  
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)  
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)  
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)  
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)  
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)  
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)  
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)  
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)  
43 全裸の股間縛り(山原 清子)  
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)  
45 パンティを剥く(大塚 啓子)  
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)  
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)  
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)  
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)  
50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)  
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)  
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)  
53 剥がされた布片(金原奈加子)  
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)  
55 髪吊りの擦り責(ローズ秋山)  
56 高手小手の裸女(左近麻里子)  
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)  
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)  
59 悶える全身縛り(一宮百合子)  
60 伸びやかな素足(一宮百合子)  
61 卓上の人身御供(左近麻里子)  
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)  
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)  
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)  
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)  
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)  
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)  
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)  
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)  
71 縄のブラジャー(左近麻里子)  
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)  
73 逆エビで責める(ローズ秋山)  
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)  
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)  
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)  
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)  
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)  
79 あどけなき表情(金原奈加子)  
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)  
81 白肌にむぎき縄(左近麻里子)  
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)  
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)  
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)  
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)  
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)  
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)  
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)  
89 股裂きで責める(ローズ秋山)  
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)  
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)  
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)  
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)  
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)  
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)  
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)  
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)  
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)  
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)  
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)



〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円

猪吊り三態

梨花悠紀子 略号(いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号(ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号(ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

玉田美佐子 略号(てい) 四〇〇円

全裸アゲラ縛り

大手札三枚一組 略号(てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

長野 良子 略号(てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

関谷富佐子 略号(ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号(りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

関谷富佐子 略号(ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

長野 良子 略号(へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト

栗本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号(もい) 四〇〇円

乳房責の苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号(もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

長野 良子 略号(そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円

色禪の開股縛り

長野 良子 略号(いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円

乳房しばり

長野 良子 略号(うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円

木馬責三態

大手札三枚一組 略号(もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号(もの) 四〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

山原 清子 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原・鈴木 略号(はた) 一二〇〇円

碧玉裸身緊縛

刑部 典子 略号(のん) 四〇〇円

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大塚・東浦 略号(きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大塚・東浦 略号(きて) 七〇〇円

凌辱されるマゾ女

大塚・東浦 略号(きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大塚・東浦 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円

猿くつわにあえぐ裸女

東浦ひかる 略号(なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円



## ☆浣腸関連資料の部☆

## 只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かみ)

## 強制 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かく)

## 百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かな)

## 浣腸 責の極致

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かむ)

## 女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)  
梨花悠紀子 略号 (れち)

## 強制 女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
絹川 文代 略号 (きか)

## イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)  
梨花悠紀子 略号 (いるり)

## 太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かふ)

## 自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (ゆか)

## 浣腸 器と女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
絹川 文代 略号 (ほの)

## エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るい)

## イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るは)

## 女体浣腸ブレイ

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ほは)

## 迸ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ほい)

## 浣腸 後の排便

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (へき)

## 便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (へか)

## 浣腸 される清子

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
山原 清子 略号 (かる)

## 浣腸 に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (一三〇〇円)  
山原 清子 略号 (かへ)

## 浣腸 に悶える女

大手札七枚一組 略号 (一二〇〇円)  
山原 清子 略号 (かに)

## イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けか)

## いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けき)

## 百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けく)

## オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けま)

## 浣腸 後オシメ着用

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けこ)

## 浣腸 と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (のけ)

## 高圧 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (むい)

## 浣腸 場面大写真

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (むは)

## 施 される浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (むろ)

## 浣腸 をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (ゆか)

## 自ら 施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

## 浣腸 器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ちり)

## 浣腸 を施される女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ちら)

## 浣腸 後介添排便

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かね)

## グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かて)

## シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かた)

## イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かち)

## アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (七〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かの)

## 浣腸 に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
山原・東浦 略号 (うも)

## 浣腸 される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
山原 清子 略号 (うわ)

## 浣腸 悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬる)

## 施 される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬか)

## 捜入 された嘴管

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るて)

## 襲い くる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るち)

## 女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ると)





とうとうお便りする事を決心致しました。本当に胸がしめつけられそうに息苦しい思いをしながらペンを走らせています。私は二十六才になる人妻で一児の母です。身長一五〇糎、体重四五瓩、B 85 W 60、H 85。子供を産む時、帝王切開しましたので15針の傷アトと盲腸手術の傷アトがあります。瞳はクリクリとしていて色白ですが今年の夏は海で大分やいたので水着のアトが残っています。正常な夫婦生活以外の経験はゼロです。

ところが最近、奇クの本を読んで自分でも信じられぬ位身体の中心部が熱くなり顔までカッカツしてきました。自分でも体験してみたい、そんな気がしました。恥しいことに、夫婦生活四年目なのに最高とか、天国とか、花園とか、失神とかいったことは、ついぞ味わったことがなく、自分自身不感症なのか？と悩んでいました。それが奇クを読んで身体が熱くなる自分を発見しました。私をお仲間に入れて下さい。四十五才以上の最高のテクニシャンの方。やはり出来るならお金持の方が、ムードのある所へ連れて行って下さるから好き。私は美人ではないがチャームिंगといわれています。夫は真面目なサラリーマンで麻雀にこっていますので毎晩おそいです。しかし夫に判ると困りますので秘密を守って下さる方。電話はありますので書きます。家庭を持っておられる方。初めてなのに我儘ばかり言って申し訳ありません。(東京都中野区大和町・余田暁子)

先月号で『私の縛った女性』という拙い一文を発表してもらったところ、早速多数の方々のお便りを手にしました。本当に思いがけ

ないことで、びっくりしております。私の住む所から遥か遠方からのお便りもあって心から恐縮しております。私ももう年ですから今更、運転免許をとる元氣もありませんので、お申越し下さった御親切な方をお願いすることにしたいと思っています。経済的には今まで頑張っている。金が出たときは何んとやらで、僅かに若い女性を責めることとどうも晴らしてはいますが女を喜ばす名手が私のために登場して下さったら有難いと思っています。いずれそのうち、最近の情報をお知らせします。

(大阪・森川信也)

私は奇ク愛読歴六年のM的男性です。S的な女性で私を奴隷犬として仕えさせて下さる方お便り下さい。私は貴方様を満足させるに十分な身体と絶対的な服従精神を持っております。当年二十七才の会社員です。但し真面目な気持の方に限ります。

(大阪市・山内犬男)

日夜倒錯の性と淫らな想念に悶え苦しんでいる小生ですが、淋しいうつろな気持をいだいて、ふと立

ち寄った書店で貴誌を手にししました。途端に目の前に後光がさすような晴々とした気持ちに捉らわれました。小生にとっては、まことにバイブルのように尊く貴重な本に思えました。この本を持っているだけで自分の狂うような気持が静まってゆくように思えるのが不思議です。まだ三冊ばかりしか手に入れておりませんが、これから目につく限り集めてゆきたいと思っています。広い世界で自分一人だけが、こんな性癖を持っているのかと思って悩んでいたのですが、これで救われたような気持です。これから小生のような者でも、どうかお導きのほど願います。とりとめもない文章を書いてしまいましたが、これを書いただけでも胸の中のもやもやが、とけた思いです。よろしく。(広島・輪島生)

私は二十才になったばかりの女性です。超ミニの似合う小麦色の肌だといわれています。職業はモデルです。そして「花と蛇」の大ファンです。花と蛇がもっともって羞恥に満ちたものであることを望んでおります。私は水をシリンドラーの中に入れて、何回も何回も流腸するのが大好きです。どん



どん、あふれ出てくるのを構わずに次のをいれる時がSM的で一番好きです。どなたか同じ趣向の好きな方、おたより下さい。

(神戸市・堤鄭子)

小杉千恵様へ。初めSMとは何を意味するかわからなかったのですが、最近やっとSMの一部分を覗き見たような気がします。以前は女性の投稿者という既婚の女性の方が大半でしたが、近頃は貴女のような独身の女性が多くなってきた嬉しく思います。ぼくは二十二才の若輩者ですが、自分がこのような世界に入っているのかどうか迷っていた頃、貴女の文を見つけ、少し勇気を頂きました。それから少しずつSMについて考えなければならぬと思いました。けれど貴女の文を見ていると、何か興味本意で書いているように思

## 〓御送金についてお願い〓

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、小替為、定額小為替、振替等の方法もご利用下さい。封書の場合には切手代用でも結構ですが、なるべく小額切手に願います。

います。ただ自己満足的に自分の好きなように文を書くことは決して悪いことではありません。しかし、そのために本誌をさくことはよくないことだと思います。以前貴女は自分の名を多くの人にひろめたいと書いておられました。何故そのような必要があるのですか。安易な気持でSMを見てはいけないと思います。SMプレイも夫婦の間ではセックスの一部分であると思いますが、貴女のような未婚の女性は、SMプレイをどのように考えているのでしょうか。貴方もSMの世界から抜けることはできないと思いますから、中途半端な考えをやめて、SMについて真剣に考えるべきです。これまでに勝手なことを書いてきましたので貴女は怒っていると思います。これらの、すべてのことは、ぼくにもあてはまります。ぼくはSMに関して、生まれたての赤ちゃんと同じです。これから自分の悩みを発表しますから、よろしかったら貴女なりのアドバイスをして下さい。

(東京・佐渡生)

春川ナミオ氏の毎号の健斗、よくもこれだけ、つぎつぎと画けるものだと頭が下がる思いである。

十月号「獣人」のカットは、久々に彼らしいものが……と言う気持ちで拝見した。九月号の「給料日」のヒップもいいし、八月号の「安全車も、まあまあであるが、一言文句を言うならば、女王のポーズが正面から画かれてあると、更にすばらしいものになるのではないだろうか。七月号の「たのしきかなレジャー」でも同じことが言える。五、六月号の「発散」と「برانコ」は、何か仕方なしに画い

## △飼育の愉しみ▽小池美喜嬢分譲写真

本誌九月号のSMカメラハントで紹介された純情可憐な小池美喜嬢の緊縛姿態を好事家に限りごらんにいれます。女優とかヌードダンサーにない素人じみた初々しさを彼女の中から見つけて下さい。

## 全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 四〇〇円  
小池美喜 略号ハれる▽

羞らいたを含んだ幼い膨らみに情容赦なく縄目が喰い込んで素肌がわなわなとふるえている。

## 柔肌の高手小手縛

大手札三枚一組 四〇〇円  
小池美喜 略号ハれる▽

たと言う感じがしないでもない。こんなことを言う春川氏に叱られるかもしれないが、私の感想だから、お許しを乞う。小杉さんいつもかそんなことを言っていたと思うが、やはり春川氏の画はトイレものが光っている。自分で書きもしないくせに偉そうなことばかり言って申しわけないと思うけれど、これだけのものを画きあげる腕をもつ春川氏のことだ、正面からのポーズの一枚や二枚、構想し

生れて初めて縛られる高手小手に後手首を高々と掲げながら、むちむちとした全裸の肌を染めた。

## 後手首を縛られて

大手札三枚一組 四〇〇円  
小池美喜 略号ハれる▽

瑞々しい全裸の肌を惜しげもなく晒して柔軟な後手首を背後で背負った少女のあどけなき表情。

## 飼育された美少女

大手札一組 四〇〇円  
小池美喜 略号ハれる▽

自分の裸身を縛られるという好奇心がいつとはなしに興味に変化してきた美喜嬢の縛られ姿態。



て欲しいものである。ここしばらく前から「ハレンチ」とか「ハプニング」という言葉が、やたらと使われるようになった。そして、そういうことが非道德的だと考えている一部の人間層がある。ではそういう御本人は全く「ハレンチ」でもなく、ハプニングの経験もないのだろうか？ 言葉をかえていうならば、意気地なしの腰抜けどもであるといいたい。囲りから反対されるのが恐ろしいのだ。世の中を新しい方向へ、新しい感覚へ自分の力で変えてやる！ そのぐらゐの気力のない奴に、一体、何ができよう。それが良いことであれ、悪いことであれ、自分の心の奥底から納得できるまでは、あくまでもゴーイング・マイ・ウェイでやり抜く根性がほしいと思う。また社会全般に通用しなくとも、そのグループだけに通用し、グループ以外の者に迷惑をかけないことであれば、堂々とやり抜くことだ。社会の中の一員である限りに於ては、そのルールを破るゲバ学生のようなことはしたくないが新しいルールをつくり出すべき前衛的手段は必要であらう。

○ (岐阜・座頭孝司)

十一月号、実に嬉しく拝見いたしました。常人の好まない肥満体に徹した文と画だけに、誌上に恥をさらし、私のM性向をゾクゾクと満足させてくれようとも、適当にカット、あるいは変更されるのではないかと危惧しておりました。が、(たこの足や蟻のことは誠に細かいお心づかいで恐縮しております) まずは原文のままで接することができ、全く喜びに絶えません。呆れたことに私は、肥満という字が二十八、肥るという字が五十六もあったと数えて喜んでいろいろいいます。つぎにサロン楽我記のフォト、水野加代夫人の肉づきのいい緊縛体は、全く垂涎おく能わざるものがあります。同時に甲子園の〇夫人が、まず肥満体ではなかったことに、何かしらヤレヤレと思いました。美川美美子さん、貴女のおっしゃるとおりですが、一カ所だけ異論があります。それは「町を私と並んで歩くのは恥かしがると思います……太鼓腹の豚女と歩くのは、いやになると思います」というくだりです。何の、とてもとても、一緒に歩けるならば喜びの上なく、キザで年甲斐もないということ抜きにするならば、現代の若人の如く、貴女の

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フोट

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
髪吊りで強烈ムチ打ち 略号 八しう

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
片足首引きつけ縛り 略号 八した

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
尻立て鞭打ち艶姿 略号 八しち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
柔肌に炸裂するムチ 略号 八しつ

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
エビ縛りの鞭打ち 略号 八して

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
貞操帯着用鞭打ち 略号 八しと

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
痛打にもかく美女体 略号 八しや

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
あぐら縛りの羞恥責 略号 八しゆ

安井喜久子 大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
片脚挙げで晒す裸身 略号 八しよ

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とは

強烈エビ縛りで苦悶

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
膝頭縛り開股竹棒責め 略号 八とに

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
竹棒開股足首縛り 略号 八とほ

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
股間縛りの裸身表情 略号 八とへ

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
菱縄縛り猿ぐつわの表情 略号 八とち

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
乱痴戯騒ぎの結末 略号 八とり

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
菱縄縛りで床に喘ぐ 略号 八とぬ

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
洗腸責めの甘い恐怖 略号 八とる

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
洗腸液の注入直後 略号 八とか

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
強制洗腸の各姿態 略号 八とま

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
洗腸責めの美態開陳 略号 八とみ

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
洗腸を待つポーズ 略号 八とめ

中河恵子 大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河恵子 略号 八とも



肥った太鼓腹まで手を廻して抱くようにしてでも、歩きたい気持ちです。私の前、住んでいた町の近所に八十キロを誇る肥満体の人妻がおりましたが、貴女のいわれる通り、近所の井戸端会議では、あれでは旦那さんも嫌って一緒に歩かないそうなの、といわれるぐらいの肥満体。しかし色白く、きめ細かい肌で顔立ちも悪くはなく、私は町内会の役員をしているのを勿怪の幸に、別に用もないのに心をときめかして彼女の家を訪れ、その肥満体に接することを楽しみにして、殊に暑い夏の日など暑がりだけに、あられもない彼女の姿を見たくてたまらず、いつも自然に足がこの家のしきいを跨いでしまうのでした。ある夕方など、酒に酔った勢いで、裾よけ一つの彼女が土間で炊事をしている傍へ図々しくも近づいて、その豊満な乳房に触れ、太鼓腹や、巨大なおしりを撫ぜたことがあります。彼女が、彼女の柔肌に手が触れたときは、酒の酔いもさめ果て、実に真剣そのもので、全神経が集中してしまい、抱きしめるまでに至らなかったのは、幸か不幸か、今にしてみれば残念でたまりません。美川さん、仙台と尼崎では、思いだけあせっ

ても見知らぬ間では、織女とけん牛星よりも哀れですね。滋賀の赤畑修造様、兄貴のたよりが途絶えて淋しく、そして不思議に思っておりまして。肥満体のために、せめておたよりを欲しいものです。福岡の緒方則子さん、岡山の西田すすむ様、どうかよろしく。

(尼崎・高浜満六)

編集部へ。私は奇クサロンに二編と本文に三編の文をご採用いただけただけの幸運な二十四才のOLですが、将来も稚拙な文ながらも倒錯の耽美を求めたいと思っております。若し発表可能な文がございましたら、四馬孝、春川ナミオ、豪城二さんの挿絵またはカットで、私の文を飾ってほしいのです。わがままなお願いとは思いますが、ぜひ編集部のお情けにおすがりしたいと存じます。なお、東京赤ちゃん、辻鼻太郎さんの絵も大好きです。お二方が何の遠慮もせず秘蔵用に描かれた羞恥責めの耽美画と、私のパンティやアンネ処理の布切れ、ウィスキー瓶入り神酒などのご交換がえればと、私の夢を託してご返事をお願いする次第です。

(神戸市・小杉千恵)

|                                         |                                       |                                        |                                       |                                       |                                        |                                        |                                        |                                       |                                       |                                        |                                        |                                     |
|-----------------------------------------|---------------------------------------|----------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|----------------------------------------|----------------------------------------|----------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|----------------------------------------|----------------------------------------|-------------------------------------|
| 可憐表情の全裸縛り<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆめ<br>五〇〇円  | 立縛り正面裸晒し<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆえ<br>五〇〇円 | 両手吊り全裸晒し<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆひ<br>五〇〇円  | 雁字搦目後手縛り<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆあ<br>五〇〇円 | 股間縛り柔肌責め<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆも<br>五〇〇円 | 猿ぐつわ開股責め<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆに<br>五〇〇円  | 豊満な臀部強烈責め<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆほ<br>五〇〇円 | 強制全裸開股責め<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆみ<br>五〇〇円  | 股間縛りで悶える<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆろ<br>五〇〇円 | 全裸縛りに羞らう<br>大手札三枚一組<br>略号 八ゆへ<br>四〇〇円 | 私の妊娠腹を見てね<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆわ<br>五〇〇円 | 縛られた妊婦横臥す<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆよ<br>五〇〇円 | 中河恵子<br>略号 八ゆよ<br>五〇〇円              |
| 被虐に燃える全裸妊婦<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆめ<br>五〇〇円 | 中河恵子<br>略号 八ゆめ<br>五〇〇円                | 尚も見せたい妊婦腹<br>大手札四枚一組<br>略号 八ゆる<br>五〇〇円 | 股間縛り首縄正面<br>大手札三枚一組<br>略号 八よれ<br>四〇〇円 | 両手吊り正面晒し<br>大手札三枚一組<br>略号 八よそ<br>四〇〇円 | 全裸高手小手の麗身<br>大手札三枚一組<br>略号 八よの<br>四〇〇円 | 全裸股間縛りの媚態<br>長井葉津子<br>略号 八よや<br>四〇〇円   | 強烈な変型エビ縛り<br>大手札三枚一組<br>略号 八よい<br>四〇〇円 | 正座猿ぐつわの仕置<br>長井葉津子<br>略号 八よふ<br>四〇〇円  | 凄絶海老責め地獄<br>大手札三枚一組<br>略号 八よえ<br>四〇〇円 | 女体二つ折り縛り<br>長井葉津子<br>略号 八よぬ<br>四〇〇円    | あぐら縛り全裸晒し<br>大手札三枚一組<br>略号 八よあ<br>四〇〇円 | イルリの浣腸責め<br>長井葉津子<br>略号 八よた<br>四〇〇円 |



○ 有田君、貴女は私のサービス・プロジェクトの相手とも受けられます。小杉君にいったように私のプロジェクトとは神酒または……で、今まで私の相手をした女性は二名ともどちらにも懇願されて与えたものです。それよりも初めに有田女奴隷に対して私が与えるものは制服ですね。年間を通じて袖は半袖より長くないこと、裾は超ミニスカートであること、服はゆったりしておくこと、前は襟元から裾まで割ってあり、スナップまたは釦でとめること、下着は一切着用しないこと、襟ぐりは充分あけておくこと、布地は不透明の薄地を使用（ただし透けた物を一枚は用意のこと）することなどです。主人と一緒にいる時は服従の意味から両手は絶えず後に組むことが原則です。もし、この原則に反した後手に組んだ手を外すと、罰として前のスナップまたはボタンを裾から一組あて外してゆきます。つぎに有田奴隷に送る最上の品物は、私が今までに縛ったことのあつ紐と同一のもので、細く且つ非常にしなやかで、肉に食い込みやすいナイロン製ロープです。そして私の緊縛があり、その後で私の

サービス・プロジェクトになるのです。有田奴隷は肌にくすをつけないようにと、奴隷としては厚かましい希望をいっておいりましたが私もひどいことは好みません。しかし緊縛をすれば縄の跡がつかまじ、また直ぐとれるようなゆるい縛りはしたくありません。有田君、もし私の贈物を貰ってくださるのでしたら、私は喜んで貴女を捕えに参ります。（芦屋・山本隆）

○ 女性の「磔美」について研究しています。私は大学で文学を専攻した、ややS的な男性（公務員）ですが、全国の女性の方、お便り下さい。一軒家の別荘風の家を持っていきますので、プレイの場所に困っています、信用できる方、また女性の方のピクニック、宿泊などにお貸ししてもよいと思っています。大阪の岡本嬰子様、あなたの両腕を、きっちり広げて吊り下げられ鴨居に固定された姿、ほんとうに可愛く美しいと思いました。一度お会いできたら幸いと思います。（愛知・山川春夫）

○ 奇くもグラビアが廃止になって久しいですが、そろそろ復活しても良さそうです。他誌では堂々と

大手札印画紙焼付  
〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もろ▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剣玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はひ▽



出しているのですから……。グラビアが一番たのしみだった者として、写真のないのは残念でなりません。ところで、私もやっと縛りの相手をしてくれる女性を得て、ときどきプレイを楽しみます。自分の手で縛り上げた女体を目前にころがし、カメラのシャッターを切り、八ミリで縄にくびれた肉体を舐め廻します。そのときの感情の高ぶりは正に最高です。惜しむらくは、この彼女、演技力が少々不足です。苦悶しながら恨めし気に見つめる表情など、こちらの思うようにやってくれないので、ちょっと物足りないと思います。まあ緊縛には股間縛りや相当きつい縛りも我慢してくれるのでゼイタクは言えません。先日、この女に黄八丈の着物と桃割れのカツラをつけさせて和装縛りをしました。が、なかなか楽しめました。ピンクのしごきで後手にして、帯を長く引きずるポーズなど、哀れで美しいと思います。

(東京・瀬田文雄)

東京都大田区久力原の春川さとしさま。ぜひ貴女の使用済のパットをお送り下さい。女子大生のパットと考ただけでも胸がときめ

きます。願わくば貴女の芳香の染みこんだパンティや、ご使用になられました跡仕末用のペーパーなどを一緒に密送いただければ幸いです。現代の女子学生らしく、十月号に堂々とパットの配付を申し出たサド学生。想像するだけで貴女の肢態の素晴しさは分かるような気がいたしますが、その勇気を一歩すすめて、サロンに全裸ブーツ姿でも発表して下さい。それが困難なら、せめて貴女を神の如く慕う私を始めとするM男達にフォトをお送り下さい。私は二十三才の妻、純子と常にSMプレイをたのしんでいる三十五才の男ですが近頃、多少マンネリ化に悩んでおり、その上、夫婦ともにマゾなので弱っております。ダンプの通る道に面した生垣のある庭で妻にタライによる行水をさせ、その羞恥に悶える姿をたのしんだりして、当面のマンネリを避けたりいたしております。ときには車をとめてここでは書けないような言葉を、丸裸の妻に浴びせていく運転手があり、どうやらこうやらM心を救って、日々の退屈を脱しているのです。私達は変わった夫婦ですが、貴女の足下にひれ伏し、ご奉仕いたしたく存じております。犬めを

開股縛りに喜ぶ女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はわV

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八はふV

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八はほV

悦虐に身もだえる美女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はあV

蓑縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
中河 恵子 略号 八はうV

柱に立縛りてさらす

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はさV

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はめV

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はしV

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 略号 八はもV

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はむV

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はめV

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はもV

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
関谷富佐子 略号 八はさV

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はしV

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はすV

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大島 照代 略号 八はせV

両手吊りてあえぐ女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はゆV

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
大島 照代 略号 八はたV

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はちV

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はつV

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はてV

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
大島 照代 略号 八はとV



鞭打ちたいときは、どこなりとも  
気のすむまで鞭をお振るい下さ  
ても結構です。さと子様、ぜひお  
返事をお待ちいたしております。

(三田市・谷 明夫)

私は奇クを愛読して五年になる  
二十七才の男性です。身長一七二  
センチ、体重六六キロ、外資本に  
勤めるサラリーマンです。今まで  
にM女性にめぐり逢ったことはな  
く、半ばあきらめていました。が、  
M女性の方の投稿記事を拝見し、  
この文章を書く気になりました。

私は緊縛や羞恥責めが好きですが  
相手のM女性の好みには、たい  
い合わせる自信があります。過去  
二、三度、SMプレイを行いました  
たが、相手の女性はMでなく、結  
局マネごとで終わりました。SMプ  
レイについて理解できるM女性と  
の交際を願っております。私とい  
う人間をよく知ってからプレイを  
行っていたら結構です。神戸  
の小杉千恵さん、福岡の緒方則子  
さん、ご連絡をお待ちいたして  
おります。

(大阪・森永)

東京の春川さと子さん。あなた  
の手で手足をくぐられ猿ぐつわを  
された上、散々鞭打たれることを

願っております。私は年令三十六  
才、浅黒い肌のタイプです。貴女  
にご迷惑をかけるようなことは絶  
対にしませんから、どうか哀れな  
私をいじめたり縛ったりして下さ  
い。「この文が掲載される頃まで  
には現物を編集部に送っておきま  
す……」と書いてありました。が、  
私も申し込みますから送って下さ  
いませうか。おねがいします。

(東京・桜井英一)

小生は二十三才の独身男性で、  
身長は一七五センチ、体重八十キ  
ロで体力には自信があります。現  
在、エロ、グロなど、とやかくい  
われませんが、奇クがあるというこ  
とは我々にとって大変強いこと  
です。小生は浣腸とかオムツカバ  
ー、オムツなどに非常に興味を持  
っています。若い女性がオムツを  
され、オムツカバーをはめられ、  
木に縛られている姿は、ぼくにと  
って、どんなものより美しくきれ  
いに見えます。小生は又、野外プ  
レーが好きです。横浜の女性の方  
で、プレーのできる人がおられま  
したら連絡して下さい。丹沢あた  
りでプレーをしませんか。秘密は  
かならず守ります。

(横浜・加藤武)

最新撮影総天然色  
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てこ

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 啓子 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 啓子 略号八てむ

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 啓子 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 啓子 略号八ても

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 啓子 略号八てん

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦 啓子 略号八てる

真紅の腰巻着用品姿

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
東浦・大塚 略号八うて

真紅の腰巻着用品縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るま

羞らいの真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るけ

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るふ

高手高手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るや

股間縛りの開股姿

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れよ

羞らいの股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れに



妊婦マニヤ、浣腸マニヤの皆様  
初めてお便りします。世の中には  
美しいものは数限りなくあります  
が、ぼくには妊婦ほど美しく素晴  
らしいものはないのです。小さな  
生命を育てているという誇らしげ  
な顔、出産に対する怖れの瞳、膨  
らみきった大きな腹、妊婦の体全  
体から感じられる複雑無限の美、  
この世にこれほど尊いものが他に  
あるでしょうか。奇クのお蔭で金  
原奈加子さんの妊娠写真を手にし  
たとき、益々この感を強くしまし  
た。どなたかぼくに、金原さんの  
ように美しい姿を与えて頂けない  
でしょうか。そして金原さん自身  
が求められたMの喜びを差し上げ  
たいと思います。また、ぼくにと  
って浣腸の楽しみも欠かせないも  
のです。盲腸手術の前、美しい看  
護婦さんから施された、浣腸の恥  
かしさと、液が注入されるととき足  
の指先までしびれるような快感が  
忘れられず、いつの間にか浣腸マ  
ニヤになってしまいました。東京  
の女性で同好の方がおられました  
ら、お互いに喜びを分かちあいま  
せんか。  
(東京・マニヤ夫)

○ 小生は一年前、偶然本誌を知り

まことに恐るべき陶酔の世界に驚  
かされ、以来このS、M、Fの魅  
方に囚われております。もし福岡  
地方の女性の方で本誌愛読者があ  
れば交際を願いたいと思ひ筆をと  
りました。何といつても倒錯の世  
界です。お互いが口が固く、プラ  
イバシーを大切にすることが第一  
条件です。私は年令三十三才、大  
学卒、某会社係長、容姿も人並  
上であるとうぬばれております。  
もし福岡地方の女性の方で、SM  
について興味を持たれていてる方  
があれば、交際を通じ検討、理解を  
なし、プレイを実行いたしたいと  
思います。真面目な連絡をお待ち  
します。  
(福岡市・松尾生)

○ 大阪東区の女王様。相変らず御  
元気な様子を誌上にて最高に楽し  
く拝見いたしております。女王様  
には、もう御記憶にないかと存じ  
ますが、以前に奴隷志願を厚かま  
しくもいたしました、神戸の秋山  
一郎です。私はプレイの経験もあ  
りません。女王様のきびしい数力  
条の誓約を拝見いたしましたとき  
に失格と思いました。それが証拠  
に各地の志願者にはお声が名指し  
でありましたが、私には今もって  
ありません。資格がないのに、せ

#### 双胎臨月腹強刺青女

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れやV

#### 双胎臨月腹強刺青女

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れやV

#### 臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れやV

#### 黒縄縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
中河恵子 略号八れぬV

#### 立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れぬV

#### 開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れぬV

#### 豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れぬV

#### 柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やかV

#### 高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やかV

#### 緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やかV

#### 脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やかV

#### 縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やかV

#### 腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やかV

#### 女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号八なるV

#### 恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 二〇〇〇円  
中河恵子 略号八ぬめV

#### 孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 二〇〇〇円  
中河恵子 略号八ぬめV

#### 八の字の開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しいV

#### 足枷強制開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しいV

#### 全裸強逆エビ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しけV

#### 両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しけV

#### 両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しらV

#### 豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しらV

#### 大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しらV

#### お申込みは大阪阿倍野局私書箱

第14号天星社宛へ願います。



めて誌上ででも女王様とお話しをしたくてなりません。各地の奴隷志願者に、女王様がお呼びかけになるのを見ると、まるで私にお声がかかったような気が致します。毎月、奇クが発売になる二十五日には女王様とお会いすることができると思い、最初に読者通信を見ますが、女王様のお声がないときは、がっかりいたします。私は全国各地のモウレッツな奴隷志願者の足許にもよれませんが、私のような奴隷もいることを思い出していただけたら、これ以上の喜びはありません。益々の御活躍をお祈りいたします。

○ (神戸・秋山一郎)

岡本えい子さんへ。私となら安心してプレーができます。私は年令は三十三才で社会的な地位もある男です。貴女の美しさに惹かれて、おたよりしました。私は貴女の素晴らしい緊縛フォトを撮りたいのです。もちろん私の門外不出の愛蔵品として誰にも見せませんから安心して下さい。幸いにして私の趣味はDPEですので、貴女をいろいろな極端な屈曲ポーズや開股ポーズに縛り上げて、余さずフォトした上、四つ切りに引きの

ばしたいと思っております。

○ (神戸市・原倭久生)

ゴムマニヤの皆様、お元気ですか。暑い夏も過ぎ、ゴム衣をまとうのにも余り苦痛を感じなくなりましたね。いくら好きといっても夏はゴム製品を身につけると、あせもができて、やりきれません。やはり、つけたときに少し冷やりとした感じがゴムのよさだと思えます。マニヤでないといわられませんね、この気分は。昨日、東京のニューポート社よりカタログが届き、早速、目を通しました。良いものが、かなりあるのですが、少し高いので一ぺんに沢山、買えません。縫い目なしのラテックス・パンティや生理想ゴムパンティ、生ゴムストラックスなど、我々マニヤには、とびつきたいものばかりです。小生は奇クを読みはじめたのは十年ほど前からです。今まで二、三回、投稿しています。勤め先でウエスの中からボロボロになったオシメカバーを発見してからゴムの魅力に一層とりつかれ、矢も楯もたまらなくなりました。痔疾を病んだとき、行きつけの薬局の奥さんに、痔で出血するので何か処置はありませんかと、恥

|                                        |                                        |                                         |                                         |                                        |                                           |                                        |                                          |                                         |                                          |                                                                             |                                         |                                          |                                          |                                         |                                        |                                          |                                          |                                          |                                          |                                         |
|----------------------------------------|----------------------------------------|-----------------------------------------|-----------------------------------------|----------------------------------------|-------------------------------------------|----------------------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|------------------------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------|----------------------------------------|------------------------------------------|------------------------------------------|------------------------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------|
| 全裸後手柔肌縛り<br>大手札三枚一組<br>略号△こよ▽<br>佐々木真弓 | 乳房強烈膨隆責め<br>大手札三枚一組<br>略号△こわ▽<br>佐々木真弓 | 海老責めに苦悶する<br>大手札三枚一組<br>略号△こお▽<br>佐々木真弓 | 全裸の緊縛全身晒し<br>大手札三枚一組<br>略号△こる▽<br>佐々木真弓 | 煙草責めに喘ぐ女<br>大手札二枚一組<br>略号△こぬ▽<br>佐々木真弓 | 緊縛麗姿に映えるライト<br>大手札三枚一組<br>略号△こほ▽<br>佐々木真弓 | 臀部強調後手縛り<br>大手札三枚一組<br>略号△こら▽<br>佐々木真弓 | 羞恥に悶える全裸緊縛<br>大手札三枚一組<br>略号△こに▽<br>佐々木真弓 | ホステスの緊縛姿態<br>大手札三枚一組<br>略号△こち▽<br>佐々木真弓 | 二つ折りで責める女体<br>大手札三枚一組<br>略号△こて▽<br>佐々木真弓 | かしいのを我慢して聞きましたところ、痔バンドをしてはと、すすめられました。前に使ったことがあるが余り効果のなかったことを言いますと、女性の生理バンドを | 脈打つ全裸の臨月腹<br>大手札三枚一組<br>略号△こふ▽<br>中河 恵子 | 臨月腹の革紐股間縛り<br>大手札三枚一組<br>略号△こや▽<br>中河 恵子 | 猿轡の臨月妊婦腹縛り<br>大手札三枚一組<br>略号△この▽<br>中河 恵子 | 卓上の股間縛り狂態<br>大手札三枚一組<br>略号△こそ▽<br>長井葉津子 | 羞恥の足挙げ責め<br>大手札三枚一組<br>略号△こた▽<br>長井葉津子 | 悦虐責めの女体終着駅<br>大手札三枚一組<br>略号△こら▽<br>関谷富佐子 | 片足挙げの鞭打ち責め<br>大手札三枚一組<br>略号△こな▽<br>関谷富佐子 | 柔肌に弾ける惨酷な答<br>大手札三枚一組<br>略号△こえ▽<br>佐近麻里子 | あぐら縛りの女体鑑賞<br>大手札三枚一組<br>略号△こて▽<br>左近麻里子 | 対談用に縛られた女<br>大手札三枚一組<br>略号△こて▽<br>左近麻里子 |
|----------------------------------------|----------------------------------------|-----------------------------------------|-----------------------------------------|----------------------------------------|-------------------------------------------|----------------------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------|------------------------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------|----------------------------------------|------------------------------------------|------------------------------------------|------------------------------------------|------------------------------------------|-----------------------------------------|

してその上から痔バンドで押えればよいと言いました。小生は顔から火が出るぐらい恥かしかつたのですが、奥さんはマジメな顔をして、男の人でも買いにきますよ、



と言いました。生まれて始めて、女性のする生理バンドに、お目にかかったわけです。そのときは梅雨頃だったので、むれてアセモができ、むし暑いにはオドロキでした。女性は一生の中、何年もお世話にならなくてはならないのですが、マニヤでない人にとっては辛いことだろうと同情したくなり、辛うじて。小生はナイロン生地ブルー色のメンスバンドをつけ、その上から痔バンドで押え、毎日通勤していました。あれから五年、今でもゴムの魅力が忘れられず、ゴム製品を愛用しています。現在メンスバンド、ピンクとブルー二枚、フルファッシュionsトッキング二足、ゴムガードル（膝までの長ズロースのようなもの）一枚、生理用オシメカバー（純ゴム製）一枚、ショッキングパンティ（局部穴あき）一枚。いずれもニューポート製です。その他、大人用オシメカバー二枚、ニシキゴム製ゴムサポーターなどのコレクションがあります。（尼崎・藤田公一）

○ 私は、ろうあ学校出身の六尺フンドシ・マニアです。現在、グラビア印刷兼製本業に精を出して働いています。九月号、十月号に載

った鈴木ゆり子さんの「ふんどし物語」を読んで、その文と画の見事さに感激しました。私たち、ふんどし愛好者には大変わかりやすくかんたんな図解入りでくわしく書いてありますので、ふんどし型の応用、下着デザインの基礎知識が得られて、大変助かりました。さすがに彼女が「ふんどし百科」を作りたいと望んでおられるだけあって、私にも得るところが多く、いい勉強になりました。私はアパートの一室で、妹の使い古した不用物の冬向きの伸縮性のあるナイロン製ワイリーのタイツ（青、赤など）を六尺褌に仕立てて、キリキリとめています。また来年の夏のために水泳バイク、ビキニ型ふんどしを作って用意しております。私は近くの銭湯に行ったり、大きな鏡の前になつて、真っ黒に日焼けした全身をうつし、六尺褌の跡だけが白く残っているのを眺めるのが楽しみです。私は三十八才の独身者。色は浅黒い方で、体質は痩せ型のタイプです。どなたか私の六尺褌姿か男性ヌードをカメラで写して下さい。お互いに友情を温め合い励まし合って力強く明るく生き抜こうではありませんか。同好の方のお便り、ぜひおね

がいします。（東京・中田繁雄）

○ 初めてお手紙いたします。ぼくは以前から女王様の足許に跪いて忠実な下僕として仕えたいと念じておりました。しかし手紙を書く勇氣がなく、今日まで悶々として過ごしてきました。けれど女王様の下僕として仕えたい気持ちには勝てず、今日お手紙いたしました。ぼくは年令二十七才、身長一メートル七〇、体重五六キロの、やや細形の男性です。容貌の方はかなり自信があります。ただ女王様が気に入って下さるかしらと、心配しています。ぼくは、まだ一度もプレーというものをしたことがありませんので、どのようにして女王様にお仕えすればよいか、わかりません。女王様の御命令であれば、どのようなことでもできる自信があります。また女王様が大阪にお住いになられているので他の下僕より調教しやすいと存じます。御膝元に跪ける日のくることを一日千秋の思いで待っております。（小口馬征夫）

○ 私は二十一才の大学生です。私は生まれつきのサディストで、幼いときより縛りに対して異常な

興味を持ち、最近では色々な週刊誌を読んでは、その中の緊縛写真を集めたり、自分で責絵を描いて楽しんでいきます。しかし、できればマゾ女性とSMプレイを楽しんでみたいと思っています。福岡近辺のM女性の方、どうか私にお便り下さい。待っています。

（福岡・佐藤生）

○ 初めてお便りします。私は大阪市内にお勤めしている二十一才のOLです。奇くは二年ほど前から愛読していますが、今まで読者通信に投稿する勇氣がありませんでした。でも最近、たびたび小杉千恵様の投稿を拝見しまして私にも投稿する勇氣が湧いてきました。京都市の葉月由紀夫様、貴方が十一月号で岡本嬰子様に呼びかけられていた文章を拝見致しました。私と岡本様では月とスッポンですがどうか私を頑強な貴方のお身体で、静子夫人のように恥かしめて下さい。私は貴方のどんな恥かしい調教でもお受けしますわ。でも身体にキズが残るようなことは絶対にイヤです。

（大阪・朝田久美子）

○ 奴隷志願の三十才の男性です。



## 次号(一月号)は十一月二十五日に発売いたします

特に精神的屈辱に興味を持ち、女王様に奴隷として御奉仕した経験もあります。すばらしい女王様による制約された時間中、束縛される存分、虐待されたいと望みます。当然その際、女王様の希望通りの経済的負担は、私、奴隷めが致します。最近、この投書欄でも「無報酬で虐められたい」とか、「一生をおそばで暮らしたい」とか「プロ的女性はお断り」等々の内容の奴隷志願の投書を見ますが、私はそのような奴隷は望みません。なぜなら、現在の日本の社会機構の中でサド女性の方々が女王様らしく美しくぜいたくに存在していただくためには、当然奴隷からの資金が必要でしょうし、そのためには奴隷も社会生活では他の男性より以上に優秀な社会人でなければならぬでしょう。肉体的にも社会的にも秀れた男性を虐待してこそ、女王様の満足も得られるものでしょうし、見るからに貧弱な肉体、経済方のない学歴もない奴隷なら、格別女王様の貴い手にかからなくとも、実社会でも生涯虐待され続けるでしょう。そして女

王様に選ばれた男性となり、奴隷として、あるかぎられた時間とルールの中で、一切の常識を無視して一匹の犬となりさがりたいたいと念じます。かりに、その中にプロ的な意志を持つ女王様がいたとしても、現況のMSの世界では、そのような女王も希少な存在として誠心誠意でつくして、そのお気持ちの中のわずかなパーセントのサド性でも引き出せるよう御奉仕ができれば幸いに思っています。そしてそのような奉仕の積み重ねが、いずれはそのような女王様も真のサド女性として誕生され、君臨される日がくると信じています。もしこんな私にお呼びかけ下さる女王様がおいでになられましたら、直ぐさま御足下に馳せ参じたいと思います。

(名古屋・犬男)

「森の都」そして日本三大公園の一つ兼六園を持つ金沢に近く住む愛読者です。何が美しいといって一番美しいものは、縛られた女性ほど美しいものはないと信じています。特に全裸での海老責め、開股縛り、股間縛り、その他色々

の羞恥責めに悶える女性の姿は、もっとも美しいと思っています。しかし思っているだけでプレイの経験はありません。いつも一人で空想して楽しんでます。私の描くものは、羞恥責めに悶える女性に、流腸することです。県内、近隣のM女性の方、おつき合いねがえません。まだ見ぬ女性からのお便りを待っています。

(石川・白山輝美)

東区の女王様へ。私は貴女様を喜ばすために生まれてきたような男です。恋人と一緒に楽しむ貴女様の快感のために私をお呼びつけ下さい。私のご奉仕は、貴女方お二人のお身体を舐め清めることです。貴女の恋人の体を屈辱に顔を歪めながら、それでも貴女のためには私は清めます。つぎに女王様の体を清めさせて頂くわけです。女王様、ぜひ私にご用をお仰せつけ下さるよう伏してお願ひ申し上げます。

(神戸市・三木生)

小杉千恵様。十月号のお便り拝見いたしました。貴女はプレイについて具体的なこととで、つぎのように貴女を恥かしめ責めてさし上げますから、一度私

とプレイして下さい。先ず入浴していただき、貴女の身を点検します。入浴後は酒のさかなとして、全裸でテーブルの上にあぐらで坐り、色々なポーズをしていただきます。開股縛りによる下からのロソク責め、流腸責め、いも虫縛り、あぐら縛り、竹使用の開股吊り、股間縛り、逆開股宙吊り、開股大の字による恥かしい責めなどです。その他、下着をつけた排尿バイブレーターによる責め、バナナ、玉子、いぬ、花、など使用による調教責めだけでなく、貴女が望む責めを、してさしあげます。返事をお待ちしています。

(岡山・近藤次郎)

拝啓、森川信也殿。小生、岡山に住む三十を少し過ぎた自称Sの男です。十一月号の貴殿の御投稿の件うらやましく拝見しました。小生も奇クを愛読するようになったのは早遠い昔、十三年前、ある歴史雑誌の刑罰史の一ページにあった縛女の画に、自分でも考えられぬ世界を見出ししたものです。それから一年、社会の人間になった小生は、奇クという本を見つけたのです。小生は二十一才の若さで結婚しましたが、このことはつ



本誌既刊号在庫一覽表

い最近まで自分一人の秘密で女房にすら話さず奇クを集めて楽しんでいました。でも人生というやつは分らないもので、職場での事故で入院する破目になりましたが、その同室の患者で、小生より五つ年下の男が奇クの愛読者であり、近々結婚する彼女もその理解者であるという話を小生にしてくれました。彼の勇気ある話が小生のくすぶりつづけた思いを一度に引き出してくれたのです。そして小生は思いきって彼とキク同人会という同志の会を作り、色々と話し合う機会を持つようになりました。小生は貴殿の申される運転免許を

持ち、酒は一滴も飲めません。休みの方も、都合はつくのです。我々のＳクラブ、キク同人会との交流も結構ですし、貴殿に変わってと申してはどうかと存じますが、圭子さんを満足させて御覧に入れたいと思います。よろしくお取り計い下さい。（キク同人会Ｓ男）

森川信也様、十一月号のお便り拝見いたしました。小生は三十四才の会社員です。Sの強いものには自信があります。小生を運転者として使って下さいませんか。小生は勤務が交代のため、平日でも御都合のよい日にお会いすることです。

きることを思います。小生は酒も飲まないマジメな男です。圭子さんとプレイできれば満足です。どうか森川様、よろしくおねがいします。  
(玉野市・相川正男)

浅田守様、貴方のプレイメイトを羨みつつ一筆走らせます。十一月号発表の写真は本当に素晴らしく、うつとりとさせられました。その上、にじみでるような羞恥の雰囲気、より一層、美しさを増大させていたようです。本格的な責めへの調教のため、現在、彼女に「花と蛇」を読むように強制しているとか、貴方が益々傑作を撮

影しご発表になることを楽しみに  
しております。私も社会的に信用  
される職業についている者です  
から、秘密を重んじて同好のよ  
しみを通じ、ご交際いたしたく存  
じます。

（神戸・国川栄一）

S女性の方、あなたの希望をかなえてあげます。ただし余り強度でなく、主に縛りを好む、なるべく肥った方で母性愛タイプの方を望みます。可愛い少年を紹介します。もちろん無料です。あまり、いじめては、いけませんよ。なお絶対、真面目な方に限ります。

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、40年に發行のものについては在庫の僅少ななものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は△小包▽にて発送申し上げます。

|          |          |          |           |           |           |          |          |          |          |          |          |
|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 昭和41年3月号 | 昭和41年2月号 | 昭和41年1月号 | 昭和40年12月号 | 昭和40年11月号 | 昭和40年10月号 | 昭和40年9月号 | 昭和40年8月号 | 昭和40年7月号 | 昭和40年6月号 | 昭和40年5月号 | 昭和40年4月号 |
| (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円)  | (送共三二〇円)  | (送共三二〇円)  | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) | (送共三二〇円) |

既刊雑誌在庫案内



